
比企郡川島町

白井沼遺跡Ⅱ

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2007

国土交通省関東地方整備局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



白井沼遺跡全景 (合成)



1 遺跡遠景 (画面中央上 浅間山)



2 遺跡遠景 (画面中央上 富士山)



1 第21号溝跡 大廓式土器出土状況



2 第57号土坑 遺物出土状況



1 第57号土壙



2 第20号溝跡



1 第26号溝跡



2 第3号井戸跡



1 第24号土壙



2 第6号井戸跡



大廓式土器



大廓式土器大型壺口縁部



大廓式土器大型壺胴部



大廓式土器折り返し口縁壺



1 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部正面



2 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部背面



3 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部右側面



4 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部左側面



5 グリッド (G-5G) 羽部側面1



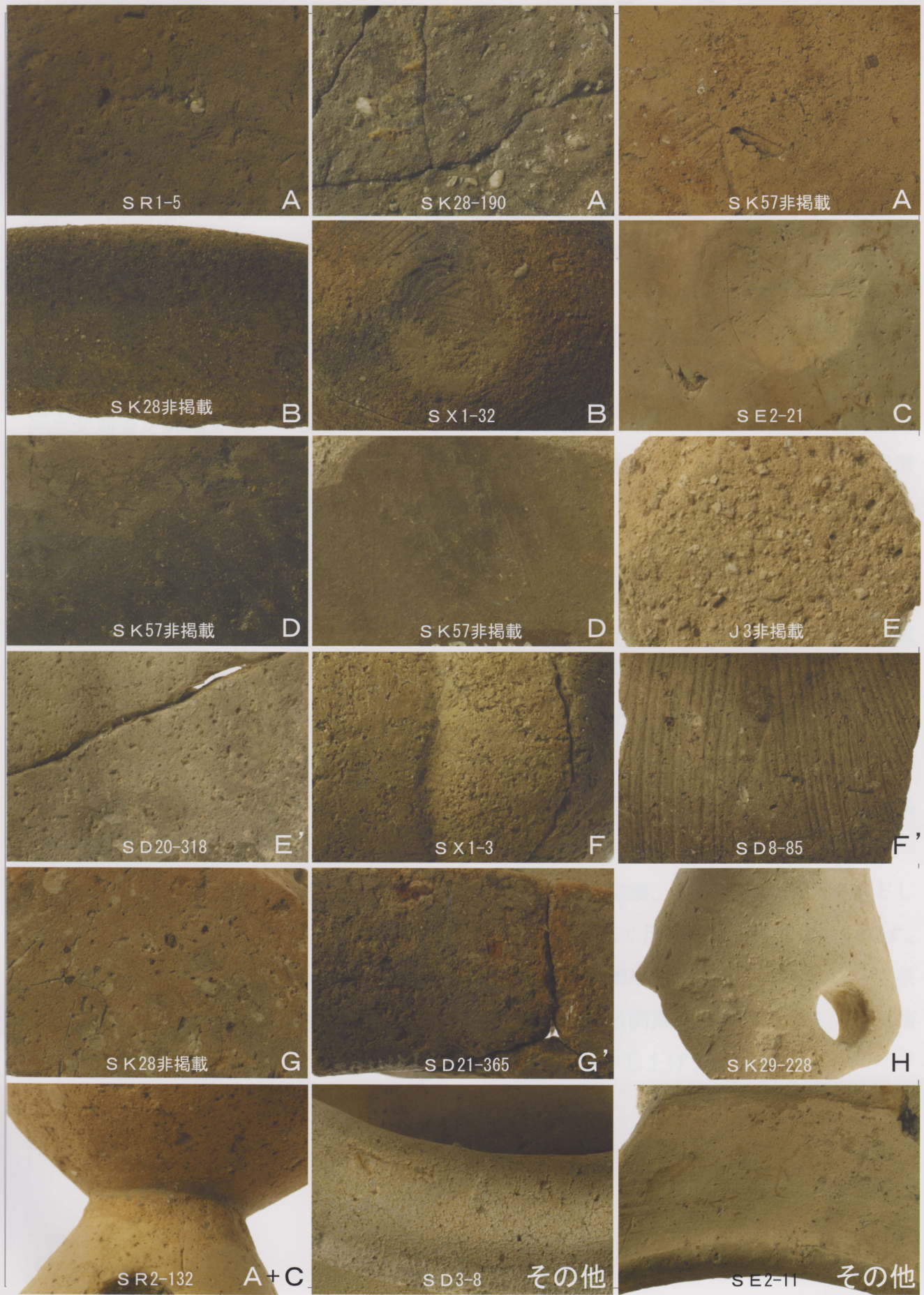
6 グリッド (G-5G) 羽部側面2



7 第19号溝跡 (D区) (第104図182)



8 第27号溝跡 (第114図478)



序

首都圏に位置し、705万県民を擁する埼玉県では、社会経済活動の広域化や、自動車保有台数の増加などに伴い、交通量が増加し、県内各地で交通渋滞が慢性化しております。また、本県の道路整備は、地理的、歴史的経緯から、東京都心方向へ向かう道路の整備は進んでいるものの、県内を東西に結ぶ道路網の整備が立ち遅れています。

こうした状況の中、埼玉県では、『道路の整備に関するプログラム』を策定し、「人と自然にやさしい道づくり」を基本理念に、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策を推進しております。

国土交通省が実施する、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の新設事業は、東日本における本県の中心拠点性を高めるとともに、地域産業活力の向上、東西方向の交通の円滑化を目的としており、本県が目標とする「時間が読める道づくり」の推進と合致するものです。

建設路線内には川島町白井沼遺跡の存在が知られており、埋蔵文化財の取り扱いにつきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、今から約1,700年前の古墳時代前期の集落跡が発見され、多量の遺物が出土しました。特に、静岡県（駿河地方）から直接運ばれた土器や、鶏形土製品などは、県内では類例が極めて少なく、大変貴重な発見となりました。

本書はこれらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、普及、啓発および各教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、川島町教育委員会並びに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 福田 陽 充

例 言

1. 本書は、埼玉県比企郡川島町に所在する白井沼遺跡（第1次・3次）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
白井沼遺跡（第1次）（略号SRINM1次、遺跡番号37-008）
埼玉県比企郡川島町大字白井沼字広合266他
平成15年10月24日付け教文第2-52号
白井沼遺跡（第3次）（略号SRINM3次、遺跡番号37-008）
埼玉県比企郡川島町白井沼577-2他
平成17年4月13日付け教生文第2-3号
3. 発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、I-3に示す組織により実施した。
5. 発掘調査期間と調査担当者は以下のとおりである。
白井沼遺跡（第1次）
平成15年9月22日～平成16年3月20日
調査担当者 栗岡 潤 宅間清公
白井沼遺跡（第3次）
平成17年4月8日～平成17年6月30日
調査担当者 剣持和夫 福田 聖
なお、調査については、渡辺慎太郎の協力を得た。
6. 整理・報告書作成事業は、平成17年4月1日～平成18年3月31日まで栗岡が担当して実施し、平成19年3月31日までに事業団報告書第328集

- として刊行した。
7. 遺跡の基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。
 8. 遺跡の空中写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。
 9. 発掘調査における遺構写真撮影は各調査担当者が、遺物写真は、栗岡 潤・大屋道則が行った。
 10. 出土遺物の整理および図版の作成は、栗岡潤が主として行い、亀田直美、中嶋淳子、兵ゆり子、矢田美知子、山北美穂の協力・亀田直美、中嶋淳子の補助を受けた。
また、縄文土器の実測は金子直行、石製品は矢田が行った。
 11. 本書の執筆は栗岡が行い、第1章-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行った。
 12. 本書の編集は栗岡が行い、亀田直美、中嶋淳子の協力を得た。
 13. 本書にかかる資料は、平成19年度以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
 14. 発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）
川島町教育委員会 川島町立川島中学校 川島町立三保谷小学校 岩本 貴 牛山英昭 江原昌俊 押方みはる 及川良彦 賀来孝代 黒沢 浩 小出輝雄 笹森紀己子 笹森健一 佐藤幸恵 関根 訪 滝沢 誠 谷口 肇 中島広顕 中島郁夫 西川修一 古屋紀之 堀口萬吉 松本 完 的野 善行 宮島秀夫 渡井英誉

凡例

- 本書中におけるX・Yの数値は、日本測地系（旧測地系）による平面直角座標第IX系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく座標値を示し、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
 - 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、10m×10mを基本グリッドとしている。
 - グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向は西からA・B・C、南北方向は北から1・2・3と付し、A-1グリッド等の名称を付けた。
 - 遺構番号は、原則として調査時に付した遺構番号を掲載しているが、整理作業段階で番号を変更したものがあり、新旧対照表を右に示した。
 - 本文中に使用した略号は以下のとおりである。

SJ	竪穴住居跡	SB	掘立柱建物跡
SK	土壙	SE	井戸跡
SD	溝跡	SX	性格不明遺構
SR	周溝遺構		
 - 遺構図及び実測図の縮尺は各挿図中に縮尺率とスケールを示した。同一図中に縮尺の異なる場合は、図中にその都度例示した。

遺構	全体図	1/600
	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	1/60・1/30
	土壙・井戸跡	1/60・1/30
遺物	土器・石製品	1/4
	拓影図	1/3 1/4
 - 遺構断面図に表記した水準値は海拔標高で、単位はmである。
 - 本文遺構図に示した網掛けは、各遺構種別ごとに凡例が異なるため、遺構図ごとにその都度凡例を例示した。

遺物実測図中の網掛けは、赤彩 20%、煤 40% である。

 - 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50000の地形図を使用した。
 - 本書に使用した引用・参考文献は、巻末にその一覧表を記載した。
 - 巻頭カラー図版10および遺物観察表中の土器胎土の分類は以下のとおりである。

A	大粒の角ばった石英・チャート等の砂粒を含み、片岩を含む。粗い。
B	粒径の細かい砂粒を多量に含む、長石・石英などを多く含む。
C	肉眼では混入粒子が殆ど観察できない水簸したような粘土である。表面が溶けたように風化しやすい。酸化鉄分と思われる赤色粒子を含む。
D	長石・輝石などを含み、白色針状物質を含む。比企丘陵の粘土か。
E	石英・赤色粒子ともに、多量の軽石状の粒子を含む。駿河地方の大郭式土器と思われる。
E´	Eに比べ、石英・赤色粒子の混入が少ない。
F	石英・輝石を多量に含み、緻密である。
F´	Fの胎土に、軽石状の白色粒子が含まれる。
G	砂粒とともに大粒の胎土Cの土器片もしくは白色粘土粒子が多量に含まれる。
G´	砂粒と、橙色系の土器片を含む
H	混入粒子は殆ど肉眼観察できない。微細な白色粒子を多量に含む。
A+C	1つの土器に、異なる胎土が認められた場合、+を使用した。(例：器台の受部と脚部)
- その他：上記のいずれにも属さないものを一括した。他地域からの搬入品と考えられる。

遺構名新旧対照表

旧	新
SR2	第57号土壙
SK5	第3号井戸跡

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	4. 井戸跡	92
1. 発掘調査に至る経過	1	5. 周溝遺構	99
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	6. 溝跡	109
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4	7. 性格不明遺構	176
II 遺跡の立地と環境	5	8. 土器集中区	180
III 遺跡の概要	12	9. ピット	188
IV 遺構と遺物	16	10. 遺跡に伴わない遺物	201
1. 住居跡	16	11. 縄文時代の遺物	206
2. 掘立柱建物跡	22	V 調査のまとめ	209
3. 土壌	27	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	5	第19図 土壌(1) 第1号土壌	27
第2図 明治の地形	6	第20図 第1号土壌遺物出土状況	28
第3図 周辺の遺跡	10	第21図 土壌(2)	30
第4図 遺跡の範囲	13	第22図 土壌(3)	33
第5図 調査全体図	14	第23図 土壌(4)	35
第6図 基本土層	14	第24図 土壌(5)	37
第7図 第1号住居跡	16	第25図 第24・25号土壌遺物出土状況	39
第8図 第2号住居跡	17	第26図 第26・27号土壌遺物出土状況	40
第9図 第2号住居跡出土遺物	18	第27図 第28・29号土壌遺物出土状況	43
第10図 第3号住居跡	19	第28図 土壌(6)	45
第11図 第4号住居跡	20	第29図 土壌(7)	48
第12図 第5号住居跡	20	第30図 土壌(8)	49
第13図 第5号住居跡遺物出土状況	21	第31図 土壌(9)	50
第14図 第5号住居跡出土遺物	22	第32図 土壌(10)	51
第15図 第1号掘立柱建物跡	23	第33図 土壌(11)	52
第16図 第2号掘立柱建物跡	24	第34図 土壌出土遺物(1)	54
第17図 第3号掘立柱建物跡	25	第35図 土壌出土遺物(2)	55
第18図 第4号掘立柱建物跡	26	第36図 土壌出土遺物(3)	56

第37回	土壙出土遺物 (4)	57	第74回	溝跡 (4)	115
第38回	土壙出土遺物 (5)	58	第75回	第19号溝跡遺物出土狀況	116
第39回	土壙出土遺物 (6)	59	第76回	溝跡 (5)	118
第40回	土壙出土遺物 (7)	60	第77回	溝跡 (6)	119
第41回	土壙出土遺物 (8)	61	第78回	溝跡 (7)	120
第42回	土壙出土遺物 (9)	62	第79回	溝跡 (8)	121
第43回	土壙出土遺物 (10)	63	第80回	溝跡 (9)	122
第44回	土壙出土遺物 (11)	64	第81回	第21号溝跡遺物出土狀況	123
第45回	土壙出土遺物 (12)	65	第82回	溝跡 (10)	125
第46回	土壙出土遺物 (13)	66	第83回	溝跡 (11)	126
第47回	第57号土壙	74	第84回	溝跡 (12)	127
第48回	第57号土壙遺物出土狀況	76	第85回	溝跡 (13)	128
第49回	第57号土壙出土遺物 (1)	82	第86回	溝跡 (14)	129
第50回	第57号土壙出土遺物 (2)	83	第87回	溝跡 (15) 第5号溝跡遺物出土狀況	130
第51回	第57号土壙出土遺物 (3)	84	第88回	溝跡 (16)	131
第52回	第57号土壙出土遺物 (4)	85	第89回	溝跡 (17)	132
第53回	第57号土壙出土遺物 (5)	86	第90回	溝跡 (18)	133
第54回	第57号土壙出土遺物 (6)	87	第91回	第37号溝跡遺物出土狀況	134
第55回	第57号土壙出土遺物 (7)	88	第92回	溝跡 (19)	136
第56回	井戸跡	92	第93回	溝跡 (20)	137
第57回	井戸跡遺物出土狀況	93	第94回	溝跡 (21)	138
第58回	井戸跡	94	第95回	溝跡 (22)	140
第59回	第6号井戸跡遺物出土狀況	95	第96回	溝跡 (23) 第7号溝跡遺物出土狀況	141
第60回	井戸跡出土遺物 (1)	96	第97回	溝跡 (24)	142
第61回	井戸跡出土遺物 (2)	97	第98回	溝跡 (25)	143
第62回	第1号周溝遺構	99	第99回	溝跡出土遺物 (1)	144
第63回	第1号周溝遺構遺物出土狀況	100	第100回	溝跡出土遺物 (2)	145
第64回	第3号周溝遺構	103	第101回	溝跡出土遺物 (3)	146
第65回	第4号周溝遺構	104	第102回	溝跡出土遺物 (4)	147
第66回	第5号周溝遺構	105	第103回	溝跡出土遺物 (5)	148
第67回	周溝遺構出土遺物 (1)	106	第104回	溝跡出土遺物 (6)	149
第68回	周溝遺構出土遺物 (2)	107	第105回	溝跡出土遺物 (7)	150
第69回	溝跡 (1)	110	第106回	溝跡出土遺物 (8)	151
第70回	第1号溝跡遺物出土狀況	111	第107回	溝跡出土遺物 (9)	152
第71回	溝跡 (2)	112	第108回	溝跡出土遺物 (10)	153
第72回	第20号溝跡遺物出土狀況	113	第109回	溝跡出土遺物 (11)	154
第73回	溝跡 (3)	114	第110回	溝跡出土遺物 (12)	155

第111図	溝跡出土遺物 (13)	156	第126図	ピット (3)	191
第112図	溝跡出土遺物 (14)	157	第127図	ピット (4)	192
第113図	溝跡出土遺物 (15)	158	第128図	ピット (5)	192
第114図	溝跡出土遺物 (16)	159	第129図	ピット (6)	193
第115図	溝跡出土遺物 (17)	160	第130図	ピット (7)	193
第116図	第21号溝跡出土遺物	175	第131図	ピット (8)	194
第117図	第1号性格不明遺構	177	第132図	ピット (9)	195
第118図	第1号性格不明遺構遺物出土状況	178	第133図	ピット (10)	196
第119図	性格不明遺構出土遺物	179	第134図	ピット (11)	197
第120図	土器集中区 I-3グリッド遺物出土状況	182	第135図	ピット (12)	197
第121図	土器集中区 J-3グリッド遺物出土状況	183	第136図	ピット (13)	198
第122図	土器集中区出土遺物 (1)	184	第137図	グリッドピット出土遺物	199
第123図	土器集中区出土遺物 (2)	185	第138図	グリッド出土遺物 (1)	203
第124図	ピット (1)	189	第139図	グリッド出土遺物 (2)	204
第125図	ピット (2)	190	第140図	第1号埋甕	207
			第141図	縄文時代の遺物	208

表 目 次

第1表	第2号住居跡出土遺物観察表	18	第16表	溝跡出土遺物観察表3	165
第2表	第5号住居跡出土遺物観察表	22	第17表	溝跡出土遺物観察表4	166
第3表	土壌出土遺物観察表1	67	第18表	溝跡出土遺物観察表5	168
第4表	土壌出土遺物観察表2	68	第19表	溝跡出土遺物観察表6	168
第5表	土壌出土遺物観察表3	69	第20表	溝跡出土遺物観察表7	169
第6表	土壌出土遺物観察表4	70	第21表	溝跡出土遺物観察表8	170
第7表	土壌出土遺物観察表5	71	第22表	溝跡出土遺物観察表9	171
第8表	土壌出土遺物観察表6	72	第23表	溝跡出土遺物観察表10	172
第9表	第57号土壌出土遺物観察表1	89	第24表	第21号溝跡出土遺物観察表	175
第10表	第57号土壌出土遺物観察表2	90	第25表	第1号不明遺構出土遺物観察表	180
第11表	第57号土壌出土遺物観察表3	91	第26表	土器集中区出土遺物観察表1	186
第12表	井戸跡出土遺物観察表	98	第27表	土器集中区出土遺物観察表2	187
第13表	第1・4・5号周溝遺構出土遺物観察表	108	第28表	ピット一覧表	188
第14表	溝跡出土遺物観察表1	163	第29表	グリッドピット出土遺物観察表	199
第15表	溝跡出土遺物観察表2	164	第30表	グリッド・表採・一括出土遺物観察表	205

図版目次

- 巻頭図版1 白井沼遺跡全景（合成）
- 巻頭図版2 1 遺跡遠景（画面中央上 浅間山）
2 遺跡遠景（画面中央上 富士山）
- 巻頭図版3 1 第21号溝跡 大廓式土器出土状況
2 第57号土壌 遺物出土状況
- 巻頭図版4 1 第57号土壌
2 第20号溝跡
- 巻頭図版5 1 第26号溝跡
2 第3号井戸跡
- 巻頭図版6 1 第24号土壌
2 第6号井戸跡
- 巻頭図版7 大廓式土器
大廓式土器大型壺口縁部
1 第2号住居跡
2 第57号土壌
3 第8号溝跡
4 グリッド（H6G-I）
5 第3号溝跡
- 巻頭図版8 大廓式土器大型壺胴部
1 第19号溝跡（B区）
2 第19号溝跡（B区）
3 第20号溝跡
4 第19号溝跡（B区）
5 第20号溝跡
大廓式土器折り返し口縁壺
1 第25号土壌
2 第19号溝跡
3 第19号溝跡
4 第19号溝跡
- 巻頭図版9 1 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部正面
2 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部背面
3 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部右側面
4 第21号溝跡 鳥形土製品 頭部左側面
5 グリッド（G-5G）羽部側面1
6 グリッド（G-5G）羽部側面2
- 7 第19号溝跡（D区）
8 第27号溝跡
- 巻頭図版10 出土土器胎土分類
- 図版1 1 遺跡遠景 北から
2 遺跡遠景 西から
- 図版2 1 遺跡全景 東から
2 遺跡全景 北から
- 図版3 1 B区全景（北西から）
2 B区北西部（西から）
3 B区南西部（北から）
4 B区谷部土層断面
5 C区全景（東から）
6 C区全景（西から）
7 D区全景（南から）
8 E区全景（北西から）
- 図版4 1 F区全景（東から）
2 F区基本層序
3 第2号住居跡全景
4 第3号住居跡全景
5 第4号住居跡遺物出土状況
6 第4号住居跡掘り方
7 第5号住居跡遺物出土状況
8 第5号住居跡遺物出土状況
- 図版5 1 第5号住居跡遺物出土状況
2 第5号住居跡全景
3 第1号掘立柱建物跡全景
4 第2号掘立柱建物跡全景
5 第3号掘立柱建物跡全景
6 第4号掘立柱建物跡全景
7 第1号土壌遺物出土状況
8 第1号土壌、第1号溝跡
- 図版6 1 第7号土壌遺物出土状況
2 第8号土壌遺物出土状況
3 第10号土壌
4 第13号土壌遺物出土状況

	5 第16号土壙		3 第57号土壙遺物出土狀況
	6 第16号土壙		4 第57号土壙遺物出土狀況
	7 第24号土壙遺物出土狀況		5 第57号土壙遺物出土狀況
	8 第24号土壙遺物出土狀況		6 第57号土壙遺物出土狀況
図版7	1 第24号土壙遺物出土狀況		7 第57号土壙遺物出土狀況
	2 第24号土壙遺物出土狀況		8 第57号土壙遺物出土狀況
	3 第24・25号土壙、第19・22号溝跡	図版12	1 第57号土壙遺物出土狀況
	4 第24・25号土壙、第19・22号溝跡		2 第57号土壙遺物出土狀況
	5 第25号土壙遺物出土狀況		3 第57号土壙遺物出土狀況
	6 第25号土壙遺物出土狀況		4 第2号井戸跡遺物出土狀況
	7 第26号土壙遺物出土狀況		5 第3号井戸跡遺物出土狀況
	8 第26号土壙遺物出土狀況		6 第4号井戸跡
図版8	1 第26号土壙遺物出土狀況		7 第5号井戸跡
	2 第26号土壙遺物出土狀況		8 第6号井戸跡遺物出土狀況
	3 第40号土壙遺物出土狀況	図版13	1 第6号井戸跡遺物出土狀況
	4 第41号土壙		2 第6号井戸跡遺物出土狀況
	5 第42号土壙		3 第6号井戸跡遺物出土狀況
	6 第43号土壙		4 第6号井戸跡
	7 第44号土壙		5 第1号周溝遺構遺物出土狀況
	8 第45号土壙遺物出土狀況		6 第1号周溝遺構遺物出土狀況
図版9	1 第45号土壙		7 第1号周溝遺構遺物出土狀況
	2 第46号土壙		8 第1号周溝遺構遺物出土狀況
	3 第48号土壙	図版14	1 第3号周溝遺構
	4 第49号土壙		2 第4号周溝遺構
	5 第50号土壙		3 第5号周溝遺構
	6 第51号土壙		4 第2号溝跡土層断面
	7 第52号土壙		5 第2号溝跡
	8 第53号土壙		6 第2号溝跡全景
図版10	1 第54号土壙		7 第3号溝跡、第3号土壙土層断面
	2 第55号土壙		8 第3号溝跡、第3号土壙土層断面
	3 第56号土壙遺物出土狀況	図版15	1 第3号溝跡遺物出土狀況
	4 第57号土壙遺物出土狀況		2 第5号溝跡全景
	5 第57号土壙遺物出土狀況		3 第5・6号溝跡遺物出土狀況
	6 第57号土壙遺物出土狀況		4 第5・6号溝跡遺物出土狀況
	7 第57号土壙遺物出土狀況		5 第5・6号溝跡遺物出土狀況
	8 第57号土壙遺物出土狀況		6 第5・6号溝跡遺物出土狀況
図版11	1 第57号土壙遺物出土狀況		7 第5・6号溝跡遺物出土狀況
	2 第57号土壙遺物出土狀況		8 第7号溝跡遺物出土狀況

- | | | | |
|------|---|------|---|
| 图版16 | 1 第7号溝跡遺物出土狀況
2 第7号溝跡遺物出土狀況
3 第7号溝跡遺物出土狀況
4 第7号溝跡遺物出土狀況
5 第7号溝跡遺物出土狀況
6 第7号溝跡遺物出土狀況
7 第7号溝跡 (F区) 遺物出土狀況
8 第7号溝跡 (F区) 遺物出土狀況 | | 7 第49号溝跡遺物出土狀況
8 第49号溝跡全景 |
| 图版17 | 1 第7号溝跡 (F区)
2 第7号溝跡 (F区) 全景
3 第7号溝跡 (F区) 全景
4 第7号溝跡 (F区)
5 第7号溝跡 (F区) 全景
6 第7号溝跡 (A区) 全景
7 第12号溝跡遺物出土狀況
8 第12号溝跡遺物出土狀況 | 图版21 | 1 第50号溝跡
2 第1号性格不明遺構遺物出土狀況
3 第1号性格不明遺構遺物出土狀況
4 第1号性格不明遺構燒土檢出狀況
5 土器集中区 (J3G) 遺物出土狀況
6 土器集中区 (J3G) 遺物出土狀況
7 土器集中区 (J3G) 遺物出土狀況
8 土器集中区 (J3G) 遺物出土狀況 |
| 图版18 | 1 第19号溝跡 (D区)
2 第20号溝跡土層断面、第18·19号土壙
3 第20号溝跡遺物出土狀況
4 第20号溝跡 (D区)
5 第21号溝跡遺物出土狀況
6 第21号溝跡遺物出土狀況
7 第21号溝跡、第28·29号土壙
8 第27·28号溝跡 | 图版22 | 1 土器集中区 (J3G) 遺物出土狀況
2 土器集中区 (J3G) 遺物出土狀況
3 土器集中区 (J3G) 遺物出土狀況
4 E4-P5遺物出土狀況
5 第1号埋甕出土狀況
6 第1号埋甕出土狀況
7 第1号埋甕出土狀況
8 第1号埋甕全景 |
| 图版19 | 1 第33号溝跡全景
2 第34号溝跡
3 第35号溝跡
4 第36号溝跡
5 第37号溝跡遺物出土狀況
6 第38号溝跡
7 第39号溝跡
8 第40号溝跡 | 图版23 | 1 第5号住居跡
2 第2号住居跡
3 第2号住居跡
4 第2号住居跡
5 第2号住居跡
6 第2号住居跡
7 第2号住居跡
8 第2号住居跡 |
| 图版20 | 1 第41号溝跡
2 第42号溝跡
3 第43号溝跡
4 第46号溝跡
5 第47号溝跡
6 第48号溝跡 | 图版24 | 1 第2号住居跡
2 第1号土壙
3 第1号土壙
4 第1号土壙
5 第1号土壙
6 第1号土壙
7 第1号土壙
8 第1号土壙 |
| | | 图版25 | 1 第6号土壙
2 第7号土壙
3 第7号土壙
4 第8号土壙 |

	5 第13号土壤		3 第26号土壤
	6 第13号土壤		4 第26号土壤
	7 第13号土壤		5 第26号土壤
	8 第13号土壤		6 第27号土壤
图版26	1 第13号土壤		7 第27号土壤
	2 第14号土壤		8 第27号土壤
	3 第14号土壤	图版32	1 第27号土壤
	4 第14号土壤		2 第27号土壤
	5 第14号土壤		3 第27号土壤
	6 第21号土壤		4 第27号土壤
图版27	1 第24号土壤		5 第27号土壤
	2 第24号土壤		6 第27号土壤
	3 第24号土壤		7 第26·27号土壤
	4 第24号土壤		8 第26·27号土壤
	5 第25号土壤	图版33	1 第26·27号土壤
	6 第25号土壤		2 第28号土壤
图版28	1 第25号土壤		3 第28号土壤
	2 第25号土壤		4 第28号土壤
	3 第25号土壤		5 第28号土壤
	4 第25号土壤		6 第28号土壤
	5 第25号土壤	图版34	1 第28号土壤
	6 第24·25号土壤、第22号沟迹		2 第28号土壤
	7 第24·25号土壤、第22号沟迹		3 第28号土壤
	8 第24·25号土壤、第22号沟迹		4 第28号土壤
图版29	1 第24·25号土壤、第22号沟迹		5 第28号土壤
	2 第24·25号土壤、第22号沟迹		6 第29号土壤
	3 第26号土壤		7 第29号土壤
	4 第26号土壤		8 第29号土壤
	5 第26号土壤	图版35	1 第29号土壤
	6 第26号土壤		2 第29号土壤
图版30	1 第26号土壤		3 第29号土壤
	2 第26号土壤		4 第30号土壤
	3 第26号土壤		5 第30号土壤
	4 第26号土壤		6 第34号土壤
	5 第26号土壤		7 第34号土壤
	6 第26号土壤		8 第35号土壤
图版31	1 第26号土壤	图版36	1 第35号土壤
	2 第26号土壤		2 第36号土壤

	3 第36号土壤		3 第57号土壤
	4 第36号土壤		4 第57号土壤
	5 第36号土壤		5 第57号土壤
	6 第36号土壤		6 第57号土壤
	7 第36号土壤	图版43	1 第57号土壤
	8 第36号土壤		2 第57号土壤
图版37	1 第36号土壤		3 第57号土壤
	2 第36号土壤		4 第57号土壤
	3 第38号土壤		5 第57号土壤
	4 第38号土壤		6 第57号土壤
	5 第38号土壤	图版44	1 第57号土壤
	6 第39号土壤		2 第57号土壤
图版38	1 第39号土壤		3 第57号土壤
	2 第40号土壤		4 第57号土壤
	3 第45号土壤		5 第57号土壤
	4 第45号土壤		6 第57号土壤
	5 第45号土壤	图版45	1 第57号土壤
	6 第57号土壤		2 第57号土壤
图版39	1 第57号土壤		3 第57号土壤
	2 第57号土壤		4 第57号土壤
	3 第57号土壤		5 第57号土壤
	4 第57号土壤		6 第57号土壤
	5 第57号土壤		7 第57号土壤
	6 第57号土壤		8 第57号土壤
图版40	1 第57号土壤	图版46	1 第57号土壤
	2 第57号土壤		2 第57号土壤
	3 第57号土壤		3 第57号土壤
	4 第57号土壤		4 第57号土壤
	5 第57号土壤		5 第57号土壤
	6 第57号土壤		6 第57号土壤
图版41	1 第57号土壤		7 第57号土壤
	2 第57号土壤		8 第57号土壤
	3 第57号土壤	图版47	1 第57号土壤
	4 第57号土壤		2 第57号土壤
	5 第57号土壤		3 第57号土壤
	6 第57号土壤		4 第57号土壤
图版42	1 第57号土壤		5 第2号井戸跡
	2 第57号土壤		6 第2号井戸跡

7 第2号井戸跡
8 第2号井戸跡
図版48 1 第2号井戸跡
2 第2号井戸跡
3 第2号井戸跡
4 第3号井戸跡
5 第3号井戸跡
6 第3号井戸跡

図版49 1 第3号井戸跡
2 第3号井戸跡
3 第6号井戸跡
4 第6号井戸跡
5 第6号井戸跡
6 第6号井戸跡
7 第6号井戸跡
8 第6号井戸跡

図版50 1 第6号井戸跡
2 第1号周溝遺構
3 第1号周溝遺構
4 第1号周溝遺構
5 第1号周溝遺構
6 第1号周溝遺構
7 第1号周溝遺構
8 第1号周溝遺構

図版51 1 第1号周溝遺構
2 第1号周溝遺構
3 第1号周溝遺構
4 第1号周溝遺構
5 第5号周溝遺構
6 第5号周溝遺構
7 第5号周溝遺構
8 第5号周溝遺構

図版52 1 第1号溝跡
2 第1号溝跡
3 第5号溝跡
4 第5号溝跡
5 第5号溝跡
6 第5号溝跡

図版53 1 第5号溝跡
2 第5号溝跡
3 第7号溝跡
4 第7号溝跡
5 第7号溝跡
6 第7号溝跡
7 第7号溝跡
8 第7号溝跡

図版54 1 第7号溝跡
2 第7号溝跡
3 第7号溝跡
4 第7号溝跡
5 第8号溝跡
6 第8号溝跡
7 第8号溝跡
8 第8号溝跡

図版55 1 第8号溝跡
2 第9号溝跡
3 第10号溝跡
4 第12号溝跡
5 第12号溝跡
6 第12号溝跡
7 第13号溝跡
8 第13号溝跡

図版56 1 第13号溝跡
2 第13号溝跡
3 第13号溝跡
4 第19号溝跡
5 第19号溝跡
6 第19号溝跡
7 第10号溝跡
8 第10号溝跡

図版57 1 第19号溝跡
2 第19号溝跡
3 第19号溝跡
4 第19号溝跡
5 第19号溝跡
6 第19号溝跡

	7 第19号沟迹		3 第20号沟迹
	8 第19号沟迹		4 第20号沟迹
图版58	1 第19号沟迹		5 第20号沟迹
	2 第19号沟迹		6 第20号沟迹
	3 第19号沟迹	图版64	1 第20号沟迹
	4 第19号沟迹		2 第20号沟迹
	5 第19号沟迹		3 第20号沟迹
	6 第19号沟迹		4 第20号沟迹
	7 第19号沟迹		5 第20号沟迹
	8 第19号沟迹		6 第20号沟迹
图版59	1 第19号沟迹	图版65	1 第20号沟迹
	2 第19号沟迹		2 第20号沟迹
	3 第19号沟迹		3 第20号沟迹
	4 第19号沟迹		4 第20号沟迹
	5 第19号沟迹		5 第20号沟迹
	6 第19号沟迹		6 第20号沟迹
	7 第19号沟迹		7 第20号沟迹
	8 第19号沟迹		8 第20号沟迹
图版60	1 第19号沟迹	图版66	1 第20号沟迹
	2 第19号沟迹		2 第21号沟迹
	3 第20号沟迹		3 第21号沟迹
	4 第20号沟迹		4 第21号沟迹
	5 第20号沟迹		5 第21号沟迹
	6 第20号沟迹		6 第21号沟迹
图版61	1 第20号沟迹		7 第21号沟迹
	2 第20号沟迹		8 第21号沟迹
	3 第20号沟迹	图版67	1 第21号沟迹
	4 第20号沟迹		2 第21号沟迹
	5 第20号沟迹		3 第21号沟迹
	6 第20号沟迹		4 第21号沟迹
图版62	1 第20号沟迹		5 第21号沟迹
	2 第20号沟迹		6 第21号沟迹
	3 第20号沟迹		7 第21号沟迹
	4 第20号沟迹		8 第21号沟迹
	5 第20号沟迹	图版68	1 第21号沟迹
	6 第20号沟迹		2 第21号沟迹
图版63	1 第20号沟迹		3 第21号沟迹
	2 第20号沟迹		4 第21号沟迹

	5 第21号溝跡		3 第1号性格不明遺構
	6 第21号溝跡		4 第1号性格不明遺構
	7 第21号溝跡		5 第1号性格不明遺構
	8 第21号溝跡		6 土器集中区
図版69	1 第21号溝跡	図版74	1 土器集中区
	2 第21号溝跡		2 土器集中区
	3 第21号溝跡		3 土器集中区
	4 第21号溝跡		4 土器集中区
	5 第23号溝跡		5 土器集中区
	6 第23号溝跡		6 土器集中区
	7 第23号溝跡		7 土器集中区
	8 第23号溝跡		8 土器集中区
図版70	1 第23号溝跡	図版75	1 土器集中区
	2 第23号溝跡		2 土器集中区
	3 第23号溝跡		3 土器集中区
	4 第23号溝跡		4 土器集中区
	5 第23号溝跡		5 土器集中区
	6 第27号溝跡		6 土器集中区
	7 第30号溝跡		7 土器集中区
	8 第30号溝跡		8 土器集中区
図版71	1 第37号溝跡	図版76	1 土器集中区
	2 第37号溝跡		2 土器集中区
	3 第37号溝跡		3 土器集中区
	4 第49号溝跡		4 土器集中区
	5 第1号性格不明遺構		5 土器集中区
	6 第1号性格不明遺構		6 土器集中区
	7 第1号性格不明遺構		7 土器集中区
	8 第1号性格不明遺構		8 土器集中区
図版72	1 第1号性格不明遺構	図版77	1 E2-P2
	2 第1号性格不明遺構		2 E4-P5
	3 第1号性格不明遺構		3 E2-P2
	4 第1号性格不明遺構		4 E4-P5
	5 第1号性格不明遺構		5 グリッド
	6 第1号性格不明遺構		6 グリッド
	7 第1号性格不明遺構		7 グリッド
	8 第1号性格不明遺構		8 グリッド
図版73	1 第1号性格不明遺構	図版78	1 グリッド
	2 第1号性格不明遺構		2 グリッド

	3	グリッド
	4	グリッド
	5	グリッド
	6	グリッド
図版79	1	グリッド
	2	グリッド
	3	B区一括
	4	B区一括
	5	グリッド
	6	グリッド

図版80	1	B区一括
	2	グリッド
	3	グリッド
	4	グリッド
	5	表採
	6	第一号埋甕
図版81		縄文時代の土器
	9	第28号土器
	10	第3号溝跡

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国5か年計画21』に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、「県土の骨格となる高速道路網やインターチェンジへのアクセス道路の整備推進」を重要施策としている。こうした中で、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が待望されている。

埼玉県教育委員会では、首都圏中央連絡自動車道建設に係る埋蔵文化財の保護について、昭和62年度の入間・狭山・日高地区を皮切りに現在まで国土交通省などの関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

さて、本書で報告される地区については平成10年11月10日付け大国調二第30号及び平成13年5月9日付け大国工第27号などにより国土交通省関東地方整備局（平成11年段階では建設省関東地方建設局）大宮国道事務所長から「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。

これを受けて文化財保護課（当時）では、複数次にわたる確認調査を実施し、その結果をもとに平成11年7月29日付け教文第446号、平成13年11月21日付け教文第1137号などで白井沼遺跡（No.37-008）の取扱いについて回答した。

白井沼遺跡の埋蔵文化財の取扱いについては「現状保存が望ましい」という観点で、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所と県教育委員会との間で協議が行われたが、工事の計画変更が困難なため、

発掘調査を実施することになった。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

なお、発掘調査は次のとおり実施した。

第1次調査

平成15年9月22日～平成16年3月20日

第3次調査

平成17年4月8日～平成17年6月30日

文化財保護法第57条の3（現第94条）の規定による埋蔵文化財発掘通知が国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長から平成15年8月27日付け大国工第87号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は平成15年9月9日付け教文第3-494号で行った。

文化財保護法第57条第1項（現第92条）の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

第1次調査

平成15年10月24日付け教文第2-52号

第3次調査

平成17年4月13日付け教生文第2-3号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

白井沼遺跡の発掘調査は、平成15・17年度に実施した。調査対象面積は、6,700㎡である。

平成15年度に第1次、平成17年度に第3次として調査を実施した。なお、第2次については、平成16年度に安藤川河川改修事業として調査が実施され、平成17年度に『事業団報告書第315集』として既に報告書が刊行されている。

平成15年度（白井沼第1次）

白井沼遺跡第1次の発掘調査は、平成15年9月22日から開始した。調査面積は、4,500㎡を対象に行った。

平成15年9月中に事務手続き、事務所設置作業を行い、重機による表土除去作業を開始した。

調査地点は、用水路によって4つに分断されていたため、便宜的にA～Dの4区に区分して調査を実施した。

10月初旬から基準点測量を実施し、人力で遺構確認作業を行い、A～D区の順に調査を実施した。順次土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。

平成16年1月に遺構の分布状況を把握するため、空中写真撮影を実施した。

遺構調査の終了後、重機による埋め戻し作業を実施した。

事務処理等を含め、すべての作業を2月27日に終了した。

調査の結果、古墳時代前期竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡4棟、周溝遺構4基、土壇37基、溝跡35条、井戸跡3基を検出した。

遺物は、古墳時代前期の土師器・石器・土製品などが、コンテナに115箱出土した。

特に、古墳時代前期の土師器は、土壇・溝跡を中心に多量に出土し、東海地方西部（尾張・伊勢）系

の土器、東部（駿河）産の土器が多量に出土した。中でも駿河産の土器は、「大廓式土器」と呼ばれ、大型壺・高坏・大型甕など、複数器種が搬入されていることが明らかになった。

また、鶏形土製品が、溝から出土した。

平成17年度（白井沼第3次）

白井沼遺跡第3次の発掘調査は、平成17年4月から実施した。調査面積は、2,200㎡を対象に行った。

平成17年4月当初に事務手続き、事務所設置作業を行い、重機による表土除去作業を開始した。

調査地点は、用水路によって2つに分断され、また、第1次調査区から連続していたため、E・Fの2区に区分して調査を実施した。

4月上旬から基準点測量を実施し、人力で遺構確認作業を行い、E・F区の順に調査を実施した。順次土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。

6月上旬に遺構の分布状況を把握するため、空中写真撮影を実施した。

また、F区調査区内に器材棟を設置したため、F区調査終了後、継続して器材棟下部分の調査を実施した。

すべての調査が終了後、重機による埋め戻し作業を実施し、6月下旬に調査を完了した。

調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、土壇18基、溝跡12条、井戸跡3基を検出した。

遺物は、古墳時代前期の土師器・石器・土製品などが、コンテナに10箱出土した。

なお、第1次・第3次調査中、近隣の川島町立三保谷小学校・川島中学校の児童・生徒が授業の一環として、本遺跡の発掘調査の見学に訪れ、公開した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成17・18年度に実施した。以下、年度ごとの整理・報告書作成の経過を述べる。

平成17年度

平成17年度は、白井沼第3次の発掘調査が並行して実施されていたため、遺構図面については白井沼遺跡第1次調査分、遺物については、白井沼第1次出土遺物コンテナ115箱のうち、85箱分について整理作業を実施した。整理作業は、平成17年4月1日から平成18年3月31日まで実施した。

4月当初から、遺物の水洗・注記作業と、同時に遺構図面の修正・第二原図の作成を行った。続いて遺物の接合・復元作業を行った。

7月からグラフィックスソフトによる遺構図のデジタルトレースを開始した。その後、遺物分布図、全体図の作成、遺構のデータ処理などを行い、3月末まで実施した。

9月から、遺物の復元作業と平行しながら、遺物の実測・拓本・トレース作業を実施し、3月末まで実施した。

平成17年度は、遺構・遺物の整理のみで、報告書は平成18年度に刊行するため、版組、遺物の写真撮影等は実施しなかった。

平成18年度

平成18年度は、白井沼第1次の出土遺物の残り30箱分と白井沼第3次の全体の整理作業を実施した。

整理作業は、平成18年4月10日から平成19年3月31日まで実施した。

4月当初から、遺物の水洗・注記作業と、同時に遺構図面の修正・第二原図の作成を行った。続いて遺物の接合・復元作業を行った。

5月からグラフィックスソフトによる遺構図のデジタルトレースを開始した。その後、遺物分布図、全体図の追加作成、遺構のデータ処理などを行った。

遺構図のデジタルトレース作業と並行して、遺物の実測・拓本・トレース作業を実施した。

遺構・遺物の整理作業が終了次第、7月から順次版組・割付作業を実施し、同時に原稿執筆を行った。

遺物整理の終了した9月下旬に遺物写真撮影を行い、遺物写真図版の編集作業を行った。

作業が終了した段階で、遺構図面類・出土遺物を分類・整理し、収納作業を行った。

10月下旬に、入札により印刷会社を決定し、入稿した。その後、3回の校正を経て、3月下旬に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

平成15年度（発掘調査）

理事長	桐川卓雄	調査部	
常務理事兼管理部長	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部		副部長	坂野和信
副部長	村田健二	主席調査員（調査第二担当）	剣持和夫
主 席	田中由夫	主任調査員	栗岡潤
		調査員	宅間清公

平成17年度（発掘調査・整理報告書作成）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼管理部長	保永清光	調査部長	今泉泰之
管理部		副部長	坂野和信
副部長	村田健二	主席調査員（調査第二担当）	剣持和夫
主 席	高橋義和	主任調査員（調査）	福田聖
		主席調査員（資料整理第二担当）	金子直行
		主任調査員（整理）	栗岡潤

平成18年度（整理報告書刊行）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	今泉泰之
総務部		調査部副部長兼資料活用部副部長	小野美代子
総務部副部長	昼間孝志	整理第二課長	富田和夫
総務課長	高橋義和	主 任	栗岡潤

II 遺跡の立地と環境

白井沼遺跡は、埼玉県比企郡川島町大字白井沼に所在し、川島町役場の北東約1 kmに位置している。

川島町は埼玉県のほぼ中央部の荒川低地にあり、四方を河川に囲まれた地形となっており、隣接する市町村との境界は、河川によって画されている。

川島町の北は市野川によって吉見町と、南は入間川によって川越市と、西は越辺川・都幾川によって坂戸・東松山市と、東は荒川によって上尾・桶川市と、明確に町域が画されている。

川島町域では、大小の河川は概ね北西から南東に向かって流れている。町域の西、東松山市高坂付近では、越辺川が都幾川と合流し、越辺川はさらに下流の川越市との境界付近で入間川と合流する。入間川は、上尾・さいたま市との境界付近で荒川と合流する。また町域の北では市野川が東流し、北本・桶川市付近で荒川と合流する。

遺跡付近の標高は11.5 m前後で、荒川対岸の大宮台地や入間川・越辺川対岸の坂戸・川越台地との比高差は、4～5 m前後となっている。

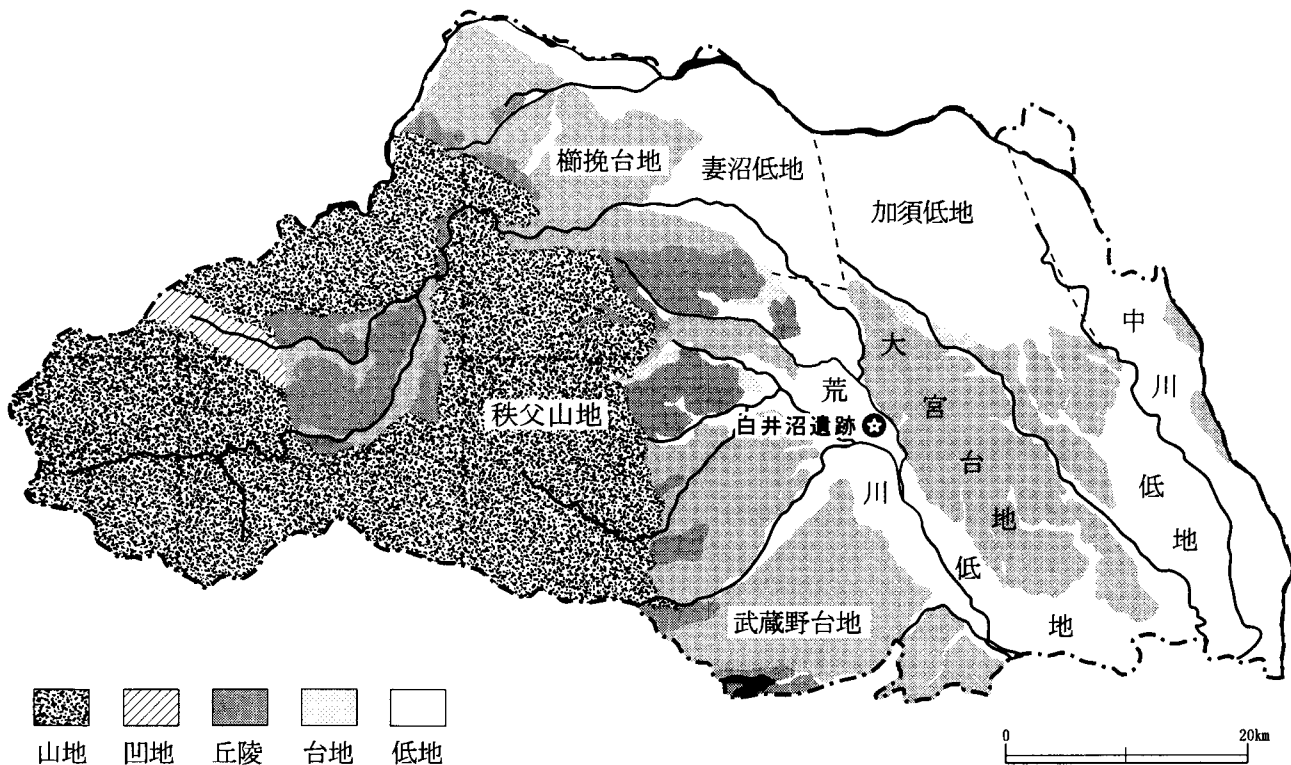
川島町は、こうした大小の河川によって形成された自然堤防と後背湿地及び旧流路跡という3つの地形要素から成り立っている。

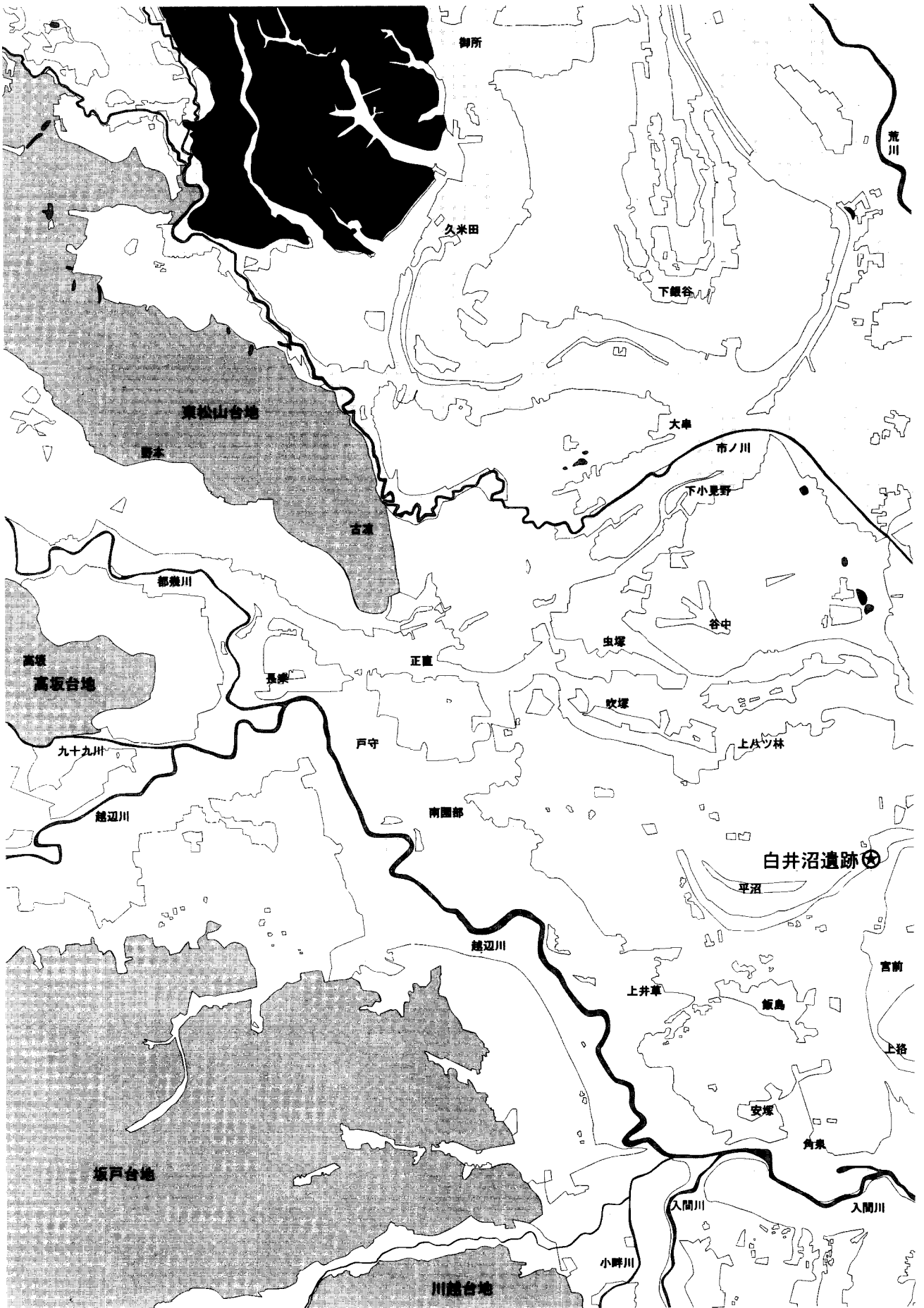
遺跡周辺の字名には、白井沼をはじめ、平沼・飯島・曲師などの地名が残されており、自然堤防・後背湿地や古い流路跡等が沼地化したことに起因すると想定できる。

川島町内の自然堤防は、近代の耕地整理によって大きく変化しているものの、現在でも町域全体にわたってよく残されている。第2図は、明治初年のいわゆる迅速図をもとに、畑地や宅地等を抽出したものである。第2図を観察すると、大きく次の3種類の自然堤防の様相が認められる。

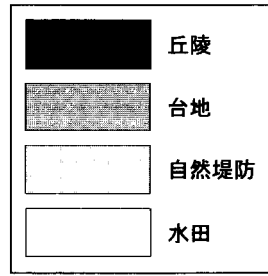
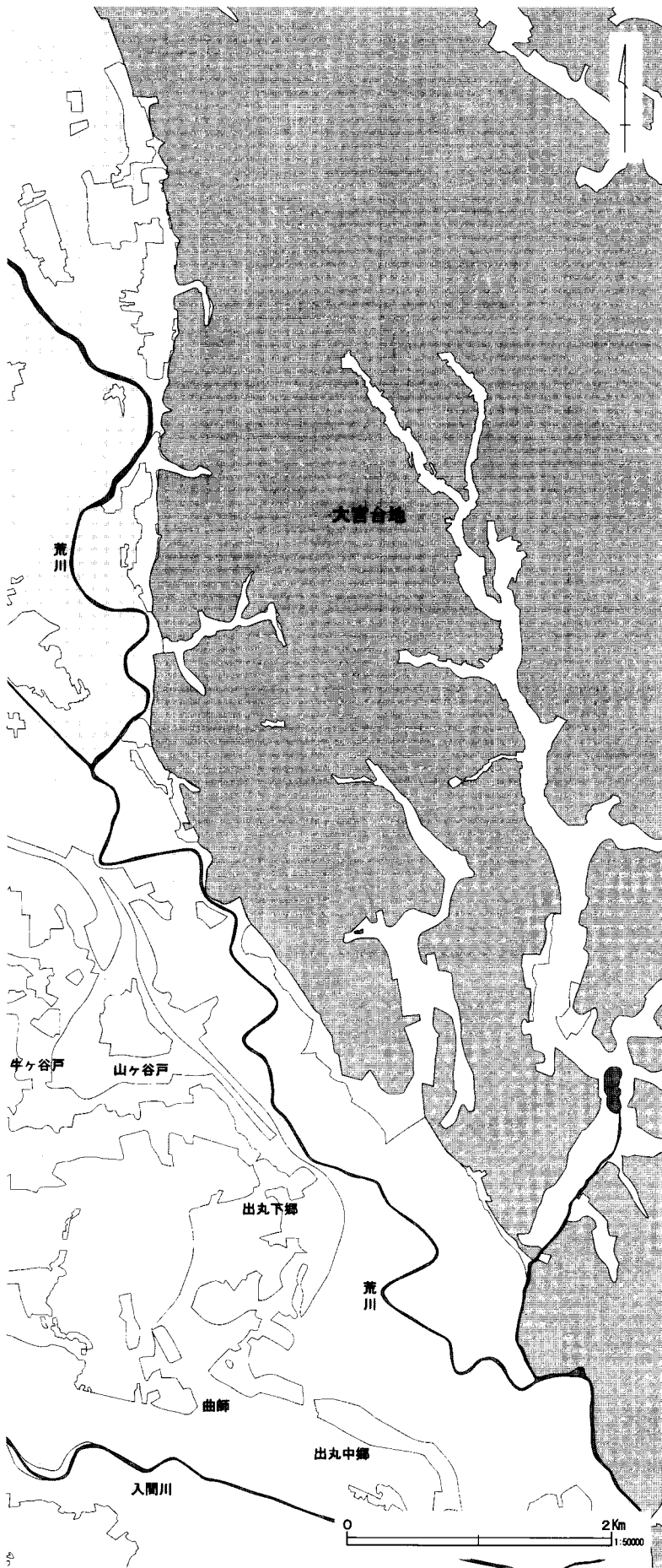
1 現在の河川あるいは、古い流路跡に沿うように存在する最も新しいと考えられる自然堤防が2ヶ所で認められる。

1つは、川島町南西部、現在の都幾川・越辺川左岸の長楽・戸守・南園部・中山を通り、上井草～角泉へと連続する自然堤防。





第2図 明治の地形



もう1つは、川島町の中央部を大きく蛇行するように、明瞭な河川跡を想定できる自然堤防が存在する。吉見町の御所・久米田・大串を通り、川島町内の下小見野から出丸中郷にかけて、大きく蛇行を繰り返しながら連続して認められる。この2条の自然堤防が平行しており、間に流路跡が想定できる。

2 断続的ではあるが、幅100 m前後の細長い蛇行の痕跡が認められる自然堤防。

川島町役場付近の平沼と本遺跡の立地する白井沼付近に、細長い三日月型の自然堤防が、また、東方の宮前・上猪付近にも同規模の細長い半円形となる自然堤防が残存する。

3 大半が新しい自然堤防に切られ、島状に点在する自然堤防。

白井沼遺跡北方の谷中、南方の安塚・飯島、東松山市境の正直付近にその名残が認められる。

これらの自然堤防は、周囲より標高が高くなっており、現在も民家や畑地となっている。町内で自然堤防・旧流路以外の低地部分については、水田となっており、自然堤防が埋没しているか、後背湿地であると考えられる。

川島町史(川島町2006)によれば、上記の3つに区分できる自然堤防は、時期差を示しており、1→2→3の順に形成時期が古くなるという。

自然堤防の形成年代については、各自然堤防上の遺跡での最古の遺物が手がかりとなる。

1の最も新しいと考えられる自然堤防上にある村並遺跡(第3図37)では、堀之内式土器が出土しており、縄文時代後期までには自然堤防が形成されたと考えられている。

2の自然堤防上では、本報告となる白井沼遺跡から加曾利E式土器が出土していることで、縄文時代中期までに形成されたと考えられている。

3については、断片的であり、明確ではないが、2の自然堤防以前に形成されたと考えられる。

川島町では、遺跡の発掘調査事例が少ない。しかし、近年の首都圏中央連絡自動車道の新設事業や川島町史編纂等によって、次第にその様相が明らかになりつつある。(第3図)

町内の遺跡において、現状では縄文時代前期の遺跡が最古となる。前期の遺跡には、芝沼堤外遺跡(91)がある。現地表下約5 mの地点で、住居跡3軒、土壙20基が検出されている。(金子2004)

白井沼遺跡では、縄文時代中期中葉の完形に近い土器が1点と後期初頭の土器片が出土した。また、平沼一丁田遺跡(90)では、集石土壙に伴って、中期の土器片が出土している。

弥生時代の遺跡は、町内では村並遺跡で条痕文系土器が採集されているが、集落の存在については明らかでない。

一方、近傍では、東松山市代正寺遺跡(25)・反町遺跡(89)、坂戸市附島遺跡(43)・木曾免遺跡(44)等で中期の集落跡が確認されている。多くは台地の縁辺に立地する遺跡であるが、東松山市反町遺跡(註1)は、高坂台地の直下の低地で確認された。県北部では、熊谷市北島遺跡周辺で中期の集落が低地で確認されているが、川島・東松山近辺では、反町遺跡が最初となる。今後、川島周辺の低地の自然堤防上で、中期の遺跡が検出される可能性は高い。

弥生時代後期の遺跡は、坂戸台地・高坂台地・東松山台地・大宮台地等の台地上で確認されている。特に、当地域は、高坂・東松山台地を中心に、吉ヶ谷式土器の盛行した地域でもある。しかし、川島町域の自然堤防上では、後期の遺跡の検出例はない。

川島町域に、再び遺跡が見られるようになるのは、古墳時代前期になってからである。町内の自然堤防上には、近年の圏央道やその他の開発によって、調査事例が増加し、古墳時代前期の遺跡が確認されている。また、周辺の吉見町・東松山・坂戸市、荒川対岸の桶川・上尾市では、この時期の遺跡が多い。

町内では、最も新しいと考えられる自然堤防上に、北から安楽寺遺跡(20)、宮ヶ谷戸遺跡(34)、柳町

遺跡 (35)、村並遺跡 (37)、尾崎遺跡 (48)、富田後遺跡 (47)、元宿遺跡 (51)、廣徳寺遺跡 (53)、西谷遺跡 (54) と、前期の遺跡が確認されている。

富田後・元宿遺跡の立地する自然堤防に切られる形で残存する細長い弧状の自然堤防上には、白井沼遺跡が立地する。白井沼遺跡と同一の自然堤防上の谷を挟んだ対岸にあたる地点に、平沼一丁田遺跡 (90) がある。

このほか、越辺川に面して堂地遺跡 (45) がある。

また、川島町の北隣の吉見町では、富田後・元宿遺跡と同一の蛇行する自然堤防上に、三ノ耕地遺跡 (13) がある。前期の前方後方形周溝墓 2 基が検出され、東海系土器を多量に出土した遺跡である。近接した吉見丘陵上には、前方後方墳である山の根古墳 (7) が存在する。

台地上の遺跡では、東松山市の東松山台地上に、古墳時代前期の土器型式の標式遺跡となっている五領遺跡 (11)、番清水遺跡 (16) が、同じ台地の突端付近に下道添遺跡 (18) が存在する。

都幾川を挟んだ対岸の高坂台地では、静岡県の大廓式の大型壺を出土した諏訪山 29 号墳 (17)・反町遺跡の背後の台地突端には高坂三番町遺跡 (88) がある。高坂三番町遺跡からは、大廓式の完形の大型壺が出土している。(註 2)

大宮台地では、上尾・桶川・北本市の荒川に沿った台地上に古墳時代前期の遺跡が存在する。上尾市稲荷台遺跡をはじめ、北から鴻巣市下閭遺跡 (58)・赤台遺跡 (60)、北本市問屋坂遺跡 (63)・八重塚遺跡 (66)・諏訪山北遺跡 (65)・下宿遺跡 (69)・桶川市西台遺跡 (72)・中台遺跡 (73)・八幡耕地遺跡 (81)・宮前遺跡 (82)・熊野神社古墳 (83) 等が台地縁辺部に連なっている。

白井沼遺跡を含む低地の集落跡では、いわゆる周溝遺構・掘立柱建物跡・井戸跡等が検出された。

周溝遺構は、尾崎遺跡で検出されたほか、平成 18 年度現在で調査中の富田後・元宿遺跡、平沼一丁田遺跡の各遺跡で検出されており、その数は数十

基に及ぶ。各遺跡とも周溝遺構・掘立柱建物跡に比して、竪穴住居跡の検出例が極めて少ないという共通した特徴を有している。この周溝遺構が、川島を中心とした低地遺跡における一般的な遺構である可能性が高い。

周溝遺構は、従来、方形周溝墓とされてきたものである。近年、関東地方の低地遺跡を中心に、竪穴住居跡や建物跡の周囲に溝を巡らす遺構の検出例が増加している。溝の形状や規模、柱穴の存在、出土遺物に甕の比率が高いなど、方形周溝墓とは区別され、東海地方東部や北陸地方の低地遺跡で検出される住居跡との類似性が指摘されている。

白井沼遺跡で検出した周溝遺構には、柱穴は検出しておらず、また、全体の形状が明らかなものは検出できなかったが、この周溝遺構が、関東地方の古墳時代前期の低地遺跡の一般的な居住に関わる遺構の一つである可能性が高い。

出土遺物では、在地産の土器とともに他地域産の土器が多量に出土した。特に東海地方西部系の土器が多く、東海地方東部 (大廓式土器)・北陸地方東北部の土器も多数出土した。

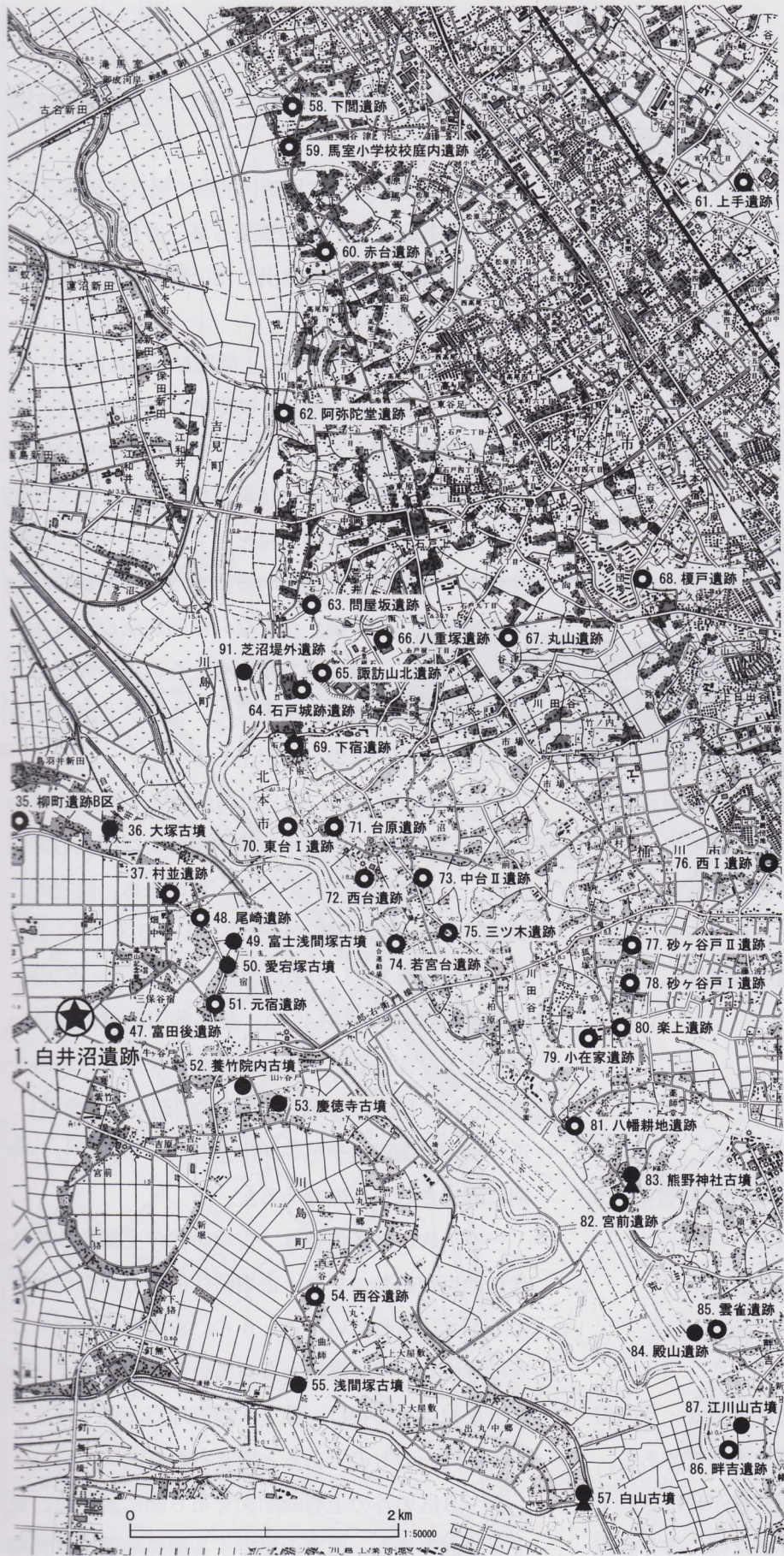
これに対し、台地上の遺跡では竪穴住居跡が一般的で、出土遺物にも、桶川市宮前遺跡で大廓式の大型壺の口縁部片が出土しているが、基本的に弥生時代の伝統を踏襲する傾向が強く、外来系土器の比率は低い。台地上の遺跡と低地部の遺跡とは対照的で、様相が明瞭に異なっていることは興味深い。

川島町域では、現在、調査・整理中の遺跡が多く、端緒についたばかりといえる。今後、次第に低地遺跡の全体像が明らかになっていくものと考えられる。(註 1) 反町遺跡は、平成 17・18 年度に埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査中である。都幾川の旧流路と考えられる河川沿いに、弥生中期から古墳時代の集落の存在が確認された。特筆すべきは、古墳時代前期の東海西部系土器などの出土と、水晶を中心とした玉作工房が検出されたことである。

(註 2) 東松山市教育委員会で、現在、調査・整理中であり、東松山市埋蔵文化財センターのご好意で実見させていただいた。



第3図 周辺の遺跡



- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 白井沼遺跡 | 46. 森谷稻荷塚古墳 |
| 2. 岩鼻遺跡 | 47. 富田後遺跡 |
| 3. 八耕地遺跡 | 48. 尾崎遺跡 |
| 4. 観音寺遺跡 | 49. 富士浅間塚古墳 |
| 5. 大行山遺跡 | 50. 愛宕塚古墳 |
| 6. 久米田遺跡 | 51. 元宿遺跡 |
| 7. 山の根古墳 | 52. 養竹院内古墳 |
| 8. 原遺跡第2地点 | 53. 慶徳寺古墳 |
| 9. 下遺跡 | 54. 西谷遺跡 |
| 10. 原遺跡第3地点 | 55. 浅間塚古墳 |
| 11. 五領遺跡 | 56. 高窪遺跡 |
| 12. 西吉見条里Ⅰ・Ⅱ | 57. 白山古墳 |
| 13. 三ノ耕地遺跡 | 58. 下間遺跡 |
| 14. 天神山古墳 | 59. 馬室小学校校庭内遺跡 |
| 15. 野本將軍塚古墳 | 60. 赤台遺跡 |
| 16. 番清水遺跡 | 61. 上手遺跡 |
| 17. 諏訪山29号墳 | 62. 阿弥陀堂遺跡 |
| 18. 下道添遺跡 | 63. 問屋坂遺跡 |
| 19. 古凍古墳群 | 64. 石戸城跡遺跡 |
| 20. 安楽寺遺跡 | 65. 諏訪山北遺跡 |
| 21. 稻荷塚古墳群 | 66. 八重塚遺跡 |
| 22. 毛塚古墳群 | 67. 丸山遺跡 |
| 23. 下寺前遺跡 | 68. 榎戸遺跡 |
| 24. 高坂古墳群 | 69. 下宿遺跡 |
| 25. 代正寺遺跡 | 70. 東台Ⅰ遺跡 |
| 26. 杉の木遺跡 | 71. 台原遺跡 |
| 27. 大西遺跡 | 72. 西台遺跡 |
| 28. 根岸稻荷神社古墳 | 73. 中台Ⅱ遺跡 |
| 29. 山王塚古墳 | 74. 若宮台遺跡 |
| 30. 正直玉作遺跡 | 75. 三ツ木遺跡 |
| 31. 塚の越古墳 | 76. 西Ⅰ遺跡 |
| 32. 吹塚古墳 | 77. 砂ヶ谷戸Ⅱ遺跡 |
| 33. 上八ッ林古墳 | 78. 砂ヶ谷戸Ⅰ遺跡 |
| 34. 宮ノ谷戸遺跡 | 79. 小在家遺跡 |
| 35. 柳町遺跡B区 | 80. 桑上遺跡 |
| 36. 大塚古墳 | 81. 八幡耕地遺跡 |
| 37. 村並遺跡 | 82. 宮前遺跡 |
| 38. 相撲場遺跡 | 83. 熊野神社古墳 |
| 39. 勇福寺遺跡 | 84. 殿山遺跡 |
| 40. 新町遺跡 | 85. 雲雀遺跡 |
| 41. 柵遺跡 | 86. 畔吉遺跡 |
| 42. 石井前原遺跡 | 87. 江川山古墳 |
| 43. 附島遺跡 | 88. 高坂三番町遺跡 |
| 44. 木曾免遺跡 | 89. 反町遺跡 |
| 45. 堂地遺跡 | 90. 平沼一丁田遺跡 |
| | 91. 芝沼堤外遺跡 |

★	白井沼遺跡
○	弥生時代後期の遺跡
●	弥生～古墳前期の集落遺跡
●	古墳・その他の遺跡
●	前方後円墳
■	前方後方墳

III 遺跡の概要

白井沼遺跡は、埼玉県比企郡川島町大字白井沼字広合 266 番地他に所在し、川島町役場の北東約 1 km に位置している。

遺跡は、町役場のある平沼付近から、東西方向に半円を描くように伸びる自然堤防の東端に位置している。自然堤防は、平沼付近では 2 条平行して認められる。本遺跡の西 1.3km にある平沼一丁田遺跡は、本遺跡の乗る自然堤防の対岸にあたる。また、本遺跡の約 500 m 東にある富田後遺跡は、本遺跡とは異なる自然堤防上に立地している。

遺跡の西側は、現在は安藤川と県道によって分断されているが、元々は一つの自然堤防であったと考えられる。

遺跡付近の自然堤防は、現状では、遺跡の北東に隣接する川島中学校や、近代の耕地整理によって不明確となっている。

白井沼遺跡の発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道建設および、安藤川河川改修事業に伴って、これまでに、3 次にわたる調査が行われてきた。

調査年次については、以下のとおりである。

第 1 次 首都圏中央連絡自動車道建設事業

平成 15 年度調査

本報告

第 2 次 安藤川河川改修事業

平成 16 年度調査

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 315

集『白井沼遺跡 I』として報告済

第 3 次 首都圏中央連絡自動車道建設事業

平成 17 年度調査

本報告

各調査地点については、第 4 図に示した。今回報告の対象となるのは、第 1 次・第 3 次調査である。

第 2 次調査については、既に報告書が刊行されており、ここでは概要のみ述べ、詳細は報告書を参照されたい。

第 2 次調査区は、安藤川に沿った、遺跡範囲の南西端にあたる。

検出した遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 1 棟、周溝遺構 5 基、井戸跡 2 基、土壇 38 基、溝跡 24 条を検出した。調査範囲の北側は浅い谷となっている。

遺物は、古墳時代前期の土師器が多量に出土した。土器は、今回の調査地点と時期的には同時期で、構成にも差異は認められないが、壺形土器の中に、口縁部や頸部に縄文あるいは網目状捺糸文を施す加飾壺の出土、口縁部に刻み目を有する甕が今回の調査地点よりも多く出土している。また、S 字状口縁台付甕（以下、S 字甕）が少ない傾向が認められる。

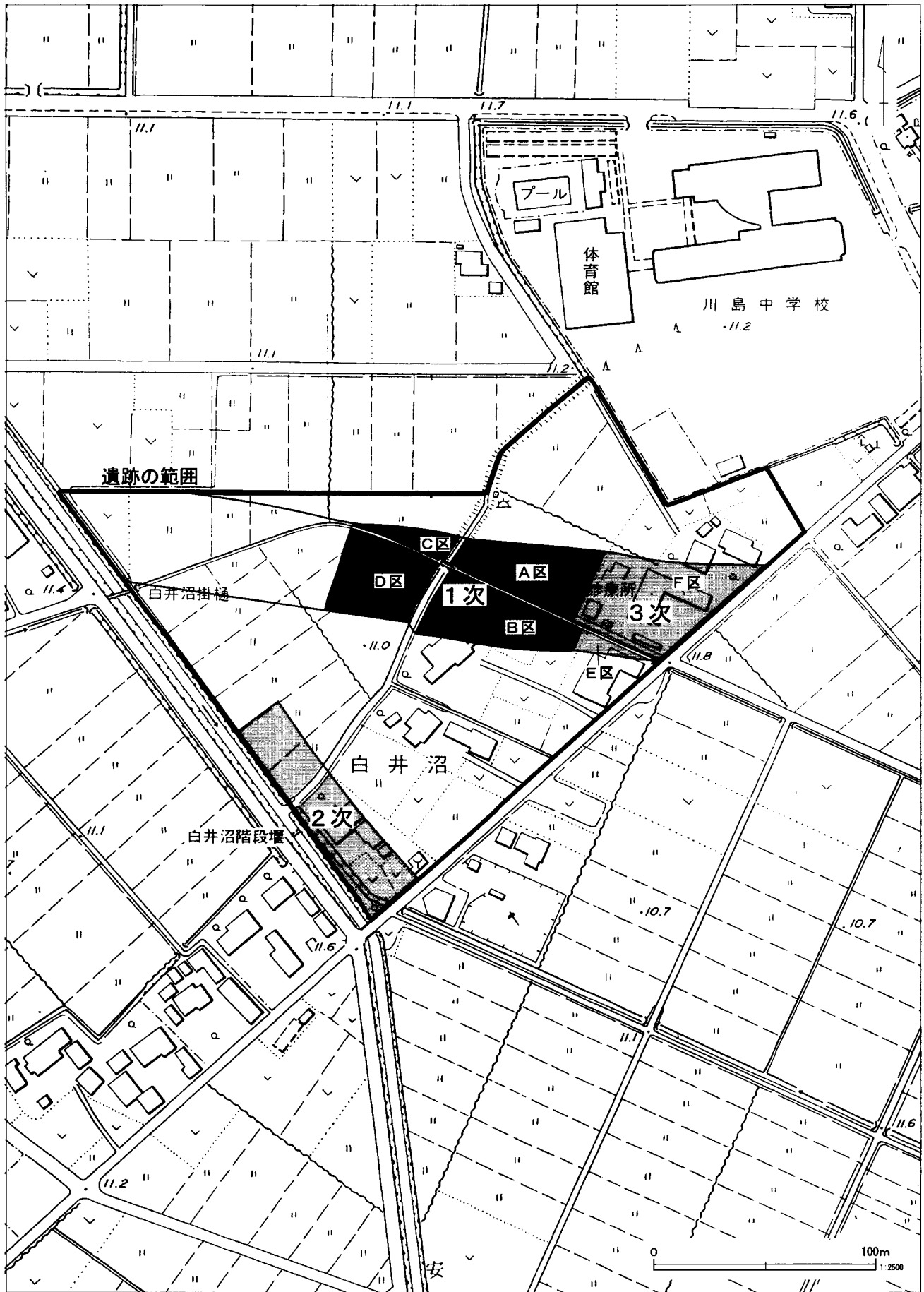
土壇中から、駿河地方産と考えられる大廓式の大壺の口縁部と底部が出土した。また、井戸跡からほぼ完形の蓋形木製品が出土している。

今回の調査地点は、第 2 次調査地点の北東約 80 m にある。調査区は、用水・排水路および用地の関係から、6 つに分断されていた。このため、便宜的に調査区を A～F の 6 区に区分し、A～D 区（第 1 次）、E・F 区（第 3 次）の順に調査した（第 4・5 図）。

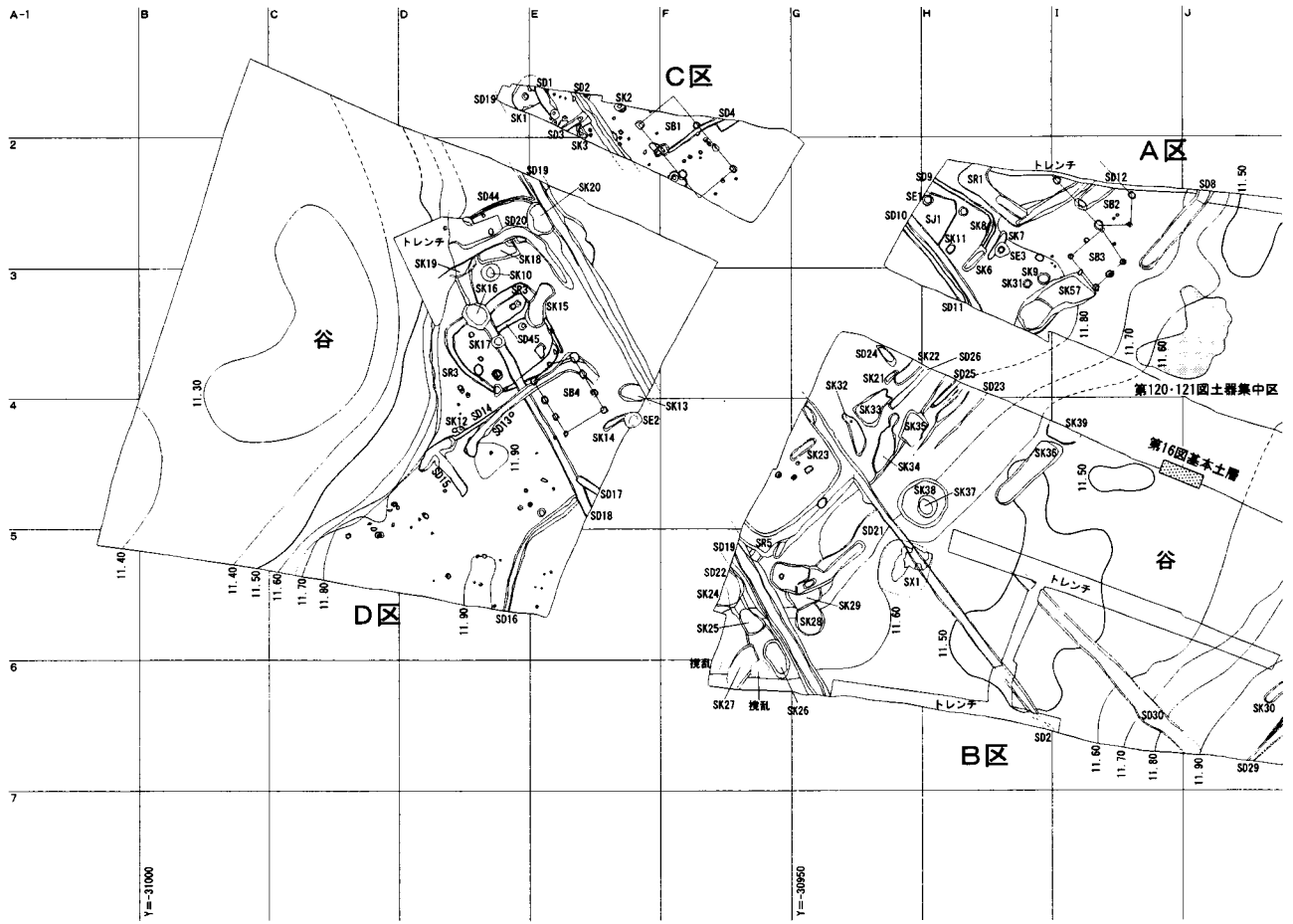
調査範囲は、幅約 45 m、長さ約 160 m の細長い調査区で、A・B 区および D 区の 2 ヶ所で浅い谷を検出した。D 区の谷は、古墳時代前期の遺構を壊し、近・現代の陶磁器や杭等が出土したため、新しい時期に形成されたものである。

一方、A・B 区の谷は、古墳時代の土器を多量に含む地点があり、また、古墳時代前期の遺構が谷中にも掘り込まれていたことから、古墳時代前期には既に埋没し、浅い窪地となっていたものと考えられる。なお、この谷は、第 2 次調査地点北側で検出した谷と同一のものであると考えられる。

A・B 区の谷の土層断面図を第 6 図に示した。表土を除去すると、遺構の集中する微高地部では黄褐色のシルト質土となり、遺構検出面となっている。



第4図 遺跡の範囲



第5図 調査全体図

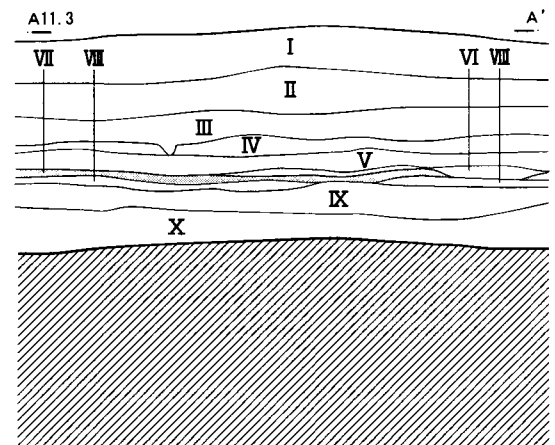
この黄褐色土から、縄文時代中期の完形の深鉢が出土した。このことから、本遺跡の乗る自然堤防は、縄文時代中期以前に形成されたものであることが明らかとなった。

谷部では、浅間B軽石を含む黒色土が認められる (IV層)。直下のV層中にも薄い火山灰層が認められるが、未知の火山灰である可能性が高い (川島町2006)。

V層以下は、薄い泥炭層が数枚堆積している。VII層は灰白色土で、微細な軽石を多量に含みブロック状となるが、FAと考えられる。

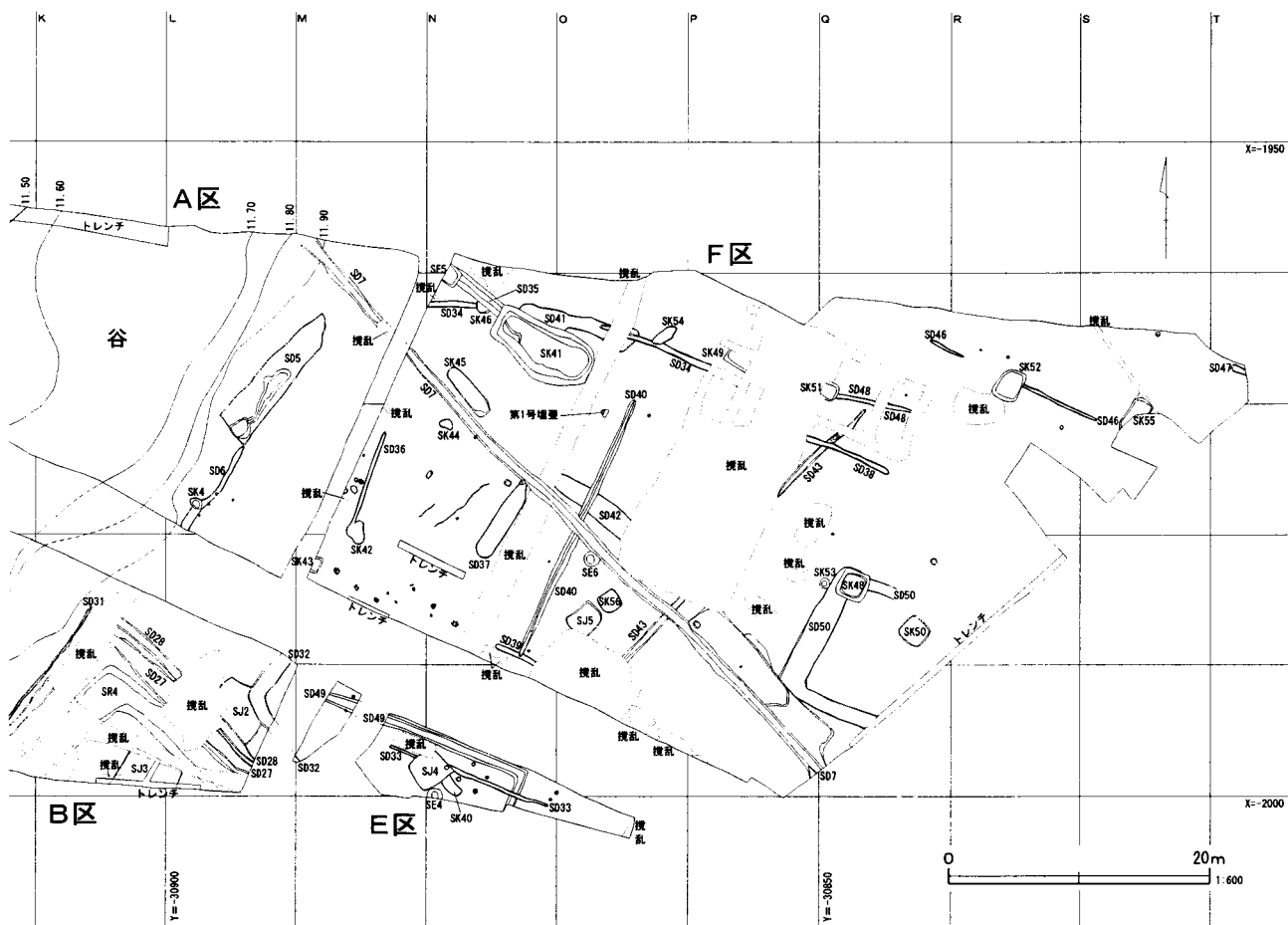
VII層までは遺物をまったく含まず、VII層直下に泥炭層を検出し (VIII層)、その直下のIX層で、古墳時代前期の土師器が出土した。A区谷部では、このIX層上面で土器集中区を検出した。

IX層以下は青灰色の粘土質で、分層が肉眼的には困難となる。遺物も出土しなかった。



- 谷部 (A-A')
- I 灰褐色土 表土、水田耕作土。
 - II 灰褐色土 水田耕作土。
 - III 暗褐色土 粘性あり、酸化鉄分を多量含む。
 - IV 黒色土 粘性なし、黒色砂粒 (φ1mm以下)・火山ガラス状の粒子を多量含む。(浅間Bか?)
 - V 暗灰色土 粘性あり、灰粘土質をブロック状に含む所あり、厚さ1~5mm程の薄い泥炭層が交互にある。
 - VI 黒色土 粘性ややあり、しまりなし、泥炭層、植物の根 (炭化) 等を含む。
 - VII 灰白色土 粘性ややあり、軽石状粒子 (φ1mm以下) を多量含む、断続的にブロック状となる部分が多い。(FA層か?)
 - VIII 黒色土 粘性ややあり、しまりなし、泥炭層、IV層に似る。
 - IX 灰色土 粘性あり、谷中央部では殆んど出土しないがこの層中に古墳時代前期の土器を多量含む。
 - X 青灰色土 粘性極めて強、酸化鉄分を含む。

第6図 基本土層



調査地点の微地形は、A・B区の谷を挟んだ両側が高く、谷部との高低差は約50cmであった。遺構も、この谷を境に大きく二分された形で検出した。

遺構は、概ね谷を意識するように谷に沿って分布するが、谷を横切るように検出した溝跡もある。

谷は、遺物出土層の直上に薄い泥炭層が形成されており、古墳時代前期には既に埋没し、水溜り状の浅い窪地であったと考えられる。谷との高低差はなく、行き来は容易であったと考えられる。

遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡4棟、周溝遺構4基、土壇49基、溝跡42条、井戸跡4基、近世以降の土壇6基、井戸跡2基、溝跡5条を検出した。

遺物は、周溝遺構・土壇・溝跡を中心に、コンテナ125箱分の多量の土器・石製品等が出土した。

古墳時代前期の遺構は、遺物量に比べて竪穴住居跡の検出が少なく、周溝遺構・掘立柱建物跡が主体

となる。周溝遺構は、平面が方形周溝墓状であるが、出土遺物に甕の比率が高く、底部穿孔の壺形土器が皆無であることや掘立柱建物跡との重複があることなどから、墓以外の用途が想定される。

遺物には、東海西部系の壺・高坏・S字甕などとともに、駿河地方からの搬入品と考えられる、大廓式土器の大型壺・折り返し口縁壺・大型甕等が出土した。大型甕以外は複数個体出土した。また、大型壺と同じ胎土の高坏も出土した。埼玉県内の遺跡で出土する大廓式土器は、大型壺の口縁部のみ単体で出土することが多く、複数器種・個体の出土は、県内では初めての例となる。

また、第21号溝跡からは、大型壺とともに鶏形土製品の頭部が出土した。中空の埴輪状で、同じグリッドから羽部と思われる破片も出土した。

他の遺構・遺物の詳細については、第IV章以降を参照されたい。

VI 遺構と遺物

1. 住居跡

第1号住居跡 (第7図)

A区G・H-2グリッドにかけて検出した。

遺構は、第1号井戸跡、第10号溝跡と重複し、2つの遺構に壊されていた。

平面の形状は方形と考えられるが、南側を第10号溝跡により壊され、西側は調査区外へ延び、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.63m、短軸は2.96mまで確認できた。深さは0.05mであった。

主軸方向はN-32°-Eであった。

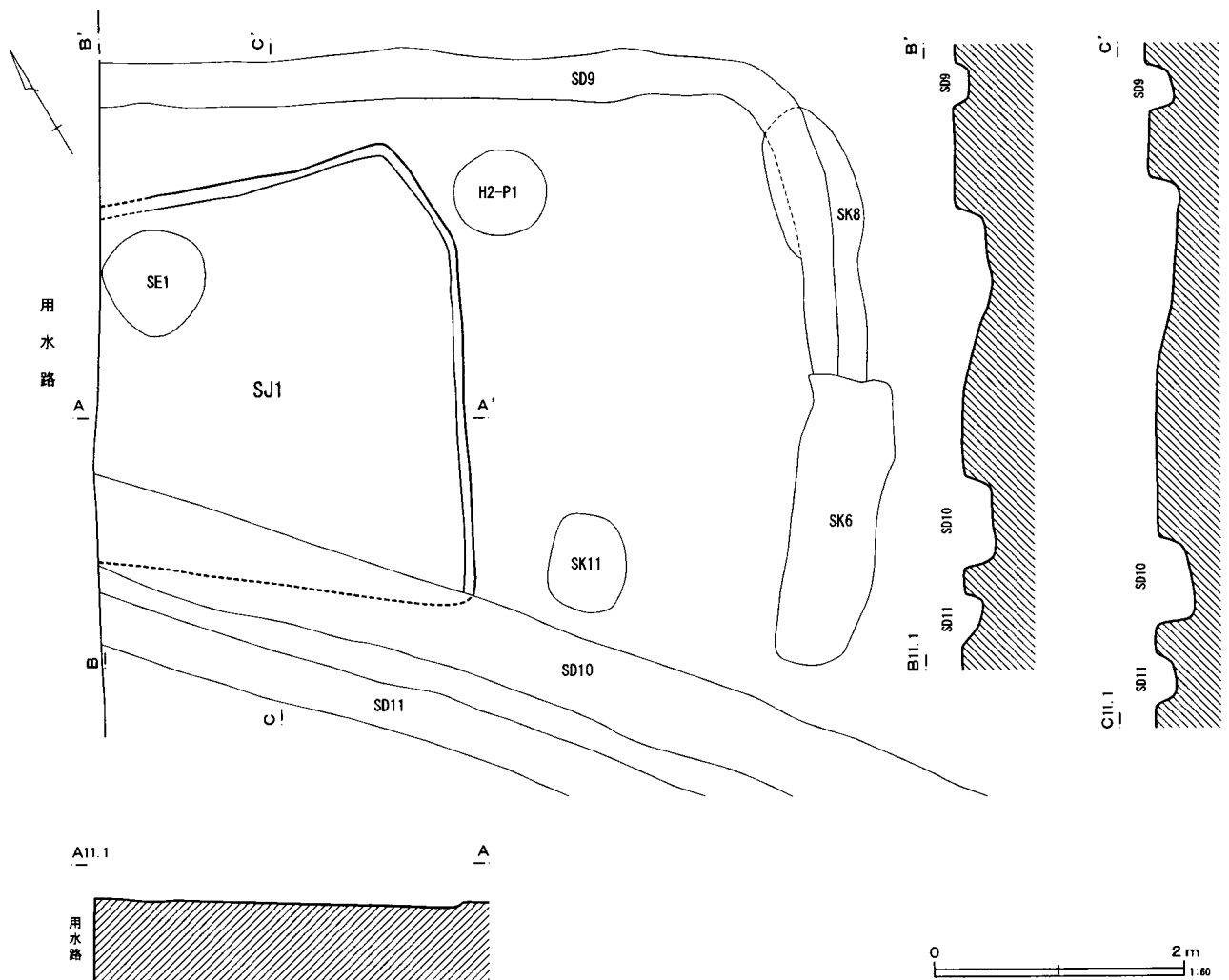
遺構検出時に既に床面付近が露出し、覆土は殆ど

残存していなかった。床面は貼床が施されておらず、既に床面が失われていた可能性がある。

壁溝・柱穴・炉跡等の施設は検出できなかった。

なお、本遺構の北側と東側で、第9号溝跡がL字型に巡っていた。第1号住居跡東壁が、第9号溝跡の東辺と平行し、いわゆる周溝を有する竪穴住居跡の可能性もあったが、住居全体の主軸が溝とはややずれているため、住居跡と溝跡との関係は明らかにできなかった。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が数点出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。



第7図 第1号住居跡

第2号住居跡（第8・9図）

B区L-6グリッドで検出した。

遺構は、第28・32号溝跡と重複しており、溝跡によって壊されていた。また西側を建物の基礎等によって壊されていた。

平面の形状は、方形と考えられるが、他の遺構や攪乱によって壊されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.25 m、短軸2.93 mが残存していた。深さは0.22 mであった。主軸方向はN-30°-Eであった。

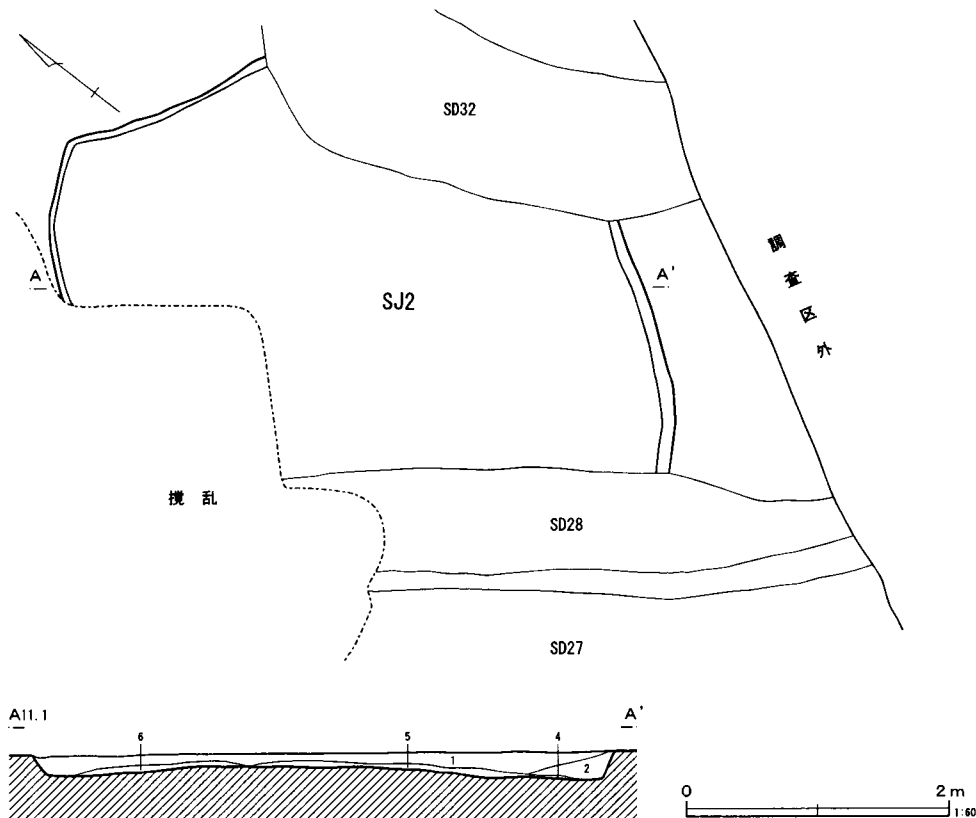
覆土は、やや粘性のある黒褐色土で、焼土粒子・炭化物を多量に含んでいた。下層の5・6層との層境に、炭層が水平に堆積していた。炭層直下が床面と考えられるが、硬化面等は検出できなかった。

また、床面に、炉跡・柱穴・壁溝・貯蔵穴等の施設も検出できなかった。

出土遺物は、古墳時代前期の壺・台付甕・S字甕・高坏・埴・鉢などが出土した。図示可能な遺物は14点であった。

1～3は壺で、1は底部～胴部の、2は底部の、3は口縁部の破片である。3は大廓式の大形壺の破片である。口縁部外面の下端に三角形の粘土帯を貼り付けることで、段を表現している。

4～9は甕である。概ね台付甕と考えられる。4・7は小型甕で、4には、胴部に比べ大きめの脚部が付く。台付甕の脚部と胴部の接合方法は、いわゆる「臍」によって接合される。5は長胴気味の胴部で、短く立ち上がる口縁部を有する。6の口縁部も短く立ち上がるが、肩部の張りが大きい。



第2号住居跡

- 1 黒褐色土 粘性ややあり、焼土粒子・炭化物・灰白色粘土粒子を多量含む、1層と5・6層の層界に厚さ2～5mmの炭層あり。(覆土)
- 2 黒褐色土 粘性ややあり、灰白色粘土ブロックを含む。(覆土)
- 3 黒褐色土 粘性あり、炭化物を少量含む。(覆土)
- 4 黒褐色土 地山灰白色土ブロックを多量含む。(掘り方)
- 5 灰褐色土 粘性ややあり、しまりあり、灰白色土ブロックを多量含む。(掘り方)
- 6 灰褐色土 粘性ややあり、しまりあり、灰白色土ブロックを多量含む。(掘り方)

第8図 第2号住居跡

7は小型の台付甕と考えられる。なで肩で、高めの口縁部である。胎土に白色針状物質を含んでいた。

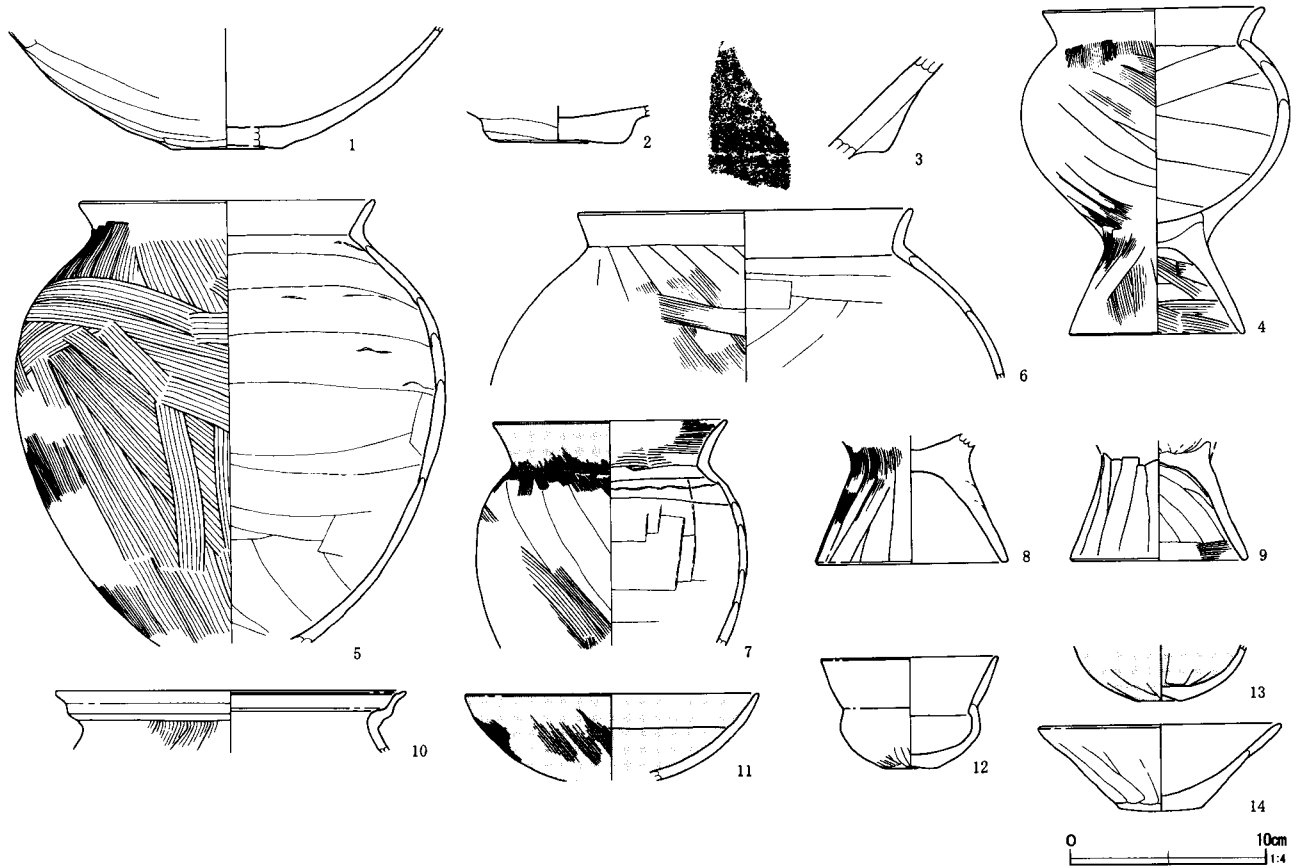
10はS字甕の口縁部の破片である。外面口縁部下端に明瞭な稜を有し、口縁部が大きく外反する。口縁内面端部は、強いナデによって沈線状に凹む。在地産の模倣品と考えられる。

11は高坏の坏部である。碗形の小さな高坏で、

内外面とも赤彩されていた。

12・13は小型の罎である。底部は丸底ではなく、やや上げ底風に底部外面が凹む。12は風化が著しい。13は口縁部を欠くが、内外面とも赤彩されており、鉢の可能性も考えられる。

14は鉢である。平底で、直線的に外傾しながら立ち上がる。



第9図 第2号住居跡出土遺物

第1表 第2号住居跡出土遺物観察表(第9図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SJ2	壺		[6.1]	(5.6)	胴~底部	B	良好	橙		
2	SJ2	壺		[1.9]	6.8	底部完形	B	良好	にぶい黄橙		
3	SJ2	壺				口縁破片	E	良好	浅黄橙	大廓、風化	
4	SJ2	小型台付甕	(11.1)	16.6	(9.0)	1/2	A	普通	橙		23-2
5	SJ2	台付甕	(14.8)	[22.5]		口縁部2/3	B	良好	橙		23-3
6	SJ2	甕	(17.1)	[8.7]		口縁部1/2	A	普通	褐		23-4
7	SJ2	小型甕	(11.8)	[11.5]		口縁部1/3	D	普通	橙	赤彩	23-5
8	SJ2	台付甕	9.9	[6.6]		脚部完形	A	良好	にぶい黄橙		26-6
9	SJ2	台付甕		[6.2]	9.1	脚部3/4	A	普通	橙	外面風化	
10	SJ2	S字甕	(18.0)	[3.2]		口縁破片	A	普通	明赤褐		
11	SJ2	高坏	14.8	[4.4]		坏部1/2	B	普通	赤褐	赤彩	23-7
12	SJ2	罎	(8.8)	5.7	2.8	1/4	B	良好	にぶい黄橙	内外面とも風化	23-8
13	SJ2	罎		[2.8]	2.1	胴~底部	B	良好	橙	赤彩	
14	SJ2	鉢	(12.3)	4.4	4.2	1/3	A	普通	橙	内面風化	24-1

第3号住居跡 (第10図)

B区K・L-6グリッドで検出した。遺構は、第4号周溝遺構の内側で検出した。北側と西側の一部を後世の攪乱に壊されていた。また、南側は調査区外へ延びていた。

平面の形状は、方形と考えられるが、全体の形状は明らかにできなかった。規模は、長軸4.45m、短軸2.14mまで確認できた。深さは0.17mであった。主軸方向はN-60°-Wであった。

遺構の覆土(1層)は、地山の黄褐色シルトブロックを多量に含む暗褐色土であった。床面は、5層上面から炉跡が掘り込まれており、5層上面が床面であったと考えられる。

炉跡は、径45cmの円形で、床面から10cm程掘り込まれていた。焼土の堆積は少なく、底面も被熱・硬化は弱かった。

遺構は、第4号周溝遺構の内側で検出されたが、主軸方位が異なるため、時期差があるものと考えられるが、新旧関係については明らかにできなかった。

柱穴・その他の施設は検出できなかった。

遺物は、炉内から土師器の小片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第4号住居跡 (第11図)

E区M・N-6グリッドで検出した。第40号土壇、第33号溝跡と重複していた。第40号土壇、第33号溝跡を壊していた。北側の一部を建物の基礎によって壊されていた。

平面の形状は方形で、規模は長軸2.68m、短軸2.64m、深さ0.08mであった。主軸方向はN-31°-Wであった。

覆土は、地山のシルト粒子を多量に含む黒褐色土であった。

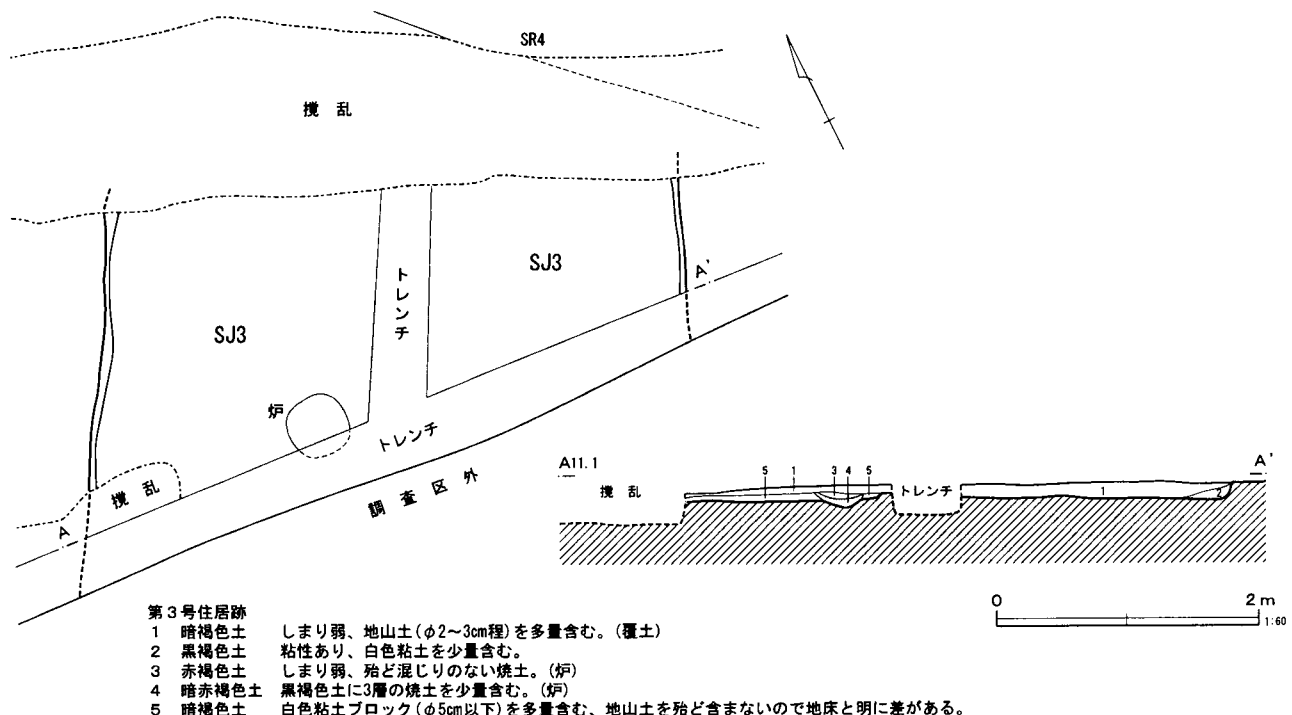
黒褐色土ブロックを含む灰白色土によって貼床が施されていた。床面は概ね平坦で、中央やや南よりで、一部硬化範囲を検出した。

南東コーナー付近でピットを検出したが、住居跡に伴っていたかどうかは明らかにできなかった。

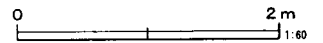
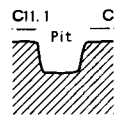
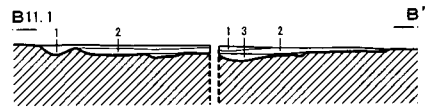
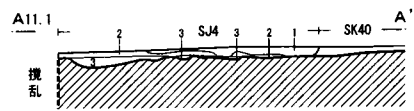
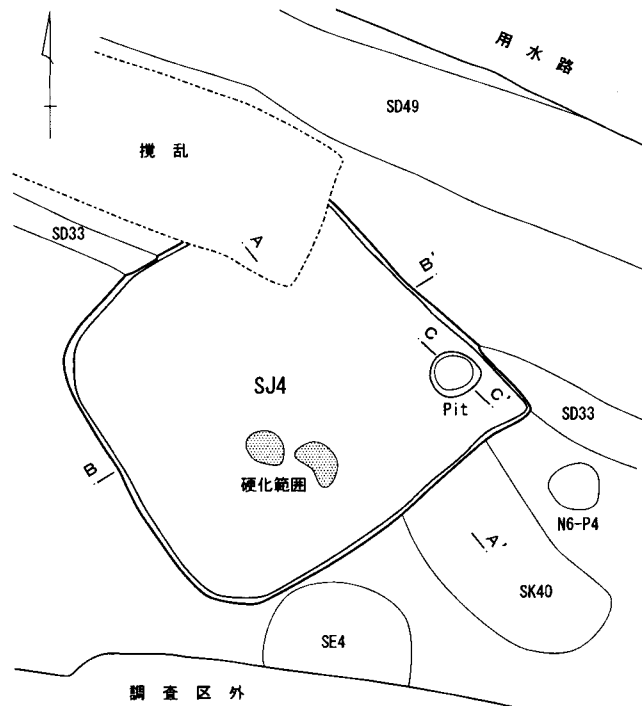
炉跡・壁溝等の施設は検出できなかった。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が3点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

本遺構は、後述する第5号住居跡とともに、住居跡とするにはやや小型であったが、底面が平坦な方形の土壇の検出が極めて少なく、第4号住居跡については、貼床の存在から住居跡とした。



第10図 第3号住居跡



- 第4号住居跡
- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子を多量含む。
 - 2 灰白色土 しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm)を少量含む。(貼り床)
 - 3 掘り方

第11図 第4号住居跡

第5号住居跡 (第12・13・14図)

F区O-5グリッドで検出した。遺構の南側を攪乱されていた。

平面の形状は方形と考えられる。規模は、長軸2.50m、短軸2.00m、深さ0.17mであった。主軸方向はN-46°-Eであった。

覆土は、地山シルトを含む黒褐色土であった。

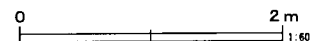
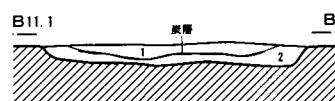
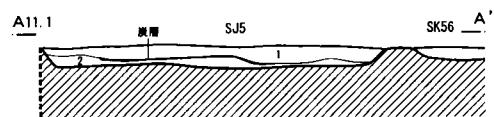
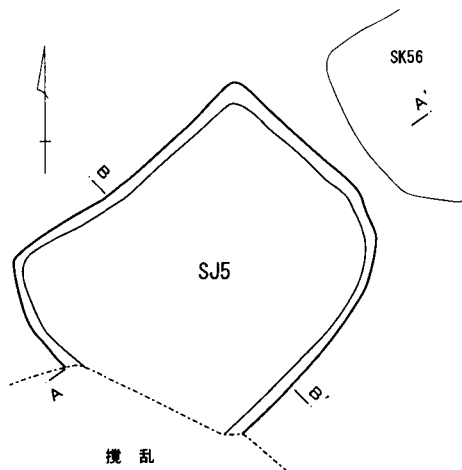
床面は平坦で、壁面は、やや斜め上方に直線的に立ち上がっていた。貼床は検出できなかった。

炉跡・柱穴・壁溝等の施設は検出できなかった。

本遺構は、住居跡とするには規模が小さく、炉跡・貼床等の検出がなかったため、調査の最初の段階で土壌として扱っていた。しかし、底面が平坦であること、本遺跡で検出した土壌は円または楕円形が中心であることから、調査中に住居跡に変更して調査を継続した。

遺物は、住居覆土中の床面からやや浮いた状態で、古墳時代前期の壺・甕・高坏などが出土した。特に南東コーナー部分に集中していた。

掲載資料は10点であった。遺物は、他に、掲載



- 第5号住居跡
- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子を少量含む、炭化粒子を微量含む。
 - 2 黒褐色土 しまりあり、褐色地山ブロック(φ2~3cm程)・褐色地山粒子を多量含む

第12図 第5号住居跡

資料と同一個体と考えられる壺・甕の胴部片が多量に出土したが、接合せず、非掲載とした。

1・2は壺の底部～胴部にかけての破片である。

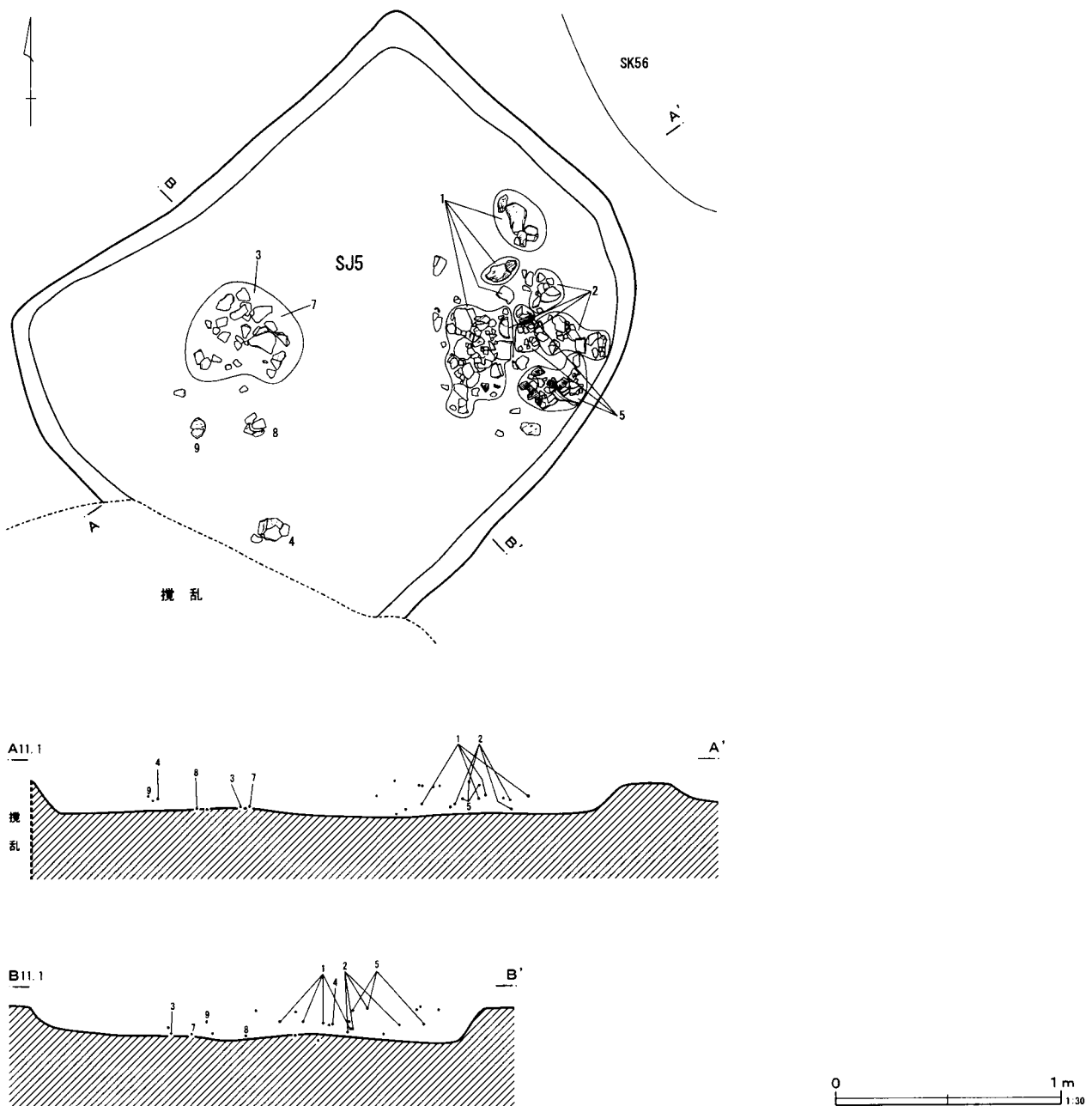
1は底部が輪台状、2は平底であった。

3・4は甕の上半部の破片である。やや高めの口縁部にナデ肩の肩部となる。台付甕となるかどうかは明らかにできなかった。

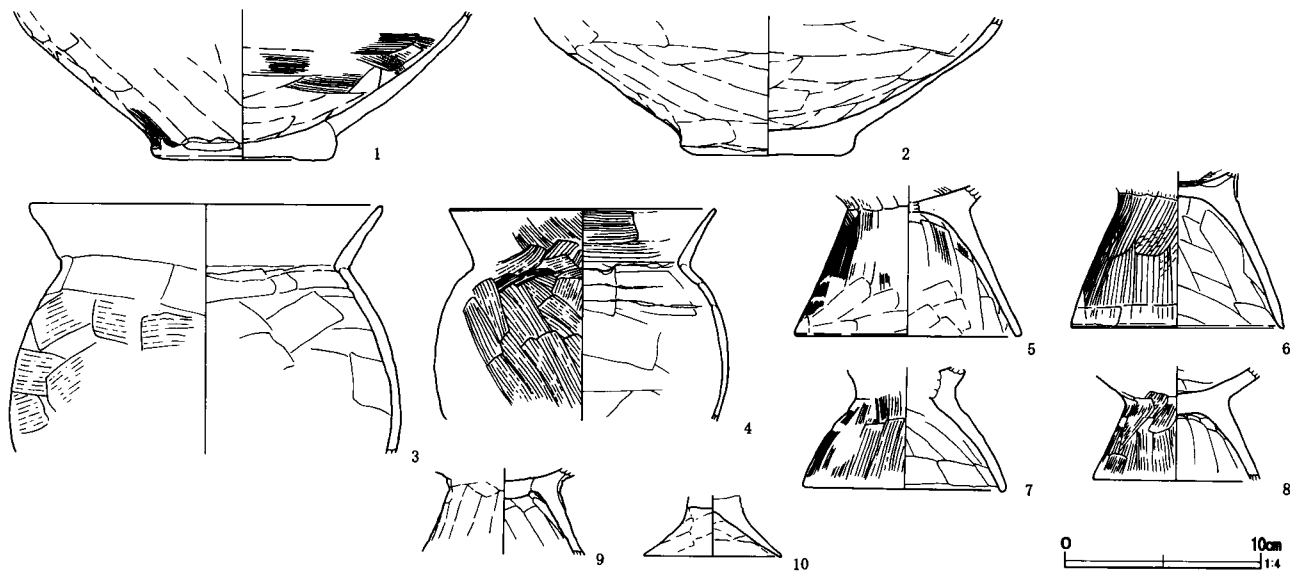
5～9は台付甕の脚部である。5は裾がやや直線的に開く脚部を有する。6～8はやや内湾気味となる。

7・8はやや背の低い脚部となっており、小型の台付甕の可能性はある。

10は小型の高坏の脚部と考えられる。背の低い脚部で、外反しながら広がる。山陰地方の低脚坏の可能性もあったが、胎土に石英・チャート・雲母などを含む在地産の胎土であった。第20号溝跡に坏部の残存する低脚の高坏が出土している（第109図325）。



第13図 第5号住居跡遺物出土状況



第14図 第5号住居跡出土遺物

第2表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SJ5	壺		[7.7]	9.1	胴～底部	A	普通	橙		23-1
2	SJ5	壺		[7.1]	8.8	底部完形	A	普通	橙	外面風化	
3	SJ5	甕	(18.0)	[12.8]		口縁部1/4	A	良好	橙	全面風化	
4	SJ5	甕	(13.4)	[10.9]		口縁～胴部	B	良好	暗赤褐		
5	SJ5	台付甕		[7.7]	(11.2)	脚部1/2	A	普通	にぶい赤褐	外面風化	
6	SJ5	台付甕		[8.0]	(10.7)	脚部1/2	A	普通	にぶい黄橙		
7	SJ5	台付甕		[6.2]	(10.0)	脚部1/2	A	普通	赤	風化著しい	
8	SJ5	台付甕		[5.7]		脚部1/2	A	普通	橙		
9	SJ5	台付甕		[4.4]		脚部1/3	A	良好	橙	内外面風化	
10	SJ5	高坏		[3.1]	(6.9)	脚部1/2	A	良好	橙	外面風化	

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、4基検出した。全て古墳時代前期に属していたと考えられる。

古代の掘立柱建物跡と違い、掘立柱建物跡の規格に統一性はなく、検出は容易ではない。後述するが、数多く検出した柱穴風のピットも、建物の一部であった可能性もあるが、ここでは、柱穴の規模・覆土の同一性・柱痕跡のあるもの、柱筋の通るものを掘立柱建物跡と判断した。

第1号掘立柱建物跡 (第15図)

C区E・F-1・2グリッドにかけて検出した。第4号溝跡と重複していた。第4号溝跡に壊されていた。

形状は、桁行3間、梁行1間の側柱建物跡と考えられるが、北コーナーと南コーナーが調査区外へ伸び、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、桁行7.15m、梁行3.34mであった。主軸方向はN-40°-Wであった。

各柱穴の規模は以下のとおりである。

- P 1 長軸0.59m、短軸0.53m、深さ0.37m
- P 2 長軸0.63m、短軸0.47m、深さ0.62m
- P 3 長軸0.63m 短軸0.53m 深さ0.20m
- P 4 長軸0.79m、短軸0.70m、深さ0.29m
- P 5 長軸1.21m 短軸0.87m、深さ0.36m
- P 6 長軸0.69m、短軸0.55m、深さ0.40m

遺物は、古墳時代前期の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

明らかにできなかった。

形状は、梁行2間、桁行は2間まで確認できたが、調査区外へ延びていた。梁側の柱穴は、独立棟持柱風に張り出していた。

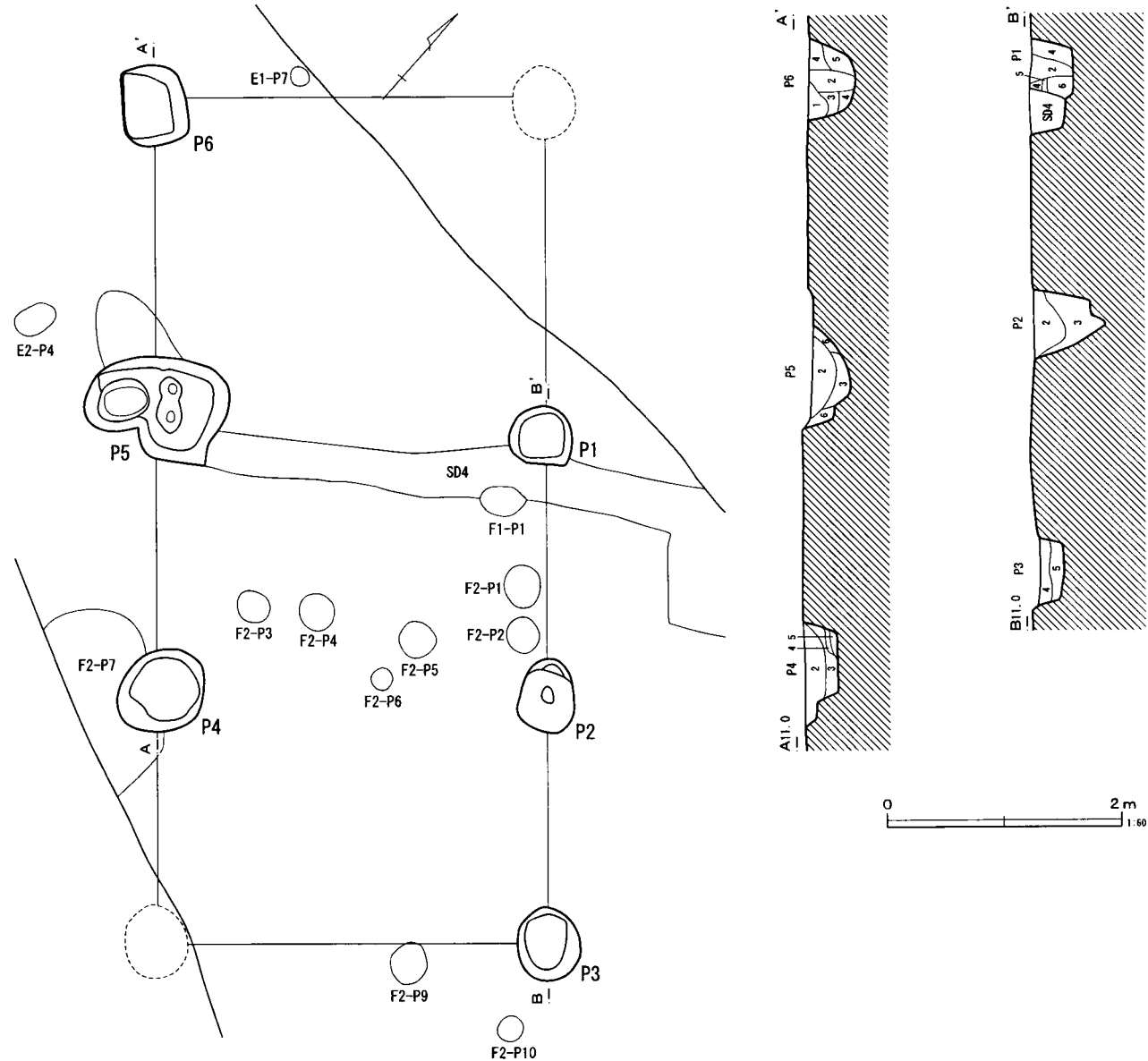
規模は、桁行4.67 mが残存し、梁行3.43 mであった。主軸方向はN-42°-Wであった。

各柱穴の規模は以下のとおりである。

P 1 長軸0.62 m、短軸0.52 m、深さ0.35 m

第2号掘立柱建物跡 (第16図)

A区H・I-2グリッドで検出した。第1号周溝遺構、第3号掘立柱建物跡、第12号溝跡と重複していた。第12号溝跡を壊し、第3号掘立柱建物跡に壊されていた。第1号周溝遺構との新旧関係は、



第1号掘立柱建物跡

- 1 黄褐色土 粘性なし、しまりあり、地山が崩れたもの。
- 2 暗褐色土 粘性ややあり、しまりなし、炭化粒子を多量含む。(柱を抜き取った後)
- 3 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、黄褐色地山土を少量含む。
- 4 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、黄褐色土・焼土ブロックを多量含む。(柱の掘り方)
- 5 暗黄褐色土 粘性なし、しまりあり、黒色土粒子を少量含む。(柱の掘り方)
- 6 黒褐色土 粘性なし、しまりあり、黄褐色土ブロックを多量含む。

第15図 第1号掘立柱建物跡

- P 2 長軸 0.73 m、短軸 0.68 m、深さ 0.13 m
- P 3 長軸 1.12 m、短軸 0.64 m、深さ 0.29 m
- P 4 長軸 0.60 m、短軸 0.58 m、深さ 0.09 m
- P 5 長軸 0.43 m、短軸 0.32 m、深さ 0.27 m

遺物は、古墳時代前期の土師器小片が出土したが、
図示可能な遺物は出土しなかった。

号土壌、第2号掘立柱建物跡と重複していた。両遺
構を壊していた。

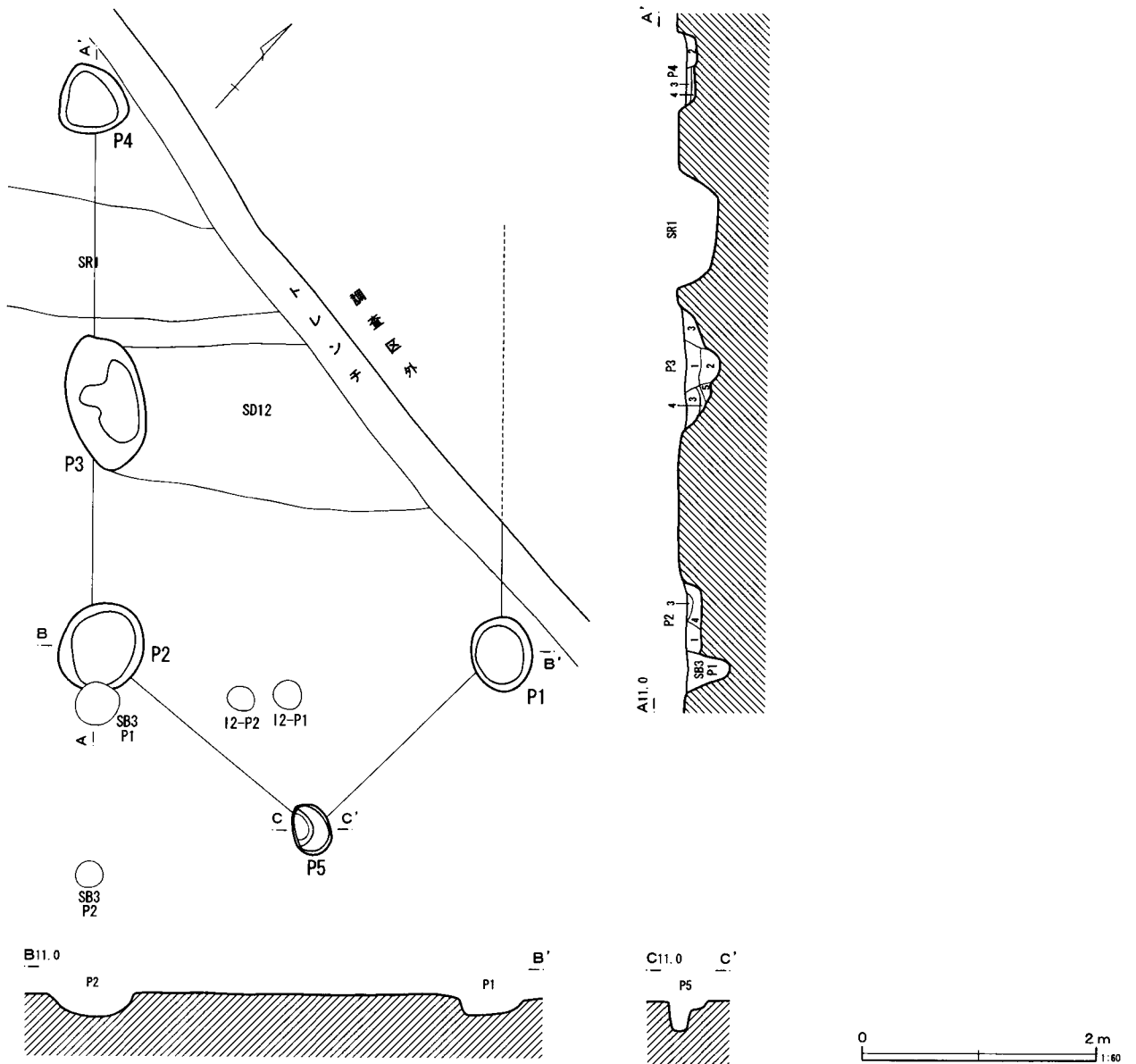
形状は、桁行2間×梁行2間の側柱建物跡で、
規模は、桁行3.28 m、梁行2.95 mであった。主
軸方向はN-40°-Wであった。

各柱穴の規模は以下のとおりである。

第3号掘立柱建物跡 (第17図)

A区I-2・3グリッドで検出した。遺構は57

- P 1 長軸 0.37 m、短軸 0.37 m、深さ 0.46 m
- P 2 長軸 0.22 m、短軸 0.22 m、深さ 0.13 m



第2号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色土 粘性ややあり、地山(灰色粘土)粒子を多量含む。(柱痕跡)
- 2 黒褐色土 粘性ややあり、地山(灰色粘土)粒子・ブロックを多量含む。(柱痕跡)
- 3 黒褐色土 地山(灰色粘土)ブロック+黒褐色土。(掘り方)
- 4 黒褐色土 灰色粘土に黒褐色土ブロックを微量含む。(掘り方)
- 5 黒褐色土 粘性あり、地山(灰色粘土)ブロックを多量含む、6層に似るがブロックの混入は少ない。(掘り方)

第16図 第2号掘立柱建物跡

- P 3 長軸 0.45 m、短軸 0.45 m、深さ 0.50 m
 - P 4 長軸 0.69 m、短軸 0.55 m、深さ 0.28 m
 - P 5 長軸 0.62 m、短軸 0.50 m、深さ 0.20 m
 - P 6 長軸 0.45 m、短軸 0.29 m、深さ 0.26 m
 - P 7 長軸 0.47 m、短軸 0.44 m、深さ 0.47 m
 - P 8 長軸 0.42 m、短軸 0.41 m、深さ 0.35 m
- 遺物は、出土しなかった。

第4号掘立柱建物跡 (第18図)

D区E-3・4グリッドで検出した。第3号周溝遺構、第13号溝跡と重複していた。第3号周溝遺構、第13号溝跡を壊していた。また、第18号溝跡に沿って検出したが、第18号溝跡は、第13号溝後に壊

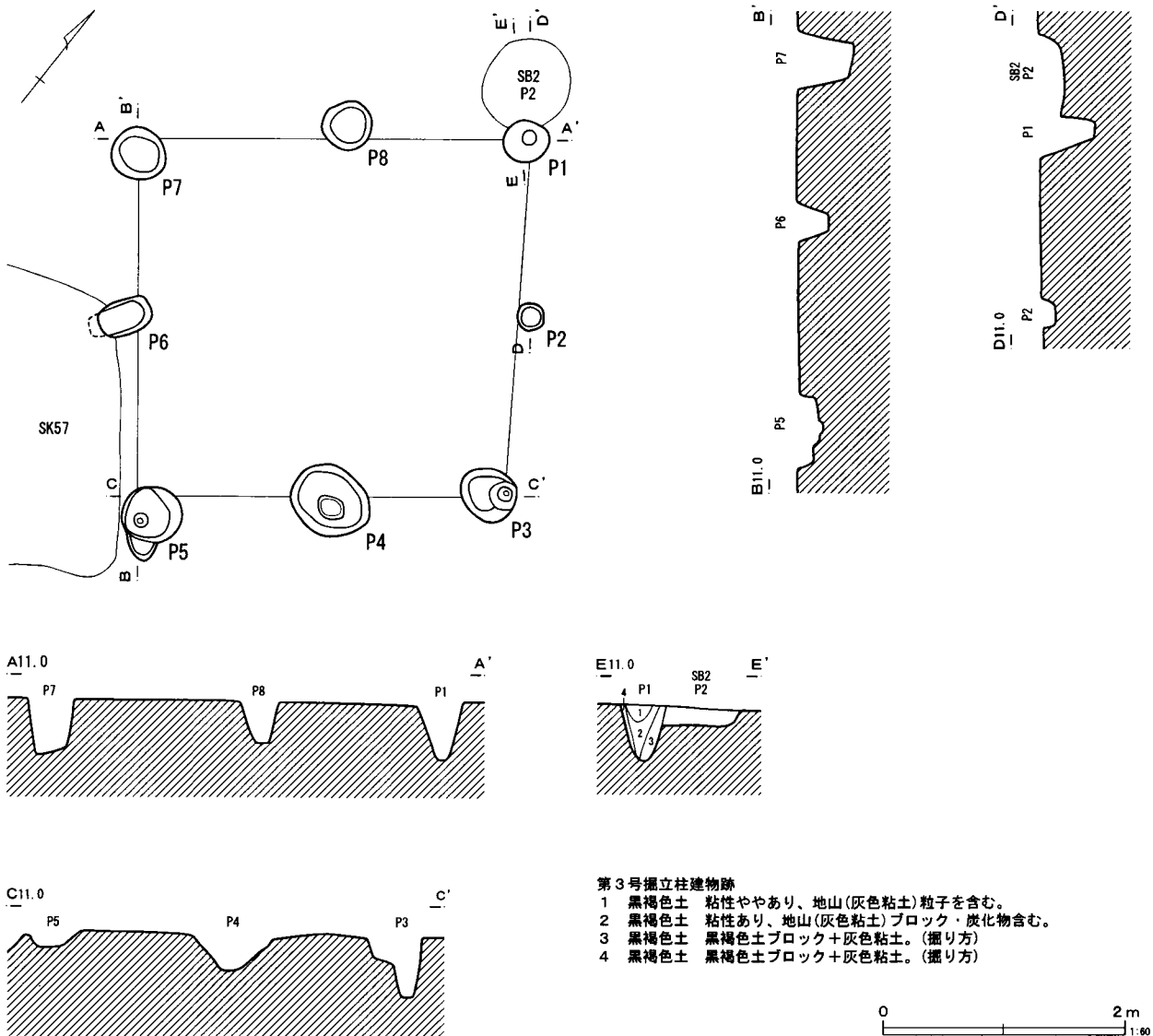
されており、第4号掘立柱建物跡は第13号溝跡より新しいため、関連はないと思われる。

形状は、桁行3間×梁行2間の側柱建物跡で、梁側のP9が、棟持柱風に張り出していたが、反対側では検出できなかった。

規模は、桁行4.70 m、梁行3.46 mであった。主軸方向はN-30°-Wであった。

各柱穴の規模は、以下のとおりである。

- P 1 長軸 0.84 m、短軸 0.72 m、深さ 0.30 m
- P 2 長軸 0.66 m、短軸 0.53 m、深さ 0.60 m
- P 3 長軸 0.53 m、短軸 0.53 m、深さ 0.44 m
- P 4 長軸 0.52 m、短軸 0.50 m、深さ 0.20 m



第17図 第3号掘立柱建物跡

3. 土壌

第1号土壌 (第19・20・34図)

C区D・E-1グリッドで検出した。第1号溝跡と重複し、第1号溝跡を壊していた。

遺構は、C区最西端の最も狭くなった部分で検出したため、南側と北側が調査区外へ延び、全体の形状が明らかにできなかった。

平面の形態は楕円形と考えられる。規模は、長軸は2.07 mまで確認できた。短軸2.10 m、深さ0.31 mであった。主軸方向はN-45°-Eであった。

底面は概ね平坦であったが、底面中央部に径50 cm、深さ10 cmの小穴が掘り込まれていた。また、第1号溝跡と重複している付近で、一段高いテラス状となっている部分を検出したが、重複と遺構外へ延びていたため、詳細を明らかにできなかった。

覆土は、炭化物・焼土粒子を多量に含む暗褐色土で、底面から浮いた状態で炭化物・焼土の集積層を検出した(3層)。遺物は、この3層の直上で出土した。出土遺物に二次焼成の痕跡は無かったが、第1号土壌は一旦埋没した後に火を受け、その後遺物が投げ込まれたものと思われる。出土遺物に完形土器はなく、殆どが破片の状態ですべてにわたって出土した。したがって、置かれたものである可能性

は低く、投げ込まれたものであると考えられる。

遺物は、壺・台付甕脚部・甕口縁部・S字甕口縁部・高坏・埴・鉢などが出土した。図示可能な遺物は16点であった。

他に小片のため図示できなかった遺物は、甕胴部片が160 g出土した。

1は壺の口縁部である。幅広だが、薄い複合口縁部となる。内面に弱い稜を有する。

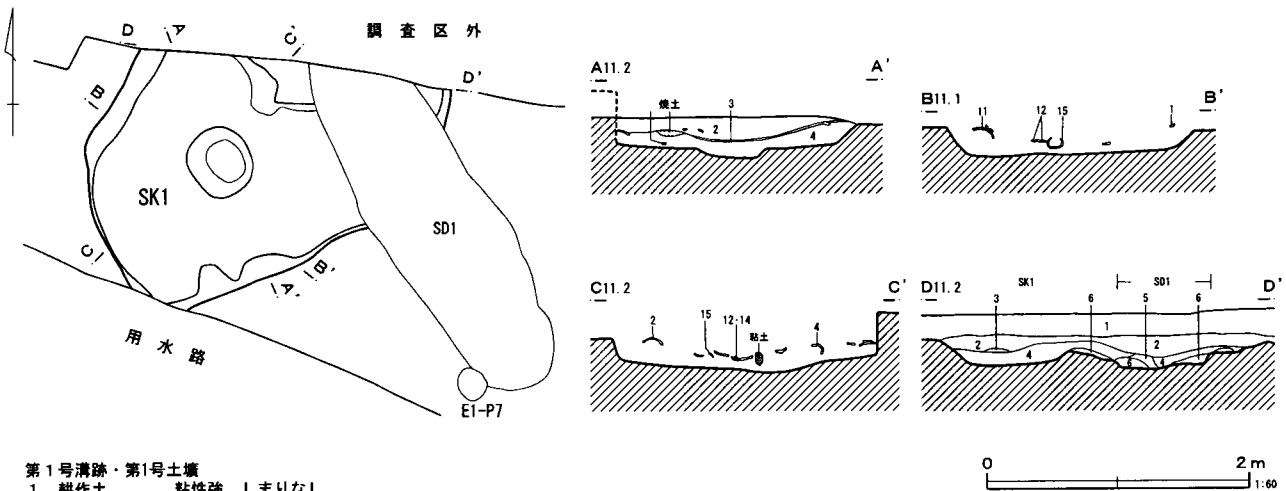
2~8は甕である。2~5は台付甕、6~8は底部または脚部を欠損していた。

2は小型の台付甕である。口縁部は短く直立気味に立ち上がる。

7・8は口縁部の屈曲が強い。胴部は、ハケ状の工具による強いナデが施される。

9・10はS字状口縁台付甕である。9は口縁部が大きく外反する。外面下段は、工具による強いヨコナデにより沈線状になっていた。10は口縁部が短く上方へ立ち上がる。内面頸部には、接合痕が明瞭に残っていた。2点とも胎土は在地のもので、模倣品と考えられる。

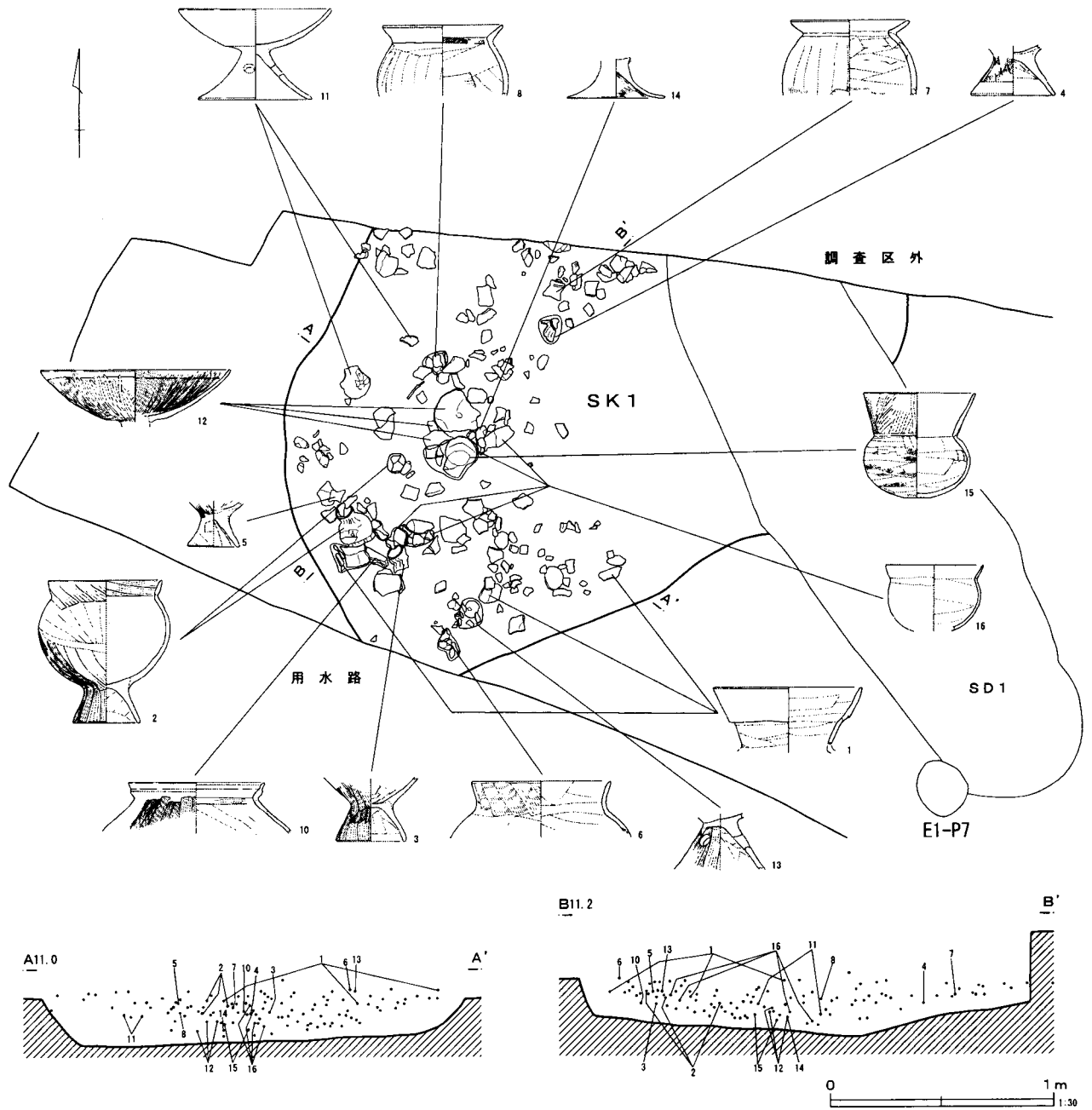
11~14は高坏である。全体の形態がわかるのは11のみであった。



第1号溝跡・第1号土壌

- | | | |
|---|--------|--|
| 1 | 耕作土 | 粘性強、しまりなし。 |
| 2 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、しまりあり、炭化・焼土粒子を多量含む、暗黄灰色粒子を含む。 |
| 3 | 暗黄灰色粘土 | 粘性ややあり、しまりあり、炭化物を多量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 粘性ややあり、しまりあり、地山土である暗黄褐色土を多量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | 粘性・しまりややあり、地山土である暗黄褐色土を多量含む、4層と6層の中間的様相。 |
| 6 | 黄褐色土 | 粘性・しまりややあり、地山土である暗黄褐色土を極めて多量含む。 |

第19図 土壌(1) 第1号土壌



第20図 第1号土壌遺物出土状況

11・12は坏部下端に弱い稜を有する。11は器面全体が風化し、調整は不明瞭であった。脚部は外反しながら広がり、透孔が3孔認められる。坏部とは、脚部を円柱状に作り接合している。12は、坏部のみ残存していた。内外面とも、細かいミガキが施され、赤彩されていた。接合部は円形の孔となり、脚部との接合は11と同じであったと考えられる。

13・14は脚部だけの破片である。13は裾部を欠損していた。14は低脚で、大きく外反する脚部を

有する。

15は罎である。丸底ではなく、径3 cmの小さな平底の底部がある。頸部は工具によるナデのため沈線状にくぼんでいる。口縁部は、ハケ→ミガキ、胴部はハケ→ナデ調整が施されている。

16は鉢である。球形の胴部で、短く内彎しながら立ち上がる。外面に赤彩痕が認められた。底部は欠損していたが、台付鉢となる可能性もある。

第2号土壌 (第21図)

C区E-1グリッドで検出した。第1号掘立柱建物跡の柱穴の延長線上で検出したが、柱痕跡が無いこと、覆土が異なることから別遺構とした。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.87 m、短軸0.64 m、深さ0.41 mであった。主軸方向はN-58°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第3号土壌 (第21図)

C区E-1・2グリッドで検出した。第3号溝跡に壊されていた。また、遺構の一部は調査区外へ延びていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.18 m、短軸0.58 m、深さ0.47 mであった。主軸方向はN-35°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第4号土壌 (第21図)

B区L-4グリッドで検出した。遺構は、第6号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.06 m、短軸0.81 m、深さ0.20 mであった。主軸方向はN-45°-Wであった。

覆土は、底面から浮いた状態で、薄い炭化物層を検出した。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第5号土壌

第3号井戸跡としたため、欠番。

第6号土壌 (第21・34図)

A区H-2・3グリッドにかけて検出した。第8号土壌、第9号溝跡を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.28 m、短軸0.74 m、深さ0.58 mであった。主軸方向はN

-43°-Eであった。

底面は平坦で、壁面は斜め上方に直線的に立ち上がる箱型の土壌であった。

遺物は、台付甕脚部が1点出土した。

17は台付甕の脚部である。やや小ぶりで、直線的に開く脚部を有する。接合部は臍による接合で、内面底部が残存していた。

このほか、小片のため掲載できなかったが、大廓式大型壺片・S字状口縁台付甕片が出土した。

第7号土壌 (第21・34図)

A区H-2グリッドで検出した。第3号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸2.45 m、短軸0.64 m、深さ0.22 mであった。主軸方向はN-32°-Eであった。

遺構底面は平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。

遺物は、底面から浮いた状態で壺・甕が出土した。掲載資料は4点であった。

18は壺の頸部である。口縁端部を欠損していた。

19・20は甕である。19は台付甕で、脚部は直線的に開く。裾部は幅広のヨコナデが認められる。

20は底部または脚部を欠損していた。ナデ肩で、胴部下位付近に最大径がある。器面は強いナデ調整である。

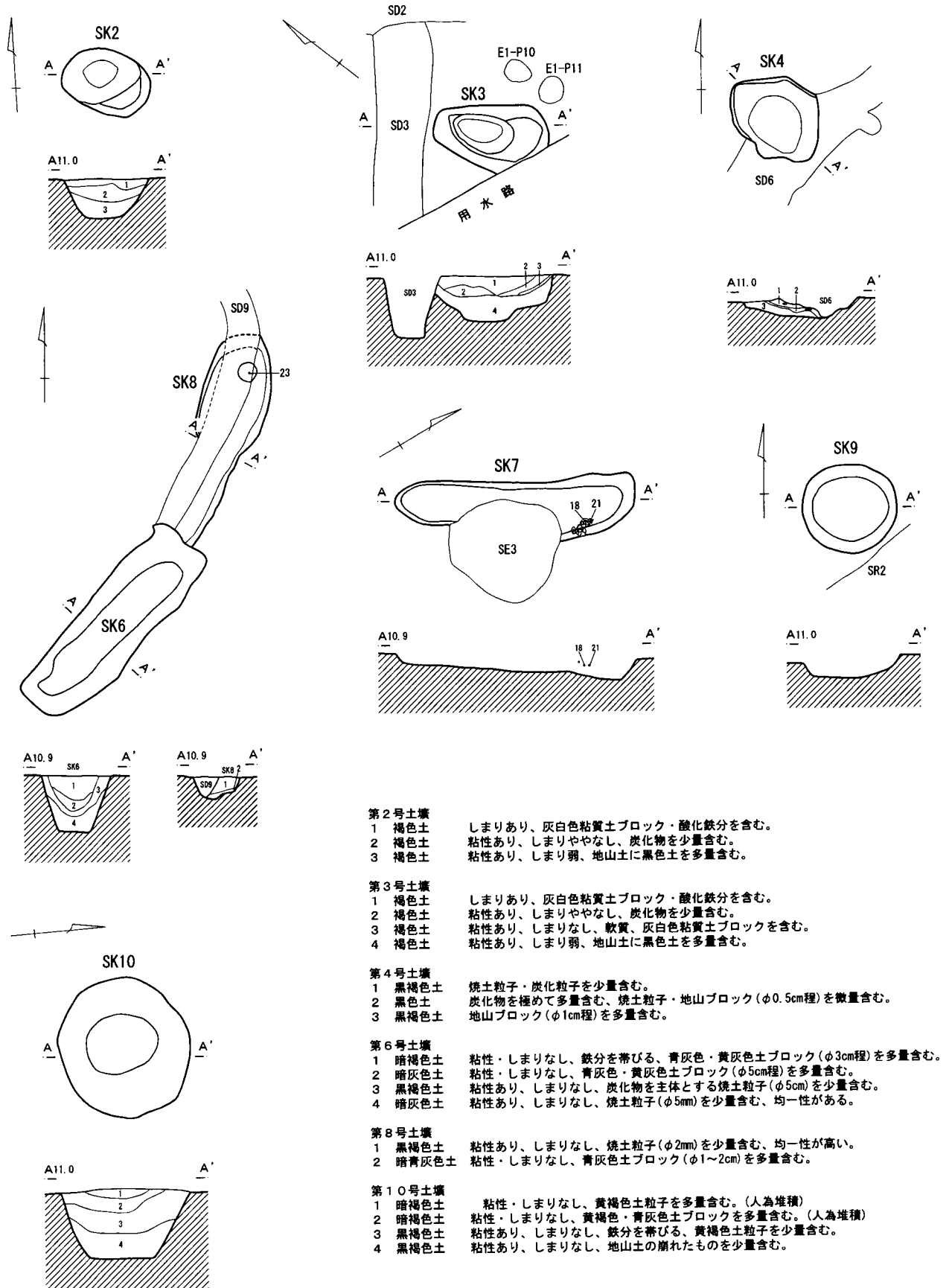
21はS字状口縁台付甕の脚部である。胎土は在地のものだが、丁寧に作られている。胴部内面天井部に砂粒の多い粘土を貼り付けている。

第8号土壌 (第21・34図)

A区H-2グリッドで検出した。第6号土壌、第9号溝跡に壊されていた。

平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸2.10 mまで確認できた。短軸は0.66 m、深さ0.22 mであった。主軸方向はN-25°-Eであった。

遺物は、高坏・片口鉢が出土した。掲載資料は2点である。



第2号土壌

- 1 褐色土 しまりあり、灰白色粘質土ブロック・酸化鉄分を含む。
- 2 褐色土 粘性あり、しまりややなし、炭化物を少量含む。
- 3 褐色土 粘性あり、しまり弱、地山土に黒色土を多量含む。

第3号土壌

- 1 褐色土 しまりあり、灰白色粘質土ブロック・酸化鉄分を含む。
- 2 褐色土 粘性あり、しまりややなし、炭化物を少量含む。
- 3 褐色土 粘性あり、しまりなし、軟質、灰白色粘質土ブロックを含む。
- 4 褐色土 粘性あり、しまり弱、地山土に黒色土を多量含む。

第4号土壌

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子を少量含む。
- 2 黒色土 炭化物を極めて多量含む、焼土粒子・地山ブロック(φ0.5cm程)を微量含む。
- 3 黒褐色土 地山ブロック(φ1cm程)を多量含む。

第6号土壌

- 1 暗褐色土 粘性・しまりなし、鉄分を帯びる、青灰色・黄灰色土ブロック(φ3cm程)を多量含む。
- 2 暗灰色土 粘性・しまりなし、青灰色・黄灰色土ブロック(φ5cm程)を多量含む。
- 3 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、炭化物を主体とする焼土粒子(φ5cm)を少量含む。
- 4 暗灰色土 粘性あり、しまりなし、焼土粒子(φ5mm)を少量含む、均一性がある。

第8号土壌

- 1 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、焼土粒子(φ2mm)を少量含む、均一性が高い。
- 2 暗青灰色土 粘性・しまりなし、青灰色土ブロック(φ1~2cm)を多量含む。

第10号土壌

- 1 暗褐色土 粘性・しまりなし、黄褐色土粒子を多量含む。(人為堆積)
- 2 暗褐色土 粘性・しまりなし、黄褐色・青灰色土ブロックを多量含む。(人為堆積)
- 3 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、鉄分を帯びる、黄褐色土粒子を少量含む。
- 4 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、地山土の崩れたものを少量含む。

第21図 土壌(2)

22は小ぶりの高坏の接合部の破片である。透孔は3孔確認できた。

23は片口鉢である。ほぼ完形である。底面から出土した。外面は風化によって調整が不明瞭であった。内面は縦方向のヘラミガキが施されていた。内面に朱・ベンガラ等の痕跡は認められなかった。

第9号土壌 (第21・35図)

A区H-3グリッドで検出した。第57号土壌に隣接して検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.98m、短軸0.91m、深さ0.21mであった。

遺物は、壺底部・台付甕脚部・鉢などが出土した。掲載可能な遺物は5点であった。

24は壺の底部、25～27は台付甕の脚部である。25は直線的に開く脚部を有する。接合部は、内面天井部に粘土を貼り付けている。26・27は小型の台付甕である。26は内湾気味に、27は外反気味に開く。2点とも胴部の臍による接合と考えられる。

28は鉢の口縁部破片である。口縁部に段を有する丸底鉢と考えられる。

第10号土壌 (第21・35図)

D区D-2・3グリッドで検出した。第3号周溝遺構と第20号溝跡の間で検出したが、重複関係は認められなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.42m、短軸1.32m、深さ0.71mであった。

覆土は、不均質な地山粒子・ブロックを多量に含み、人為的な埋戻しと考えられる。

遺物は、覆土中から台付甕・器台が出土した。掲載資料は3点である。

29・30は台付甕の脚部である。30は小型の台付甕と思われる。

31は器台の破片である。脚部には、透孔が接合部付近に3孔、裾部付近に1孔確認できた。上下2段に透孔が穿たれていたと思われる。天井部にも貫

通孔がある。

第11号土壌 (第22・35図)

A区H-2グリッドで検出した。第9号溝跡の内側で検出した。北側にH-2グリッドP1があり、第1号住居跡とも隣接していた。建物遺構に伴う柱穴の可能性もあったが、覆土に柱痕跡が認められなかったこと、グリッドピットとは形状が異なることから土壌と判断した。

平面の形状は方形で、規模は、長軸0.80m、短軸0.61m、深さ0.62mであった。主軸方向はN-38°-Eであった。

底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がっていた。

遺物は、壺の口縁部破片が1点出土した。

32は壺の口縁部破片である。大きく外反する。口縁端部内面は、強いナデにより沈線状に緩くくぼむ。内外面とも赤彩されていた。風化によるものか、極めて脆い。

第12号土壌 (第22図)

D区D-4グリッドで検出した。第14号溝跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸0.92m、短軸0.49m、深さ0.26mであった。主軸方向はN-75°-Eであった。

覆土の観察で、柱痕跡を検出したが、周囲に建物を構成する他の柱穴は検出できなかった。

遺物は出土しなかった。

第13号土壌 (第22・35図)

D区E-3・4グリッドで検出した。第19号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸は1.90mまで確認できた。短軸は1.39m、深さ0.22mであった。主軸方向はN-90°-Eであった。

遺物は、壺・台付甕・甕・高坏・器台・埴・鉢などが、底面からやや浮いた状態で出土した。掲載資

料は18点である。

なお、小片で掲載できなかった資料の中に、大廓式土器の壺の破片が4点(45g)出土した。

33～37は壺である。33は外反する口縁部で、短い折り返し口縁となる。

34は口径が27cmと大きく、口縁部が短く屈曲する広口壺である。口縁部は粘土帯が貼り付けられ、端部は面取り風のナデにより平坦となっている。

36・37は底部の破片である。36は輪台状、37は平底で、木葉痕が認められた。

38～43は台付甕である。

38は脚部～胴部にかけて残存していた。器面は強いナデ調整で、工具の痕跡が明瞭な部分もある。脚部は、接合部付近が幅広にヨコナデされていた。

39は口縁部～胴部の破片である。胴部は単位の狭い工具によるハケが施される。

40～43は台付甕の脚部である。43は外面はナデ調整である。

44・45は高坏の脚部の破片である。45は裾部に透孔が3孔認められた。

46は器台の脚部である。受部に貫通孔、脚部には透孔が3孔認められる。

47～49は小型壺・甗である。底部は丸底とはならず、やや上げ底風にくぼんでいた。49は口縁部・底部を欠損していた。

50は鉢の底部と考えられる。

第14号土壌(第22・36図)

D区E-4グリッドで検出した。第2号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸2.03m、短軸0.55m、深さ0.40mであった。主軸方向はN-62°-Eであった。

底面は平坦で、壁面の立ち上がりはほぼ垂直である。

遺物は、覆土上部から壺・台付甕・S字甕・高坏・器台・ミニチュア土器が出土した。掲載資料は13

点であった。

51～54は壺である。51は口径28.9cmの広口壺である。口縁部は厚めの粘土帯を貼り付け、端部は面取り風にナデている。内外面とも横方向にヘラミガキされている。

52は口縁の上部を欠くが、頸部が直線的に立ち上がり、有段の口縁部となると思われる。

53は口縁部と底部を欠損していた。54はやや長胴気味の胴部である。底部に木葉痕が認められた。

55～57は台付甕の脚部、58はS字状口縁台付甕の脚部である。55・57はやや内彎して、56は直線的に開く脚部となる。58は内面裾部端部を折り返している。

59は高坏の脚部、60は器台の受部である。60は灰白色の胎土で、水簸した粘土のように肉眼では混入粒子が殆ど見られず、赤色粒子(錆状)を含んでいる程度であった。

61は器台である。台付甕の脚部と器形・調整は変わらない粗製の器台である。内面は大きく貫通している。

62・63はミニチュア土器である。2点とも鉢形となると考えられるが、口縁部を欠損していた。

第15号土壌(第22図)

D区D・E-3グリッドで検出した。第3号周溝遺構、第45号溝跡を壊していた。

平面の形状は歪んだ楕円形で、規模は、長軸3.46m、短軸1.48m、深さ0.27mであった。主軸方向はN-25°-Eであった。

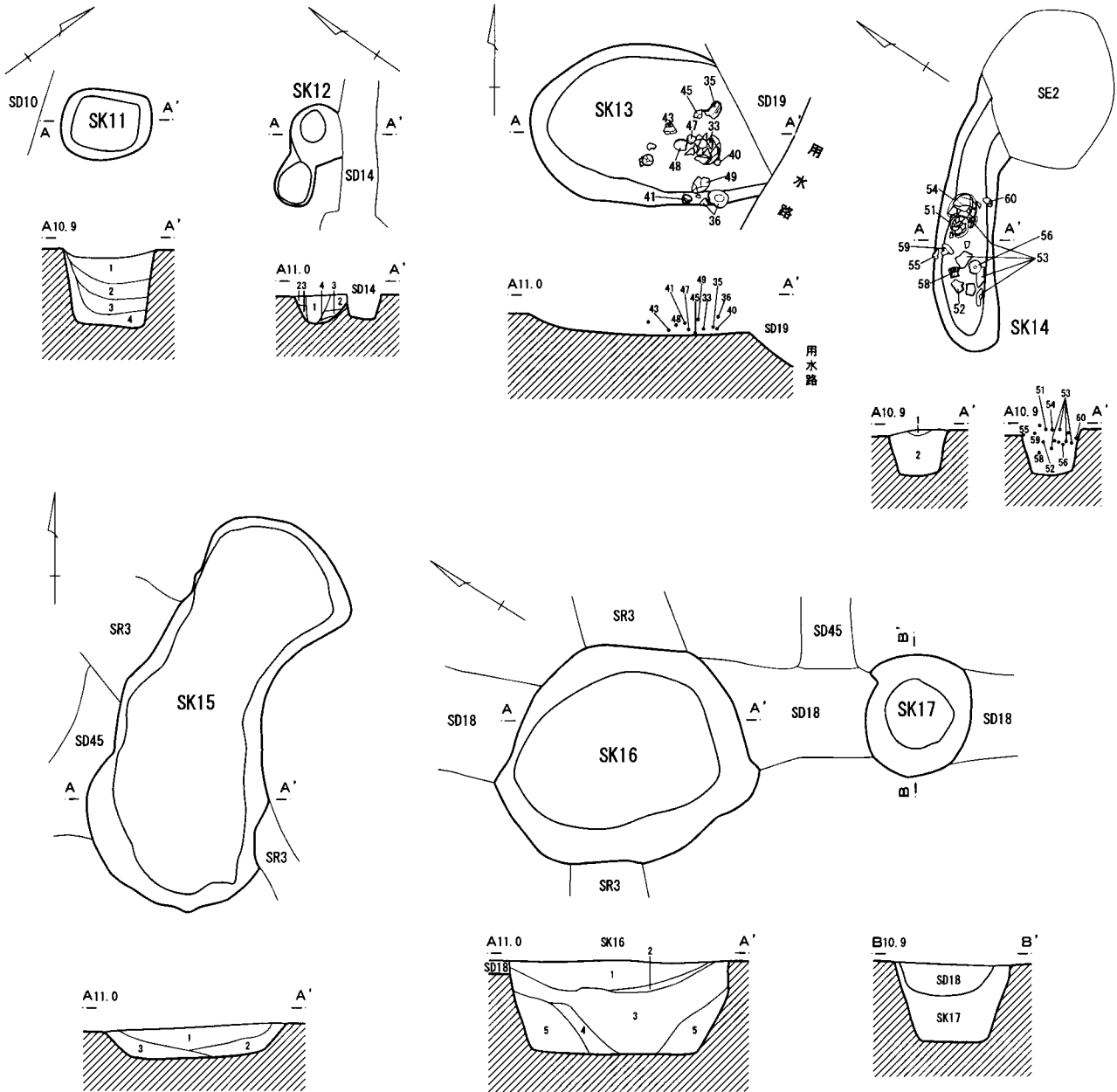
底面は平坦で、壁面はやや斜め上方に直線的に立ち上がる。

遺物は出土しなかった。

第16号土壌(第22図)

D区D-3グリッドで検出した。第3号周溝遺構、第18号溝跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.25m、



第11号土壌

- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、鉄分・黄褐色ブロック(φ5mm)を多量含む。
- 2 黒褐色土 粘性なし、しまりあり、青灰色土粒子(φ2mm)を少量含む。
- 3 黄褐色土 粘性なし、しまりあり、黒褐色土を少量含む。
- 4 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、均一性の高い層。

第12号土壌

- 1 黒褐色土 地山黄褐色土粒子含む、炭化物を少量含む。
- 2 黒褐色土 地山黄褐色土ブロック含む。
- 3 暗褐色土 しまり弱。
- 4 暗褐色土 粘性ややあり、地山黄褐色土粒子を多量含む。

第14号土壌

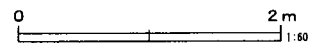
- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、青灰色土ブロックを多量含む。
- 2 黒褐色土 粘性なし、しまりあり、炭化・焼土粒子を多量含む。

第15号土壌

- 1 暗褐色土 粘性ややあり、地山黄褐色土ブロックを多量含む。
- 2 暗褐色土 粘性ややあり、地山黄褐色土ブロック・青灰色土ブロックを多量含む。
- 3 黒褐色土 粘性あり、鉄分を含む、地山黄褐色土粒子を多量含む。

第16号土壌

- 1 黒褐色土 粘性ややあり、灰白粘土ブロックを多量含む、炭化物・酸化鉄分を含む。(埋め戻し)
- 2 黒色土 粘性ややあり、炭化物を多量含む。(埋め戻し)
- 3 暗灰色土 粘性あり、灰白色粘土ブロック・炭化物・酸化鉄分を含む。(埋め戻し)
- 4 暗灰色土 粘性あり、炭化物を微量含む。
- 5 暗灰色土 粘性あり、炭化物・酸化鉄分を含む。



第22図 土壌(3)

短軸 1.88 m、深さ 0.79 mであった。主軸方向はN-30°-Wであった。

底面は平坦で、壁面は、概ね垂直に立ち上がっていた。

覆土は、均質でない灰白色粘土ブロックを多量に含む黒褐色土で埋め戻されていた。

遺物は出土しなかった。

第17号土壙 (第22図)

D区D-3グリッドで検出した。第18号溝跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸 1.06 m、短軸 0.90 m、深さ 0.66 mであった。

底面は平坦で、壁面はやや斜め上方へ直線的に立ち上がっていた。

遺物は出土しなかった。

第18号土壙 (第23図)

D区D-2グリッドで検出した。第20号溝跡に壊されていた。

平面の形状は方形であったと考えられる。規模は、長軸 3.05 m、短軸は 1.34 mが残存していた。深さは 0.70 mであった。

底面は平坦であるが、西側の壁面寄りには地山が掘り残され、一段高く盛り上がる部分があったが、第20号溝跡に壊され、詳細は明らかにできなかった。壁面は、概ね垂直に近い角度で、直線的に立ち上がっていた。

主軸方向はN-75°-Eであった。

遺物は、土師器片が数点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第19号土壙 (第23図)

D区D-2・3グリッドで検出した。第18号溝跡を壊し、第20号溝跡に壊されていた。

遺構西側は、D区の谷によって失われていた。また、第18号土壙と接するように検出した。

平面の形状は楕円形もしくは方形と考えられるが、大半を谷と他の遺構に壊され、全体の形状は明らかにできなかった。規模は、長軸が 1.70 m、短軸が 0.82 m残存していた。深さは 0.50 mであった。主軸方向はN-65°-Eであった。

底面は平坦だが、南東コーナー部は地山が掘り残され、一段高くなっていた。

遺物は出土しなかった。

第20号土壙 (第23図)

D区D・E-2グリッドで検出した。第19・20・44号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸 2.69 m、短軸 1.70 m、深さ 0.37 mであった。主軸方向はN-60°-Eであった。

遺物は、覆土2層中から土師器片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第21号土壙 (第23・36図)

B区G-3グリッドで検出した。第22号土壙と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸 1.35 m、短軸 0.46 m、深さ 0.48 mであった。主軸方向はN-45°-Eであった。

底面は平坦で、壁面は概ね垂直に立ち上がる。

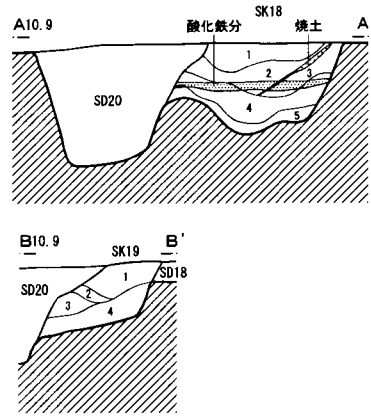
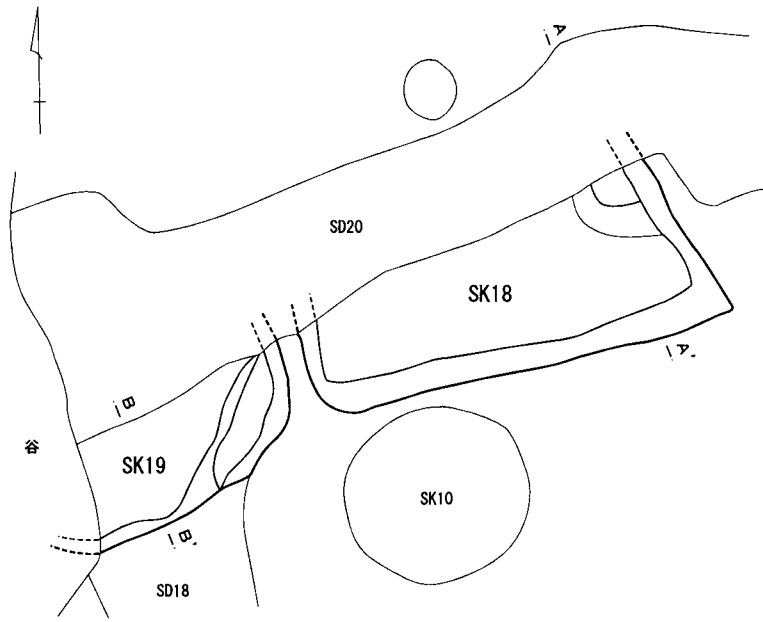
遺物は、覆土中から甕・台付甕が出土した。掲載可能遺物は2点であった。

64・65は台付甕である。64は脚部を、65は胴部を欠損しているが、同一個体ではない。2点とも、胴部の調整はヘラナデである。64の口縁部はハケ→ヨコナデであった。

第22号土壙 (第23・36図)

B区G-3グリッドで検出した。第21号土壙と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長い楕円形と考えられるが、長軸の北側が調査区外へ延びていたため、全体の形状は明

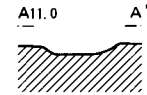
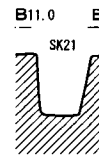
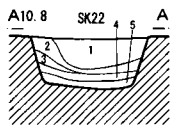
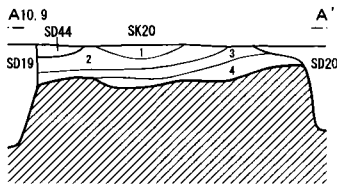
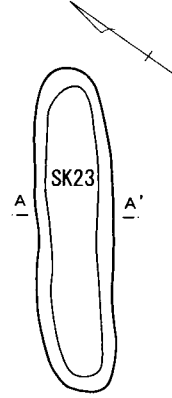
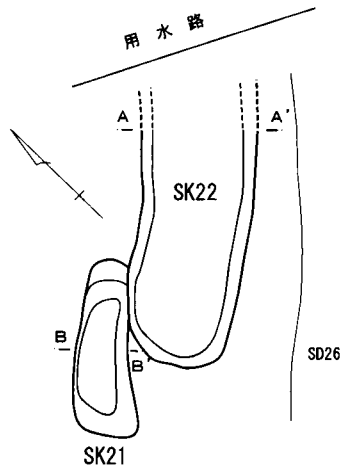
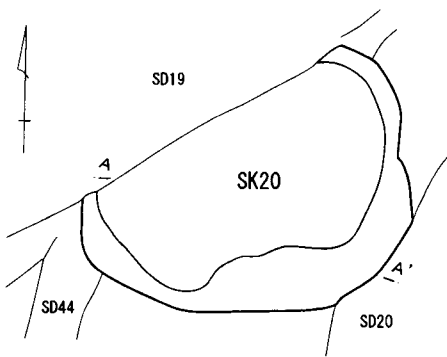


第18号土壤

- 1 黒褐色土 灰白色土ブロック粒子・焼土粒子を多量含む。
- 2 黒褐色土 炭化物・焼土ブロックを多量含む。
- 3 暗灰色土 粘性あり、焼土粒子・灰白色土粒子を多量含む。
- 4 暗灰色土 粘性あり、炭化物・灰白色土ブロックを含む。
- 5 黒色土 粘性あり、灰白色土ブロックを多量含む。

第19号土壤

- 1 黒褐色土 地山黄褐色土粒子を多量含む、酸化鉄分を含む。
- 2 暗灰色土 粘性ややあり、酸化物を微量含む。
- 3 黄褐色土 地山黄褐色ブロック・黒褐色土・炭化物を少量含む。
- 4 黒褐色土 粘性ややあり。



第20号土壤

- 1 黒褐色土 土器小片を含む、やや明るい色。
- 2 暗褐色土 粘性強、白色ブロック(φ2~3cm)・地山土ブロックを少量含む、土器片やや大きめの物含む。
- 3 明灰白色土 粘性強、ほぼ全体が粘土より構成され黒褐色土・地山土を部分的にブロック状に含む。
- 4 暗褐色土 黒褐色土に白色粘土を少量含む、酸化鉄分をまだらに含む。

第22号土壤

- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、焼土粒子・青灰色土ブロックを多量含む。
- 2 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、炭化粒子・焼土粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、焼土粒子を少量含む。
- 4 暗褐色土 粘性あり、しまりなし、黄褐色土ブロックを多量含む、焼土粒子を少量含む。
- 5 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、焼土粒子を多量含む。



第23図 土壤(4)

らかにできなかった。

規模は、長軸は1.70 mが残存していた。短軸は0.88 m、深さ0.38 mであった。主軸方向はN-46°-Eであった。

底面は平坦で、壁面の立ち上がりは、やや斜め上方に直線的に立ち上がっていた。

遺物は、覆土中から台付甕脚部が1点出土した。

第23号土壌 (第23図)

B区F・G-4グリッドで検出した。第5号周溝の内側で検出したが、周溝遺構との関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸2.45 m、短軸0.60 m、深さ0.07 mであった。主軸方向はN-53°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第24号土壌 (第24・25・36・37図)

B区F-5グリッドで検出した。第22号溝跡に壊されていた。第19号溝跡とも重複していたと考えられるが、両遺構とも第22号溝によって壊されており、新旧関係は明らかにできなかった。

また、遺構西側は調査区外へ延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形であったと考えられる。長軸2.90 m、短軸は1.37 mが残存していた。深さは0.49 mであった。主軸方向はN-21°-Eであった。

底面は平坦で、壁面はやや内彎しながら立ち上がっていた。

遺物は、台付甕・埴・鉢などが、底面から浮いた状態で出土した。

67~70は甕である。67は小型の台付甕である。口縁部は、くの字に屈曲し、外反しながら立ち上がる。

脚部との接合部および脚部裾は、幅広のヨコナデによってハケが消される。外面胴部上半と、内面口縁部・底部に煤が認められる。68は口縁部の屈曲が強いが、立ち上がりが直線的になる。外面はやや

内湾気味に見えるが、内面は強いヨコナデによって直線的な立ち上がりとなっている。胴部は細かいハケ調整で、全体的に器肉は薄い。69は67とほぼ同じ法量の台付甕と思われるが、全体的にナデ調整となっている。

70は口縁部~底部まで残存していた平底甕である。接合時の接点が少なく復元の部分が多いが、同一個体である。口縁部は、くの字に大きく外傾し、肩は張らない寸胴となる。内外面とも風化によって調整が不明瞭だが、外面には細かいハケ目が施されていた。

71は口径23.1 cm、器高25.3 cmの大型の埴である。胴部の一部を欠損していた以外は概ね完形であった。底部は平底となる。風化していたが、丁寧なミガキが施され、胴部内面以外底部まで全面赤彩されていた。

72は鉢である。やや下膨れの胴部に、屈曲の強い大きく外反する口縁部を有する。口縁端部はつまみ上げられる。表面が風化していたが、胴部はヘラミガキ、口縁部はヨコナデされていた。底部は丸底でなく、上げ底風に中央部が凹んでいた。外面全面と内面口縁部に赤彩されていた。このタイプの鉢は、白井沼遺跡では、破片も含め本資料1点のみである。

第25号土壌 (第24・25・37図)

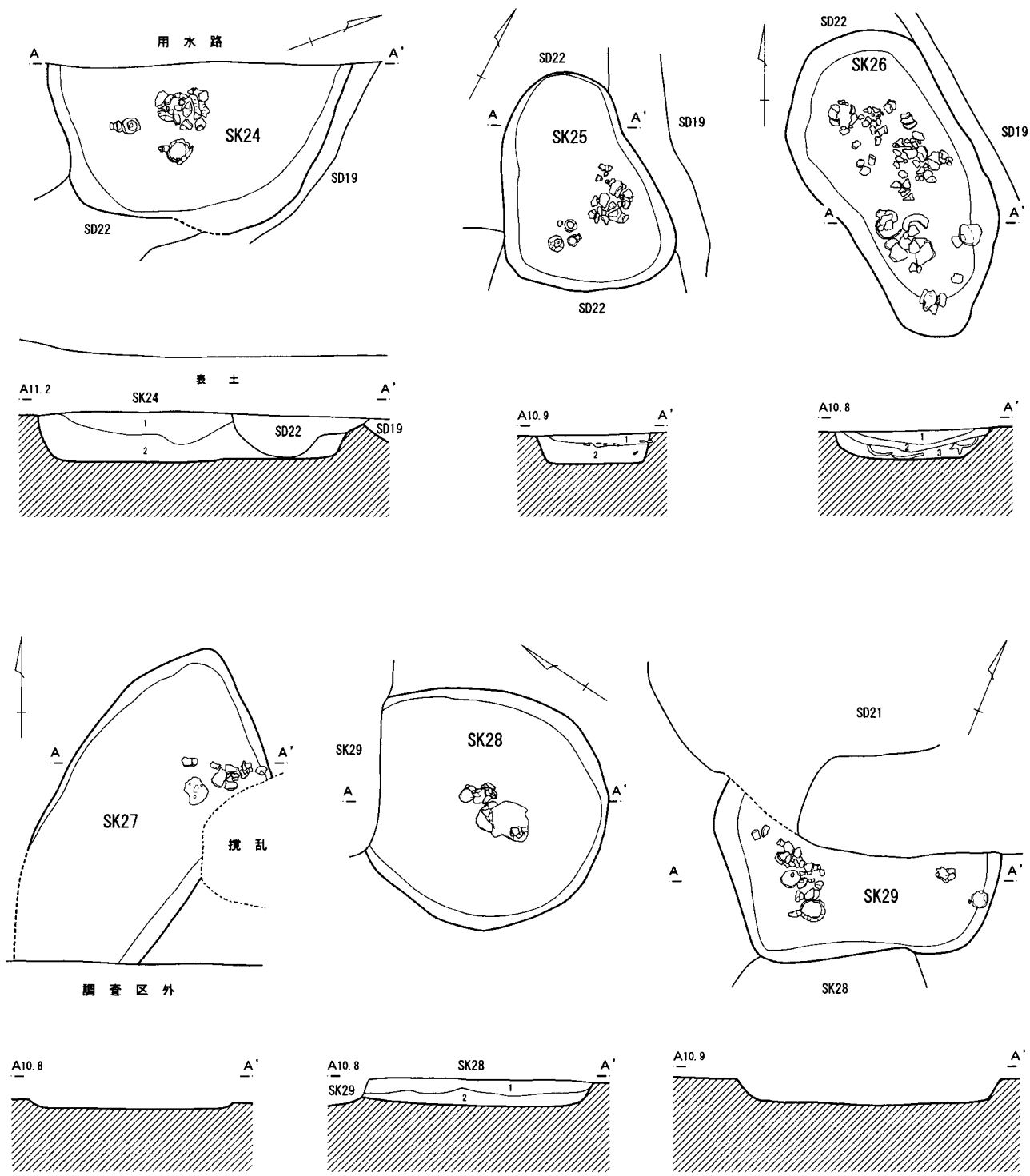
B区F-5グリッドで検出した。第22号溝跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.11 m、短軸1.59 m、深さ0.28 mであった。主軸方向はN-36°-Wであった。

底面は平坦で、壁面は直線的に外傾しながら立ち上がっていた。

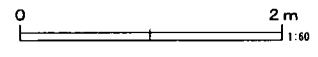
遺物は、覆土1層と2層の境界付近から、壺・甕・台付甕・高坏・器台・鉢・椀などが破片となって出土した。掲載した遺物は25点であった。

小片のため図示できなかった遺物は、甕口縁部片1点・10 g、甕胴部片28 g、小型品(器種不明)



- 第24号土壌
 1 黒褐色土 粘性ややあり、炭化物を少量含む。
 2 灰白色土 粘性ややあり、黒褐色土ブロック・酸化鉄分を多量含む。
- 第25号土壌
 1 暗褐色土 粘性・しまりなし、炭化粒子・焼土粒子を多量含む。
 2 黒灰色土 粘性なし、しまりあり、黄褐色土粒子を少量含む。

- 第26号土壌
 1 黒褐色土 地山灰白色土ブロックを少量含む、土器片を含む。
 2 暗褐色土 粘性ややあり、地山灰白色粒子・土器片を多量含む。
 3 黒色土 粘性・しまりなし、出土土器直上に炭化物を多く含む。
- 第28号土壌
 1 黒褐色土 粘性な、しまりあり、炭化・焼土粒子を少量含む。
 2 暗青灰色土 粘性なし、青灰色土ブロック・炭化粒子を含む。



第24図 土壌 (5)

11点・410gであった。また、大廓式土器の大型壺片が2点(70g)出土した。

73～78は壺である。

73は大きくラッパ状に外反する口縁部で、外面端部に粘土帯を貼り付けている。胎土は浅黄橙色で、軽石状の粒子を多量に含む。大廓式の大型壺と同じ胎土であることから、駿河地方から直接搬入された壺と考えられる。

74は単純口縁の壺で、外面にハケを残している。

75～77は壺の底部である。75・76は輪台状、77は平底となる。

78は肩部以上を欠き、やや上げ底風である。風化が著しい。

79～90は甕である。概ね台付甕と考えられる。83は口縁部が直立気味で、第20号溝跡から類似する器形の平底甕が出土しているため、平底甕の可能性もある。85・86は口縁部と脚部を欠損するが、長胴の台付甕である。

第25号土壙出土の甕は、83～85以外は胴部をナデによって調整されている。

91・92・94は高坏である。91は接合部の破片である。92は坏部のみ出土した。椀形の坏部で、内外面ともやや荒いヘラミガキが施され、内外面とも赤彩される。脚部との接合部分の径が小さいことから、柱状脚の高坏となる可能性もある。

94は高坏の脚部の破片である。中実の柱状脚である。

93は器台の脚部である。受部を欠損していたが、貫通孔の存在により、器台であると考えられる。透孔は穿たれていない。

95～97は鉢である。95は底部が小型壺と同じ輪台状で、胴部上半の括れが無く、口縁部は外傾しながら立ち上がっている。96はやや小ぶりだが、平底となる。97は底部を欠損していた。胎土には混入粒子を殆ど含まず、水簸したような粘土である。溶けたように風化し、表面の観察が困難である。

第24・25号土壙、第22号溝跡出土遺物(第38図)

第24・25号土壙、第22号溝跡調査中、覆土上層で一括して取り上げた遺物で、遺構の帰属が明らかにできなかった遺物が出土した。

遺物には、壺・甕・台付甕・高坏・ミニチュア土器などがある。図示可能な遺物は20点であった。

また、掲載できなかったが、大廓式の大型壺の破片が1点出土した。

98～103は壺である。いずれも風化が著しく、調整の観察は困難であった。

100は水簸したような胎土で、表面が溶けたように風化していたが、肩部にヘラミガキ、外面と口縁部内面に赤彩が認められた。

104～109は甕である。104・105は口縁部の破片である。106は長胴で、ハケ→ナデ調整となっている。107～109は脚部である。

110～113は高坏である。110は椀形の坏部のみが出土した。111～113は脚部で、111・112は接合部付近が細く、外反しながら広がる脚部である。112は水簸した粘土が使用されていた。透孔は認められない。113は中実の柱状脚となる。

114～117はミニチュア土器である。114～116は壺形、117は鉢形となる。4点とも水簸したような胎土で、溶けたように風化しており、表面の観察が困難であった。

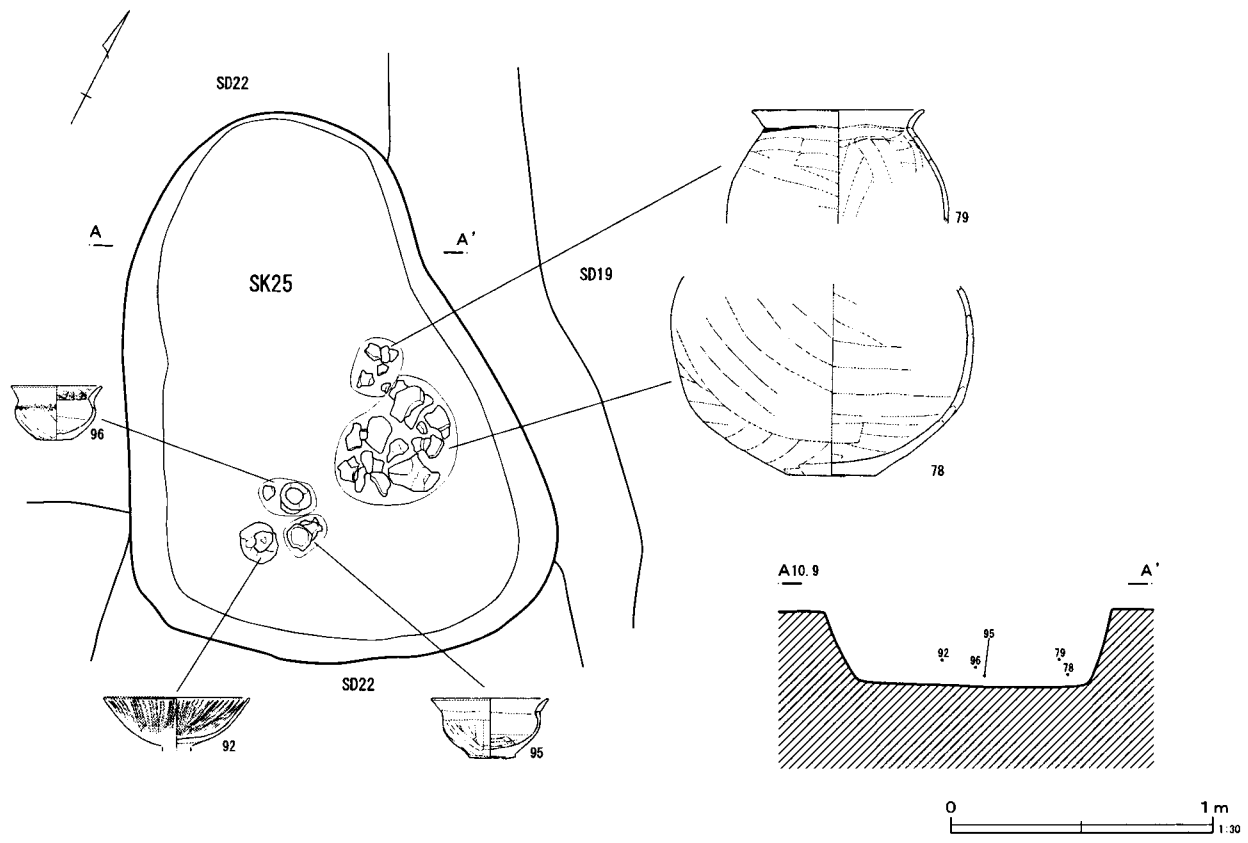
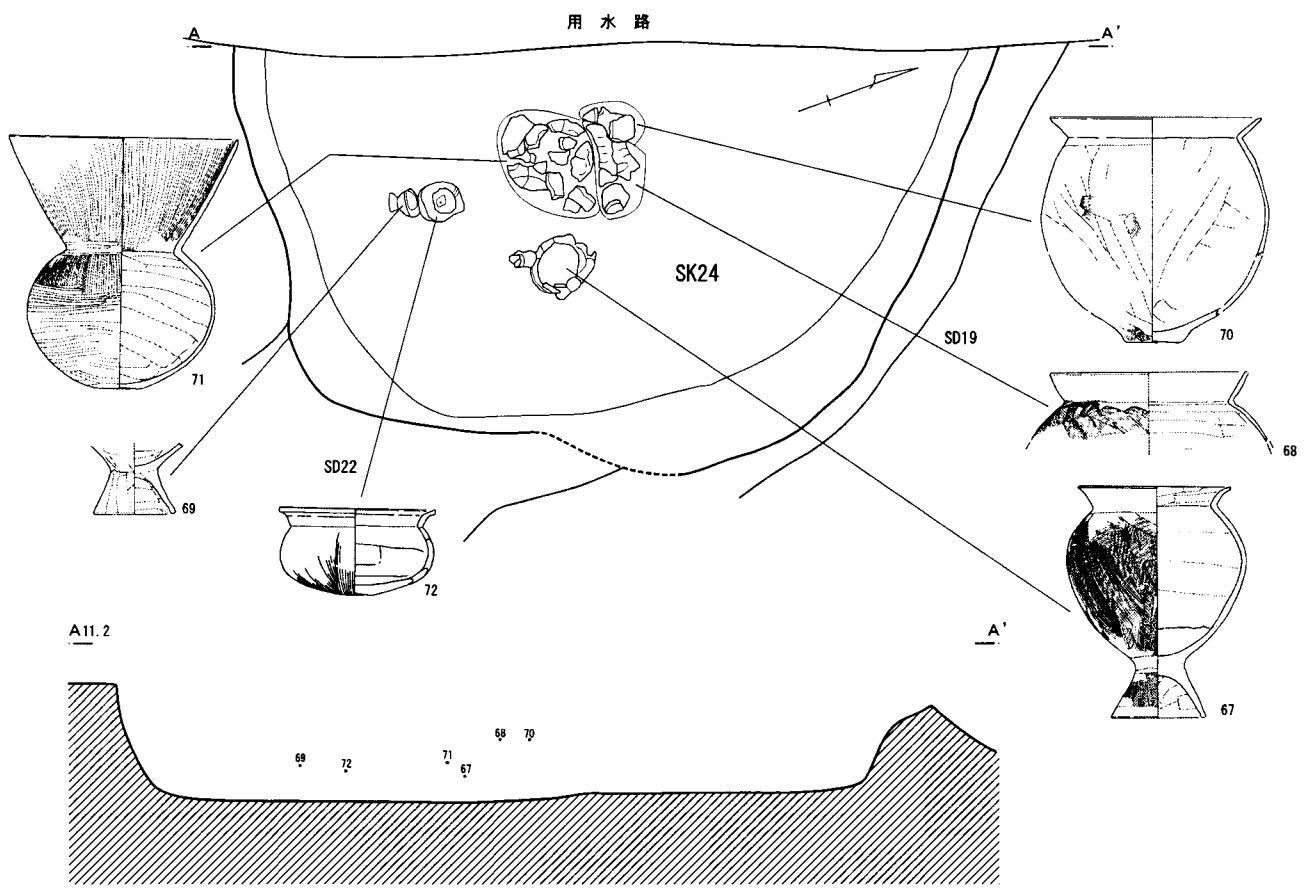
第26号土壙(第24・26・39・40図)

B区F-5・6グリッドで検出した。第22号溝跡を壊していた。

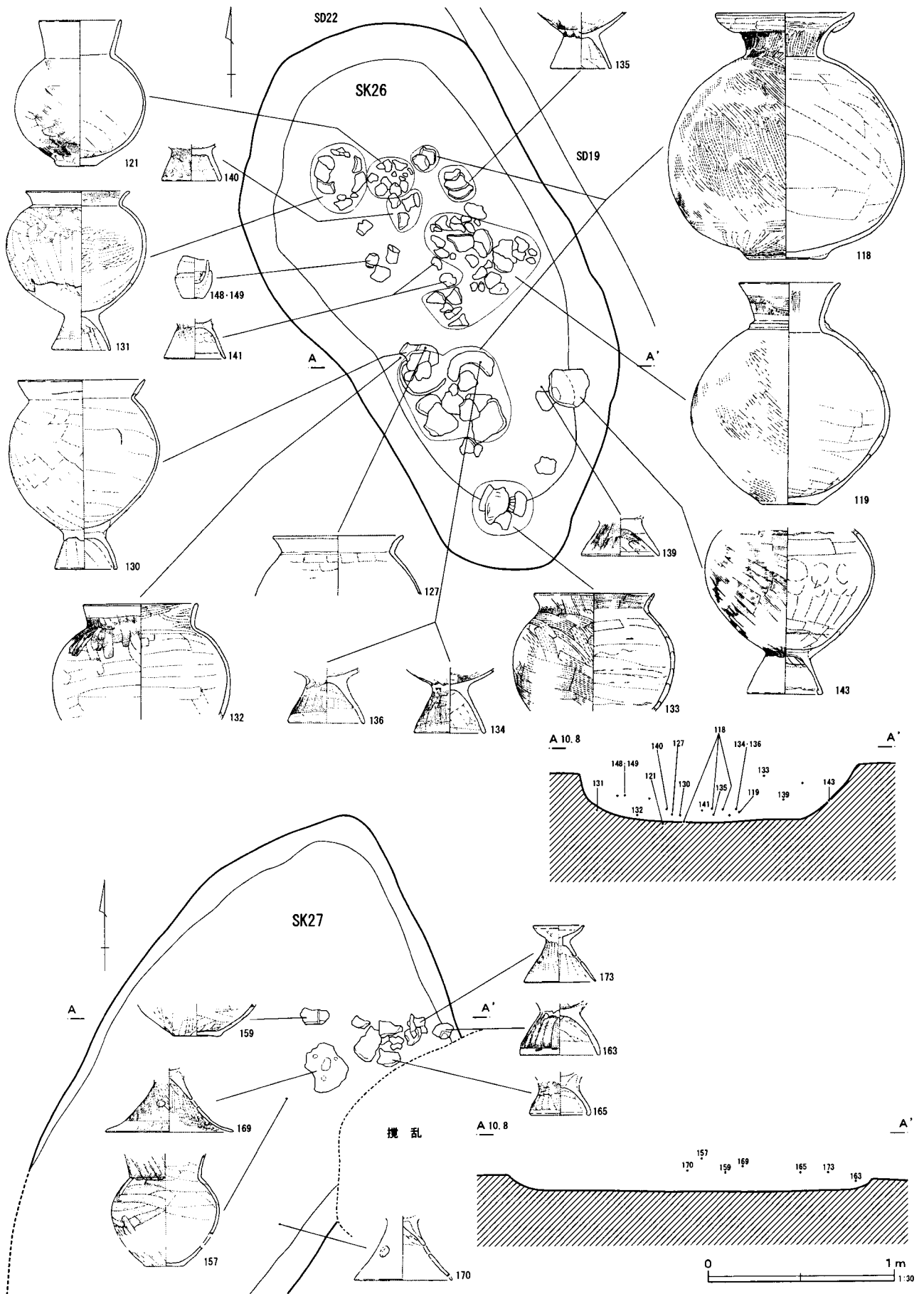
平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.97m、短軸1.57m、深さ0.28mであった。主軸方向はN-31°-Wであった。

覆土は、地山の灰白色土ブロックを含む黒褐色土または暗褐色土で、遺物は覆土2・3層から出土した。また、3層中では出土遺物の直上に炭層を検出したが、断続的で、焼土は検出できなかった。

出土遺物は、壺・甕・台付甕・S字状口縁台付甕・



第25图 第24·25号土坑遺物出土状况



第26图 第26·27号土坑遺物出土状况

鉢・ミニチュア土器などがある。掲載資料は34点であった。また、掲載できなかつたが、大廓式土器の大型壺の破片が2点出土した。

118～126は壺である。

118はほぼ完形である。口縁部は大きく外反し、内面端部はやや内傾する。外面口縁部下端に、幅広の粘土帯を貼り付け、複合口縁としている。肩部はややナデ肩で、胴部は最大径が胴部下位にある下膨れとなっている。底部は輪台状で、外面胴部下位には火樨痕が認められる。外面全面と内面口縁部が赤彩されていた。

119は頸部に断面三角形の凸帯が巡る。単純口縁で、外反は小さい。

120・121は単純口縁となる。外傾せずに直線的に上方へ立ち上がる。

122は口縁端部を欠損していた。胴部上半は球形となるが、下半部は鉢形となり、底部からの立ち上がりは直線的となる。境界付近でヘラミガキの方向が変わっている。

123は底部から胴部にかけて残存していた。底部には木葉痕が認められた。

124は口縁部の破片である。外面口縁部下端に断面三角形の粘土帯を貼り付け、外面の段を表現している。

127～140は甕である。127～129は口縁部の破片である。全体的に風化し、調整が不明瞭であった。

130はほぼ完形の台付甕である。全体的に風化が著しく、調整が不明瞭であったが、胴部はハケが施される。脚部との接合部に粘土帯を巻き付けている。脚部は内湾しながら開き、内面端部に断面三角形の粘土帯を貼り付けている。東海東部系の台付甕に類例があるが、胎土は在地のものである。

131はやや小ぶりの台付甕である。球形の胴部で風化が著しいが、外面はハケ調整である。

132・133は胴部下半以下を欠損していた。132は口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部ナデの後、肩部には細かいハケが施される。平底甕の可能性もある。

る。

141～143はS字状口縁台付甕である。141・142は脚部のみ、143は胴部以下が残存していた。

142は脚部はやや厚めの折り返しで、接合部の天井部と底部に粘土を貼り付けるが、細かい砂粒の混入は無かった。外面胴部の調整はハケ目であるが、綺麗な羽状にはならず、横方向と斜め方向のハケが施されていた。

144・145は小型壺である。144は口縁部から胴部の破片である。水簸したような粘土で、溶けたように風化していた。

145は口縁部のみ残存していた。口縁部は受け口状となり、頸部内外面ともにハケが残る。内外面の端部はヨコナデされる。

146・147は鉢である。146は底部が丸底となる。水簸したような粘土で、溶けたように風化しているが、底部にヘラミガキが施されていた。

147は丸底で、口縁部は外反せずにそのまま立ち上がる椀形の鉢である。口縁部はヨコナデ、直下にはハケが残り、下半部はヘラミガキされている。

148～152はミニチュア土器である。148・149は2個のミニチュア土器が入れ子状に出土したが、分離できなかつた。150・152の底部は輪台状であった。151には赤彩が認められる。5点のミニチュアは、いずれも胎土が同一で、細かい砂粒・白色粒子（長石）を多量に含んでいた。

第27号土壌（第24・26・41図）

B区F-5・6グリッドで検出した。第22号溝跡を壊していた。東側の一部を後世の攪乱に壊され、南側は調査区外へ延びていた。

平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸は3.20mが残存し、短軸は1.63m、深さ0.08mであった。主軸方向はN-39°-Eであった。

底面は平坦で、遺物は底面から浮いた状態で出土した。

遺物は、壺・甕・台付甕・高坏・器台などがある。

図示可能な遺物は21点であった。

なお、小片のため、掲載できなかったが、大廓式土器の大型壺が2点(155g)出土した。

153～160は壺である。153～154は口縁部、156以下は胴部～底部にかけて残存していた。153は有段口縁、154も有段口縁と思われるが、口縁部の接合に別の粘土を付加している。155は口縁端部に薄く細い粘土帯を貼り付けている。157はハケメを残す壺である。158・160は底部が輪台状となる。

161～165は甕である。161・162は口縁部、163～165は台付甕の脚部のみ残存していた。165は小型の台付甕と考えられる。

166～172は高坏である。口縁部～脚部まで残存していたのは166のみである。

166・168は稜のない、椀状となる高坏である。

167は小さな底部に弱い稜を有し、やや内湾気味に立ち上がる。口縁部を欠損していたが、深身の高坏である。風化が著しく、調整が不明瞭であったが、ヘラミガキの痕跡が認められた。胎土は、石英・白色のパミスを多量に含み、大廓式の大型壺と同じであったことから、駿河地方からの搬入品と考えられる。

173は器台である。受部はやや受け口状となる。外面が赤彩されていた。

第26・27号土壌出土遺物(第42図)

第26・27号土壌調査中、覆土上層付近で一括して取り上げた遺物で、帰属が明らかにできなかった遺物が出土した。

遺物は、台付甕・高坏・器台などがある。掲載資料は4点であった。

174は台付甕の脚部である。小型の台付甕と思われる。175は高坏である。完形に復元できるが、風化が著しく、外面の一部は剥落していた。坏部は椀形で深身である。脚部は大きく裾が広がる。

176は小型の高坏である。坏部のみ残存していた。内外面とも赤彩されていた。

177は器台である。受部は浅く外傾する。脚部の透孔は3孔認められる。

第28号土壌(第24・27・42・43図)

B区G-5グリッドで検出した。第29号土壌に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.20mが残存し、短軸は2.30m、深さ0.25mであった。主軸方向はN-31°-Wであった。

底面の形状は平坦で、壁面は直線的に立ち上がっていた。

遺物は、覆土上層から、壺・甕・台付甕・甑・高坏・器台・埴・埴・ミニチュア土器などが多量に出土した。

掲載遺物は39点であった。

この他に、小片のため図示できなかった遺物は以下のとおりである。

また、大廓式の壺の破片が10点出土した。

甕口縁部片97点(1588g)

甕脚部片52点(1123g)

甕胴部片4446g

壺口縁部片48点(950g)

壺底部片48点(490g)

壺胴部片4510g

高坏8点(100g)

器種不明小型品77点(830g)

器台4点(20g)

高坏6点(35g)

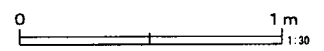
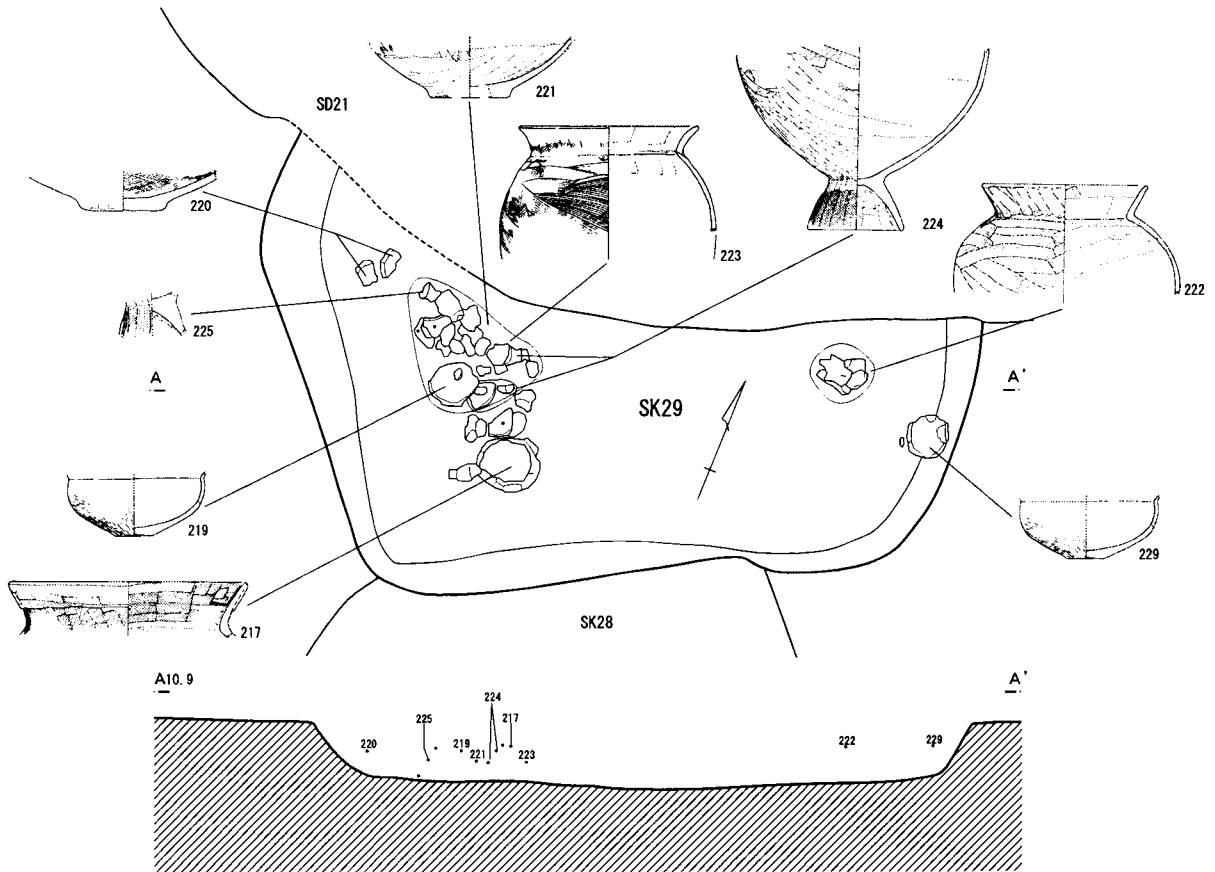
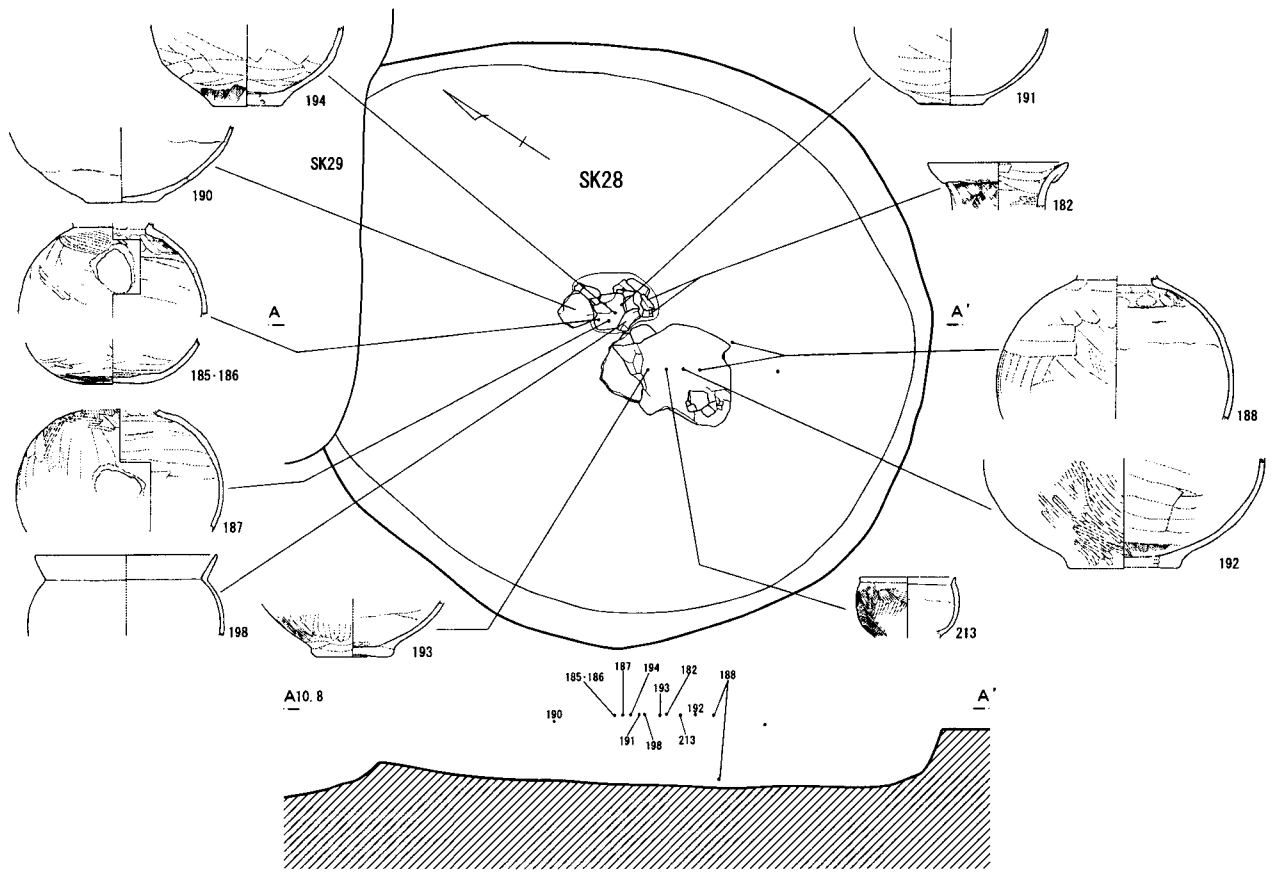
水簸粘土小型品37点(365g)

器種不明水簸粘土製品680g

大廓式壺片10点(100g)

これらの非掲載資料には小片が多いが、特に口縁部、底部片は、掲載資料とは別個体と考えられる。口縁部あるいは、底部・脚部の破片数は、個体数に近いものと考えられる。

178～195は壺である。178は有段口縁となるが、外面は口縁部下端に断面三角形の粘土帯を貼り付け、



第27图 第28·29号土坑遺物出土状况

段を表現している。頸部にはハケが残される。181は頸部に凸帯を巡らす。182～184は折り返し口縁となる。いずれも頸部にハケが残る。

185～189は胴部が残存している。185・186は同一個体と考えられる。185・187の胴部には、焼成後に外面側から穿たれた孔が存在する。

196～204は甕である。

196は台付甕である。長胴で、口縁部は屈曲が弱い。脚部との接合は、胴部の臍によって接合している。風化が著しいが、外面は細かいハケが施される。胎土は、微細な砂粒・白色粒子（長石）を多量に含む。

197は、196と同じ胎土の平底甕である。口縁部の屈曲は弱い。風化が著しいが、ハケの痕跡が認められた。199は口縁部がくの字に屈曲する。内面口縁端部は、強いナデにより沈線状に緩くくぼんでいる。

205は単孔の甑の底部と考えられる。孔径は15mmである。

206～209は高坏である。全体の器形がわかる個体はない。209は低脚となるが、裾部に透孔が3孔認められる。

210は器台の受部と思われる。貫通孔は無い。

211は埴である。小さな底部に高い口縁部を有する。全体的に風化し、調整は観察できなかった。

212～214は鉢である。212は皿状で、小型の高坏の坏部とも考えられたが、底部が存在する。口縁部は指押さえの痕跡が認められる。

213は短く屈曲する口縁部を有する。底部は欠損していた。外面はハケ調整である。

214は底部を欠損していたが、口縁部はほぼ完形であった。風化が著しく、調整が不明瞭であったが、頸部外面にハケの痕跡が残存していた。

215・216はミニチュア土器である。215は手捏風だが、輪積痕が明瞭に残り、ナデ調整が施される。

216は底部のみ残存している。手捏風だが、外面はヘラミガキされる。

第29号土壙（第24・27・43図）

B区F・G-5グリッドで検出した。第28号土壙を壊し、第21号溝跡に壊されていた。

平面の形状は方形または長方形と考えられ、規模は、長軸2.64m、短軸は1.17mが残存していた。深さは0.26mであった。主軸方向はN-68°-Eであった。

底面は平坦で、壁面は斜め上方に直線的に立ち上がっていた。

遺物は、覆土中層から壺・甕・台付甕・高坏・器台・埴・ミニチュア土器などが出土した。

掲載資料は14点である。

217は広口壺の口縁部である。口縁部に薄い粘土帯を貼り付けている。内外面とも細かいハケが施される。

220は壺の底部と考えられるが、内面底部にヘラミガキが認められた。大型の鉢または、広口の壺であった可能性もある。

222～226は甕である。器形全体のわかる資料は無い。223は頸部内面に接合痕が残し、外面は粘土帯を巡らせ補強している。

224は口縁部を欠損していた。外面胴部上半部はヨコまたはナナメハケ、下半部はナデ調整である。

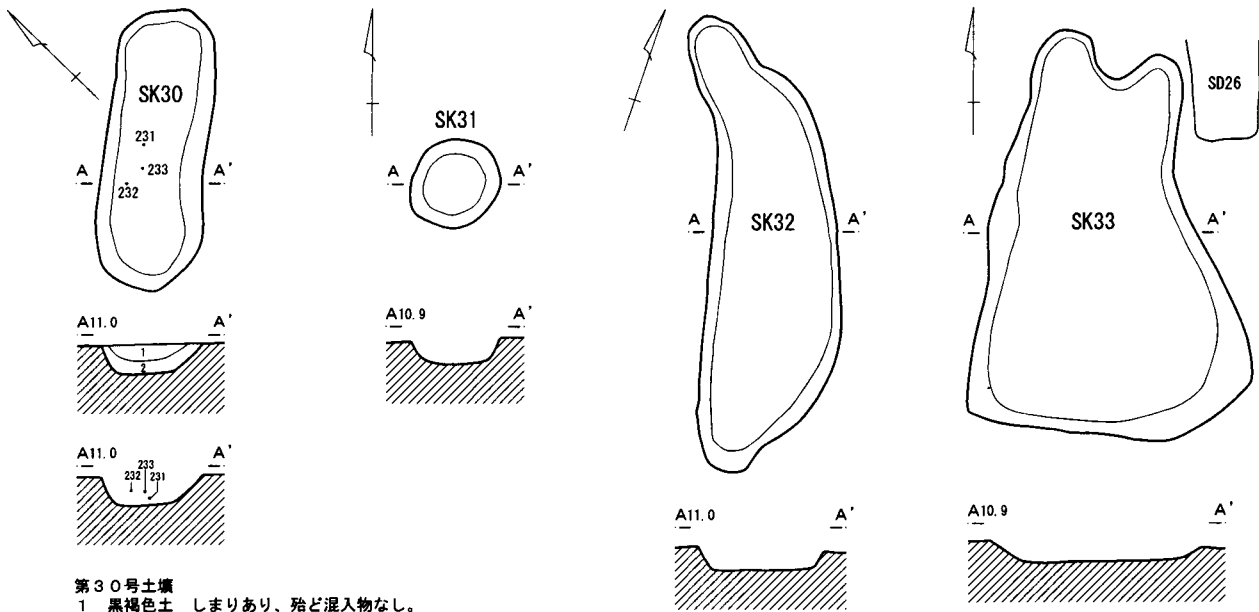
226は脚部のみ残存していた。胴部との接合部が露出し、接合面が磨り減ったように丸みを持っていた。台としての再利用も考えられるが、全体的に風化しており、明らかにできなかった。

227は高坏である。接合部のみ残存していた。

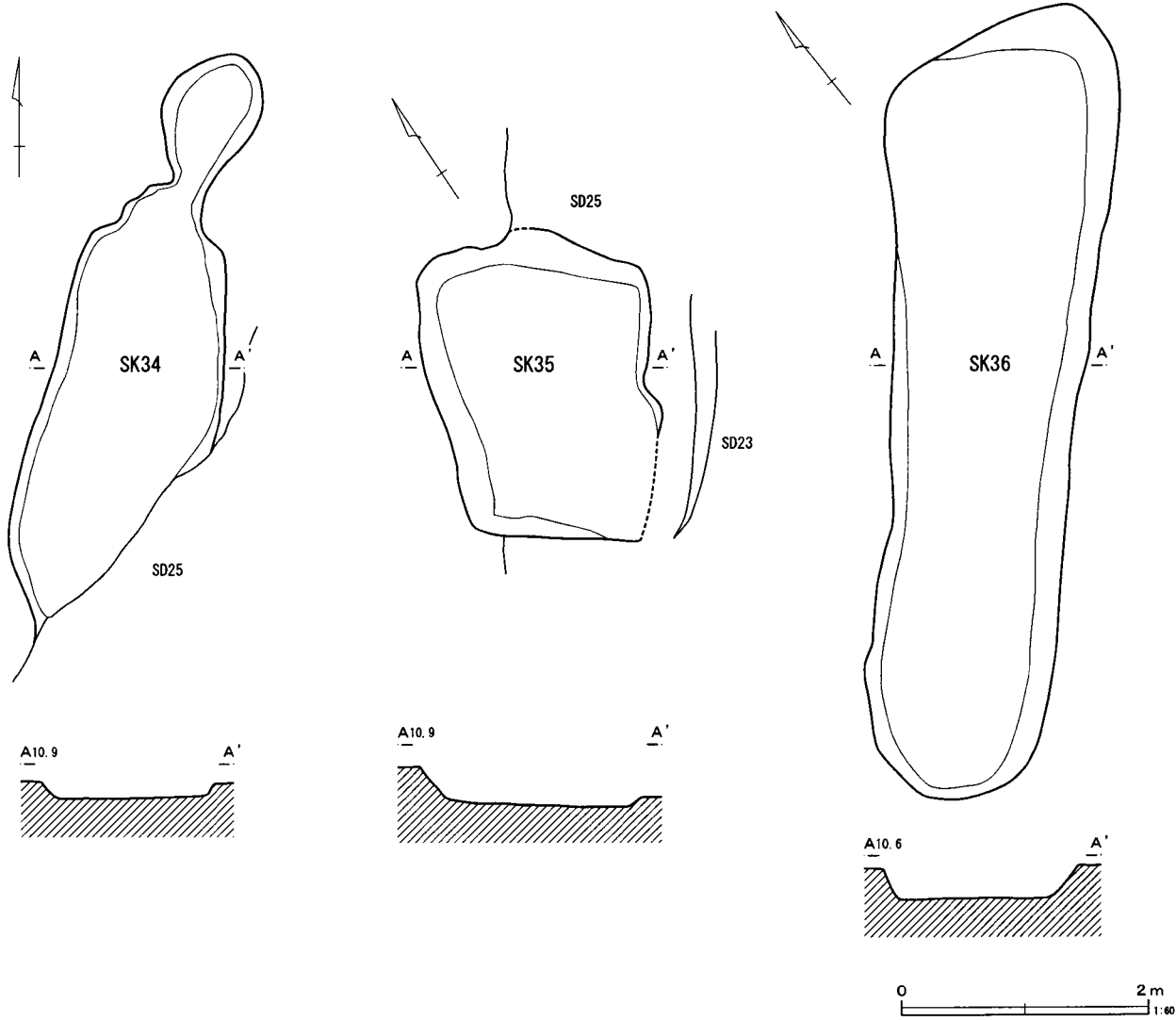
228は器台と考えられる。貫通孔が認められた。灰白色の、混入粒子の極めて少ない胎土で、白色のパミス状の粒子を含んでいる。

229は鉢である。口縁部を欠損していた。壺の可能性もあったが、内外面とも赤彩されていた。

230はミニチュア土器である。鉢形で、底部は輪台状、外面底部付近は横方向のヘラミガキ、口縁部はヨコナデされていた。



第30号土坑
 1 黒褐色土 しまりあり、殆ど混入物なし。
 2 明褐色土 粘性あり、地山ローム土・白色粘土をほぼ半々に含む、
 黒褐色土を少量含む。



第28図 土坑(6)

第30号土壌 (第28・44図)

B区J-6グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.15m、短軸0.82m、深さ0.22mであった。主軸方向はN-49°-Eであった。

遺物は、覆土中層から台付甕脚部・高坏脚部・埴が出土した。

232は器台と考えられる。脚部の破片で、受部側と脚部側から貫通孔を穿とうとしているが貫通せず、ややずれた位置でとまっている。孔の断面は三角錐状である。

233は埴である。胴部下位がやや張る下膨れとなる。風化が著しいが、胴部下半は横方向のヘラミガキが施されていた。

第31号土壌 (第28図)

A区H-3グリッドで検出した。第57号土壌に隣接して検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.69m、短軸0.69m、深さ0.19mであった。

遺物は壺・甕の破片が出土したが、小片のため図示できなかった。

第32号土壌 (第28図)

B区G-4グリッドで検出した。第5号周溝遺構に近接して検出したが、周溝遺構との関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長楕円形で、規模は、長軸3.30m、短軸1.05m、深さ0.18mであった。主軸方向はN-21°-Wであった。

遺物は壺・甕片が出土したが、小片のため図示できなかった。

第33号土壌 (第28図)

B区G-3・4グリッドで検出した。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸3.05m、短軸2.15m、深さ0.17mであった。主軸方向はN

-47°-Eであった。

遺物は壺・甕が出土したが、小片のため図示できなかった。

第34号土壌 (第28・44図)

B区G-4グリッドで検出した。第25号溝跡に壊されていた。

規模は、長軸4.78m、短軸1.40m、深さ0.14m、平面形態は不整形であった。主軸方向はN-17°-Eであった。

遺物は覆土中から小片が出土した。

図示可能な遺物は7点であった。

240は甕の底部と考えられる。単孔で、孔径は20mmであった。

第35号土壌 (第28・44図)

B区G・H-4グリッドで検出した。第25号溝跡を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.47m、短軸1.78m、深さ0.23mであった。主軸方向はN-35°-Eであった。

遺物は、覆土中から壺・台付甕脚部・S字甕脚部・高坏脚部などが出土した。掲載資料は12点であった。

241は壺である。単純口縁だが、外面に粘土帯を貼り付けることで外面口縁部に段を表現している。

243～248は台付甕の脚部である。245は外面と内面の接合部に指頭圧痕が認められる。

249・250はS字状口縁台付甕の脚部である。胎土は在地のもので模倣品と考えられる。

251・252は高坏の脚部である。2点とも、脚部および裾部に透孔が2段穿たれている。

第36号土壌 (第28・44・45図)

B区H・I-4グリッドで検出した。第39号土壌と接して検出したが、2基の土壌の重複関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸6.13m、短軸1.90m、深さ0.26mであった。主軸方向はN-43°-Eであった。

遺物は、覆土中から壺・甕・台付甕・高坏・器台・台・罎・鉢などが出土した。

図示可能な遺物は32点であった。

小片のため図示できなかった遺物は、甕口縁部片1点(4g)、甕胴部片133gであった。

253～259は壺である。何れも破片であるが、255は口縁部外面に断面三角形の粘土帯を貼り付け、段を表現し、棒状浮文を貼付けている。

260～265は甕である。260～263は台付甕の脚部である。背の低い、やや内湾気味に広がる脚部である。

265は甕と考えられるが、胎土が水簸したような粘土で、溶けたように風化していた。口縁部外面に僅かにハケメの痕跡が残る。

266はS字状口縁台付甕の脚部である。脚部裾の折り返し、胴部との接合の貼り合わせ等、S字甕の技法を踏襲しているものの、外面の縦方向のハケ目や裾部のヨコハケ等、在地化が著しい。

267～272は高坏である。

267は小型の高坏で、坏部は浅く、やや内湾気味に立ち上がる。水簸したような粘土で、溶けたように風化していた。また、赤橙色に変色しており、二次焼成の可能性もある。

270～272は柱状脚の高坏である。270は他の脚部に比べ、太い。

273・274は器台である。273は受部が浅く、鉢形に広がる。透孔は3箇所認められる。274は裾部を欠損していた。受部は深く、内面が椀状となるが、外面に稜を有しており、坏状となっている。透孔は4箇所認められるが、貫通孔は無い。

275は用途不明である。器台状の底部あるいは蓋のつまみと考えられる。端部が平坦であることから、台として報告する。台部は中実で、指頭による押さえ痕が認められる。上部は椀状にくぼみ、外面は細

かいハケ、内面はへら状工具による押さえ痕が認められ、台付甕脚部の内面と似る。従って、この面が下面とすれば、蓋の可能性もある。

276はほぼ完形の罎で、底部はやや上げ底となる。風化により調整が不明瞭であるが、口縁部は縦方向のへらミガキ、胴部は横方向のへらミガキが施されていた。

277～284は鉢である。

277は口縁部が内湾気味に立ち上がる。278・279は口縁部にS字状の段を有する。278は段が弱い。胴部にハケメが残る。279は段がシャープで、口縁部は外反気味に立ち上がる。水簸したような胎土で、溶けたように風化していた。

283・284は坏形の鉢で、底部は輪台状となる。底部内面にへら状工具の押さえ痕が放射状に認められる。

第37号土壌(第29図)

B区G・H-4グリッドで検出した。第38号土壌の内側で入れ子状に検出したが、第38号土壌を壊し、より深く掘り込んでいた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.66m、短軸1.53m、深さ0.48mであった。

遺構底面は平坦で、壁面は、やや斜め上方へ内湾しながら立ち上がっていた。

覆土は、地山の白色粘土を含む暗褐色・黒色土で、中層に炭化物層(2層)が水平に堆積していた。焼土は含んでいなかった。

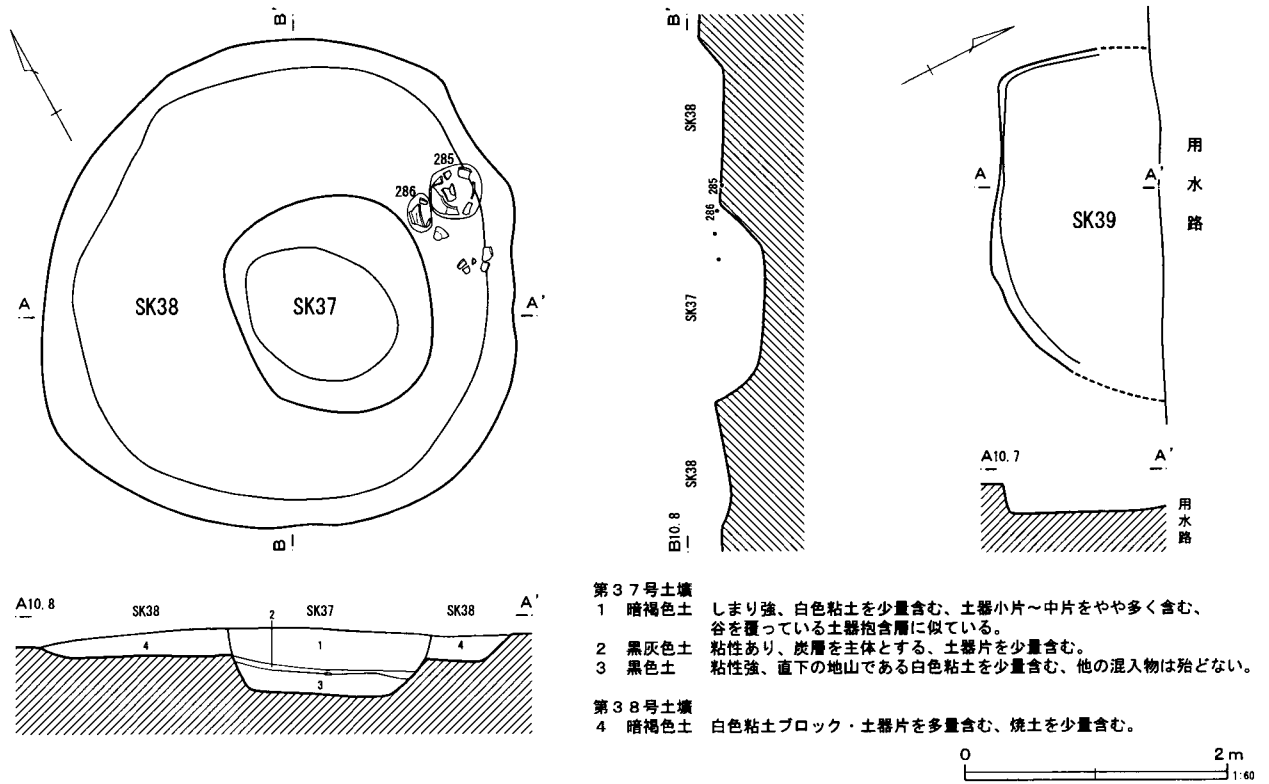
遺物は2層の炭化物層中から土器片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第38号土壌(第29・45図)

B区G・H-4グリッドで検出した。第37号土壌に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸3.68m、短軸3.58m、深さ0.20mであった。

底面は平坦で、壁面は斜め上方に直線的に立ち上



第29図 土壌（7）

がっていた。覆土は、白色粘土ブロックを多量に含む黒褐色土で、焼土を含んでいた。

遺物は、底面付近から、壺・台付甕・高坏・器台・ミニチュア土器などが出土した。掲載資料は13点であった。

285は壺である。やや長胴だが、球形の胴部である。口縁部下に段を有し、口縁部は大きく外反する。外面胴部はナデ、肩部～頸部は横方向のヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、内面胴部は上位と下位がヘラナデ、中位がヨコハケ、口縁部はヨコナデされていた。底部には木葉痕が認められた。

286～288は壺の口縁部である。

286は、単純口縁の外面に断面三角形の粘土帯を貼り付け、段を表現している。外面口縁部に焼成後につけられた、鋭利な工具による傷が認められる。

289・290は壺の底部である。289は内面底部もヘラミガキされていた。

291は台付甕の脚部である。器高が低く、脚部は直線的に開く。

292～294は高坏の脚部である。292は小型の高

坏で、水簸したような胎土である。透孔は認められない。

295は器台と思われる。台付甕脚部と同様の作りで、貫通孔の径が20mmと大きい。

297はミニチュア土器である。口縁部を欠損していた。胴部に輪積痕が残る。

第39号土壌（第29・45・46図）

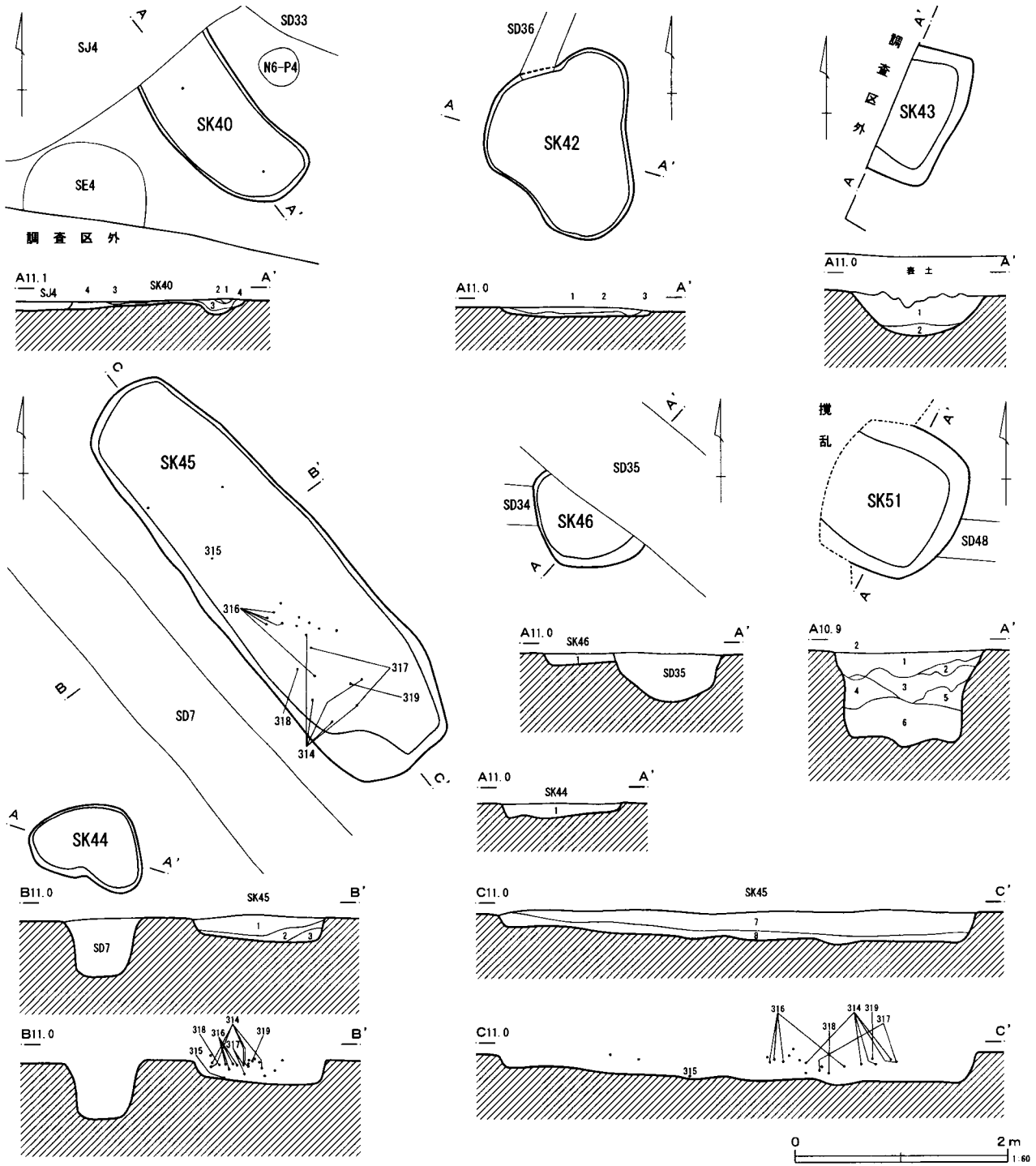
B区H・I-4グリッドで検出した。

第36号土壌と接していたが、重複関係は明らかにできなかった。また、遺構北側が調査区外へ延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.42m、短軸は1.30mが残存していた。深さは0.30mであった。主軸方向はN-62°-Wであった。

遺物は、覆土中から壺・台付甕・高坏・器台・埴などが出土した。掲載資料は14点であった。

298～300は壺である。298は球形の胴部に、頸部が直立気味に立ち上がる。口縁部は大きく外反し、口縁下端に粘土帯を貼り付け、有段口縁としている。



第40号土壌

- 1 黒色土 炭層。
- 2 暗褐色土 しまりあり、焼土粒子を多量含む。
- 3 暗褐色土 しまりあり、灰白色地山粒子を少量含む。
- 4 灰白色地山主体 暗褐色土ブロック(φ1~2cm)を少量含む。

第42号土壌

- 1 灰褐色土 しまりあり、灰白色粒子を少量含む。
- 2 灰褐色土 しまりあり、灰白色地山ブロック(φ1~2cm程)を多量含む。
- 3 黒色土 しまり強い、酸化によってマンガンが硬化した層。

第43号土壌

- 1 黒色土 しまりあり、褐色地山ブロック(φ3~4cm程)を多量含む、褐色地山粒子を少量含む。
- 2 褐色土 しまり強い、黒色ブロック(φ0.5~1cm程)を少量含む。

第44号土壌

- 1 灰褐色土 しまりあり、灰白色地山ブロック(φ1~2cm)を多量含む。

第45号土壌

- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土 粘性ややあり、しまりあり、灰白色地山ブロック(φ1~2cm程)を多量含む、酸化による暗赤褐色の斑点が多い。
- 3 灰白色粘土 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む、酸化による暗赤褐色の斑点が多い。

第46号土壌

- 1 暗褐色土 しまりあり、灰白色粒子・灰白色ブロック(φ1~2cm程)を多量含む。

第51号土壌

- 1 黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)を多量含む。(埋め戻し)
- 2 暗褐色土 黄灰色砂を多量含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック(φ2~3cm)多量含む。(埋め戻し)
- 4 黄褐色粘土 黄褐色粘土ブロック(φ2~3cm)を極めて多量含む、3層と粘土の層が逆。(埋め戻し)
- 5 黄灰色シルト 黄灰色シルト中に暗褐色土をブロック状に含む。
- 6 黄灰色土 黄灰色粘土中に暗褐色土をブロック状に含む。(埋め戻し)

第30図 土壌(8)

299は底部内面もヘラミガキされていた。

301～307は甕である。307は小型の台付甕で、球形の胴部である。脚部は欠損していた。302～306は脚部および接合部である。

307は脚部の有無は不明の甕である。頸部にハケが残るが、胴部はナデ調整である。

308・309は高坏である。309は柱状脚の高坏で、中実で裾部が大きく開く。

311は埴である。底部は丸底風に成形後、断面三角形の粘土帯を貼り付け、輪台状となる。

第40号土壌 (第30・46図)

E区N-6・7グリッドで検出した。第4号住居跡に壊されていた。

平面の形状は長方形と考えられる。規模は、長軸は1.66mまで残存し、短軸は0.88m、深さ0.03mであった。主軸方向はN-39°-Wであった。

遺物は、覆土中から埴が1点出土した。

第41号土壌 (第32・46図) 近世

F区N・O-3グリッドで検出した。第35・41号溝跡を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸8.11m、短軸4.25m、深さ1.38mであった。主軸方向はN-62°-Wであった。

底面の形状は概ね平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がっていた。

西側底面にテラス状の段を検出した。

遺物は、土師質土器が出土した。遺構の時期は、近世以降のものと考えられる。

第42号土壌 (第30図)

F区M-4・5グリッドで検出した。第36号溝跡を壊していた。

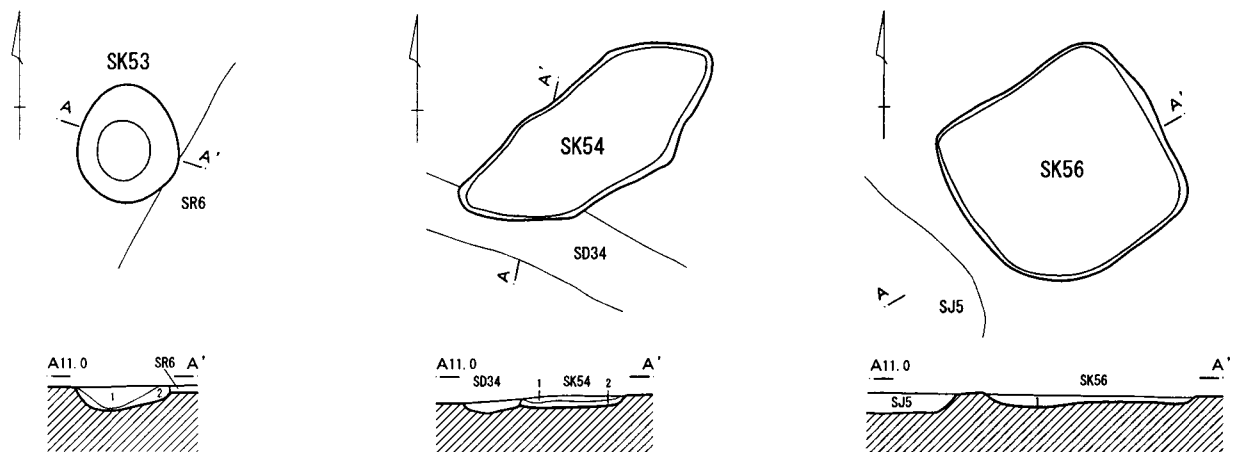
平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.76m、短軸1.32m、深さ0.09mであった。

遺物は出土しなかった。

第43号土壌 (第30図)

F区M-5グリッドで検出した。遺構西側が調査区外へ延びており、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は長方形または方形で、規模は、長軸1.30m、短軸0.67mが残存していた。深さ0.36m、



第53号土壌

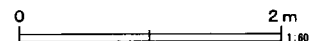
- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子(φ0.5~1mm)を少量含む。
- 2 黄褐色土 暗褐色土との混一土層、ブロックは壁崩落土。

第54号土壌

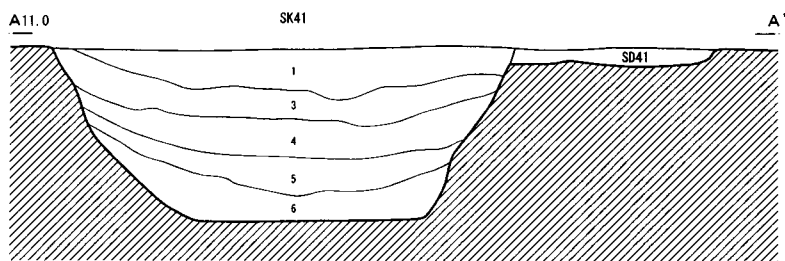
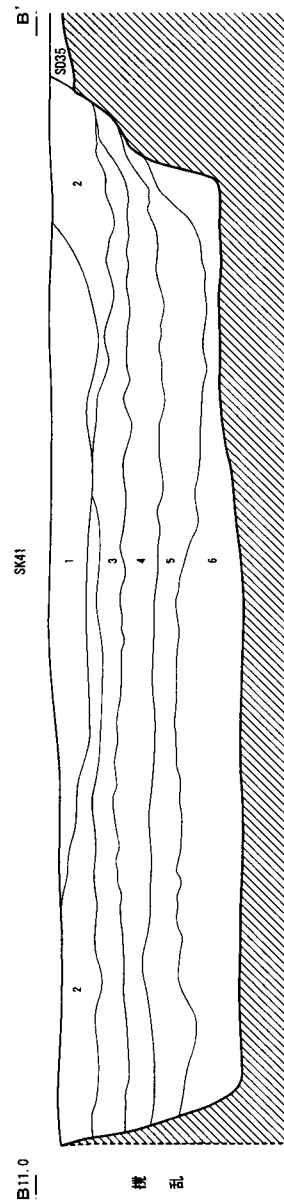
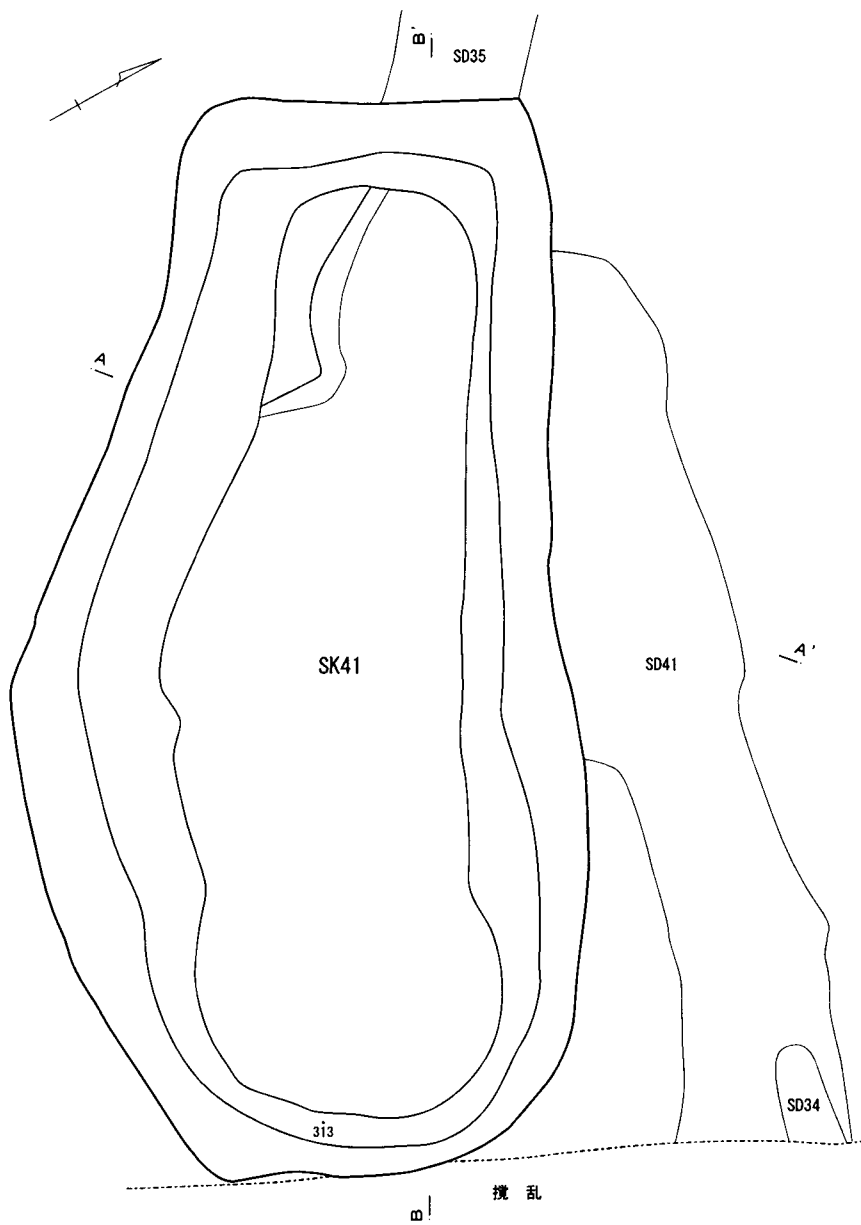
- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子を少量含む。
- 2 灰白色土 しまりあり、暗褐色粒子・暗褐色ブロック(φ1~2cm程)を少量含む。

第56号土壌

- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山ブロック(φ2~3cm程)を多量含む。(人為堆積)



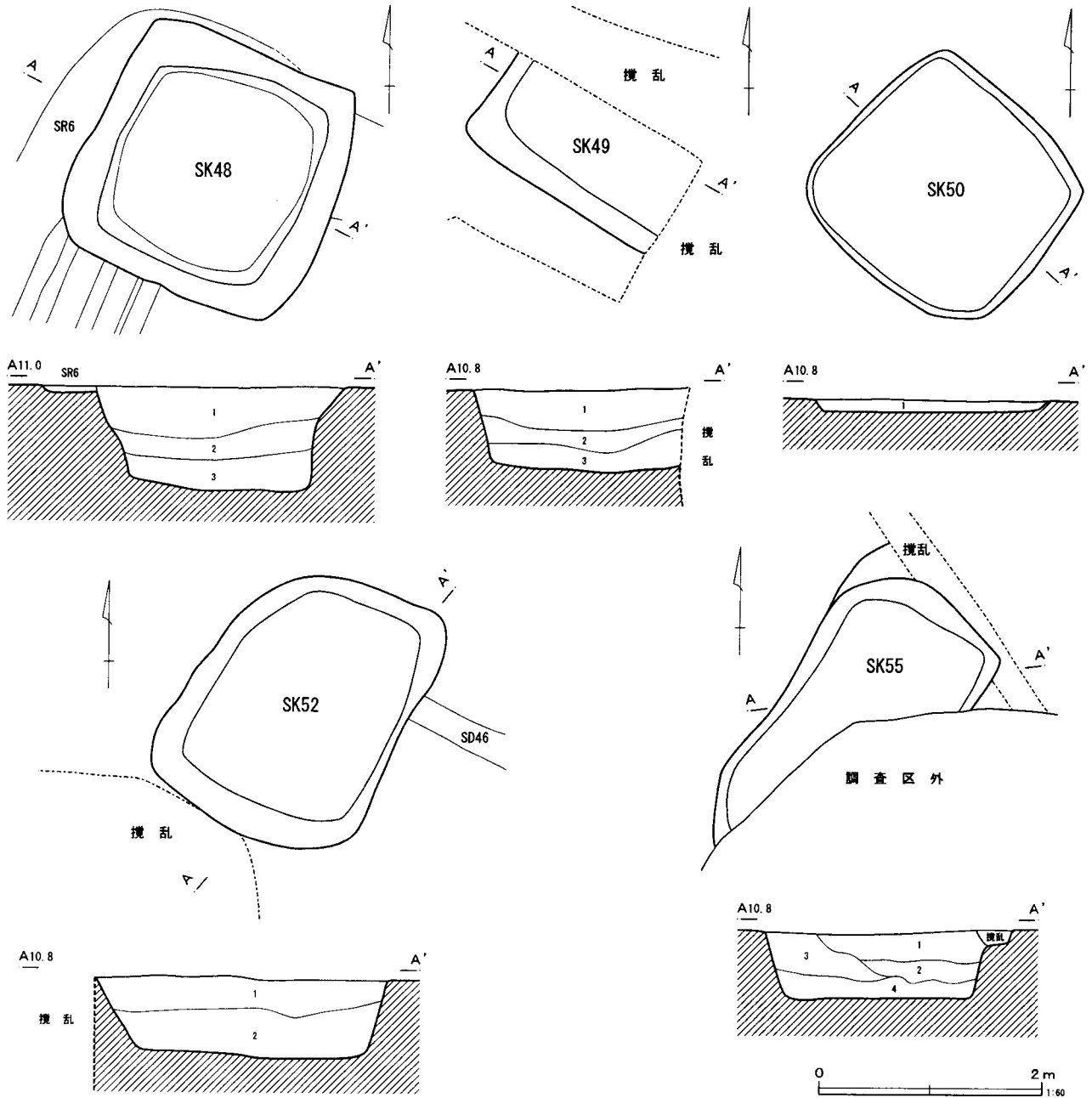
第31図 土壌(9)



第41号土壌

- | | |
|----------|--|
| 1 暗褐色土 | 粘性・しまりあり、褐色地山ブロック(φ2~3cm程)・黒灰色土ブロック(φ2~3cm)を多量含む。 |
| 2 黄褐色土 | 粘性・しまりあり、黒灰色ブロック(φ1~2cm程)・黒灰色ブロック(φ4~5cm程)を多量含む。 |
| 3 褐色シルト | 粘性・しまりあり、黒灰色ブロック(φ1~2cm程)・黒灰色ブロック(φ4~5cm程)を多量含む、3層が還元したもの。 |
| 4 青灰色シルト | 粘性・しまりあり、黒灰色ブロック(φ1~2cm程)・黒灰色ブロック(φ4~5cm程)を多量含む。 |
| 5 暗青灰色粘土 | 粘性強、しまりあり、黒色ブロック(φ0.5~1cm程)を少量含む。 |
| 6 青灰色粘土 | 粘性強、しまりあり、黒色ブロック(φ2~3cm程)を少量含む。 |

第32図 土壌 (10)



第48号土壌

- 1 褐色土 粘性ややあり、しまりあり、灰褐色土ブロック(φ2~4cm程)・黒褐色土ブロック(φ2~4cm程)を多量含む。(人為堆積)
 - 2 黄褐色土 粘性ややあり、しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)・灰白色ブロック(φ2~3cm程)を少量含む。(人為堆積)
 - 3 暗青灰色シルト 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を少量含む。(人為堆積)
- ※1, 2, 3層とも白色粒子(浅間A軽石)を含む

第49号土壌

- 1 黄褐色土 しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm)を極めて多量含む、灰褐色土ブロック(φ2~3cm)を多量含む。(人為堆積)
 - 2 青灰褐色シルト しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を少量含む。(人為堆積)
 - 3 青灰色シルト しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を少量含む。(人為堆積)
- ※1・2層は白色粒子(浅間A軽石)を少量含む

第50号土壌

- 1 灰白色土 しまりあり、黒褐色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む、浅間A軽石を含む。

第52号土壌

- 1 褐色土 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を極めて多量含む、灰白色シルト(φ1~2cm程)を多量含む。(人為堆積)
- 2 灰白色シルト 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を多量含む、黒褐色土ブロック(φ4~5cm程)を少量含む。(人為堆積)

第55号土壌

- 1 褐色土 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を極めて多量含む、灰白色シルト(φ1~2cm程)を多量含む。(人為堆積)
- 2 灰白色シルト 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を多量含む、黒褐色土ブロック(φ4~5cm程)を少量含む。(人為堆積)
- 3 黒褐色土 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を少量含む。(人為堆積)
- 4 暗青褐色土 粘性・しまりあり、黒褐色土ブロック(φ2~3cm程)を多量含む。(人為堆積)

第33図 土壌(11)

平面形態は長方形であった。主軸方向はN-25°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第44号土壌 (第30図)

F区N-4グリッドで検出した。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.09 m、短軸0.73 m、深さ0.13 mであった。主軸方向はN-20°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第45号土壌 (第30・46図)

F区N-3・4グリッドで検出した。第7号溝跡と平行するように検出したが、溝跡との関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸4.50 m、短軸1.39 m、深さ0.30 mであった。主軸方向はN-38°-Wであった。

遺物は、壺・甕・台付甕・鉢・高坏などが出土した。掲載可能な遺物は6点であった。

第46号土壌 (第30図)

F区N-3グリッドで検出した。第34号溝跡を壊し、第35号溝跡に壊されていた。

平面の形状は、円形または楕円形と考えられる。規模は、長軸1.00 m、短軸0.65 mが残存し、深さは0.11 mであった。主軸方向はN-18°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第48号土壌 (第33図)

F区Q-5グリッドで検出した。第50号溝跡を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸2.28 m、短軸2.26 m、深さ0.92 mであった。主軸方向はN-26°-Eであった。

覆土に浅間A軽石と考えられる白色粒子を含んでおり、近世以降の遺構と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第49号土壌 (第33図)

F区P-3グリッドで検出した。北側と東側を攪乱されていた。

平面の形状は、方形または長方形で、規模は、長軸1.94 m、短軸0.97 mが残存していた。深さは0.73 mであった。主軸方向はN-60°-Wであった。

覆土に浅間A軽石と考えられる白色粒子を含んでおり、近世以降の遺構と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第50号土壌 (第33図)

F区Q-5グリッドで検出した。

平面の形状は方形で、規模は、長軸2.09 m、短軸2.00 m、深さ0.11 mであった。主軸方向はN-50°-Wであった。

覆土に浅間A軽石と考えられる白色粒子を含んでおり、近世以降の遺構と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第51号土壌 (第30図)

F区Q-3グリッドで検出した。第48号溝跡を壊していた。また西側を攪乱に壊されていた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.40 m、短軸1.20 mが残存していた。深さは0.89 mであった。主軸方向はN-24°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

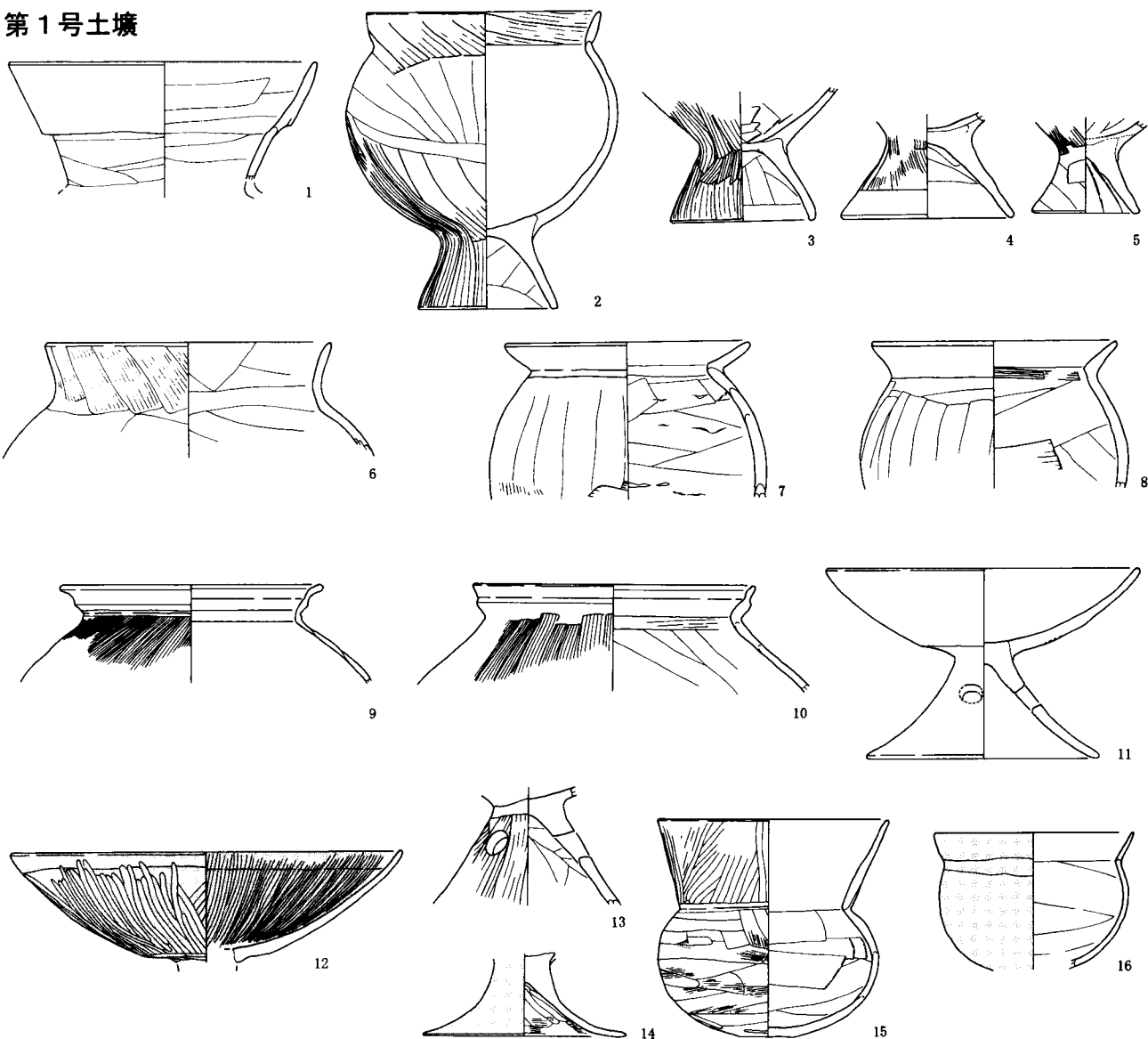
第52号土壌 (第33図)

F区R-3グリッドで検出した。第46号溝跡を壊していた。

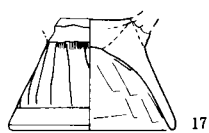
平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.55 m、短軸2.03 m、深さ0.67 mであった。主軸方向はN-32°-Eであった。

覆土に浅間A軽石と考えられる白色粒子を含んでおり、近世以降の遺構と考えられる。

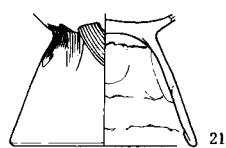
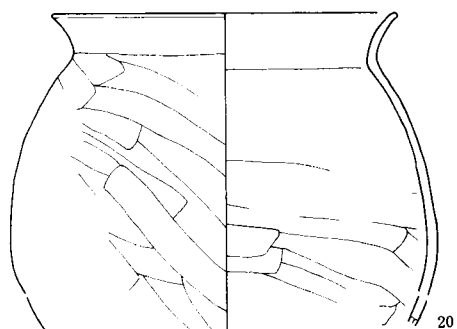
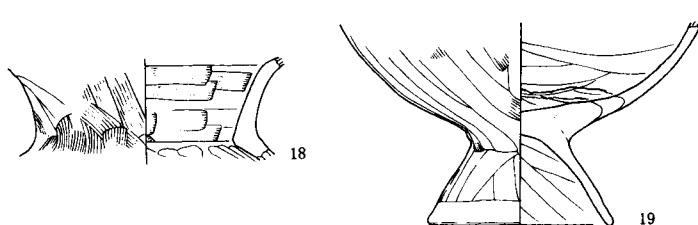
第 1 号土壤



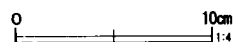
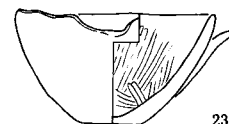
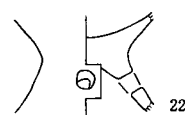
第 6 号土壤



第 7 号土壤

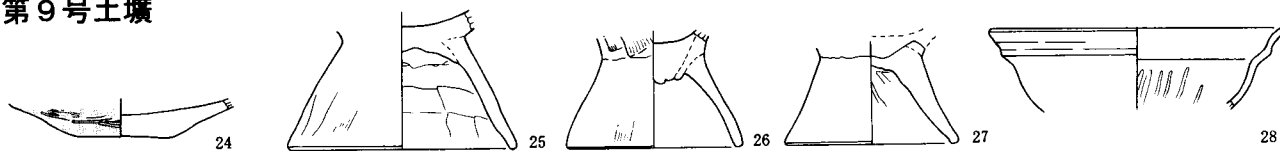


第 8 号土壤

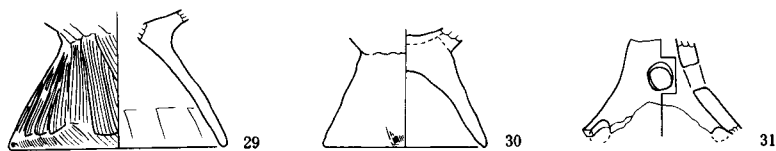


第 34 图 土壤出土遺物 (1)

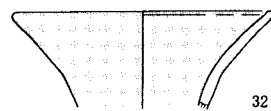
第9号土壤



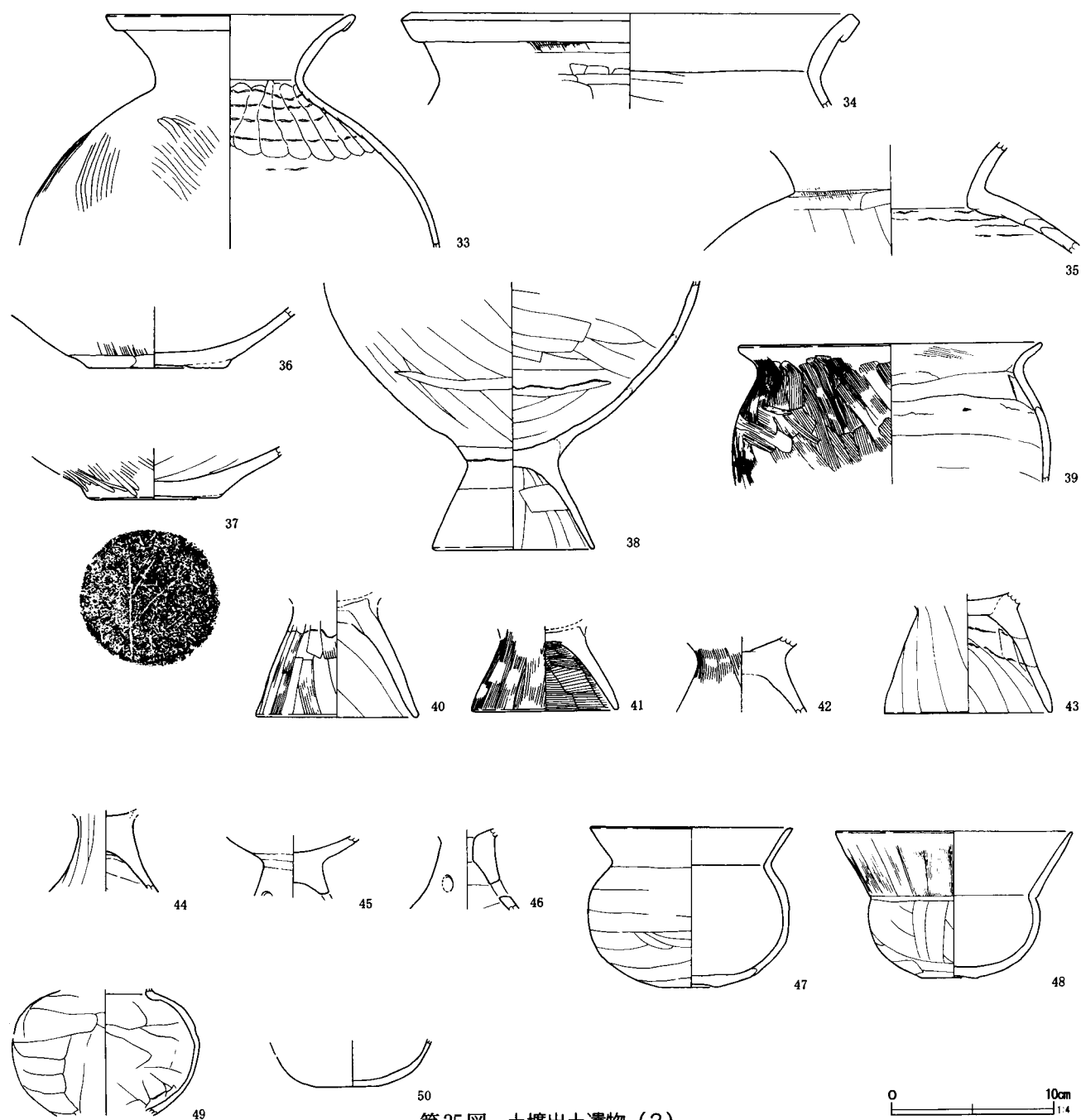
第10号土壤



第11号土壤



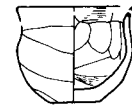
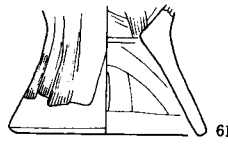
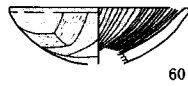
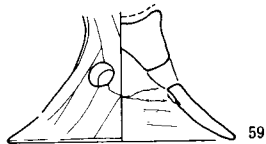
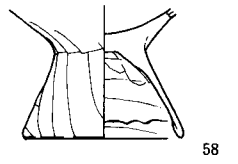
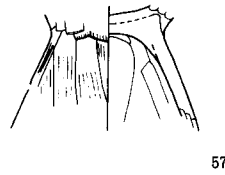
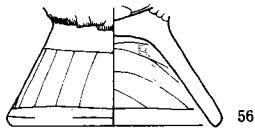
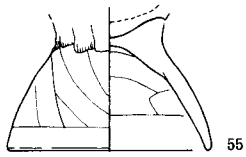
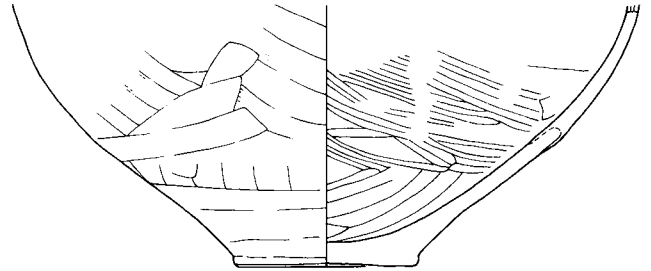
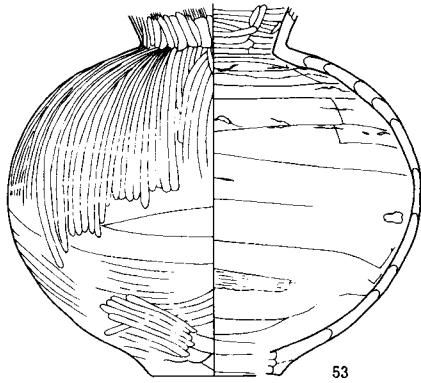
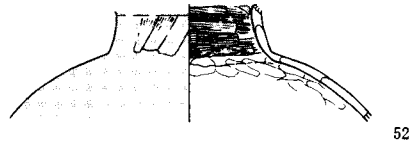
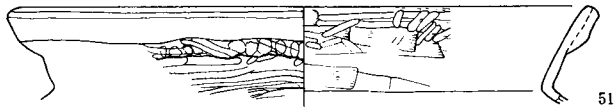
第13号土壤



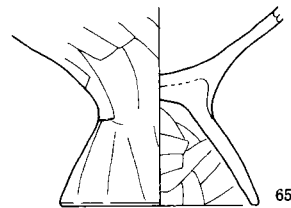
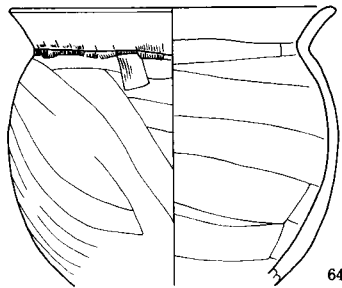
第35图 土壤出土遺物(2)

0 10cm
1:4

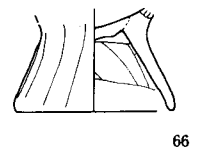
第14号土壤



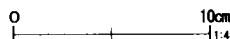
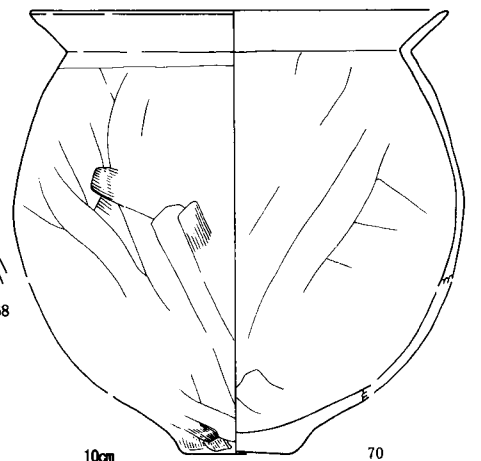
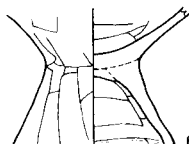
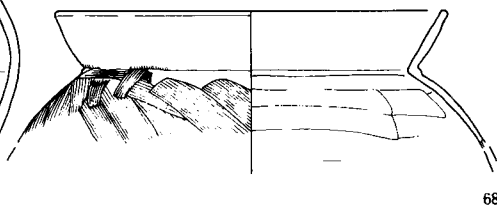
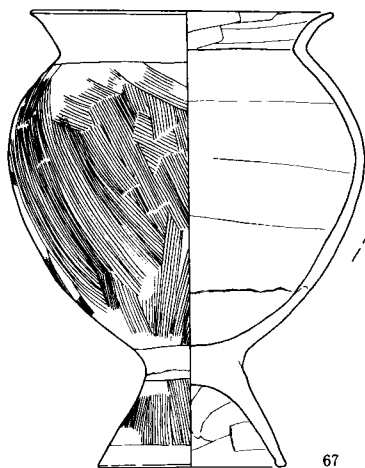
第21号土壤



第22号土壤

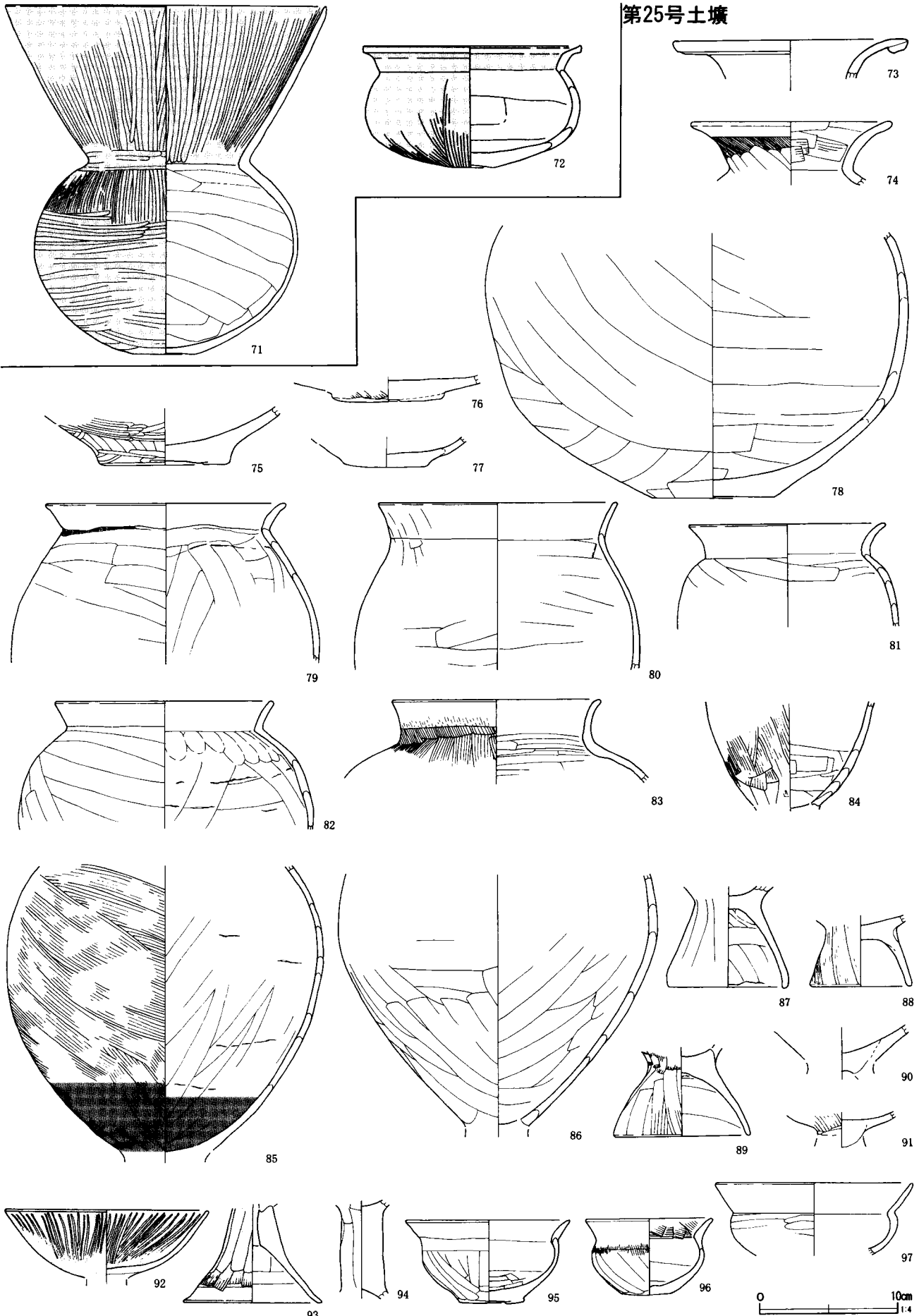


第24号土壤



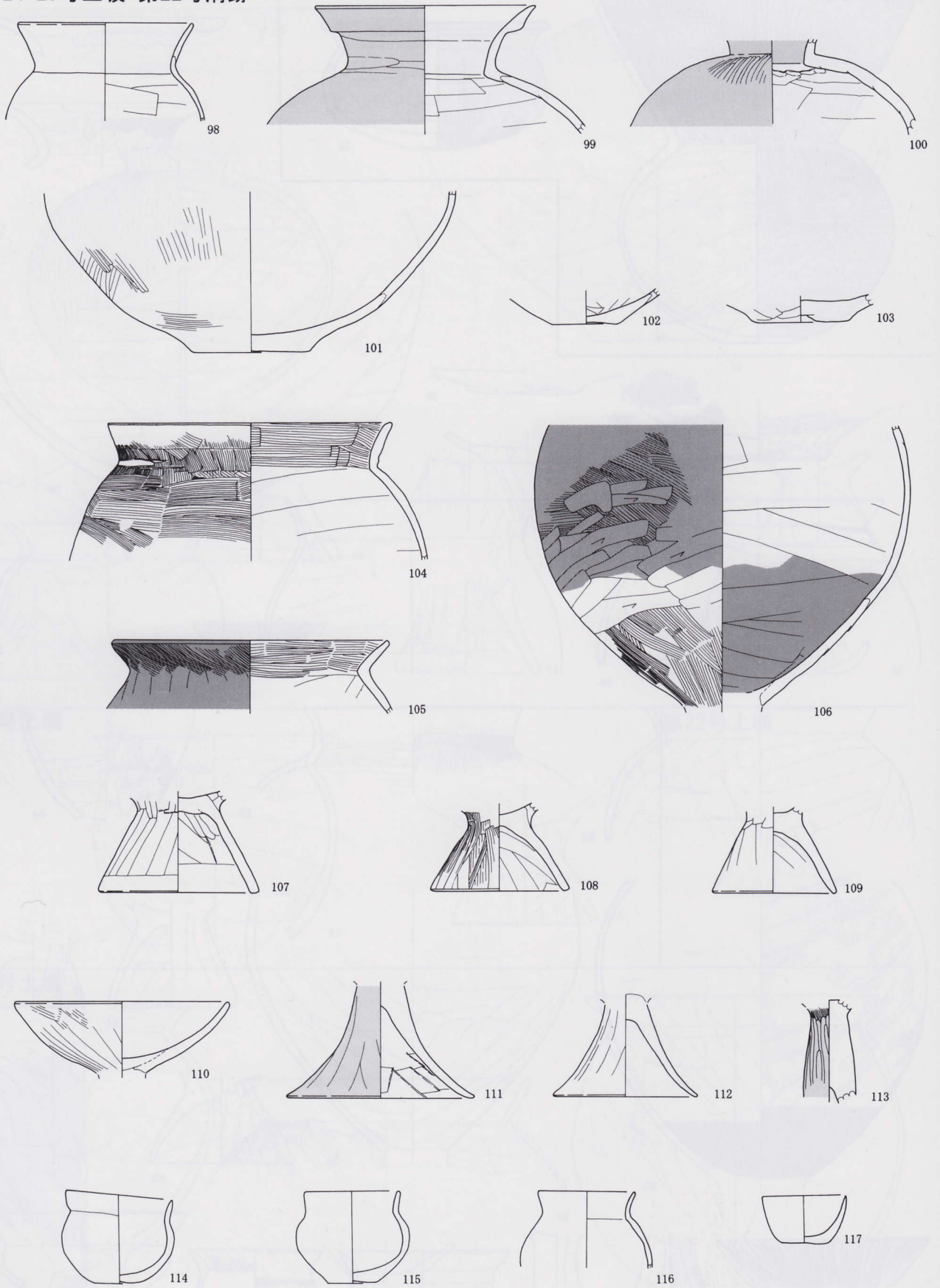
第36图 土壤出土遗物 (3)

第25号土壤



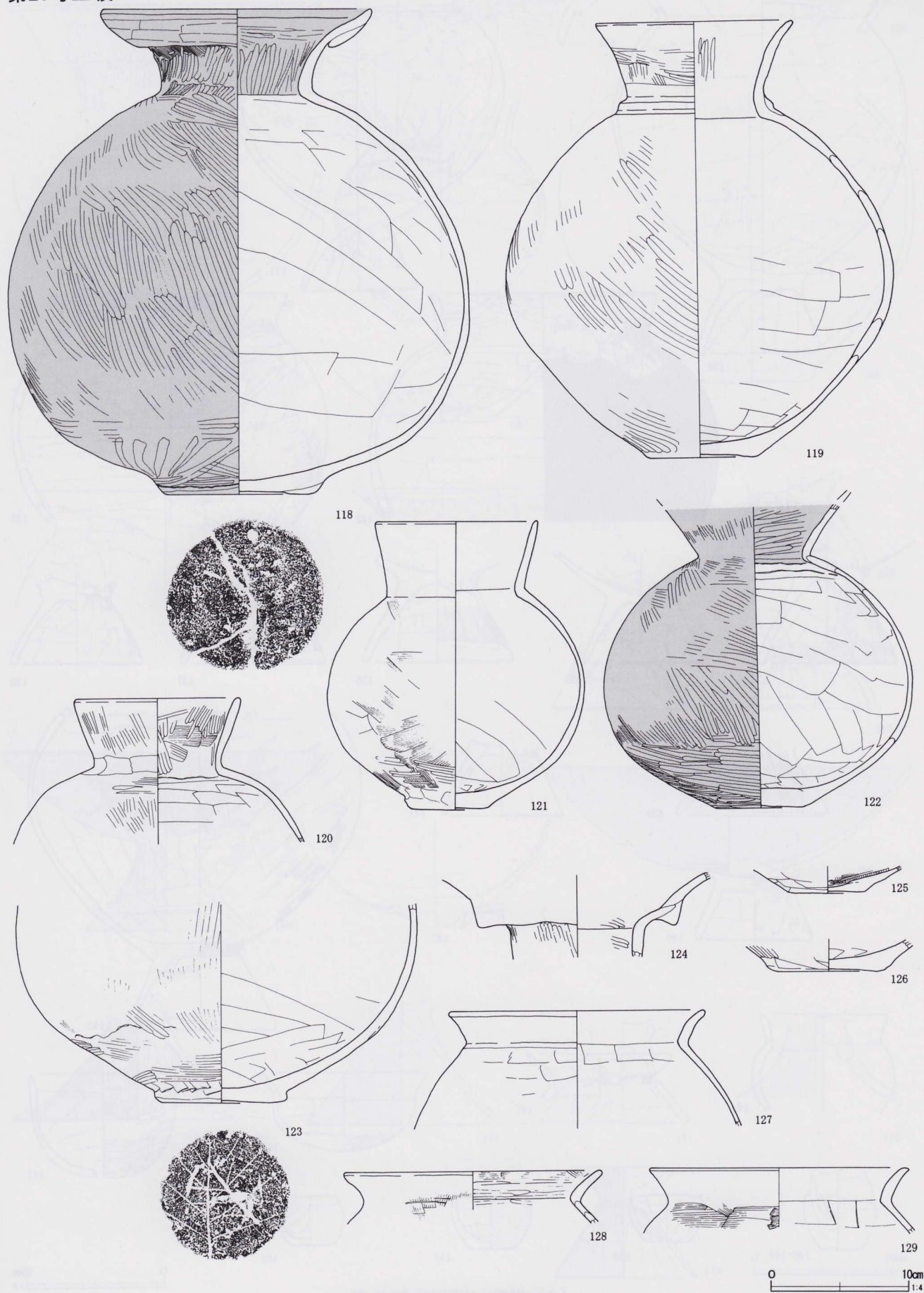
第37图 土壤出土遺物(4)

第24·25号土坑·第22号沟迹

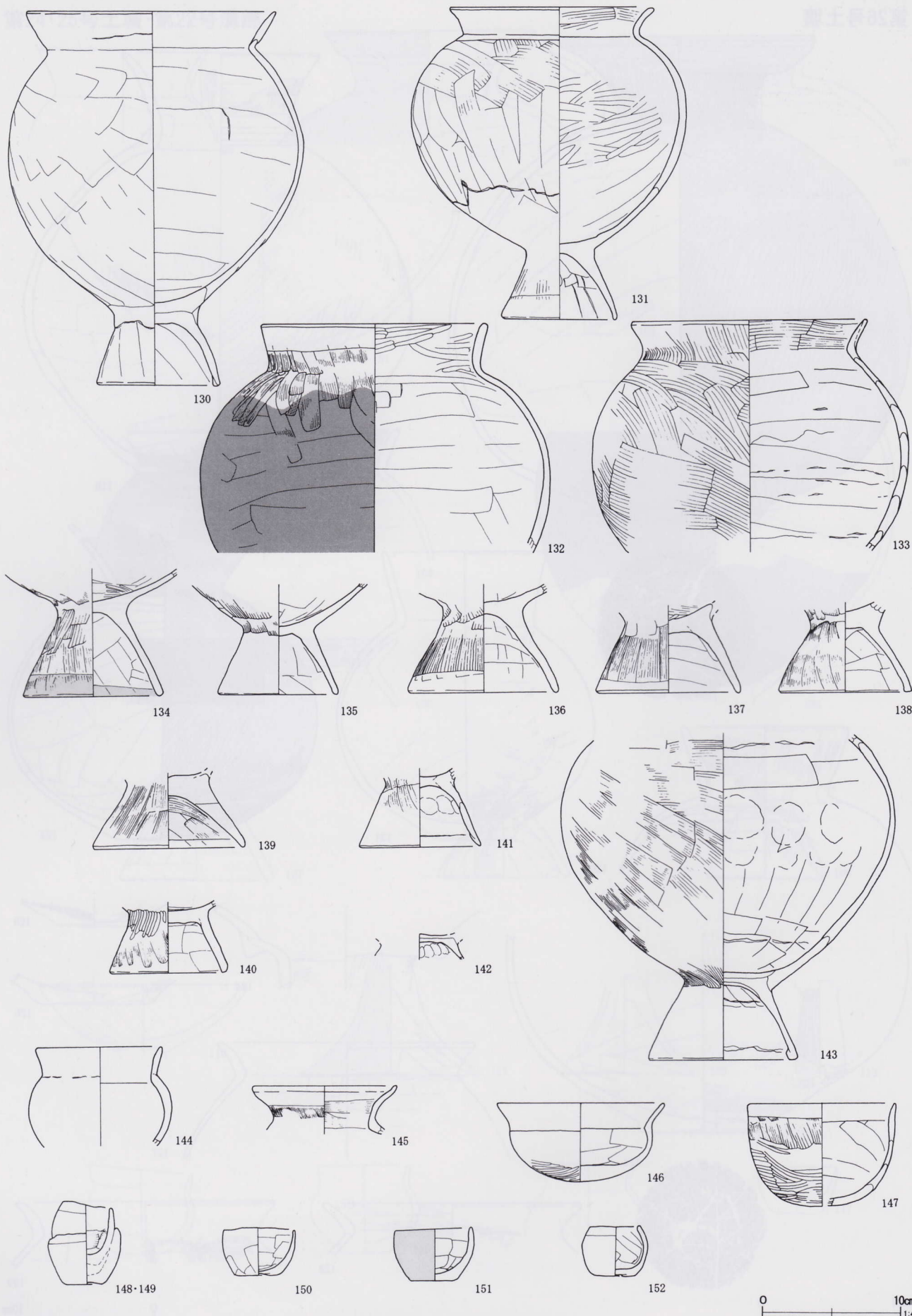


第38图 土坑出土遗物(5)

第26号土坑

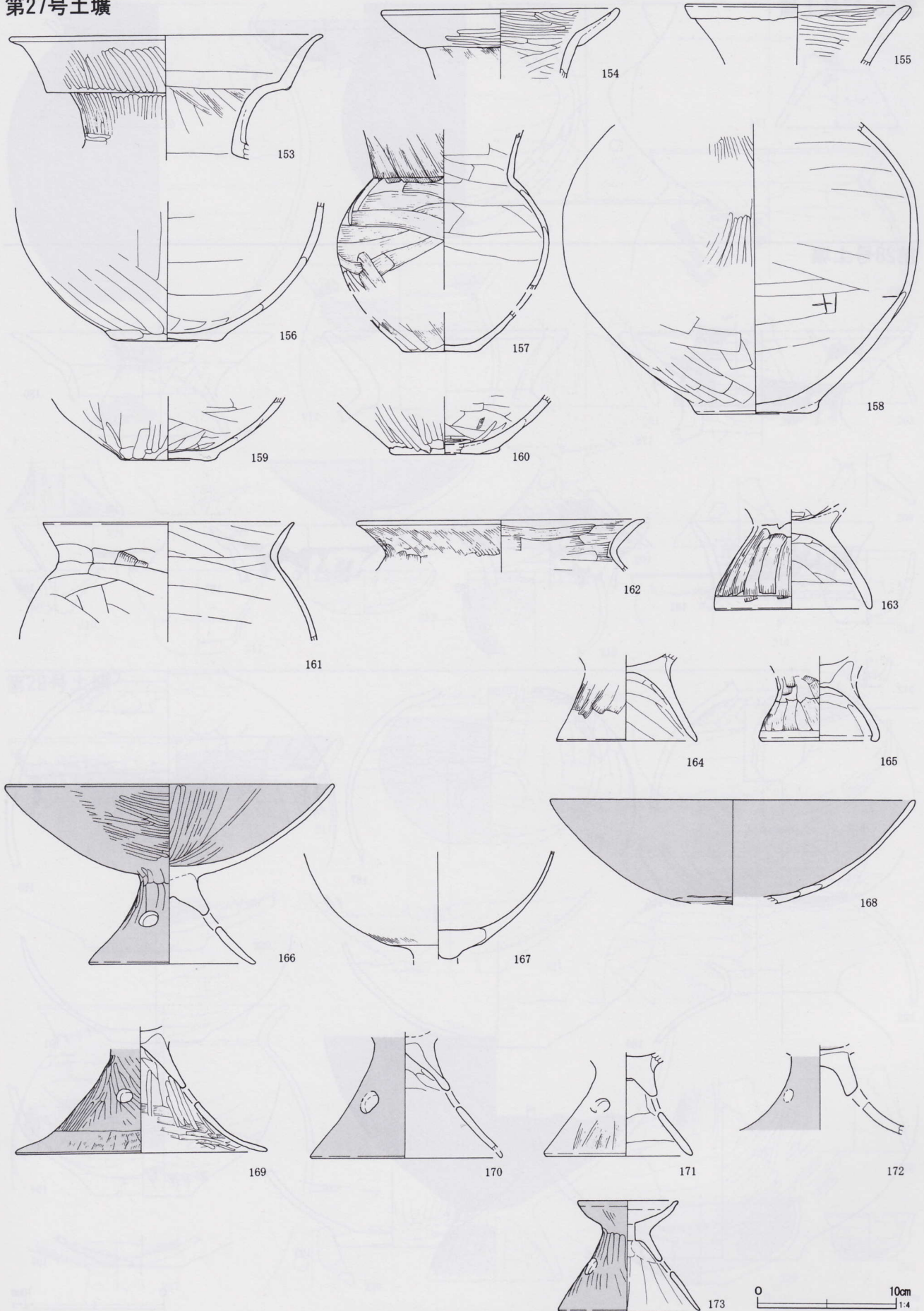


第39图 土坑出土遗物(6)



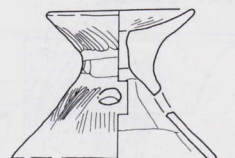
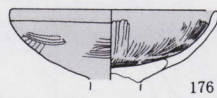
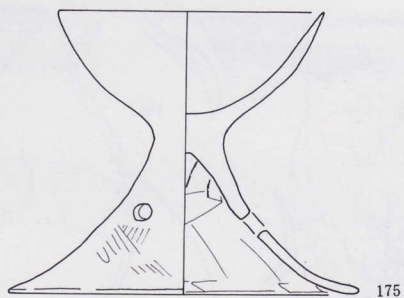
第40图 土壤出土遺物(7)

第27号土坑

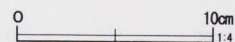
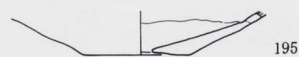
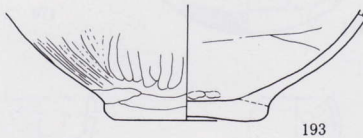
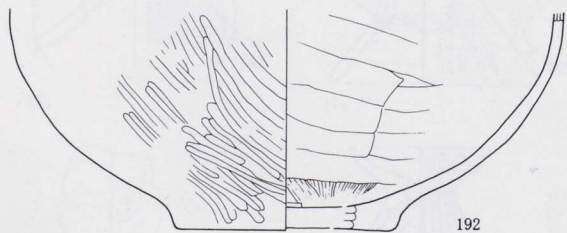
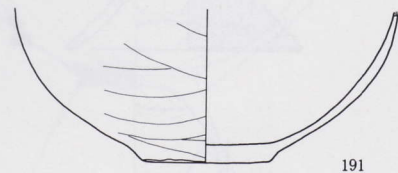
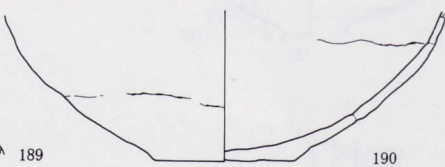
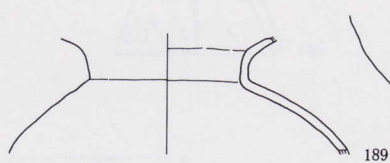
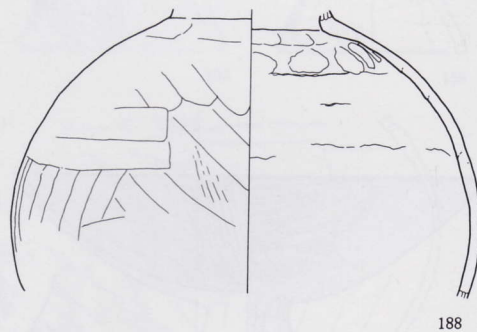
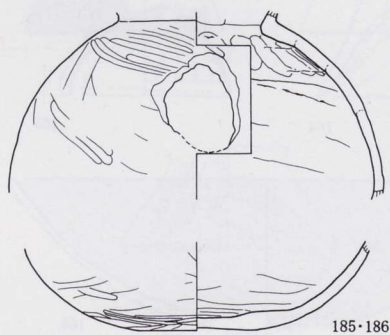
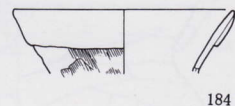
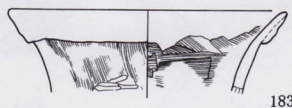
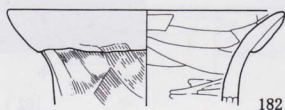
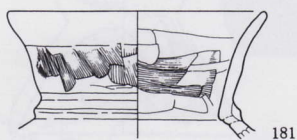
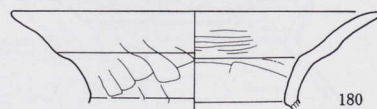
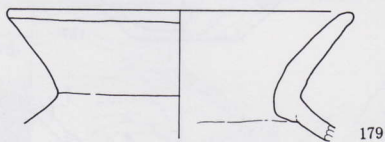
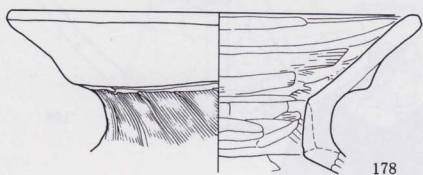


第41图 土坑出土遗物(8)

第26·27号土壙

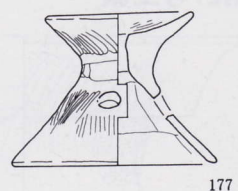
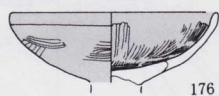
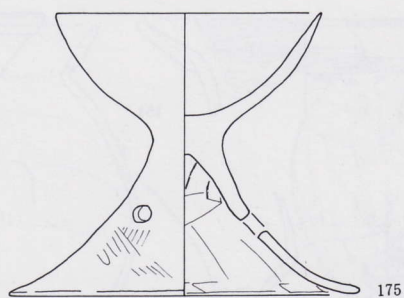


第28号土壙

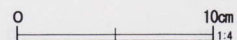
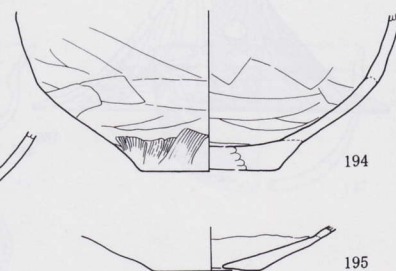
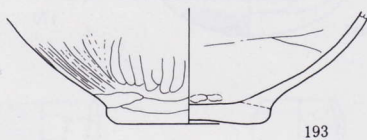
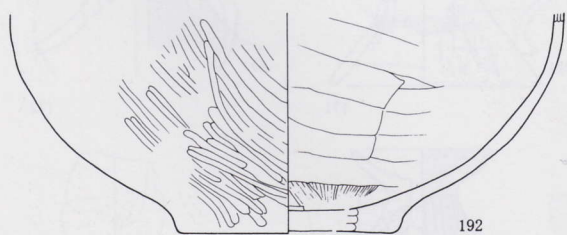
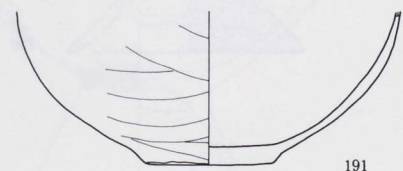
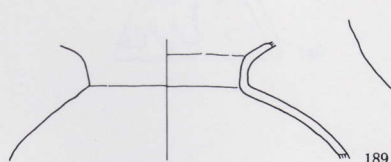
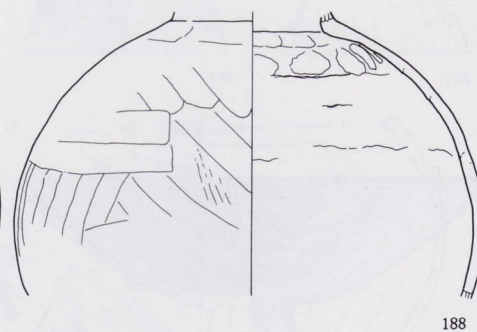
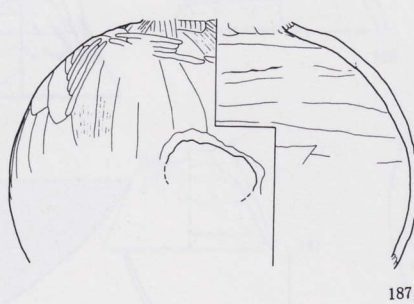
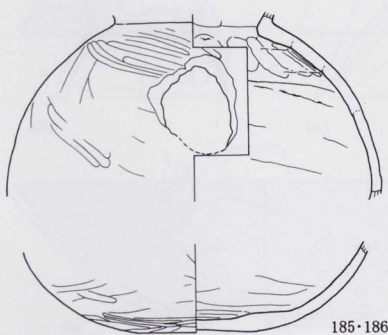
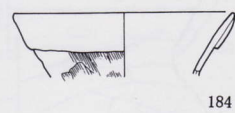
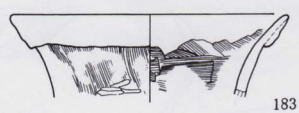
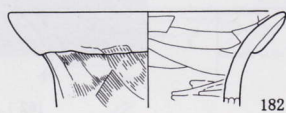
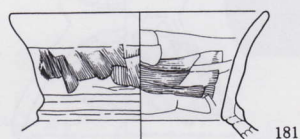
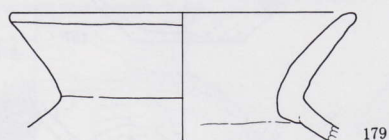
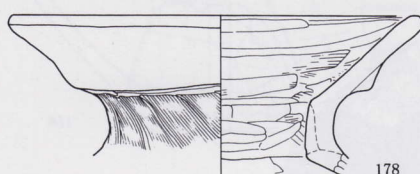


第 42 图 土壙出土遺物 (9)

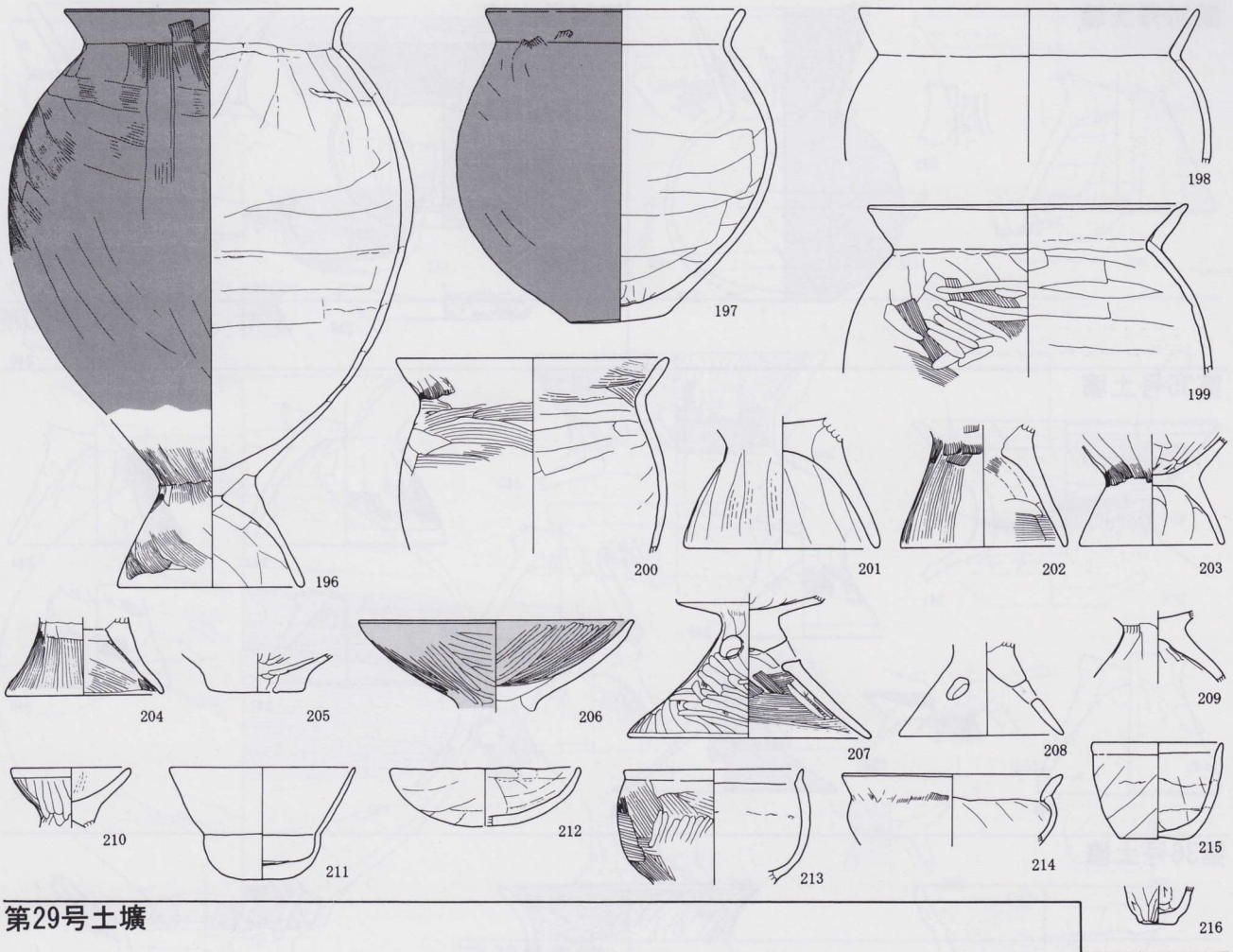
第26·27号土壤



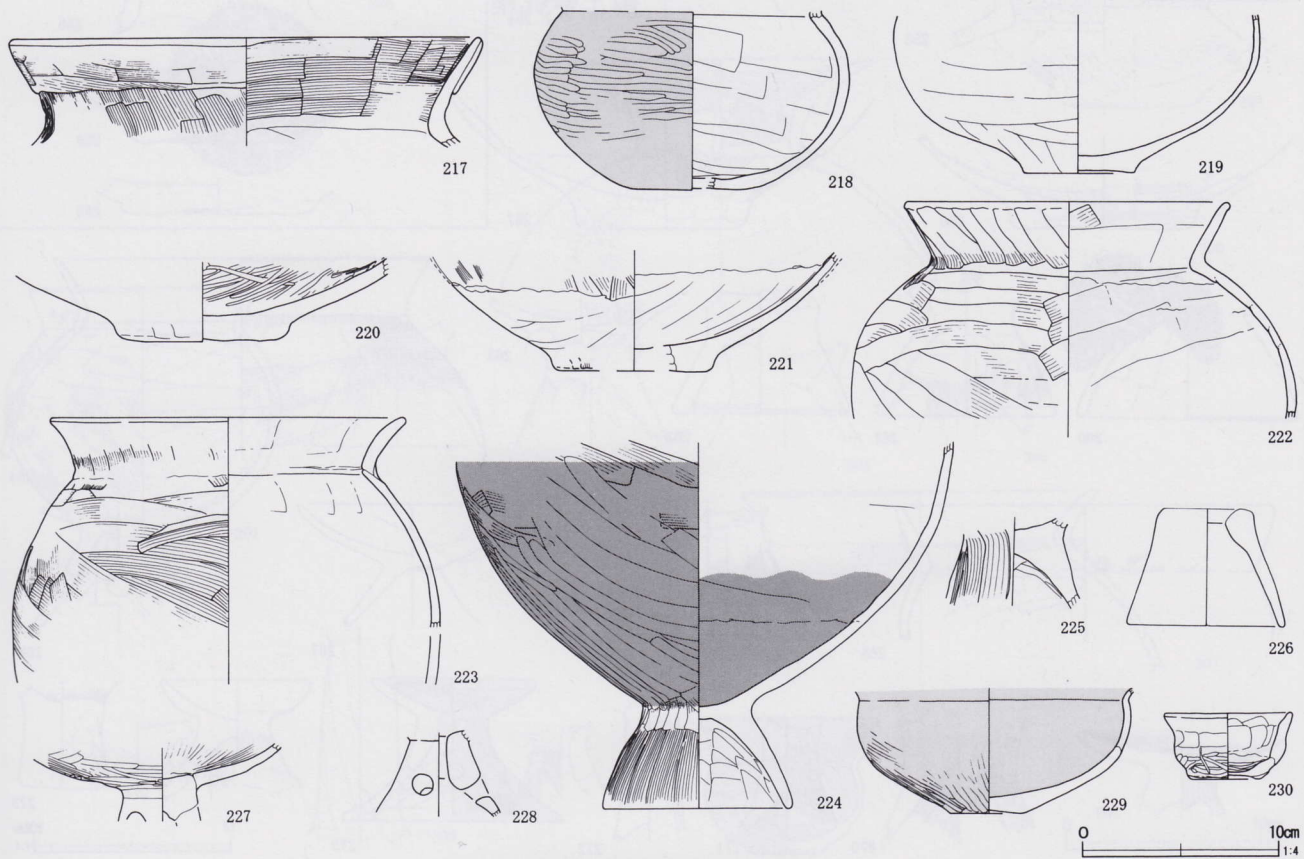
第28号土壤



第42图 土壤出土遺物(9)

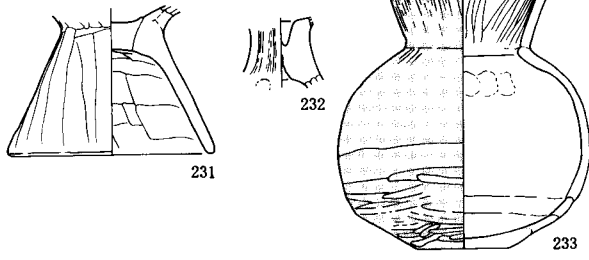


第29号土壤

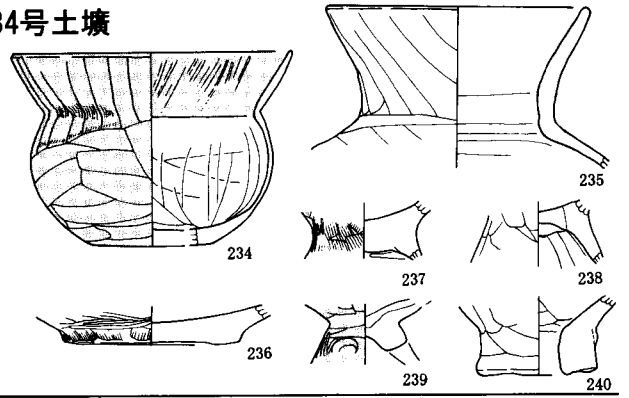


第43图 土壤出土遺物 (10)

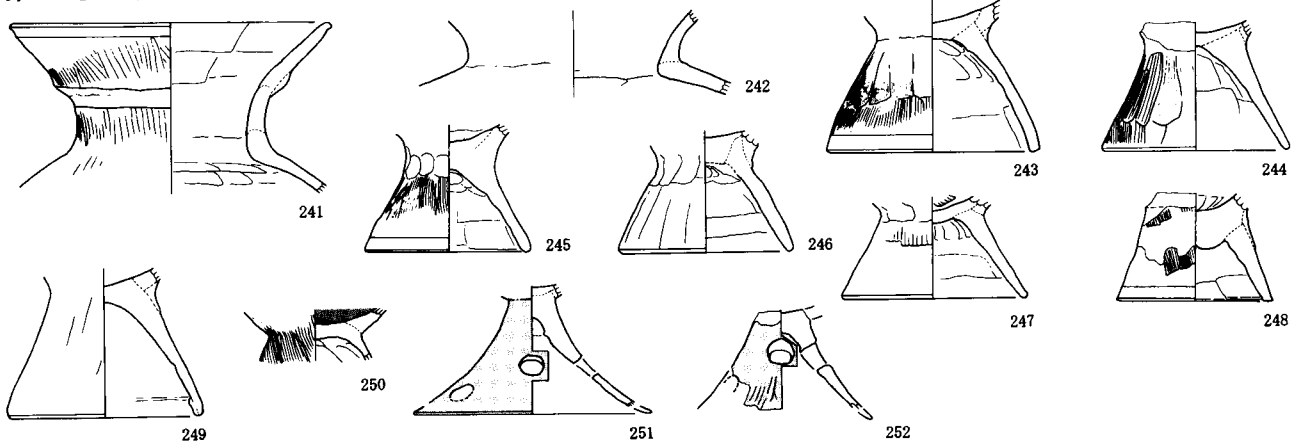
第30号土壤



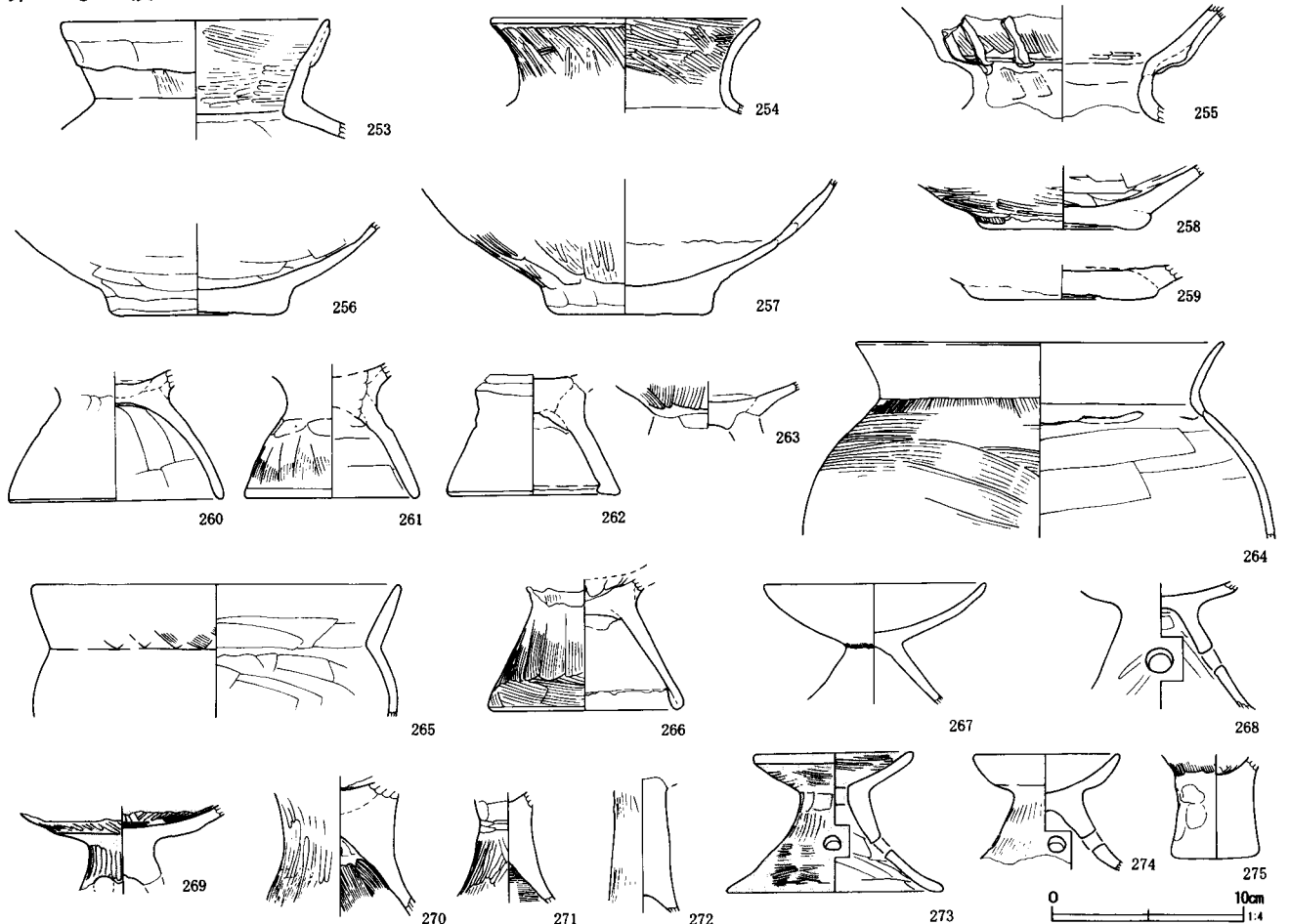
第34号土壤



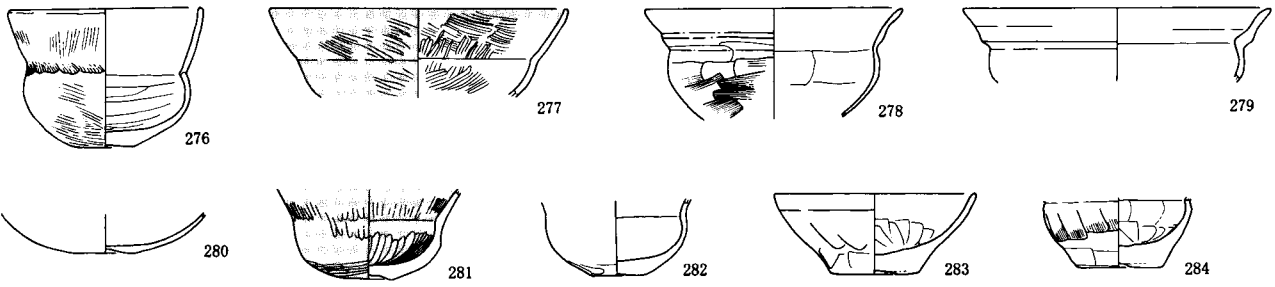
第35号土壤



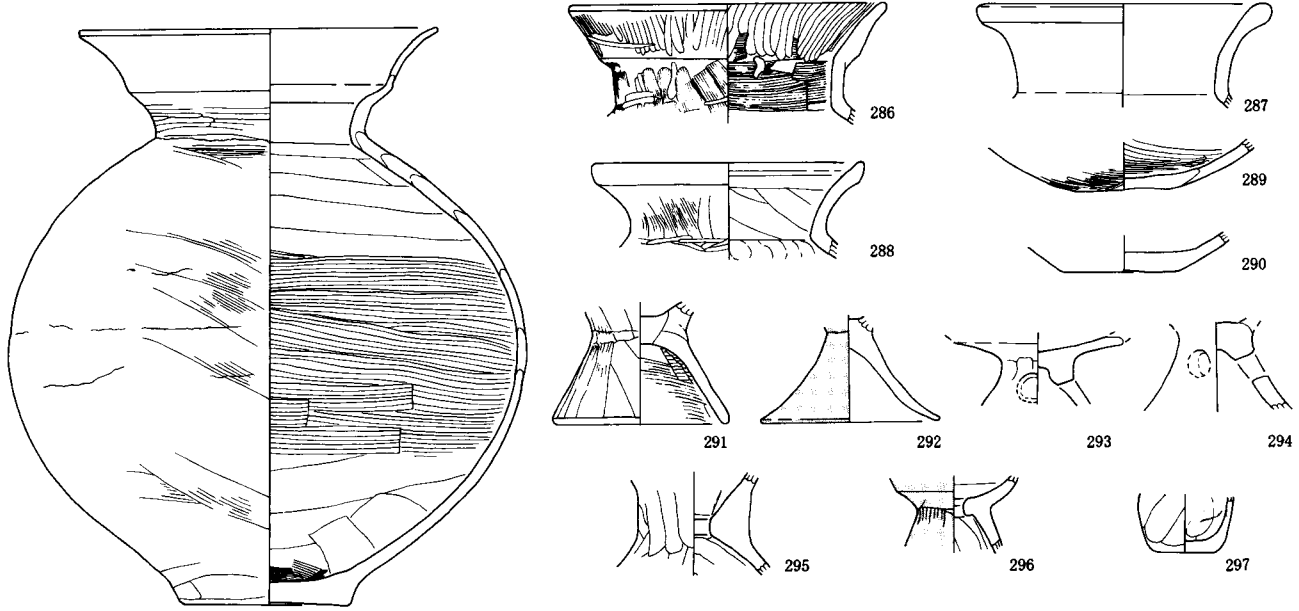
第36号土壤



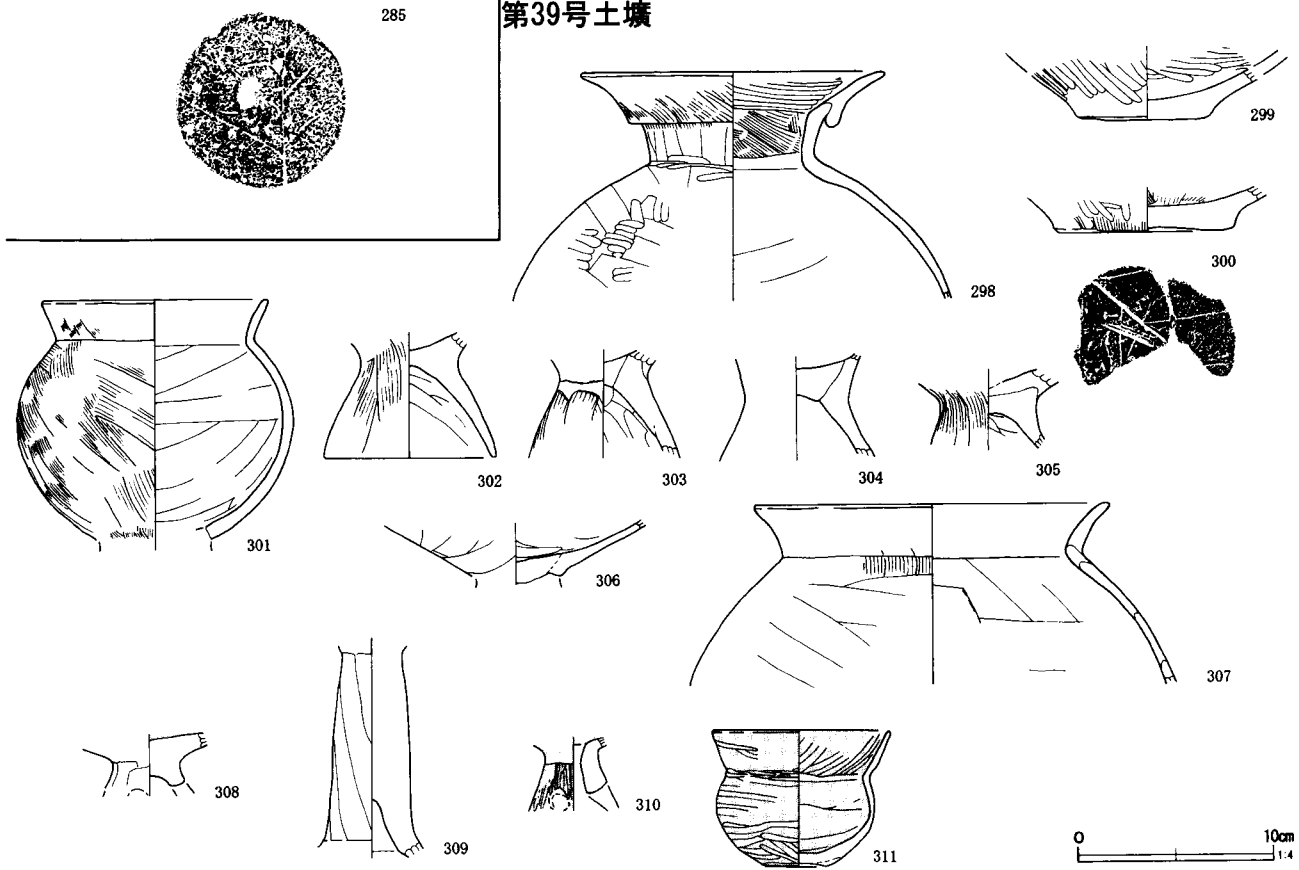
第44图 土壤出土遺物 (11)



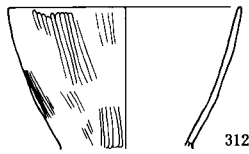
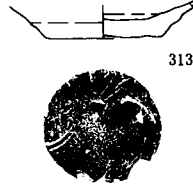
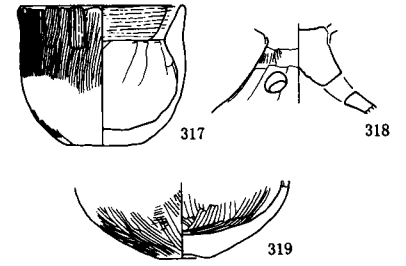
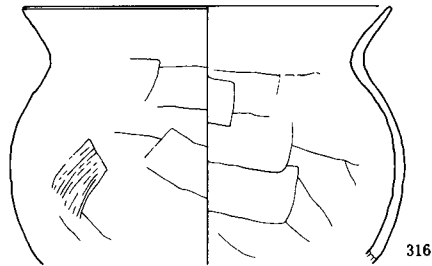
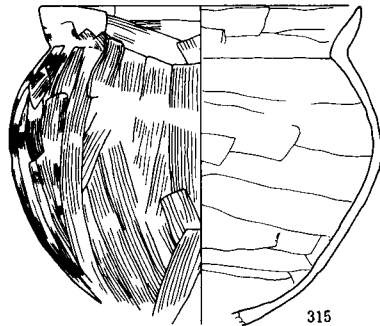
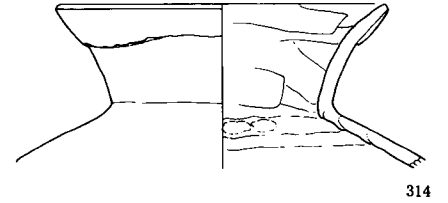
第38号土壤



第39号土壤



第45图 土壤出土遺物 (12)

第40号土壌**第41号土壌****第45号土壌**

第46図 土壌出土遺物 (13)

第53号土壌 (第31図)

F区Q-5グリッドで検出した。第50号溝跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.88 m、短軸0.77 m、深さ0.19 mであった。

遺物は出土しなかった。

あった。主軸方向はN-34°-Eであった。

覆土に浅間A軽石と考えられる白色粒子を含んでおり、近世以降の遺構と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第54号土壌 (第31図)

F区O-3グリッドで検出した。第34号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.22 m、短軸0.97 m、深さ0.11 mであった。主軸方向はN-59°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第56号土壌 (第31図)

F区O-5グリッドで検出した。第5号住居跡に隣接していたが、住居跡との関係は明らかにできなかった。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.58 m、短軸1.53 m、深さ0.11 mであった。主軸方向はN-33°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第55号土壌 (第33図)

F区S-3・4グリッドで検出した。北側を攪乱され、南側は調査区外へ延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は長方形と考えられる。規模は、長軸は2.65 mが残存し、短軸は1.57 m、深さ0.62 mで

第3表 土壌出土遺物観察表1 (第34～46図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SK1	壺	17.4	[7.2]		口縁部2/3	A	良好	灰褐		24-2
2	SK1	台付甕	(13.2)	17.0	8.0	1/2	A	不良	明赤褐	胴部内面風化	24-3
3	SK1	台付甕		[7.5]	8.3	脚部完形	A	良好	橙		
4	SK1	台付甕		[6.0]	10.0	脚部3/4	A	良好	にぶい黄橙		
5	SK1	台付甕		[5.3]	6.2	脚部ほぼ完形	A	良好	橙		
6	SK1	甕	16.2	[6.6]		口縁部1/3	A	普通	にぶい橙		
7	SK1	甕	(13.8)	[8.9]		口縁～胴部	A	良好	橙		
8	SK1	甕	(13.8)	[8.4]		口縁部1/5	A	良好	にぶい黄橙		
9	SK1	S字甕	(14.8)	[5.6]		口縁部1/4	A	普通	橙	外面胴部粘土紐の凹凸有	
10	SK1	S字甕	(16.0)	[6.1]		口縁部1/5	A	普通	橙		
11	SK1	高坏	(17.8)	10.9	(13.3)	1/3	A	普通	橙	透孔3、内外面風化	24-4
12	SK1	高坏	22.2	[6.3]		坏部3/4	A	良好	橙	赤彩	24-5
13	SK1	高坏		[6.7]		脚部1/3	A	普通	にぶい黄橙	透孔3	
14	SK1	高坏		[4.8]	11.5	脚部ほぼ完形	A	良好	橙	赤彩、外面風化	24-6
15	SK1	埴	13.0	12.4	3.1	ほぼ完形	A	良好	橙		24-7
16	SK1	鉢	11.3	[8.1]		2/3	A	良好	浅黄橙	赤彩、胴部外面風化	24-8
17	SK6	台付甕		[5.7]	8.2	脚部完形	A	良好	明赤褐		25-1
18	SK7	壺		[5.2]		口縁部ほぼ完形	B	普通	灰褐	内面胴肩部指頭痕	
19	SK7	台付甕		[10.3]	9.4	胴～脚部	A	普通	にぶい橙		
20	SK7	甕	17.8	[16.5]		口縁～胴部	G'	普通	灰褐		25-2
21	SK7	S字甕		[6.7]	9.4	脚部3/4	A	普通	にぶい橙	脚部内面天井部粘土貼付	25-3
22	SK8	高坏		[5.0]		接合部破片	A	普通	橙	風化、透孔3	
23	SK8	片口鉢	10.0	5.7	2.8	ほぼ完形	A	良好	橙	内面底部黒斑、外面風化	25-4
24	SK9	壺		[2.0]	4.6	底部完形	F	良好	灰褐	赤彩	
25	SK9	台付甕		[7.1]	11.4	脚部1/2	A	良好	にぶい黄橙	外面風化、内面天井部粘土貼付	
26	SK9	台付甕		[6.0]	(8.9)	脚部破片	A	良好	にぶい褐	軟質、内外面風化	
27	SK9	台付甕		[5.2]	8.8	脚部破片	A	良好	灰褐	内面ヘラ状工具痕	
28	SK9	鉢	(15.0)	[4.2]		口縁部破片	D	良好	灰黄褐	丸底鉢	
29	SK10	台付甕		[7.0]	(10.9)	脚部片	A	良好	黄褐	酸化鉄分が全体を覆う	
30	SK10	台付甕		[6.1]	(8.1)	脚部片	A	普通	明褐	酸化鉄分が全体を覆う	
31	SK10	器台		[5.0]		脚部片	A	普通	にぶい橙	外面風化、透孔上段3下段1	
32	SK11	壺		(13.0)	[5.0]	口縁部片	A	普通	にぶい橙	赤彩、外面風化	
33	SK13	壺	15.0	[14.4]		口縁～胴部	A	普通	橙	外面風化、内面胴部上位指ナデ	25-5
34	SK13	壺	(27.0)	[5.8]		口縁部破片	A	良好	橙		
35	SK13	壺		[6.8]		口縁～胴部	A	良好	にぶい黄橙	内面胴部粘土接合痕明瞭	
36	SK13	壺		[3.7]	8.4	底部完形	A	良好	橙		
37	SK13	壺		[3.2]	8.2	底部完形	A	良好	にぶい黄橙		
38	SK13	台付甕		[16.5]	10.0	胴～脚部	A	普通	にぶい黄橙		
39	SK13	甕	18.6	[8.6]		口縁～胴部	A	普通	灰黄褐		
40	SK13	台付甕		[7.3]	(10.0)	脚部1/3	A	普通	明赤褐	外面風化	
41	SK13	台付甕		[5.2]	9.0	脚部ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙		25-6
42	SK13	台付甕		[4.8]		脚部上半	A	普通	明赤褐		
43	SK13	台付甕		[7.4]	(10.3)	脚部1/2	A	良好	にぶい黄橙	内面粘土巻き上げ痕明瞭	
44	SK13	高坏		[4.9]		脚部	A	良好	橙		
45	SK13	高坏		[3.8]		脚部	A	良好	橙	透孔3、内面風化	
46	SK13	器台		[5.0]		脚部3/4	A	良好	にぶい黄橙	透孔3	
47	SK13	小型壺	(12.2)	9.8	3.2	2/3	A	普通	明赤褐		25-7
48	SK13	埴	(14.4)	9.1	3.4	1/3	A	普通	橙	外面風化	25-8
49	SK13	埴		[7.8]		胴部1/2	A	不良	にぶい橙	外面風化	26-1
50	SK13	鉢		[2.9]	3.9	胴部下半	A	普通	にぶい黄橙	風化、内面剝離顕著	
51	SK14	壺	(28.9)	[5.1]		口縁部破片	A	良好	灰黄褐		
52	SK14	壺		[6.0]		胴部1/2	A	普通	浅黄橙	赤彩、胴部内面指頭痕	
53	SK14	壺		[18.9]	(6.6)	頸～底部	A	良好	にぶい黄		26-2
54	SK14	壺		[13.3]	8.8	胴～底部	A	良好	にぶい橙		

第4表 土壌出土遺物観察表2 (第34～46図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
55	SK14	台付甕		[6.7]	10.2	脚部1/4	A	普通	橙		
56	SK14	台付甕		[6.0]	10.5	脚部完形	A	良好	にぶい橙		26-3
57	SK14	台付甕		[6.3]		脚部1/3	A	普通	橙	外面風化、内面天井部粘土貼付	
58	SK14	S字甕		[6.7]	8.0	脚部完形	A	良好	にぶい橙	脚部天井部指頭痕	26-4
59	SK14	高坏		[6.6]	11.5	脚部3/4	A	普通	橙	透孔3、内外面風化	
60	SK14	器台	9.1	[2.9]		受部	C	普通	灰白	赤彩、外面風化、水籤粘土	
61	SK14	器台		[6.6]	9.9	脚部1/4	A	普通	浅黄橙		
62	SK14	ミニチュア	(6.0)	4.9	2.4	ほぼ完形	A	普通	橙	内面体部上半指頭押痕	26-5
63	SK14	ミニチュア		[2.3]	3.4	胴～底部	A	普通	にぶい橙	内面指頭ナデ	
64	SK21	甕	(16.2)	[14.2]		口縁～胴部	A	良好	にぶい褐		26-6
65	SK21	台付甕		[10.1]	(10.1)	胴～脚部	A	普通	橙	内面風化	
66	SK22	台付甕		[5.2]	8.0	脚部1/4	A	普通	明赤褐		
67	SK24	台付甕	15.3	23.1	9.7	3/4	A	良好	にぶい黄褐		27-1
68	SK24	台付甕	19.7	[7.1]		口縁～胴部	A	良好	にぶい橙		
69	SK24	台付甕		[7.2]	8.2	脚部完形	B	良好	暗褐		27-2
70	SK24	平底甕	21.1	22.6	5.5	1/5	A	不良	灰褐	胴部内外面風化	
71	SK24	埴	23.1	25.3	40.0	ほぼ完形	A	良好	赤	赤彩	27-3
72	SK24	鉢	15.7	8.7	3.1	ほぼ完形	D	良好	灰褐	赤彩、外面風化、接合面刷毛目状の工具痕	27-4
73	SK25	壺	(16.8)	[2.8]		口縁部1/2	E	良好	浅黄橙	大廓風化	
74	SK25	壺	(14.4)	[4.6]		口縁部1/3	A	良好	明黄褐		
75	SK25	壺		[4.1]	9.5	底部完形	A	良好	にぶい黄褐	内面風化	
76	SK25	壺		[1.8]	8.2	底部完形	D	良好	浅黄橙		
77	SK25	壺		[2.2]	6.0	底部完形	A	良好	にぶい黄橙		
78	SK25	壺		[29.1]	8.9	胴～底部	A	普通	橙	外面底部被熱により器面荒	27-5
79	SK25	甕	17.0	[11.6]		口縁～胴部	A	普通	にぶい褐		27-6
80	SK25	甕	(17.1)	[12.1]		口縁～胴部	D	普通	浅黄	外面風化	
81	SK25	甕	(14.1)	[7.5]		口縁～胴部	A	普通	浅黄		
82	SK25	甕	(15.1)	[9.3]		口縁～胴部	A	良好	橙		28-1
83	SK25	甕	(14.8)	[6.1]		口縁部1/4	A	良好	にぶい黄橙		
84	SK25	台付甕		[7.5]		胴部下位	A	普通	浅黄		
85	SK25	台付甕		[20.6]		胴部2/3	A	普通	にぶい黄褐	煤	
86	SK25	台付甕		[18.3]		胴部下半	A	普通	明赤褐		
87	SK25	台付甕		[7.3]	(8.3)	脚部1/3	A	普通	橙	外面風化	
88	SK25	台付甕		[5.1]	(7.4)	脚部1/3	A	不良	橙	外面風化	
89	SK25	台付甕		[6.3]	9.9	脚部1/2	A	良好	にぶい黄橙		
90	SK25	台付甕		[3.5]		胴底部完形	B	良好	明赤褐	外面風化	
91	SK25	高坏		[2.6]		坏底部1/3	D	良好	橙	内面風化	
92	SK25	高坏	14.5	[5.0]		坏部完形	A	良好	明赤褐	赤彩	28-2
93	SK25	器台		[7.0]	10.0	脚部1/3	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	
94	SK25	高坏		[7.0]		脚部	A	良好	明赤褐		
95	SK25	鉢	11.8	6.0	4.6	ほぼ完形	D	普通	橙		28-3
96	SK25	鉢	9.0	5.5	3.7	ほぼ完形	D	普通	明赤褐		28-4
97	SK25		14.2	[5.7]		口縁～胴部	C	不良	にぶい橙	内外面風化、水籤粘土	28-5
98	SK24-25 ・SD22	壺		(11.8)	[6.8]	口縁部1/6	A	不良	橙	外面風化	
99	SK24-25 ・SD22	壺	14.9	[8.8]		口縁部1/2	A	普通	橙	赤彩、外面胴部風化	28-6
100	SK24-25 ・SD22	壺		[6.7]		胴部上位	C	良好	にぶい黄橙	赤彩、水籤粘土	
101	SK24-25 ・SD22	壺		[11.0]	(8.0)	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙	内面風化、外面胴～底部黒斑	
102	SK24-25 ・SD22	壺		[2.4]	4.5	底部完形	D	良好	にぶい黄橙	赤彩	
103	SK24-25 ・SD22	壺		[1.8]	6.6	底部完形	A	良好	にぶい黄橙	内面風化	
104	SK24-25 ・SD22	甕	19.3	[9.4]		口縁～胴部	A	良好	にぶい黄褐		28-7
105	SK24-25 ・SD22	甕	(18.7)	[5.0]		口縁部1/3	A	良好	にぶい黄褐	煤	
106	SK24-25 ・SD22	台付甕		[19.4]		胴部下半	A	良好	にぶい黄橙	煤	
107	SK24-25 ・SD22	台付甕		[7.0]	(11.1)	脚部1/2	A	良好	にぶい黄橙		
108	SK24-25 ・SD22	台付甕		[6.1]	(9.5)	脚部1/2	A	良好	橙		

第5表 土壌出土遺物観察表3 (第34～46図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
109	SK24-25 SD22	台付甕		[5.9]	(8.6)	脚部1/2	A	普通	浅黄橙		
110	SK24-25 SD22	高坏	(14.4)	[4.9]		坏部1/4	A	良好	橙	内面風化	
111	SK24-25 SD22	高坏		[7.7]	(12.8)	脚部1/2	A	良好	橙	赤彩	
112	SK24-25 SD22	高坏		[6.3]	(10.0)	脚部1/3	C	普通	浅黄橙	内外面風化、水簸した胎土	
113	SK24-25 SD22	高坏		[6.9]		脚部	A	良好	赤	赤彩	
114	SK24-25 SD22	小型壺	7.3	6.1	3.4	ほぼ完形	C	普通	橙	水簸粘土	28-8
115	SK24-25 SD22	小型壺	(6.4)	6.3	3.4	1/4	C	普通	にぶい橙	水簸粘土	29-1
116	SK24-25 SD22	小型壺	(6.8)	5.3]		口縁部4/5	C	普通	橙	水簸粘土	
117	SK24-25 SD22	ミニチュア	(5.8)	3.2	3.2	3/4	C	普通	黄色橙	水簸粘土	29-2
118	SK26	壺	19.3	35.0	10.6	ほぼ完形	A	良好	にぶい橙	赤彩、火だすき状の煤痕	29-3
119	SK26	壺	14.0	31.4	7.7	2/3	A	普通	にぶい黄橙	外面風化、内面底部刷毛状工具痕	29-4
120	SK26	壺	(11.7)	[10.6]		口縁～胴部	A	普通	にぶい黄橙	外面風化	
121	SK26	壺	11.4	20.7	6.1	2/3	A	普通	橙	外面風化	29-5
122	SK26	壺	(15.0)	25.0	6.2	3/4	A	普通	明赤褐	赤彩	29-6
123	SK26	壺		[14.3]	10.0	脚部下位	A	良好	にぶい橙	外面風化	
124	SK26	壺		[6.0]		口縁部1/4	A	普通	にぶい橙	内外面風化	
125	SK26	壺		[1.9]	5.5	底部完形	A	良好	褐灰		
126	SK26	壺		[2.3]	7.1	底部完形	A	普通	にぶい黄橙	内面底部鉄分付着、外面底部風化	
127	SK26	甕	18.2	[8.5]		口縁～胴部	A	不良	にぶい褐		
128	SK26	甕	(18.4)	[2.7]		口縁部1/2	D	普通	灰褐	外面頸部ヘラ工具による刻み痕	
129	SK26	甕	(18.4)	[4.4]		口縁部1/4	A	普通	灰黄		
130	SK26	台付甕	18.0	27.2	8.8	ほぼ完形	A	普通	橙	外面風化	30-1
131	SK26	台付甕	14.5	22.7	8.0	2/3	A	不良	にぶい橙	外面風化	30-2
132	SK26	甕	(15.7)	[16.5]		口縁～胴部	A	普通	にぶい褐	煤	
133	SK26	甕	(16.9)	[15.8]		口縁～脚部	A	普通	明赤褐～黒褐		30-3
134	SK26	台付甕		[9.0]	(9.7)	脚部1/3	D	良好	にぶい褐	赤彩	
135	SK26	台付甕		[8.0]	8.4	胴～脚部	A	普通	浅黄橙	外面脚部風化、内面胴底部ヘラ工具痕	30-4
136	SK26	台付甕		[7.9]	10.5	脚部ほぼ完形	D	普通	にぶい黄橙	内面胴底部工具圧痕	30-5
137	SK26	台付甕		[6.3]	(10.0)	脚部1/2	A	良好	橙	内面胴底部木口状工具痕	
138	SK26	台付甕		[6.4]	(9.5)	脚部1/2	D	普通	にぶい黄橙		
139	SK26	台付甕		[5.4]	(10.3)	脚部1/3	A	良好	にぶい黄橙		
140	SK26	台付甕		[4.9]	8.3	脚部完形	A	良好	にぶい黄橙		30-6
141	SK26	S字甕		[5.7]	(8.5)	脚部1/5	A	普通	明赤褐	脚部内面一部指頭痕残る	
142	SK26	S字甕		[1.9]		脚部上位	A	普通	橙	外面風化、内面天井部指頭痕	
143	SK26	S字甕		[23.6]	10.7	胴～脚部	A	良好	にぶい黄橙	脚部外面風化	
144	SK26	小型壺	(9.2)	[7.1]		口縁～胴部	C	普通	にぶい橙	内外面風化、水簸粘土	
145	SK26	小型壺	10.2	[3.5]		口縁部ほぼ完形	B	普通	灰黄褐		
146	SK26	鉢	11.8	5.6		胴～底部	C	普通	橙	内外面風化、水簸胎土	31-1
147	SK26	鉢	(10.5)	7.4	(2.4)	1/3	A	普通	灰白	体部内面鉄分付着	
148	SK26	ミニチュア	3.4			完形	B	普通	褐灰	鉢、内外面風化、器高6.0cm	31-2
149	SK26	ミニチュア	4.8	3.9	2.4	完形	B	普通	褐灰	鉢	
150	SK26	ミニチュア	4.8	3.6	3.1	完形	B	良好	にぶい赤褐	鉢	31-3
151	SK26	ミニチュア	5.4	3.9	3.0	完形	B	良好	にぶい橙	鉢、外面被熱による剥離、赤彩	31-4
152	SK26	ミニチュア	3.5	3.6	3.0	完形	B	良好	にぶい赤褐	鉢	31-5
153	SK27	壺	22.3	[9.0]		口縁部3/4	A	良好	にぶい橙		30-6
154	SK27	壺	16.8	[5.1]		口縁部1/8	A	良好	にぶい橙		
155	SK27	壺	(16.0)	[4.4]		口縁部1/8	A	良好	橙	外面風化	
156	SK27	壺		[10.1]	8.1	胴～底部	A	良好	灰白		
157	SK27	甕		[17.0]	5.4	口縁～底部	E'	不良	浅黄橙	外面風化	
158	SK27	壺		[20.9]	8.8	胴部3/4	A	普通	橙		31-7
159	SK27	壺		[4.6]	6.8	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙		
160	SK27	壺		[4.2]	(7.8)	底部1/4	A	良好	橙		
161	SK27	甕	17.9	[8.7]		口縁部1/4	A	不良	にぶい橙	内外面風化	
162	SK27	甕	20.5	[3.8]		口縁部1/2	A	良好	にぶい黄橙		

第6表 土壌出土遺物観察表4 (第34~46図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
163	SK27	台付甕		[7.3]	11.2	脚部	A	良好	にぶい黄橙		31-8
164	SK27	台付甕		[6.3]	10.0	脚部ほぼ完形	A	不良	にぶい褐	内外面風化	32-1
165	SK27	台付甕		[5.5]	8.4	脚部完形	D	普通	にぶい橙		32-2
166	SK27	高坏	23.5	13.0	11.9	1/5	A	良好	にぶい橙	赤彩透孔3	32-3
167	SK27	高坏		[7.7]		坏部1/3	E	普通	橙	内外面風化	32-4
168	SK27	高坏	(26.0)	[8.0]		坏部1/3	A	普通	橙	赤彩、内外面風化	
169	SK27	高坏		[8.5]	18.0	脚部1/3	D	良好	灰白	赤彩透孔3	
170	SK27	高坏		[8.4]	13.6	脚部2/3	A	普通	にぶい橙	赤彩痕透孔3、内外面風化	32-5
171	SK27	高坏		[7.4]	10.5	脚部ほぼ完形	A	普通	淡橙	透孔3、外面風化	
172	SK27	高坏		[6.0]		脚部1/4	A	普通	にぶい橙	赤彩透孔3、外面風化	
173	SK27	器台	(7.0)	[8.0]	(10.0)	ほぼ完形	A	普通	浅黄橙	赤彩	32-6
174	SK26-27	台付甕		[5.4]	8.8	脚部2/3	A	普通	橙		
175	SK26-27	高坏	13.3	14.3	17.7	1/3	A	普通	にぶい橙	内外面坏部風化、透孔有	32-7
176	SK26-27	高坏	10.4	[3.7]		坏部2/3	D	良好	赤	赤彩	32-8
177	SK26-27	器台	7.1	7.7	10.3	ほぼ完形	A	普通	にぶい橙	透孔3	33-1
178	SK28	壺	20.5	[8.1]		口縁部3/4	A	普通	橙	軟質、外面口縁部風化、三角形の粘土帯貼付	33-2
179	SK28	壺	(17.4)	[6.5]		口縁部2/5	A	良好	浅黄橙	硬質	
180	SK28	壺	(18.8)	[5.0]		口縁部2/5	A	普通	橙	軟質、外面風化	
181	SK28	壺	12.9	[5.7]		口縁部	A	良好	にぶい黄橙	接合部3角凸帯貼付	
182	SK28	壺	(13.9)	[4.8]		口縁部1/4	A	良好	橙	硬質、口縁粘土貼付	
183	SK28	壺	(14.0)	[4.3]		口縁部1/5	A	良好	にぶい黄橙	硬質、口縁粘土貼付	
184	SK28	壺	11.2	[3.2]		口縁部1/2	B	良好	にぶい褐	口縁粘土貼付	
185	SK28	壺		[9.5]		胴部	A	良好	灰黄褐	186と同一個体、焼成後胴部外側から穿孔	
186	SK28	壺		[4.5]	6.1	底部	A	良好	灰黄褐	185と同一個体	33-3
187	SK28	壺		[12.5]		胴部	A	良好	にぶい黄橙		33-4
188	SK28	壺		[14.5]		胴部上半	A	良好	灰褐	外面風化、内面胴部上位指頭痕	
189	SK28	壺		[6.0]		口縁欠	A	普通	橙	軟質、全体的風化	
190	SK28	壺		[7.7]	7.2	底部	A	良好	褐灰	全体的風化	
191	SK28	壺		[7.8]	6.4	底部	A	普通	橙	内外面風化	
192	SK28	壺		[11.2]	(10.7)	底部	A	良好	にぶい黄橙		
193	SK28	壺		[5.8]	7.6	胴~底部	A	良好	にぶい黄橙	外面風化、内面底部指頭痕	
194	SK28	壺		[8.2]	6.6	底部	A	良好	にぶい黄橙		
195	SK28	壺		[2.2]	5.4	底部	C	普通	浅黄橙	軟質、全体的風化、水鏡粘土	
196	SK28	台付甕	15.4	31.2	9.6	2/3	B	良好	明赤褐	外面風化、煤	33-5
197	SK28	平底甕	13.8	16.8	5.0	4/5	B	良好	暗褐	煤、外面風化	33-6
198	SK28	甕	(18.0)	[8.3]		口縁部2/5	A	普通	橙	軟質、全体的風化	
199	SK28	甕	(17.2)	[9.3]		1/4	A	良好	にぶい黄褐		
200	SK28	甕	(14.5)	[10.5]		口縁~胴部	A	普通	褐灰	外面風化	
201	SK28	台付甕		[7.0]	10.3	脚部	A	良好	橙	外面風化	
202	SK28	台付甕		[6.6]	(8.9)	脚部	A	普通	にぶい黄橙		
203	SK28	台付甕		[5.8]	7.5	脚部	B	良好	灰褐	小ぶりの脚部、内面底部深い	34-1
204	SK28	台付甕		[4.2]	(8.4)	脚部1/3	A	良好	にぶい黄橙		
205	SK28	甕		[2.1]	5.0	底部	A	良好	橙	底部孔(焼成前)	
206	SK28	高坏	(14.6)	[4.8]		坏部1/3	A	良好	にぶい赤褐	赤彩	
207	SK28	高坏		[7.8]	12.9	脚部	D	良好	にぶい褐	透孔3	34-2
208	SK28	高坏		[5.0]	8.6	脚部	A	普通	橙	透孔3、外面風化	
209	SK28	高坏		[3.9]		脚部	D	普通	浅黄橙	内外面風化	
210	SK28	器台	6.3	[3.2]		受部完形	A	良好	にぶい赤褐	内面風化、受部孔なし	34-3
211	SK28	罎	10.0	6.0	2.3	1/2	G'	良好	にぶい橙	軟質、全体的風化	
212	SK28	鉢	10.0	3.1		1/4	A	普通	にぶい橙	器台の受部か?、内面口縁部指頭痕	
213	SK28	鉢	(9.6)	[6.2]		1/2	D	良好	にぶい橙		
214	SK28	鉢	11.8	[3.8]		口縁部ほぼ完形	D	良好	にぶい黄褐	軟質、外面風化	
215	SK28	ミニチュア	(7.0)	5.2	3.7	底部完形	A	良好	にぶい褐	鉢	34-4
216	SK28	ミニチュア		[2.1]	1.6	底部	F	良好	浅黄橙	軟質	34-5

第7表 土壌出土遺物観察表5 (第34～46図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
217	SK29	甕	23.7	[5.5]		口縁部ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙	口縁粘土貼付	34-6
218	SK29	壺		[9.1]	5.5	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	
219	SK29	壺		[8.1]	5.7	胴～底部	A	普通	にぶい橙	内外面風化	
220	SK29	壺		[4.1]	(8.2)	底部	A	良好	にぶい黄橙	外面風化	
221	SK29	壺		[6.2]	(7.5)	底部	A	良好	にぶい黄橙	粘土紐で補強	
222	SK29	甕	(16.4)	[9.2]		口縁～胴部	A	良好	灰褐		
223	SK29	甕	18.0	[13.6]		口縁部3/4	A	良好	にぶい黄橙	ドーナツ状輪台	34-7
224	SK29	台付甕		[18.7]	9.5	胴～脚部	A	良好	にぶい黄褐	煤	34-8
225	SK29	台付甕		[4.6]		脚部	A	普通	にぶい黄橙		
226	SK29	台付甕		[6.0]	8.0	脚部	A	普通	にぶい黄橙	全体的風化	35-1
227	SK29	高坏		[3.8]		接合部	A	良好	浅黄橙	透孔3,内面ほぼ放射状のミガキ	
228	SK29	器台		[4.3]		脚部	H	普通	灰白	全体的風化透孔3	
229	SK29			[6.4]	3.8	胴～底部	D	良好	灰褐	赤彩,内外面風化	35-2
230	SK29	ミニチュア	6.3	3.4	3.5	ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙	鉢、底部輪台貼付(ドーナツ状)	35-3
231	SK30	台付甕		[7.5]	10.5	脚部50%	A	良好	灰褐		35-4
232	SK30	高坏		[3.6]		脚部	A	良好	にぶい褐	貫通孔	
233	SK30	坩	9.6	15.8	4.6	完形	A	良好	にぶい橙	赤彩,内面胴部上半指頭痕	35-5
234	SK34	壺	14.0	9.9	6.5	1/4	A	良好	にぶい橙	赤彩	35-6
235	SK34	壺	13.1	[8.2]		口縁部ほぼ完形	A	普通	橙		35-7
236	SK34	壺		[2.0]	9.0	底部1/4	A	普通	褐灰		
237	SK34	台付甕		[3.0]		接合部完形	G	普通	にぶい橙	内面風化	
238	SK34	台付甕		[3.2]		脚部上半	A	不良	にぶい赤褐	脚部内面へラ状工具痕明瞭	
239	SK34	高坏		[3.0]		接合部	A	良好	にぶい黄橙	赤彩透孔3	
240	SK34	甕		[4.0]	6.0	底部完形	A	良好	にぶい橙	底部孔1	
241	SK35	壺	(16.0)	[8.7]		口縁部1/5	A	良好	にぶい黄橙	外面胴部風化・酸化鉄分	35-8
242	SK35	壺		[4.3]		頸部1/3	A	普通	褐灰	内外面風化	
243	SK35	台付甕		[7.7]	(10.2)	脚部のみ	A	良好	にぶい褐		
244	SK35	台付甕		[6.5]	(9.3)	脚部のみ	A	良好	にぶい橙		
245	SK35	台付甕		[6.5]	8.1	脚部完形	D	良好	灰黄褐	外面接合部・内面天井部指頭痕	36-1
246	SK35	台付甕		[6.2]	(8.4)	脚部2/5	D	良好	にぶい橙	表面風化,内面天井粘土貼付	
247	SK35	台付甕		[5.2]	(9.2)	脚部1/2	A	普通	橙	表面風化,内面天井へラ工具押さえ	
248	SK35	台付甕		[5.5]	(8.0)	脚部片	A	良好	褐灰		
249	SK35	S字甕		[7.6]	(9.5)	脚部片	A	普通	にぶい橙	全体的風化,S字の模倣品	
250	SK35	S字甕		[2.6]		脚部	A	良好	灰褐	内面底部コゲ付着・厚手模倣品	
251	SK35	高坏		[5.9]	(12.0)	脚部	A	普通	にぶい橙	赤彩透孔上段4・下段1,全体的風化	
252	SK35	高坏		[5.0]		脚部片	A	良好	にぶい褐	赤彩透孔上段3・下段3	
253	SK36	壺	13.8	[6.2]		口縁部完形	A	良好	灰黄褐	外面風化	36-2
254	SK36	壺	13.7	[4.9]		口縁部3/4	A	良好	にぶい黄		
255	SK36	壺		[6.1]		口縁部片	A	良好	にぶい橙	内外面風化,棒状浮文3本確認	
256	SK36	壺		[4.8]	9.2	底部1/2	A	良好	にぶい橙	内外面風化,底部は輪台	
257	SK36	壺		[7.1]	8.2	底部完形	A	良好	にぶい橙	内外面風化	
258	SK36	壺		[3.4]	8.3	底部完形	A	良好	にぶい橙	ドーナツ状輪台	
259	SK36	壺		[1.8]	9.6	底部完形	A	良好	浅黄		
260	SK36	台付甕		[6.8]	(11.0)	脚部1/4	A	良好	橙	外面風化	
261	SK36	台付甕		[7.1]	(8.8)	脚部1/4	D	普通	にぶい褐		
262	SK36	台付甕		[6.3]	8.6	脚部ほぼ完形	A	普通	にぶい橙	内外面風化	36-3
263	SK36	台付甕		[2.5]		接合部	A	良好	灰黄褐	内面風化	
264	SK36	甕	(18.9)	[10.2]		口縁～胴部	A	普通	橙		
265	SK36	甕	(19.0)	[6.9]		口縁部1/5	C	良好	にぶい黄橙	外面風化,水鏡粘土	
266	SK36	台付甕		[6.8]	9.6	脚部1/3	A	良好	橙	S字甕の模倣品か?	
267	SK36	高坏	11.5	[2.9]		坏～接合部	C	普通	にぶい赤橙		36-4
268	SK36	高坏		[6.6]		接続～脚部	A	良好	橙	透孔3,内面坏部・外面風化	
269	SK36	高坏		[4.6]		接続部	A	良好	にぶい黄橙	赤彩透孔3	
270	SK36	高坏		[7.3]		脚部	D	良好	にぶい黄橙		

第8表 土壌出土遺物観察表6 (第34～46図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
271	SK36	高坏		[5.8]		脚部	A	良好	にぶい橙	棒状脚	
272	SK36	高坏		[7.0]		脚部	A	良好	にぶい橙	棒状脚風化	
273	SK36	器台	8.2	7.2	(11.2)	3/5	A	良好	明赤褐	透孔3.赤彩	36-5
274	SK36	器台	7.5	[5.7]		受～接合部	A	普通	橙	透孔4.赤橙色に変色(2次焼成か?)	
275	SK36	台		[5.5]	4.4	—	D	良好	にぶい橙		36-6
276	SK36	埴	9.7	7.1	2.8	ほぼ完形	B	普通	にぶい赤褐	内外面風化	36-7
277	SK36	丸底鉢	(15.0)	[4.6]		口縁部1/5	A	良好	にぶい褐	赤彩	
278	SK36	丸底鉢	(13.0)	[5.7]		1/4	A	良好	灰黄褐	光沢のある黒色付着物有(外面黒色処理?)	
279	SK36	丸底鉢	(15.8)	[3.8]		口縁部片	C	良好	灰白	軟質、全体的風化、水箒粘土	
280	SK36	丸底鉢		[2.0]	3.0	底部	A	普通	灰黄褐	風化	
281	SK36	丸底鉢		[4.6]	2.4	口縁欠	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	36-8
282	SK36	小型鉢		[3.9]	2.7	口縁欠	A	普通	橙	風化	
283	SK36	小型鉢	10.2	[4.1]	4.4	80%	A	良好	灰黄褐	底部輪台	37-1
284	SK36	小型鉢		[3.5]	4.4	口縁欠	A	普通	にぶい黄橙	底部輪台	37-2
285	SK38	壺	18.1	29.6	8.6	3/4	D	良好	にぶい橙		37-3
286	SK38	壺	15.4	[6.2]		口縁部ほぼ完形	A	普通	灰褐	口縁部工具による擦痕が多数巡る	37-4
287	SK38	壺	14.9	[5.3]		口縁部1/4	A	普通	にぶい橙	内外面風化	
288	SK38	壺	13.6	[4.9]		口縁部1/6	B	普通	橙	内面胴部指頭痕	
289	SK38	壺		[2.5]	4.6	底部完形	A	普通	にぶい褐		
290	SK38	壺		[2.0]	5.8	底部完形	A	普通	橙	内外面風化	
291	SK38	台付甕		[7.2]	8.7	脚部1/5	D	普通	にぶい赤褐		
292	SK38	高坏		[5.3]	9.1	脚部1/8	C	普通	にぶい橙	赤彩風化外面接合部へラ工具痕水箒粘土	
293	SK38	高坏		[3.2]		坏～脚部4	A	良好	にぶい黄橙	透孔有	
294	SK38	高坏		[4.6]		脚部1/3	A	普通	にぶい橙	内外面風化透孔3	
295	SK38	器台		[5.3]		受～脚部	A	良好	灰黄		
296	SK38	器台		[4.0]		受～脚部	A	良好	にぶい橙	赤彩	
297	SK38	ミニチュア		[3.0]	3.3	胴～底部	F	普通	にぶい黄橙		37-5
298	SK39	壺	(15.2)	[11.7]		口縁～胴部	D	良好	にぶい黄橙		37-6
299	SK39	壺		[3.8]	6.7	底部完形	A	良好	灰褐	底部外面モミ圧痕	
300	SK39	壺		[2.3]	8.9	底部2/3	A	良好	にぶい橙	木葉痕	
301	SK39	台付甕	(11.2)	[12.3]		口縁～胴部	A	普通	橙		
302	SK39	台付甕		[6.5]	7.6	脚部1/5	A	不良	橙		
303	SK39	台付甕		[5.5]		脚部1/4	C	普通	灰黄褐		
304	SK39	台付甕		[5.3]		脚部1/5	A	普通	橙	内外面風化	
305	SK39	台付甕		[4.2]		脚部	A	普通	にぶい橙		
306	SK39	台付甕		[3.1]		胴部	A	不良	にぶい橙		
307	SK39	甕	(17.8)	[9.3]		口縁～胴部	A	普通	明赤褐		
308	SK39	高坏		[3.1]		坏～脚部	A	普通	橙	赤彩内外面風化透孔3	
309	SK39	高坏		[11.2]		脚部	C	良好	浅黄橙	柱状脚	
310	SK39	器台		[3.3]		脚部	C	普通	浅黄橙	赤彩透孔3.水箒胎土	
311	SK39	埴	8.9	[6.9]		口縁～胴部	D	普通	明褐灰	赤彩	38-1
312	SK40	埴	(11.8)	[7.4]		脚部2/5	A	良好	橙	内面風化	38-2
313	SK41	皿	[1.8]	(5.8)		底部	その他	良好	橙	風化、かわらけ	
314	SK45	壺	(16.5)	[8.4]		口縁	A	良好	明赤褐	風化著しい	38-3
315	SK45	台付甕	16.3	[16.4]		2/3	A	良好	橙		38-4
316	SK45	甕	(18.8)	[13.1]		口縁～胴部	A	普通	橙	全面風化	
317	SK45	鉢	(8.4)	7.2	3.8	1/2	A	良好	明黄褐		38-5
318	SK45	高坏		[4.6]		脚部1/3	C	良好	黄橙	内外面風化	
319	SK45	小型壺		[3.9]	2.6	1/4	D	良好	明赤褐		

第57号土壙（第47・48図）

第57号土壙は、調査中、第2号周溝遺構（SR2）として調査していたものである。

当初は、方形周溝墓あるいは周溝遺構の溝として番号を付して調査を実施した。しかし次の観点から、土壙と判断した。

- 1 遺構の平面形状が土壙状で、方形に巡らない。
- 2 出土遺物が多量に出土し、甕の比率が極めて高いこと。
- 3 底部穿孔の土器が1点も出土しなかったこと。

以上の点から、方形周溝墓あるいは周溝遺構とは異なる遺構と判断し、土壙番号を付して報告する。調査中に付した第2号周溝遺構（SR2）は欠番とし、新たに第57号土壙（SK57）とする。

第57号土壙は、A区H・I-3グリッドで検出した。第3号掘立柱建物跡に壊されていた。

遺構は、A区谷との境界付近で検出した。埋没谷のIX層（第6図）に上部を覆われ、第X層を掘り込んでいた。

遺構の東側にはA区谷部の土器集中区が近接して存在する。

平面の形状は丸みを持った長方形で、やや弧状にカーブしていた。このため、調査当初は、方形周溝墓あるいは周溝遺構の溝の一部と考えられた。

また、遺構の南端の一部が調査区外へ伸びているが、断面の観察で立ち上がりを検出したため、遺構は完結していると考えられる。

遺構の規模は、長軸6.07 m、短軸2.66 m、深さは、最も深い部分で0.56 mであった。主軸方向はN-56°-Eであった。

遺構底面の形状は、南側が一段深くなっていた。このため、二つの土壙が重層的に重複しているように見えるが、土層断面の観察により、単独の土壙であると判断した。

遺構覆土は、上層は、1～3層まではA区谷部へと連続し、遺構の全体を覆っていた。このため、4層以下が土壙覆土と考えられる。

5層は焼土・炭化物が主体となる層で、この5層を中心に遺物が多量に出土した。また、下層の6層中にも断続的であるが焼土を検出した。

8層は、地山の黄褐色土ブロックを主体的に含み、9層では、炭化物・焼土粒子を含んでいたが、遺物は殆ど出土しなかった。8・9層が埋没あるいは埋め戻された後、遺物が混入したものと考えられる。

遺物の出土状態は、北側の浅い部分に集中する傾向があるが、概ね遺構全域にわたって出土した。

断面の分布状況からは、流入した方向については明らかにできなかったが、平面の分布状況では、北側のコーナー部を中心に放射状に分布することが観察できる。

また、出土遺物は、図示可能な遺物に完形土器が少なく、完形に近い土器であっても、接合個体がやや離れて出土しており、さらに非掲載となった破片資料中には、A区谷部土器集中区と接合した個体もあった。

これらのことから、出土遺物は、土壙に置かれていたという状況ではなく、北コーナー部側にある第1号周溝遺構、第1号竪穴住居跡等の、遺構の集中する方向から投げ込まれ、廃棄されたとするのが妥当であると考えられる。

出土遺物は、壺・甕・台付甕・平底甕・S字状口縁台付甕・甌・高坏・器台・小型壺・埴・鉢・ミニチュア土器などが多量に出土した。図示可能な遺物は155点であった。また、大廓式大型甕が1個体、大型壺片が1個体出土した。

他に小片のため図示できなかった遺物は、甕口縁部213個体・3490 g、甕脚部83個体・2092 g、甕胴部14745 g、壺口縁部56個体・1630 g、壺底部24個体・1130 g、壺胴部11490 g、高坏35個体・570 g、小型品99個体・1240 g、器台13個体・580

g、器種不明小型品 820 g であった。

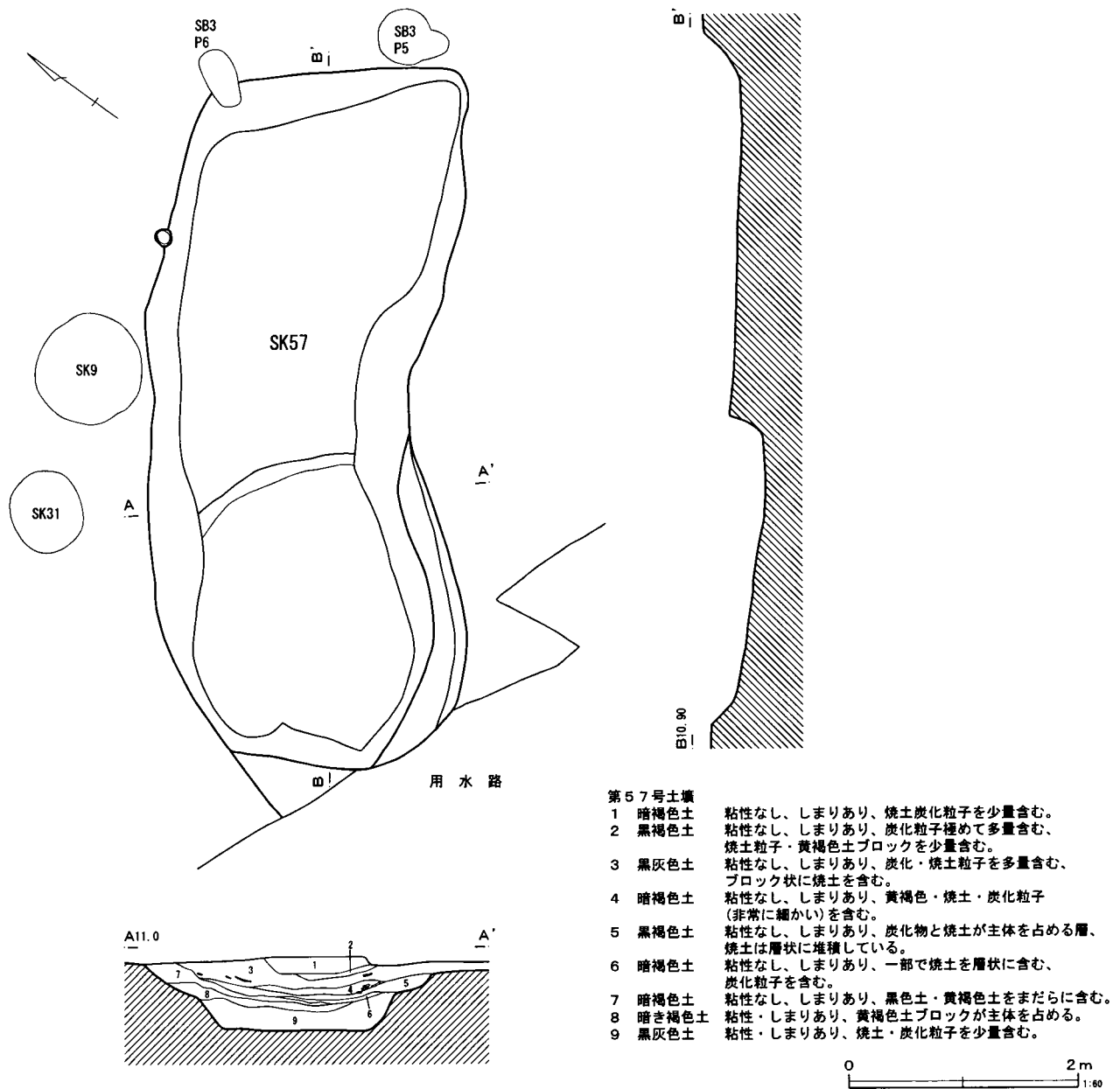
以下出土遺物についての概要を述べる。(第 49 図～第 55 図、第 9 表～第 11 表)

1～48 は、壺である。図上で完形に復元できた遺物は、1・2 のみであるが、残存率は良好でない。

1～18 は口縁部の形態が把握できる資料である。

1 は、単純口縁の壺である。やや直線的に立ち上

がる口縁部を有する。頸部に断面三角形の突帯が廻る。口縁部外面は、縦方向の刷毛目を残し、端部は強いヨコナデが施されている。胴部は粗いヘラミガキが施される。内面は、ヘラナデされるが、内外面とも、風化が著しい。2 は、折り返し口縁となる壺である。底部は輪台状で、胴部はなで肩で、やや下膨れの胴部となる。胴部に比べ、頸部～口縁部は厚い。全体的に風化が著しく、調整は不明瞭であった。3 は、胴部下位～底部を欠損していた。球形の胴部



第 47 図 第 57 号土壌

で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。頸部に、断面三角形の突帯が廻る。外面口縁部は縦方向のヘラミガキ、肩部はナデ、胴部は刷毛が施されていた。内面は、口縁部が横方向のヘラミガキ、胴部はヘラナデが施されていた。内面胴部上半には、指押さえ痕が認められた。また、外面全面と、内面口縁部に赤彩が施されていた。

4は、単純口縁の壺で、口縁部は大きくラップ状に外反する。底部を欠損していた。全体的に風化しており、調整は不明瞭であった。

5は、なで肩で、外反しながら立ち上がる口縁部を有する。胴部下半を欠損していた。胴部外面は刷毛目の後粗いヘラミガキ、口縁部はヨコ刷毛の後縦方向のヘラミガキが施されていた。

内面は、口縁部がヨコ刷毛の後縦方向のヘラミガキ、胴部はヘラナデが施されていた。

6～18は、口縁部のみ残存していた。

6は、折り返し口縁で、内外面とも、口縁部は刷毛の後縦方向の粗いヘラミガキ、頸部は刷毛の後横方向の粗いヘラミガキが施されていた。

7は、口縁部に幅広の粘土帯が貼付される。口縁部外面は縦方向のヘラミガキ、頸部は縦方向にヘラケズリされていた。

8は、幅広の粘土帯を貼付し、下端部に刻み目が施されていた。口縁部と底部および、口縁端部に縄文が施文されていた。外面頸部は刷毛の後、細かいヘラミガキが施されていた。

9は、直立気味に立ちあがる頸部に大きく外傾し、短く立ち上がる口縁部を有する。口縁下端部に、断面三角形の粘土帯を貼付し、外見上は、複合口縁部となっている。内外面とも赤彩されていた。

10は、直線的に外傾する口縁部を有し、幅広の粘土帯を貼付している。表面の風化が著しいが、頸部に、縦方向の刷毛目の痕跡が認められた。

11は、頸部から大きく開き、端部が受け口状となる口縁部を有する。口縁端部は、内外面とも強いヨコナデが施されていた。

12・13は、長い口縁部に、やや幅の狭い粘土帯を貼付または折り返す口縁部を有する。13は、内外面とも赤彩されていた。

14は、頸部から直立気味に立ち上がり、口縁部はやや内湾しながら外傾する。

15は、短い口縁部に、幅の狭い粘土帯を貼付または折り返す口縁部を有する。口縁端部は、強いナデにより、面取り風に平坦になっていた。

16は、頸部の屈曲が強く、大きく外傾する口縁部である。厚みのある粘土帯を貼付または折り返している。全体的に、風化が著しい。

17は、口径が24.6cmとなる広口の壺である。直立気味に立ち上がり、厚みのある粘土帯を貼付している。内外面とも、ヘラミガキが施されていることから、壺とした。

19～29は、口縁部を欠損する壺である。

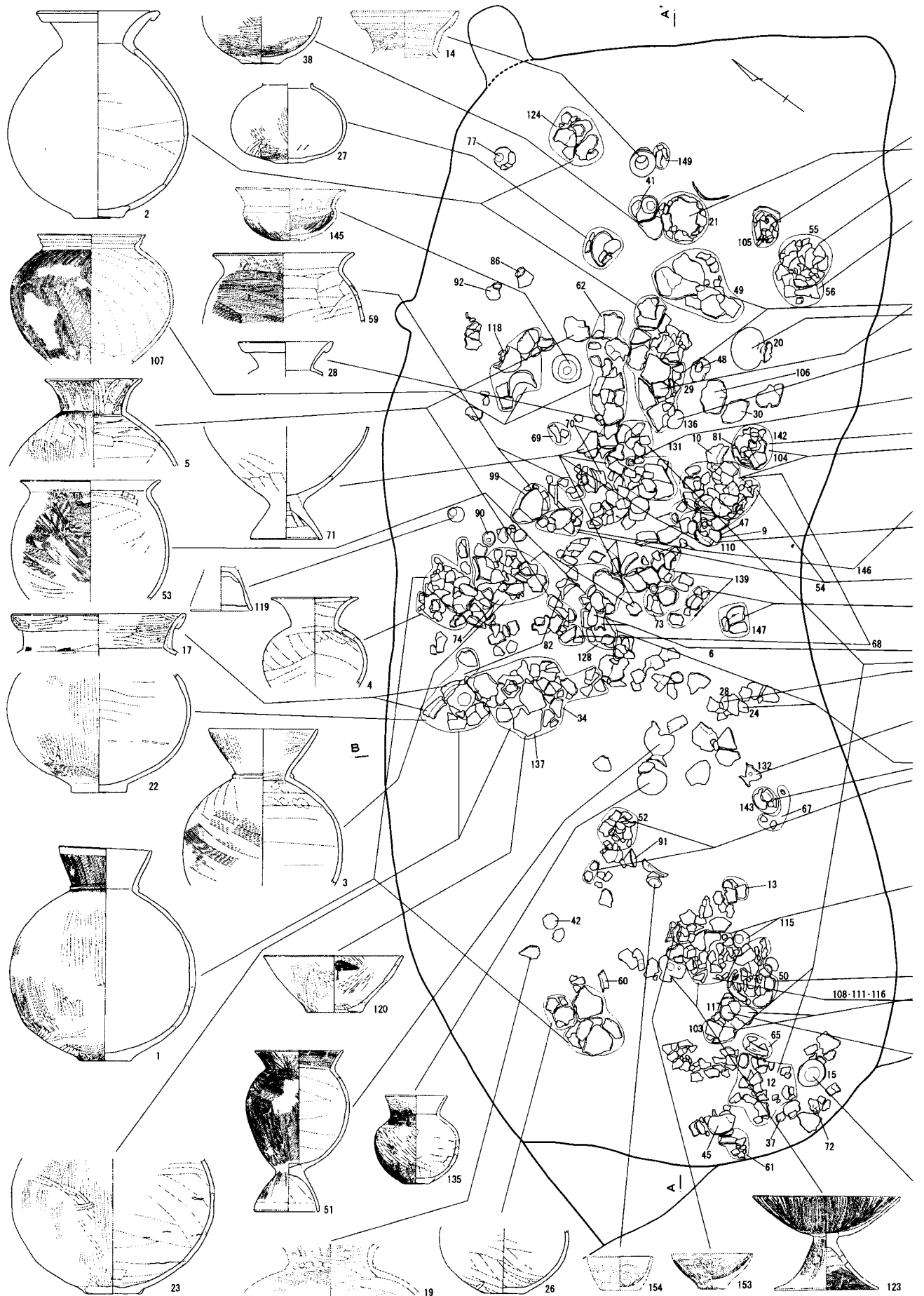
19は、頸部に、円形浮文が連続して貼付されていた。外面は、頸部は刷毛目、肩部は細かいヘラミガキ、内面は、頸部が粗いヘラミガキ、肩部はヘラナデされていた。また、胎土に白色針状物質を含んでいた。

20は、口縁部を欠損していた以外は、完存していた。底部は平底で、球形の胴部となる。外面は、底部付近に一部刷毛目を残し、胴部は下位が横方向のヘラミガキ、肩部にかけては縦方向のヘラミガキが施されていた。内面は、観察が困難であったが、底部付近に刷毛目が認められた。胴部はヨコナデされていた。また、外面全面に赤彩されていた。

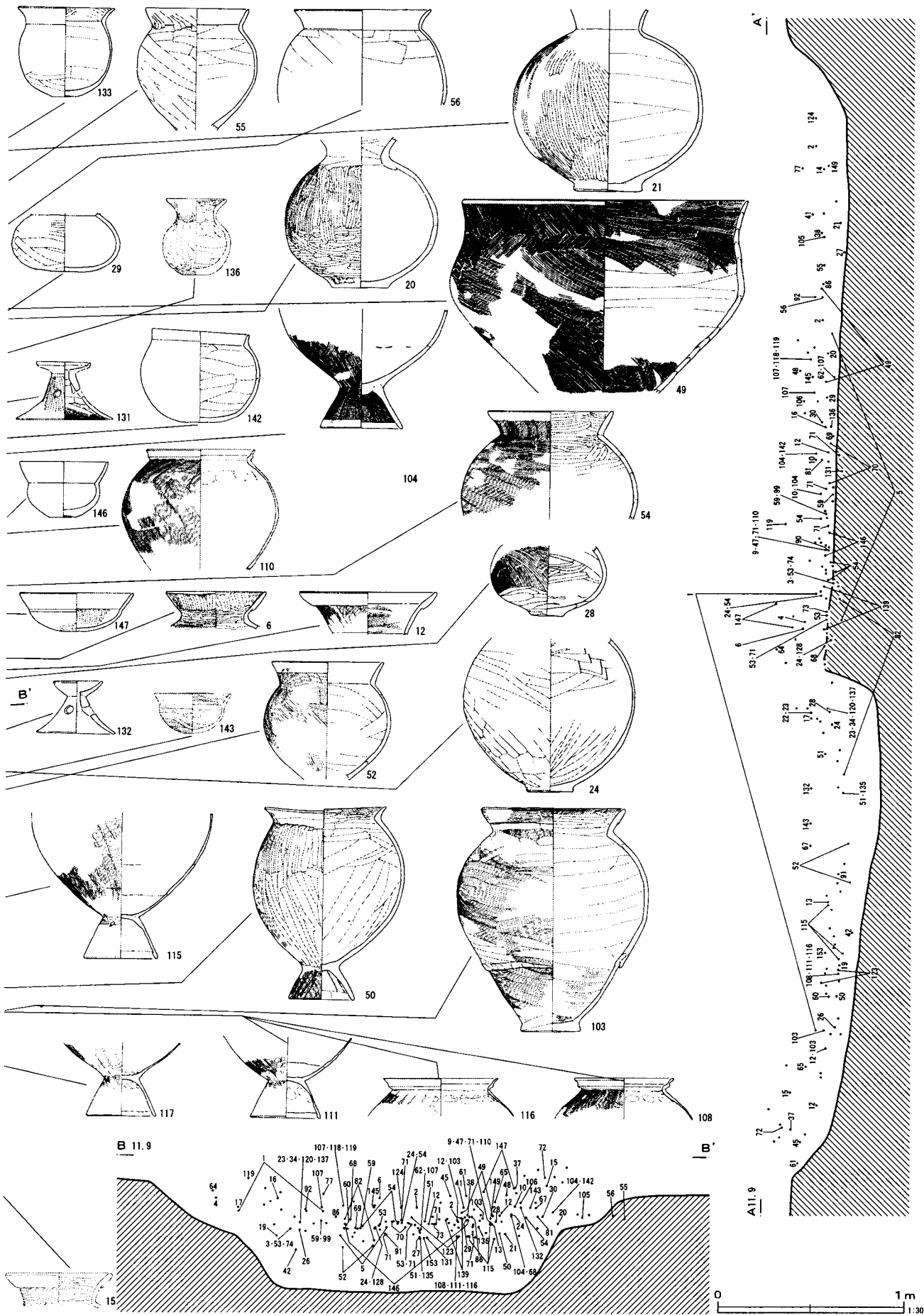
21・22は、厚みのある円盤状の底部で、球形の胴部となる。外面は、縦方向のヘラミガキ、内面は、幅広の工具によるナデが施されている。

23は、やや大型の壺である。球形胴で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は幅広の工具によるナデが施されていた。

24は、小さめの底部で、胴部はやや長胴となる。外面は、風化していたが、内外面ともヘラ状の工具によるナデが認められた。



第 48 图 第 57 号土壤遺物出土狀況



25～29は、やや小型の壺である。

25は、口縁部を欠損していた。底部は輪台状で、胴部外面は、粗い刷毛、内面は指押さえ痕が明瞭に認められた。口縁部付近は、内面に横方向のヘラミガキが認められた。

26は、平底で、球形の胴部となる。全体的に風化していたが、内外面とも、ヘラナデが認められた。

27は、小さな底部に、やや下膨れの胴部となる。口縁部を欠損していた以外は、ほぼ完形であった。底部は、輪台状である。胴部は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデが施されていた。外面全面に赤彩が認められた。

28は、小さな底部で、やや下膨れとなる。外面は、胴部上半部は刷毛目が残し、下位はナデが施されていた。内面は、ヘラナデされるが、胴部中位は、幅の狭いヘラミガキ状となる。

29は、丸底の底部にやや扁平な胴部となる。口縁部以外はほぼ完形となる。内外面とも風化が著しい。

30～45・48は、壺底部の破片である。全体の器形が明らかとなったものはない。

30は円形の粘土板に、リング状に粘土紐を貼り付け、円盤状の底部としている。胴部がやや水平に開くため、大型の壺であった可能性がある。

31は、底径小さく、小型壺であった可能性がある。

32は、壺の底部と考えられるが、内面全面に赤彩が認められた。鉢の可能性があったが、底径が大きく、壺とした。

33・34は、やや上げ底風で、円盤状の底部に、胴部を接合している。

35は、小さめの底部に、水平に開く胴部を有する。下膨れの形態の壺であったと考えられる。

36は、円盤状の底部に胴部を貼り付けている。外面底部側面に、粘土が貼付されている。

37は、全体的に薄い作りであるが、風化が著しい。

38は、胴部下半まで残存していた。内外面ともヘラミガキされていた。また、内外面に赤彩が認められ、全体の器形は明らかにできなかったが、2次的

な使用か、広口の壺または鉢であった可能性がある。

39は、やや厚めの底部で、胴部は丸味を持っており、球形胴となっていたと思われる。

40は、底部から胴部が内外面とも直線的に立ち上がっていた。

41は、底部が輪台状で、幅広の粘土紐がリング状に貼付されていた。内外面に赤彩が認められ、全体の器形は明らかにできなかったが、2次的な使用か、広口の壺または鉢であった可能性がある。

42は小型壺の可能性はある。底部は輪台状で、内面は風化が著しかったが、外面は、底部まで赤彩されていた。

43～45・48は、底部に木葉痕が認められた。44は、輪台状、他は上げ底風であった。

46は、大廓式の大型壺の口縁部片である。口縁部下端の破片で、断面三角形の粘土紐を貼付し、外面に幅4mmの棒状浮文が貼付されていた。胎土は、白色の軽石状粒子を多量に含み、搬入品と考えられる。

47は、壺の胴部片である。肩部の破片で、刷毛状の工具による波状文に円形浮文が貼付されていた。

49～119は、甕である。台付甕、平底甕、S字状口縁台付甕がある。

49は、口径40.2cmとなる大型甕である。底部を欠損していたため、台付甕となるか、平底甕となるかは明らかにできなかった。底部から直線的に立ち上がり、胴部上位に最大径を有する。頸部の屈曲はなく、緩やかに上方へ立ち上がる。外面の調整は、粗い刷毛目が施され、口縁端部は、ヨコナデされていた。内面は、口縁部と底部は粗い刷毛目、胴部はヘラナデされていた。胎土は、白色の軽石状の粒子を含む。静岡県～神奈川県沿岸地域で出土する大廓式の大型甕と考えられ、大型壺とともに搬入されたものと考えられる。なお、白井沼遺跡では、大型甕は、破片も含め本資料1点のみの出土である。

50・51は、台付甕である。全体の器形が復元できる資料は、2点のみである。

50は、背の低い脚部に長胴気味の胴部となる。

口縁部は、短く屈曲する。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ状の強いナデ、脚部は縦方向の刷毛目が施されていた。内面は、口縁部がミガキ状のヨコナデ、胴部はヘラナデが施されていた。

51 は、小型の台付甕である。口縁部と脚部の一部を欠損していた以外は、完形に復元できる資料である。内湾気味に開く脚部を有する。胴部は細く、長い口縁部を有する。脚部は、台状に成形され、胴部と接合されている。外面は、口縁部は縦方向の刷毛目、胴部は、上半が横方向の刷毛目、下半が縦方向の刷毛目、脚部は縦方向の刷毛目、裾部は、内外面とも幅広のヨコナデとなっている。内面は、口縁部が横方向の刷毛目、胴部はヘラナデが施されていた。

また、外面口縁部～接合部付近までと、内面底部に煤が付着していた。

52・55 は、脚部を欠損していたが、台付甕と考えられる。やや小型の台付甕で、長い口縁部を有する。

52 は、外面に粗い刷毛目が施され、口縁部は、幅広のヨコナデが施されていた。55 は、全体的に風化が著しいが、前面ナデ調整であった。

53～70 は、胴部下半部を欠損していたため、全体の器形は明らかにできなかった。

53 は、短い口縁部に、胴部下位がやや張る形態となる。口縁部はヨコナデ、胴部は、刷毛目が施されていた。

54 は、長い口縁部に球形の胴部となる。器形的には、104 の平底甕と同様であるため、平底甕であった可能性がある。54 の口縁端部は、幅広のヨコナデが施され、内面は、ヘラミガキされていた。

56 は、口縁部がくの字に屈曲する。表面の風化が著しく、刷毛の単位のみ確認できた。

57 は、屈曲の弱い口縁部となる。内外面とも細かく彫りの深い刷毛目が施されていた。口縁端部は強いヨコナデが施されていた。また、外面口縁部には、刷毛や、表面の窪んだ部分に、赤彩と思われる痕跡が認められたが、風化によって観察が困難で明らかにすることはできなかった。

58 は、口縁部の屈曲は弱く短い、大きく外反する口縁部となる。口縁部は、内外面ともヨコナデされ、胴部外面は、ヘラナデが施され、頸部に、ヘラの木口の端部が当たって抉った痕跡が明瞭に残されていた。

59 は、屈曲が弱い、外反する口縁部となる。胴部もなで肩となる。外面は、口縁部は粗い刷毛目の後、ヨコナデが施され、胴部は粗い刷毛目が施されていた。内面は口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデが施されていた。

60・61 は、やや小型の甕である。口縁部の屈曲が弱い。全体的に風化していたが、外面は、口縁部は刷毛目の後、ヨコナデが施されていた。

62 は、なで肩で、屈曲は弱い、大きく外反する口縁部となる。外面は、口縁部は刷毛目の後ヨコナデ、胴部は、上部は不規則な刷毛目、中位は横方向の刷毛目が施されていた。内面は、口縁部は横方向のヘラナデが施されていた。

63 は、口縁部の屈曲は弱い。胴部に比べ、口縁部が厚くなる。全体的に風化が著しい。

64 は、やや小型の甕と考えられる。やや肩の張る胴部となる。口縁部は幅広のヨコナデ、胴部は、細かい刷毛目が施されていた。

65 は、長く、端部で大きく外反する口縁部となる。風化が著しいが、頸部付近に刷毛目の痕跡が認められた。

66 は、口縁部の屈曲は弱い。全体的に風化が著しいが、頸部に刷毛目の痕跡が認められた。また、内面は、頸部直下の接合痕が明瞭で、指頭による押しえ痕が明瞭に残されていた。

67 は、口縁部は外反せず、直線的に外傾する口縁部である。風化が著しく、頸部に刷毛目が残されていた。

68～70 は、屈曲が強く、くの字に外傾する口縁部となる。全体的に風化が著しいが、68 は、外面口縁部は刷毛目の後ヨコナデ、胴部は斜め方向の刷毛目、内面は口縁部ヨコナデされていた。

71～102は、台付甕の脚部の破片である。

口縁部を欠損していたため、全体の器形は明らかにできなかった。また、口縁部の破片と同一個体の資料もある可能性があるが、接合せず、明らかにできなかった。

実測図は、脚部裾径の大きい順に並べたが、器形の特徴は様々である。裾が内湾気味に広がるもの(76・82・86・89・90・91)、直線的に開くもの(71～75・77～81・83・84・88)、外反するもの(85・87)がある。

胴部との接合方法は、接合部の観察が困難なものも多かったが、大半が胴部底面に凸部を作り、脚部に凹みを作って接合させる形態のものが多い。これに対し、S字状口縁台付甕のように、台状に脚部を成形し、その上に胴部を接合するものも認められた(82・83・96・102)。こうした資料は、脚部内面の天井部は、広く平坦になっている。

93～102は、脚部裾が欠損し、接合部のみが残存していた資料である。全体の器形は明らかにできなかった。

103～106は、平底甕である。口縁部～底部まで残存する資料のみ平底甕としたため、点数は少ない。

103は、平底の底部に、胴部下半部を鉢形に成形し、胴部中位と接合し、接合部に粘土帯を巻き付け、指頭により押さえつけている。接合痕は明瞭に残り、粗雑な成形となっている。胴部上半に最大径を有し、口縁部は、幅広の粘土帯を貼付している。口縁端部には面があるが、刷毛目の痕跡が残る。外面の調整は、口縁部は横方向の刷毛目、頸部は縦方向の刷毛目の後ヨコナデ、胴部上半は斜めまたは横方向の刷毛目、接合部以下は、斜め方向の刷毛目が施されていた。また、胴部下位の刷毛目は、接合部の粘土帯の下にあるため、刷毛調整は、粘土帯貼付以前に施されたものと考えられる。

内面の調整は、口縁端部は横方向の刷毛目の後ナデ、胴部は接合部以上がヘラナデ、以下が刷毛目が施されていた。白井沼遺跡では、この資料は他にな

い特異な形態のもので、1点のみの出土である。

104は、口縁部が長く、球形胴となる甕である。口縁部は、内外面とも刷毛目の後、上半は幅広のヨコナデが施されている。胴部は、外面は横または斜め方向の刷毛目、内面はヘラナデが施されていた。

105は、小型甕である。上げ底風の小さな底部に、球形の胴部となる。口縁部の屈曲は弱いですが、大きく外反する。最大径が口縁部にある。全体的に風化が著しく、調整が不明瞭であったが、外面底部付近に、ナデの痕跡が認められた。

106は、底部の破片である。輪台状の底部で、壺の可能性もある。胴部は外面は刷毛目、底部付近はナデ、内面はヘラナデが施されていた。また、内外面とも、煤が付着していた。

107～110は、S字状口縁台付甕(以下S字甕)である。全体の器形が明らかな個体はなかった。

107は、肩の張らない球形の胴部となる。器壁は厚く、口縁部は端部が外反する。胴部の調整は、外面はナデの後刷毛目が羽状に施され、胴部上半で交差している。

108は口径14.0cmの、やや小型のS字甕である。器壁は薄い。口縁部の屈曲は強く、端部は大きく外反する。口縁上半部は、背の丸い工具による強いヨコナデが施されている。胴部は、やや粗いが彫りの深い刷毛目が施される。内面は、指押さえ痕が残される。

109は、やや肩の張る器形となっている。全体的に器壁は薄い。口縁部は端部が大きく外反する。内面端部は強いナデにより、沈線状にゆるく凹んでいる。胴部は、外面はやや粗い刷毛目が一定の幅で羽状に施される。頸部には、工具の木口痕が観察できる。内面には、指押さえ痕が認められる。

110は、胴部中位に最大径を有する。S字甕としては器壁が厚い。口縁部の屈曲は弱い。胴部の調整は、外面は粗く深いカキメ状だが、幅広の工具による単位がはっきりしている。内面は風化が著しく、不明瞭だが、胴部上半部に指押さえ痕が認められた。

また、A区谷部土器集中区から出土した胴部片と接合した。

111は、器壁が薄い、口縁部が大きく外反する。全体的に風化が著しいが、外面は斜め方向の刷毛目、内面には、指押さえ痕が認められた。

112は、肩部の張る器形となる。口縁部の屈曲が強いが、上部は短く立ち上がる。胴部に粗い斜め刷毛の後、横方向の刷毛目が二段認められた。胎土に白色針状物質を含んでいた。

113・114は、口縁部上半部を欠損していた。

115～119は口縁部を欠損していた。118以外は脚部が残存する。脚部は、台状に成形している点、裾内面を折り返す点、底部付近の砂粒の集積など、S字甕の成形技法を踏襲している。しかし、器壁の厚さや、刷毛目の調整方法など、在地化が著しい。

115・117では、胴部外面と内面底部に煤の付着が認められた。

120～122は甕である。120は、底部穿孔の壺の可能性もあったが、壺の底部の成形と異なるため、甕とした。内外面とも、白色粘土を塗布し、その後刷毛目の後、ヘラミガキが施されていた。

121・122は、胎土の特徴から、同一個体の可能性もあるが、接合しなかった。鉢形で、口縁部は粘土帯の貼付または折り返し口縁で、指押さえ痕が明瞭に残る。胴部は粗い刷毛目が器面を削るように強く施され、刷毛の単位に凹凸が認められる。

122は、胴部下半部で、底部に穿孔されていた。孔径は3.5cmであった。底部付近に幅約3cmの被熱痕が、帯状に廻っていた。

123～129は、高坏である。全体の器形が復元できたのは、123の1点のみであった。125は、透孔が認められなかったが、脚部のヘラミガキの存在から、高坏と判断した。

123は、坏部に稜を有する、所謂元屋敷系の高坏である。脚部は裾が大きく広がる。127も同様の高坏と考えられる。坏部は、内外面とも縦方向の細いヘラミガキ、脚部は、外面は縦方向のヘラミガキ、

内面は、上部はヘラナデ、下部は細かい刷毛目が施されていた。脚部には、円形の透孔が3孔認められた。脚部と坏部の接合は、脚部上部を円柱状に成形し、坏部と接合している。坏部内外面と、脚部外面は、赤彩されていた。

130～134は器台である。器形の復元できるものは、130～132である。

受部が椀状の130・132と、皿状で、口縁部が直立気味に折れ曲がる131がある。

132は、受部と脚部で異なる胎土が使用されていた。受部では、石英・白色粒子を含む粗い胎土であるのに対し、脚部は、混入粒子が殆ど含まれない水簸したような粘土が使用されていた。接合部にその境界が明瞭に観察できた。

135・136は小型壺である。2点ともほぼ完形であった。135は平底で、口縁部は直線的に外傾する。胴部は刷毛目の後ヘラミガキされるが、粗い。136は、球形の胴部で、口縁部は大きく外反する。外面は口縁部はヘラミガキ、胴部は、ナデの後、底部付近のみヘラミガキされる。

137～141は、罎と考えられるが、全体の器形が復元できたものはなかった。

142～154は鉢である。143・144は、小型で丸底となる。半球形の底部に、屈曲の弱い口縁部となる。

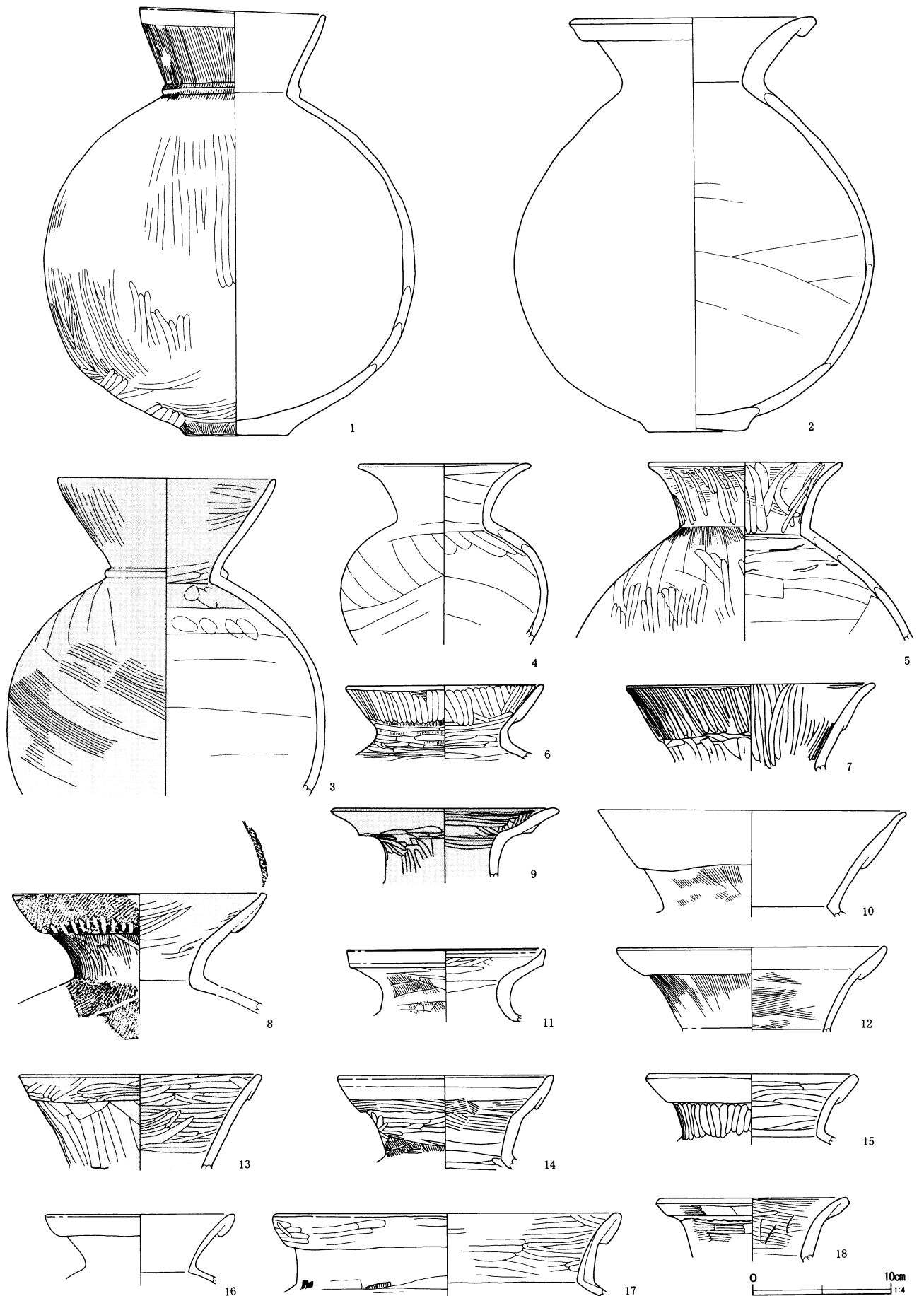
145は、底部が上げ底風に凹む。半球形の胴部で、口縁部は外反する。外面全面と、内面口縁部に赤彩されていた。

147・148・152は、口径が大きく、器高が低い扁平な器形となる。底部が残存するものは、147のみであるが、上げ底風の小さな底部となる。

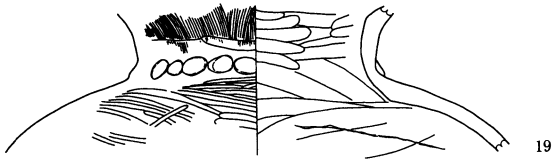
153は、輪台状の底部に、内湾しながら立ち上がる。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されていた。

154は、箱型の坏状の鉢である。台付甕の脚部を逆転させた器形となる。底部は、丁寧なナデが施され、平坦となっている。

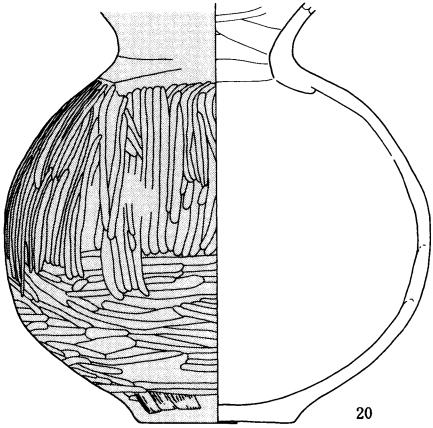
155は、ミニチュア土器である。胎土は、水簸したような粘土で、溶けたように風化していた。



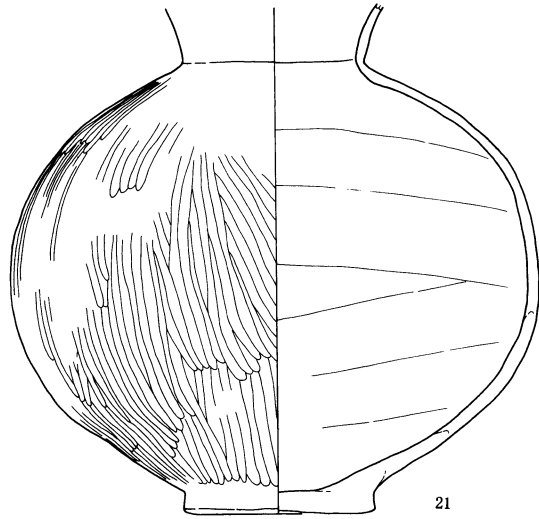
第49图 第57号土坑出土遗物(1)



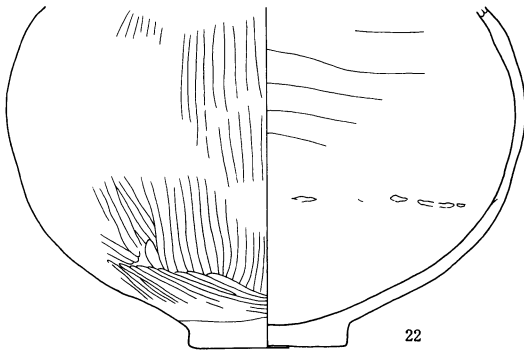
19



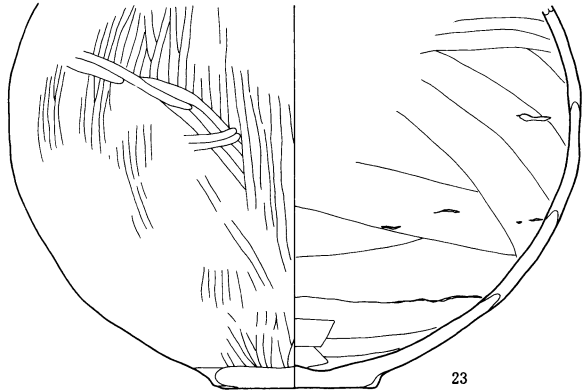
20



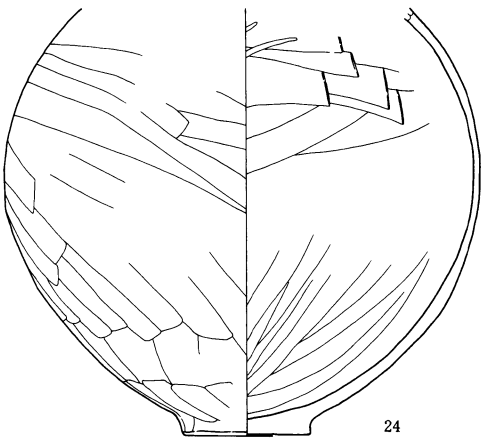
21



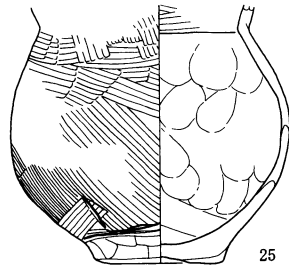
22



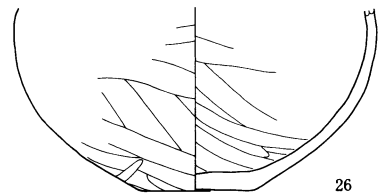
23



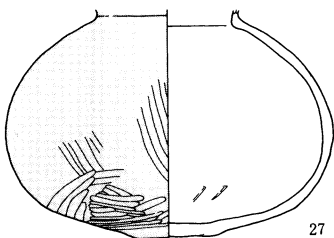
24



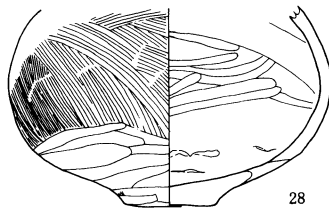
25



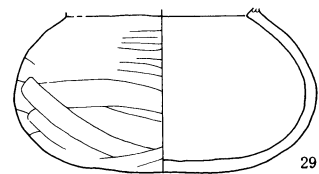
26



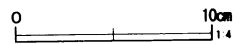
27



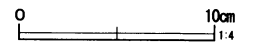
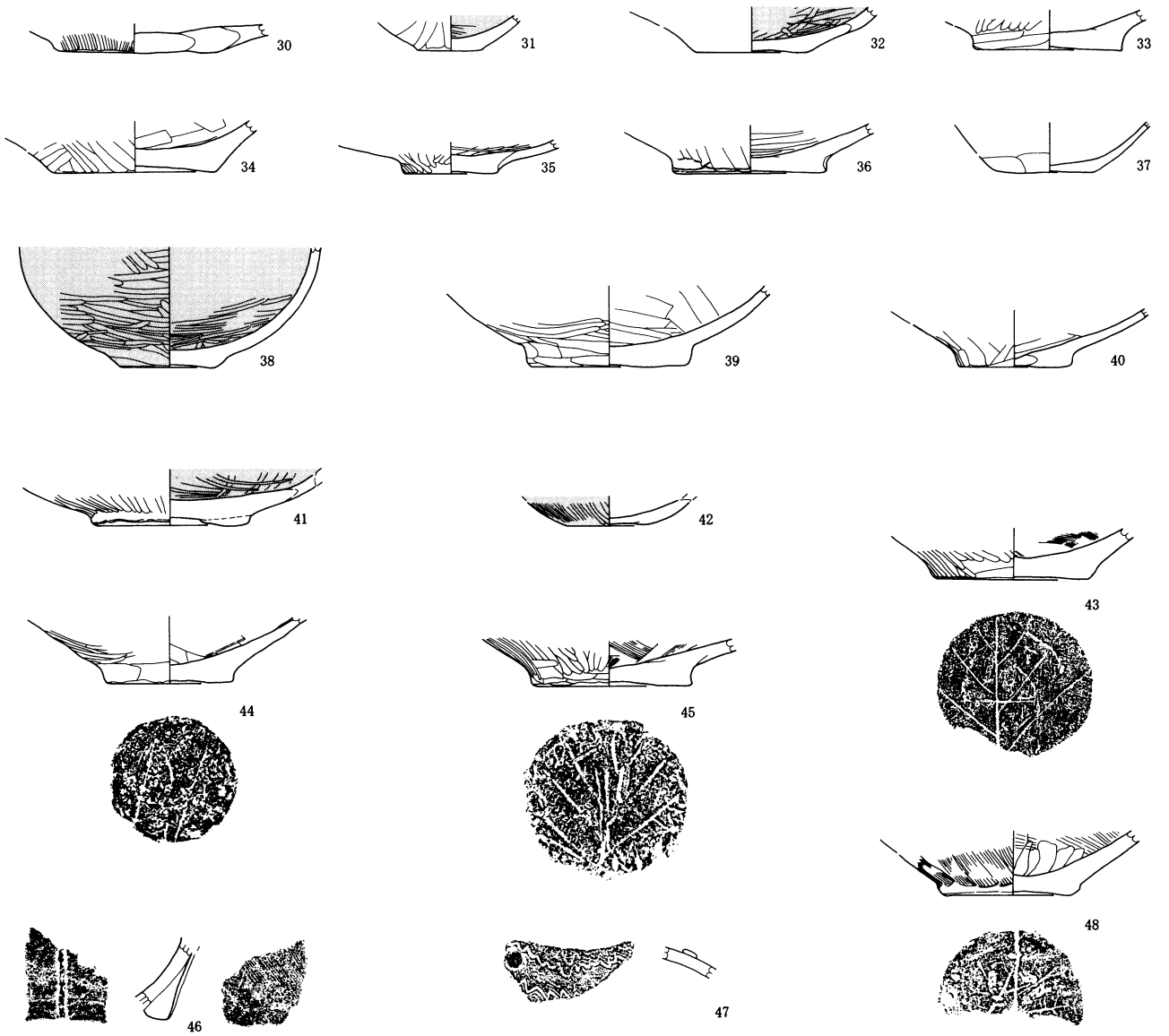
28



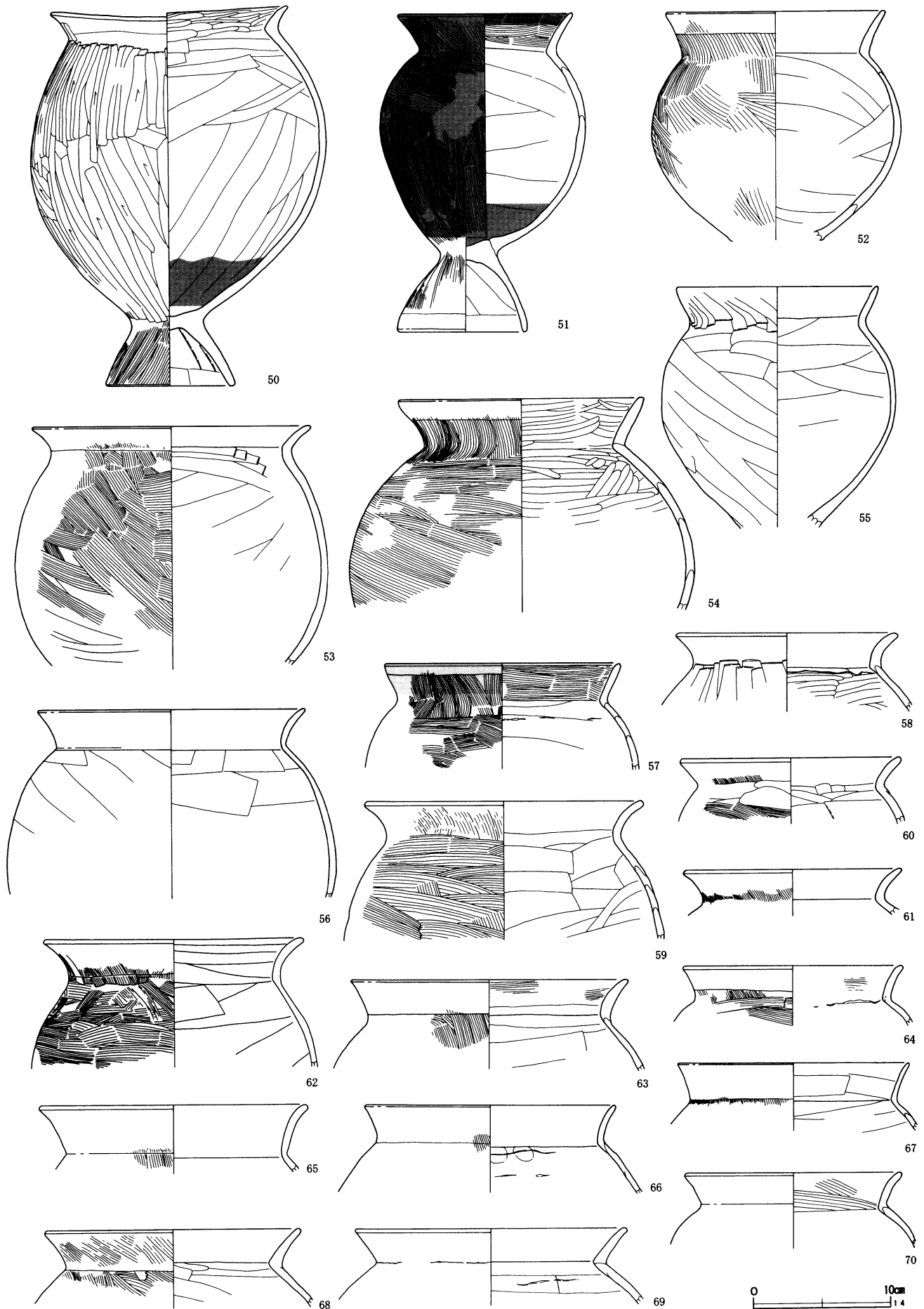
29



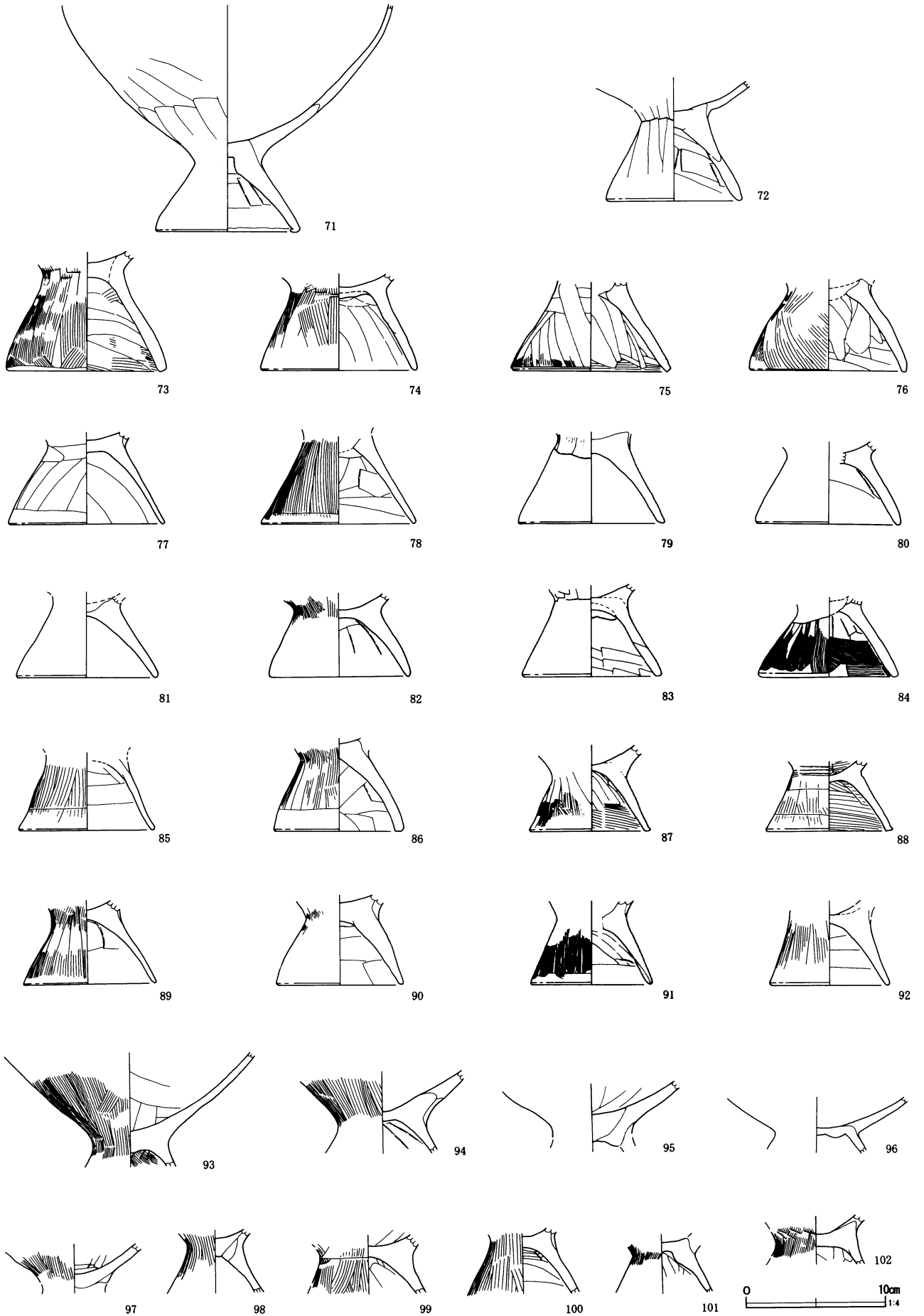
第50图 第57号土坑出土遗物(2)



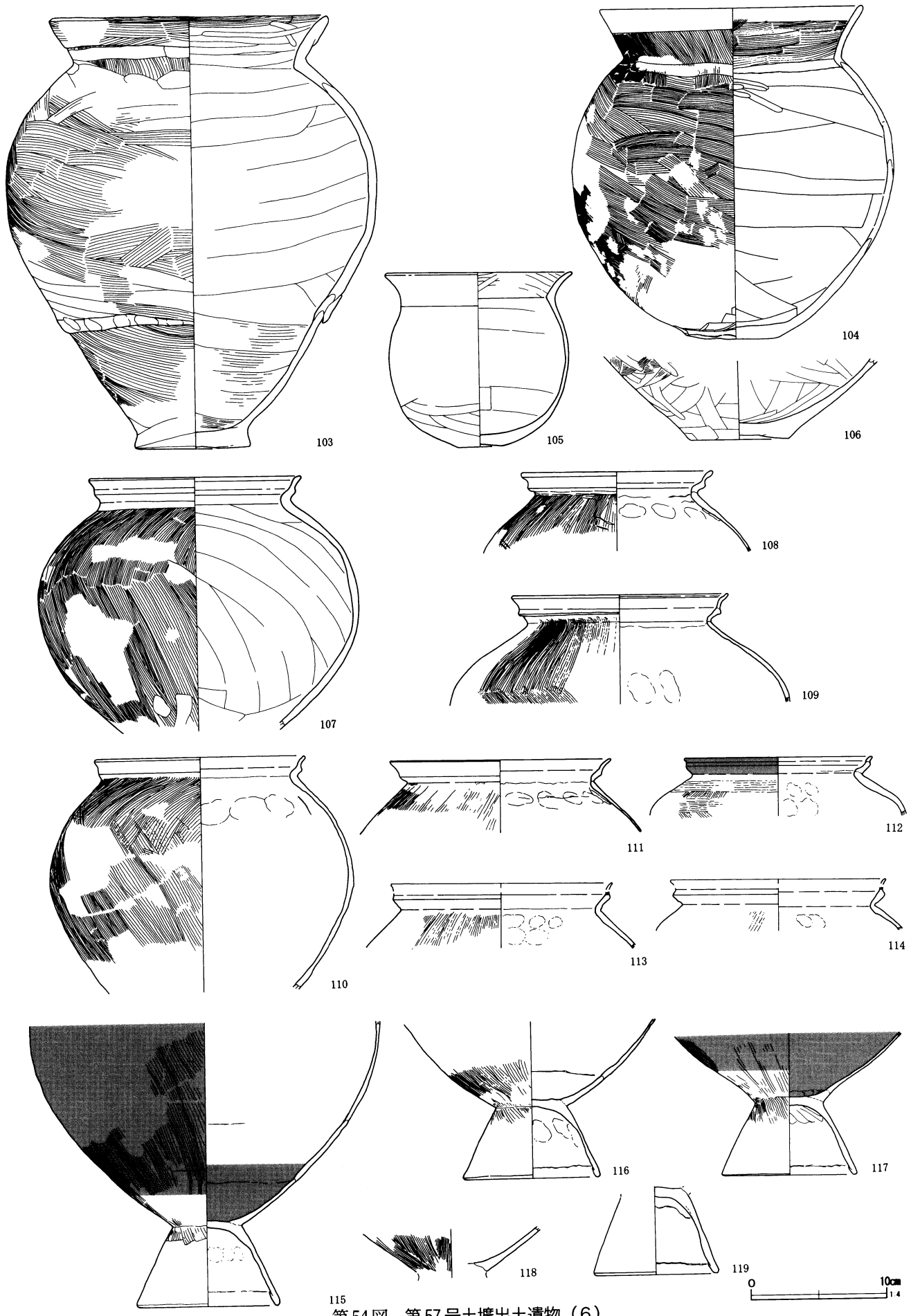
第51图 第57号土坑出土遗物(3)



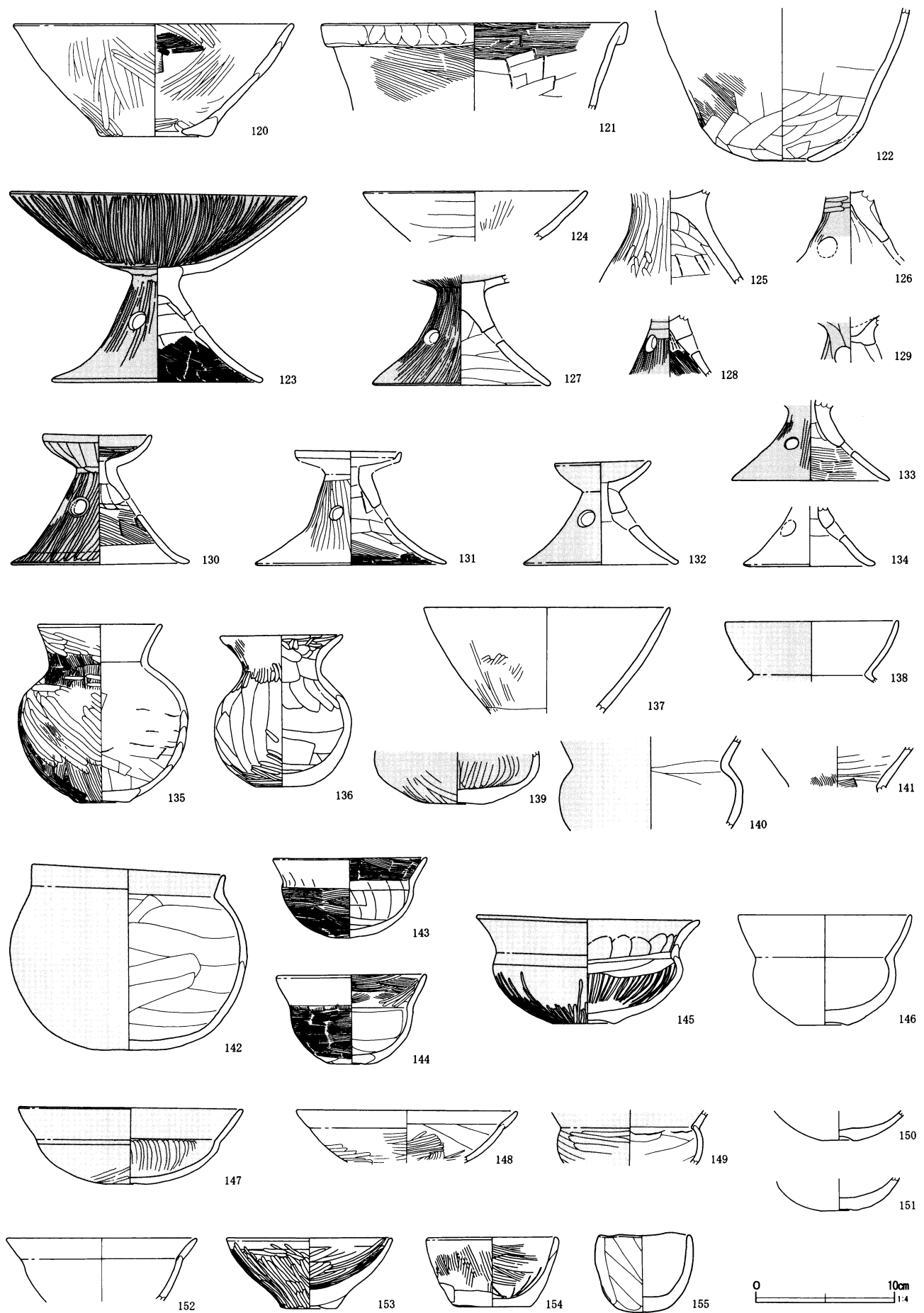
第52图 第57号土坑出土遗物(4)



第53图 第57号土壙出土遺物(5)



第54图 第57号土壤出土遺物(6)



第55图 第57号土壤出土遗物(7)

第9表 第57号土坑出土遺物観察表1 (第49～55図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SK57	壺	13.2	30.6	7.6	1/2	A	普通	にぶい黄橙		38-6
2	SK57	壺	(17.2)	29.9	7.2	1/3	D	普通	橙	外面風化	39-1
3	SK57	壺	(15.6)	(22.9)		口縁部1/4	A	普通	橙	赤彩	
4	SK57	壺	(11.6)	[13.0]		口縁部2/3	A	普通	にぶい黄橙		39-2
5	SK57	壺	13.6	[12.8]		口縁部3/4	D	良好	浅黄		39-3
6	SK57	壺	13.8	[5.3]		口縁部3/4	A	普通	橙		39-4
7	SK57	壺	17.6	[6.2]		口縁部	A	良好	橙		39-5
8	SK57	壺	(18.0)	[8.7]		口縁部1/4	B	普通	にぶい黄橙	赤彩、口縁部上位・胴部縄文帯	39-6
9	SK57	壺	15.8	[5.4]		口縁部3/4	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	40-1
10	SK57	壺	(22.0)	[7.6]		口縁部1/5	F	普通	橙	内外面風化	
11	SK57	壺	(14.0)	[5.2]		口縁部破片	A	普通	にぶい黄橙		
12	SK57	壺	19.2	[6.1]		口縁部1/2	A	普通	橙		40-2
13	SK57	壺	(17.0)	[6.8]		口縁部3/4	D	良好	にぶい赤褐	赤彩	40-3
14	SK57	壺	15.2	[6.7]		口縁部完形	A	良好	にぶい黄橙		40-4
15	SK57	壺	14.8	[5.0]		口縁部完形	A	良好	橙		40-5
16	SK57	壺	(13.4)	[5.0]		口縁部1/2	A	普通	橙	内外面風化	
17	SK57	壺	(24.6)	[6.1]		口縁部1/3	A	良好	橙		
18	SK57	壺	(13.3)	[4.6]		口縁部1/6	C	普通	にぶい黄橙	口縁部内面工具痕凹凸が顕著	
19	SK57	壺		[7.6]		口縁～胴部	D	良好	にぶい黄橙	外面頸部円状浮文	
20	SK57	壺		[21.4]	8.0	ほぼ完形	A	良好	赤	赤彩、外面胴部に黒斑有	40-6
21	SK57	壺		[26.0]	9.8	胴～底部	A	普通	にぶい黄橙	内面胴部木口状工具痕	41-1
22	SK57	壺		[17.3]	8.0	胴～底部	A	良好	橙	外面胴部下位～底部黒斑	
23	SK57	壺		[19.5]	8.3	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙	外面胴部下位～底部黒斑	
24	SK57	壺		[21.8]	6.5	胴部1/3	A	普通	橙	外面胴部木口状工具痕	41-2
25	SK57	壺		[12.2]	6.6	胴～底部	A	普通	にぶい黄橙	内面胴部指頭痕多	41-3
26	SK57	壺		[9.3]	6.0	胴～底部	A	普通	にぶい黄橙		
27	SK57	壺		[11.5]	4.4	胴～底部	A	普通	橙	赤彩	41-4
28	SK57	壺		[10.0]	4.7	胴～底部	A	普通	橙		
29	SK57	壺		[8.4]		胴～底部	A	普通	橙	内面風化	41-5
30	SK57	壺		[1.7]	8.6	底部完形	A	普通	灰黄褐		
31	SK57	壺		[2.0]	3.7	胴～底部	A	普通	橙	外面黒斑有、赤彩	
32	SK57	壺		[2.6]	6.4	底部完形	A	普通	にぶい黄橙	赤彩	
33	SK57	壺		[2.3]	8.4	底部完形	A	良好	橙	内面木口状工具痕	
34	SK57	壺		[3.0]	9.5	底部完形	A	良好	にぶい黄橙	内面木口状工具痕	
35	SK57	壺		[1.8]	5.3	底部完形	A	良好	にぶい黄橙	外面黒斑有	
36	SK57	壺		[2.7]	8.8	底部完形	A	良好	橙	外面黒斑有	
37	SK57	壺		[2.8]	5.5	底部完形	A	普通	赤褐	風化	
38	SK57	壺		[6.9]	5.3	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	
39	SK57	壺		[4.5]	(9.2)	底部1/3	A	普通	明赤褐		
40	SK57	壺		[3.3]	6.4	底部完形	A	良好	にぶい黄橙		
41	SK57	壺		[3.0]	(8.8)	底部ほぼ完形	A	普通	橙	赤彩	
42	SK57	壺		[1.4]	4.4	胴～底部	A	普通	橙	外面赤彩、内面風化	
43	SK57	壺		[2.9]	9.0	底部	A	良好	にぶい黄橙	木葉痕	
44	SK57	壺		[3.8]	7.3	底部完形	A	普通	にぶい黄橙	木葉痕、外面風化	
45	SK57	壺		[2.7]	9.0	底部完形	A	良好	にぶい黄橙	外面黒斑、木葉痕	
46	SK57	壺				口縁部破片	E	良好	にぶい黄橙	大廓	
47	SK57	壺				胴部破片	A	良好	にぶい黄橙	円形浮文有	
48	SK57	壺		[3.7]	7.3	底部1/2	A	良好	浅黄	木葉痕	
49	SK57	甕	40.2	[27.2]		口縁部2/3	E'	普通	浅黄橙		41-6
50	SK57	台付甕	17.0	27.0	9.5	2/3	D	良好	にぶい黄橙	煤	42-1
51	SK57	台付甕	12.6	[23.0]	(9.5)	ほぼ完形	A	普通	にぶい褐	煤	42-2

第10表 第57号土坑出土遺物観察表2 (第49～55図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
52	SK57	台付甕	(15.6)	[16.6]		口縁部1/4	A	普通	にぶい褐	被熱	
53	SK57	甕	(20.0)	[17.3]		口縁部1/4	A	普通	橙		42-3
54	SK57	甕	17.6	[15.5]		口縁部1/2	A	普通	にぶい橙		42-4
55	SK57	台付甕	(14.4)	[17.4]		口縁部2/3	A	普通	明赤褐		
56	SK57	甕	(19.0)	[13.7]		口縁部1/3	A	不良	橙		
57	SK57	甕	(16.8)	[7.7]		口縁部1/5	A	良好	橙	赤彩	
58	SK57	甕	(15.6)	[5.7]		口縁部1/2	D	普通	橙	外面木口状工具痕	
59	SK57	甕	(19.8)	[10.0]		口縁部1/4	B	良好	明赤褐		
60	SK57	甕	(15.8)	[4.8]		口縁部1/5	A	良好	にぶい黄褐		
61	SK57	甕	15.4	[3.4]		口縁部完形	A	普通	橙		
62	SK57	甕	(18.6)	[9.2]		口縁～胴部	D	良好	橙	内面口縁ナデ	
63	SK57	甕	(19.6)	[6.6]		口縁部1/4	A	不良	橙	内外面風化	
64	SK57	甕	(15.6)	[4.3]		口縁部1/4	A	不良	橙	内面風化	
65	SK57	甕	19.2	[5.0]		口縁部3/4	A	普通	橙		
66	SK57	甕	(18.0)	[6.4]		口縁部1/4	A	普通	橙	内面胴部上位指頭痕	
67	SK57	甕	(16.6)	[4.9]		口縁部1/4	A	普通	橙		
68	SK57	甕	118.2	[5.6]		口縁部1/2	A	普通	黄褐		
69	SK57	甕	(19.4)	[5.5]		口縁部1/4	A	普通	橙	外面風化	
70	SK57	甕	15.6	[5.5]		口縁部1/2	A	普通	橙	外面胴部風化	
71	SK57	台付甕		[16.3]	10.3	胴～脚部	A	普通	橙	風化	
72	SK57	台付甕		[8.5]	9.4	脚部完形	A	普通	橙		42-5
73	SK57	台付甕		[8.5]	11.0	脚部	A	良好	橙		42-6
74	SK57	台付甕		[6.9]	(11.0)	脚部1/3	A	普通	明赤褐		
75	SK57	台付甕		[6.4]	(11.5)	脚部1/3	A	良好	にぶい黄橙		
76	SK57	台付甕		[6.5]	(11.2)	脚部1/3	A	普通	にぶい橙		
77	SK57	台付甕		[6.6]	11.2	脚部	A	普通	明褐	内外面風化	43-1
78	SK57	台付甕		[6.3]	11.1	脚部完形	A	良好	にぶい黄橙		43-2
79	SK57	台付甕		[6.6]	10.3	脚部2/3	A	普通	橙	風化	
80	SK57	台付甕		[5.9]	10.0	脚部1/2	A	不良	明赤褐	外面風化	
81	SK57	台付甕		[5.9]	(9.8)	脚部2/3	A	普通	橙	風化	
82	SK57	台付甕		[6.0]	(9.8)	脚部完形	A	不良	明赤褐	外面脚部・内面胴部風化	
83	SK57	台付甕		[6.5]	10.0	脚部完形	A	不良	明赤褐	外面風化	
84	SK57	台付甕		[5.3]	10.0	脚部1/2	G'	普通	灰黄褐		
85	SK57	台付甕		[5.6]	9.7	脚部1/2	D	良好	橙		
86	SK57	台付甕		[6.7]	9.2	脚部完形	A	良好	橙		43-3
87	SK57	台付甕		[6.1]	8.6	脚部1/3	D	普通	にぶい黄橙		
88	SK57	台付甕		[5.0]	9.0	脚部2/3	D	良好	橙		
89	SK57	台付甕		[6.0]	(9.3)	脚部2/3	A	普通	橙	内外面脚部下位風化	
90	SK57	台付甕		[6.4]	9.1	脚部完形	A	普通	橙	脚部内面刷毛目状工具痕	43-4
91	SK57	台付甕		[6.0]	8.7	脚部完形	A	普通	明赤褐		43-5
92	SK57	台付甕		[5.7]	8.6	脚部完形	A	普通	橙		43-6
93	SK57	台付甕		[8.2]		胴～脚部	D	良好	橙		
94	SK57	台付甕		[5.9]		胴～脚部	A	普通	橙	外面脚部・内面胴部風化	
95	SK57	台付甕		[4.5]		胴底部1/3	A	普通	橙	外面風化	
96	SK57	台付甕		[9.1]		胴～脚部	A	普通	にぶい橙	風化	
97	SK57	台付甕		[2.8]		胴底部完形	A	普通	灰黄褐		
98	SK57	台付甕		[4.5]		脚部1/4	A	普通	橙		
99	SK57	台付甕		[4.2]		脚部	A	普通	橙		
100	SK57	台付甕		[4.7]		脚部1/3	A	普通	明赤褐	内面脚部上位木目状工具痕	
101	SK57	台付甕		[3.9]		脚部	A	普通	にぶい黄橙	内面ナデ(工具痕顕著)	
102	SK57	台付甕		[3.6]		脚部	D	普通	にぶい黄橙	脚部内面指ナデ	
103	SK57	平底甕	(20.0)	31.7	8.4	1/2	A	普通	橙	外面胴部接合部指頭痕	44-1
104	SK57	平底甕	19.0	24.3	6.8	ほぼ完形	A	普通	黒褐		44-2

第11表 第57号土坑出土遺物観察表3 (第49～55図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
105	SK57	平底甕	13.4	12.8	3.4	1/3	A	普通	橙	外面風化	44-3
106	SK57	平底甕		[5.7]	7.5	胴～底部	D	良好	にぶい黄橙	内面ナデ	
107	SK57	S字甕	15.4	[18.7]		口縁部2/3	D	普通	浅黄橙		44-4
108	SK57	S字甕	(14.0)	[5.9]		口縁部25%	D	良好	褐	内面指押さえ	44-5
109	SK57	S字甕	(15.8)	[8.0]		口縁～胴部	A	良好	灰黄褐	内面胴部指押さえ	
110	SK57	S字甕	15.3	[17.3]		25%	F	良好	明赤褐色	内面風化、在地模倣	44-6
111	SK57	S字甕	(16.4)	[5.4]		口縁部25%	D	良好	浅黄橙	器面風化、内面指押さえ	45-1
112	SK57	S字甕	(13.6)	[4.3]		口縁部	D	普通	明黄褐	比企地方模倣製作?煤	
113	SK57	S字甕	(16.2)	[4.0]		口縁部	A	良好	褐灰	内面指押さえ	
114	SK57	S字甕	(15.7)	[3.2]		口縁部	A	良好	灰黄褐	内面指押さえ	
115	SK57	S字甕		[20.8]	10.4	胴～脚部	D	良好	にぶい橙	煤	45-2
116	SK57	S字甕		[11.6]	9.9	胴～脚部	H	良好	浅黄橙	内面脚部指押さえ、脚部折り返し	45-3
117	SK57	S字甕		[10.5]	9.8	胴～脚部	F	良好	灰褐	煤	45-4
118	SK57	S字甕		[3.1]		胴部	A	普通	浅黄橙		
119	SK57	S字甕		[6.4]	9.2	脚部3/4	D	不良	浅黄橙	風化	
120	SK57	甌	(19.8)	13.1	8.0	1/3	A+C	普通	にぶい橙	内外面白泥粘土を塗布	45-5
121	SK57	甌	21.8	[6.3]		口縁部1/5	A	普通	明赤褐		
122	SK57	甌		[11.0]	(3.9)	胴部	A	普通	橙	胴部下半帯状に被熱痕が残る	
123	SK57	高坏	21.2	13.5	15.2	2/3	A	良好	橙	赤彩透孔3	45-6
124	SK57	高坏	(15.8)	[3.5]		坏部1/4	C	不良		内外面風化	
125	SK57	高坏		[6.8]		脚部1/2	B	良好	にぶい黄橙	内面下半工具痕残る	
126	SK57	高坏		[5.3]		脚部	A	普通	にぶい黄橙	赤彩透孔3	
127	SK57	高坏		[7.9]	(12.7)	脚部1/3	A	良好	橙	赤彩透孔3(丁寧な穿孔)	
128	SK57	高坏		[4.4]		脚部1/2	A	普通	にぶい黄橙	赤彩、透孔3(丁寧な穿孔)	
129	SK57	高坏		[3.3]		脚部	A	普通	明赤褐	赤彩	
130	SK57	器台	7.6	9.3	(12.7)	2/3	B	良好	橙	赤彩透孔3	45-7
131	SK57	器台	(7.5)	8.2	13.7	脚部完形	A	良好	明赤褐	透孔3、受部内外面風化	45-8
132	SK57	器台	6.6	7.5	(11.1)	3/4	A+C	普通	受:橙 脚:浅黄橙	赤彩、透孔3、受部と脚部で胎土が異なる	46-1
133	SK57	器台		[5.8]	(11.3)	脚部1/2	D	普通	橙	赤彩	
134	SK57	器台		[4.3]		脚部1/4	C	不良	にぶい橙		
135	SK57	小型壺	8.7	12.8	4.0	ほぼ完形	A	良好	橙	内外面風化	46-2
136	SK57	小型壺	8.6	10.9	4.1	ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙		46-3
137	SK57	罎	(17.6)	[7.6]		口縁部1/6	C	普通	にぶい黄橙	内外面風化	
138	SK57	罎	12.2	[4.4]		口縁部2/3	A	普通	橙	赤彩風化	
139	SK57	鉢		[3.9]	4.1	胴～底部	C	普通	浅黄橙	赤彩	
140	SK57	罎		[6.7]		口縁部1/3	A	普通	橙	赤彩、内外面風化	
141	SK57	罎		[3.4]		口縁部1/3	C	不良	灰黄	外面風化	
142	SK57	鉢	13.7	13.7	5.6	3/4	A	普通	橙	赤彩痕、外面風化	46-4
143	SK57	鉢	10.8	5.7		2/3	D	良好	にぶい黄橙	外面体部黒斑	46-5
144	SK57	鉢	(10.6)	6.4	(13.5)	1/4	F	普通	にぶい黄橙		
145	SK57	鉢	15.3	7.5	4.4	ほぼ完形	B	良好	橙	赤彩	46-6
146	SK57	鉢	(12.2)	7.9	3.5	1/4	C	普通	橙	風化	46-7
147	SK57	鉢	16.0	5.5	3.2	2/3	D	普通	にぶい黄橙	赤彩	46-8
148	SK57	鉢	(15.6)	[3.8]		口縁部1/8	C	普通	にぶい黄橙	外面風化	
149	SK57	鉢		[4.0]		口縁部1/2	C	普通	浅黄橙	赤彩	
150	SK57	鉢		[2.1]	2.1	胴～底部	A	不良	明赤褐	風化	
151	SK57	鉢		[2.3]	2.4	胴～底部	C	普通	にぶい黄橙	風化	
152	SK57	鉢	13.6	[4.5]		口縁部1/2	A	普通	明赤褐	風化	47-1
153	SK57	鉢	11.7	5.0	4.0	ほぼ完形	A	良好	橙		47-2
154	SK57	鉢	(9.0)	4.9	5.5	1/3	A	普通	にぶい黄橙		47-3
155	SK57	ミニチュア	6.3	5.5	3.1	ほぼ完形	C	不良	橙		47-4

4. 井戸跡

第1号井戸跡 (第56・60図)

A区H-2グリッドで検出した。第1号住居跡と重複していた。第1号住居跡を壊していた。

平面の形態は円形で、規模は、長軸0.82 m、短軸0.81 m、深さは、1.42 mまで確認したが、底面は検出できなかった。

遺物は、壺口縁部片が1点出土した (第60図1)。

第2号井戸跡 (第56・57・60図)

D区E-4グリッドで検出した。第14号土壌を壊していた。

平面の形態は楕円形であった。規模は、長軸1.54 m、短軸1.25 m、深さは、1.50 mまで確認できたが、崩落の危険があり、底面は検出できなかった。主軸方向はN-56°-Eであった。

遺物は、壺・甕・台付甕・高坏・器台・埴・椀な

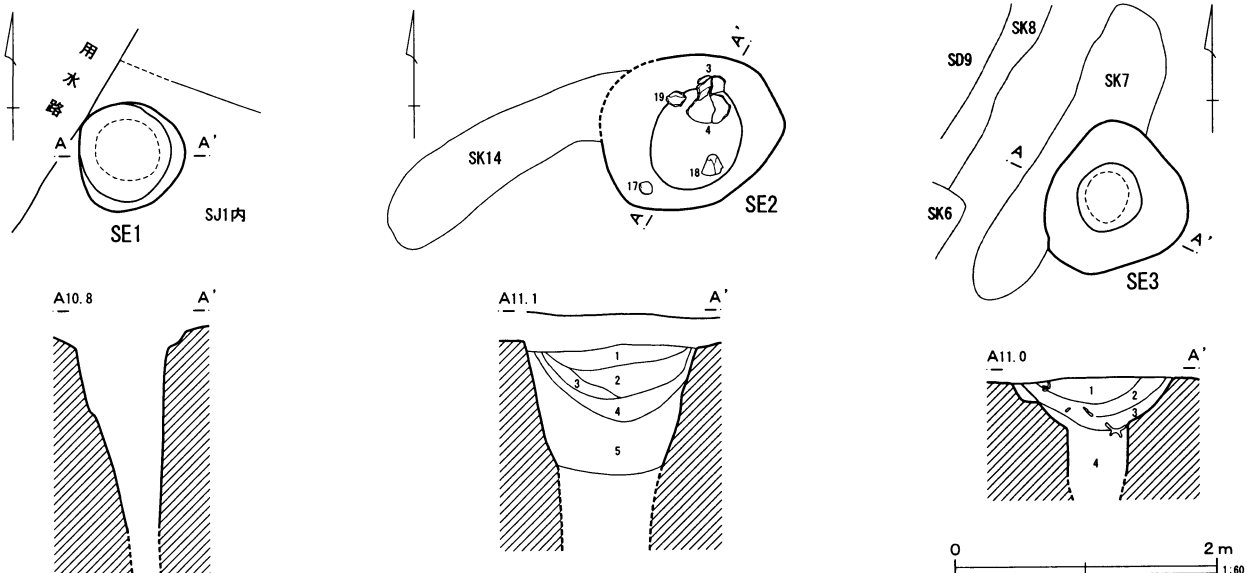
どがある (第60図2~23)。遺物の多くは、覆土5層の黒褐色土から出土した。掲載可能な遺物は、22点であったが、完形に復元できる土器は、第60図16の粗製器台1点であった。

特筆すべき遺物は、11の甕である。口縁部の破片であったが、口縁内面および胴肩部をヘラケズリする、布留式土器の甕と考えられる。本遺跡からは、布留式時の甕は、本資料1点のみであった。

また、23は、鉢の破片であるが、胎土に白色の軽石状粒子を多量に含み、大廓式の大型壺と同じ胎土であった。静岡県地方からの搬入品と考えられる。

第3号井戸跡 (第56・57・61図)

A区H-2グリッドで検出した。第7号土壌を壊していた。第3号井戸跡は、調査中、第5号土壌として調査したが、第3号井戸跡として報告する。



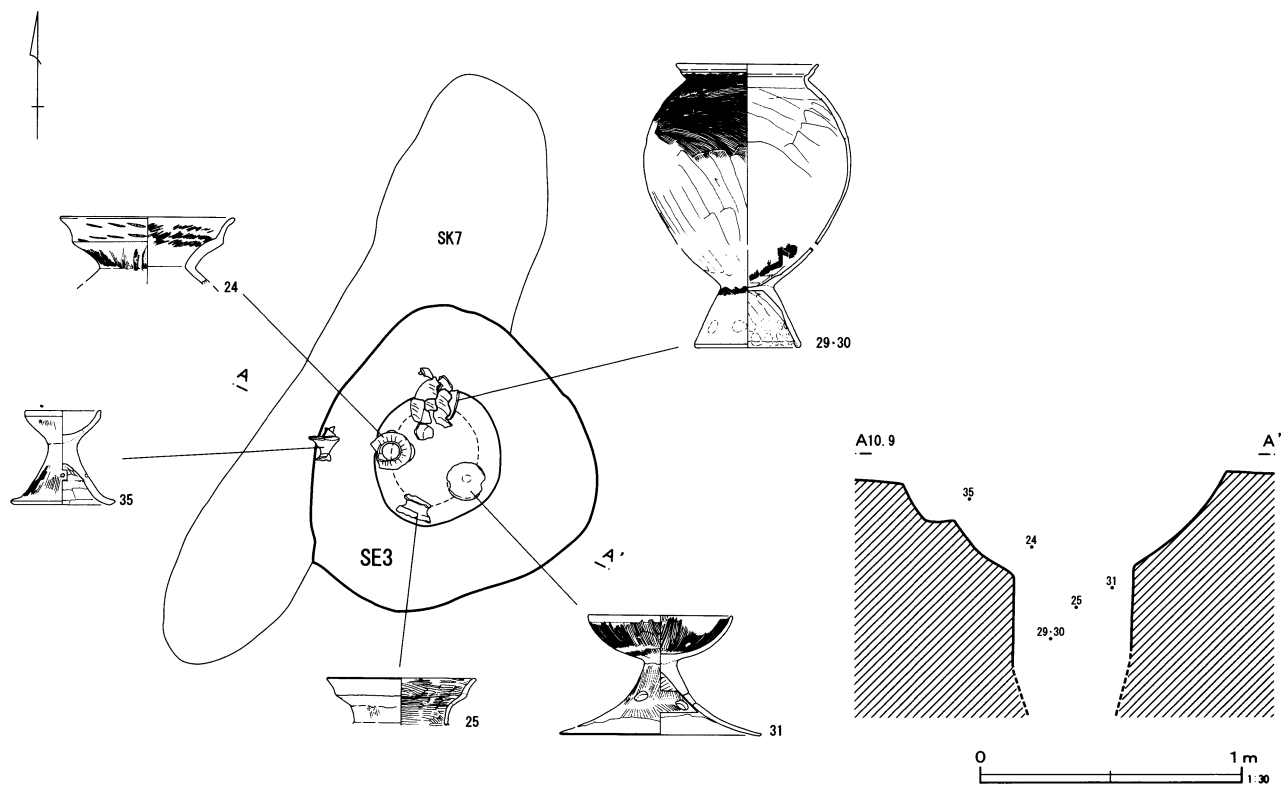
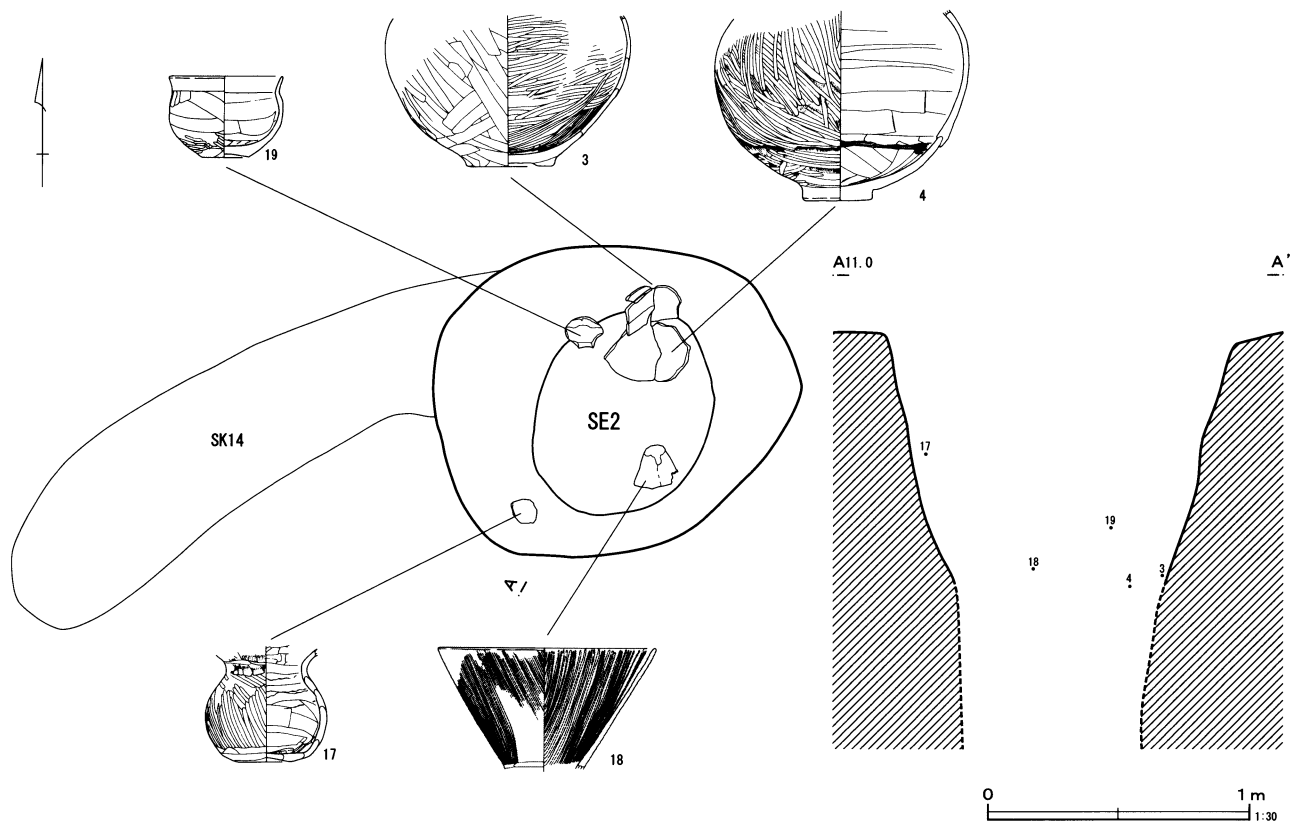
第2号井戸跡

- 1 黒褐色土 粘性・しまりなし、暗青灰色土ブロック(φ1cm)を多量含む。(表土=水田の土)
- 2 黒褐色土 粘性・しまりなし、炭化材(φ5mm程)・焼土ブロック・黄褐色土ブロック(φ1cm程)を多量含む。
- 3 黒褐色土 粘性・しまりなし、2層に比べ炭化材(φ1cm程)を多量含む、焼土・黄褐色土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 粘性・しまりなし、暗灰色土ブロック(地山の土φ3~4cm)を多量含む、炭化粒子を縞状に含む。
- 5 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、均一性の高い層、黄褐色土粒子を少量含む。

第3号井戸跡

- 1 黒灰色土 粘性あり、しまりなし、焼土・炭化粒子を多量含む。
- 2 暗灰色土 粘性あり、しまりなし、青灰色土ブロック(地山土)を含む。
- 3 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、鉄分・炭化粒子を多量含む。
- 4 黒褐色土 粘性あり、しまりなし、鉄分・青灰色土粒子を多量含む、炭化粒子を含む。

第56図 井戸跡



第57図 井戸跡遺物出土状況

平面の形態は円形で、規模は、長軸1.18 m、短軸1.07 m、深さは、1.0 mまで確認できた。

遺物は、壺・甕・台付甕・S字甕・高坏・器台などがある（第61図24～35）。

24は、柳ヶ坪型土器と考えられるが、ヘラの木口による文様が、綺麗に並ばず、形が崩れている。

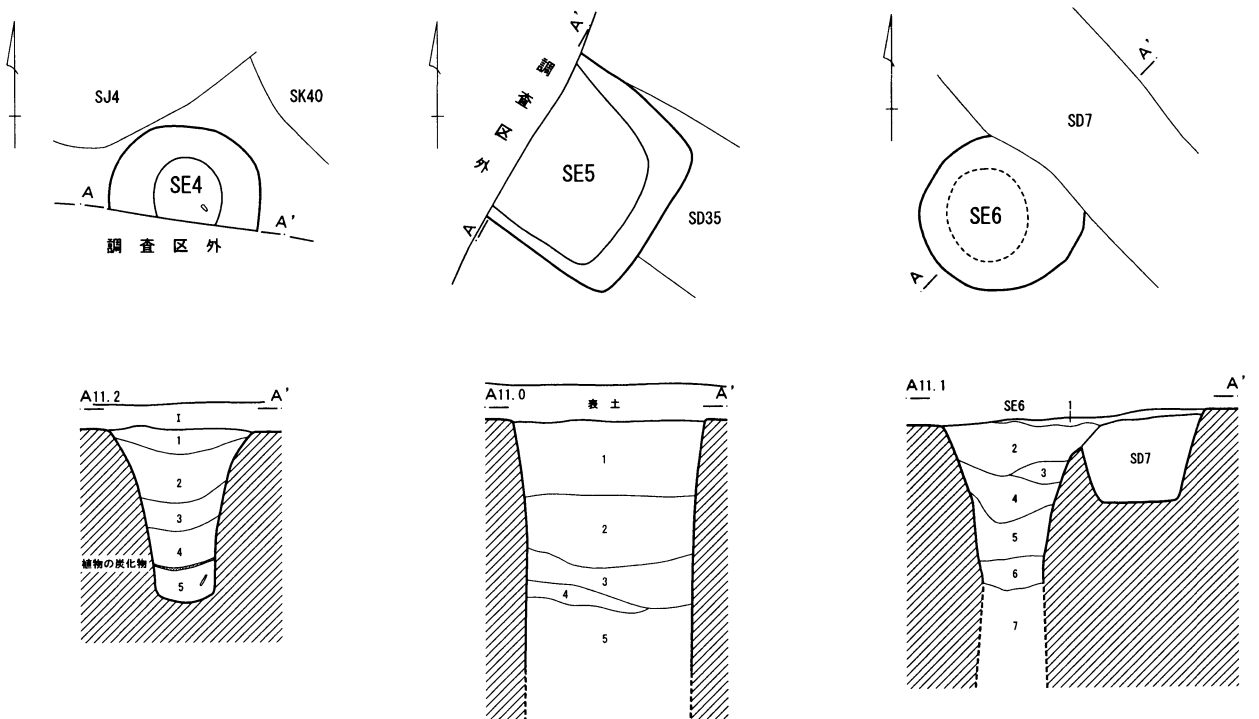
29・30は、S字状口縁台付甕である。同一個体と考えられるが、接合しなかった。脚部の成形が台状となり、内面裾部の折り返しなど、成形技法は踏襲するものの、胴部は長胴化し、口縁部の屈曲が弱く、上段は外側に開く、胴部の調整は、横または斜め方向の刷毛目で、胴部下半部はヘラケズリ上の強いナデ仕上げとなっている。

31は、高坏である。椀形の坏部に裾が大きく開く脚部を有する。脚部の透孔は上下2段に合わせて6箇所穿たれていた。真上から観察すると、三角形に配置されるように穿たれていた。また、坏部内面は、燻したように、黒色の光沢感を有していた。

第4号井戸跡（第58図）

E区N-6・7グリッドで検出した。遺構は、調査区外へ伸びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形態は円形であったと考えられる。規模は、長軸1.15 m、短軸は0.67 mまで確認できた。深さは1.32 mであった。



第4号井戸跡

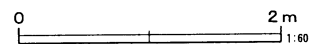
- | | | |
|---|------|--|
| 1 | 灰褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(φ2~3mm)を多量含む。 |
| 1 | 褐色土黄 | 褐色粘土ブロック(φ2~3mm)を全体に含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | 炭化物(φ1~2cm)を少量含む、黄褐色粘土ブロック(φ3~5mm)を全体的にまばらに含む。 |
| 3 | 黒灰色土 | 黄褐色粘土ブロック(φ5~8mm)を全体に含む。 |
| 4 | 黒灰色土 | 緑灰色シルトブロック(φ3~5cm)を多量含む。 |
| 5 | 緑灰色土 | 緑灰色シルトブロック中に黄灰色土を混じる炭化物を多量含む。 |

第5号井戸跡

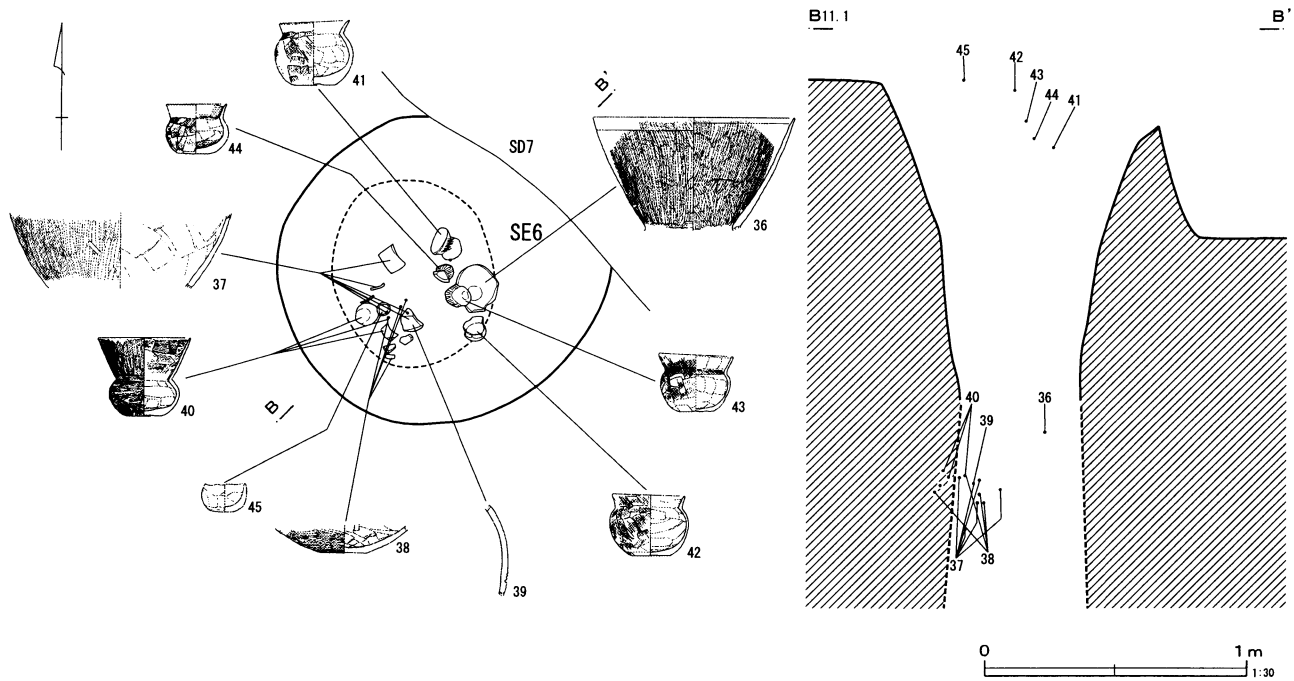
- | | | |
|---|--------|--|
| 1 | 黄褐色土 | しまりあり、灰褐色ブロック(φ2~3cm)を多量含む。(人為堆積) |
| 2 | 青灰色シルト | 粘性ややあり、しまりあり、黒灰色粘土ブロック(φ3~4cm)を多量含む。(人為堆積) |
| 3 | 黒灰色シルト | しまりあり、炭化物を微量含む。 |
| 4 | 青灰色粘土 | しまりあり、黒灰色粘土ブロック(φ0.5cm)を微量含む。 |
| 5 | 黒灰色粘土 | しまりあり、混入物殆どなし。 |

第6号井戸跡

- | | | |
|---|---------|--|
| 1 | 暗褐色土 | 黄灰色粘土ブロック(φ3~5mm)を多量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | 炭化物(φ5~8mm)を少量含む、黄灰色粘土ブロック(φ2~3mm)を全体に含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 黄灰色粘土粒(φ1~2mm)を全体に極めて多量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 黄灰色粘土ブロック(φ5~8mm)を全体に含む。 |
| 5 | 黄褐色土 | 青灰色シルトブロック(φ1cm)を多量含む。 |
| 6 | 黒褐色シルト | 青灰色シルトブロック(φ1~2cm)・黄褐色土ブロック(φ1~2cm)を少量含む、有機物を多量含む。 |
| 7 | 暗青灰色シルト | 黄褐色土ブロック(φ1~2cm)を少量含む、有機物を多量含む。 |



第58図 井戸跡



第59図 第6号井戸跡遺物出土状況

遺物は、古墳時代前期の土師器片と木片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第5号井戸跡 (第58図)

F区N-2・3グリッドで検出した。第35号溝跡を壊していた。遺構の西側は、調査区外へ伸び、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形態は方形で、規模は、径1.40m、深さは1.90mまで確認できた。主軸方向はN-60°-Wであった。

遺物は、近世以降の陶磁器片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

遺構は、近世以降に属していたと考えられる。

第6号井戸跡 (第58・59・61図)

F区O-5グリッドで検出した。第7号溝跡を壊していた。

平面の形態は円形で、規模は、長軸1.27m、短軸1.17m、深さは、2.12mまで確認できたが、底面は検出できなかった。

遺物は、壺・埴・ミニチュア土器などがある (第61図36~45)。36~40は、覆土下層の7層から、

41~45は、覆土2層から出土した。二つの位置から出土した土器は、時期差がある可能性もある。

36は大型の埴の口縁部、37は胴部の可能性がある。38は、やや上げ底風の小さな底部の壺である。39は、壺の胴部片であるが、表面に、鋭利な刃物もしくは工具による傷が認められる。

40は、小型の埴である。底部は平底で、丁寧なつくりである。細かいヘラミガキが施されていた。

36~40は、覆土下層から出土した。すべて同じ胎土で構成され、白色針状物質が含まれており、比企地域産であることがわかる。

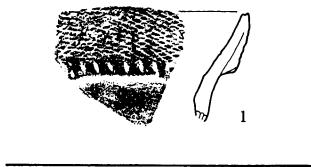
41~45は、ミニチュア土器である。41~45は壺、45は椀状である。壺は平底で、球形の胴部に、短い口縁部となる。胴部の調整は刷毛目で、やや粗雑な感がある。

45は、手捏ね風であるが、内外面とも、ナデ調整が施されていた。

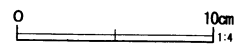
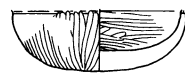
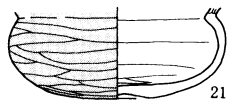
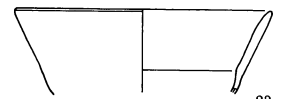
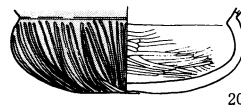
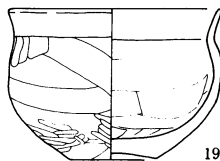
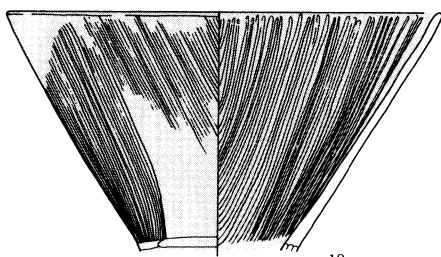
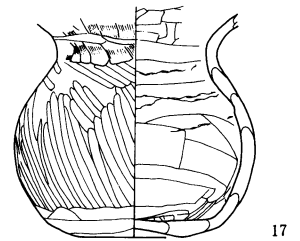
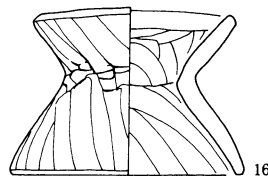
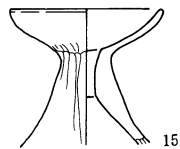
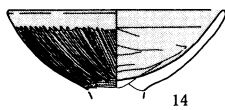
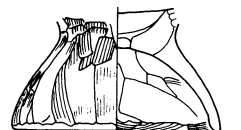
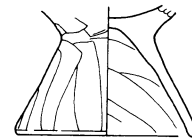
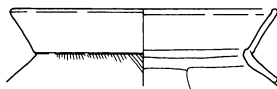
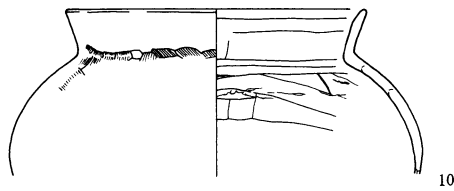
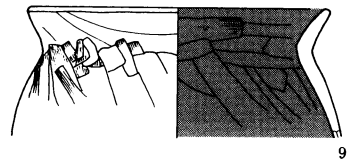
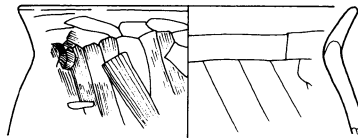
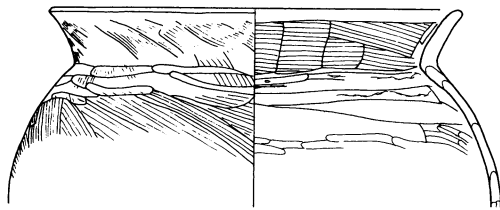
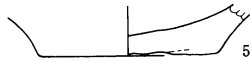
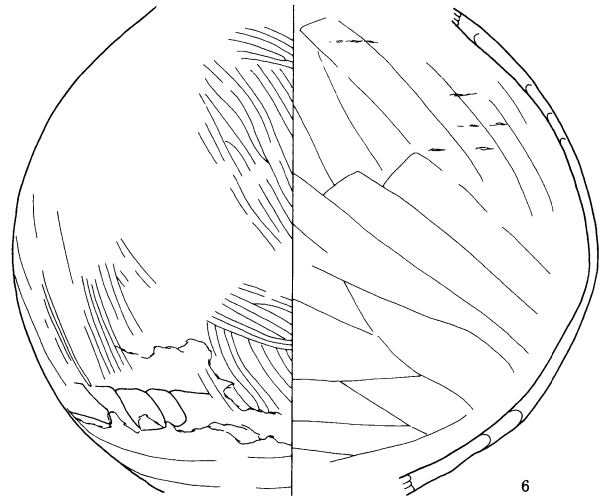
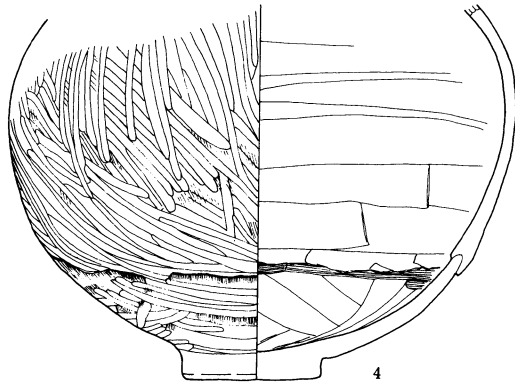
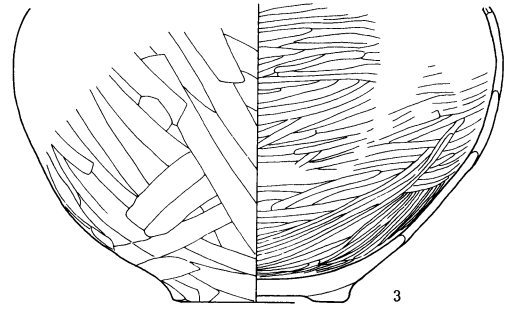
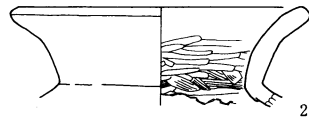
41~45は、覆土上層からまとめて出土した。すべて同じ胎土で製作され、石英・長石・白色の微粒子を多量に含むやや粗い胎土である。

成形・調整・胎土ともに共通することから、同時期に一括して埋没した可能性が高い。

第1号井戸跡

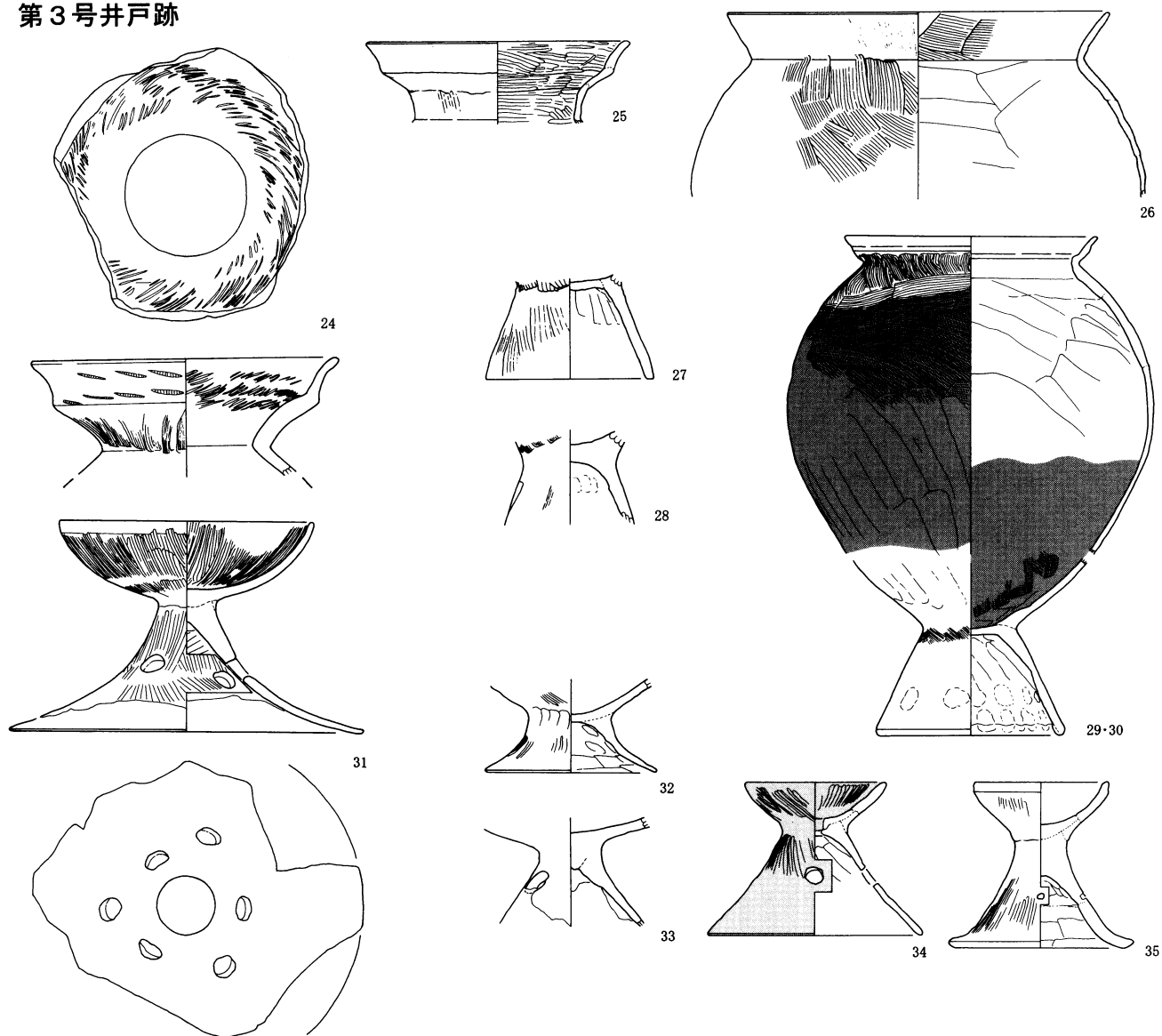


第2号井戸跡

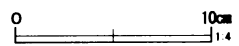
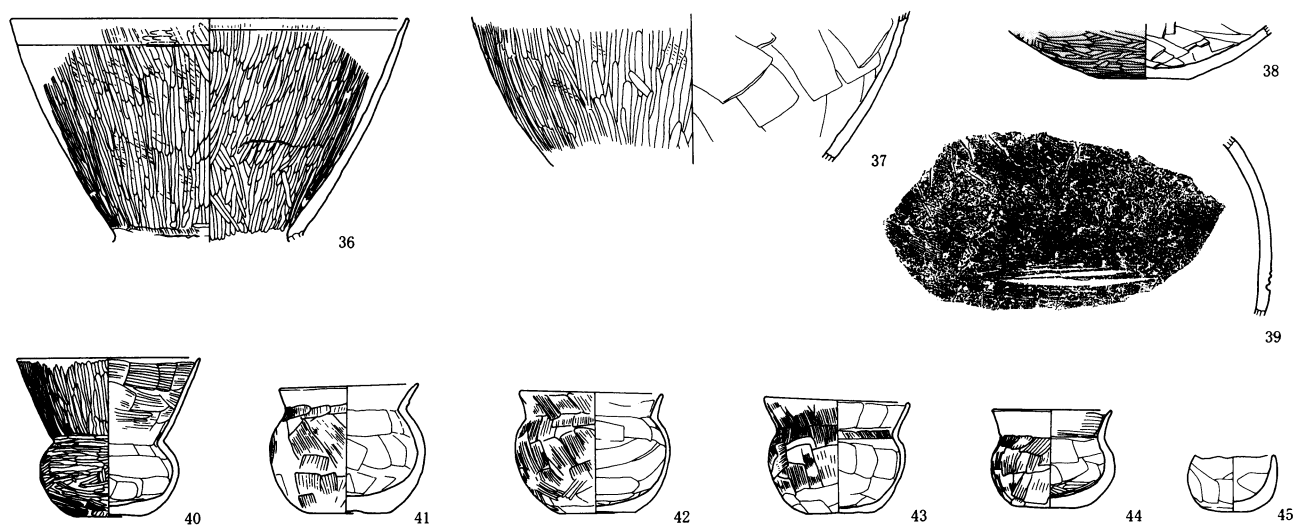


第60图 井戸跡出土遺物(1)

第3号井戸跡



第6号井戸跡



第61图 井戸跡出土遺物(2)

第12表 井戸跡出土遺物観察表 (第60・61図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SE1	壺				口縁部破片	A	良好	橙	赤彩	
2	SE2	壺	(14.4)	[5.0]		口縁部1/5	A	普通	にぶい橙		
3	SE2	壺		[15.2]	8.8	胴～底部	A	良好	灰黄褐	内面ミガキ	
4	SE2	壺		[19.3]	6.5	胴～底部	F	良好	灰黄褐	タール状の付着物	47-5
5	SE2	壺		[2.5]	9.0	底部1/3	A	普通	橙	内外面風化	
6	SE2	壺		[25.0]		胴部1/3	A	良好	灰褐	SK13と接合	
7	SE2	甕	20.6	[9.2]		口縁部1/2	D	良好	灰黄褐	底部拓本	47-6
8	SE2	甕	(17.0)	[6.7]		口縁部1/4	A	良好	灰白色	布留式、内面ケズリ	
9	SE2	甕	(15.1)	[6.6]		口縁部1/4	A	普通	にぶい黄橙		
10	SE2	甕	(15.0)	[8.6]		口縁部	A	普通	にぶい褐	煤、外面胴部器面風化	
11	SE2	平底甕	(13.3)	[3.9]		口縁部破片	その他	良好	褐灰		
12	SE2	台付甕		[6.6]	(8.9)	脚部1/4	A	普通	煤		
13	SE2	台付甕		[6.3]	10.4	脚部1/2	A	良好	橙	外面下端部粘土がめくれている	
14	SE2	高坏	11.0	[4.0]		坏部完形	A	良好	赤	赤彩	47-7
15	SE2	器台	(7.6)	[6.9]		1/5	C	普通	にぶい橙	受部・脚部胎土異なる、水籤粘土	
16	SE2	器台	9.6	8.5	11.7	ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙		47-8
17	SE2	小型壺		[11.6]	6.0	1/3	A	普通	にぶい橙		48-1
18	SE2	埴	21.9	[12.4]		口縁部2/3	A	良好	褐灰	赤彩、内外面ミガキ	48-2
19	SE2	埴	10.7	7.6	4.4	3/4	A	良好	灰褐		48-3
20	SE2	埴	[11.2]	[4.5]	4.0	胴～底部	C	良好	赤～褐灰	赤彩、内外面ミガキ、水籤粘土	
21	SE2	埴	[10.5]	[4.6]	3.0	1/4	C	良好	灰白色	赤彩、水籤粘土	
22	SE2	埴	[9.0]	[3.4]	2.0	胴～底部	C	良好	灰白	内外面ミガキ、水籤粘土	
23	SE2	鉢	(12.9)	[4.3]		口縁部破片	E	良好	黄橙	内外面風化	
24	SE3	壺	(17.3)	[6.8]		口縁部	その他	良好	灰白	内外面へラ状工具の木口押圧、柳ヶ坪型と思われるが在地品?	48-4
25	SE3	壺	15.0	[4.7]		口縁部	A	良好	灰褐	外面風化	
26	SE3	甕	(21.8)	[10.8]		口縁部	D	良好	暗褐		
27	SE3	台付甕		[5.7]	(9.5)	脚部	A	良好	にぶい橙		
28	SE3	台付甕		[5.3]		脚部	A	普通	橙	内外面風化、内面天井部指頭痕	
29	SE3	S字甕	14.3	28.6]	10.4	70%	A	普通	灰黄褐色	30と同一個体、煤	48-5
30	SE3									29と同一個体	
31	SE3	高坏	14.4	12.1	(20.1)	脚部欠	D	良好	浅黄	内面黒色処理を施したように燻されている透孔6	48-6
32	SE3	高坏		[5.3]	9.7	脚部完形	D	良好	浅黄橙	外面全体的に酸化鉄分多く付着、内面指頭痕	49-1
33	SE3	高坏		[6.2]		胴～脚部	A	普通	橙	透3(均等)、全体的風化	
34	SE3	器台	(8.0)	8.75	(12.3)	1/3	A	良好	にぶい橙	赤彩透孔3、内面酸化鉄分多く付着	
35	SE3	器台	(7.6)	9.5	9.7	ほぼ完形	A	良好	橙	透孔1(未貫通)、内面風化	49-2
36	SE6	埴	(20.2)	[11.3]		口縁部1/3	D	良好	明赤褐		49-3
37	SE6	壺		[7.8]		胴部破片	D	良好	にぶい黄褐		
38	SE6	壺		[2.8]	4.6	底部完形	D	良好	赤褐	赤彩	
39	SE6	壺				胴部破片	D	良好	にぶい褐		
40	SE6	埴	(9.4)	8.0	3.8	3/4	D	良好	にぶい橙		49-4
41	SE6	ミニチュア	7.1	6.5	4.3	ほぼ完形	B	良好	明褐		49-5
42	SE6	ミニチュア	7.2	6.3	3.8	4/5	B	良好			49-6
43	SE6	ミニチュア	7.4	6.0	3.6	ほぼ完形	B	良好			49-7
44	SE6	ミニチュア	6.0	5.0	3.0	4/5	B	普通	明赤褐		49-8
45	SE6	ミニチュア	4.0	2.9		4/5	B	良好	明褐		50-1

5. 周溝遺構

周溝遺構は、調査当初は、方形周溝墓（SR）として調査を実施した。一定の幅の溝を方形に巡らせる遺構である。

しかし、調査中及び整理作業の段階で、遺構の特徴について、以下のような点から、方形周溝墓とは異なる遺構と判断した。

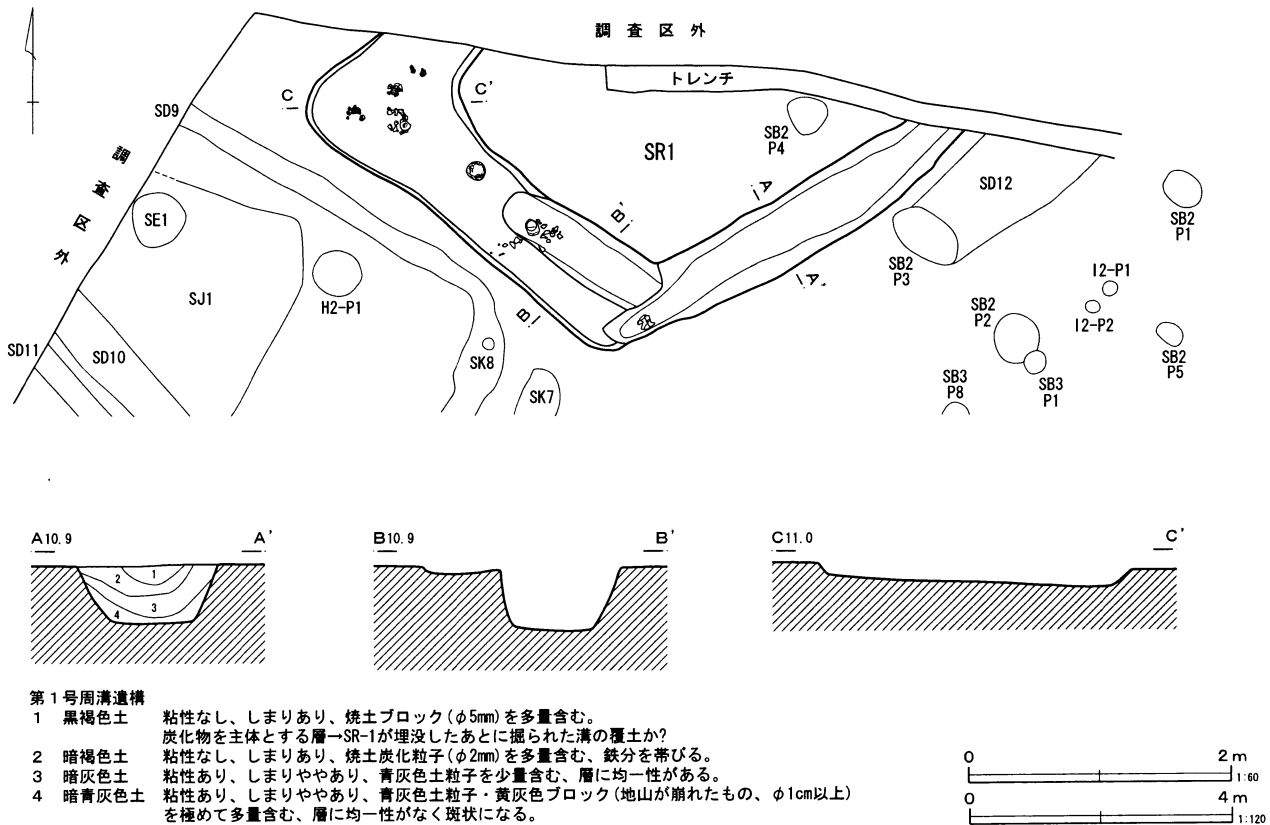
- 1 周溝遺構は、居住に伴う施設と考えられる、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡等と同じ区域で検出され、重複または同時に存在していたと考えられる。
- 2 出土遺物には、台付甕等、甕の比率が高く、近接して検出された、周溝遺構と関連のあると考えられる溝跡、土壙から出土した多量の土器も同様の傾向を示す。
- 3 出土遺物に完形に復元できる土器が少なく、また、周溝遺構も含め、本遺跡からは、方形周

溝墓の供献土器と考えられる、底部穿孔の壺が1点も出土しなかった。

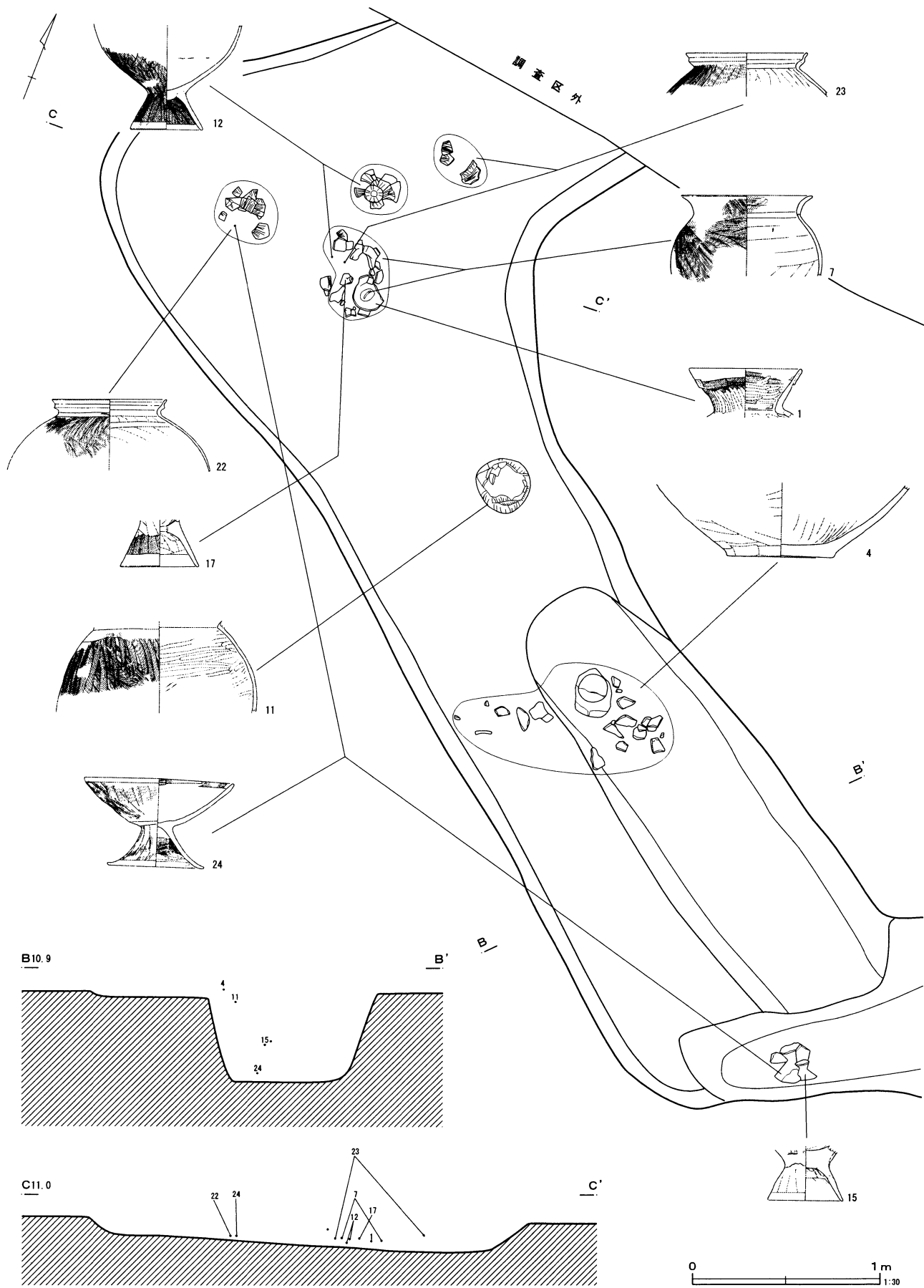
- 4 周溝遺構自体は、方形方形周溝墓のように整然とした群構成とはならず、単独で存在し、互いに重複関係はない。

以上の点から、周溝遺構の性格については、方形方形周溝墓とは異なる、居住に関連する遺構ではないかという前提に立つに至った。

今回の報告では、既に報告書が刊行されている、第2次調査（中山 2005）において、「周溝」遺構と呼称していること、また、近年、当事業団では、同様の遺構について、さいたま市外東遺跡（君島 1999）、騎西町小沼耕地遺跡（木戸 1999）において「周溝」遺構と呼称して報告しており、本報告においても、従来の報告を踏襲し、「周溝」遺構として報告する。



第62図 第1号周溝遺構



第63圖 第1号周溝遺構遺物出土狀況

今回調査した、第1次・3次調査地点では、4基の周溝遺構を検出した。既に報告書が刊行された第2次調査と合わせると、周溝遺構は、9基検出したこととなる。

なお、第2号周溝遺構については、「3. 土壌」の項で、第57号土壌として報告したため、欠番とした。

このため、第2次調査の報告書(中山 2005)において、周溝遺構は合計10基検出と報告されているが、今回の報告書によって、周溝遺構は合計9基と訂正したい。

以下、第1・3～5号周溝遺構の4基について報告する。

第1号周溝 (第62・63・67図)

A区H・I-2グリッドで検出した。第2号掘立柱建物跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。遺構は、北側が調査区外へ延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は、方形であったと考えられる。規模は、長軸は全長6.80m、短軸は6.20mまで確認できた。

溝内側の平坦部の規模は、長軸4.4m、短軸は4.2mまで確認できた。

溝幅は、幅1.00～1.50m、深さは0.14～0.48mであった。南西辺と南東辺が深く掘り込まれていた。主軸方向はN-47°-Wであった。

溝底面は平坦で、溝の断面の形状は台形で、壁面は斜め上方へ直線的に立ち上がっていた。

遺物は、南西辺から、壺・甕・台付甕・S字甕・高坏・器台・埴が出土した(第67図)。

1～6は、壺である。全体の器形が明らかなものは出土しなかった。

4は、大廓式の大型壺である。底部から胴部が残存していた。全体の器形は明らかにできなかった。胎土に白色の軽石状粒子を多量に含んでおり、その特徴から、搬入品と考えられる。

7～21は、甕である。全体の器形が明らかなもの

は出土しなかった。全て台付甕であったと思われる。

11は、なで肩で、やや長胴となると考えられる。口縁部と底部を欠損していた。

13～21は、脚部の破片である。

22・23はS字状口縁台付甕である。22は、球形の胴部であったと考えられる。口縁部は、下段はシャープで、上段は大きく外反する。肩部の刷毛目は細かく、刷毛の単位がはっきりしている。23は、ややなで肩で、口縁部はやや丸みを持っている。肩部の刷毛目はやや粗いが、単位がはっきりしている。2点とも、在地の模倣品と考えられる。

24～26は、高坏である。完形に復元できたものは、24のみである。24は、坏部は深身で、底部に弱い稜を有する。脚部は裾が外反しながら広がる。脚部の透孔は認められなかった。器面の調整には刷毛目が残る。

27は、器台である。皿状の受部となる。脚部に透孔が3孔認められた。また、貫通孔が認められた。

第2号周溝

整理作業段階で第57号土壌と番号を変更したため、欠番とする。

第3号周溝 (第64図)

D区D・E-3グリッドで検出した。

遺構は、第4号掘立柱建物跡、第15・16・17号土壌、第18・45号溝跡と重複していた。第4号掘立柱建物跡、第15・16号土壌、第18号溝跡に壊されていた。第17号土壌、第45号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。また、遺構北側に、第20号溝跡が隣接していた。

平面の形状は、やや横長の方形であったが、丸味をもっており、西側一辺がやや膨らむ形状となっていた。

規模は、長軸は全長8.04m、短軸は全長6.80mであった。

周溝内側の平坦部の規模は、長軸6.8m、短軸

5.2 mであった。

溝幅は一定ではなく、西辺で0.35、北辺で0.92 mであった。深さは0.06～0.12 mであった。主軸方位はN-34°-Wであった。

溝底面の形状は平坦で、溝の断面の形状は逆台形で、壁面は斜め上方に直線的に立ち上がっていた。

また、周溝内側にピットを8基検出した。周溝遺構に伴う柱穴であったかどうかは明らかにできなかったが、西側のP6～P8を結んだラインが、周溝遺構西辺の溝の膨らみと連動するように、P6が張り出して検出しており、周溝遺構に伴う柱穴であった可能性もある。

各ピットの規模は以下のとおりである。

P1 形状は円形、直径0.45 m、深さ0.12 m。

P2 形状は円形、直径0.50 m、深さ0.45 m。

P1と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

P3 形状は円形、0.60 m、深さ0.45 m。

P4 形状は不整形、長軸0.95 m、短軸0.85 m、深さ0.28 m。

P5 形状は円形、長軸0.90 m 短軸0.80 m、深さ0.37 m。

P6 形状は円形、長軸0.45 m、短軸0.40 m、深さ0.16 m。

P7 形状は円形、0.45 m、深さ0.12 m。

P8 形状は楕円形、長軸0.90 m、短軸0.75 m、深さ0.08 m。

遺物は、溝・ピット内より古墳時代前期の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第4号周溝 (第65・68図)

B区J・K・L-6グリッドで検出した。調査区南東コーナー部分で検出し、遺構の大半は調査区外へ延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

った。

周溝内側では、第3号住居跡を検出したが、新旧関係は明らかにできなかった。

また、北側と西側の一部を現代の攪乱に壊されていた。

遺構の平面の形状は、方形と考えられる。遺構の規模は、長軸は全長14.05 m、短軸は、全長10.10 mまでが確認できたが、更に規模は大きくなると考えられる。

周溝内側の平坦部の規模は、長軸9.2 m、短軸7.0 mまで確認できた。白井沼遺跡で検出された9基の周溝遺構の中では、第2次調査で検出された、第1号周溝遺構に次いで、2番目の規模となる。

溝の規模は、幅2.20～2.90 m、深さ0.43 mで、他の周溝遺構に比べ、溝幅は広い。主軸方向はN-48°-Wであった。

溝底面は概ね平坦で、溝中に土壙・ピット等の施設は検出できなかった。

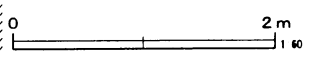
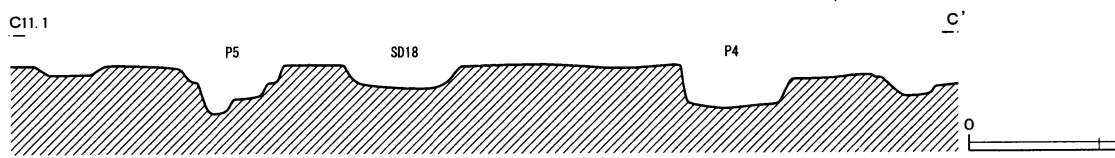
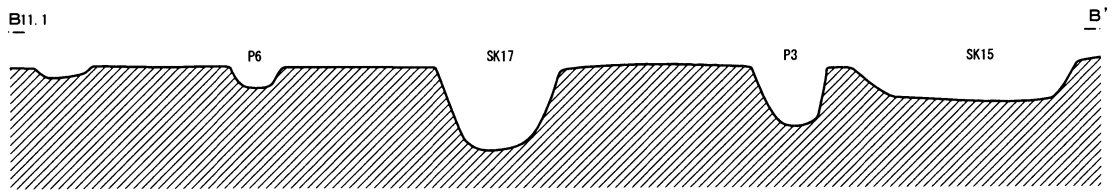
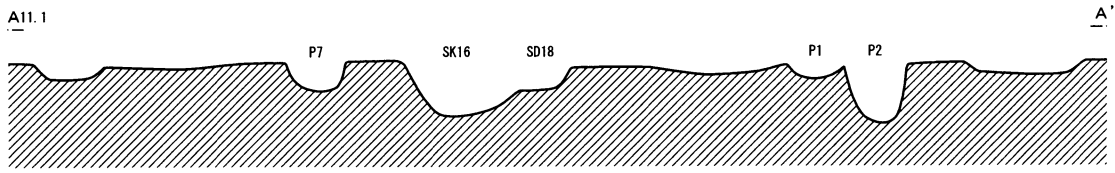
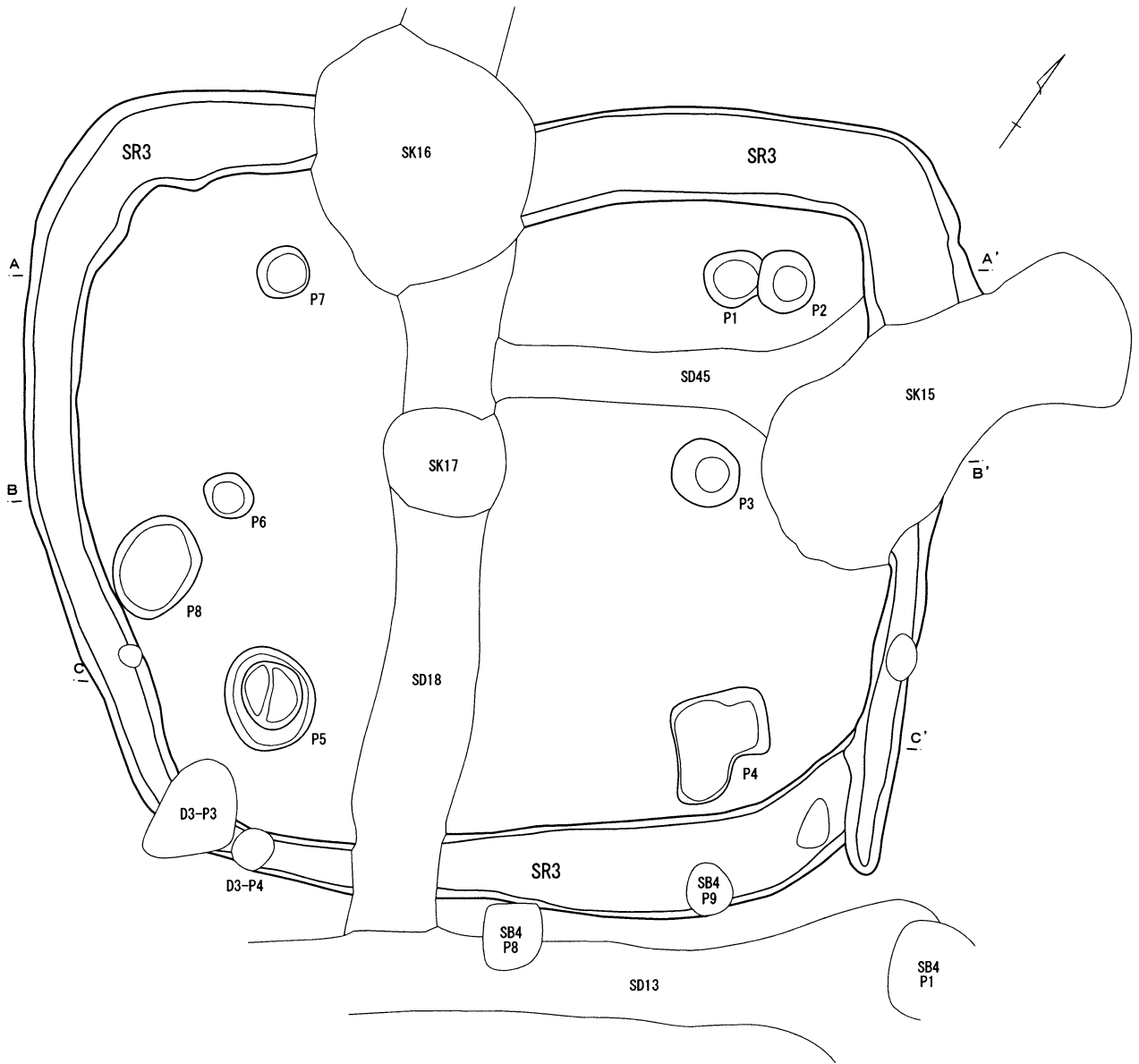
断面の形状は、逆台形であった。壁面は斜め上方に直線的に立ち上がっていた。

覆土上層には、FA(6世紀初頭)と思われる、層厚2 cm前後の灰白色の火山灰層が認められた。この火山灰層はA区及びB区谷部でも、古墳時代前期の遺物を含む層の直上で、谷部を覆うように堆積していることが確認されている。第4号周溝遺構廃絶後、FA堆積直前まで、溝はやや窪んだ状態であったことも伺える。

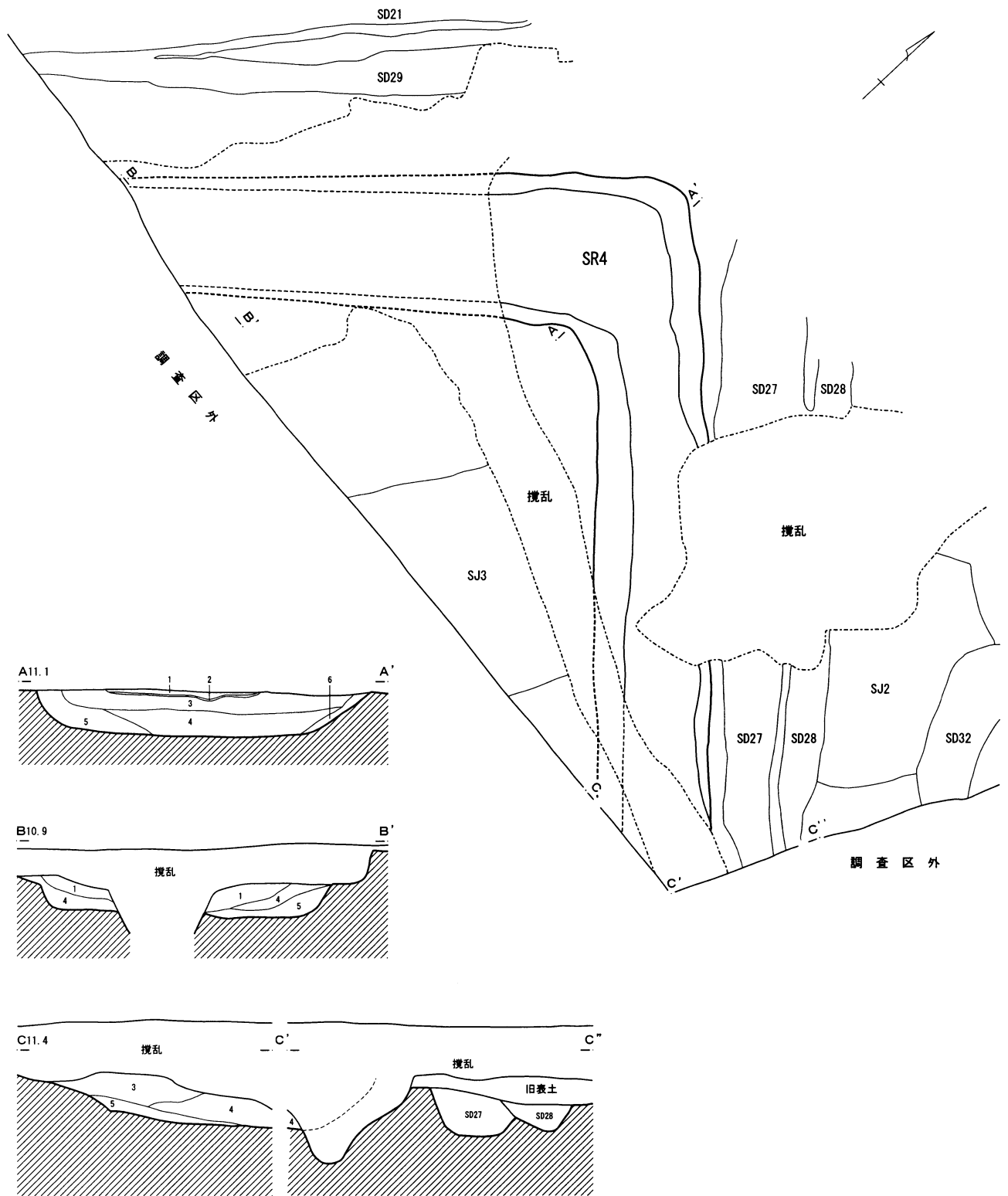
周溝内側では、第3号竪穴住居跡を検出したが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。しかし、第3号竪穴住居跡と第4号周溝遺構とは、主軸方位が異なっていることから、同時期に存在したとは考えにくい。

また、第4号周溝遺構の北西辺と北東辺を、L字型に囲むように、第21・27・28・29号溝跡を検出したが、周溝遺構に伴っていたかどうかは明らかにできなかった。

遺物は、覆土中から、壺・甕・台付甕・S字甕・

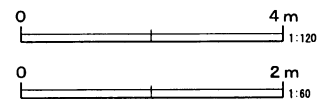


第64图 第3号周溝遺構



第4号周溝遺構

- 1 暗褐色土
- 2 灰白色土 FAと思われる厚さ1~2.5cmの層。
- 3 暗褐色土 しまり強、灰白色粘土ブロック(φ5mm以下)をまばらに含む。
- 4 黒褐色土 しまり強、3層より少量の灰白色粘土ブロックを含む、土器片を少量含む。
- 5 暗褐色土 地山土と灰白色粘土を含む。
- 6 暗褐色土 地山土と灰白色粘土を多量含む。



第65図 第4号周溝遺構

高坏・器台などがあるが、何れも破片資料で、全体の器形が明らかな遺物は出土しなかった。(第68図29～36)

34は、S字状口縁台付甕である。口縁部の破片である。厚手で、口縁部の稜は弱く、端部は外反する。在地の模倣品であると考えられる。

第5号周溝 (第66・68図)

B区F・G-4・5グリッドで検出した。調査区の西壁側で検出したため、大半は調査区外へ延びていた。このため、遺構全体の形状は明らかにできなかった。

調査区西側は、現在用水路となっており、用水路を挟んだ反対側にD区があるが、周溝遺構はD区まで連続していなかったことから、遺構は用水路内で完結していたものと思われる。

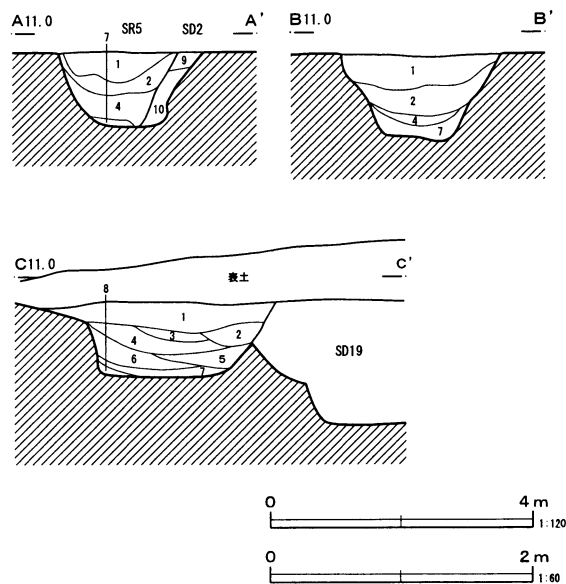
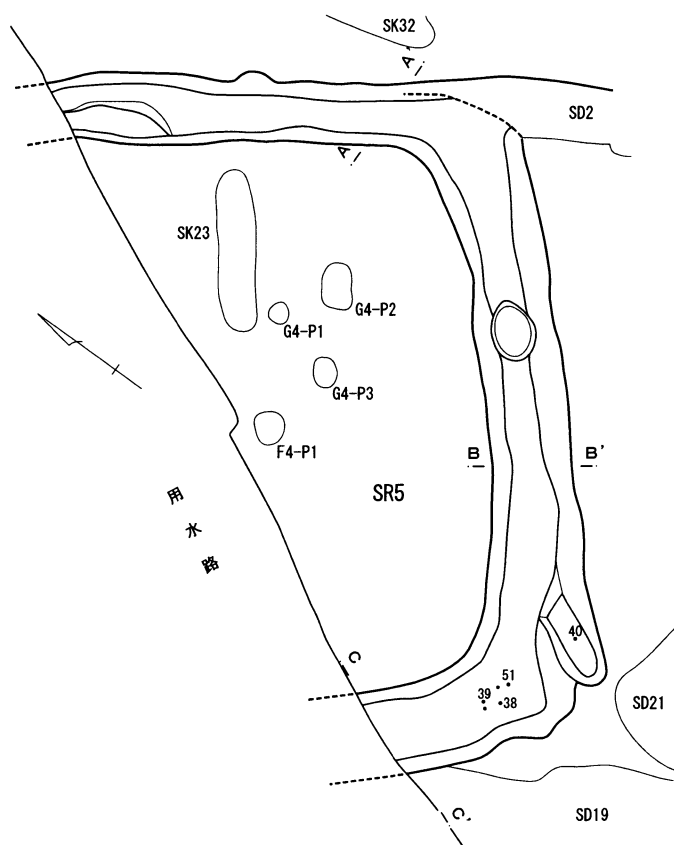
遺構は、第2・19号溝を壊していた。周溝内側に、第23号土壇・ピットを数基検出したが、周溝遺構とは直接重複しておらず、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は方形であったと考えられる。遺構の規模は、長軸は全長10.50m、短軸は全長6.55mまで確認できた。

周溝内側の平坦部の規模は、長軸8.5m、短軸は5.9mまで確認できた。主軸方向はN-53°-Eであった。

溝の規模は、北東辺で幅0.90m、南東辺で幅1.30mと、溝幅は一定ではない。深さは、0.56～0.63mであった。

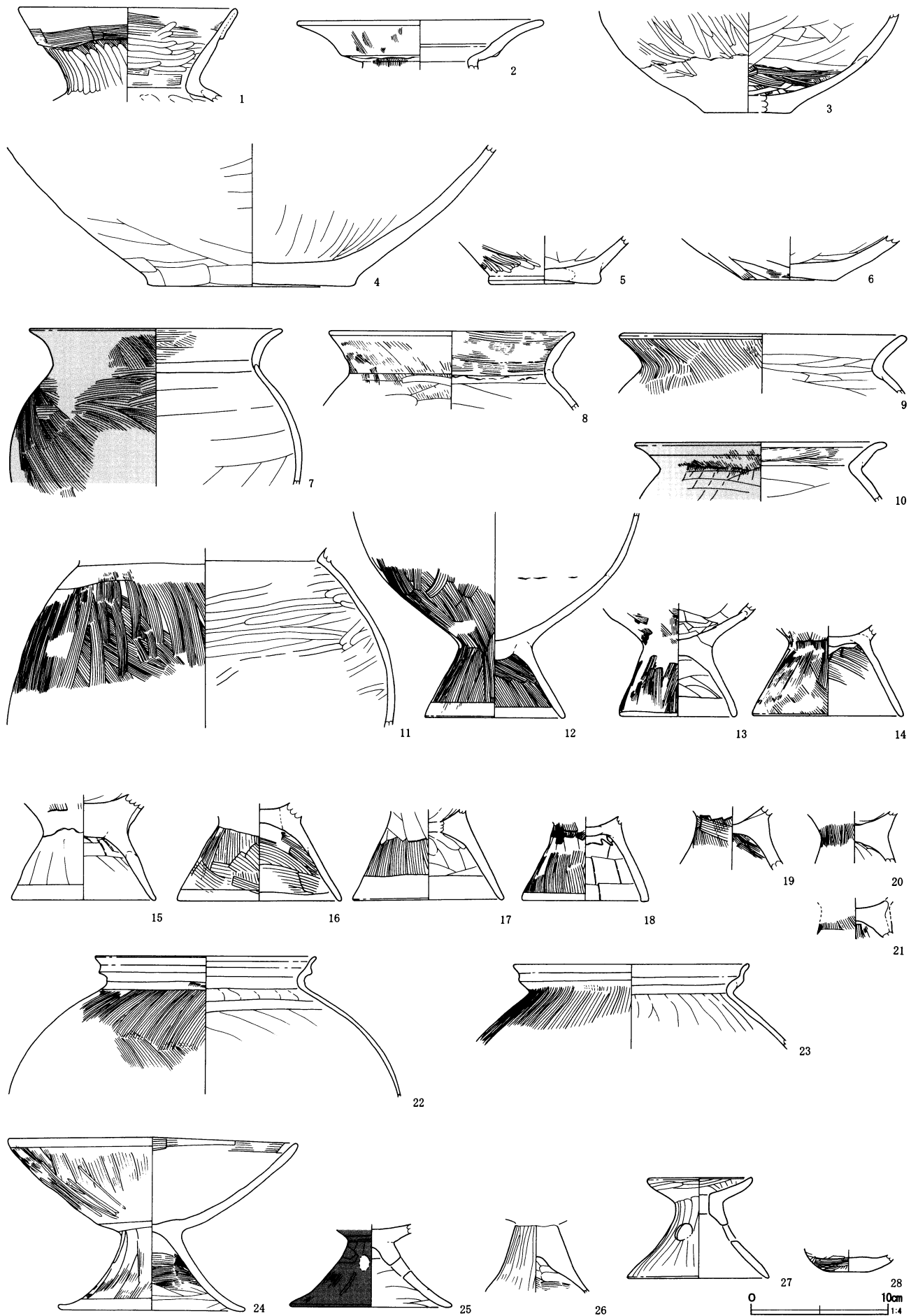
溝底面は概ね平坦で、溝断面の形状は逆台形であった。壁面の形状は、斜め上方に直線的に立ち上がっていた。



第5号周溝遺構

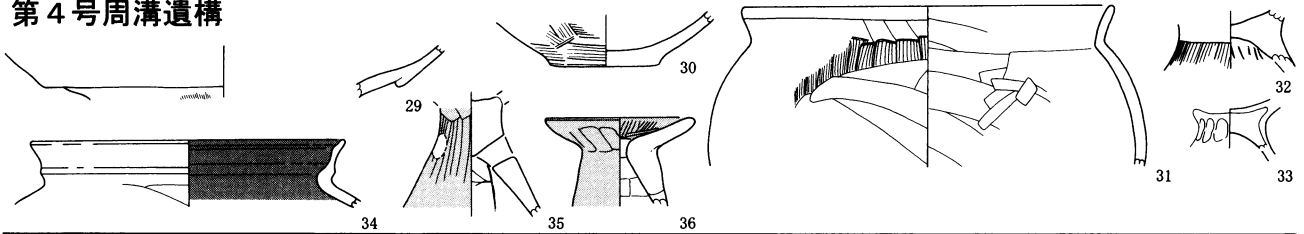
- 1 黒褐色土 粘性なし、灰白色土ブロックを多量含む、SD-19の1層に似るが炭化物を含まない。
- 2 黒褐色土 粘性なし、酸化鉄分を多量含む、灰白色土ブロックを含む。
- 3 灰褐色土 粘性なし、灰白色土ブロックを多量含む。
- 4 黒褐色土 粘性なし、灰白色土粒ブロックを含む。
- 5 黒褐色土 灰白色土粒ブロックを含む、4層に似るが灰白色土粒は少ない。
- 6 暗褐色土 粘性ややあり、灰白色土粒子を少量含む。
- 7 灰褐色土 粘性なし、しまりややあり、灰白色土粒子を極めて多量含む。
- 8 黒褐色土 灰白色土ブロックを多量含む。
- 9 黒褐色土 粘性・しまりあり、焼土粒子(φ2～3mm)を少量含む。
- 10 黒灰色土 粘性・しまりあり、砂粒を少量含む。

第66図 第5号周溝遺構

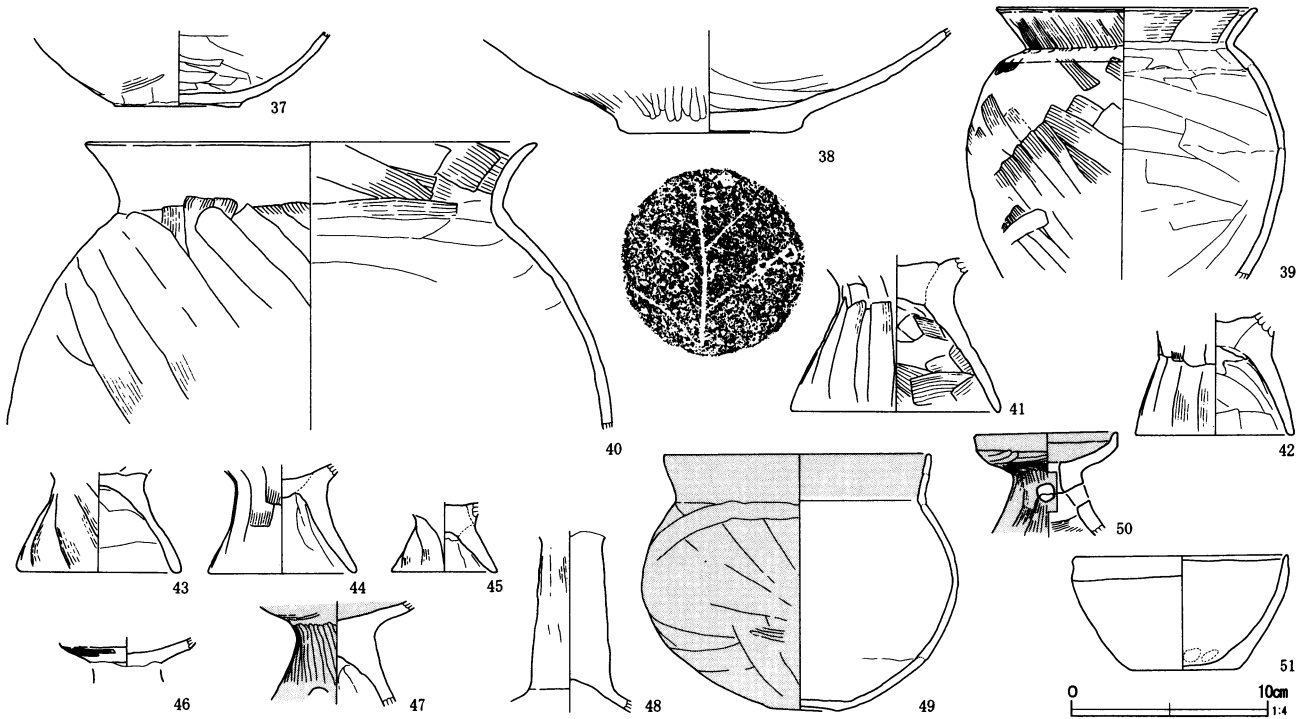


第67图 周溝遺構出土遺物(1)

第4号周溝遺構



第5号周溝遺構



第68図 周溝遺構出土遺物(2)

北東辺の溝は、第2号溝跡と重複していた。土層断面の観察では、第2号溝跡埋没後、新たに掘り込まれていた。しかし、第2号溝跡の北東側の壁面は壊れておらず、第2号溝跡の規格が意識されていたことが覗える。

また、第5号周溝遺構の溝の南西辺に平行して第22号溝跡、南東辺に沿うように第21号溝跡を検出した。

互いに重複していなかったため、両者との新旧関係は明らかにできなかったが、特に第21号溝跡は、第5号周溝遺構の南東辺に沿うように溝跡がL字型となり、第5号周溝遺構手前で立ち上がっていた。さらに、第21号溝跡出土遺物は、第5号周溝遺構方向から流れ込んでいたことから、両者は、関連のあった遺構であった可能性がある。

遺物は、覆土中から、壺・甕・台付甕・高坏・器

台・鉢などが出土した(第68図37～51)。特に、第21号溝跡に隣接する、南コーナー部からの出土が多かった。

37・38は壺である。2点とも底部が残存していた。37は輪台状、38は木葉痕が認められた。

39～44は甕である。39は、口縁部の屈曲が強く、やや長胴となる台付甕と考えられる。40は、やや大型の甕である。41～44は脚部の破片である。

45は、台付甕の脚部とも考えられたが、脚部径が5.2cmと極めて小型の脚部である。内面底部に僅かだがミガキが認められ、高坏と判断した。

48は柱状の脚部となる高坏である。中実で、裾部は大きく開く。

49は、甕としたが、外面は底部を除く全面と、口縁部内面に赤彩されていた。表面の風化が著しい。

第13表 第1・4・5号周溝遺構出土遺物観察表 (第67・68図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SR1	壺	15.7	[6.8]		口縁部	B	普通	にぶい褐		50-2
2	SR1	壺	(17.6)	[3.6]		口縁部	A	普通	橙	内外面風化	
3	SR1	壺		[7.4]	(6.3)	胴～底部	G'	普通	明黄褐		
4	SR1	壺		[10.3]	15.0	胴～脚部	E	普通	にぶい橙	内外面風化、大廓式	50-3
5	SR1	壺		[3.5]	7.8	底部	A	普通	にぶい黄褐		
6	SR1	壺		[3.3]	(6.8)	底部	C	普通	にぶい黄橙	内外面風化	
7	SR1	甕	(18.3)	[11.5]		口縁～胴部	D	普通	にぶい黄橙	煤	
8	SR1	甕	(17.6)	[5.7]		口縁部	A	普通	褐		
9	SR1	甕	(20.0)	[4.3]		口縁部	A	良好	橙		
10	SR1	甕	(17.8)	[4.4]		口縁部	A	普通	灰黄褐	煤	
11	SR1	甕		[13.1]		胴部上半	A	普通	浅黄橙		
12	SR1	台付甕		[15.0]	10.0	胴～脚部	D	普通	にぶい褐		50-4
13	SR1	台付甕		[8.3]	8.2	胴～脚部	A	普通	橙		50-5
14	SR1	台付甕		[6.6]	10.8	脚部	A	普通			50-6
15	SR1	台付甕		[7.7]	10.3	脚部	A	普通	橙	外面風化	50-7
16	SR1	台付甕		[7.2]	(11.7)	脚部	A	普通	にぶい黄橙		
17	SR1	台付甕		[6.6]	(10.6)	脚部1/4	A	普通	灰黄褐	煤	
18	SR1	台付甕		[6.2]	9.2	脚部完形	D	普通	橙	煤	50-8
19	SR1	台付甕		[4.6]		脚部	A	普通	にぶい黄橙		
20	SR1	台付甕		[3.8]		脚部上半	A	良好	明赤褐		
21	SR1	台付甕		[2.7]		脚部上半	A	普通	にぶい黄橙		
22	SR1	S字甕	(15.8)	[10.2]		口縁～胴部	B	普通	にぶい黄橙	煤	51-1
23	SR1	S字甕	(17.0)	[6.2]		口縁部1/2	D	良好	にぶい黄橙		51-2
24	SR1	高坏	21.0	12.6	13.0	ほぼ完形	A	普通	明赤褐	坏部内面被熱による剥離?	51-3
25	SR1	高坏		[6.0]	(11.5)	脚部	C	普通	浅黄橙	赤彩透孔3(丁寧に穿孔)	
26	SR1	高坏		[5.0]		脚部	C	普通	浅黄橙	内面脚部上半指頭圧痕	
27	SR1	器台	7.4	7.3	10.2	1/3	A	普通	橙	内面脚部風化	51-4
28	SR1	柑		[1.6]	2.7	底部	C	普通	暗赤	赤彩	
29	SR4	壺		[2.7]		口縁部破片	A	普通	にぶい黄橙	傾き・径ともに推定	
30	SR4	壺		[2.7]	(5.5)	底部1/2	C	良好	浅黄橙	外面風化	
31	SR4	甕	(18.7)	[8.2]		口縁～胴部	A	普通	にぶい黄橙		
32	SR4	台付甕		[2.9]		脚部	A	普通	橙		
33	SR4	台付甕				胴底部	A	普通	明赤褐	外面頸部指頭痕	
34	SR4	S字甕	(16.0)	[3.4]		口縁部破片	F	良好	にぶい黄橙	煤	
35	SR4	高坏		[6.1]		脚部1/3	A	良好	浅黄	赤彩、透孔3	
36	SR4	器台	(7.3)	[4.5]		受部	A	良好		赤彩、透孔の痕跡有	
37	SR5	壺		[3.9]	6.4	底部	A	良好	にぶい黄橙	外面風化、底部輪台状	
38	SR5	壺		[5.3]	8.1	底部	A	良好	浅黄橙	木葉痕	
39	SR5	台付甕	13.1	[18.3]		口縁～胴部	D	普通	にぶい褐		51-5
40	SR5	甕	(22.9)	[14.6]		口縁～胴部	A	良好	灰黄褐		51-6
41	SR5	台付甕		[7.9]	(10.6)	脚部1/4	D	良好	橙		
42	SR5	台付甕		[6.2]	(8.0)	脚部1/3	A	良好	橙		
43	SR5	台付甕		[5.1]	8.0	脚部2/5	A	普通	橙	外面風化	
44	SR5	台付甕		[5.6]	7.5	脚部	A	良好	橙		
45	SR5	ミニチュア		[3.5]	(5.2)	脚部1/2	A	良好	橙	高坏	
46	SR5	高坏		[1.4]		底部	A	良好	にぶい黄橙		
47	SR5	高坏		[5.2]		脚部	A	普通	橙	赤彩、透孔1	
48	SR5	高坏		[9.2]		脚部	A	良好	にぶい橙		
49	SR5	甕	13.5	13.0	3.4	2/3	A	普通	橙	赤彩、内面風化	51-7
50	SR5	器台	7.0	[5.8]		受部完形	A	良好	灰赤	赤彩、透孔3	
51	SR5	鉢	10.8	5.8	5.5	2/3	C	普通	にぶい橙	全体的風化、水簸粘土	51-8

6. 溝跡

溝跡は、50条検出した。東西に長い調査範囲であったが、溝跡の全体を調査できた遺構は少ない。

調査区外へ延び、溝跡全体の形状が明らかにできなかったため、平面形がL字型になる遺構や、一端が立ち上がる遺構は、周溝遺構や、土壇として報告すべき遺構も少なからず存在する。

しかし、今回の報告では、調査時の遺構番号・名称は変更せず、溝跡として掲載した。

また、溝跡によっては、調査区全域にわたって検出された長大な溝跡があり、東西に長い調査区を縦断するように検出した溝跡もあった。

発掘調査は、用地取得の関係上、概ね西側の調査区から順に調査を実施した。遺構番号については、調査順に番号を付したため、概ね西側から若い番号となっているが、必ずしも整然とならない。

本報告では、溝跡は、各区毎に西側の調査区から、C区→D区→A区→B区→E・F区の順に報告する。したがって、報告が遺構番号順に整然とならない場合がある。

また、複数の調査区にわたって検出した溝跡は、一つの区の中でまとめて報告した。

C区

第1号溝跡（第69・70・99図）

C区E-1グリッドで検出した。

第1号土壇と重複していた。第1号土壇に壊されていた。

遺構の北側は調査区外に延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。一方南側の一端は、第3号溝跡手前で立ち上がっていた。

規模は、検出長2.74m、幅0.80～0.90m、深さは0.42mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は、概ね垂直に立ち上がっていた。

遺物は、覆土中から、壺口縁部・台付甕などが出

土した。図示可能な遺物は、5点であった。（第99図1～5）。

また、小片のため図示できなかった遺物は、以下のとおりである。

甕1個体・5g

甕胴部16g

第2号溝跡（第69・76・78・79・83・98図）

B～C区E-1・2、G-4・5、H-5・6グリッドで検出した。

溝跡は、C区北端部から、南東方向に直線的に延びていた。

第5号周溝遺構、第1号性格不明遺構、第3・21・25号溝跡と重複していた。遺構は、第3号溝跡を壊し、第5号周溝、第1号性格不明遺構に壊されていた。第21・25号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

また、南側・北側は調査区外に延び、用水路によって分断されていたため、全体の規模は明らかにできなかった。

規模は、C区で検出長6.3m、B区で検出長31.6mであった。用水路によって分断された部分を含めると、長さは、61.7mとなる。

溝幅は0.55～1.00mで、深さは0.50～0.60mであった。

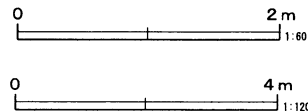
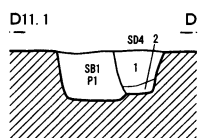
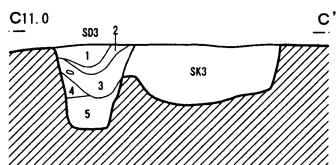
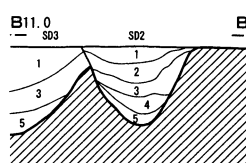
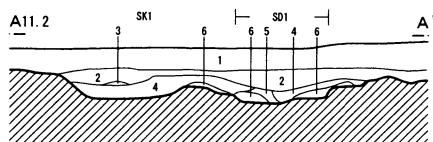
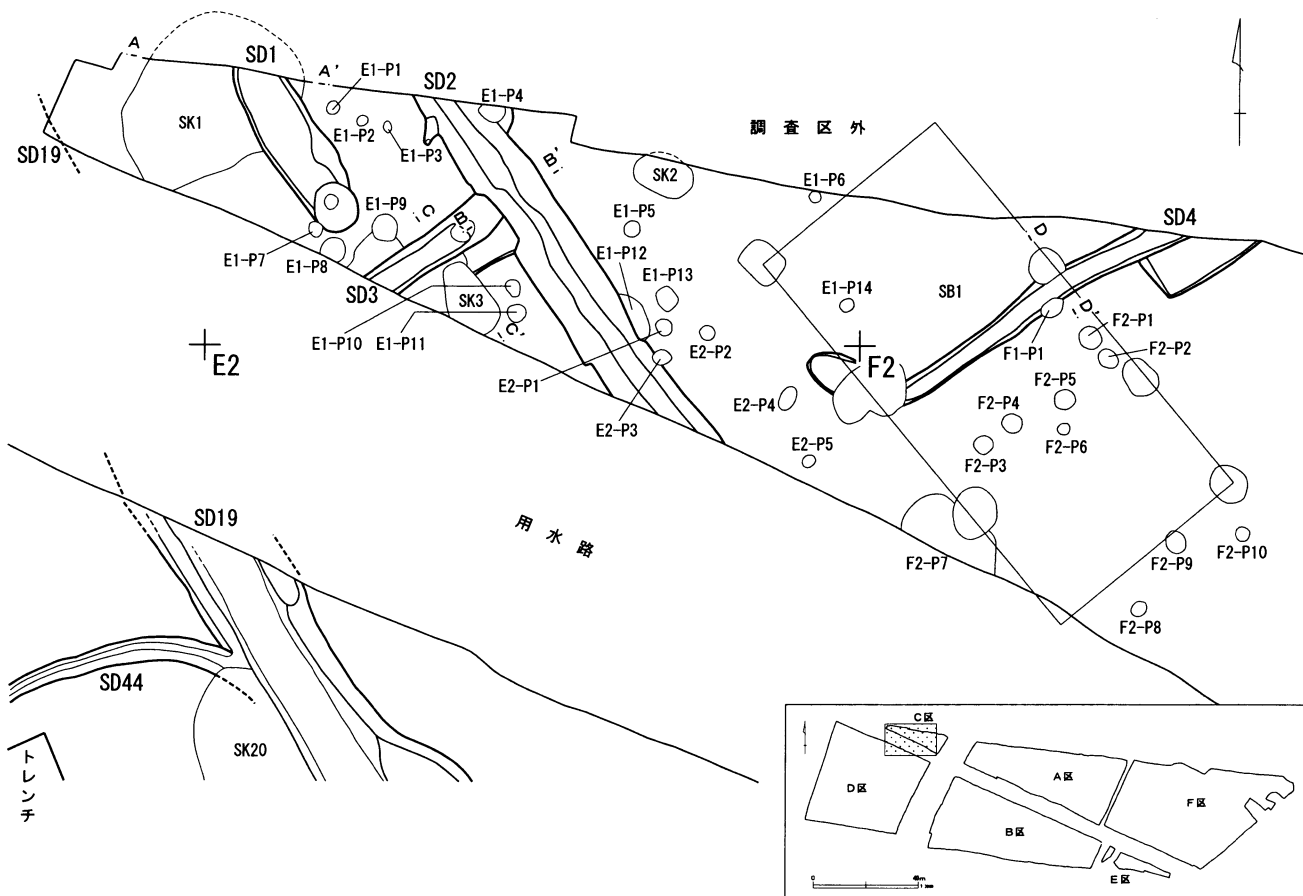
溝の断面の形状は、C区ではV字型に近いが、B区では逆台形となる。壁面は斜め上方に直線的に立ち上がっていた。

溝底面のレベルは、C区からB区にかけて、標高10.3m前後で推移し、底面の高低差は殆ど認められなかった。

遺物は、器台・鉢が出土した（第99図6・7）。

第3号溝跡（第69・99図）

C区E-1グリッドで検出した。



第1号溝跡・第1号土壇(A-A')

- | | | |
|---|--------|--|
| 1 | 耕作土 | 粘性強、しまりなし。 |
| 2 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、しまりあり、炭化・焼土粒子を多量含む、暗黄灰色粒子を含む。 |
| 3 | 暗青灰色粘土 | 粘性ややあり、しまりあり、炭化物を多量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 粘性ややあり、しまりあり、地山土である暗黄褐色土を多量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | 粘性・しまりややあり、地山土である暗黄褐色土を多量含む、4層と6層の中間的様相。 |
| 6 | 黄褐色土 | 粘性・しまりややあり、地山土である暗黄褐色土を極めて多量含む。 |

第2号溝跡(B-B')

- | | | |
|---|------|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、白色粒子を多量含む、炭化物を含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、炭化物を少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 粘性あり、白色粘土ブロックを含む。 |
| 4 | 暗灰色土 | 粘性あり、しまりなし、軟質、炭化物を含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | 粘性・しまりあり、焼土粒子(φ2~3mm)を少量含む。 |

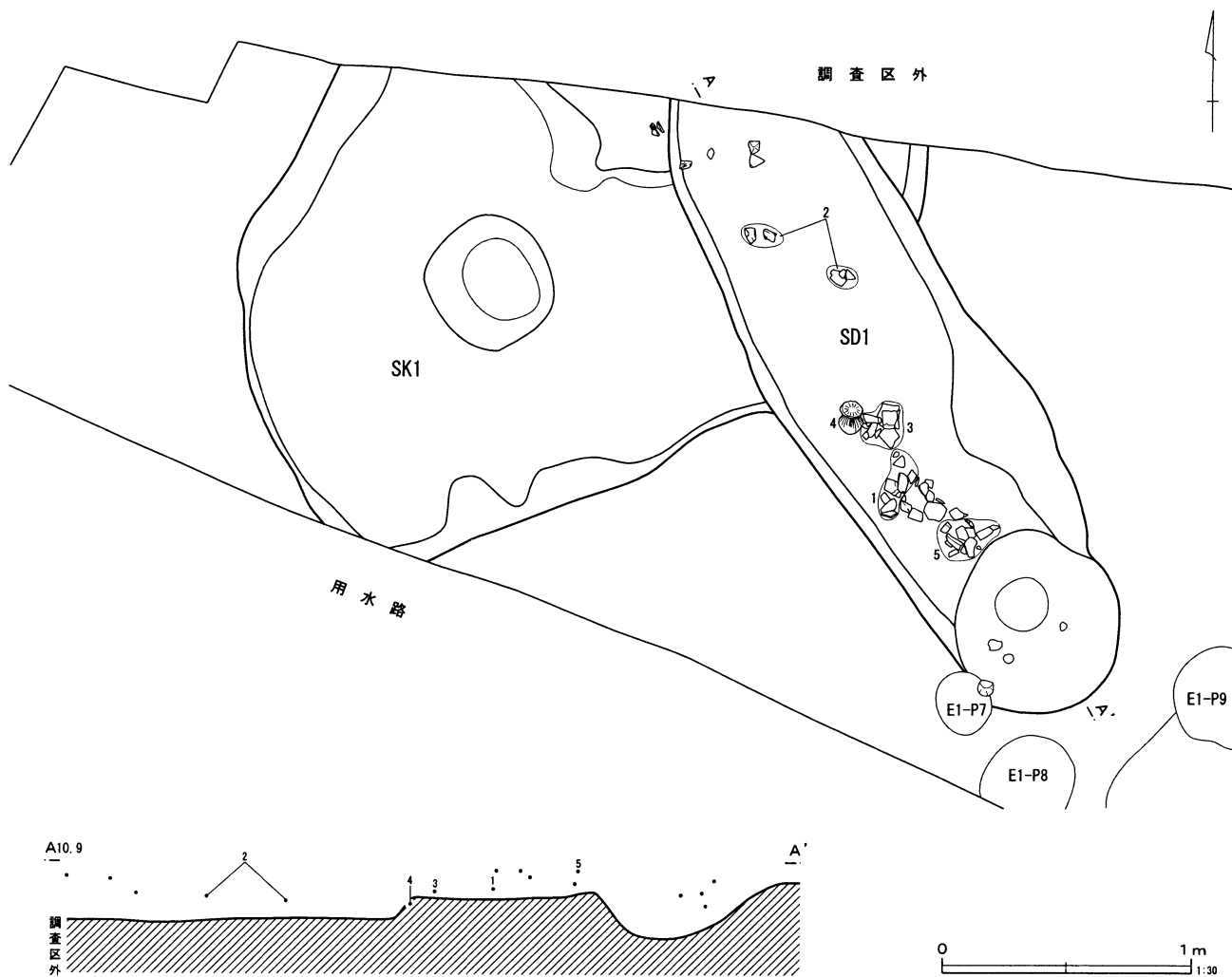
第3号溝跡(B-B')(C-C')

- | | | |
|---|------|--------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 粘性・しまりあり、灰白色粘土ブロックを多量含む。 |
| 2 | 黒色土 | 炭化物を多量含む、灰白色粘質土を含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、炭化物を微量含む。 |
| 4 | 褐色土 | 粘性あり、酸化鉄分を含む。 |
| 5 | 暗灰色土 | 粘性あり、軟質、炭化物を微量含む。 |

第4号溝跡(D-D')

- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 粘性あり、しまりややあり、炭化粒子・焼土粒子を多量含む。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | 粘性あり、しまりややあり、黄褐色土粒子を多量含む。 |

第69図 溝跡(1)



第70図 第1号溝跡遺物出土状況

第3号土壌、第2号溝跡と重複していた。第3号土壌を壊し、第2号溝跡に壊されていた。また、西側を用水路に壊されていたため、全体の規模は明らかにできなかった。

規模は、検出長2.08mであった。幅は0.50～0.60m、深さは0.63mであった。

遺構は、第2号溝跡と重複する部分で、立ち上がっており、第2号溝跡の対岸に伸びていないことから、土壌であった可能性もあるが、明らかにできなかった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方に直線的に立ち上がっていた。

遺物は、S字甕・壺・高坏・砥石が出土した（第99図8～14）。

8・9はS字状口縁台付甕である。8は口縁部が大きく外反し、肩部は羽状ではなく、横方向の刷毛目が認められる。

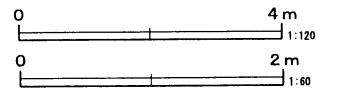
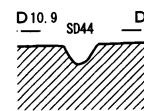
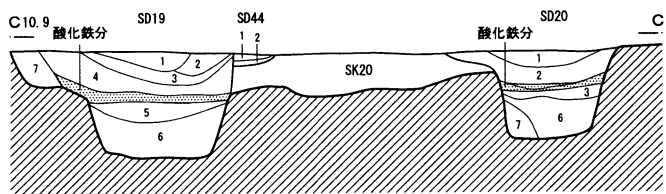
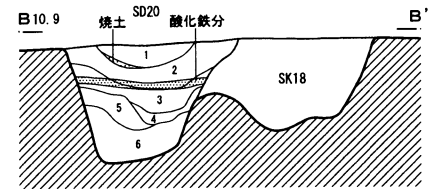
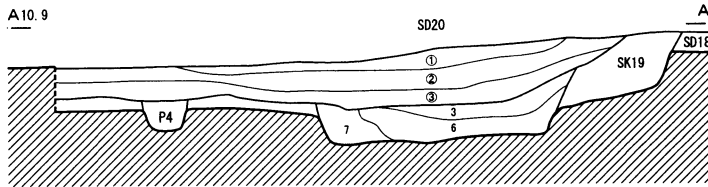
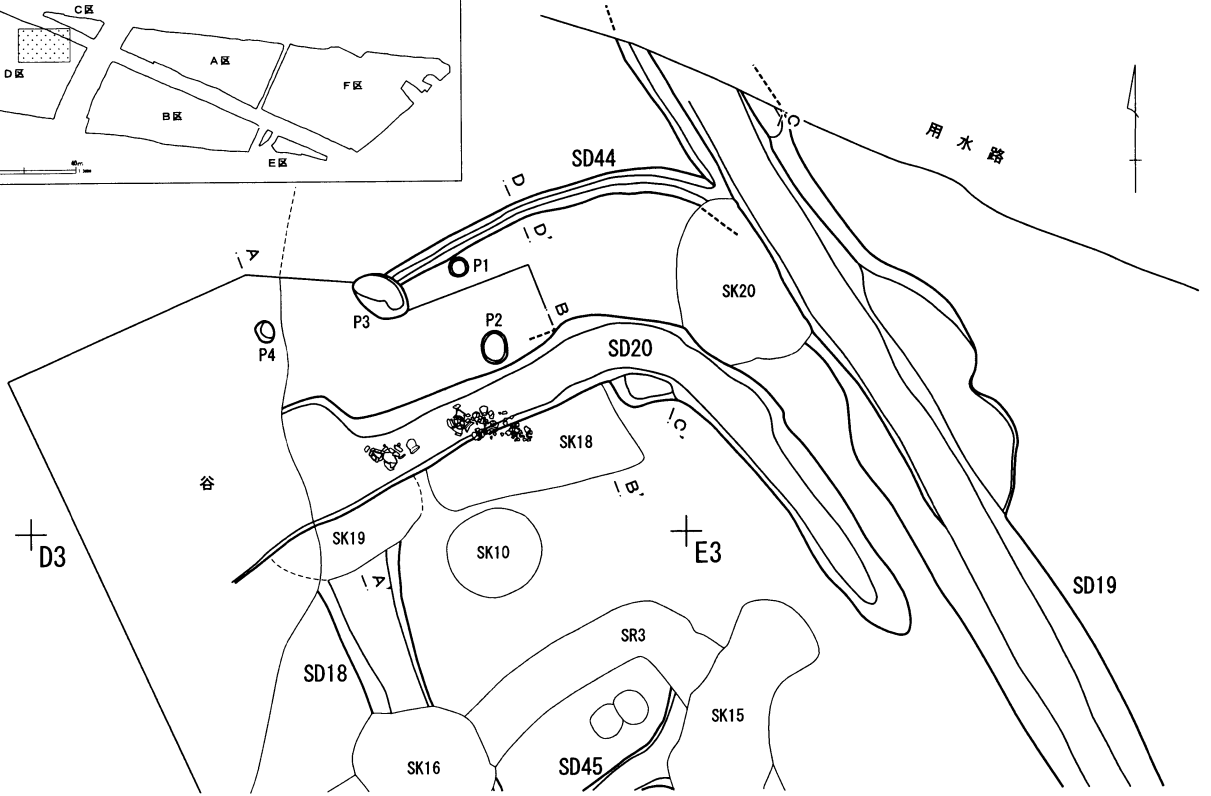
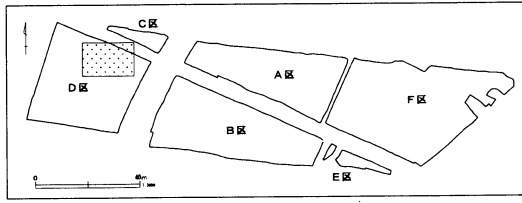
13は、大廓式の大型壺の口縁部の破片である。口縁部直下に孔が2孔認められた。補修孔とも考えられたが、1孔は貫通していなかった。また、口縁部外面に、鋭利な刃物状の工具による不規則な傷が認められた。胎土の特徴から、搬入品と考えられる。

第4号溝跡（第69・99図）

C区F-1・2グリッドで検出した。

第1号掘立柱建物跡と重複していた。第1号掘立柱建物跡を壊していた。

南側の一端は、第1号掘立柱建物跡と重複してい



谷部 (A-A')

- ① 黒色土 粘性ややあり、しまりなし、酸化鉄分・まこも・アシ系の根を多量含む。
- ② 黒色土 泥炭層、草本質、白色粘土と泥炭(厚さ2~3cm)が交互に堆積する層。
- ③ 暗灰色土 粘性あり、層中に5mm~1cmの泥炭が断続的に形成する。

第20号溝跡 (A-A') (B-B')

- 1 黒褐色土 灰白色土ブロック・焼土粒子を多量含む、2層との層界に焼土がブロック状に堆積。
- 2 黒褐色土 灰白色土ブロック粒子を多量含む、炭化物を含む、下層の粘質土と比べるとややボソボソした感じ。
- 3 暗灰色土 粘性あり、炭化物・灰白色土ブロックを多量含む。
- 4 暗灰色土 粘性あり、炭化物を微量含む、混入粒子は殆どなし。
- 5 灰白色土 灰白粘土+暗灰色粘土ブロックの混合土、ブロックは未溶化。
- 6 暗灰色土 粘性あり、灰白色土ブロック・炭化物・酸化鉄分を含む。

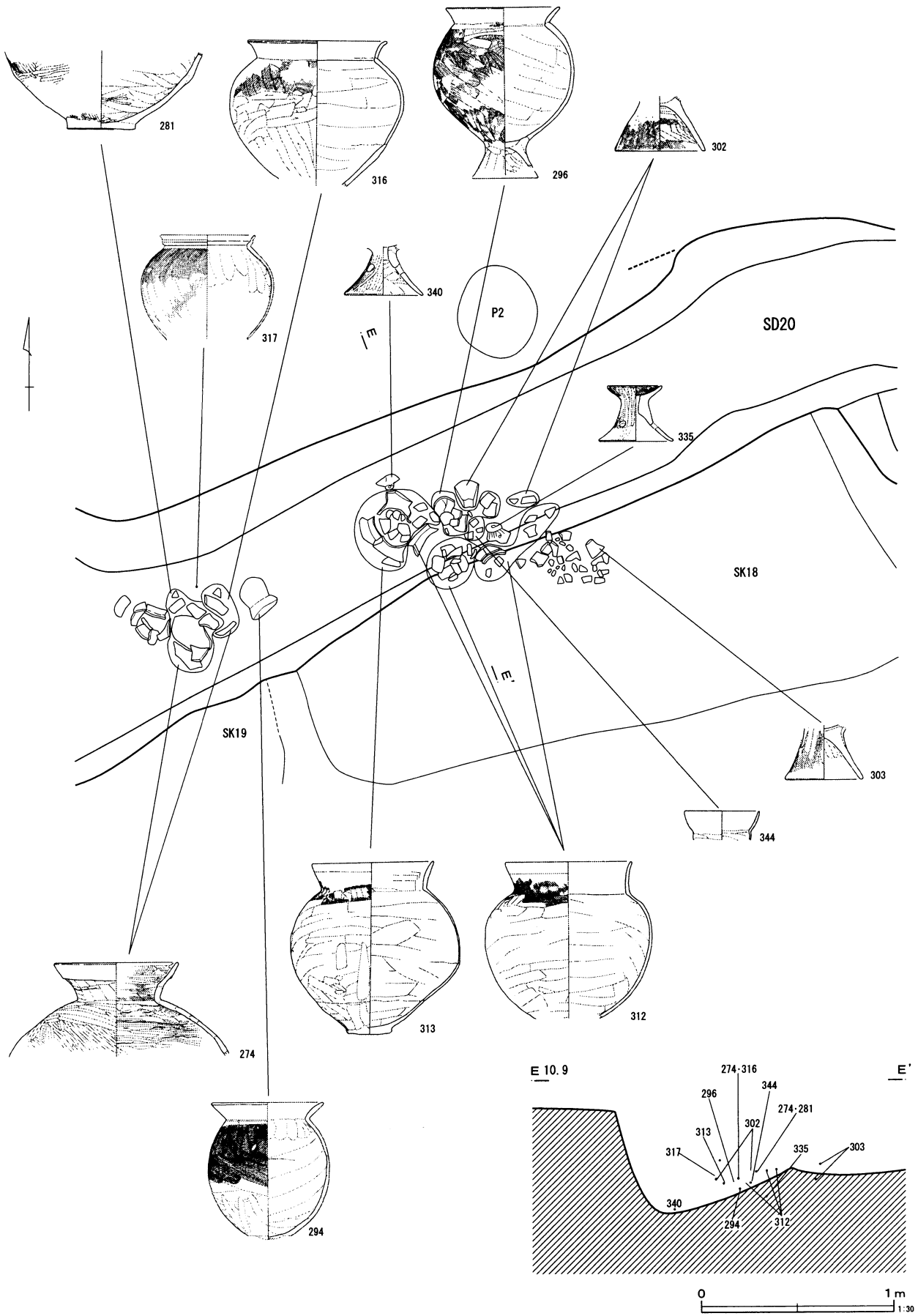
第19号溝跡 (C-C')

- 1 暗褐色土 しまり強、白色粘土・地山土・土器小片を少量含む。
- 2 暗褐色土 粘性・しまり強、1層より混入物少ない、土器小片を含む。
- 3 黒褐色土 炭を部分的に層状に含む、地山土を極少量含む、土器小片を含む。
- 4 暗褐色土 地山土を少量含む、白色粘土を極めて少量含む。
- 5 暗灰色土 粘性あり、しまり弱、白色粘土の小塊をやや多く含む。
- 6 暗褐色土 粘性あり、しまり弱、地山土と黒褐色土の混合土。
- 7 灰白色土 粘性・しまり強、白色粘土と地山土を多量含む、黒褐色土を少量含む。

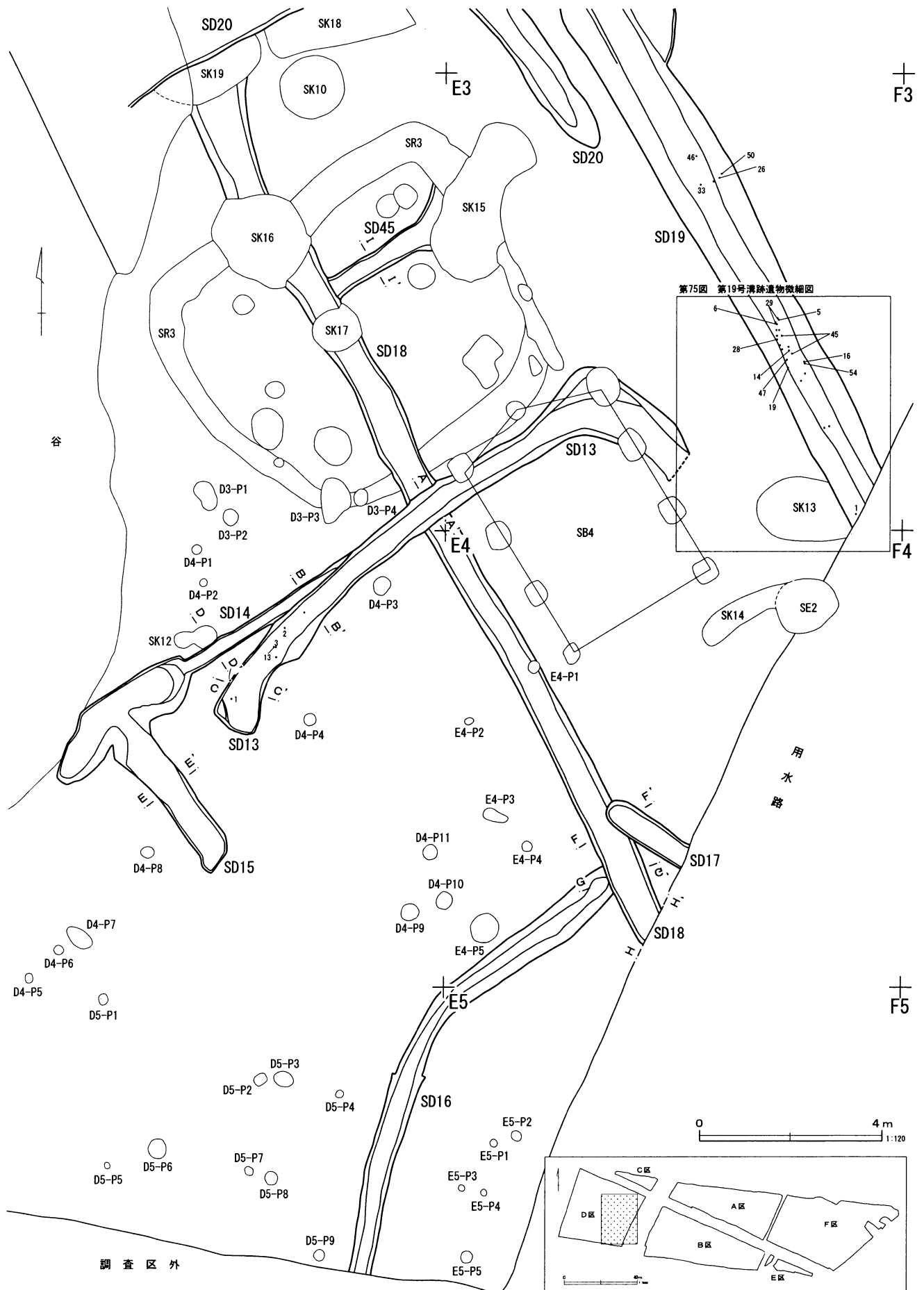
第44号溝跡 (C-C')

- 1 灰白色土 しまり強、黒褐色土を少量含む、土器小片を含む。
- 2 黒褐色土 しまり強、土器小片を含む。

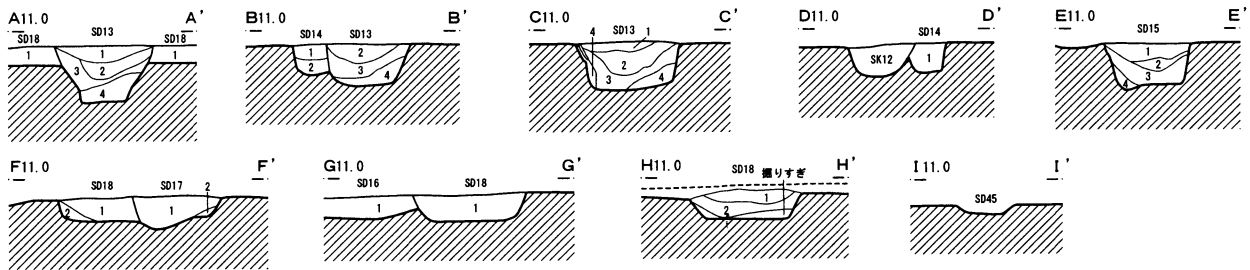
第71図 溝跡 (2)



第72图 第20号沟迹遗物出土状况



第73図 溝跡 (3)



第13号溝跡 (A-A') (B-B') (C-C')

- 1 黄褐色土 粘性ややあり、地山黄褐色土ブロックを多量含む。
- 2 暗褐色土 粘性ややあり、地山黄褐色土ブロックを多量含む。
- 3 黒褐色土 粘性あり、炭化物・地山白色粘土ブロック粒子を多量含む。
- 4 暗褐色土 地山白色粘土ブロックを多量含む。
- 5 暗褐色土 酸化鉄分を多量含む、地山黄褐色土粒子・炭化物を含む。

第14号溝跡 (B-B') (D-D')

- 1 暗褐色土 粘性ややあり、地山黄褐色土粒子を多量含む。
- 2 黒褐色土 粘性あり、地山白色粘土ブロックを多量含む。

第15号溝跡 (E-E')

- 1 暗褐色土 粘性ややあり、白色粘土粒子を多量含む。
- 2 黒色土 粘性あり、炭化物を多量含む。
- 3 黒褐色土 粘性あり、地山白色粘土粒子・炭化物を含む。
- 4 黒褐色土 粘性あり、地山白色粘土粒子を少量含む。

第16号溝跡 (G-G')

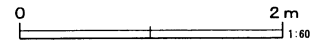
- 1 暗褐色土 地山黄褐色土を多量含む、黒色土を含む。

第17号溝跡 (F-F')

- 1 黒褐色土 しまりあり、地山黄褐色土粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 しまりあり、地山黄褐色土粒子を微量含む。

第18号溝跡 (A-A') (F-F') (G-G') (H-H')

- 1 暗褐色土 酸化鉄分を多量含む、地山黄褐色土粒子・炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 地山黄褐色土粒子を少量含む。



第74図 溝跡 (4)

たが、この付近で立ち上がっていたものと思われる。北側の一端は調査区外に延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、検出長4.50mであった。幅は、0.40m、深さは0.32mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は急傾斜で直線的に立ちあがっていた。

また、北東側の壁面に、テラス状の浅い掘り込みを検出した。

遺物は、甕・鉢が出土した (第99図15・16)。

D区

第13号溝跡 (第73・74・102図)

D区D-3・4、E-3グリッドで検出した。

第3号周溝遺構の南側に接し、第4号掘立柱建物跡、第14・18号溝跡と重複していた。遺構は、第14・18号溝跡を壊し、第4号掘立柱建物跡に壊されていた。

東西に長い溝で、やや弧状を描き、第19号溝跡手前で直角に折れていた。溝の両端部は立ち上がっていた。

規模は、長さ13.40m、幅0.60～1.00m、深さ

0.32～0.43mであった。

底面は平坦で、立ち上がりは、箱型で概ね垂直に立ち上がっていた。周溝遺構の一部であった可能性もあるが、明らかにできなかった。

遺物は、甕・台付甕・高坏・台付鉢などが出土した (第102図115～127)。

115～122は、台付甕である。器形の復元できる遺物はなかった。

123～126は、高坏の脚部片である。裾が外反気味に開くものと思われる。

127は、台付鉢である。脚部を欠損していた。鉢は深身で、内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。

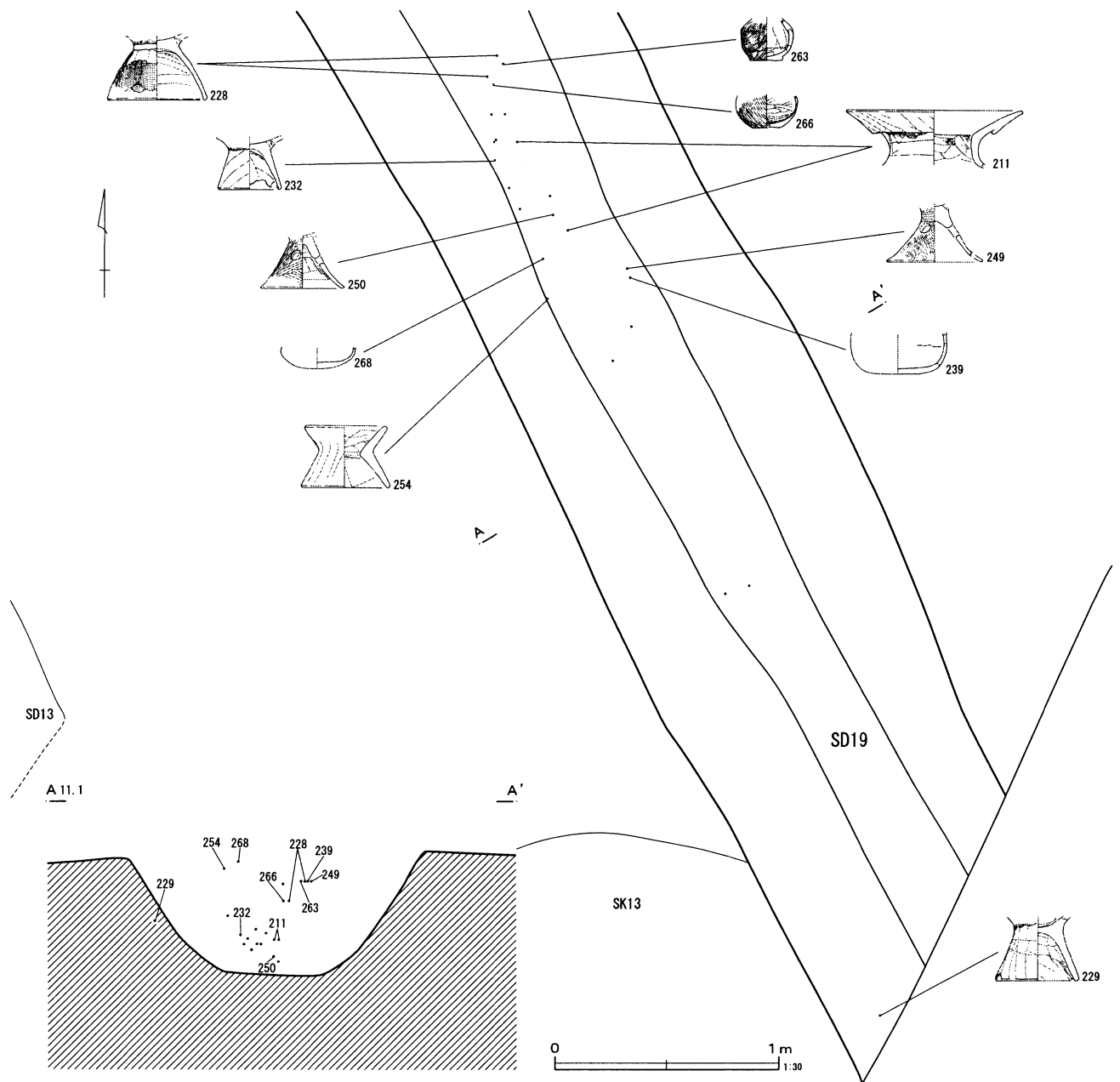
第14号溝跡 (第73・74図)

D区D-4グリッドで検出した。

第12号土壇、第13・15号溝跡と重複していた。第12号土壇、第13号溝跡に壊されていた。第15号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

規模は、検出長4.04mであった。幅は0.28～0.32m、深さ0.22mであった。

溝底面は概ね平坦で、壁面は垂直に立ち上がって



第75図 第19号溝跡遺物出土状況

いた。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が出土したが、
図示可能な遺物は出土しなかった。

第15号溝跡 (第73・74図)

D区D-4グリッドで検出した。第14号溝跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

規模は、長さ4.38m、幅0.70～0.95m、深さ0.38mであった。

溝底面は概ね平坦で、壁面は直線的に立ち上がっていた。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が出土したが、
図示可能な遺物は出土しなかった。

第16号溝跡 (第73・74図)

D区D-5、E-4・5グリッドで検出した。

遺構は、第18号溝跡に壊されていた。

溝跡は、第18号と重複する付近から始まり、やや弧状に南進し、南側は調査区外に延びていた。このため、溝跡全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、検出長が10.82mであった。幅は0.47～0.80m、深さ0.18mであった。

底面は概ね平坦であり、溝断面の形状は、逆台形であった。

遺物は出土しなかった。

第17号溝跡 (第73・74図)

D区E-4グリッドで検出した。

第18号溝跡と重複していた。第18号溝跡を壊していた。東側は調査区外に延びていた。

規模は、検出長が2.06 mであった。幅は、0.50～0.60 m、深さは0.25 mであった。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第18号溝跡 (第71・73・74図)

D区D・E-3・4グリッドで検出した。南側は調査区外に延びていた。

第3号周溝遺構、第16・17・19号土壇、第13・16・17・45号溝跡と重複していた。

第3号周溝遺構、第17号土壇、第16号溝跡を壊し、第16・19号土壇、第13・17号溝跡に壊されていた。第45号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

規模は、検出長20.50 m、幅は0.68～1.10 m、深さは0.21 mであった。

底面は平坦で、断面は箱型であった。

遺物は出土しなかった。

第19号溝跡 (第71・73～75・78～81・103～106図)

B・C・D区D-2、E-2・3、F-5、G-5・6グリッドで検出した。遺構は、北西～南東方向に直線的に延びていた。

B区で第5号周溝、D区で第13・20号土壇、第22・44号溝跡と重複していた。第13・20号土壇、第44号溝跡を壊し、第5号周溝、第22号溝跡に壊されていた。溝跡の北端と南端は調査区外に延びていた。

規模は、D区において20.5 m、B区において13.5 m検出した。B区とD区は、用水路によって分断されており、検出できなかった部分も合わせると、検出長は47.5 mとなる。

溝幅は、1.30～1.80 m、深さは0.84～0.96 mであった。

底面は概ね平坦で、断面の形状は、底面付近は箱型で、東側壁面にテラス状の段を有する部分が認められた。

溝底面のレベルは、D区からB区にかけては、B区が、標高が10～15cm低くなっているが、レベル差は認められなかった。

出土遺物は、B区は、広口壺・壺・台付甕・甕・S字甕・高坏・器台・小型壺・鉢・ミニチュア土器、D区は壺・台付甕・甕・小型壺・高坏・器台・埴・鉢・小型鉢・ミニチュア土器、C区は台付甕・壺・S字甕・器台などが出土した。(第103～106図128～273)

また、小片のため図示できなかった遺物は、以下のとおりである。

B区：甕口縁部129個体・1981 g

甕脚部11個体・2473 g

甕胴部9615 g

壺口縁部30個体・720 g

壺底部25個体

壺胴部5350 g

高坏・器台48個体・790 g

小型品216個体・910 g

D区：甕口縁部79個体・1350 g

甕脚部90個体・2350 g

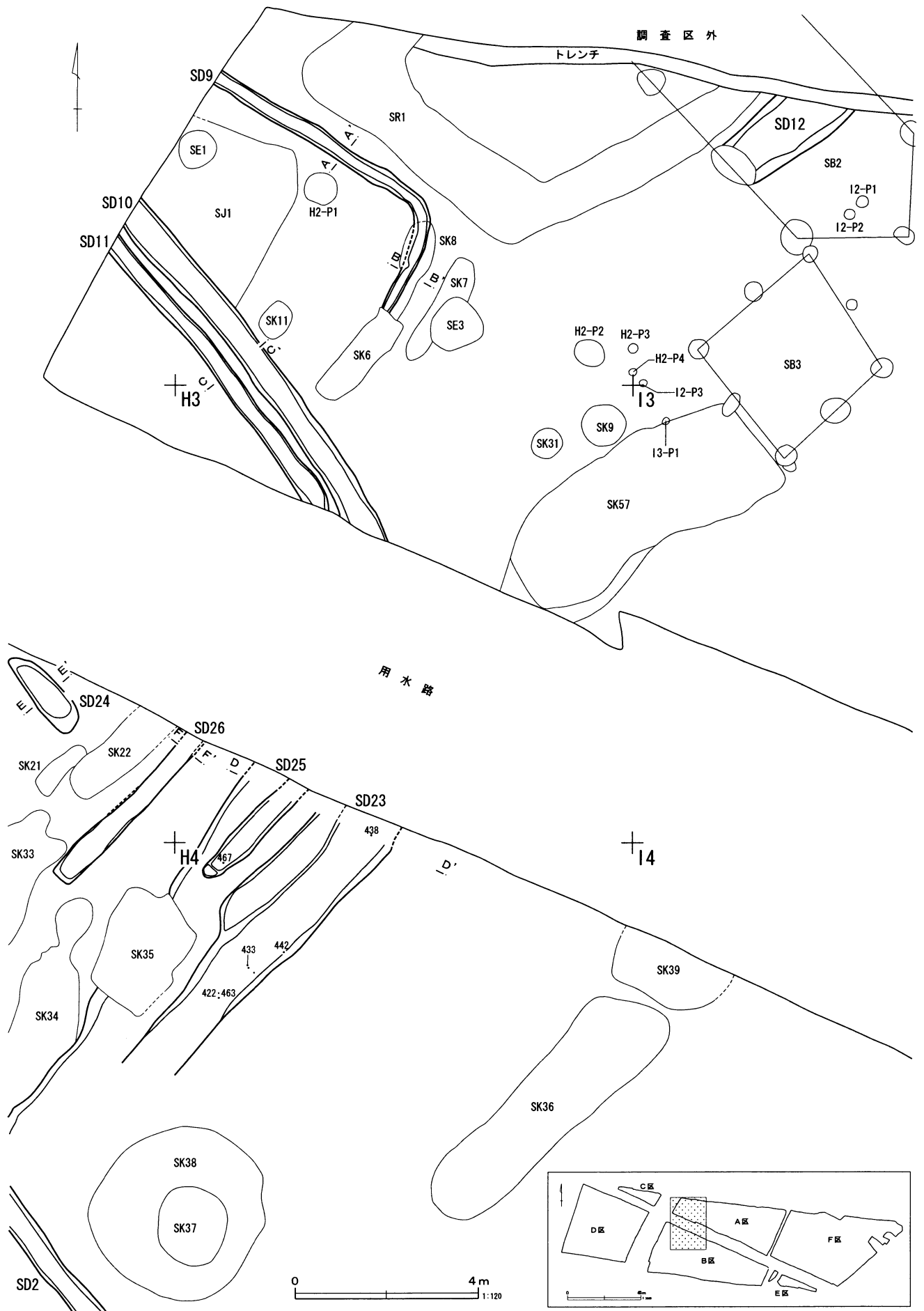
甕胴部3970 g

壺口縁部28個体・1800 g

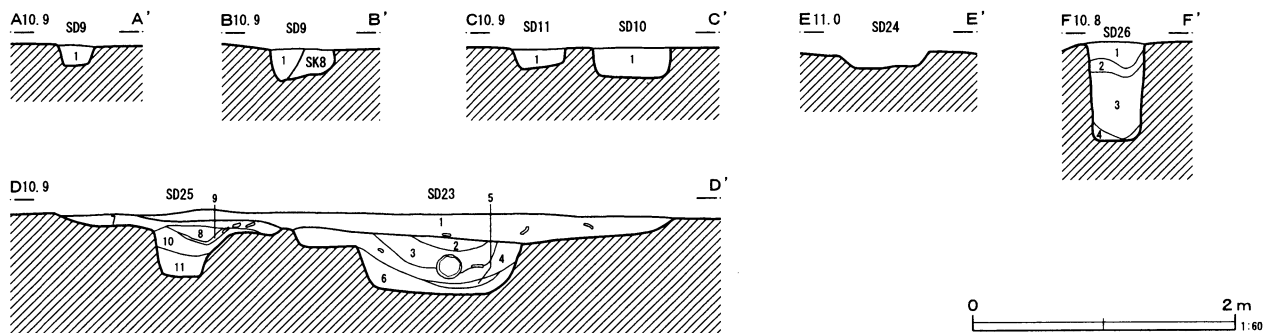
壺底部34個体・2690 g

壺胴部8080 g

高坏・器台2230 g



第76図 溝跡(5)



第9号溝跡(A-A')(B-B')

- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、焼土粒子(φ2mm)を少量含む、青灰色土ブロック(φ1cm)を多量含む。(自然堆積)

第10号溝跡(C-C')

- 1 黒灰色土 粘性ややあり、しまりあり、青灰色土・黄褐色土ブロック(φ1cm以上)・炭化粒子を多量含む、人為堆積と思われる。

第11号溝跡(C-C')

- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、青灰色土ブロック(地山が崩れたもの)を少量含む。(自然堆積)

第26号溝跡(F-F')

- 1 暗青灰色土 粘性なし、しまりあり、拳大の青灰色土ブロックを多量含む、埋戻しの土。
 2 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、炭化粒子を多量含む。
 3 黒灰色土 粘性なし、しまりあり、青灰色土ブロック(φ2~3cm)を多量含む。
 4 黒褐色土 粘性なし、しまりあり、焼土粒子を多量含む。

第23号溝跡(D-D')

- 1 暗褐色土 しまりあり、白色粘土を含む。(谷の覆土)
 2 黒褐色土 地山土(φ2mm程)を中量含む、白色粘土を少量含む。
 3 暗褐色土 炭化物・白色粘土を含む。
 4 暗褐色土 粘性あり、土器小片をやや多く含む、白色粘土を少量含む。
 5 黒色土 炭層である、2~3層の層構造を持つ。
 6 黒褐色土 粘性強、混入物は殆どない。

第25号溝跡(D-D')

- 7 暗褐色土 地山土・白色粘土を多量含む。
 8 黒褐色土 混入物は殆どない。
 9 黒色土 炭層である。
 10 暗褐色土 白色粘土を多量含む。
 11 暗褐色土 地山土を極少量含む。

第77図 溝跡(6)

小型品 2520 g

128~208 は、B区から出土した。

128~152 は、壺である。128・129 は、甕と考えられたが、胴部外面にヘラミガキが認められたため、壺とした。

147~152 は、破片ではあるが、大廓式土器の壺である。147~149 は大型壺、150~152 は、折り返し口縁壺の胴部であると考えられる。胎土の特徴から、搬入品と考えられる。

153~177 は、甕である。器形の復元できた資料は、153の小型の台付甕のみであった。小型の脚部を有し、173~177も同様の小型甕の脚部であると考えられる。

178~182 は、S字状口縁台付甕である。器形の復元できる資料は出土しなかった。178は口縁部から胴部にかけての破片である。厚手で、口縁部の屈曲が弱く、端部は大きく外側に開く。

179~182 は、S字状口縁台付甕の脚部の破片で、182は、脚部内面に、ベンガラと思われる赤色の付着物が認められた。内面天井部の指頭圧痕の窪みに、

特に赤色付着物がよく残されていた。S字甕脚部を、ベンガラパレットとして再利用した可能性がある。

183~197 は、高坏・器台である。183・187は脚部が柱状となる高坏である。

209~268 はD区から出土した。

209~223 は壺、224~236 は甕、237~241 は小型壺である。

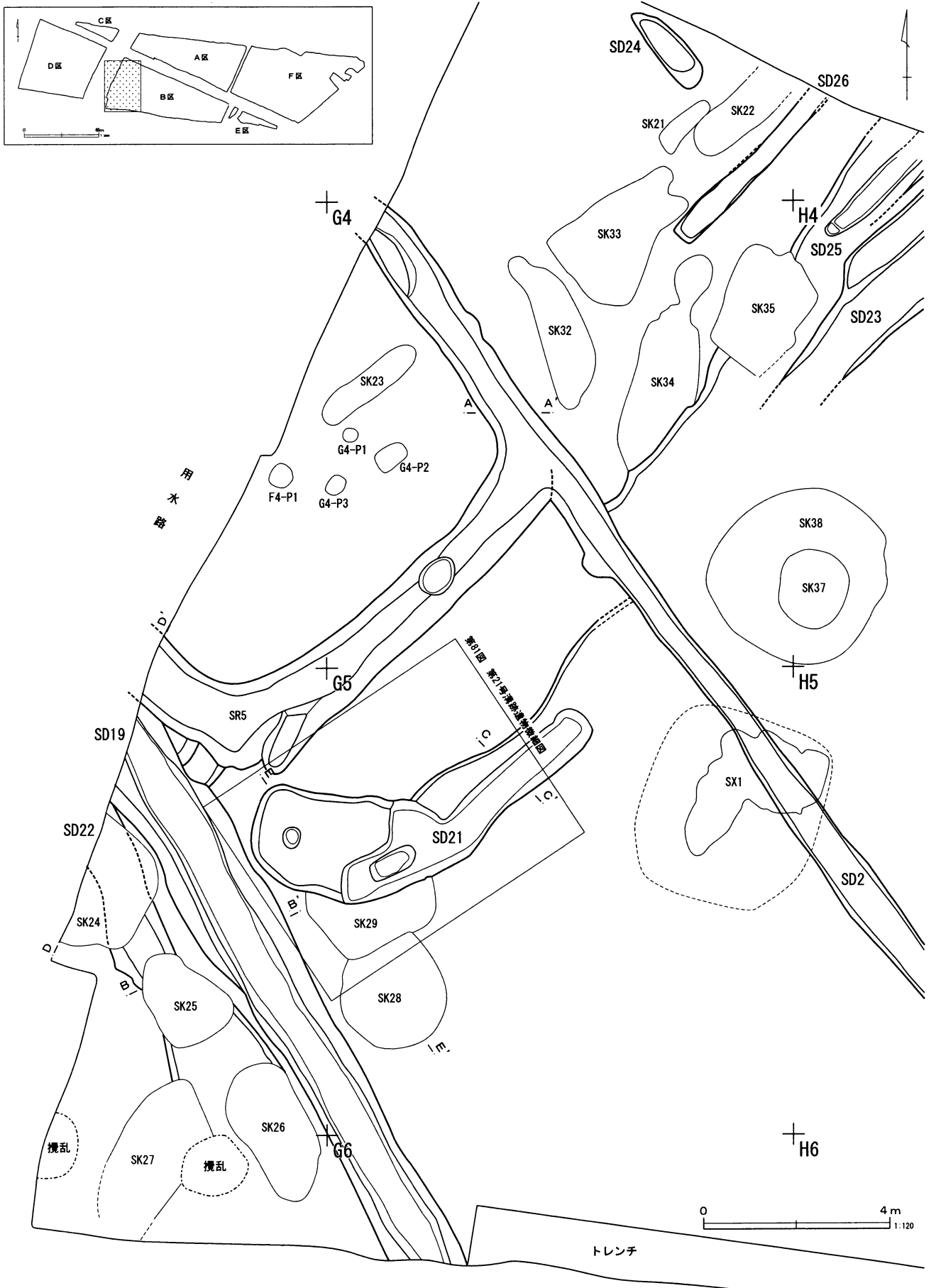
215 は、大廓式の壺である。器壁の厚さから、大型壺ではなく、折り返し口縁の壺の底部であると考えられる。

240 は、底部の破片であるが、底部2個体が張り付いた状態で出土した。

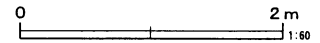
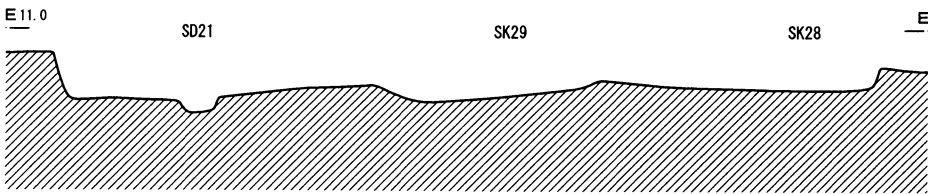
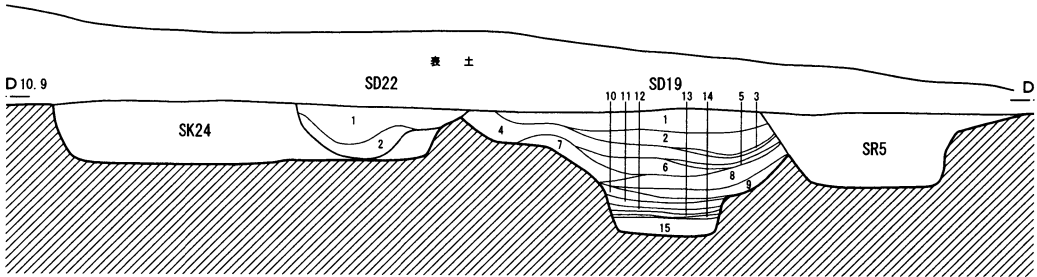
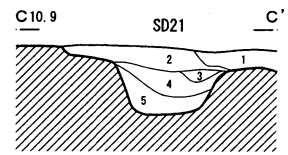
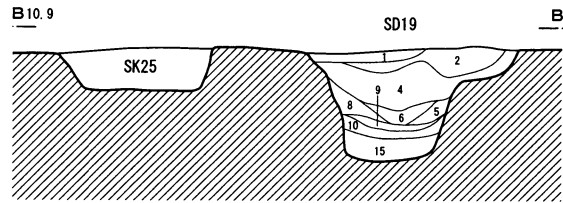
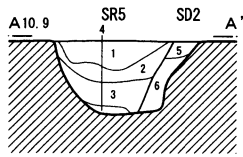
242~254 は、高坏・器台、255~261 は、罎・鉢、262~268 は、ミニチュア土器である。

269~273 は、C区から出土した。

269 は、台付甕である。口径26.6cmと、やや大型の甕である。くの字に屈曲する口縁部である。脚部は大きく開き、胴部は鉢形に直線的に立ち上がり、胴部中位で直立気味に器形が変化する。表面が風化し、調整が不明瞭だが、脚部にヘラナデの痕跡が認



第78図 溝跡 (7)



第5号周溝遺構(A-A')

- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、地山土ブロック(φ2~3cm以上)・焼土粒子・炭化粒子を多量含む。
- 2 黒褐色土 粘性ややあり、しまりあり、炭化粒子を少量含む、均一性の高い層。
- 3 黒褐色土 粘性ややあり、しまりあり、焼土ブロック・地山土(黄褐色土)を少量含む。
- 4 黄褐色土 粘性・しまりあり、地山が崩れた黄褐色土を多量含む。

第2号溝跡(A-A')

- 5 黒褐色土 粘性・しまりあり、焼土粒子(φ2~3mm)を少量含む。
- 6 黒灰色土 粘性・しまりあり、砂粒を少量含む。

第21号溝跡(C-C')

- 1 暗灰色土 粘性・しまりあり、鉄分を帯びる均一性の高い層。(埋没谷の層)
- 2 黒灰色土 粘性・しまりなし、焼土ブロック(φ3~4cm)炭化粒子を多量含む。
- 3 灰色土 粘性・しまりなし、炭化粒子・焼土粒子が縞状に堆積している。
- 4 黒褐色土 粘性・しまりなし、炭化粒子を多量含む、青灰色土・黄褐色土ブロックを少量含む。(埋め戻し、人為堆積)
- 5 暗青灰色土 粘性あり、しまりなし、青灰色土ブロック(φ3~5cm)を多量含む。

第22号溝跡(D-D')

- 1 暗褐色土 粘性ややあり、灰白色土粒子を多量含む、炭化物粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土 粘性ややあり、灰白色土粒子・ブロック・炭化物粒子を多量含む。

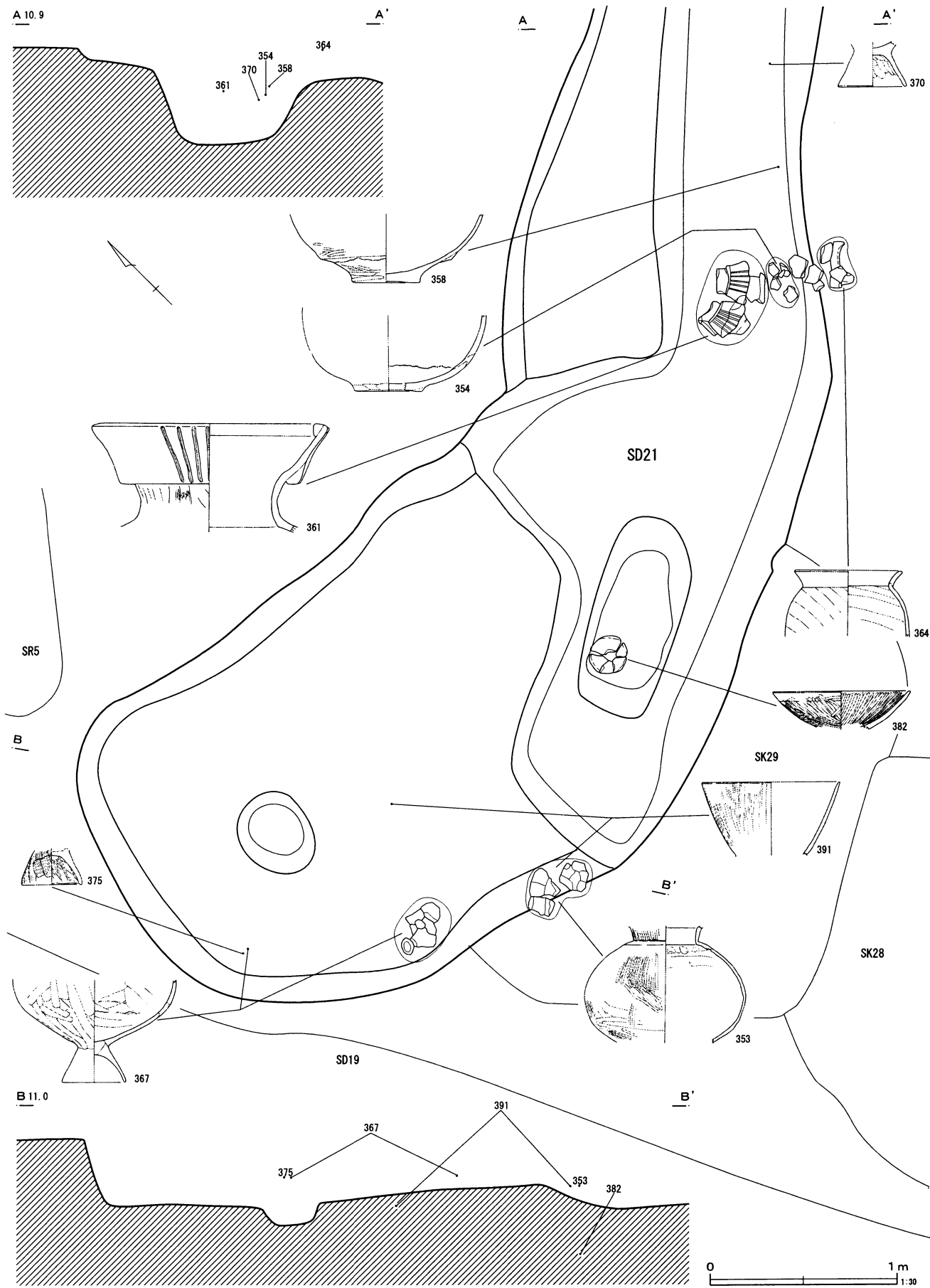
第19号溝跡(B-B')・(D-D')

- 1 黒褐色土 粘性なし、焼土粒・ブロック・灰白色土ブロック粒子・土器片・炭化物を多量含む。
- 2 黒褐色土 基本的に1層に同じ、灰白色土粒子・土器片・炭化物を多量含む。
- 3 黒色土 炭層、繊維質の物が炭化したか。
- 4 黒褐色土 炭化物含む、酸化鉄分を多量含む。
- 5 黒色土 炭層、繊維質の物が炭化したか。
- 6 黒褐色土 灰白色土粒子を多量含む。
- 7 黒褐色土 6層に似るが灰白色粒子を殆ど含まず。
- 8 暗灰色土 灰白色土粒子ブロックを多量含む、焼土粒を含む。
- 9 暗灰色土 粘性あり、灰白色土ブロックを含む。
- 10 灰白色土 粘性あり、灰白土+黒色粘土ブロックを含む。
- 11 黒色土 粘性あり、灰白色土ブロックを含む。
- 12 灰白色土 10層に似るがやや軟質。
- 13 黒色土 粘性あり、しまりなし、炭化物を含む。
- 14 青灰色土 粘性あり、極めて微細な石粒を含む。
- 15 暗灰色土 粘性あり、炭化物を含む。

第79図 溝跡(8)



第80図 溝跡 (9)



第81图 第21号沟迹遗物出土状况

し、調整が不明瞭だが、脚部にヘラナデの痕跡が認められた。

第20号溝跡 (第71～73・107～109図)

D区D・E-2・3グリッドで検出した。

第18・19・20号土壙を壊していた。西側はD区埋没谷に壊されていた。

遺構は、第3号周溝遺構の北側を囲う様にL字型に検出した。更に北側には、第44号溝跡がL字型に巡るが、関連のある遺構かどうかは明らかにできなかった。

規模は、幅0.80～1.06m、深さ0.68～0.86mであった。西側は溝幅が広く、北へ方形に張り出していた。しかし、埋没谷に壊され、明らかにできなかった。

底面は平坦で、壁面は外側が概ね垂直に立ち上がり、内側はやや斜めに直線的に立ち上がっていた。

遺物は、壺・台付甕・甕・平底甕・S字甕・小型壺・高坏・器台・台付鉢・罎などがある (第107～109図274～346)。

また、小片のため図示できなかった遺物は、以下のとおりである。

甕口縁部65個体・1450g

甕脚部60個体・2413g

甕胴部7185g

壺口縁部36個体・1000g

壺底部21個体・1550g

壺胴部4200g

高坏器台47個体・1200g

小型品800g

275は、大廓式の壺である。大型壺と同じ胎土で、白色の軽石状の粒子を多量に含んでいた。口縁部が大きく外反し、口縁部に粘土帯を貼り付けている。風化が著しく、調整の観察が困難であったが、胴部外面にヘラミガキ、内面に細かい刷毛目と指押さえ

痕が認められた。胎土の特徴から、搬入品であると考えられる。

283は壺底部であるが、外面底部周辺に鋭利な刃物または工具による傷が認められた。

288・289は、大廓式の壺の胴部片である、厚さと文様から、大型壺の肩部の破片であると考えられる。2点とも、S字状結節文で、289は円形浮文が貼付されていた。

290～316は甕である。刷毛目調整とナデ調整を基本とする台付甕と平底甕がある。胴部を横方向、胴部下位を縦方向にヘラケズリもしくは強いナデが施されるものが多い。

290～293は、やや大型で、長胴となる台付甕と考えられる。脚部を欠損していた。

294は、肩が張らず口縁部が大きく外傾する。長胴気味だが、丸味をもっている。脚部を欠損していた。

297～311は脚部が残存していた。301は、やや低脚であるが、脚部内面端部に断面三角形の粘土帯を添付し、接地面の幅を持たせている。

312～315は平底甕と考えられる。口縁部が高く、外反は弱い。

317～321は、S字状口縁台付甕である。318は、口縁部が大きく開く。肩部に横刷毛が認められる。胎土に白色軽石状物質を含んでいた。

325～332は高坏、333～340は器台である。

325は低脚の小型高坏である。329も脚部が小型である。330～332は柱状脚となる高坏である。

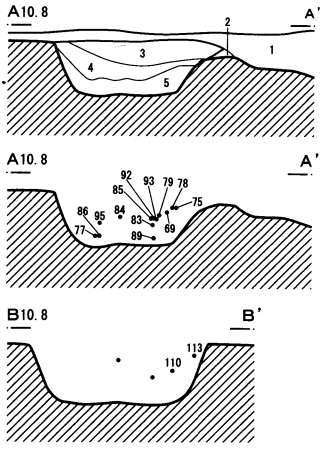
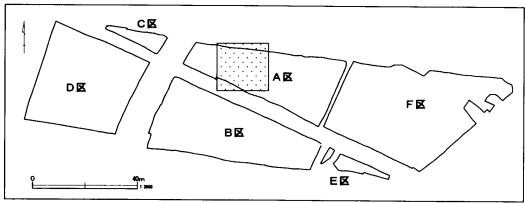
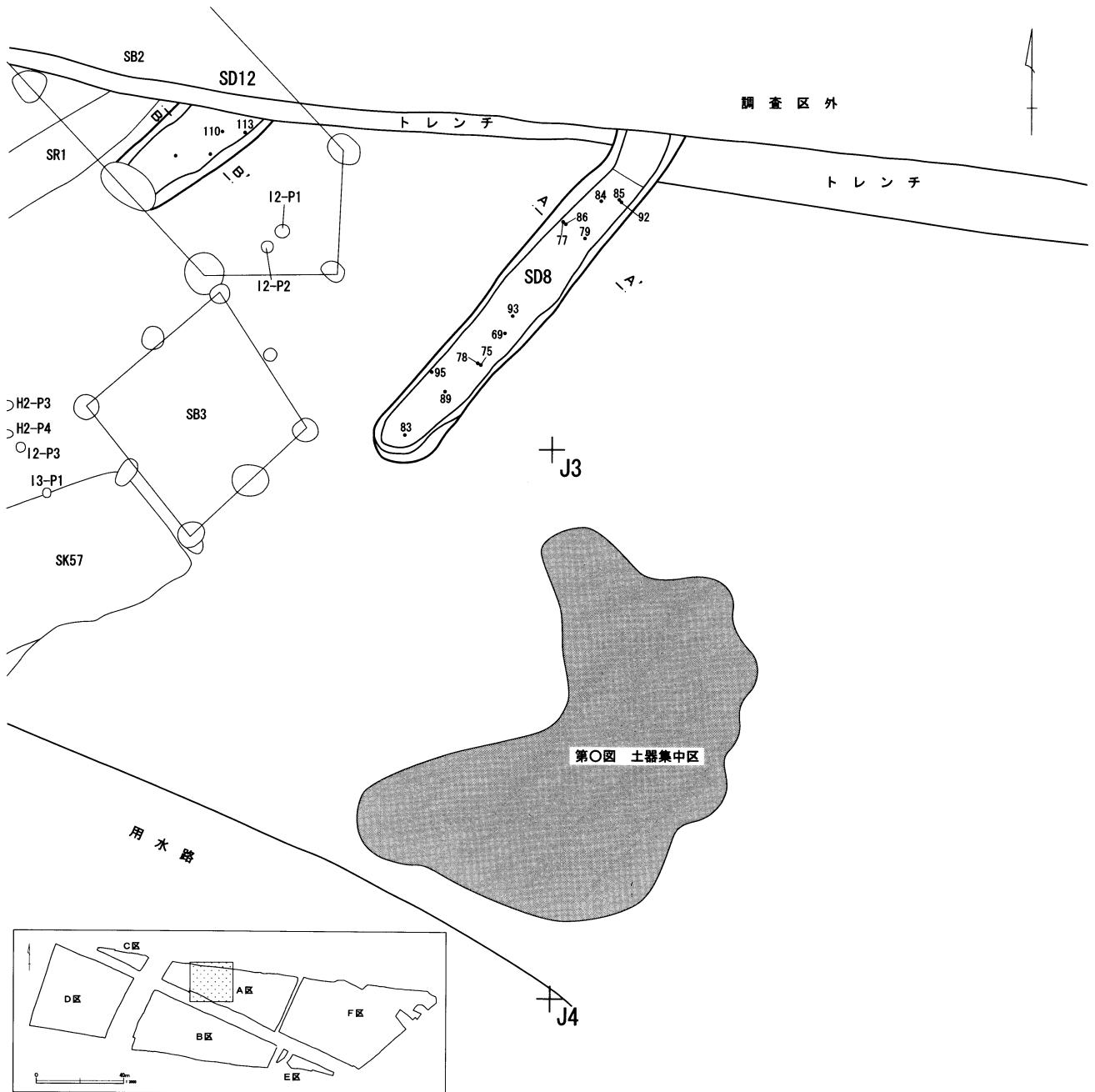
333・334は内外面に刷毛目を残す粗製器台である。

341は、台付鉢とした。脚部は大きく外反し、接合部は、脚部側を円柱状に作り、鉢底部の孔に差し込んで接合している。内外面とも、刷毛調整である。

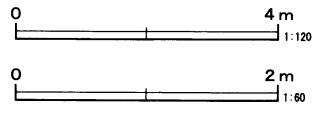
第44号溝跡 (第69・71図)

D区D・E-2グリッドで検出した。

第20号土壙、第19号溝跡と重複していた。第20



- 谷の覆土
- 1 暗褐色土 粘性・しまりあり、鉄分を帯びる、上部に火山灰 (FA?) あり。
 - 2 暗灰色土 粘性・しまりあり、1層に比べ明るい、青灰色土粒子を多量含む。
- 第8号溝跡
- 3 黒褐色土 粘性・しまりあり、炭化粒子 (φ2mm) を多量含む、焼土ブロック (φ5mm) を少量含む。
 - 4 暗褐色土 粘性・しまりあり、黄灰色土、炭化粒子が縞状に堆積している。(水性堆積)
 - 5 暗灰色土 粘性・しまりあり、地山土に近く青みかかる、地山の崩れた青灰色土ブロック (φ1cm以上) を多量含む。



第82図 溝跡 (10)

号土壌を壊し、第19号溝跡に壊されていた。

また、第20号溝跡と並行するように、L字型となっていたが、第20号溝跡との関連は明らかにできなかった。

規模は、幅0.24～0.40m、深さ0.15mであった。
遺物は出土しなかった。

第45号溝跡 (第71・73・74図)

D区D-3グリッドで検出した。

第3号周溝、第15号土壌、第18号溝跡と重複していた。第15号土壌に壊されている。第3号周溝、第18号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

規模は、検出長3.20m、幅0.46～0.70m、深さ0.08mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がっていた。

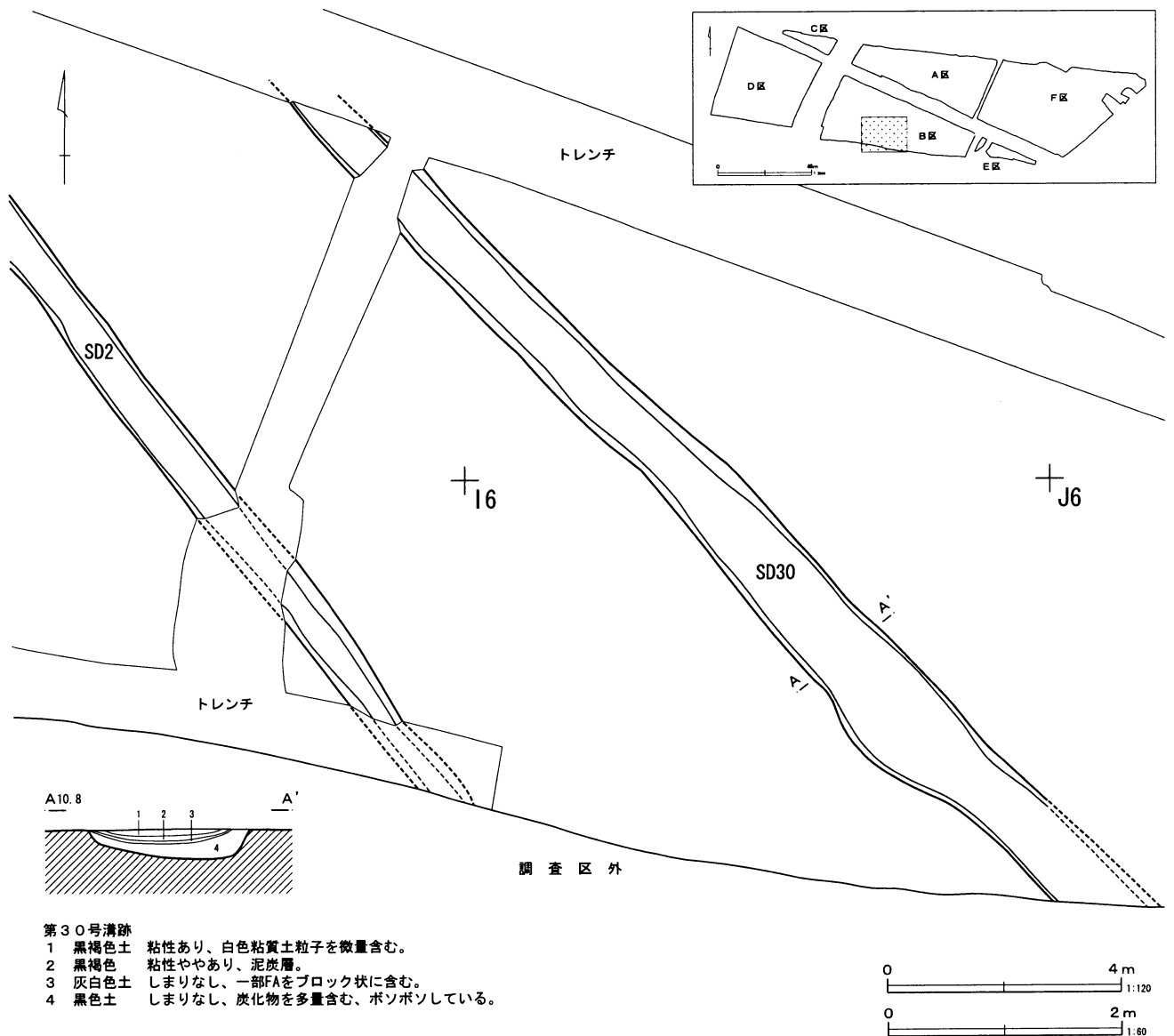
遺物は出土しなかった。

A区

第5号溝跡 (第85・87・99図)

A区L-3・4、M-3グリッドで検出した。A区谷の東岸で検出した。

平面の形状は、長大な土壌状で、両端は立ち上がっていた。



第83図 溝跡 (11)

規模は、長さ11.24 m、幅2.20～2.90 m、深さ0.26～0.28 mであった。

底面に、溝状の掘り込みが認められた。遺物の多くは、この掘り込み部分から出土した。

遺物は、壺・甕・台付甕・高坏・鉢・罎・ミニチュア土器などがある（第99図17～38）。

第6号溝跡（第85・86図）

A区L-4グリッドで検出した。遺構は、A区谷の東岸で、第5号溝跡の南端から連続するように検出した。

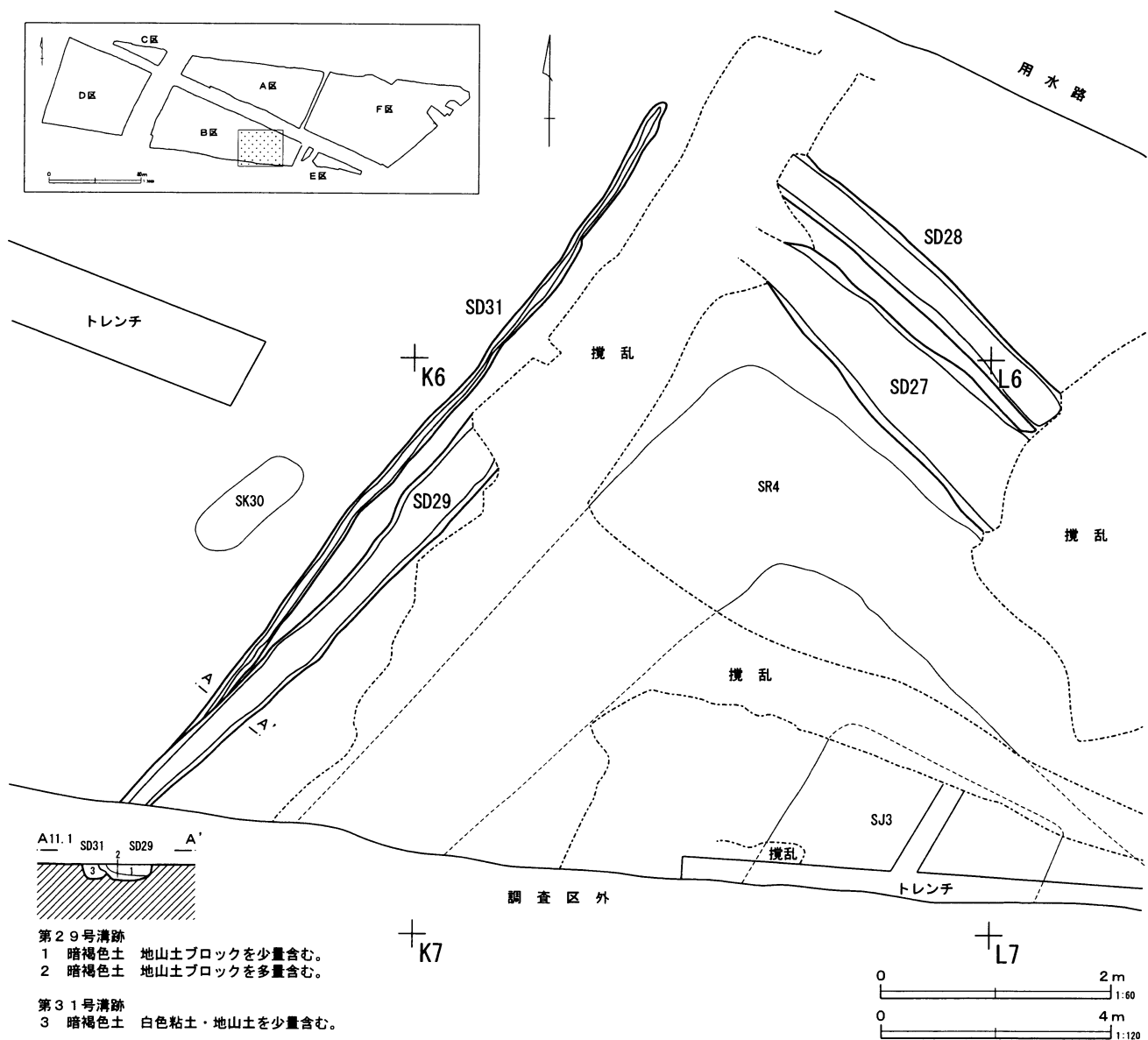
遺構は、第4号土壙と重複し、第4号土壙を壊していた。南側は用水路に壊されていた。

規模は、検出長7.80 mで、溝幅は0.35～0.70 m、深さは0.21 mであった。

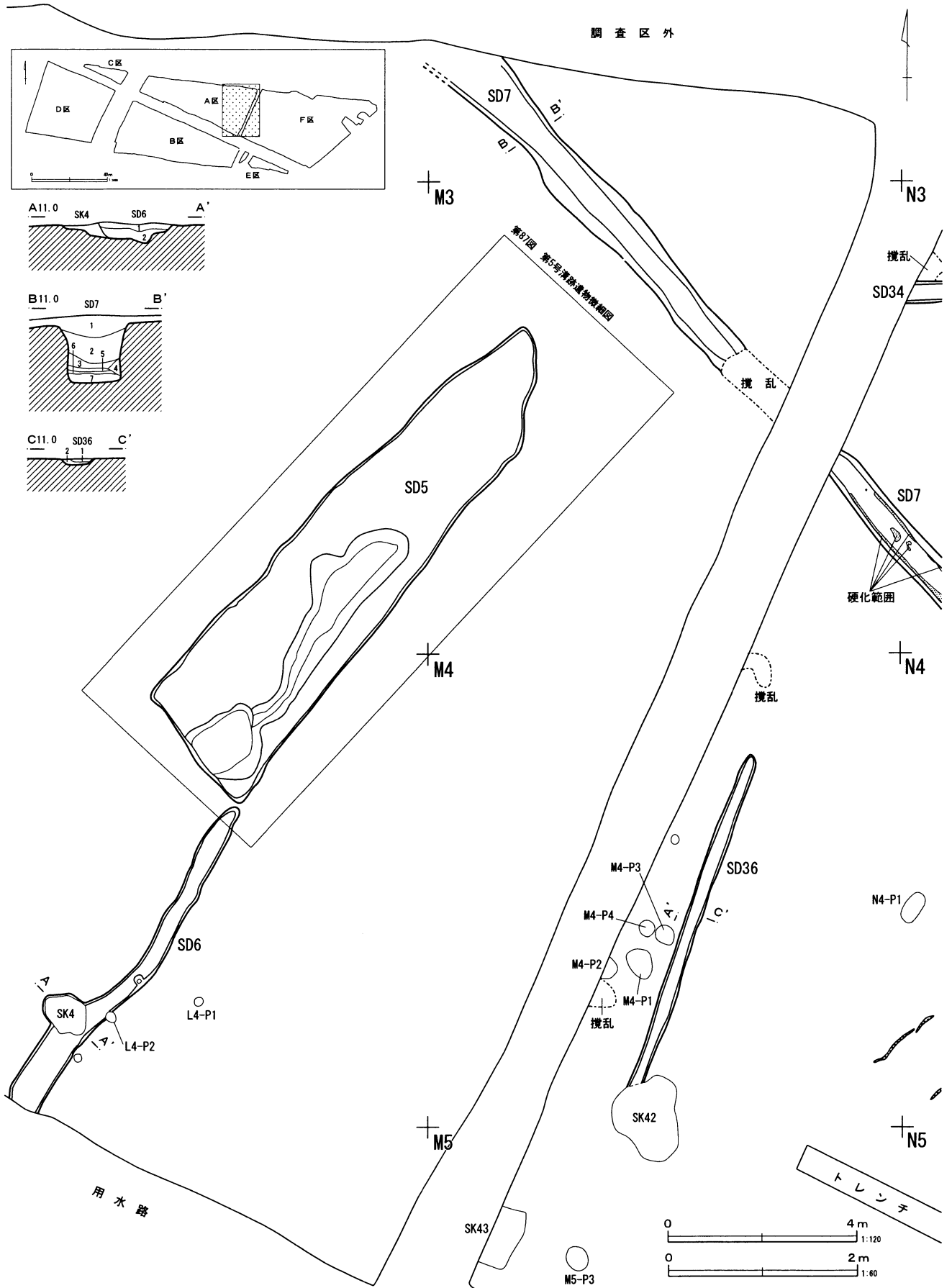
遺物は、古墳時代前期の土師器片が少量出土したが、掲載可能な遺物は出土しなかった。

第8号溝跡（第82・101図）

A区I-2・3、J-2グリッドで検出した。北側は調査区外に延びていた。南側は、立ち上がっており、周溝遺構の溝であった可能性もある。



第84図 溝跡 (12)



第85図 溝跡 (13)

第6号溝跡(A-A')

- 1 黒褐色土 焼土粒子・地山ブロック(φ1cm程)を少量含む、炭化粒子を微量含む。
- 2 暗褐色土 地山ブロック(φ1~2cm程)を多量含む。

第7号溝跡(B-B')

- 1 黒褐色土 粘性弱、しまりやや強い、地山の灰白色粘土粒子・焼土炭化粒子を微量含む、上層にFA含む。
- 2 黒褐色土 しまり弱、炭化粒子・焼土粒子・地山ブロック(φ1cm程)を微量含む。
- 3 黒褐色土 地山の白色粘土粒子を極めて多量含む、地山ブロック(φ1~2cm程)を多量含む、焼土粒子を微量含む。
- 4 灰白色土 粘性やや強い、地山の灰白色粒子が主体、1・2層の土と同じ黒褐色土粒子を微量含む。
- 5 黒色土 粘性強、しまり弱、湿り気が殆どない。
- 6 黒褐色土 地山ブロック(φ1~2cm程)を極めて多量含む。
- 7 暗褐色土 しまりやや強い、シルト、地山ブロック(φ1~2cm程)を少量含む。

第36号溝跡(C-C')

- 1 黒灰色土 しまりあり、灰白色地山ブロック(φ1~2cm程)を多量含む、灰白色地山粒子を少量含む。
- 2 灰白色土 しまりあり、灰白色地山が主体、黒灰色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む。

第86図 溝跡(14)

規模は、検出長7.74 mで、幅は0.80~1.12 m、深さは0.44 mであった。

底面は比較的平坦で、断面形は逆台形であった。

壁面は、斜めに直線的に立ち上がっていた。

遺物は、壺・甕・台付甕・S字甕・高坏・器台・埴・鉢・ミニチュア土器などが出土した(第101図69~95)。

70は、大廓式の大型壺の口縁部片である。口縁の上部を欠損していた。外面に棒状浮文が3本認められた。軟質で、胎土に、白色軽石状粒子を多量に含んでおり、搬入品と考えられる。

第9号溝跡(第76・77・101図)

A区H-2グリッドで検出した。北側は調査区外に延びていた。

第6・8号土壌と重複していた。第8号土壌を壊し、第6号土壌に壊されていた。遺構は、第1号住居跡の北側を囲むようにL字型に検出されたが、住居跡との関係は明らかにできなかった。

溝幅は0.30~0.40 m、深さ0.17 mであった。

底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がっていた。

遺物は、壺・高坏・ミニチュアの壺などがある(第101図96~98)。

第10号溝跡(第76・77・102図)

A区G-2、H-2・3グリッドで検出した。

第1号住居跡と重複し、第1号住居跡を壊していた。北側・南側は調査区外に延びていた。

規模は、検出長9.02 m、幅は0.58~0.75 m、深さは0.23 mであった。

底面は平坦で、垂直に立ち上がっていた。

遺物は、甕・壺・高坏が出土した(第102図99~103)。

第11号溝跡(第76・77・102図)

A区G-2、H-2・3グリッドで検出した。北側と南側は調査区外に延びていた。第10号溝跡と平行していたが、両者の関係は明らかにできなかった。

規模は、検出長7.40 m、幅は0.40~0.52 m、深さは0.17 mであった。

遺物は、壺・S字甕・台付甕が出土した(第102・104~106図)。

第12号溝跡(第76・82・102図)

A区I-2グリッドで検出した。第2号掘立柱建物跡に壊されていた。第1号周溝遺構の東側に隣接して検出した。北側は、調査区外へ延び、南側は立ちあがっていた。

遺構は、土壌であった可能性もある。

規模は、検出長1.86 m、幅は1.12~1.34 m、深さは0.45 mであった。

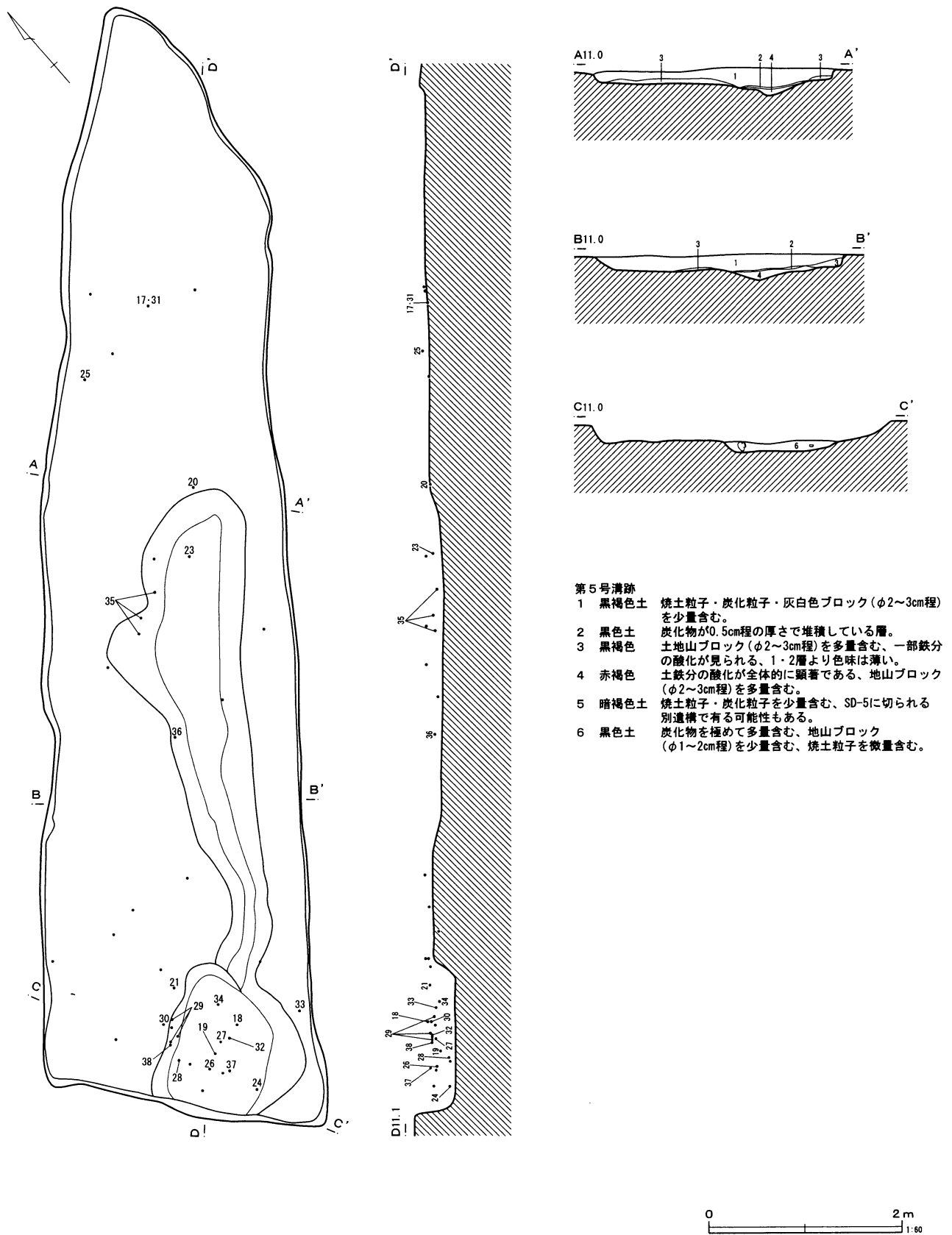
底面は比較的平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がっていた。

遺物は、壺・台付甕・器台・高坏がある(第102図107~114)。

B区

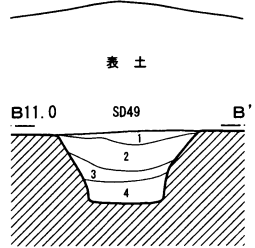
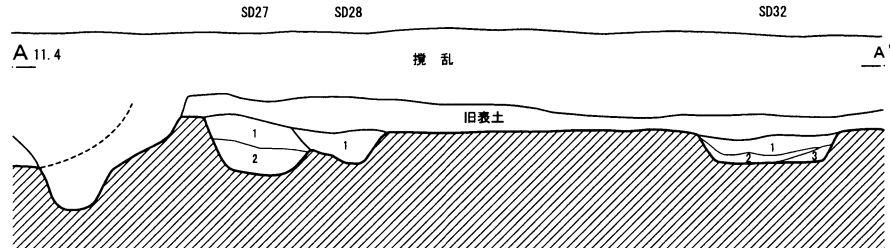
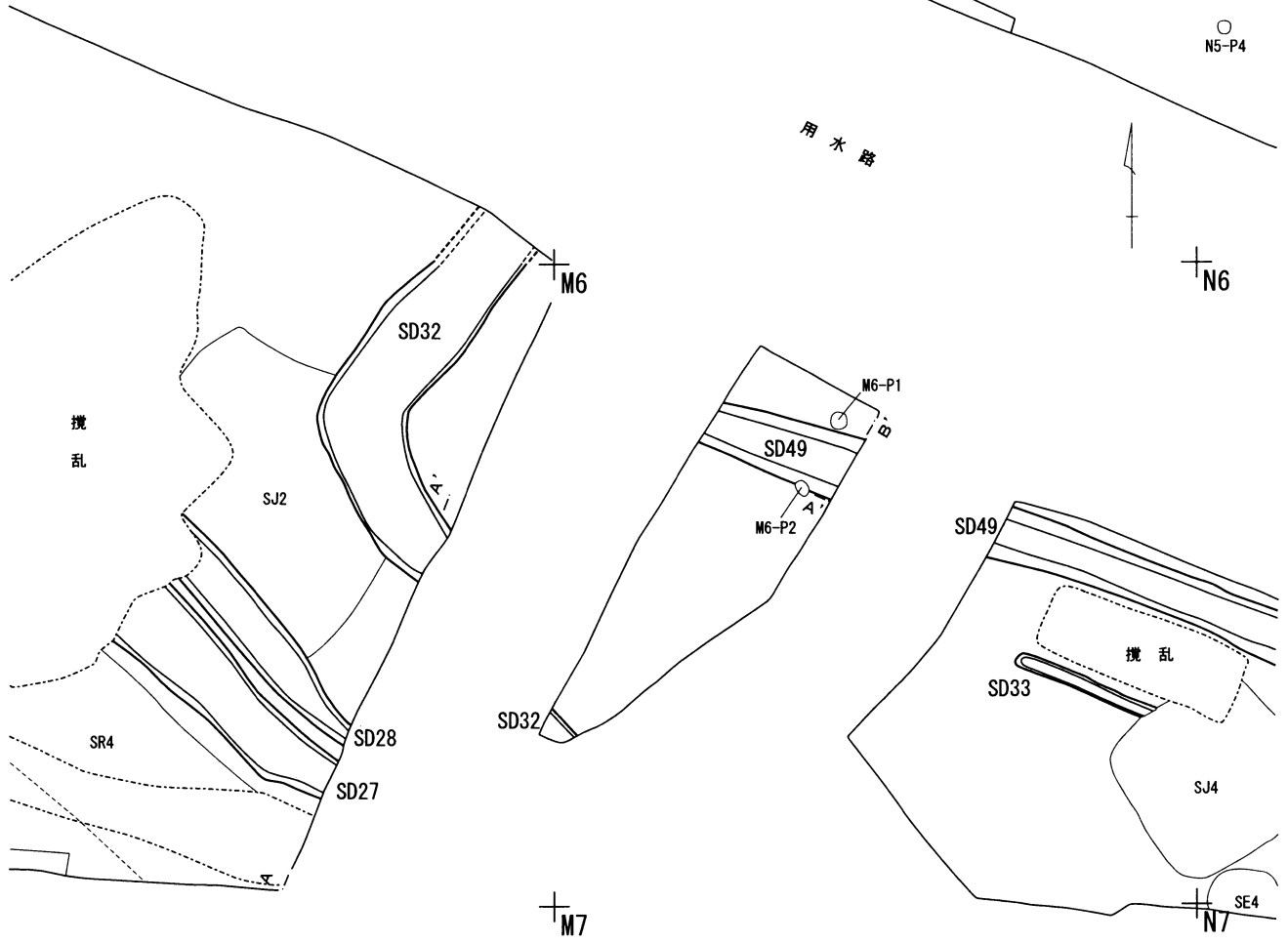
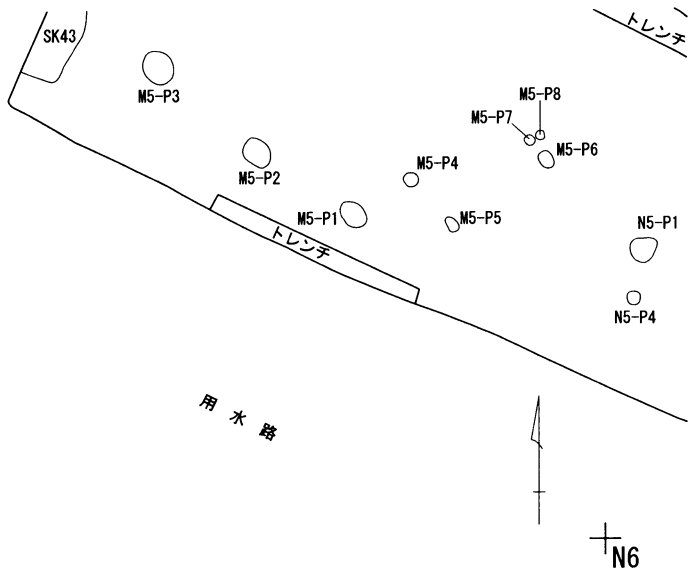
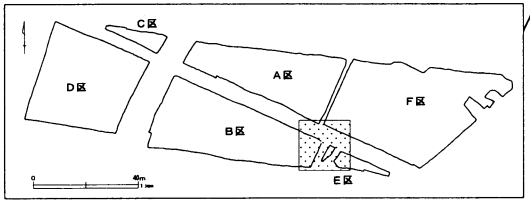
第21号溝跡(第78・79・80・81図)

B区F・G-5グリッドで検出した。



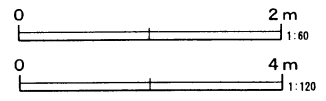
- 第5号溝跡**
- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・灰白色ブロック(φ2~3cm程)を少量含む。炭化物が0.5cm程の厚さで堆積している層。
 - 2 黒色土 地山ブロック(φ2~3cm程)を多量含む、一部鉄分の酸化が見られる、1・2層より色味は薄い。
 - 3 黒褐色土 鉄分の酸化が全体的に顕著である、地山ブロック(φ2~3cm程)を多量含む。
 - 4 赤褐色土 焼土粒子・炭化粒子を少量含む、SD-5に切られる別遺構で有る可能性もある。
 - 5 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子を少量含む、炭化物を極めて多量含む、地山ブロック(φ1~2cm程)を少量含む、焼土粒子を微量含む。
 - 6 黒色土

第87図 溝跡(15) 第5号溝跡遺物出土状況

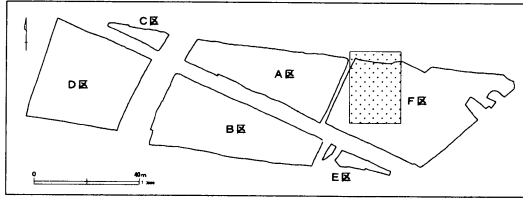


- 第27号溝跡(A-A')
- 1 暗褐色土 白色粘土ブロック(φ2~3cm)を少量含む、土器小片を含む。
 - 2 黒褐色土 殆ど混入物なし
- 第28号溝跡(A-A')
- 1 暗褐色土 白色粘土(φ1cm程)を中量含む。
- 第32号溝跡(A-A')
- 1 暗褐色土 φ1cm程度の白色粘土を多量含む。
 - 2 黒褐色土 粘性強、白色粘土(φ1cm程)を少量含む、土器片を含む。
 - 3 灰白色土 粘性強、白色粘土(φ1~2cm程)を多量含む。

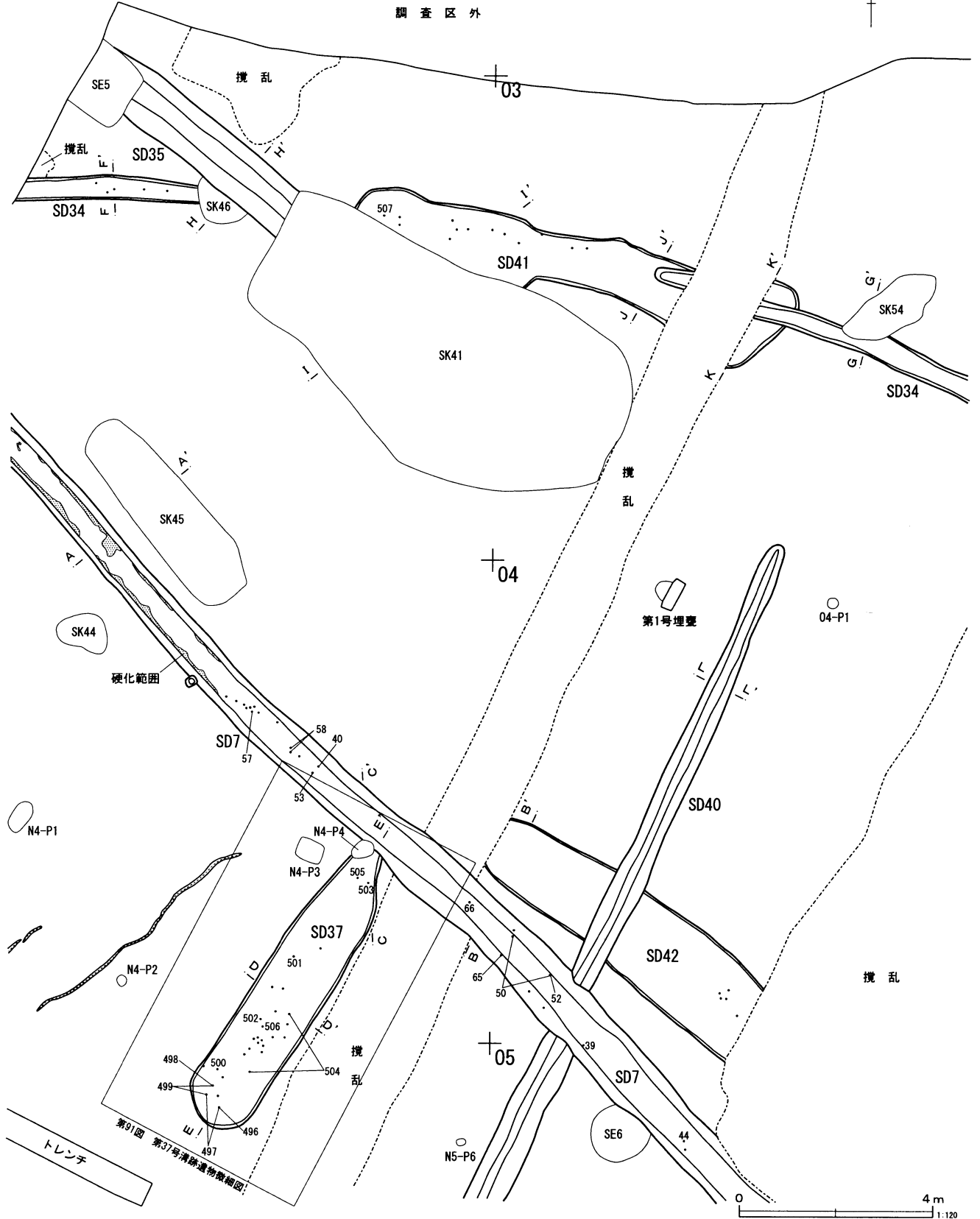
- 第49号溝跡(B-B')
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子(φ1~2mm)を少量含む、黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)まばらに含む。
 - 2 黒褐色土 黄褐色土粒子(φ1~2mm)を多量含む、黄褐色粘土ブロック(φ1~2cm)まばらに含む。
 - 3 黒褐色土 褐色粘土ブロック(φ1~2cm)を多量含む。
 - 4 黒褐色土粘土 粘性強い、黄褐色粘土ブロック(φ1~2cm)をまばらに含む。



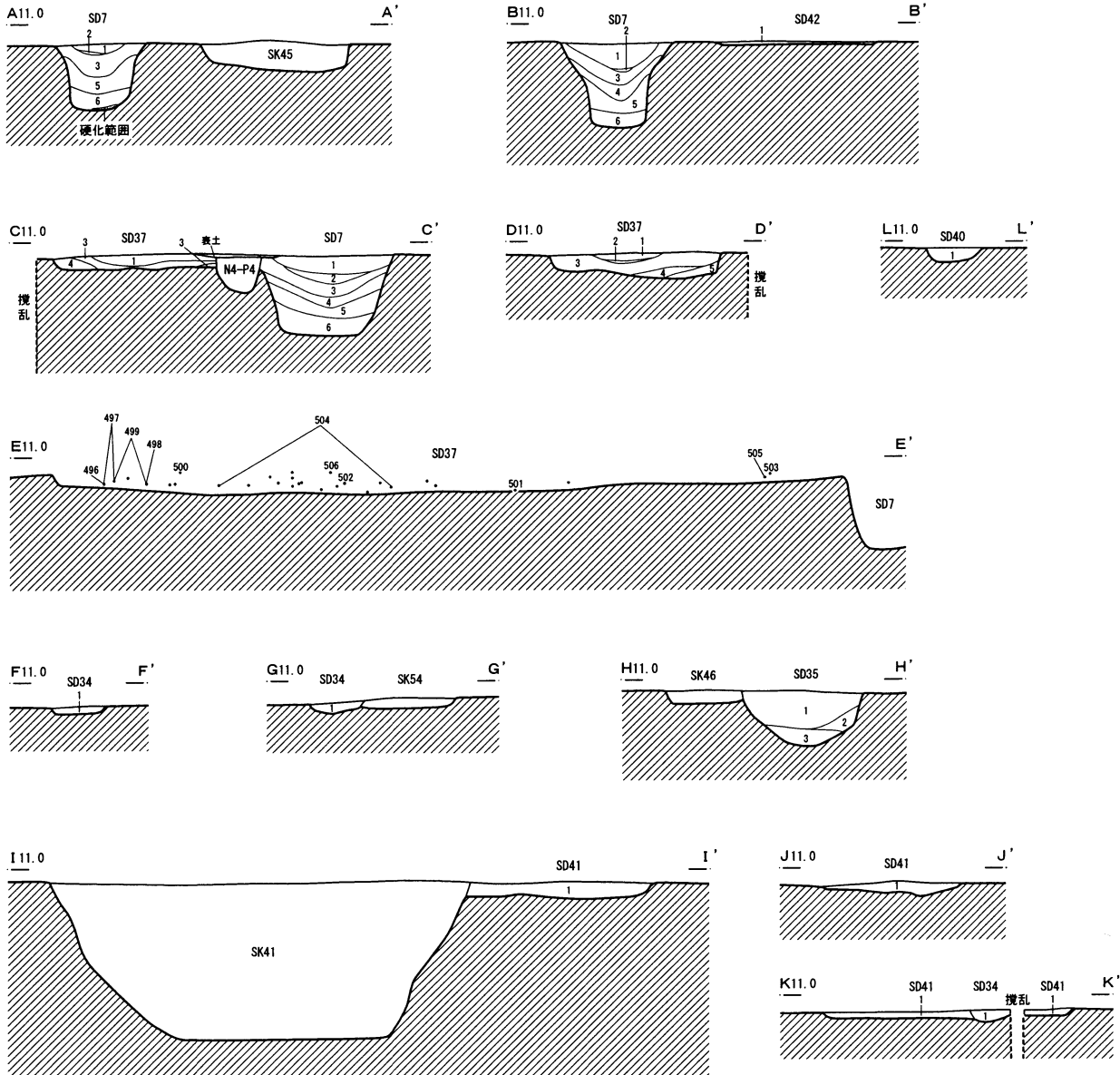
第88図 溝跡(16)



調査区外



第89図 溝跡 (17)



第7号溝跡(A-A')(B-B')(C-C')

- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子・黒色土ブロック(φ0.5cm程)を少量含む、酸化による暗赤褐色の斑点がまだら。
- 2 赤褐色土 しまり非常に強い、酸化によって硬化している。
- 3 黒褐色土 粘性・しまりあり、褐色地山粒子を多量含む、褐色地山ブロック(φ0.5cm程)を少量含む、酸化による暗赤褐色の斑点が多い。
- 4 黒色粘土 粘性・しまりあり、灰白色粘土粒子を多量含む。
- 5 灰白色粘土 粘性強、しまりあり、黒褐色土粒子を多量含む。
- 6 黒色粘土 粘性強、青白色シルト粒子を多量含む、青灰白色シルトブロック(φ0.5~1cm程)を少量含む。

第42号溝跡(B-B')

- 1 暗褐色土 しまりあり、灰白色ブロック(φ1~2cm程)を多量含む。

N4-P4(C-C')

- 1 黒褐色土 しまりあり、灰白色粒子・灰白色ブロック(φ1~2cm程)を少量含む、炭化粒子を微量含む。
- 2 黒褐色土 しまりあり、灰白色粒子を少量含む、炭化粒子を微量含む。

第37号溝跡(C-C')(D-D')

- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ0.5~1cm程)を少量含む、炭化粒子を微量含む。
- 2 黒色土 炭層。
- 3 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子・褐色地山ブロック(φ1~2cm程)を少量含む、炭化粒子を微量含む。
- 4 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子を極めて多量含む、褐色地山ブロック(φ1~2cm程)を多量含む、炭化粒子を微量含む。
- 5 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子を少量含む、炭化粒子を微量含む。

第34号溝跡(F-F')(G-G')(K-K')

- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山ブロック(φ2~3cm程)を多量含む、褐色地山粒子を少量含む。

第35号溝跡(H-H')

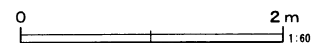
- 1 黒褐色土 粘性ややあり、しまりなし、褐色粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土 粘性ややあり、しまりなし、褐色地山ブロック(φ2~4cm程)を多量含む、褐色粒子を少量含む。
- 3 黒色粘土 粘性・しまりあり、青灰色ブロック(φ0.5~1cm程)を少量含む。

第41号溝跡(I-I')(J-J')(K-K')

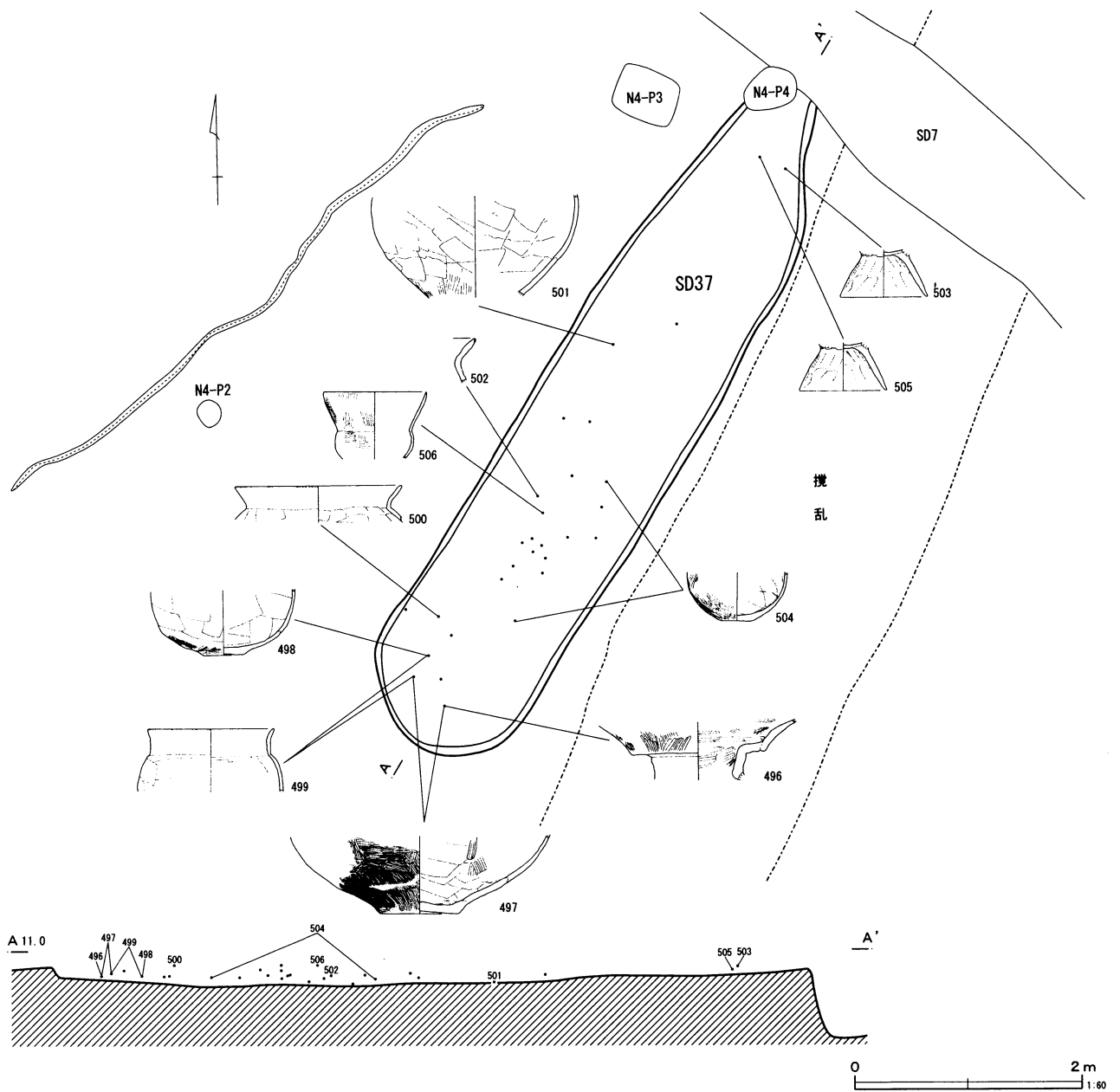
- 1 黒褐色土 しまりあり、灰白色粒子・灰白色ブロック(φ1~2cm程)を少量含む。酸化による暗赤褐色の斑点が全体に見られる。

第40号溝跡(L-L')

- 1 灰褐色土 しまりあり、灰白色ブロック(φ1~2cm)を多量含む。



第90図 溝跡 (18)



第91図 第37号溝跡遺物出土状況

第29号土壌、第2号溝跡と重複していた。第29号土壌・第2号溝跡を壊していた。

遺構は、第5号周溝遺構に沿うようにL字型に検出した。第5号周溝遺構手前で立ち上がっており、関連する遺構であった可能性もある。

規模は、長さ10.60m、幅1.70m～1.30m、深さ0.51mであった。

底面は、第5号周溝遺構に接する部分が一段高く、東側の周溝遺構と並行する部分は、深く掘り込まれていた。断面の形状は逆台形であったが、周溝遺構側の壁面に、テラス状の段を有していた。

覆土は、炭化物・焼土粒子を含む黒灰色土で、遺物は、覆土2～4層を中心に出土した。

遺物は、壺・甕・台付甕・平底甕・甌・高坏・器台・埴・鉢・ミニチュア土器が出土した（第110図347～403）。

また、覆土から鶏形土製品の頭部、第21号溝跡と同じグリッドであるG-5グリッドから、羽部が出土した。鳥型土製品については後述する。

小片のため図示できなかった遺物は、以下のとおりである。

甕口縁部 90 個体・1585 g
甕脚部 34 個体・1358 g
甕胴部 7480 g
壺口縁部 33 個体・900 g
壺底部 15 個体・730 g
壺胴部 3300 g
高坏 20 個体・380 g
器台 3 個体・30 g
小型品 63 個体・750 g
器種不明 500 g

358 は、底部から、球形を保ちながら立ち上がるが、胴部下半に、断面三角形の粘土帯を貼り付け、稜を作り出している。

361 は、大廓式の大型壺である。口縁部～頸部が残存していた。口縁部に段を持たず、基本的には、単純口縁で、内面口縁端部に粘土帯を貼付し、外面口縁部下端に、断面三角形の粘土帯を貼付している。口縁部外面には、5～6本の単位で棒状浮文が貼付されている。表面の風化が著しく、調整が不明瞭であったが、外面頸部に細かい刷毛目、肩部に S 字状結節文が認められた。軟質の胎土で、白色の軽石状の粒子を多量に含んでおり、搬入品と考えられる。

381 は、甑と考えられる。底部の破片で、小さな底部に、孔が 3 孔穿たれていた。

第 22 号溝跡 (第 78・79・80・112 図)

B 区 F-5 グリッドで検出した。

第 24・25・26・27 号土壌、第 19 号溝跡と重複していた。第 24 号土壌、第 19 号溝跡を壊し、第 25・26・27 号土壌に壊されていた。西側は調査区外に延びていた。

規模は、検出長 6.20 m、幅 1.34～2.10 m、深さ 0.40 m であった。

出土遺物は、台付甕・高坏・器台がある (第 112 図 404～407)。

第 23 号溝跡 (第 76・77・112・113 図)

B 区 G-4、H-3・4 グリッドで検出した。第 25 号溝跡と平行して検出した。

北側は用水路によって壊されていた。用水路対岸に A 区第 57 号土壌があり、遺構が連続しているように見えるが、溝幅、断面の形状が異なるため、別遺構とした。

規模は、検出長 7.30 m、幅 1.00～1.32 m、深さ 0.60 m であった。

底面は概ね平坦で、断面の形状は逆台形であった。西側の辺に、テラス状の段を有していた。

遺物は、壺・甕・S 字甕・小型壺・甑・高坏・器台・埴・ミニチュア土器が出土した。(第 112・113 図 408～461)。

甕が主体的に出土した。430 の台付甕脚部には、鋭利な刃物または工具による傷が認められた。

433～437 は、S 字状口縁台付甕と考えられる。

433・434 は、同一個体の可能性があるが、接合しなかった。やや長胴で、厚い。口縁部下段は稜がはっきりしているが、上段は大きく外傾する。

435 は口縁部～胴部の破片である。口縁部は大きく外反する。

432・436・437 は、脚部のみ残存していた。台状に脚部を作り、胴部を接合している点、脚部裾の内面を折り返す点など、S 字甕の模倣と考えられるが、外面の調整は、全面に刷毛目が施されている。

444～451 は高坏であるが、高坏には、柱状脚の高坏が含まれる (449～451)。

第 24 号溝跡 (第 76・77・78・113 図)

B 区 G-3 グリッドで検出した。

平面の形状は、楕円形の土壌状であった。

規模は、長さ 2.00 m、幅 0.68 m、深さ 0.11 m であった。

底面は平坦で、断面の形状は、逆台形であった。

遺物は、ミニチュア土器が 1 点出土した (第 113 図 466)。

第33号溝跡(A-A')

- 1 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)を少量含む。

第49号溝跡(A-A')(B-B')(C-C')

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子(φ1~2mm)を少量含む、黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)まばらに含む。
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒子(φ1~2mm)を多量含む、黄褐色粘土ブロック(φ1~2cm)まばらに含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック(φ1~2cm)を多量含む。
- 4 黒褐色土粘土 粘性強い、黄褐色粘土ブロック(φ1~2cm)をまばらに含む。

第7号溝跡(D-D')

- 1 黒褐色土 しまりあり、褐色地山粒子・黒色土ブロック(φ0.5cm程)を少量含む、酸化による暗赤褐色の斑点がまだら。
- 2 赤褐色土 しまり非常に強い、酸化によって硬化している。
- 3 黒褐色土 粘性・しまりあり、褐色地山粒子を多量含む、褐色地山ブロック(φ0.5cm程)を少量含む、酸化による暗赤褐色の斑点が多い。
- 4 黒色粘土 粘性・しまりあり、灰白色粘土粒子を多量含む。

第39号溝跡(E-E')

- 1 灰褐色土 しまりあり、灰白色土ブロック(φ1~2cm)・黒色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む。

第40号溝跡(E-E')

- 1 灰褐色土 しまりあり、灰白色土ブロック(φ1~2cm)を多量含む。

第43号溝跡(D-D')(F-F')

- 1 黒色土 しまりあり、浅間A?を少量含む、褐色地山粒子を微量含む。

第93図 溝跡(20)

第25号溝跡(第76・77・78・113図)

B区G-4・H-3・4グリッドで検出した。北側は用水路に壊されていた。

遺構は、第34・35号土壇、第2・23号溝跡と重複していた。第34号土壇を壊し、第35号土壇、第2号溝跡に壊されていた。

規模は、長さ10.70m、幅1.10~1.65m、深さ0.50mであった。

断面の形状は箱型で、溝の両辺にテラス状の段を有していた。

遺物は、壺・台付甕が出土した(第113図467~470)。

第26号溝跡(第76・77・78・113図)

B区G-3・4、H-3グリッドで検出した。南西側は立ち上がり、北東側は用水路に壊されていた。

規模は、検出長3.92m、幅0.45~0.50m、深さ0.74mであった。

底面は平坦で、断面の形状は箱型で、壁面は垂直に立ち上がる。細く深い溝であった。

用水路対岸に第10・11号溝跡を検出した。溝跡が連続し、L字型になっていた可能性もあるが、溝の深さが異なり、同一の遺構であったかどうかは、明らかにできず、別遺構とした。

遺物は、S字甕脚部・鉢口縁部が出土した(第113図471・472)。

第27号溝跡(第84・88・114図)

B区K-5・6、L-6グリッドで検出した。遺構の西側は攪乱に壊され、東側は、調査区外へ延びていた。第28号溝跡に壊されていた。

規模は、検出長9.72m、幅0.90~1.70m、深さ0.43mであった。

遺構は、第4号周溝遺構と平行していたが、同時に存在していたかどうかは明らかにできなかった。

遺物は、壺・甕・台付甕脚部がある(第114図473~486)。

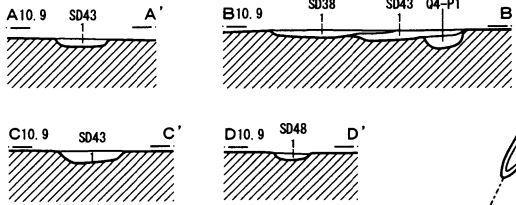
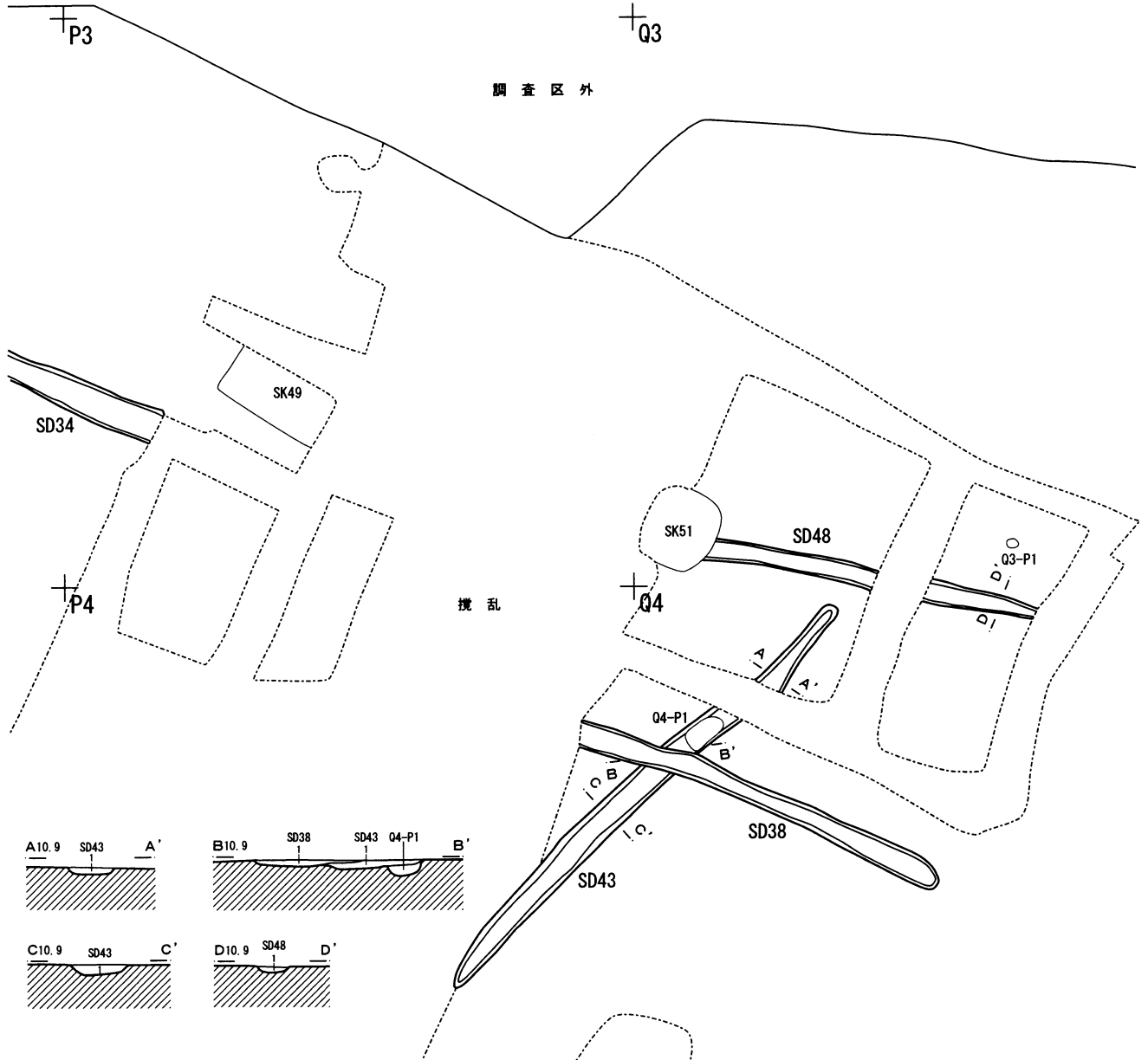
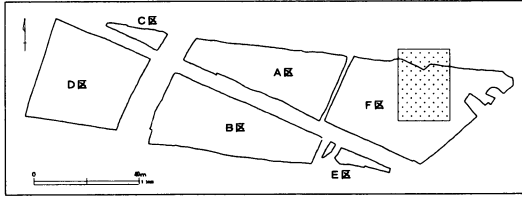
477~479は、同一個体の壺の破片と思われるが、接合しなかった。頸部に突帯を巡らし、肩部には、櫛描による直線文と波状文が施され、円形のボタン状の浮文が貼付されていた。パレススタイルの壺を模倣したものと思われる。

480・481は、甕である。単孔で、底部の破片であるが、小さな底部で、鉢形に大きく開く器形であったと考えられる。

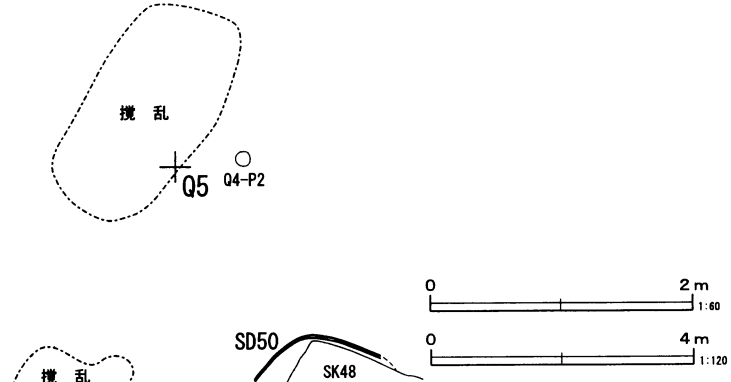
第28号溝跡(第84・88・114図)

B区K-5・6、L-5・6グリッドで検出した。第2号住居跡・第27号溝跡を壊していた。東側は調査区外に延びていた。遺構の西側は攪乱に壊されていた。

規模は、検出長9.92m、幅0.40~0.80m、深さ0.27mであった。



- 第43号溝跡 (A-A') (B-B') (C-C')
- 1 黒色土 しまりあり、浅間A?を少量含む、褐色地山粒子を微量含む。
- 第38号溝跡 (B-B')
- 1 暗灰色土 粘性・しまりあり、褐色地山ブロック (φ0.5cm程) を少量含む、浅間A軽石粒子?を微量含む。
- Q4-P1 (B-B')
- 1 黒褐色土 黄褐色粘土 (地山) を少量含む。
 - 2 褐色土 記載なし。
- 第48号溝跡 (D-D')
- 1 暗褐色土 浅間A?と思われる白色粒子・灰白色ブロック (φ0.5~1cm程) を少量含む。



第94図 溝跡 (21)

遺構は、第4号周溝遺構北東辺と平行して検出した。さらに周溝遺構北西片沿いでは、第29・31号溝跡を検出した。本遺構と連続し、周溝遺構をL字型に囲んでいるようにも見えるが、両遺構の間を、後世の攪乱によって壊されていたため、本遺構と連続していたかどうかは明らかにできなかった。

遺物は高坏脚部が1点出土したのみである（第114図487）。

第29号溝跡（第84図）

B区J・K-6グリッドで検出した。第31号溝跡を壊していた。遺構の南西端は調査区外へ伸び、北西端は後世の攪乱によって壊されていた。

規模は、検出長8.70m、幅0.45～0.94m、深さ0.16mであった。

底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がっていた。

遺構は、第4号周溝遺構北西辺と平行して検出した。さらに周溝遺構北東辺沿いでは、第27・28号溝跡を検出した。本遺構と連続し、周溝遺構をL字型に囲んでいるようにも見えるが、両遺構の間を、後世の攪乱によって壊されていたため、本遺構と連続していたかどうかは明らかにできなかった。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が数点出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第30号溝跡（第83・114図）

B区H・I-5、I・J-6グリッドで検出した。B区谷を横断するように、北西方向から南東方向に向かって検出した。南東側は調査区外に延び、北西側は、徐々に浅くなり、消滅していた。

また、第2号溝跡の北東側で、ほぼ平行して並んで検出したが、同時に存在していたかどうかは明らかにできなかった。

規模は、検出長19.20m、幅0.85～1.70m、深さ0.24mであった。

底面は平坦で、壁面は、概ね垂直に立ち上がっていた。

遺物は、壺・台付甕・小型壺・ミニチュア土器がある（114図488～495）

489の壺は、口縁部の破片であるが、口縁部外面に、鋭利な刃物または、工具による不規則な傷が認められた。

第31号溝跡（第84図）

B区J-6、K-5・6グリッドで検出した。

第29号溝跡に壊されていた。B区谷との境界付近で、谷の方向と並行するように、南西から北東方向へ伸びていた。

遺構の南西端は調査区外へ伸び、北東端は第28号溝跡と近接する付近で立ち上がっていた。

規模は、検出長13.86m、幅0.12～0.30m、深さ0.12mであった。

底面は平坦で、壁面は、斜め上方へ直線的に立ち上がっていた。

遺構は、第4号周溝遺構北西辺と平行して検出した。さらに周溝遺構北東辺沿いには、第27・28号溝跡を検出した。本遺構と連続し、周溝遺構をL字型に囲んでいるようにも見えるが、両者の間を後世の攪乱によって壊されていたため、本遺構と連続していたかどうかは明らかにできなかった。

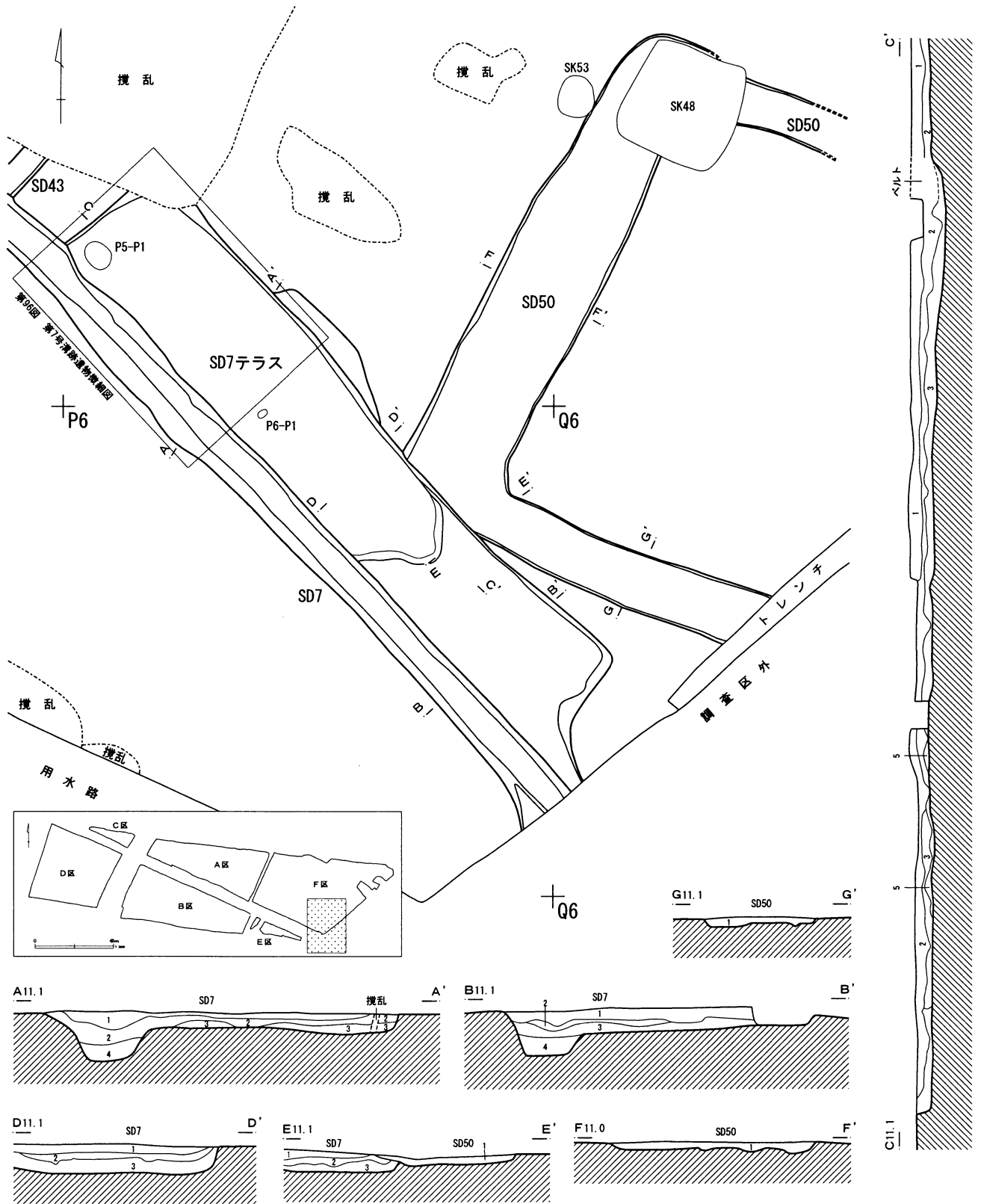
遺物は、古墳時代前期の土師器片が数点出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第32号溝跡（第88図）

B・E区L-5・6、M-6グリッドで検出した。第2号住居跡と重複していた。第2号住居跡を壊していた。

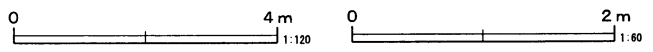
遺構の北側は用水路に壊され、東側はB区調査区外に延びていた。E区で溝の一部を検出したが、さらに調査区外へ延びていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

検出した部分は、平面の形状がL字型であった。このため、溝跡は、周溝遺構の一部であった可能性もあるが、全体を検出できなかったため、明らかに

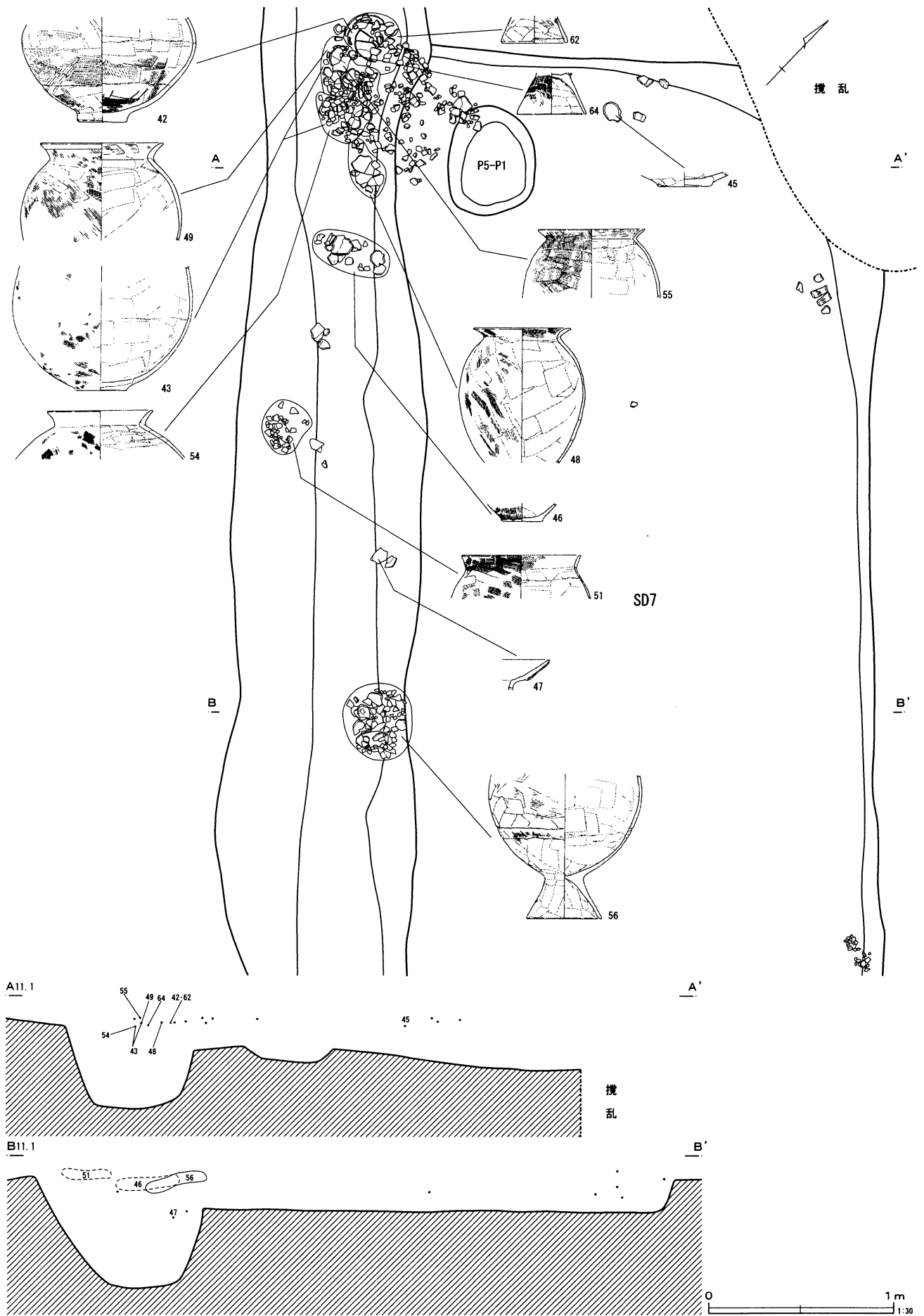


- 第7号溝跡 (A-A') (B-B') (C-C') (D-D') (E-E')
- 1 黒褐色土 しまりあり、灰褐色土ブロック(φ1~2cm程)・灰白色土粒子を少量含む。
 - 2 黒褐色土 しまりあり、灰白色粘土ブロック(φ2~3cm程)を多量含む、灰白色土粒子を少量含む。(埋め戻し)
 - 3 黒褐色土 しまりあり、灰白色土粒子を少量含む。
 - 4 黒褐色土 しまりあり、灰白色土粒子を多量含む。

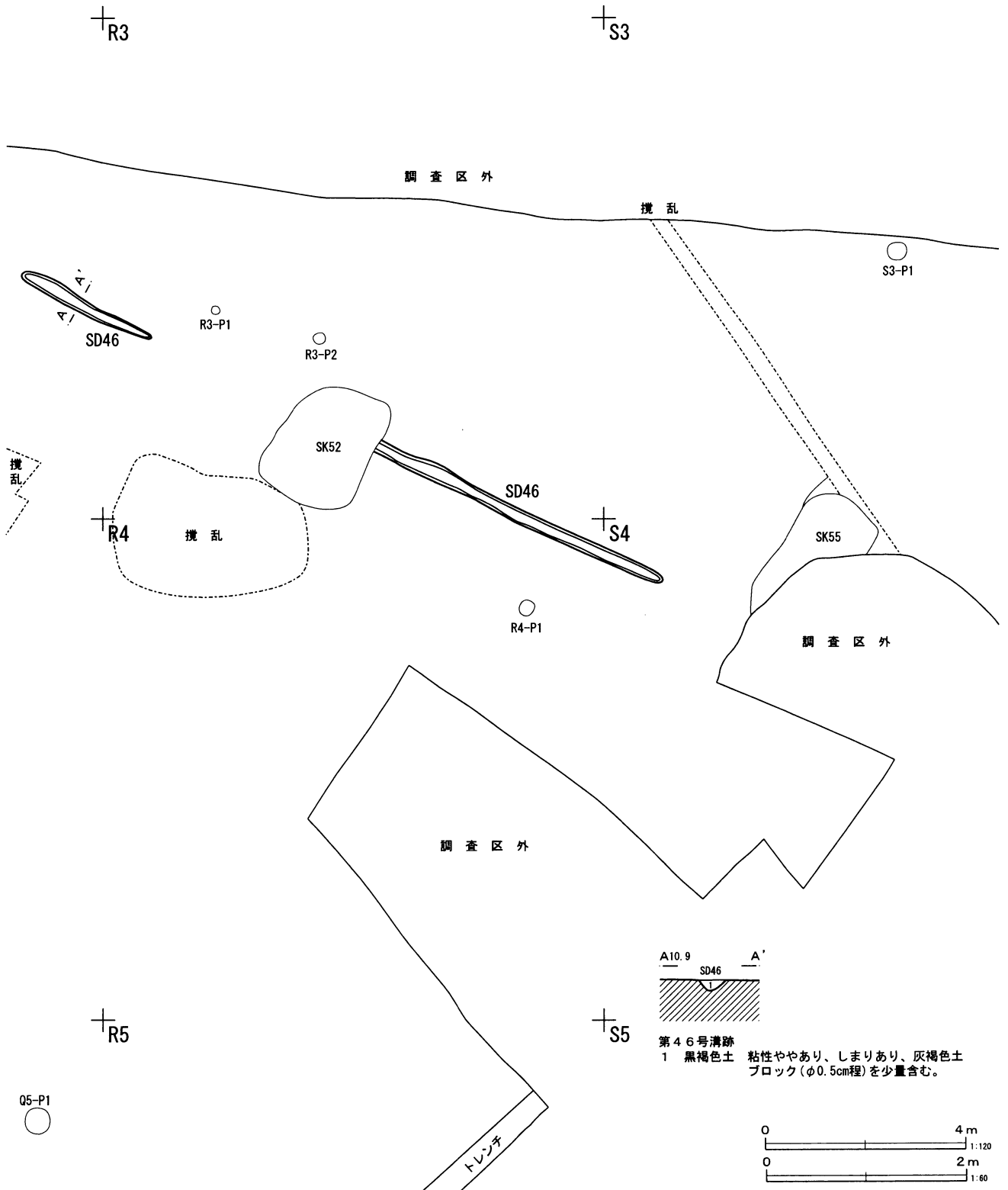
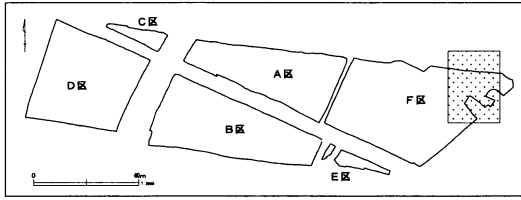
- 第6号周溝遺構 (E-E') (H-H') (I-I')
- 1 黒褐色土 しまりあり、黄灰色粘土B(φ2~3mm)を多量含む、非常に硬質。



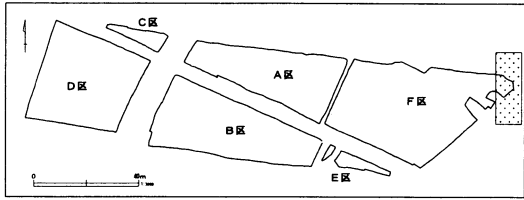
第95図 溝跡 (22)



第96図 溝跡(23) 第7号溝跡遺物出土状況

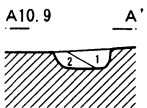
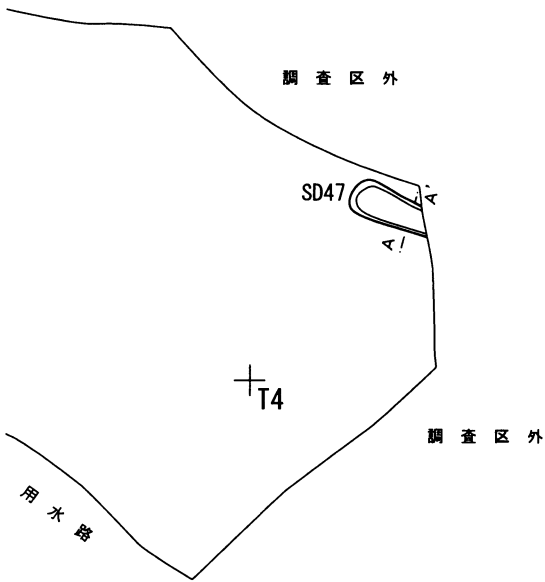


第97図 溝跡 (24)



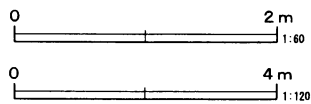
+

T3



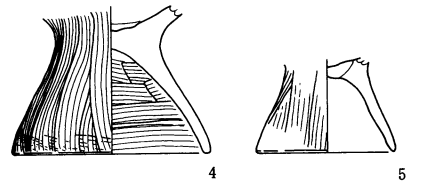
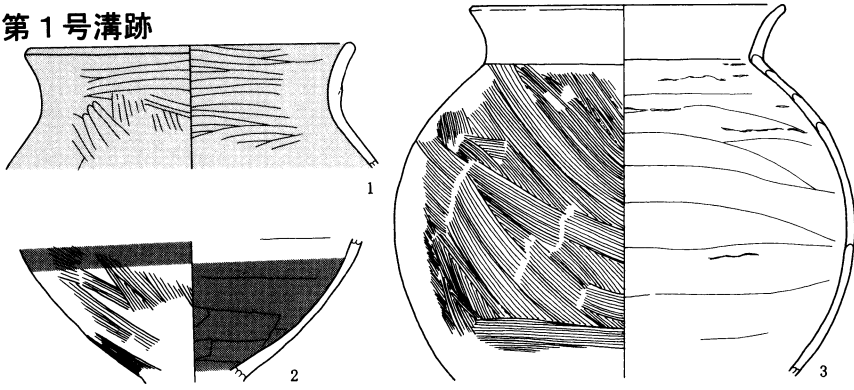
第47号溝跡

- 1 黒色土 粘性ややあり、しまりあり、灰白色地山粘土ブロック (φ1~2cm程)を少量含む。
- 2 灰白色粘土 粘性強、黒色土ブロック(φ0.5~1cm程)を多量含む。

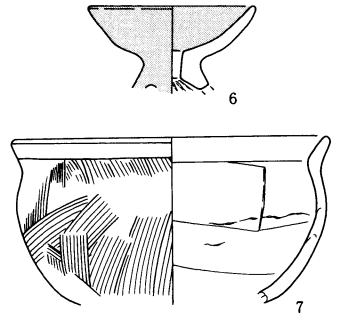


第98図 溝跡 (25)

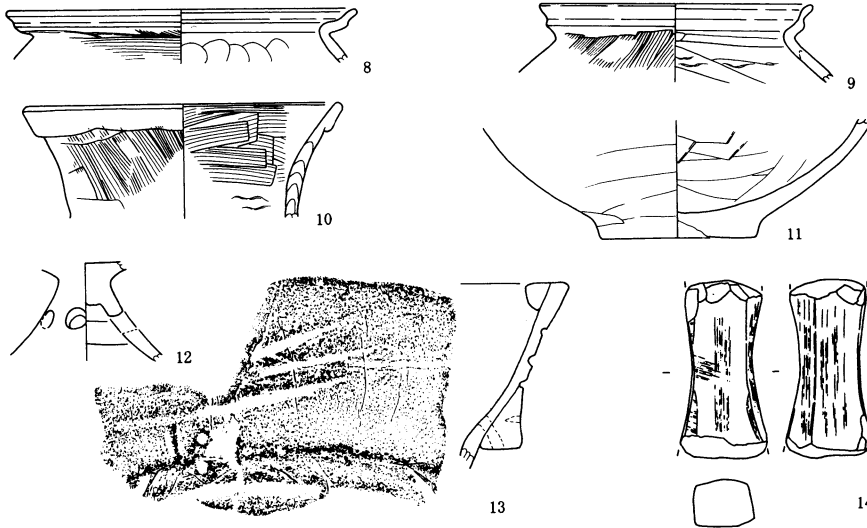
第1号沟迹



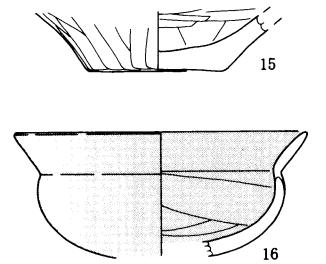
第2号沟迹



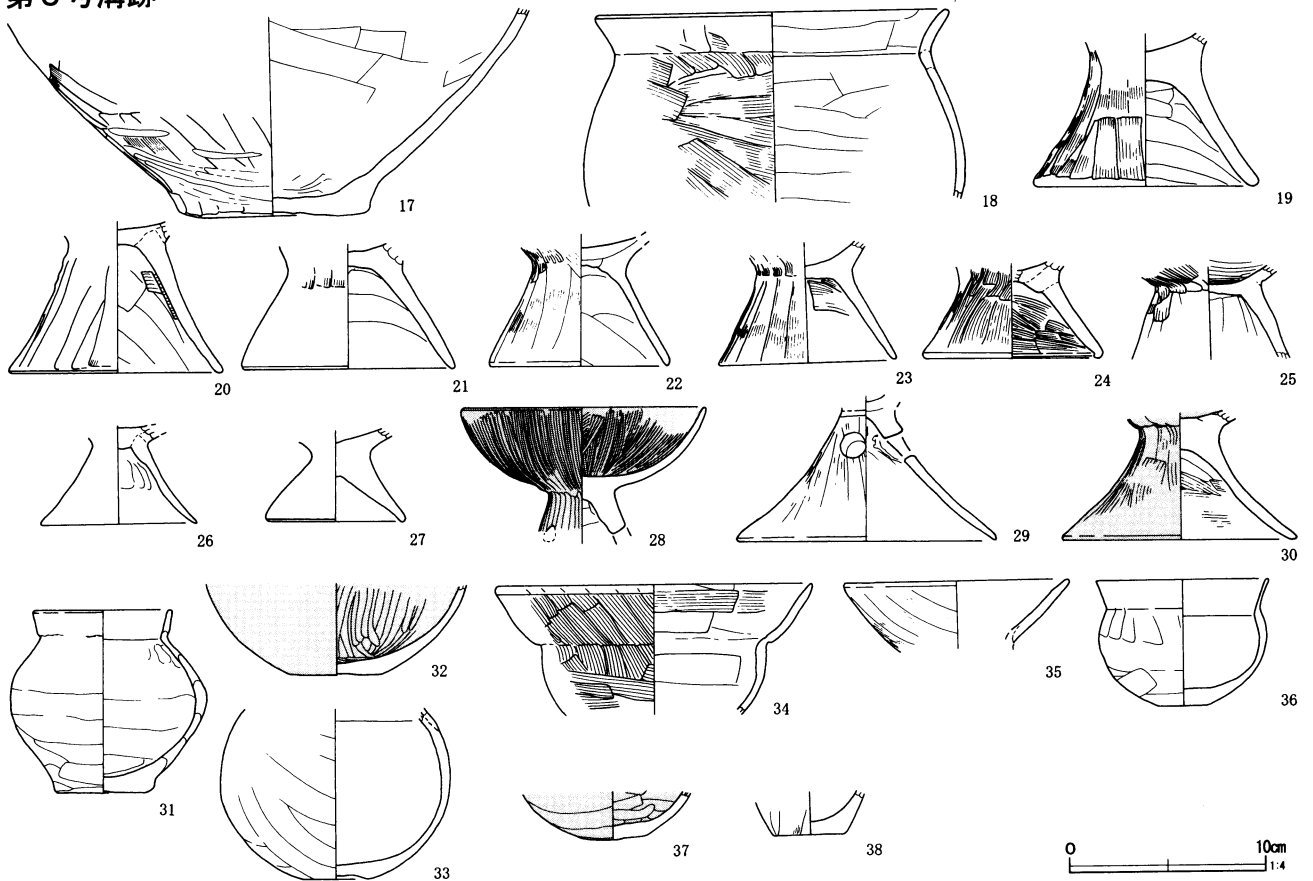
第3号沟迹



第4号沟迹



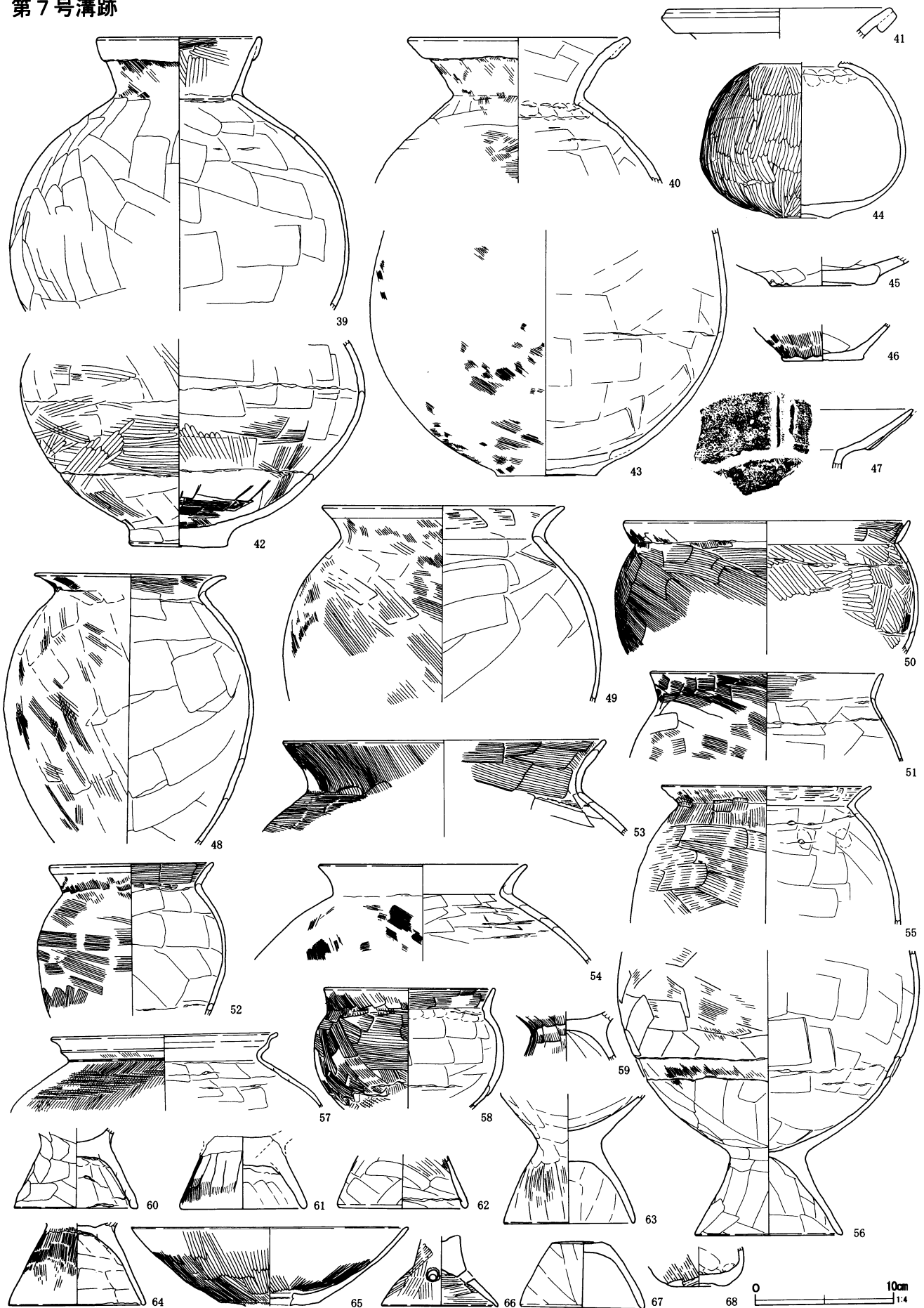
第5号沟迹



0 10cm 1:4

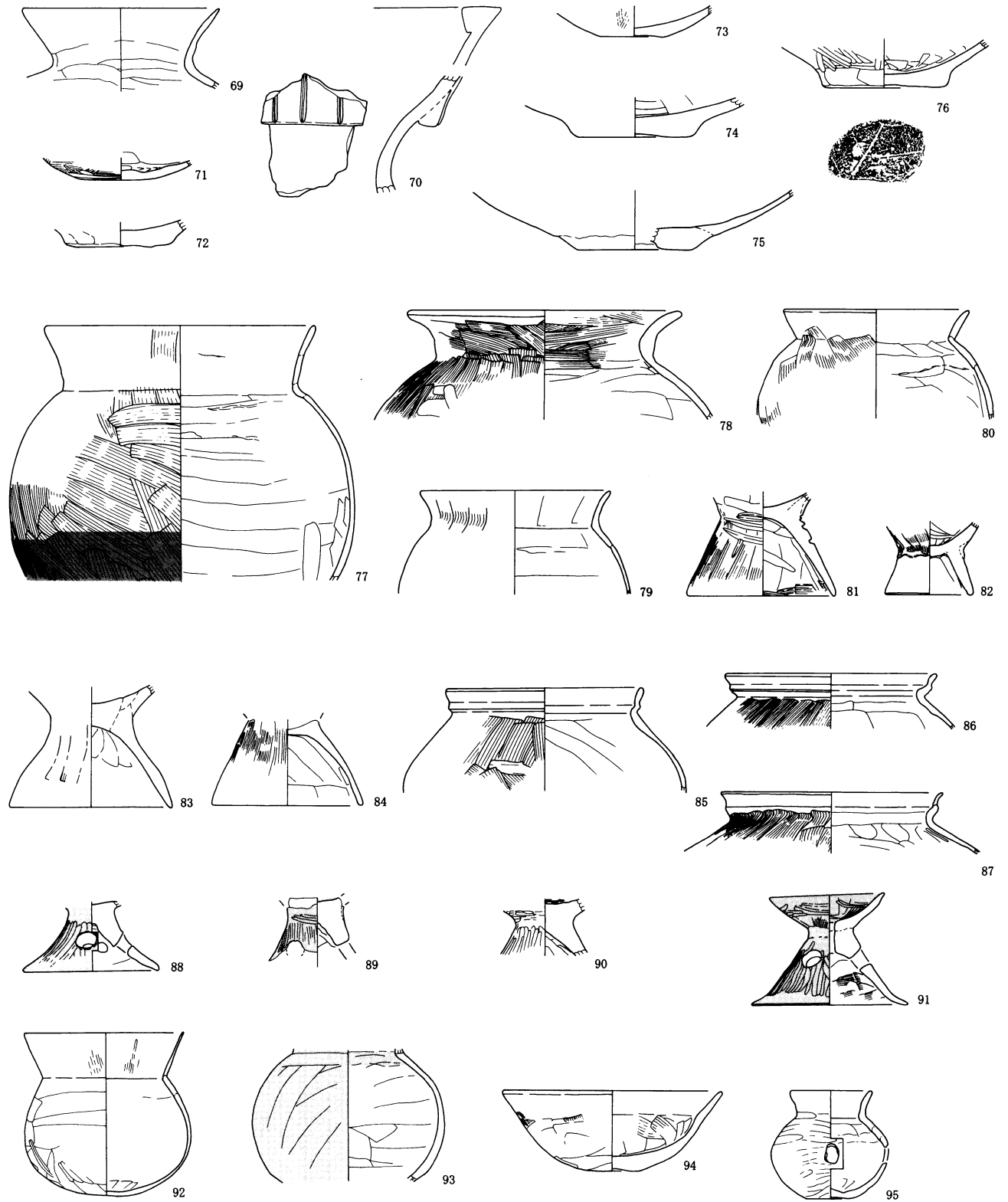
第99图 沟迹出土遗物(1)

第7号沟迹

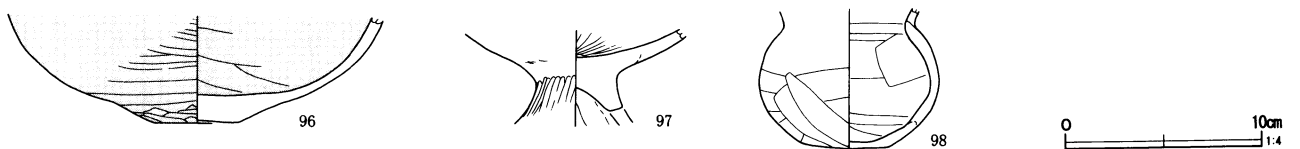


第100图 沟迹出土遗物(2)

第8号沟迹

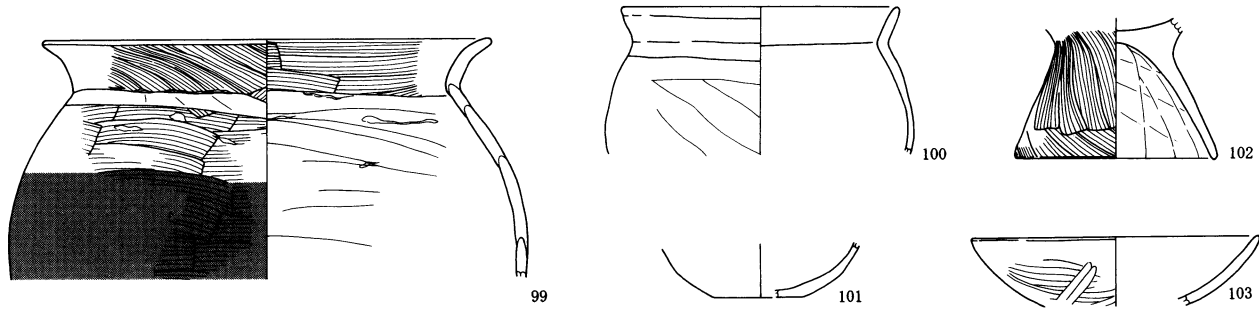


第9号沟迹

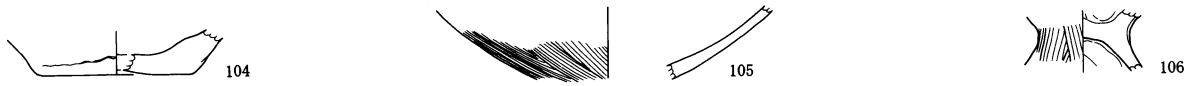


第101图 沟迹出土遗物(3)

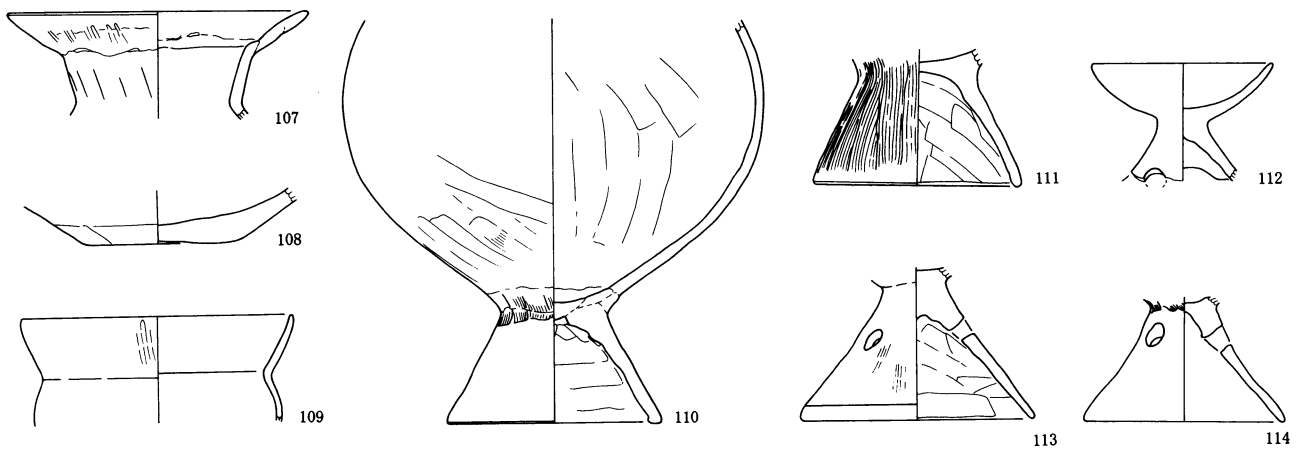
第10号沟迹



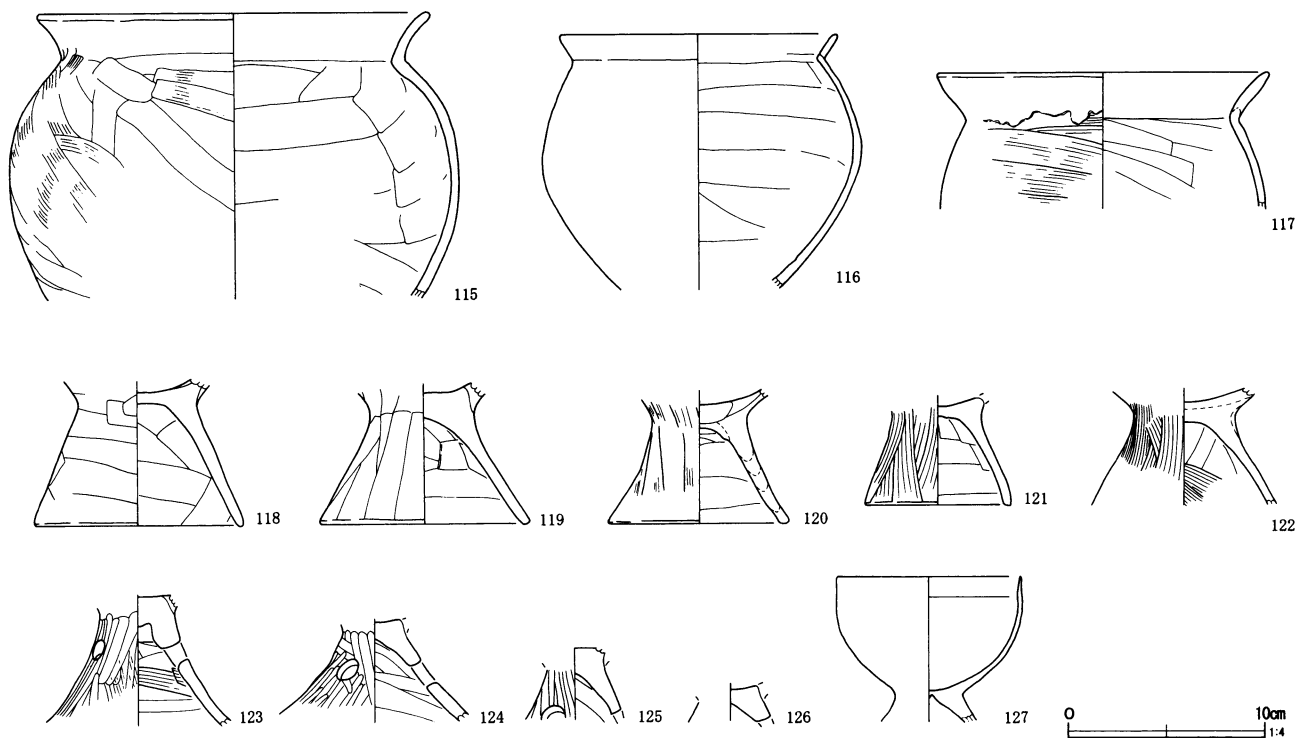
第11号沟迹



第12号沟迹

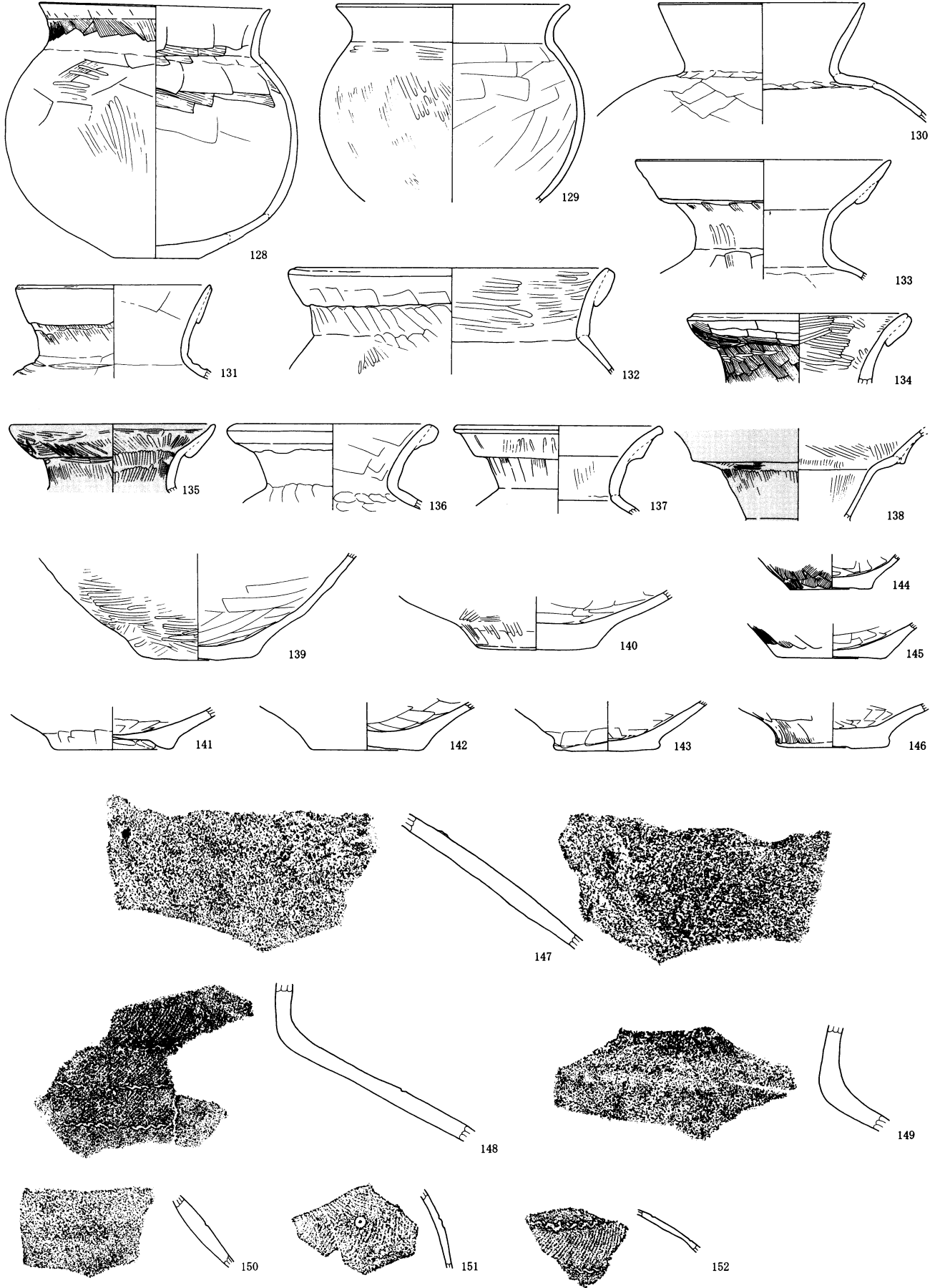


第13号沟迹

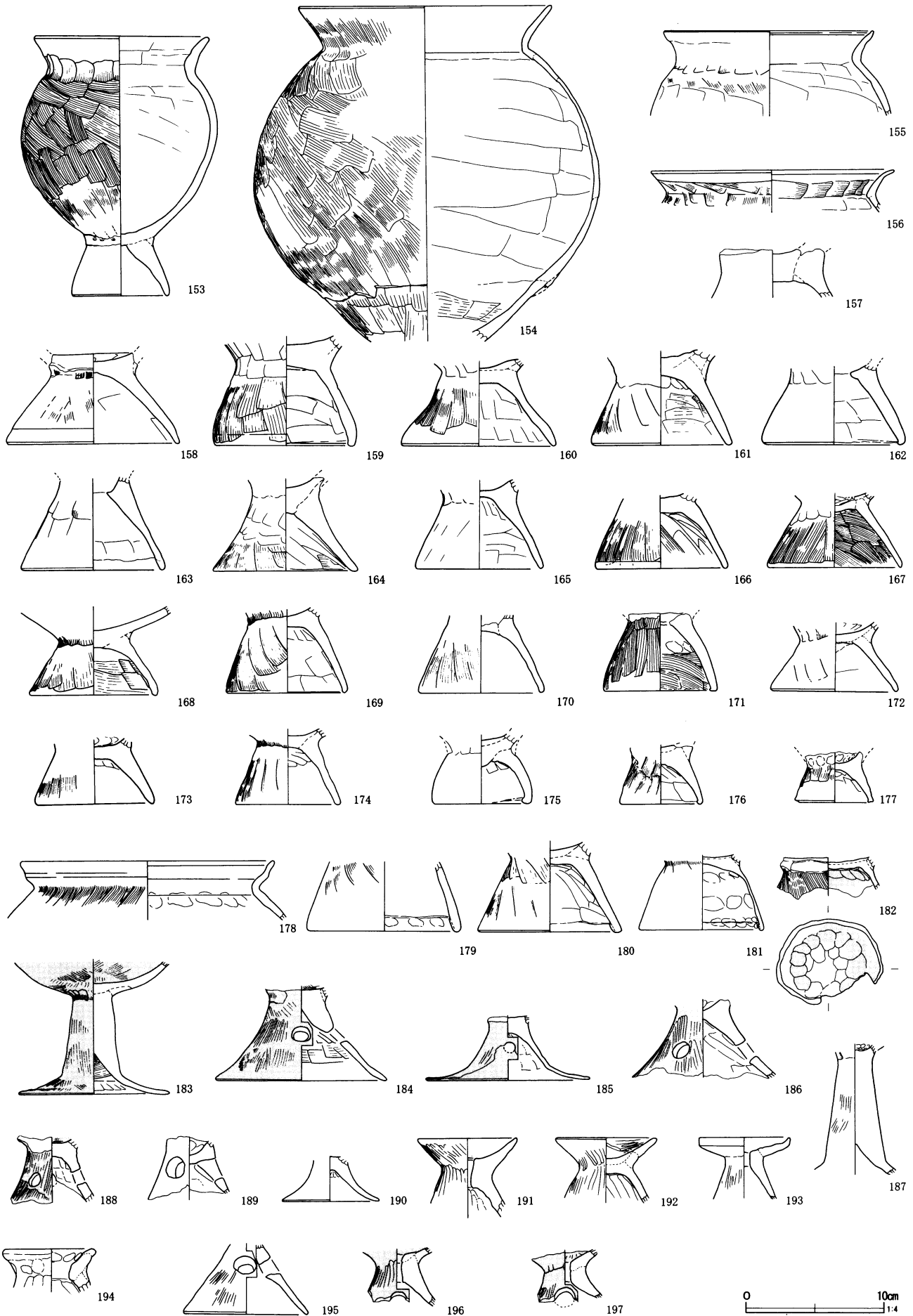


第102图 沟迹出土遗物(4)

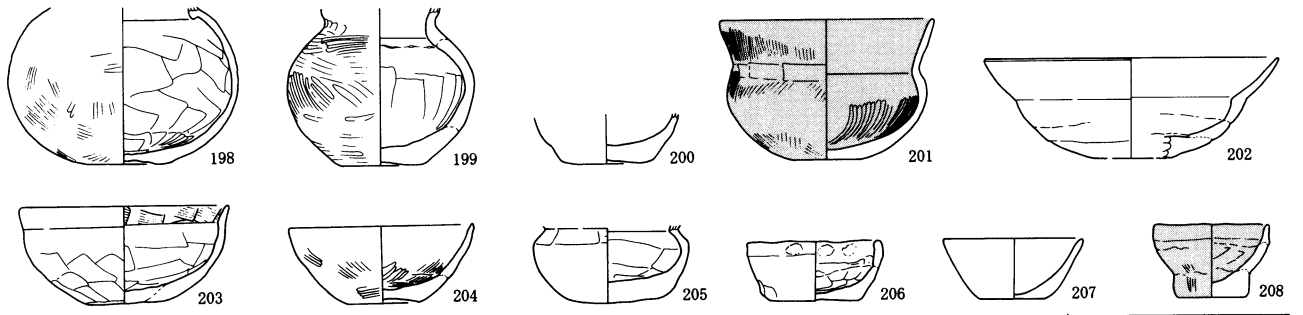
第19号沟迹(B区)



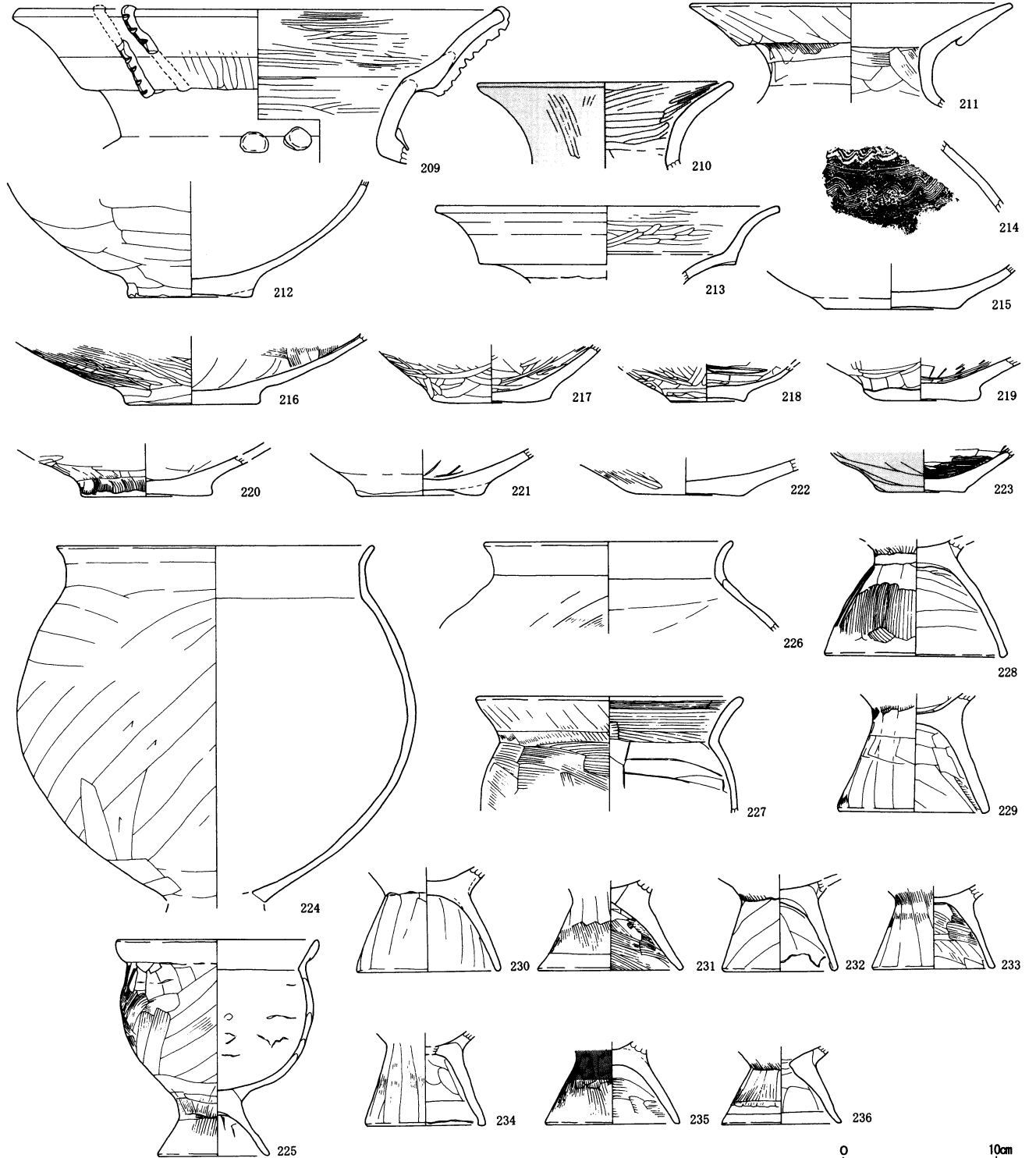
第103图 沟迹出土遗物(5)



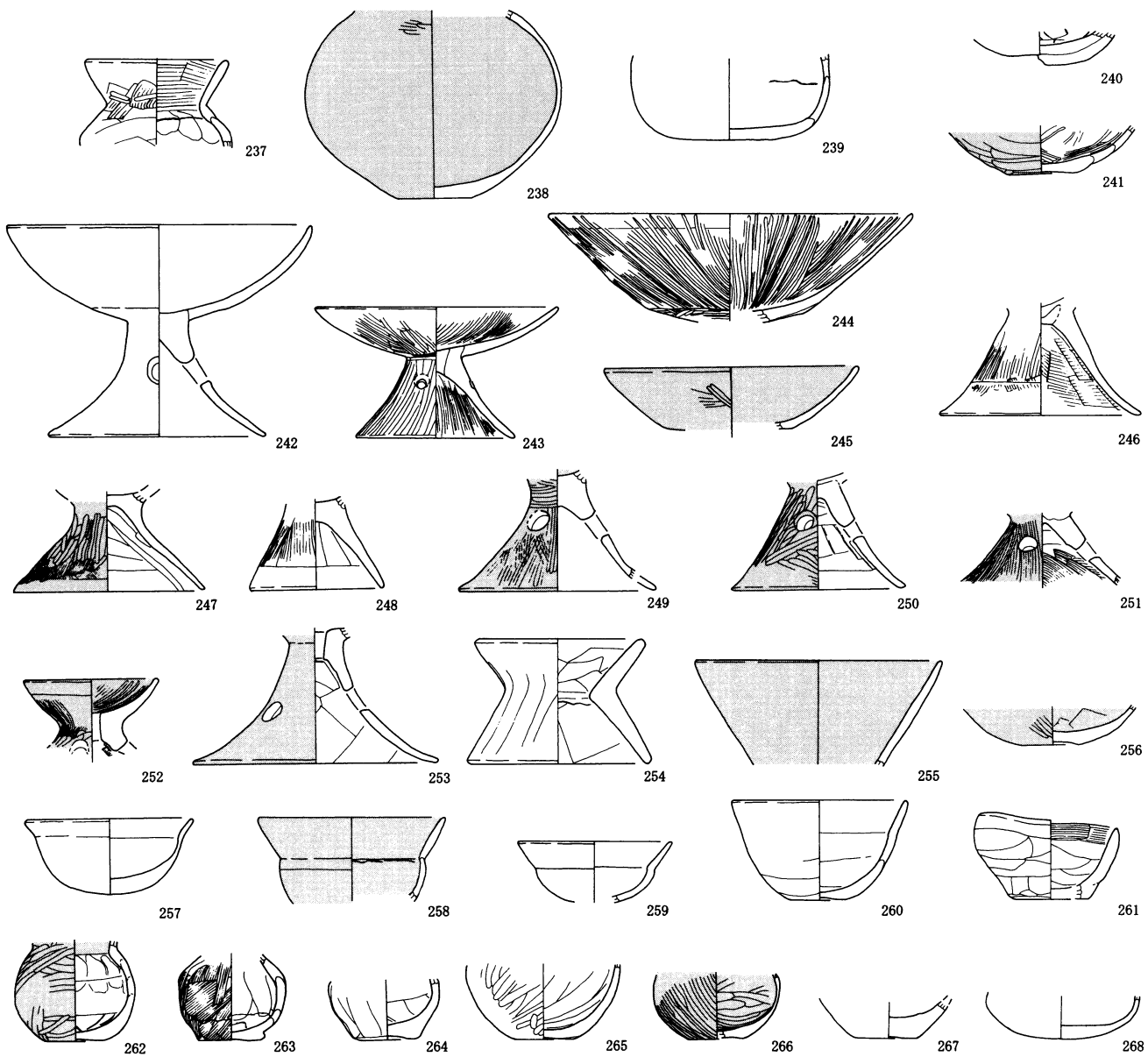
第 104 图 溝跡出土遺物 (6)



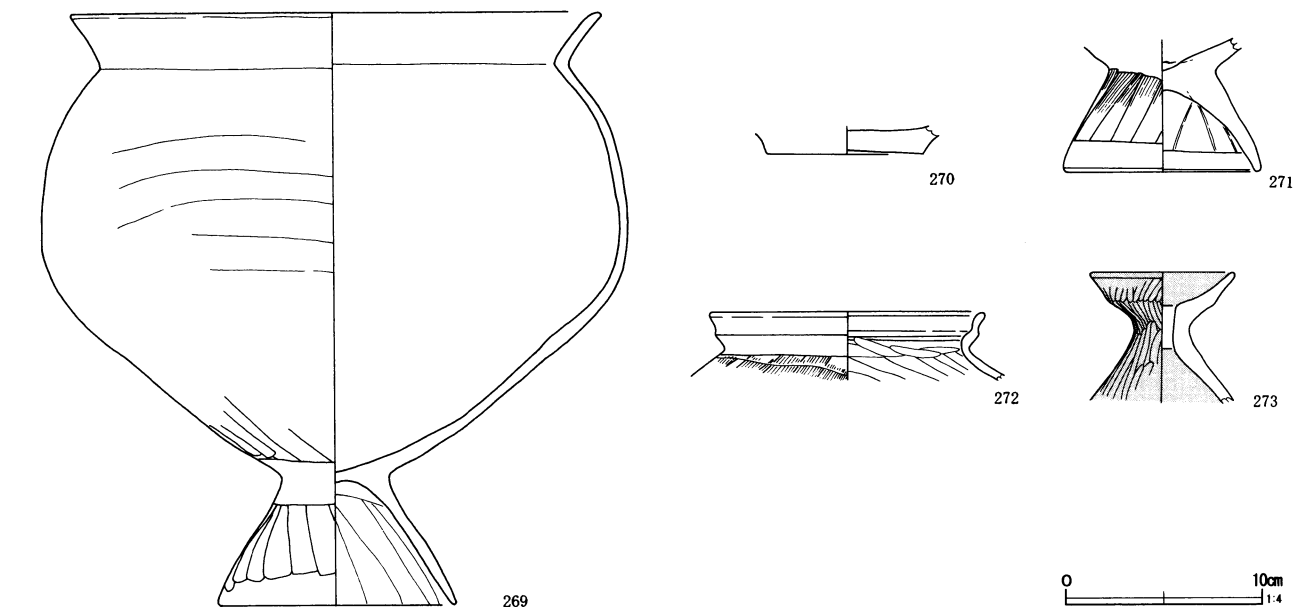
第19号沟迹(D区)



第105图 沟迹出土遗物(7)

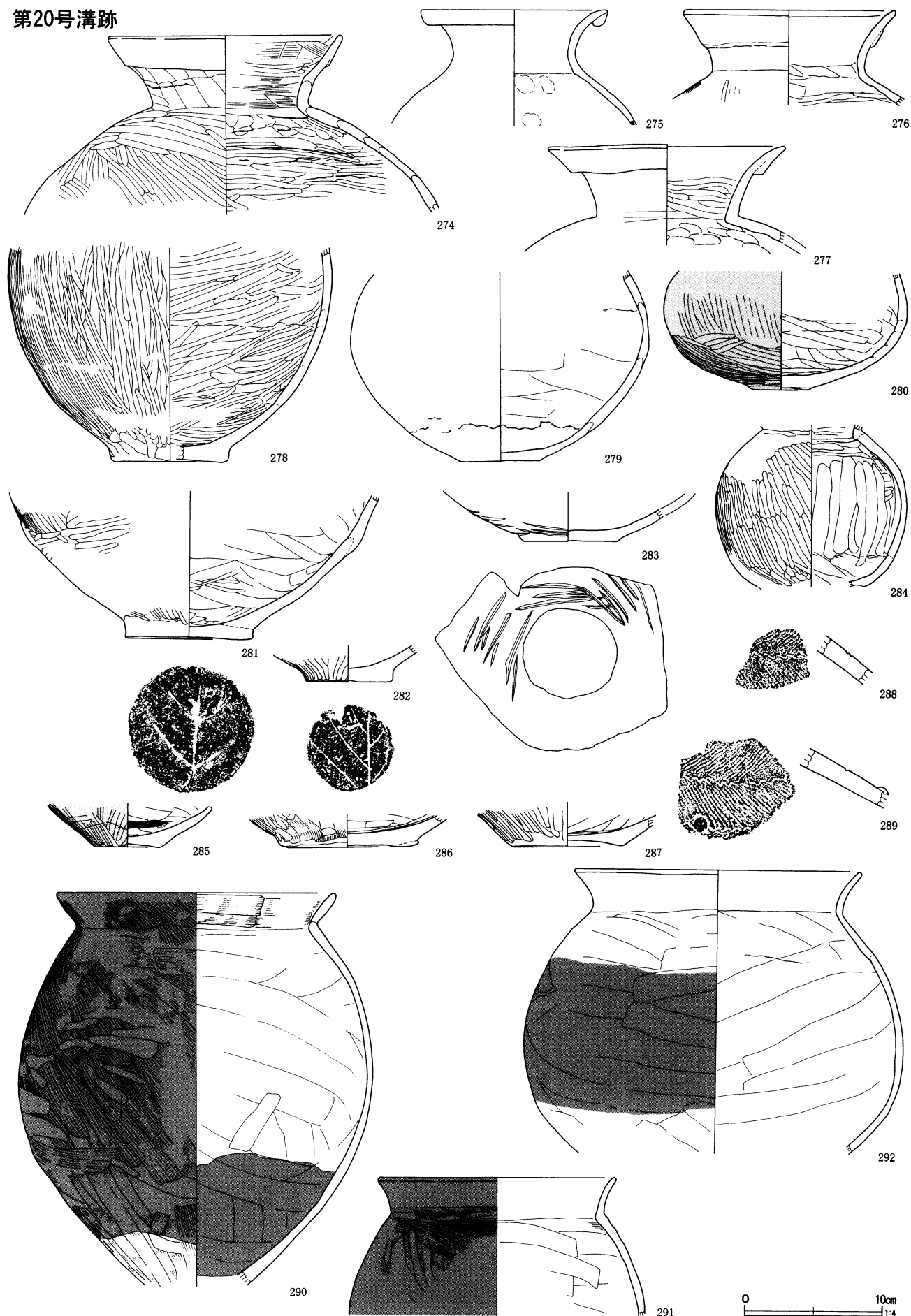


第19号沟迹(C区)

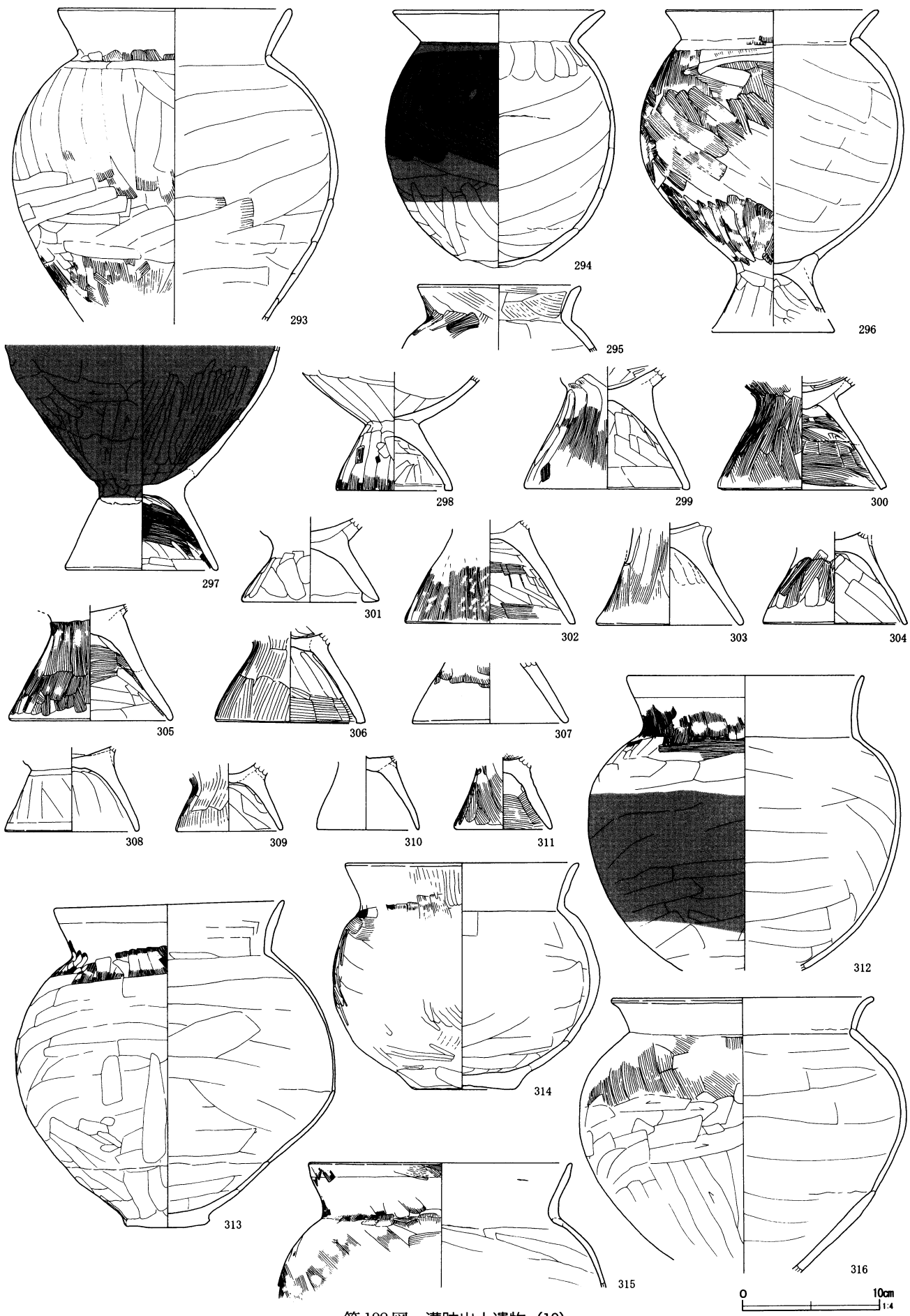


第106图 清迹出土遗物(8)

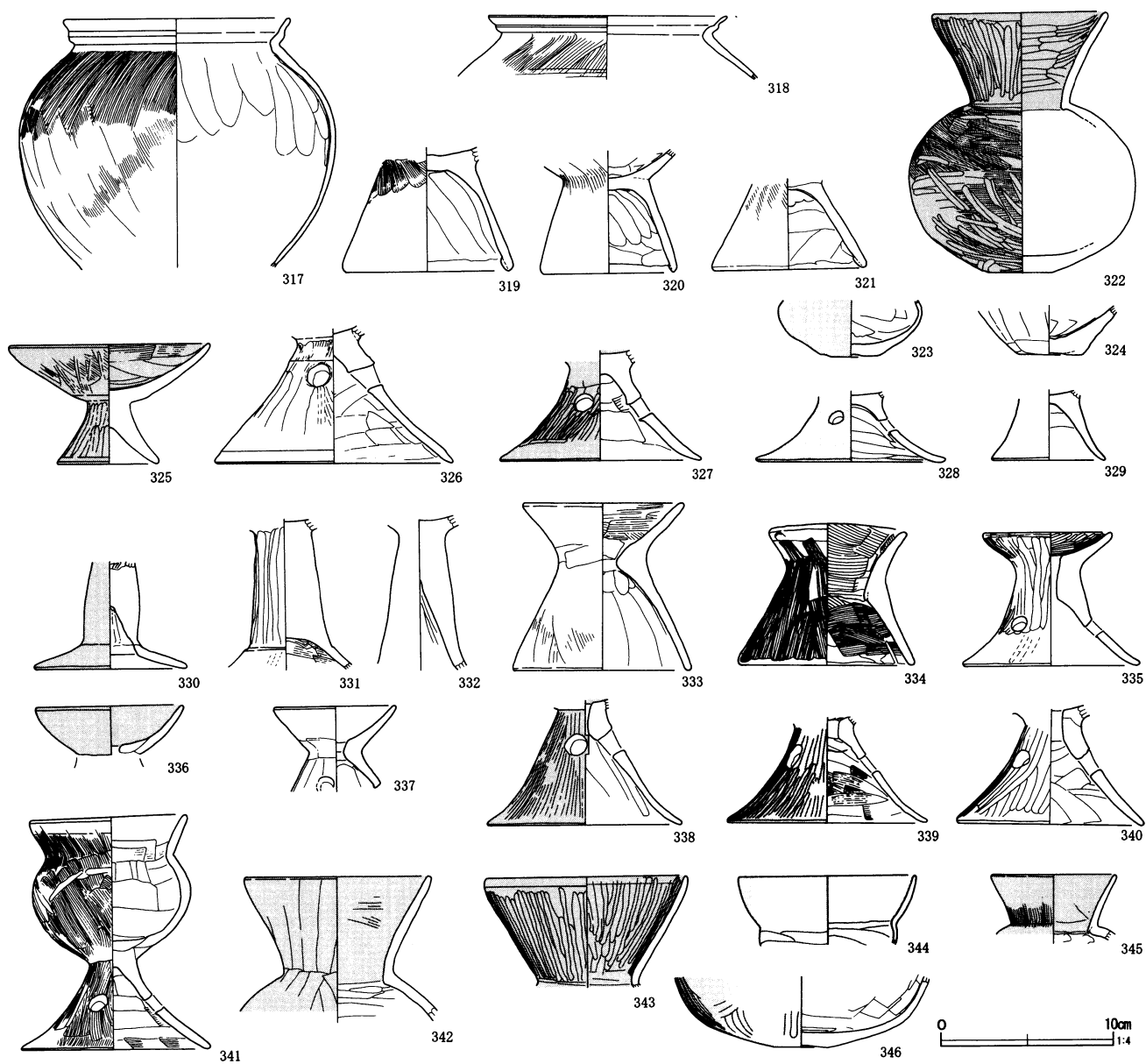
第20号溝跡



第107图 溝跡出土遺物(9)

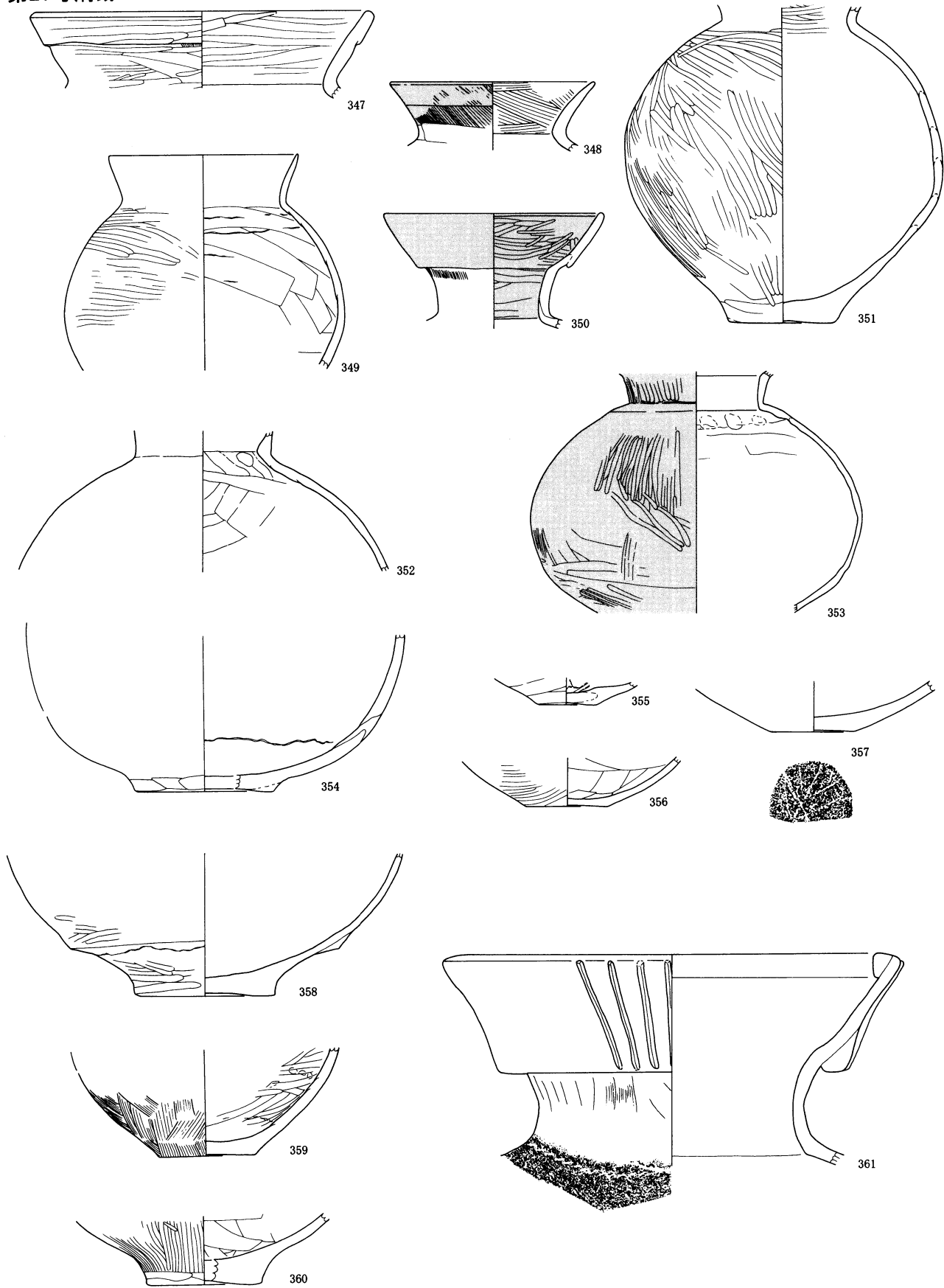


第 108 图 沟迹出土遗物 (10)



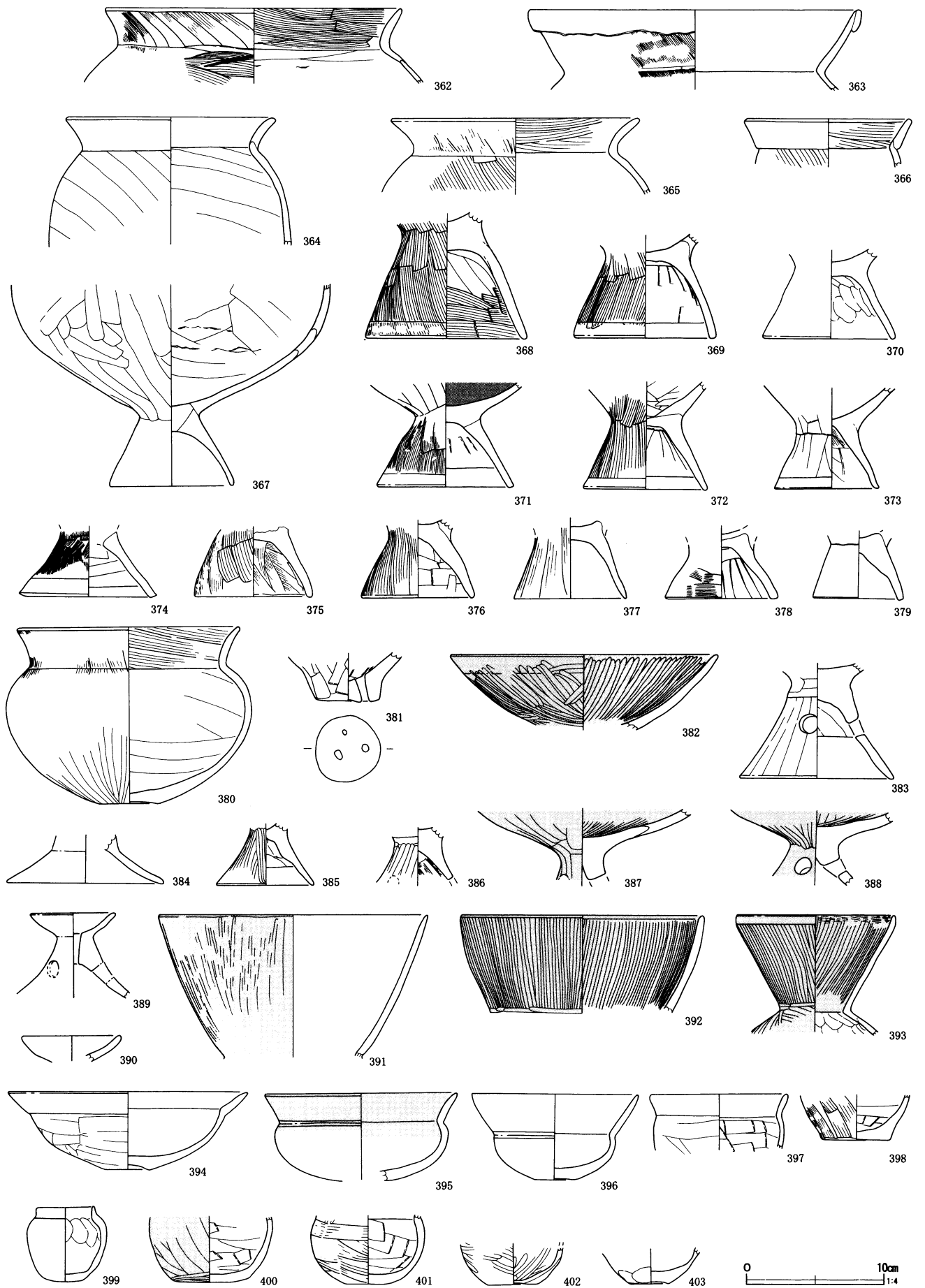
第109图 沟迹出土遗物(11)

第21号溝跡



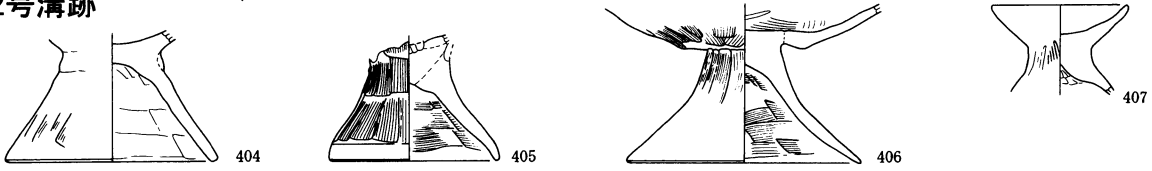
0 10cm
1:4

第110図 溝跡出土遺物 (12)

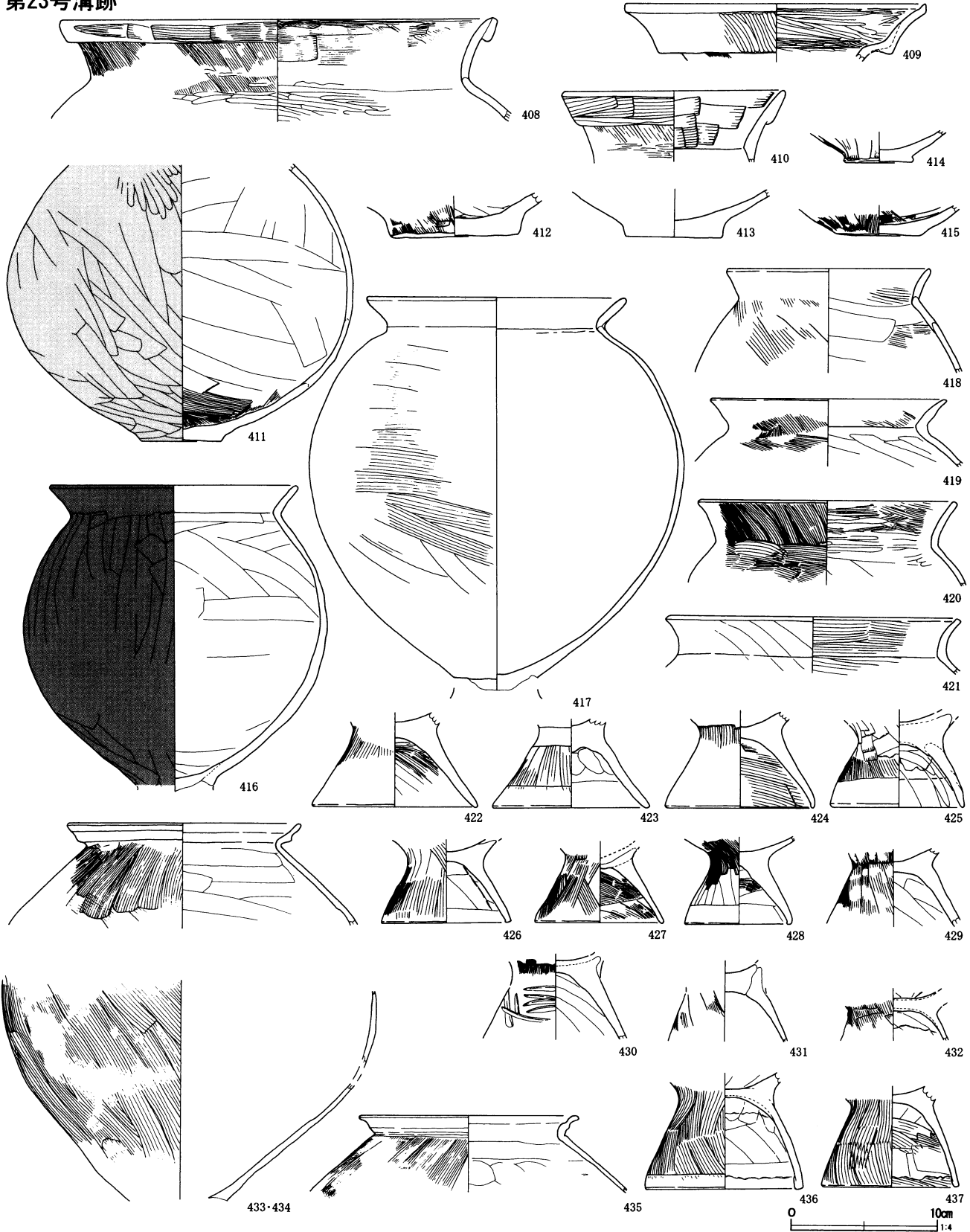


第 111 图 沟迹出土遗物 (13)

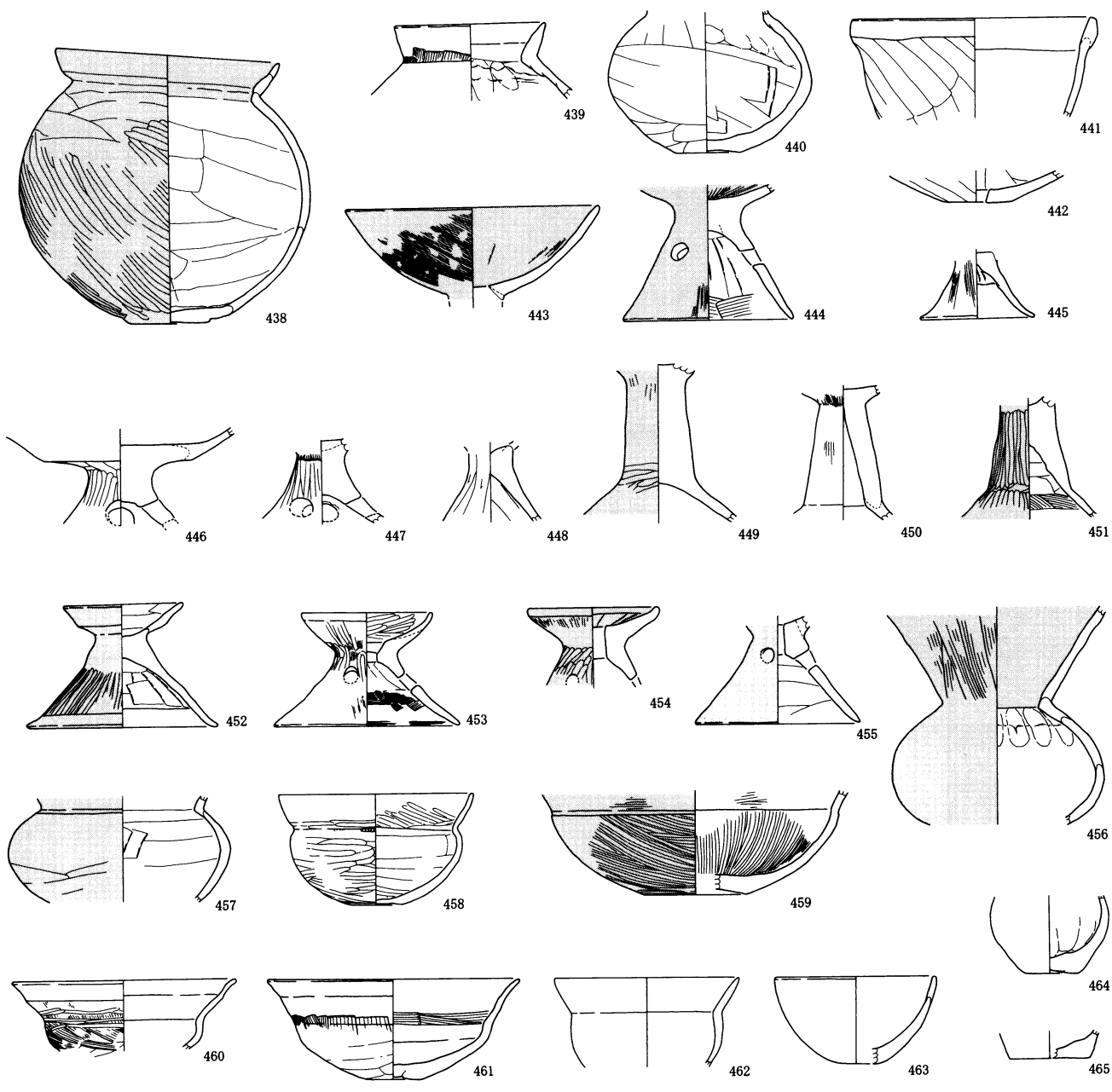
第22号沟迹



第23号沟迹

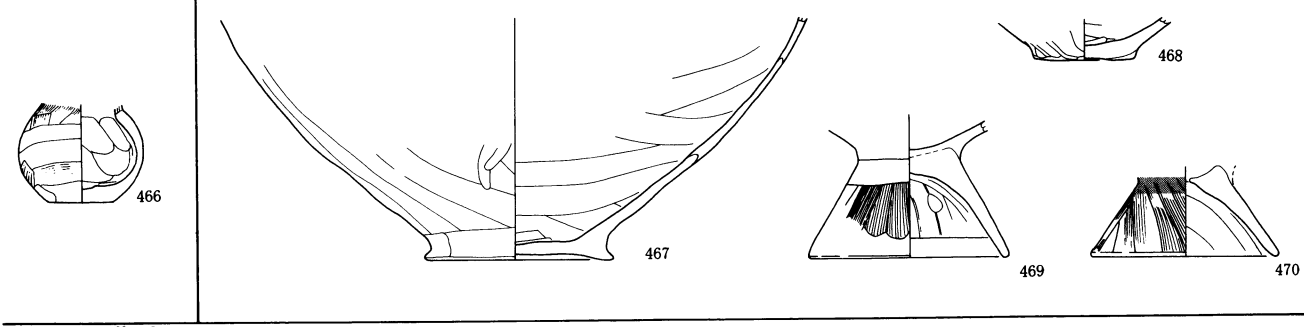


第112图 沟迹出土遗物 (14)

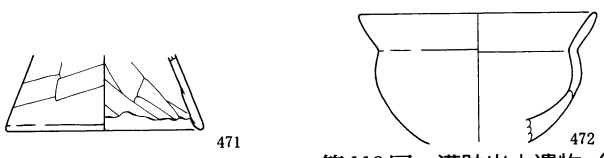


第24号沟迹

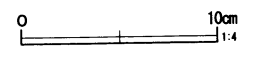
第25号沟迹



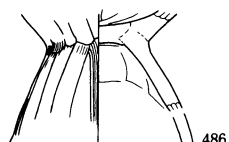
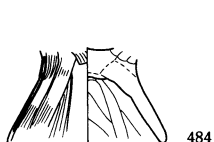
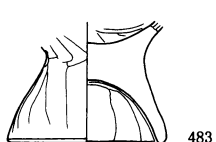
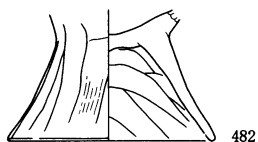
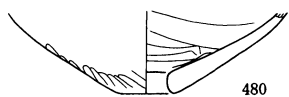
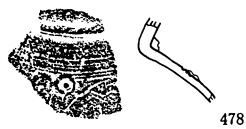
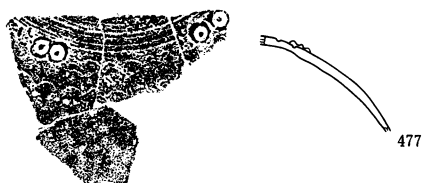
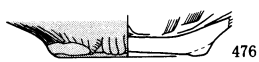
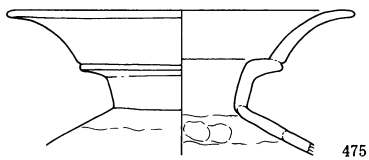
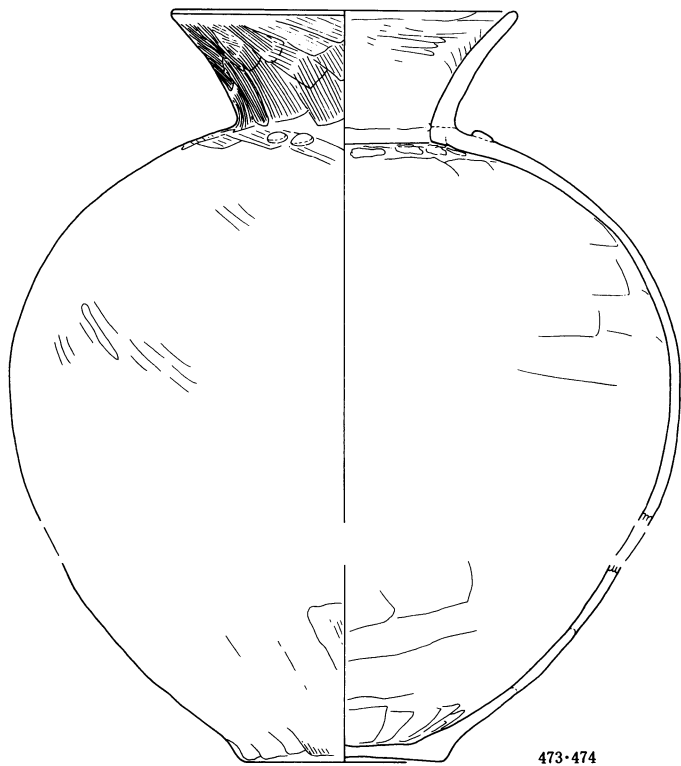
第26号沟迹



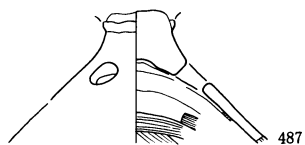
第113图 沟迹出土遗物 (15)



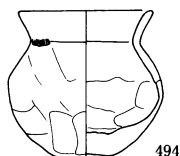
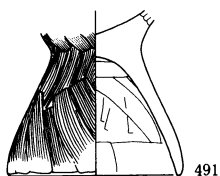
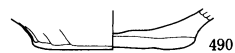
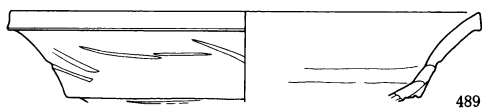
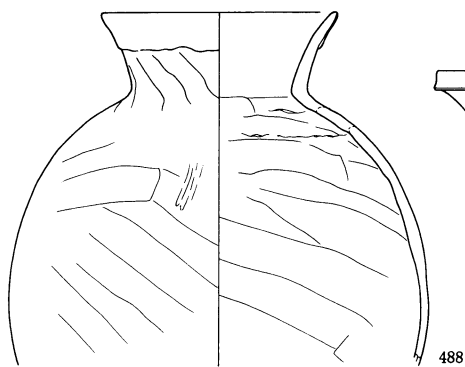
第27号沟迹



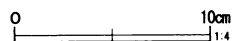
第28号沟迹



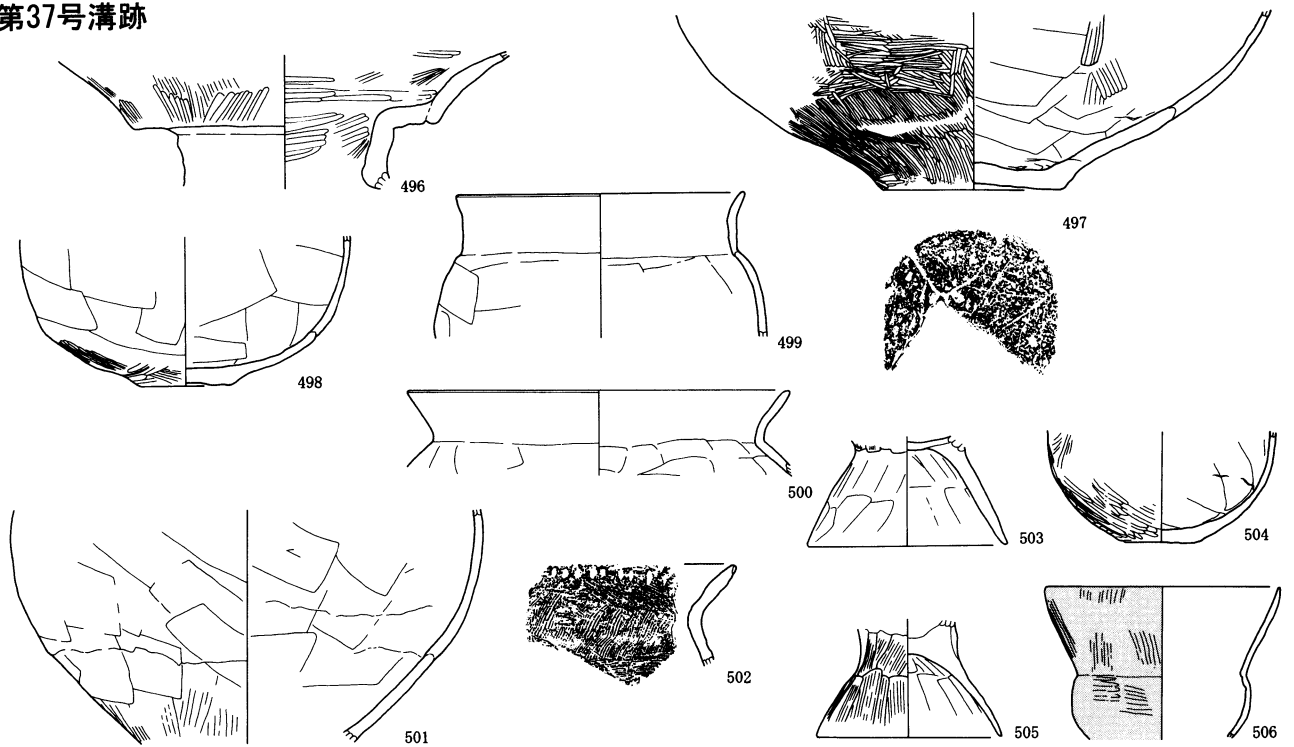
第30号沟迹



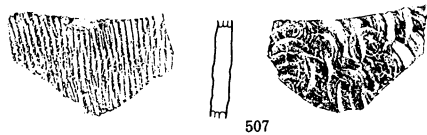
第114图 沟迹出土遗物 (16)



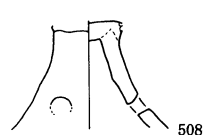
第37号溝跡



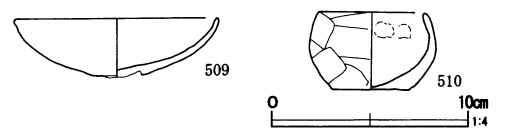
第41号溝跡



第43号溝跡



第49号溝跡



第115図 溝跡出土遺物(17)

できなかった。

規模は、幅1.00～1.40 m、深さ0.20 mであった。

第4号周溝遺構と、主軸方位は同一で、本遺構と、第4号周溝遺構との間に、第27・28号溝跡がある。

遺構底面は平坦で、壁面は斜め上方へ直線的に立ち上がっていた。

遺物は、古墳時代前期の土師器片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

E・F区

第7号溝跡(第85・86・89・90・92・93・95・96・100図)

A・F区M-2・3、N-3・4、O-4・5、P-5・6、Q-6グリッドで検出した。第6号井戸跡、第50号溝跡、第37・40・43号溝跡と重複し

ていた。第6号井戸跡、第50号溝跡、第40・43号溝跡に壊されていた。第37号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

溝跡は、北西方向から南東方向へ直線的に延び、溝跡の両端は、調査区外へ延びていた。

規模は、検出長57.00 m、幅0.70～1.10 m、深さ0.46～0.70 mであった。

溝底面のレベルは、A区北西端が最も標高が低く、南東方向に行くほど高くなっていったが、北西端と南東端とのレベル差は0.3 mと小さく、殆ど平坦であるといえる。

溝断面の形状は、A区・F区ともに箱型で、壁面は垂直に立ち上がっていた。

また、F区南東部では、溝跡東壁にテラス状の浅い掘り込みを有していた。テラスは、溝跡と軸を揃

えた長大な長方形で、規模は、長さ 14.00 m、幅 2.15～2.53 m、深さ 0.20～0.24 mであった。

遺物は、覆土中層から出土した。また、テラス部分から遺物がまとまって出土した。しかし、底面からは浮いた状態で出土しており、溝・テラスともにある程度埋没した段階で、遺物が廃棄または遺棄されたものと思われる。

出土遺物は、壺・甕・台付甕・S字甕・高坏・台・ミニチュア土器が出土した（第100図39～68）。

39～47は壺である。器形の復元できる資料は少なかった。

39はやや直立気味の口縁部、40は外反する口縁部である。

41はやや厚手の粘土帯を口縁部外面に貼り付けている。

44は口縁部を欠損していた。下膨れの胴部で、丁寧なヘラミガキが施されていた。

48～64は、台付甕である。このうち、57・62はS字状口縁台付甕である。

甕は、48・52・55・56など、長胴となる台付甕が含まれる。

56は、脚部から胴部上半が残存していた。長胴で胴部下位を鉢形に作り、胴部中位で異なる粘土で接合している。貼り合わせの粘土帯が帯状に剥落し、下部の粘土が露出していた。

57はS字状口縁台付甕である。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は高く、上段は大きく外反する。口縁部内面端部は、強いナデにより沈線状に窪んでいた。胴部は、粗い斜め刷毛に、肩部に横刷毛が認められた。胴部内面は、横方向のヘラナデが施されていた。

65は、高坏の坏部である。脚部を欠損していた。坏底部には円形の孔があり、脚部側を差し込んで接合していたものと思われる。内外面とも細かいヘラミガキが施されていた。

67は、もともとは台付甕の脚部であったと考えられる。台状に成形された脚部で、上部に、胴部と

の接合痕が僅かに認められた。風化が著しいため、摩滅か再調整かは明らかにできなかったが、上部は平坦となっていた。坏状の鉢として、あるいは台として再利用されたものと考えられる。

第33号溝跡（第88・92・93図）

E区M-6、N-6・7グリッドで検出した。

第4号住居跡、第49号溝跡と重複していた。第49号溝跡を壊し、第4号住居跡に壊されていた。

遺構は、東西に長く、溝の東西の両端は立ち上がっていた。

規模は、検出長 13.4 m、幅 0.20～0.36 m、深さ 0.05 mであった。

底面は平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がっていた。

遺物は、古墳時代の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第34号溝跡（第85・89・90・94図）

F区N・O・P-3グリッドで検出した。

第46・54号土壇、第41号溝跡と重複していた。第54号土壇、第41号溝跡を壊し、第46号土壇に壊されていた。東西に長い溝跡で、西側は調査区外に延び、東側は、現代の建物の基礎によって壊されていた。

規模は、検出長 13.00 m、幅 0.40～0.52 m、深さ 0.07～0.10 mであった。

底面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がっていた。

遺物は出土しなかったが、奈良時代の須恵器片が出土した第41号溝跡を壊しており、奈良時代以降の溝跡の可能性はある。

第35号溝跡（第89・90図）

F区N-2・3グリッドで検出した。

第41・46号土壇、第5号井戸跡と重複していた。第46号土壇を壊し、第5号井戸跡、第41号土壇に壊されていた。

遺構の西側は、調査区外へ延びていた。

規模は、検出長4.00 m、幅1.00～1.10 m、深さ0.47 mであった。

遺物は出土しなかった。

第36号溝跡 (第85・86図)

F区M-4グリッドで検出した。第42号土壙と重複していたが、第42号土壙との新旧関係は明らかにできなかった。南北に延びる溝で、北側は立ち上がっていたが、南側は第42号土壙と重複する部分まで検出できた。

規模は、長さ7.36 m、幅0.34～0.36 m、深さ0.06 mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がっていた。

遺物は出土しなかった。

第37号溝跡 (第89・90・91・115図)

F区N-4・5グリッドで検出した。

第7号溝跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長い土壙状で、規模は、長さ6.58 m、幅0.70～1.46 m、深さ0.14～0.23 mであった。

底面は平坦で、壁面は、垂直に立ち上がる、箱型の断面形であった。

近接して、主軸方向が直交するように、第42号溝跡がある。両者は幅・深さが似ており、L字型に曲がる周溝遺構の溝の一部であった可能性もあるが、明らかにできなかった。

遺物は、壺・甕・台付甕・小型壺・罎などがある(第115図496～506)。502は、台付甕の口縁部片であるが、口縁部に刻み目を有していた。

第38号溝跡 (第94図)

F区P・Q-4グリッドで検出した。

第43号溝跡と重複していた。第43号溝跡を壊していた。西側を攪乱に壊されていた。

規模は、検出長6.80 m、幅0.32～0.46 m、深さ0.07 mであった。

遺物は出土しなかった。

第39号溝跡 (第92・93図)

F区N-5グリッドで検出した。

第40号溝跡と重複していた。第40号溝跡に壊されていた。東側を攪乱に壊されていた。

規模は、検出長3.34 m、幅0.38～0.40 m、深さ0.05 mであった。

遺物は出土しなかった。

第40号溝跡 (第89・90・92・93図)

F区N-5、O-3・4・5グリッドで検出した。第7・39・42号溝跡と重複していた。第7・39号溝跡を壊し、第42号溝跡に壊されていた。

溝跡の両端は立ち上がっていた。

規模は、長さ21.60 m、幅0.30～0.80 m、深さ0.05～0.12 mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方に立ちあがっていた。

遺物は出土しなかった。

第41号溝跡 (第89・90図)

F区N・O-3グリッドで検出した。第41号土壙、第34号溝跡と重複していた。第41号土壙、第34号溝跡に壊されている。

規模は、検出長7.52 m、幅1.22～2.02 m、深さ0.06～0.11 mであった。

底面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。

遺物は、須恵器甕の破片が1点出土した。

第42号溝跡 (第89・90図)

F区N-4、O-4・5グリッドで検出した。

第40号溝跡と重複していた。第40号溝跡を壊している。西側と東側を攪乱に壊されていた。

規模は、検出長6.34 m、幅1.13～1.80 m、深さ

第14表 溝跡出土遺物観察表1 (第99～115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SD1	壺	(16.4)	[6.4]		口縁部1/3	A	良好	橙	赤彩	
2	SD1	台付甕		[7.2]		胴部下位	A	普通	明赤褐	煤	
3	SD1	台付甕	15.2	[19.0]		口縁～胴部	A	普通	にぶい黄褐		52-1
4	SD1	台付甕		[7.6]	10.2	脚部完存	A	良好	橙		52-2
5	SD1	台付甕		4.8]	(7.1)	脚部1/4	A	普通	にぶい黄橙	内面風化	
6	SD2	器台	(8.2)	[4.5]		受部1/4	A	普通	橙	赤彩、内外面風化	
7	SD2	鉢	(16.0)	[8.5]		口縁～胴部	D	普通	明赤褐		
8	SD3	S字甕	(17.6)	[2.8]		口縁部1/5	その他	良好	にぶい橙	内面体部指頭痕、外面ヘラ工具痕	
9	SD3	S字甕	(13.6)	[3.9]		口縁部1/5	F	良好	にぶい黄橙		
10	SD3	壺	(15.2)	[5.8]		口縁部1/6	A	良好	浅黄橙		
11	SD3	壺		[6.0]	(7.8)	底部1/5	C	不良	橙	水籤粘土	
12	SD3	高坏		[5.0]		脚部1/4	A	普通	橙	外面風化、透孔3	
13	SD3	壺		[9.5]		口縁破片	E	良好	橙	大廓式、棒状浮文1条、不規則なヘラ状工具痕	
14	SD3	砥石	長さ9.0cm幅4.4cm厚さ2.4cm			-					
15	SD4	甕		[3.0]	7.0	胴～底部	A	良好	橙	刷毛状工具によるナデ	
16	SD4	鉢	(14.7)	[6.4]		口縁～胴部	C	普通	にぶい黄橙	赤彩、外面風化、水籤粘土	
17	SD5	壺		[10.2]	9.8	底部～胴部	A	普通	橙		
18	SD5	甕	(17.5)	[9.7]		1/4	A	普通	灰褐		
19	SD5	台付甕		[7.8]	(11.0)	脚部1/3	A	良好	にぶい橙		
20	SD5	台付甕		[7.7]	10.5	脚部2/5	A	普通	赤褐	外面風化	
21	SD5	台付甕		[6.4]	10.6	脚部ほぼ完形	A	普通	橙	外面風化	52-3
22	SD5	台付甕		[6.1]	9.0	脚部ほぼ完形	A	不良	にぶい橙		52-4
23	SD5	台付甕		[6.1]	8.9	脚部2/3	A	良好	にぶい橙	風化	
24	SD5	台付甕		[4.9]	9.0	脚部3/5	A	良好	灰黄褐		
25	SD5	台付甕		[4.8]		脚部のみ	A	良好	にぶい赤褐		
26	SD5	台付甕		[5.0]	7.8	脚部ほぼ完形	A	良好	橙	硬質風化	
27	SD5	台付甕		[4.7]	6.8	脚部3/4	A	良好	にぶい橙	全体的風化	
28	SD5	高坏	(12.2)	[6.9]		坏部4/5	A	良好	明赤褐	赤彩、透孔3	52-5
29	SD5	高坏		[7.0]	(13.0)	脚部2/3	A	普通	橙	透孔3、外面工具痕、内面風化	
30	SD5	高坏		[6.5]	11.6	脚部1/2	A	普通	にぶい赤褐	赤彩、脚部内面天井部指ナデ	52-6
31	SD5	ミニチュア	(7.4)	9.3	4.3	3/4	A	良好	橙	壺、内面肩部指頭痕	53-1
32	SD5	小型壺		[4.7]	4.5	胴～底部	A	良好	にぶい橙	赤彩、外面風化	
33	SD5	小型壺		[8.7]	3.3	胴部2/3	A	普通	橙	内面風化	53-2
34	SD5	鉢	(16.0)	[6.6]		口縁部1/5	A	普通	にぶい赤褐	丸底	
35	SD5	埴	11.3	[3.5]		口縁部完形	A	普通	橙	内面風化	
36	SD5	ミニチュア	(8.7)	6.5	2.4	口縁欠	A	普通	にぶい橙	壺	
37	SD5	ミニチュア		[2.4]	3.4	底部完形	A	良好	にぶい橙	赤彩、透孔3	
38	SD5	ミニチュア		[2.2]	3.6	底部	A	良好	明赤褐	鉢	
39	SD7(3次)	壺	(11.7)	[19.9]		口縁～胴部	A	普通	にぶい黄橙	内外面風化、口縁貼付、3次	53-3
40	SD7(3次)	壺	(15.7)	[10.6]		口縁～頸部	A	良好	橙	外面風化、頸部指押さえ、3次	53-4
41	SD7	壺	(16.0)	[2.2]		口縁部	A	良好	にぶい橙	口縁貼付け粘土、外面風化、1次	
42	SD7(3次)	壺		[15.1]	7.2	1/3	B	普通	にぶい褐	内外面風化、3次・テラス	53-5
43	SD7(3次)	壺		[17.8]	7.1	胴部1/4	D	普通	にぶい橙	内外面風化、3次・テラス	
44	SD7(3次)	壺		[11.3]	3.9	胴部完形	A	良好	橙	頸部内面指押さえ、3次	53-6
45	SD7(3次)	壺		[2.1]	7.6	底部完形	A	普通	橙	内外面風化、3次・テラス	
46	SD7(3次)	甕		[2.6]	5.8	底部完形	A	良好	黄橙	外面風化、3次・テラス	
47	SD7(3次)	壺		[4.2]		-	A	普通	橙	棒状浮文、3次・テラス	
48	SD7(3次)	甕	(13.7)	[19.4]		口縁～胴部	A	普通	にぶい橙	口縁部内面刷毛目、3次・テラス	
49	SD7(3次)	甕	(17.2)	[14.2]		口縁～胴部	A	普通	橙	内外面風化、口縁部内面刷毛目、3次・テラス	
50	SD7(3次)	台付甕	(20.6)	[9.7]		口縁1/5	A	良好	暗赤褐	口縁部内面刷毛目、3次	
51	SD7(3次)	台付甕	(16.7)	[6.3]		口縁1/2	A	普通	橙	口縁部内面刷毛目、3次・テラス	53-7
52	SD7(3次)	台付甕	(11.7)	[11.0]		口縁～胴部	A	普通	にぶい赤褐	口縁部内面刷毛目、3次	53-8
53	SD7(3次)	甕	(23.0)	[6.9]		口縁1/5	A	良好	明褐	口縁部内面刷毛目、3次	
54	SD7(3次)	甕	(14.8)	[7.1]		口縁部1/5	D	普通	橙	外面風化、3次・テラス	

第15表 溝跡出土遺物観察表2 (第99~115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
55	SD7 (3次)	台付甕	(15.1)	[10.0]		口縁1/6	A	普通	にぶい橙	内外面風化、3次・テラス	54-1
56	SD7 (3次)	台付甕		[20.6]	(10.6)	1/3	D	普通	にぶい黄橙	外面風化、3次・テラス	
57	SD7 (3次)	S字甕	(16.3)	[5.5]		口縁1/4	D	良好	灰白	3次	
58	SD7 (3次)	甕	(12.3)	[8.8]		口縁1/4	B	良好	にぶい黄橙	口縁部内面刷毛目、頸部指押さえ、3次	
59	SD7	台付甕		[3.6]		脚部	A	良好	褐灰	内面底部酸化鉄分付着、1次	54-2
60	SD7 (3次)	台付甕		[5.8]	(8.9)	脚部1/4	A	良好	橙	3次	
61	SD7	台付甕		[5.3]	(8.8)	脚部	A	良好	にぶい橙	1次	
62	SD7 (3次)	S字甕		[3.9]	(9.2)	脚部	D	普通	明赤褐	内外面風化、3次・テラス	
63	SD7 (3次)	台付甕		[9.5]	(9.4)	脚部1/2	A	普通	橙	内外面風化、3次	54-3
64	SD7 (3次)	台付甕		[6.0]	9.6	脚部ほぼ完形	A	普通	橙	外面風化、3次・テラス	
65	SD7 (3次)	高坏	(19.9)	[5.8]		坏部1/2	A	良好	橙	3次	
66	SD7 (3次)	高坏		[5.1]	(8.3)	脚部4/5	A	良好	明赤褐	外面風化、3次	
67	SD7	台		4.8	8.9	1/2	A	普通	橙	内面風化、1次	54-4
68	SD7 (3次)	ミニチュア		[2.9]	4.3	底部完形	A	良好	灰黄	外面風化、3次	
69	SD8	壺	13.1	[5.5]		口縁部4/5	A	普通	橙	内外面風化	
70	SD8	壺				口縁部	E	普通	灰白	大廓式風化、棒状浮文3本	
71	SD8	壺		[1.5]	4.6	底部3/4	A	良好	にぶい黄橙	丸底	54-5
72	SD8	壺		[1.7]	7.0	底部3/5	D	良好	褐灰	内面風化、水簸粘土	
73	SD8	壺		[2.1]	4.3	底部完形	A	良好	にぶい橙	内外面風化	
74	SD8	壺		[2.6]	7.5	底部完形	A	良好	にぶい橙	外面風化	
75	SD8	壺		(4.0)	7.8	底部1/2	A	普通	橙	全体的風化	54-6
76	SD8	壺		[3.2]	(8.0)	底部1/2	D	良好	にぶい黄橙	木葉痕	
77	SD8	甕	(17.8)	[17.0]		胴部2/5	A	良好	灰褐	煤	
78	SD8	甕	(17.7)	[7.3]		口縁部1/5	A	良好	褐灰		
79	SD8	甕	(12.3)	[6.9]		口縁部1/4	A	普通	橙	外面風化	54-7
80	SD8	甕	(12.4)	[7.3]		1/2	A	普通	浅黄橙	外面風化	
81	SD8	台付甕		[6.9]	(9.6)	脚部2/5	A	良好	灰白	脚部外面傷有(焼成後)	
82	SD8	台付甕		[4.9]	5.5	脚部3/4	A	良好	にぶい橙	接合部粘土巻きつけ	
83	SD8	台付甕		[8.1]	(10.7)	脚部1/4	A	普通	にぶい橙	外面風化	54-8
84	SD8	台付甕		[5.7]	(10.0)	脚部2/5	A	普通	にぶい橙	風化	
85	SD8	S字甕	(12.8)	[6.8]		口縁部破片	F'	良好	にぶい黄橙	在地化したS字甕か?	
86	SD8	S字甕	(13.8)	[3.7]		口縁部1/5	F	良好	灰褐	在地化したS字甕か?	
87	SD8	S字甕	(14.8)	[4.1]		1/3	D	良好	にぶい黄橙	内面胴部上位指頭痕	54-6
88	SD8	高坏		[4.7]	8.8	脚部	A	普通	にぶい橙	赤彩透孔4	
89	SD8	高坏		[4.6]		脚部	D	良好	灰黄	軟質透孔3、赤彩、駿河産?	
90	SD8	高坏		[4.5]		接合部片	A	良好	灰褐		
91	SD8	器台	7.6	7.3	(10.3)	4/5	D	良好	褐灰	赤彩透孔、接合部孔	54-8
92	SD8	埴	10.6	10.8	2.9	4/5	D	普通	にぶい橙	やや軟質、丸底、外面風化	
93	SD8	埴		[8.8]		胴部1/3	A	普通	にぶい橙	赤彩痕	
94	SD8	鉢	(14.6)	5.3	(3.8)	1/5	A	普通	浅黄		
95	SD8	ミニチュア	(5.3)	7.2	2.8	ほぼ完形	A	良好	褐灰	壺、胴部穿孔(焼成後)底部内面盛り上がる	55-1
96	SD9	壺		[5.4]	(4.1)	胴~底部	A	普通	にぶい黄橙	赤彩	
97	SD9	高坏		[4.9]		坏~脚部	A	普通	にぶい褐	透孔1	
98	SD9	ミニチュア		[7.1]	4.4	3/4	A	普通	橙	壺、内面全体に煤けている	
99	SD10	甕	(22.5)	[12.2]		口縁~胴部	A	普通	にぶい赤褐	煤、内面全体鉄分付着	55-2
100	SD10	甕	(14.0)	[7.5]		口縁~胴部	A	普通	明褐	口縁部外面鉄分付着、内面風化	
101	SD10	小型壺		[2.7]	(4.4)	胴~底部	A	普通	橙	内外面風化	
102	SD10	台付甕		[7.2]	10.3	脚部完形	A	良好	明赤褐	しっかりした作り	
103	SD10	高坏	(14.5)	[3.5]		口縁~胴部	A	普通	橙	内面風化	55-3
104	SD11	壺		[2.2]	(7.7)	底部1/4	D	普通	橙	風化	
105	SD11	S字甕		[3.7]		胴部下位	A	普通	明赤褐	内面風化	
106	SD11	台付甕		[3.2]		脚部上半	A	普通	橙	表面鉄分付着	
107	SD12	壺	(15.1)	[5.5]		口縁部1/4	A	普通	にぶい橙		55-3
108	SD12	壺		[2.7]	8.0	底部完形	A	良好	にぶい橙	全体的風化・酸化鉄分付着	

第16表 溝跡出土遺物観察表3 (第99~115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
109	SD12	小型壺	(13.6)	[5.4]		口縁破片	A	良好	にぶい橙	軟質、丸底、風化	
110	SD12	台付甕		[20.6]	10.5	脚部ほぼ完形	A	良好	にぶい橙	胴部内外面風化	55-4
111	SD12	台付甕		[7.0]	10.3	脚部完形	A	普通	橙		55-5
112	SD12	器台		[6.0]		受部3/4	A	良好	にぶい橙	内外面風化、透孔1	55-6
113	SD12	高坏		[7.8]	11.7	脚部3/4	A	良好	にぶい橙	外面風化、透孔有	
114	SD12	高坏		[6.4]	10.0	脚部ほぼ完形	A	良好	橙	内外面風化、透孔3	
115	SD13	甕	20.0	[14.6]		口縁部3/4	A	良好	にぶい黄褐	外面風化	55-7
116	SD13	甕	14.1	[13.0]		脚部欠	A	普通	にぶい橙	外面風化	55-8
117	SD13	甕	(16.6)	[12.0]		口縁部1/4	A	普通	明黄褐		
118	SD13	台付甕		[7.4]	(10.6)	脚部3/4	A	良好	明黄褐		
119	SD13	台付甕		[7.2]	10.7	脚部3/4	A	良好	橙		
120	SD13	台付甕		[6.9]	9.2	脚部ほぼ完形	A	普通	橙		56-1
121	SD13	台付甕		[5.4]	7.4	脚部完形	A	良好	橙		56-2
122	SD13	台付甕		[6.0]		脚部1/4	A	不良	明赤褐		
123	SD13	高坏		[6.7]		脚部1/3	A	良好	にぶい黄橙	透孔3	
124	SD13	高坏		[5.3]		脚部	A	良好	にぶい褐色	透孔3	
125	SD13	高坏		[3.9]		脚部	A	良好	橙	赤彩、透孔3	
126	SD13	高坏		[1.9]		脚部	A	良好	明赤褐	透孔3	
127	SD13	台付鉢	(9.4)	[7.4]		脚部欠	D	良好	にぶい橙	風化	56-3
128	SD19B	広口壺	16.3	18.2	6.0	4/5	A	良好	灰褐	外面胴部風化	56-4
129	SD19B	広口壺	(16.3)	[14.2]		口縁部1/4	B	良好	黒褐	外面風化	
130	SD19B	壺	(14.5)	[8.5]		口縁部1/3	A	普通	にぶい橙	全体的風化、内面指頭痕	
131	SD19B	壺	(13.6)	[6.7]		口縁部2/5	A	普通	橙	全体的風化、貼付口縁工具によるキズ有(焼成後)	
132	SD19B	壺	(22.0)	[7.5]		口縁部1/4	A	良好	にぶい黄橙	貼付口縁	
133	SD19B	壺	(18.0)	[8.5]		口縁～頸部	A	良好	橙	貼付口縁、内面・外面口縁部風化	
134	SD19B	壺	15.0	[4.9]		口縁部1/3	A	良好	にぶい橙	貼付け口縁	
135	SD19B	壺	14.4	[4.9]		口縁部1/3	A	良好	にぶい橙	赤彩	
136	SD19B	壺	13.6	[6.1]		口縁部2/5	A	普通	浅黄橙	貼付口縁、内面指頭痕	
137	SD19B	壺	14.4	[5.4]		口縁部3/4	A	良好	灰黄褐	内外面風化、貼付口縁	
138	SD19B	壺		[6.5]		頸部片	A	良好	浅黄橙	赤彩、有段、外面口縁部風化	
139	SD19B	壺		[7.6]	8.0	底部	A	良好	にぶい褐		
140	SD19B	壺		[3.8]	8.2	底部	A	良好	にぶい黄橙		
141	SD19B	壺		[3.0]	8.0	底部	A	良好	にぶい橙	底部高台風ドーナツ状	
142	SD19B	壺		[3.4]	8.0	底部	C	普通	橙	軟質、外面風化、水簸粘土	
143	SD19B	壺		[3.5]	7.1	底部	D	良好	灰白	軟質	
144	SD19B	壺		[2.5]	5.8	底部	A	良好	にぶい黄橙	硬質	
145	SD19B	壺		[2.5]	7.8	底部	A	良好	にぶい橙		
146	SD19B	壺		[3.2]	7.9	底部	A	良好	にぶい黄橙	底部ドーナツ状	
147	SD19B	壺				胴部破片	E	普通	浅黄橙	大廓式、煤、風化	
148	SD19B	壺				胴部破片	E	良好	灰白	大廓式	
149	SD19B	壺				頸～胴部	E	普通	灰白	大廓式、煤、風化、内面頸部刷毛目工具痕	
150	SD19B	壺				胴部破片	E	良好	浅黄橙	風化	
151	SD19B	壺				胴部破片	E	良好	にぶい黄橙	風化	
152	SD19B	壺				胴部破片	E	良好	にぶい黄橙	大廓、風化、内面指頭痕	
153	SD19B	台付甕	12.4	18.9	6.7	ほぼ完形	A	良好	褐灰	外面脚部風化、内面脚部・胴部下半酸化鉄分付着	56-5
154	SD19B	台付甕	(18.1)	[24.4]		2/5	A	普通	にぶい黄橙	胴部下半鉢状に作り上半と接合、接合部に粘土帯貼付	
155	SD19B	甕	(15.1)	[6.2]		1/2	A	良好	にぶい黄橙		
156	SD19B	甕	17.6	[3.1]		口縁部1/2	A	良好	黄灰	屈曲の強い口縁部(くの字状)	
157	SD19B	台付甕		[3.5]		脚部片	C	良好	浅黄橙	軟質、外面風化、水簸粘土	
158	SD19B	台付甕		[6.6]	12.3	脚部3/4	A	良好	浅黄橙	外面接合部粘土貼付後ヘラ(ハケ)、内外面風化	56-6

第17表 溝跡出土遺物観察表4 (第99～115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
159	SD19B	台付甕		[8.0]	9.6	脚部	A	良好	にぶい褐		56-7
160	SD19B	台付甕		[6.2]	(10.8)	脚部1/3	A	良好	にぶい橙		
161	SD19B	台付甕		[6.9]	9.8	脚部3/4	A	良好	にぶい黄橙	外面接合部粘土貼付、内面脚部天井部指頭痕	
162	SD19B	台付甕		[5.7]	9.6	脚部1/2	D	普通	橙	外面風化	
163	SD19B	台付甕		[6.7]	10.0	脚部ほぼ完形	A	良好	にぶい橙	内面脚部折り返し痕	56-8
164	SD19B	台付甕		[6.7]	(10.0)	脚部1/3	A	良好	灰黄		
165	SD19B	台付甕		[6.4]	(8.8)	脚部1/2	A	良好	橙		
166	SD19B	台付甕		[5.4]	9.2	脚部完形	A	良好	灰黄褐		57-1
167	SD19B	台付甕		[5.2]	(9.6)	脚部2/3	A	良好	にぶい橙		
168	SD19B	台付甕		[6.4]	8.9	脚部完形	A	普通	にぶい橙		57-2
169	SD19B	台付甕		[6.2]	8.4	脚部3/4	A	良好	灰黄褐		
170	SD19B	台付甕		[5.6]	(8.6)	脚部1/3	G	普通	黄灰	水簸粘土	
171	SD19B	台付甕		[5.6]	8.0	脚部1/4	A	良好	明褐灰	内面脚部中位指頭痕	
172	SD19B	台付甕		[5.0]	8.8	脚部1/2	A	良好	橙	外面風化、内面脚部天井部粘土貼付	
173	SD19B	台付甕		[4.7]	8.3	脚部3/4	A	良好	橙	接合面本来の甕底部ではない	
174	SD19B	台付甕		[5.5]	7.3	脚部2/3	A	良好	橙	内面脚部天井部へラ工具押さえ	
175	SD19B	台付甕		[5.1]	(6.8)	脚部1/3	A	良好	にぶい橙	全体的風化、外面接合部粘土貼付痕有	
176	SD19B	台付甕		[4.3]	5.7	脚部	A	良好	灰黄褐		57-3
177	SD19B	台付甕		[3.7]	5.0	脚部	A	良好	にぶい橙	内外面接合部指頭痕	57-4
178	SD19B	S字甕	(18.2)	[4.3]		口縁部1/5	A	普通	灰黄	内面に指頭圧痕	
179	SD19B	S字甕		[5.1]	(10.7)	底部1/3	A	良好	橙	内面脚部折り返し後指頭痕	
180	SD19B	S字甕		[6.6]	10.0	脚部1/5	A	良好	にぶい橙	内面脚部折り返し、在地化したもの	
181	SD19B	S字甕		[5.4]	(8.8)	脚部2/5	G	普通	にぶい橙		
182	SD19B	S字甕		[2.8]		脚部片	F	良好	淡赤橙		
183	SD19B	高坏		[9.8]	(10.8)	口縁部欠損	A	良好	橙	赤彩	
184	SD19B	高坏	[6.9]	12.2		脚部1/4	A	良好	浅黄橙	赤彩透孔3	
185	SD19B	高坏		[4.7]	11.4	脚部片	A	普通	にぶい橙	赤彩透孔3、内外面風化	
186	SD19B	高坏		[5.7]		脚部片	A	良好	にぶい橙	赤彩透孔3	
187	SD19B	高坏		[9.4]		脚部	A	良好	にぶい橙	内外面風化	
188	SD19B	高坏		[5.0]		接合部	G	良好	にぶい赤	赤彩透孔3	
189	SD19B	高坏		[5.1]		接合部	A	普通	橙	透孔3孔、外面風化	
190	SD19B	高坏		[3.2]	6.9	脚部2/5	A	普通	橙	内外面風化	57-5
191	SD19B	器台	(7.0)	[5.8]		受部2/3	A	良好	にぶい橙	接合部孔、内面受部風化	
192	SD19B	器台	(7.0)	[4.7]		口縁部1/3	A	良好	にぶい黄橙	孔なし	
193	SD19B	器台	6.5	[4.7]		受部2/5	C	普通	浅黄橙	接合部孔、外面風化、水簸粘土	
194	SD19B	器台	6.3	[3.1]		口縁部完形	A	良好	灰黄褐	接合部孔、内面受部・外面指頭痕	
195	SD19B	器台		[5.1]	8.9	接合部1/3	C	普通	にぶい橙		
196	SD19B	器台		[4.2]		接合部	A	良好	にぶい橙	赤彩接合部孔透孔3	
197	SD19B	器台		[3.9]		接合部	A	良好	にぶい橙	赤彩接合部孔透孔3	
198	SD19B	小型壺		[8.0]	3.5	口縁部欠損	A	良好	にぶい橙	赤彩痕	57-6
199	SD19B	小型壺		[8.0]	3.8	ほぼ完形	A	良好	にぶい橙		57-7
200	SD19B	小型壺		[2.5]	3.3	底部	A	良好	にぶい橙	外面風化、底部ドーナツ状	
201	SD19B	鉢	(10.8)	7.1	3.2	ほぼ完形	A	良好	灰黄	赤彩	
202	SD19B	鉢	14.9	5.1	(3.8)	1/4	C	普通	灰白	丸底、内外面風化、水簸粘土	
203	SD19B	鉢	10.4	[5.0]		4/5	A	良好	にぶい黄橙		57-8
204	SD19B	小型鉢	(9.2)	3.9	3.6	口縁部1/4	C	普通	にぶい橙	外面風化、水簸粘土	
205	SD19B	ミニチュア		[3.8]		口縁部欠損	A	良好	にぶい橙	外面胴部風化	
206	SD19B	ミニチュア	6.6	3.0	4.5	ほぼ完形	A	良好	灰黄	輪づみによる成形、口縁部指頭痕	58-1
207	SD19B	ミニチュア	7.0	3.1	3.4	底部完形	A	不良	にぶい橙	平底、内外面風化	58-2

第18表 溝跡出土遺物観察表5 (第99～115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
208	SD19B	ミニチュア	5.6	3.7	3.4	4/5	A	良好	灰黄	赤彩、輪づみにより成形	58-3
209	SD19D	壺	30.2	[10.0]		口縁部破片	A	良好	にぶい黄橙	ボタン状貼付文、刻み目を持つ突帯文	
210	SD19D	壺	16.5	[5.8]		口縁部1/2	A	普通	にぶい橙	赤彩、外面風化	
211	D19D	壺	(20.9)	[6.5]		口縁部1/2	A	良好	橙		58-4
212	SD19D	壺		[7.6]	7.9	胴～底部	A	良好	灰褐	内面風化	
213	SD19D	壺	22.3	[4.9]		口縁部破片	A	良好	褐灰		
214	SD19D	壺				胴部破片	A	良好	にぶい赤褐	赤彩	
215	SD19D	壺		[2.8]	8.8	底部3/4	E	普通	にぶい橙	大廓、風化	
216	SD19D	壺		[4.5]	8.8	底部ほぼ完形	A	良好	暗灰黄		
217	SD19D	壺		[3.8]	7.6	底部完形	A	良好	明赤褐		
218	SD19D	壺		[2.2]	5.0	底部完形	A	良好	にぶい黄褐	带状に煤	
219	SD19D	壺		[2.8]	7.2	底部完形	D	普通	褐灰	内面へラ工具痕	
220	SD19D	壺		[2.7]	8.4	底部完形	A	良好	にぶい褐	底部細かい繊維状の刷毛痕	
221	SD19D	壺		[3.0]	7.8	底部完形	A	良好	にぶい橙		
222	SD19D	壺		[2.5]	7.9	底部完形	D	不良	浅黄橙	内面風化	
223	SD19D	壺		[2.8]	5.5	底部完形	A	良好	にぶい黄褐	赤彩	
224	SD19D	台付甕	(20.4)	[25.3]		口縁～胴部	A	普通	橙	内面風化	
225	SD19D	台付甕	(13.1)	14.0	(7.2)	1/3	A	普通	橙		58-5
226	SD19D	壺	(16.1)	[5.4]		口縁部1/5	A	普通	にぶい橙		
227	SD19D	甕	(17.1)	[7.6]		口縁部1/2	A	普通	褐灰		
228	SD19D	台付甕		[7.6]	(11.7)	脚部1/3	A	良好	にぶい黄橙		
229	SD19D	台付甕		[7.8]	9.8	脚部完形	A	良好	にぶい黄橙		58-6
230	SD19D	台付甕		[6.8]	(9.1)	脚部1/4	A	良好	橙		
231	SD19D	台付甕		[5.9]	9.2	脚部1/3	A	良好	橙		
232	SD19D	台付甕		[5.9]	(7.3)	脚部1/3	A	普通	にぶい橙		
233	SD19D	台付甕		[5.4]	7.9	脚部完形	A	普通	橙		58-7
234	SD19D	台付甕		[6.0]	7.7	脚部2/3	A	普通	褐灰		
235	SD19D	台付甕		[5.3]	8.7	脚部1/2	A	良好	にぶい橙	煤	
236	SD19D	台付甕		[4.8]	7.5	脚部ほぼ完形	A	普通	にぶい黄橙		58-8
237	SD19D	小型壺	(8.0)	[5.0]		口縁～胴部	A	普通	灰黄	内面胴部指頭圧痕	
238	SD19D	小型壺		[10.9]	4.3	胴～底部	A	普通	灰白	赤彩、内外面風化	59-1
239	SD19D	小型壺		[5.0]	5.2	体～底部1/4	C	普通	橙	内外面風化、水簸した胎土	
240	SD19D	小型壺		[2.0]		底部1/2	A	良好	にぶい橙	外面に別個体の土器片付着、赤彩	
241	SD19D	小型壺		[2.8]	4.0	底部3/4	A	普通	褐灰	赤彩	
242	SD19D	高坏	(17.7)	12.3	(12.6)	2/3	A	普通	橙	透孔3、風化	59-2
243	SD19D	高坏	(14.0)	7.6	9.2	脚部完形	D	普通	にぶい黄橙	未穿孔1、接合部に刷毛目痕	59-3
244	SD19D	高坏	21.0	[6.3]		坏部2/3	D	良好	にぶい褐		59-4
245	SD19D	高坏	14.8	[4.1]		坏部1/4	A	普通	明赤褐	赤彩、内面風化	
246	SD19D	高坏		[6.4]	11.5	脚部2/3	A	良好	にぶい橙		
247	SD19D	高坏		[5.7]	11.0	脚部1/3	A	良好	橙	赤彩	
248	SD19D	高坏		[5.3]	7.6	脚部	A	普通	にぶい橙		
249	SD19D	高坏		[7.0]	11.3	脚部ほぼ完形	D	普通	にぶい橙	赤彩、透孔3、脚部内面風化	
250	SD19D	高坏		[6.4]	10.0	脚部2/3	A	良好	にぶい橙	赤彩、透孔3	
251	SD19D	高坏		[4.2]		脚部	C	良好	浅黄橙	赤彩、透孔3、水簸粘土	
252	SD19D	器台	7.8	[4.0]		受～脚部	A	良好	灰褐	赤彩、透孔3	
253	SD19D	器台		[7.8]	14.2	脚部3/4	A	普通	にぶい橙	赤彩、透孔3、外面風化	
254	SD19D	器台	9.5	7.2	10.5	ほぼ完形	A	良好	にぶい橙	外面風化	59-5
255	SD19D	罎	14.4	[6.1]		口縁部1/4	A	良好	橙	赤彩、内外面風化	
256	SD19D	罎	255	[1.7]	3.4	底部完形	A	良好	にぶい褐色	赤彩	
257	SD19D	小型鉢	9.6	4.4	1	1/3	C	不良	にぶい赤橙	内外面風化、水簸粘土	
258	SD19D	鉢	(10.8)	4.9		口縁～胴部	A	良好	にぶい橙	赤彩	
259	SD19D	鉢	(9.2)	[3.9]		口縁～胴部	C	良好	橙	赤彩、風化	
260	SD19D	小型鉢	(10.1)	5.7	2.7	1/4	A	普通	にぶい橙	外面風化	59-6
261	SD19D	小型鉢	8.7	4.7	3.5	2/3	A	普通	にぶい黄橙		59-7

第19表 溝跡出土遺物観察表6 (第99～115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
262	SD19D	ミニチュア		[5.9]	4.0	胴～底部	A	良好	にぶい橙	赤彩、内面体部上半指頭痕	59-8
263	SD19D	ミニチュア		[5.1]	3.7	胴～底部	A	良好	橙	外面接合部分粘土紐凸凹あり。内面指頭ナデ	60-1
264	SD19D	ミニチュア		[3.5]	4.0	胴～底部	A	良好	橙	内面前面に鉄分のような付着物有	
265	SD19D	ミニチュア		[4.4]	3.6	1/3	A	良好	浅黄橙		
266	SD19D	ミニチュア		[3.8]	3.1	胴～底部	D	良好	にぶい橙	赤彩	
267	SD19D	ミニチュア		[2.2]	3.7	底部完形	A	普通	にぶい黄橙		
268	SD19D	ミニチュア	(8.5)	[2.7]		底部2/3	C	不良	にぶい橙	風化、水簸した胎土	
269	SD19C	台付甕	(26.6)	30.0	12.1	口縁～胴部	A	普通	浅黄橙	内外面風化	60-2
270	SD19C	壺		[1.4]	7.9	底部完形	A	良好	橙		
271	SD19C	台付甕		[6.8]	(10.0)	脚部1/3	A	良好	橙		
272	SD19C	S字甕	(13.8)	[3.5]		口縁部1/4	D	良好	橙		
273	SD19C	器台	(7.0)	[6.7]		受～脚部	A	良好	にぶい橙	赤彩	
274	SD20	壺	(16.8)	[13.0]		口縁～胴部	A	良好	橙	内面肩部指頭痕、接合痕が明瞭に残る	60-3
275	SD20	壺	(13.6)	[8.4]		口縁～胴部	E	普通	褐灰	大廓式、外面風化、外面指頭痕	60-4
276	SD20	壺	15.1	[6.9]		口縁部完形	A	良好	にぶい褐色		60-5
277	SD20	壺	17.2	[7.6]		口縁～胴部	A	普通	にぶい黄橙	外面風化、内面胴部指頭痕	60-6
278	SD20	壺		[15.6]	(8.0)	底部1/2	G	良好	にぶい黄橙	軟質だが表面滑らか	
279	SD20	壺		[13.7]	5.8	胴～底部	C	普通	浅黄橙	外面風化、水簸粘土	
280	SD20	壺		[7.4]	(4.0)	胴下部	A	良好	浅黄橙	赤彩、底部輪台状	61-1
281	SD20	壺		[10.8]	9.0	底部完形	A	良好	橙	外面胴部下半風化	
282	SD20	壺		[2.7]	6.3	底部完形	A	良好	にぶい黄橙	木葉痕、内面風化	
283	SD20	壺		[3.6]	6.7	底部	A	良好	にぶい橙	外面胴部ヘラ状工具による刻み、全体的風化	
284	SD20	壺		[11.8]		胴部	A	良好	にぶい黄橙		
285	SD20	壺		[3.2]	4.7	底部完形	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	
286	SD20	壺		[2.4]	10.0	底部完形	A	良好	灰黄褐		
287	SD20	壺		[3.2]	8.0	底部完形	A	良好	にぶい黄橙		
288	SD20	壺				胴部破片	E	良好	灰白	大廓式、赤彩	
289	SD20	壺				胴部破片	E	良好	浅黄橙	大廓式	
290	SD20	台付甕	20.0	[28.6]		2/3	A	良好	黒褐	煤	61-2
291	SD20	甕	(17.0)	[10.1]		口縁部1/2	D	良好	黒褐	煤	61-3
292	SD20	台付甕	20.5	[20.6]		3/4	A	普通	にぶい黄褐	煤	61-4
293	SD20	甕	(16.8)	[22.9]		1/2	A	普通	にぶい赤褐	やや無骨、全体的に粗い調整、胎土は緻密で堅緻	61-5
294	SD20	台付甕	15.2	[18.8]		口縁～胴部	A	良好	褐灰	内面酸化鉄分付着、煤	61-6
295	SD20	甕	11.7	[4.8]		口縁部3/4	D	良好	にぶい黄橙		
296	SD20	台付甕	15.3	[23.5]	(8.9)	3/4	E'	良好	にぶい黄橙		62-1
297	SD20	台付甕		[16.4]	10.8	胴～脚部	A	良好	にぶい褐	煤	62-2
298	SD20	台付甕		[8.7]	8.4	脚部完形	A	良好	灰褐	内面裾部爪跡か?	62-3
299	SD20	台付甕		[9.0]	(12.0)	脚部	A	良好	灰黄褐		
300	SD20	台付甕		[8.3]	12.2	脚部3/4	D	良好	にぶい橙	外面裾強いナデ沈線状に凹む	62-4
301	SD20	台付甕		[6.1]	10.0	脚部4/5	A	良好	にぶい橙	内面裾部粘土貼付	62-5
302	SD20	台付甕		[7.6]	12.4	脚部4/5	A	良好	にぶい橙		62-6
303	SD20	台付甕		[7.6]	10.5	脚部4/5	A	良好	橙	外面接合部粘土貼付	63-1
304	SD20	台付甕		[6.8]	(10.4)	脚部1/3	F	良好	灰黄褐	外面接合部粘土貼付	
305	SD20	台付甕		[8.5]	11.7	脚部完形	A	良好	褐灰		63-2
306	SD20	台付甕		[6.7]	10.8	脚部1/3	A	良好	灰黄褐		
307	SD20	台付甕		[4.4]	(11.0)	脚部1/3	A	良好	褐灰		
308	SD20	台付甕		[6.2]	9.8	脚部完形	A	良好	橙	外面風化	63-3
309	SD20	台付甕		[5.4]	7.6	脚部2/3	A	良好	灰黄褐		
310	SD20	台付甕		[5.5]	7.3	脚部	A	普通	橙	軟質、外面風化	
311	SD20	台付甕		[5.3]	6.9	脚部2/3	D	良好	灰黄褐		63-4
312	SD20	平底甕	17.0	[21.6]		2/3	A	良好	にぶい橙	煤	63-5

第20表 溝跡出土遺物観察表7 (第99～115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
313	SD20	平底甕	16.6	23.4	5.9	4/5	A	普通	橙	全体的に無骨胎土は緻密で堅緻粗い調整	63-6
314	SD20	平底甕	(16.7)	16.5	7.3	2/5	A	良好	にぶい黄橙		64-1
315	SD20	甕	18.7	[9.1]		口縁部完形	A	良好	橙		64-2
316	SD20	台付甕	(18.8)	[20.1]		2/5	D	良好	灰黄褐		64-3
317	SD20	S字甕	13.0	[14.5]		口縁部完形	F	良好	にぶい黄橙	内外面胴部下半風化、内面胴部指頭痕	64-4
318	SD20	S字甕	(13.7)	[3.7]		口縁部1/5	E'	普通	黄灰	内外面風化	
319	SD20	S字甕		[7.2]	(9.5)	脚部60%	A	良好	褐灰	内面脚部天井部付近砂粒密集	64-5
320	SD20	S字甕		[7.1]	7.5	脚部	A	良好	灰白	軟質、在地模倣か?	
321	SD20	S字甕		[4.3]	(8.9)	脚部1/4	A	良好	褐灰	軟質、内面脚部天井部砂粒が特に密集	
322	SD20	小型壺	10.0	15.2	3.3	完形	A	良好	灰白	赤彩、内面胴部実測できず	64-6
323	SD20	小型壺		[3.3]	(3.3)	胴～底部	D	良好	にぶい黄橙	赤彩、外面風化	
324	SD20	小型壺		[2.9]	4.0	底部	A	良好	にぶい橙	底部輪台状	
325	SD20	高坏	(11.5)	7.0	5.8	ほぼ完形	D	良好	淡黄	赤彩、内外面風化	65-1
326	SD20	高坏		[7.9]	(13.8)	脚部1/2	A	良好	橙		65-2
327	SD20	高坏		[6.4]	11.6	脚部	A	良好	にぶい橙	赤彩、裾部孔3	
328	SD20	高坏		[4.2]	(11.0)	脚部	A	良好	にぶい黄橙	赤彩、透孔3、外面風化	
329	SD20	高坏		[4.0]	6.5	脚部完形	A	良好	にぶい橙	全面風化	65-3
330	SD20	高坏		[6.2]	(8.7)	脚部	D	良好	浅黄橙	赤彩、外面風化	65-4
331	SD20	高坏		[8.8]		脚部	A	良好	にぶい橙	棒状脚	
332	SD20	高坏		[8.8]		脚部	C	良好	浅黄橙	外面風化	
333	SD20	器台	9.1	9.7	10.0	1/4	A	普通	にぶい黄橙	外面風化、内面脚部天井部指頭痕	65-5
334	SD20	器台	7.7	8.2	10.0	完形	F'	良好	灰黄褐		65-6
335	SD20	器台	7.3	7.7	(10.1)	2/3	C	良好	明褐灰	受部孔、裾部孔3、外面裾部、内面風化、水籤粘土	65-7
336	SD20	器台	8.4	[2.8]		受部完形	C	良好	にぶい橙	軟質、赤彩、受部孔、全体的風化、水籤粘土	65-8
337	SD20	器台	(6.9)	[5.0]		受部片	A	良好	にぶい橙	軟質、裾部孔有	
338	SD20	器台		[7.3]	11.2	脚部1/2	C	良好	にぶい橙	軟質、赤彩、煤状の付着物有、受部孔、裾部孔3、水籤粘土	
339	SD20	器台		[6.1]	11.5	脚部	D	良好	にぶい橙	赤彩、透孔有	
340	SD20	器台		[6.7]	10.6	脚部完形	D	良好	にぶい橙	硬質、接合部孔、裾部孔3	
341	SD20	台付鉢	9.0	13.4	(10.9)	2/3	A	良好	にぶい橙	裾部孔3	66-1
342	SD20	埴	(10.5)	[8.5]		口縁～胴部	D	良好	にぶい黄橙	赤彩	
343	SD20	埴	11.4	[6.3]		口縁部3/4	A	良好	明褐灰	赤彩	
344	SD20	埴	(10.3)	[4.0]		口縁部1/5	A	良好	にぶい橙	赤彩、全体的風化	
345	SD20	埴	(7.0)	[4.0]		口縁部	A	良好	明褐灰	赤彩、内面指頭痕	
346	SD20	埴		[4.1]	3.1	底部完形	A	良好	灰褐	硬質、赤彩、内外面風化	
347	SD21	壺	(22.8)	[6.0]		口縁部1/4	A	良好	にぶい黄橙		
348	SD21	壺	(13.9)	[4.8]		口縁部1/3	A	普通	橙	赤彩、風化	66-2
349	SD21	壺	(13.0)	[14.9]		口縁～胴部	H	良好	浅黄橙	内外面口縁部風化	66-3
350	SD21	壺	(14.8)	[8.0]		口縁部3/4	A	良好	橙	赤彩、外面風化	66-4
351	SD21	壺		[21.8]	7.4	胴部ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙		
352	SD21	壺		[9.7]		胴部	A	普通	橙	外面風化、内面肩部指ナデ	
353	SD21	壺		[16.5]		胴部2/5	A	良好	橙	赤彩	
354	SD21	壺		[10.8]	9.5	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙		
355	SD21	壺		[1.8]	4.2	底部完形	A	普通	橙		
356	SD21	壺		[3.4]	5.7	胴～底部	A	普通	にぶい黄橙	外面風化	
357	SD21	壺		[3.5]	5.5	底部1/2	C	普通	浅黄橙	木葉痕	
358	SD21	壺		[9.8]	(9.6)	胴～底部	A	普通	明黄褐	内面風化	
359	SD21	壺		[7.4]	6.7	胴～底部	D	良好	にぶい黄橙		
360	SD21	壺		[4.8]	(8.0)	底部1/3	D	良好	にぶい黄橙		

第21表 溝跡出土遺物観察表8 (第99~115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
361	SD21	壺	28.2	[14.6]		口縁部	E	普通	にぶい橙	大廓式	66-5
362	SD21	甕	(21.4)	[5.5]		口縁部1/4	A	良好	灰黄褐	口縁端部風化	
363	SD21	甕	24.0	[6.9]		口縁部2/3	A	普通	橙	内面風化、口縁部貼付	66-6
364	SD21	甕	(14.8)	[9.3]		口縁~胴部	A	普通	にぶい黄橙		66-7
365	SD21	甕	(17.8)	[5.6]		口縁部1/6	G	普通	にぶい黄橙		
366	SD21	甕	(11.8)	[3.6]		口縁部1/4	A	良好	橙	内面口縁・外面胴部荒い刷毛目	
367	SD21	台付甕		[14.8]	8.8	胴~脚部	A	普通	灰黄褐		66-8
368	SD21	台付甕		[9.2]	11.8	脚部ほぼ完形	A	普通	明赤褐		67-1
369	SD21	台付甕		[7.6]	10.3	脚部3/4	A	良好	にぶい黄橙		67-2
370	SD21	台付甕		[6.5]	(9.6)	脚部1/2	A	普通	橙	外面風化、内面脚部指頭痕	
371	SD21	台付甕		[7.7]	10.0	脚部完形	B	普通	にぶい黄橙	煤	67-3
372	SD21	台付甕		[7.9]	(9.0)	脚部1/3	A	普通	橙		
373	SD21	台付甕		[7.5]	(7.6)	胴~脚部	A	良好	にぶい黄橙		
374	SD21	台付甕		[4.8]	(10.0)	脚部1/4	A	良好	にぶい黄橙		
375	SD21	台付甕		[5.1]	8.5	脚部完形	B	良好	にぶい褐		67-4
376	SD21	台付甕		[5.7]	8.2	脚部完形	A	普通	にぶい黄橙		67-5
377	SD21	台付甕		[5.7]	8.2	脚部ほぼ完形	A	普通	橙	脚部内面風化	67-6
378	SD21	台付甕		[5.0]	(8.2)	脚部1/2	C	普通	浅黄橙	外面風化	67-7
379	SD21	台付甕		[5.0]	6.6	脚部ほぼ完形	A	普通	橙	風化	67-8
380	SD21	平底甕	(15.8)	12.9	4.3	1/2	C	普通	浅黄橙		68-1
381	SD21	甌		[3.6]	4.7	底部完形	A	良好	にぶい橙	3孔(底部)	
382	SD21	高坏	19.1	[5.5]		坏部ほぼ完形	A	良好	明赤褐	赤彩	68-2
383	SD21	高坏		[8.4]	(11.2)	脚部2/3	A	良好	にぶい橙	透孔3、脚部内面上半指ナデ	68-3
384	SD21	高坏		[3.6]	(11.4)	脚部	C	普通	浅黄橙	風化	
385	SD21	高坏		[4.5]	(7.1)	脚部ほぼ完形	D	良好	にぶい黄橙	脚部内面天井部指ナデ、外面ミガキ	
386	SD21	高坏		[4.3]		脚部	A	良好	浅黄	透孔1、脚部内面刷毛ナデ	
387	SD21	高坏		[5.7]		坏~脚部	A	良好	にぶい黄橙	赤彩、透孔3、坏部内面丁寧なミガキ	
388	SD21	高坏		[5.5]		坏~脚部	A	良好	赤	赤彩、孔?	
389	SD21	器台	6.0	[6.2]		受~脚部	C	普通	にぶい橙	透孔2、風化	68-4
390	SD21	器台	7.0	[1.9]		受部1/2	C	普通	にぶい黄橙	風化	
391	SD21	埴	(19.3)	[10.4]		口縁部1/4	A	良好	橙	赤彩、全体的風化	
392	SD21	埴	(17.4)	[7.2]		口縁部1/3	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	
393	SD21	埴	11.3	[13.7]		口縁部3/4	D	良好	橙	赤彩、胴部内面指頭痕、口縁端部内面刷毛目痕	68-5
394	SD21	鉢	(17.3)	5.7	3.0	2/3	C	普通	にぶい黄橙	底部丁寧な作り、外面胴部風化	68-6
395	SD21	鉢	(13.8)	[6.4]		1/4	C	普通	浅黄橙	赤彩、風化	68-7
396	SD21	鉢	(12.0)	6.3	2.7	1/4	C	普通	浅黄橙	風化、底部丁寧な作り	
397	SD21	鉢	(9.8)	[4.2]		口縁~胴	A	良好	にぶい黄橙	内面体部木口状工具ナデ	
398	SD21	鉢		[3.4]	5.0	胴~底部	A	良好	にぶい黄橙		68-8
399	SD21	ミニチュア	4.0	5.5	2.7	ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙		69-1
400	SD21	ミニチュア		[4.8]	4.4	ほぼ完形	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	69-2
401	SD21	ミニチュア		[5.1]	2.8	胴~底部	A	普通	にぶい黄橙		
402	SD21	ミニチュア		[3.1]	3.6	胴~底部	A	普通	にぶい黄橙		69-3
403	SD21	ミニチュア		[2.6]	2.7	底部完形	C	普通	にぶい黄橙	外面指頭ナデ	69-4
404	SD22	台付甕		[6.7]	10.3	脚部4/5	A	普通	橙	外面風化	
405	SD22	台付甕		[6.5]	(8.3)	脚部2/5	A	良好	浅黄橙		
406	SD22	高坏		[8.1]	(12.0)	坏底部	A	良好	橙	軟質	
407	SD22	器台	6.9	[4.6]		受部2/3	A	普通	浅黄橙	孔なし、内面受部風化	
408	SD23	壺	29.5	[7.0]		口縁部	A	良好	灰黄	広口壺	
409	SD23	壺	(20.4)	[4.0]		口縁部1/3	A	良好	にぶい黄橙	口縁接合部ヘラ工具によるキズ	
410	SD23	壺	(14.8)	[4.9]		口縁部1/5	A	良好	にぶい橙	内面口縁・外面刷毛状工具痕	
411	SD23	壺		[18.9]	5.5	胴部1/2	D	良好	にぶい黄橙	赤彩、煤、外面胴部下半木口状工具痕	69-5
412	SD23	壺		[2.8]	8.7	底部完形	A	良好	にぶい黄橙		
413	SD23	壺		[3.4]	6.6	底部完形	A	良好	にぶい黄褐	内外面風化	

第22表 溝跡出土遺物観察表9 (第99～115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
414	SD23	壺		[2.2]	(4.8)	底部1/3	A	普通	にぶい褐	内外面風化	
415	SD23	壺		[2.1]	6.0	底部完形	A	良好	橙		
416	SD23	台付甕	16.8	[20.9]		口縁～胴部	B	良好	明褐	煤	69-6
417	SD23	台付甕	(17.9)	[27.1]		1/4	A	普通	橙	内外面風化	
418	SD23	甕	(13.7)	[7.2]		口縁部1/3	A	不良	橙	外面風化	
419	SD23	甕	(16.0)	[4.6]		口縁部1/4	A	不良	橙	煤、口縁部内外面上半風化	
420	SD23	甕	(17.4)	[5.8]		口縁部1/5	A	良好	黒褐		
421	SD23	甕	(19.6)	[3.8]		口縁部1/8	A	良好	にぶい黄橙		
422	SD23	台付甕		[6.5]	(11.4)	脚部1/2	A	普通	橙	外面・内面脚部下半風化、内面底部ヘラ状工具痕	
423	SD23	台付甕		[6.1]	(10.8)	脚部1/3	A	普通	にぶい黄橙	内面脚部上位指頭痕	
424	SD23	台付甕		[6.6]	(10.2)	脚部1/4	D	普通	にぶい橙	脚部外面風化	
425	SD23	台付甕		[6.4]	9.2	脚部1/2	A	普通	にぶい黄橙	内面脚部下半ヨコナデ後指ナデ	
426	SD23	台付甕		[5.7]	(8.9)	脚部1/2	A	良好	にぶい黄橙		
427	SD23	台付甕		[5.0]	8.8	脚部2/3	D	良好	にぶい黄橙	内面接合面指頭痕	
428	SD23	台付甕		[6.0]	7.4	脚部ほぼ完形	B	良好	明赤褐色		
429	SD23	台付甕		[5.3]		接合部	D	普通	橙	内外面風化	
430	SD23	台付甕		[5.8]		脚部2/3	A	良好	明赤褐		
431	SD23	台付甕		[5.3]		脚部1/2	D	やや不良	明赤褐	外面風化	
432	SD23	S字甕		[3.4]		接合部	F	良好	灰白	内面底部ヘラ状工具痕	
433	SD23	S字甕	(15.7)	[22.3]		口縁～胴部	B	良好	灰黄褐	胴部下半内面風化	
434	SD23									433と同一個体	
435	SD23	S字甕	(14.8)	[5.3]		1/2	H	良好	灰白	軟質、内面胴部指頭痕	69-7
436	SD23	S字甕		[7.7]	10.7	脚部1/2	D	良好	にぶい黄橙	脚部内面天井部に粘土貼付指ナデ	
437	SD23	S字甕		[6.9]	(9.4)	脚部1/3	A	良好	にぶい黄橙		
438	SD23	小型壺	13.5	[16.5]	4.8	3/4	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	69-8
439	SD23	小型壺	(8.9)	[4.6]		口縁～胴部	A	普通	にぶい黄橙	外面風化、胴部内面ナデの後指頭痕	
440	SD23	小型壺		[8.5]	4.0	胴～底部	A	普通	にぶい黄橙	胴部内面上位指頭痕	
441	SD23	甌	(14.2)	[6.0]		口縁部1/3	A	良好	にぶい黄褐	外面胴部刷毛状工具による強いナデ	
442	SD23	甌	15.0	[5.5]		坏部ほぼ完形	A	不良	橙	赤彩、内外面風化、内面ヘラ工具痕	70-1
443	SD23	高坏		[8.1]	(10.2)	坏～脚部	A	普通	にぶい橙	透孔3、赤彩、外面風化	
444	SD23	高坏		[1.9]	4.0	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙	外面刷毛状工具による強いナデ	
445	SD23	高坏		[4.0]	(6.8)	脚部3/4	C	普通	浅黄橙	内外面風化、水籤した胎土	
446	SD23	高坏		[6.0]		坏～脚部	A	普通	橙	透孔4、煤、外面風化	
447	SD23	高坏		[5.1]		脚部1/3	A	良好	にぶい褐	透孔4	
448	SD23	高坏		[4.6]		脚部2/3	A	良好	褐灰		
449	SD23	高坏		[9.5]		脚部1/3	A	良好	浅黄橙	赤彩、外面風化	
450	SD23	高坏		[8.0]		脚部	A	良好	明赤褐	内面坏部刷毛状工具によるナデ	
451	SD23	高坏		[7.3]		脚部1/3	A	良好	明赤褐	赤彩	
452	SD23	器台	7.0	[7.4]	11.5	3/4	A	良好	にぶい黄橙	赤彩	70-2
453	SD23	器台	7.7	[6.8]	(11.1)	脚部欠	A	普通	にぶい橙	透孔3	
454	SD23	器台	7.6	[4.8]		受～脚部	A	普通	浅黄橙	透孔3、赤彩	
455	SD23	器台		[6.5]	(9.9)	脚部1/4	A	普通	にぶい黄橙	透孔3、赤彩痕、外面風化	
456	SD23	柑		[13.0]		口縁～胴部	D	普通	にぶい黄橙	赤彩、内外面風化、内面肩部指頭痕	70-3
457	SD23	柑		[6.3]		胴部2/3	C	普通	浅黄橙	赤彩、水籤した胎土	
458	SD23	鉢	(11.5)	[6.7]	2.8	1/3	D	良好	にぶい黄橙		70-4
459	SD23	鉢		[6.2]	(6.0)	1/6	B	良好	赤褐	赤彩	
460	SD23	鉢	(13.2)	[4.2]		口縁～胴部	A	普通	にぶい黄橙		
461	SD23	鉢	(15.0)	[6.0]	3.2	2/3	A	良好	橙		70-5
462	SD23	柑	(10.9)	[5.3]		口縁～胴部	C	不良	にぶい黄橙	内外面風化、水籤した胎土	
463	SD23	鉢	(9.4)	[5.2]	2.4	1/3	C	普通	橙	内外面風化、外面口縁～底部黒斑有水籤胎土	
464	SD23	ミニチュア		[4.7]	3.1	1/2	C	不良	にぶい黄橙	内面指ナデ、水籤した胎土	
465	SD23	ミニチュア		[1.7]	(4.8)	底部1/2	D	良好	橙	内面凹凸が著しい、内面指頭痕	
466	SD24	ミニチュア		[5.0]	3.3	胴部2/5	A	良好	にぶい橙	内面指頭痕	

第23表 溝跡出土遺物観察表10 (第99～115図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
467	SD25	壺		[12.3]	9.6	胴～底部	A	普通	浅黄橙	内外面風化	
468	SD25	壺		[2.1]	(5.1)	底部1/4	A	普通	明赤褐	底部内面剥離著しい(2次被熱)	
469	SD25	台付甕		[6.9]	(10.2)	脚部1/4	A	普通	明赤褐		
470	SD25	台付甕		[4.6]	(9.6)	胴部1/4	A	良好	橙	煤	
471	SD26	S字甕		[3.9]	(10.0)	脚部	A	良好	浅黄	底径は推定	
472	SD26	鉢	(11.8)	[6.6]		口縁～胴部	C	不良		内外面風化、水籤粘土	
473	SD27	壺		[10.0]	10.0	底部	A	良好	にぶい褐	474と同一個体	
474	SD27	壺	(17.2)	[26.2]		口縁部ほぼ完形	A	良好	にぶい褐	473と同一個体、口縁と胴部の境に円形浮文2個単位	
475	SD27	壺	(17.2)	[7.4]		口縁部1/2	G	普通	橙	内外面風化	70-6
476	SD27	壺		[2.2]	7.4	底部完形	A	良好	灰白	赤彩、底部輪台状	
477	SD27	壺				胴部	A	良好	橙	赤彩、外面拓本、肩部凹線+円形浮文・波状文(2個1組)	
478	SD27	壺				胴部破片	D	良好	橙	外面拓本、沈線(3条)+ボタン状貼付文(2つ)	
479	SD27	壺				胴部破片	D	良好	橙	外面拓本、沈線(2条)+ボタン状貼付文(2つ)+波状文、波状文+列点文	
480	SD27	甌		[4.2]	(2.7)	底部1/4	A	良好	にぶい黄橙	孔は焼成前穿孔	
481	SD27	甌		[4.6]	5.2	底部3/4	A	良好	にぶい橙	孔は焼成前穿孔	
482	SD27	台付甕		[6.7]		脚部3/4	A	良好	にぶい橙	内外面風化	
483	SD27	台付甕		[6.2]	7.8	脚部完形	A	良好	にぶい褐	歪み大きい	
484	SD27	台付甕		[4.9]	7.9	脚部	G	普通	にぶい橙	水籤粘土	
485	SD27	台付甕		[5.3]	7.2	脚部	A	普通	にぶい赤褐	全体的風化	
486	SD27	台付甕		[6.7]		脚部	A	普通	にぶい赤褐		
487	SD28	高坏		[6.7]		脚部	A	普通	にぶい橙	3孔、風化	
488	SD30	壺	12.0	[18.0]		1/3	A	良好	にぶい黄橙	口縁薄く粘土帯貼付、外面風化	
489	SD30	壺	(23.8)	[4.6]		口縁部破片	D	良好	にぶい橙	口縁部にヘラ状工具による傷	
490	SD30	壺		[2.0]	8.0	底部2/5	A	普通	黒	内面風化	
491	SD30	台付甕		[8.4]	8.6	脚部完形	B	良好	にぶい橙	接合法不明	70-7
492	SD30	台付甕		[3.7]		脚部	A	良好	橙		
493	SD30	鉢		[3.5]	3.5	底部完形	B	良好	黒褐	内面風化	
494	SD30	ミニチュア	(6.8)	7.4	3.0	胴部完形	A	良好	橙	外面風化、外面ヘラ状工具痕	70-8
495	SD30	ミニチュア	4.0	[2.3]	3.0	70%	C	普通	灰白	手づくね、風化、水籤粘土	
496	SD37	壺		[6.8]		口辺部1/2	D	普通	浅黄橙	外面風化	
497	SD37	壺		[9.1]	(9.2)	底部1/2	D	良好	黒褐	底部木葉痕	
498	SD37	壺		[7.7]	(4.6)	胴部～底部2/3	A	普通	明黄褐		71-1
499	SD37	甕	(14.6)	[7.3]		口縁部1/5	A	普通	にぶい橙	器面風化	
500	SD37	甕	(19.3)	[4.4]		口縁破片	A	普通	明赤褐	内外面風化	
501	SD37	台付甕		[11.9]		胴部	A	普通	橙		
502	SD37	甕				口縁破片	B	良好	橙		
503	SD37	台付甕		[5.6]	10.2	脚部	A	普通	橙	器面風化著しい	71-2
504	SD37	小型壺		[5.7]	3.7	底部完形	A	普通	橙	内外面風化	
505	SD37	台付甕		[5.9]	9.4	脚部	A	普通	褐		71-3
506	SD37	埴	(12.0)	[7.8]		口縁部1/4	B	普通	橙	内外面風化	
507	SD41	須恵器甕				胴部破片	D	良好	暗灰	南比企産	
508	SD43	高坏		[5.5]		脚部	A	普通	橙	器面風化	
509	SD49	高坏	(10.4)	[3.0]		器部1/3	A	普通	明褐灰	全面風化	
510	SD49	ミニチュア		3.9	4.0	3/4	A	普通	橙		70-4

0.04 mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方へ立ち上がっていた。

近接して、主軸方向が直交するように、第37号溝跡がある。両者は幅・深さが似ており、L字型に曲がる周溝遺構の溝の一部であった可能性もあるが、明らかにできなかった。

遺物は古墳時代の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第43号溝跡 (第92・93・94・95・115図)

F区O-5、P・Q-4グリッドで検出した。

第7・38号溝跡と重複していた。第7号溝跡を壊し、第38号溝跡に壊されていた。南側を攪乱に壊されていた。

規模は、検出長15.10 m、幅0.27～0.56 m、深さ0.06～0.20 mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方へ立ち上がっていた。

遺物は、高坏脚部が出土した (第115図508)。

第46号溝跡 (第97図)

F区Q-3、R-3・4、S-4グリッドで検出した。

第52号土壇と重複していた。第52号土壇に壊されていた。

規模は、検出長9.10 m、幅0.20～0.35 m、深さ0.10 mであった。

遺物は出土しなかった。

第47号溝跡 (第98図)

F区T-3グリッドで検出した。南側は調査区外に延びていた。

規模は、長さ1.18 m、幅0.45～0.55 m、深さ0.13 mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は垂直に立ち上がっていた。断面の形状が箱型の溝である。

遺物は出土しなかった。

第48号溝跡 (第94図)

F区Q-3・4グリッドで検出した。

第51号土壇と重複していた。第51号土壇に壊されていた。東側を攪乱に壊されていた。

規模は、検出長4.84 m、幅0.22～0.36 m、深さ0.08 mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がっていた。

遺物は出土しなかった。

第49号溝跡 (第88・92・93・115図)

F区M-6、N-6・7グリッドで検出した。

第33号溝跡と重複していた。第33号溝跡に壊されていた。北側は調査区外に延びていた。

規模は、検出長16.00 m、幅0.70～1.10 m、深さ0.42～0.54 mであった。

底面は概ね平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がっていた。

遺物は、高坏・ミニチュア土器がある (第115図509・510)。

第50号溝跡 (第94・95図)

F区P-5・6、Q-5・6グリッドで検出した。当初、溝跡が方形に溝が巡るため、周溝遺構 (SR6) として調査をおこなった。

しかし、整理段階で、近現代の遺物が含まれていたことが明らかとなったため、溝跡とした。

遺構は、第7号溝跡、第48・53号土壇と重複していた。第7号溝跡を壊し、第48・53号土壇に壊されていた。

規模は、検出長21.00 m、幅0.85～2.10 m、深さ0.80 mであった。

底面は概ね平坦で、断面の形状は逆台形であった。

遺物は、近現代の陶磁器が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第21号溝跡出土鶏形土製品（第116図）

第21号溝跡および溝跡と同じグリッドから、2点の鳥形土製品が出土した。顔の特徴から「鶏」と考えられ、1点は鶏の頭部で、もう一点は、羽部と考えられる破片である。

2点の報告については、第21号溝跡、グリッド出土遺物の項でそれぞれ述べるべきであるが、関連する遺物と考えられたため、合わせて報告する。

なお、鶏形土製品については、巻頭図版9にカラー図版を掲載した。

1 頭部（第116図1、巻頭図版9）

1は、第21号溝跡から出土した。第5号周溝遺構と接する部分で、溝跡がL字型に折れ、底面が一段高くなった地点の覆土中から出土した。

「鶏」の頭部と考えられる。鶏冠（とさか）・肉髯の痕跡の存在から、鶏と判断した。

頭部以下を欠損していたため、全体の形状は明らかでなく、土製品であったのか、容器であったのかは不明である。

器形の特徴は、中空の埴輪状となっており、粘土紐の輪積によって頭部下部を成形し、頭頂部で蓋をするように積み上げている。大きさは、幅4.5cm、奥行5.4cm、高さ4.9cmであった。

頭部左右の側面と、後頭部に膨らみをもっている。嘴の表現は認められないが、口に相当する部分には、径5mmの円孔が穿たれ、この部分がやや前方に張り出している。

目は、竹管の刺突によって表現されているが、両目とも真正面を向いており、本来の鶏の姿からは、ややデフォルメされた形となっている。

鶏冠（とさか）は口部分から、後頭部にかけて、立体的に表現されている。鶏冠頂部は風化もしくは摩滅によって、失われている。

また、頭部正面には、口の両脇から頭部下部にかけて、肉髯と考えられる痕跡が認められた。この部分は、異なる粘土を貼り付けていたと考えら

れるが、剥落していた。

表面の調整は刷毛目調整であるが、鶏冠側面の両脇は細かい刷毛目、両側面・後頭部は粗い刷毛目が施されていた。

また、肉髯の剥落部分以外は、赤彩されており、本来は、頭部全面に赤彩されていたと考えられる。

2 羽部（第116図2、巻頭図版9）

2は、第21号溝跡と同じグリッドから出土した。

1とは接合しなかったが、胎土・刷毛の表現方法・赤彩の有無等の特徴から、同一個体であった可能性がある。

当初は、形状から、「足」も想定したが、刷毛による羽毛と考えられる表現から、羽部分と判断した。手羽・尾羽等の具体的な部位については明らかにできなかった。

大きさは、長さ（最大長）5.4cm、幅2.7cm、高さ3.1cmであった。

部位が明らかにできなかったため、第116図2の実測図は、机上に置いた時、最も安定する部分を下面とし、上面、左右の側面を実測した。

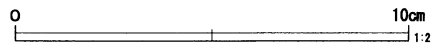
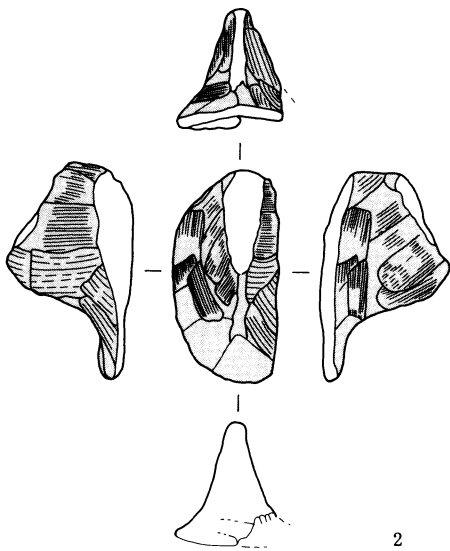
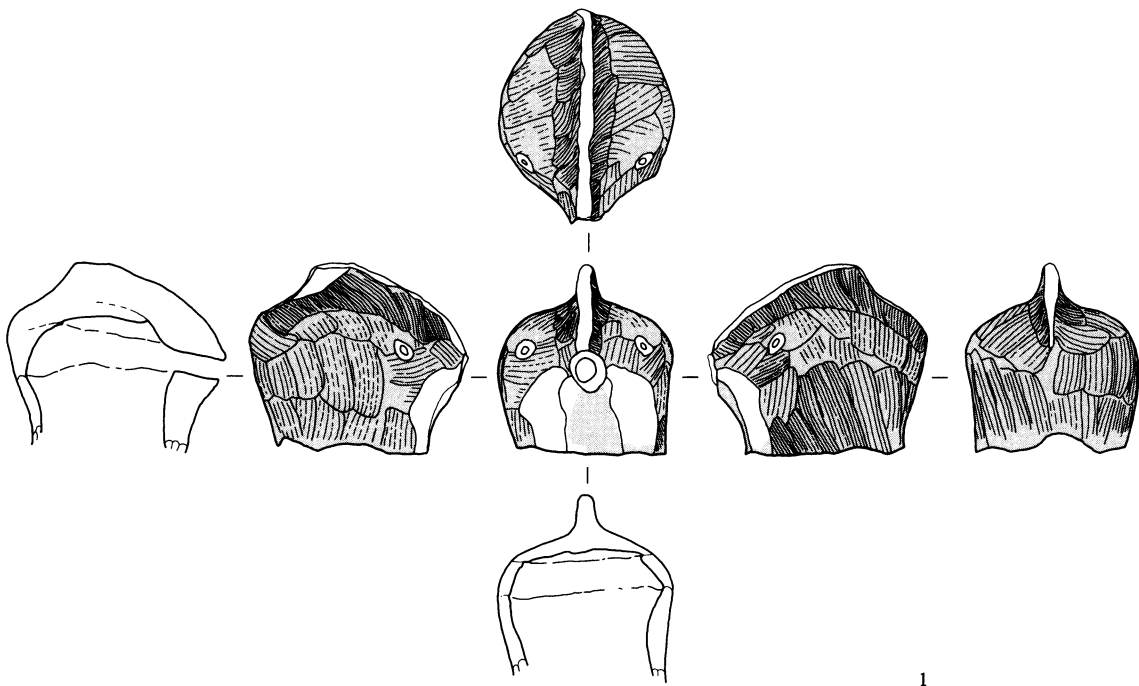
完形品ではなく、上面の突端部分・下面の一部は欠損していた。

下面以外の全面に赤彩が認められ、赤彩のない下面は胴部と接合していたと考えられる。

左右の側面は刷毛目が施されるが、右側面は粗い刷毛目、左側面はナデ状の刷毛目で、刷毛目を羽毛の表現とすると、右側面の刷毛目がやや明瞭に表現されていることになり、表・裏があるように観察できる。

仮に右側面を表とした鳥の羽部とすると、胴部から水平に羽を広げた形に復元できる。

しかし、弥生時代以降、各地で出土する水鳥あるいは鶏を表現した鳥形土製品に、羽を立体的に表現した例は現状では見出せず、今後の類例の増加を待ちたい。



第116図 第21号溝跡出土遺物

第24表 第21号溝跡出土遺物観察表 (第116図)

No.	遺構	器種	法量 (cm)	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SD21	鳥形土製品	幅4.5 奥行5.4 高さ[4.9]	頭部	A	良好	にぶい黄橙	目の表面竹管状工具	巻頭
2	G5	鳥形土製品	幅2.7 長さ5.4 高さ[3.1]		A	良好	にぶい黄橙		図版9

7. 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第117～119図）

第1号性格不明遺構は、B区G・H-5グリッドで検出した。

第21号溝跡の東側のB区谷部で検出した。第2号溝跡の上部を覆うように検出した。このため、第2号溝跡より新しい遺構と考えられる。

土器が集中して出土したため、A区谷部土器集中区と同様に、遺構外の土器集中地点としていたが、A区と異なり、焼土および炭化物の広がりを検出したため、遺構と判断した。掘り込みがなく、遺構の性格について明らかにできなかったため、第1号性格不明遺構（SX1）と呼称した。

遺構は、第21号溝跡東側の、B区谷部を遺構確認作業中に検出した。

谷部基本層序（第6図）IX層中から土器片が多量に出土した。

遺物および炭化物・焼土粒子が、長さ4.1m、幅3.75mの範囲で方形に分布していた。このため、当初は竪穴住居跡を想定しながら調査を実施したが、掘り込みは検出できなかった。

また、遺物出土地点の直下で、IX層の灰色粘土が燃焼し、やや赤色硬化した範囲と、薄い炭層を検出した。

炭層は、数ミリという極めて薄い層で、径1.5mの範囲で、直下の赤色硬化面と重なるように検出した。炭化物は、粒子の形状が確認できないほどの微粒子で、粘性のある灰状となっていた。

赤色硬化範囲は、南北2.9m、東西2.5mの範囲で、L字型に検出した。炭層の直下で検出したが、概ね平坦な面を形成し、硬化範囲の周辺も平坦であったが、掘り込みは検出できなかった。

赤色硬化面周辺に、柱穴等の付属施設は検出できなかった。

遺物は、古墳時代前期の土師器が、炭・硬化範囲および周囲の平坦面直上で出土したが、土器表面に二次的な焼成の痕跡は認められなかった。

出土遺物は、壺・甕・S字状口縁台付甕・高坏・小型壺・鉢・ミニチュアが出土した。図示可能な遺物は35点であった。（第119図1～35）

1～2は壺である。2点とも口縁部の破片である。

1は頸部が直立気味に立ち上がる二重口縁壺であるが、口縁部の稜が弱い。端部は大きく外反する。

2は厚手で、口縁部の外反は小さい。口縁端部に厚めの粘土帯を貼り付け、肥厚させている。

3～17は甕である。全体の器形が復元できる資料はなかった。3～9は口縁部、10～17は、台付甕の脚部である。

3は口縁部が直立気味に立ち上がる。外面は、口縁部は刷毛目の後横ナデ、胴部は刷毛目。内面は横ナデされていた。

4は口径が29cmとなる大型の甕である。口縁部に最大径がある。全体的に風化し、調整が不明瞭であったが、外面頸部付近に刷毛目の痕跡、内面胴部にヘラナデの痕跡が認められた。

5は口縁部の屈曲が強い。外面口縁部は、上部が強いナデにより、端部が小さく外反していた。

6は小型の台付甕である。口縁部の屈曲は弱く、肩部の張りはない。

7はやや内湾気味に立ち上がる口縁部である。肩部の張りはなく、長胴となる可能性もある。

8は口縁部が大きく外反する。口縁端部は、強いナデによる面を有する。

9は直立気味に立ち上がる口縁部である。口縁部は大きく歪み、また、風化も著しく、調整は不明瞭であった。

10～17は台付甕の脚部である。3～9の脚部が含まれる可能性もあったが、接合せず、明らかにできなかった。

胴部との接合方法は、すべて脚部の輪台状に、

胴部の凸部をはめ込む接合方法である。

15は胎土が水簸したような粘土で、脚部が細く、高い。台付甕以外の器種の可能性もある。

18～20はS字状口縁台付甕である。18・19は口縁部、20は脚部である。

18は全体的に厚く、口縁部の段は弱く、丸味をもっている。在地模倣と考えられる。

19は18よりもややシャープであるが、口縁部は厚く、上部が短く立ち上がる。

20は脚部の破片である。脚部は台状に成形し、胴部と接合している。脚部内面は折り返され、指押さえの痕跡が認められた。

21～26は高坏である。接合部付近と、脚部の破片で、全体の器形を復元できる資料はなかった。

21・22は坏部底部の破片である。脚部を欠損していたが、脚部の接合部から剥落していた。接

合部径が3.0 cm以下と小さく、小型の高坏か、柱状脚の高坏となると思われる。

23～26は高坏脚部である。23・24は大型の高坏、25・26は小型の高坏と考えられる。

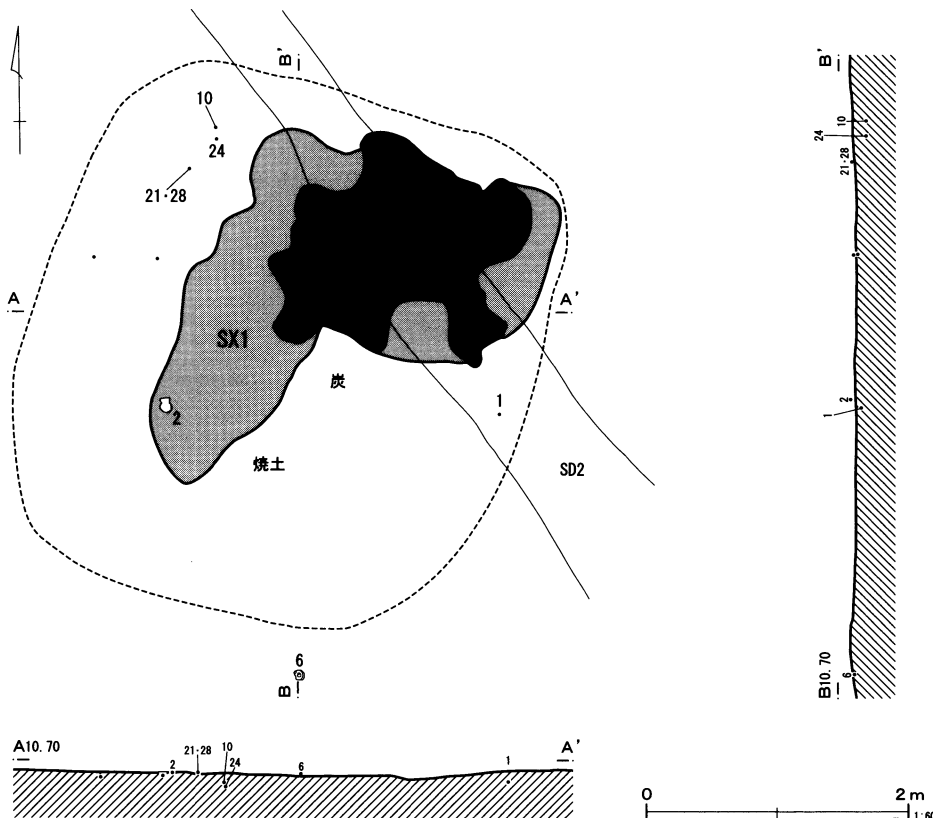
23・24は接合部付近を円柱状に成形しており、坏部の円孔に差し込んで接合していたと考えられる。25・26は台付甕と同様、坏部底部に凸部を作り、脚部の凹部にはめ込む接合方法と考えられる。

27・28は小型壺である。28は完形であった。27は、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。

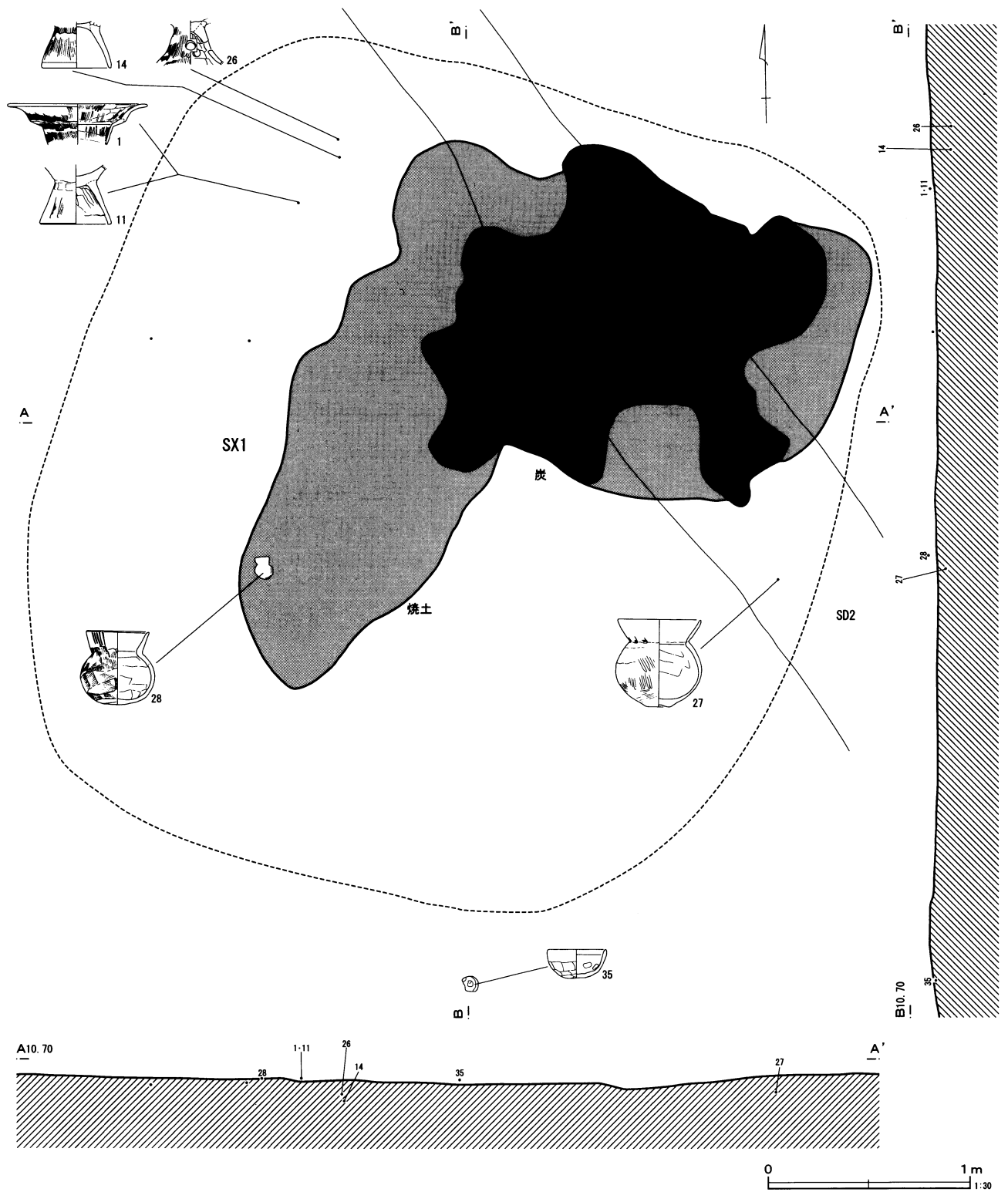
31～33は小型の鉢である。丸底ではなく、底部は上げ底風となっていた。31・33は口縁部が内湾気味に立ち上がり、32は直線的に外傾する。

34はミニチュアの罎である。水簸したような粘土で、溶けたように風化していた。

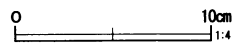
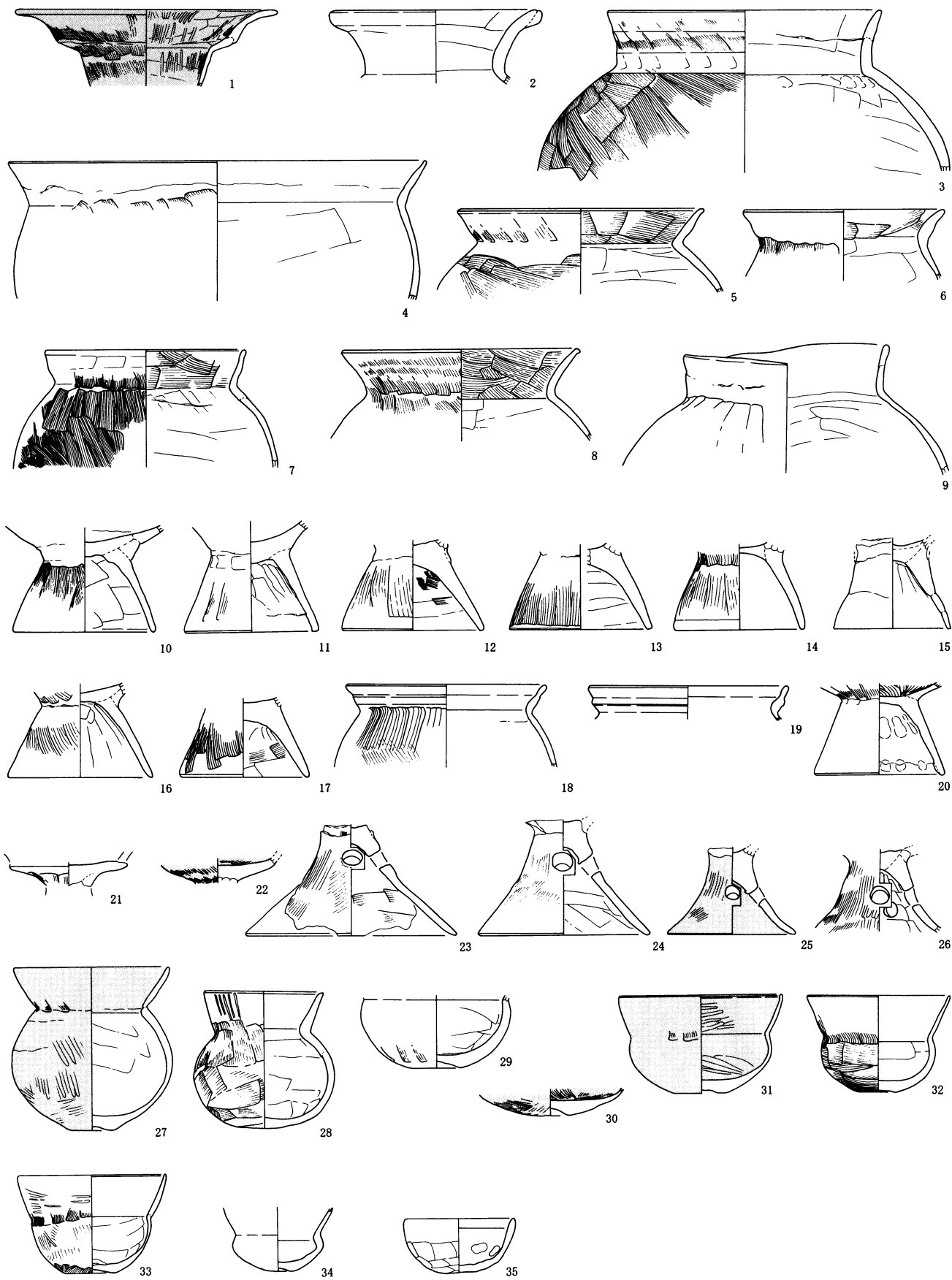
35は椀状のミニチュアである。



第117図 第1号性格不明遺構



第118图 第1号性格不明遺構遺物出土状況



第119图 性格不明遺構出土遺物

第25表 第1号不明遺構出土遺物観察表 (第119図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	SX1	壺	(18.2)	[5.5]		口縁部1/3	A	良好	にぶい橙	赤彩	
2	SX1	壺	(14.0)	[5.2]		口縁部1/4	A	普通	褐灰	外面風化、口縁貼付	71-5
3	SX1	甕	(18.9)	[11.3]		口縁部1/3	B	良好	黄灰	内面胴部指頭有	71-6
4	SX1	甕	(29.0)	[9.8]		口縁部1/3	A	普通	にぶい橙	風化	71-7
5	SX1	甕	(16.8)	[5.9]		口縁部1/4	A	良好	灰黄褐		
6	SX1	甕	(13.9)	[5.0]		口縁部1/4	A	普通	橙		
7	SX1	甕	(13.8)	[8.2]		口縁部1/5	A	良好	橙		
8	SX1	甕	(16.2)	[6.4]		口縁部1/5	A	良好	暗灰		
9	SX1	甕	(13.9)	[9.0]		口縁部	A	普通	にぶい橙	口縁部大きく歪む	71-8
10	SX1	台付甕		[7.3]	9.7	脚部3/5	A	良好	にぶい橙		72-1
11	SX1	台付甕		[7.8]	9.2	脚部3/4	A	良好	灰黄褐		72-2
12	SX1	台付甕		[6.3]	9.8	脚部3/4	A	良好	橙		72-3
13	SX1	台付甕		[6.0]	(9.8)	脚部1/3	D	良好	橙		
14	SX1	台付甕		[6.0]	(9.0)	脚部4/5	A	良好	浅黄橙	内面風化	72-4
15	SX1	台付甕		[6.3]	(7.7)	脚部1/4	C	普通	明褐灰	内外面風化、水簸粘土	
16	SX1	台付甕		[6.6]	(10.0)	脚部	B	良好	橙		
17	SX1	台付甕		[5.7]	8.7	脚部3/4	G'	普通	にぶい橙		72-5
18	SX1	S字甕	(13.8)	[5.7]		口縁部1/6	A	良好	にぶい橙	在地化	
19	SX1	S字甕	(13.7)	[2.4]		口縁部1/4	D	良好	灰黄褐	口縁厚く在地化したもの	
20	SX1	S字甕		[6.4]	(8.8)	脚部4/5	A	良好	橙		72-6
21	SX1	高坏		[1.7]		接合部	A	良好	にぶい橙	柱状脚	
22	SX1	高坏		[1.8]		坏底部	B	良好	にぶい橙	赤彩、柱状脚か?	
23	SX1	高坏		[7.8]	(14.5)	脚部	A	良好	浅黄橙	透孔3	
24	SX1	高坏		[8.0]	(11.5)	脚部1/4	A	良好	浅黄橙	透孔3	
25	SX1	高坏		[6.1]	(8.7)	脚部	A	良好	黄橙	赤彩、内面は全体に赤、透孔3	
26	SX1	高坏		[5.3]		脚部	A	良好	にぶい橙	透孔2接合法方は台付甕と同じ	
27	SX1	小型壺	10.7	11.4	3.4	70%	D	良好	浅黄	赤彩、黒斑有	72-7
28	SX1	小型壺	8.2	9.5	丸底	完形	A	良好	にぶい橙	丸底	72-8
29	SX1	鉢		[5.2]	3.4	3/5	C	普通	灰白	内面黒色、外面風化、水簸粘土	
30	SX1	小型壺		[1.9]	丸底	底部	A	良好	にぶい橙	赤彩	
31	SX1	罎	11.2	3.4	6.8	80%	A	良好	灰黄	赤彩、内外面風化	73-1
32	SX1	罎	(9.9)	6.7	2.5	ほぼ完形	B	良好	暗赤褐		73-2
33	SX1	小型鉢	(10.2)	6.8	3.5	3/4	F	良好	明黄褐		73-3
34	SX1	ミニチュア		[4.4]	1.5	口縁欠	C	普通	浅黄橙	内外面風化、水簸粘土	73-4
35	SX1	ミニチュア	7.5	3.7		ほぼ完形	A	良好	明黄褐	内面指頭痕	73-5

8. 土器集中区

土器集中区 (第120～123図)

土器集中区は、A区谷部I・J-3グリッドで検出した。第57号土壙東側約7.0mで検出した。

A区谷部の基本層序(第6図)IX層を精査中に土器片が多量に出土した。

IX層の上部では、白色の粘質土化したFA層と考えられる火山灰層を検出し、FA層を排除すると、薄い泥炭層を検出した(VIII層)。FA層および泥炭層は、A・B区の谷部のみで確認された。

この泥炭層にパックされる形でIX層が堆積しており、遺物は、このIX層中から出土した。

当初、遺構に伴わない、グリッド出土遺物として処理したが、遺物が集中していることから、遺物の分布状況を把握するため、出土地点を記録するとともに、微細な遺物は、10m×10mのグリッドを、さらに4分割して小グリッドを設定し、北西からa・b・c・dの順に、小文字アルファベットで呼称し、小グリッド単位で取り上げた。

遺物の集中は、遺構に伴わないと考えられたため、土器集中区と呼称した。

遺物の分布は、土器集中区西側で検出した第57号土壙・第8号溝跡のある微高地部分から、扇形に広がるように分布していた。

また、遺物の出土状況は、同一個体の破片同士は拡散せず、ある程度のまとまりをもって分布しているが、破片そのものは粉碎されたように小破片で構成され、接合状況は極めて悪く、完形品は出土しなかった。

また、第57号土壙に近接した小グリッドでは、第57号土壙出土遺物と互いに接合関係のあるS字状口縁台付甕が2点認められた。この遺物については、破片の残存状況の良い方の遺構に組み入れたため、1点は第57号土壙（第54図110）、もう1点は、土器集中区出土遺物（第123図34）として扱った。2点とも、別個体である。

第57号土壙と、土器集中区は、近接し、互いに土器の接合関係が認められることから、時期的に近似し、遺構廃絶段階では、同時に機能していた可能性を示唆するものである。

遺物集中区には、遺構は伴わず、遺物出土地点直下を精査したが、遺構は検出できなかった。

出土遺物は、壺・甕・S字状口縁台付甕・甔・高坏・器台・小型壺・鉢・ミニチュア土器が出土した。図示可能な遺物は58点であった。（第122～123図1～58）

1～15は壺である。完形品は出土せず、全体の器形が復元できる個体は、1・8のみであった。

1は上げ底風の底部に球形の胴部となる。頸部は直立気味に短く立ち上がり、口縁部は直線的に外傾する。厚手の口縁部である。

2は胴部以下を欠損していた。有段口縁となるが、外面口縁部下端部に、断面三角形の粘土帯を貼り付け、段を表現している。

3は単純口縁に、外面口縁部直下に薄く粘土帯

を貼付している。

4はやや短めの口縁部の折り返し口縁となる。

5・7は、外反の弱いやや直立気味の口縁部に、薄い粘土帯を貼付している。

6は口縁部のみの破片で、太目の棒状浮文が2本1単位で、3箇所を確認できた。復元すると、8単位であったと考えられる。

8は平底の底部に球形胴となる壺である。口縁部は、粘土帯の貼付または折り返しで、端部は、強いナデにより面取り風に平坦となっていた。

9・10はやや小型の球形胴の壺で、9は底部を、10は口縁部を欠損していた。2点とも胎土中に土器片と思われる赤色粒子を含んでいた。

11・12は、胎土の特徴から同一個体と思われるが、接合しなかった。

13は大型の胴部であるが、口縁部と底部を欠損していた。底部を鉢形に作る、下膨れの器形となると考えられる。

14は底部～胴部下位の破片である。平底の底部に、胴下位にやや張りの有る器形となる。

15～33は甕である。全体の器形を復元できた個体は、15のみであった。

15は鉢とすべきであるかもしれない。平底の底部で、口縁部に最大径がある。頸部の屈曲は弱く、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。全体的に風化が著しく、表面の剥落が目立つが、口縁部にヘラミガキの痕跡が認められた。

16～20は台付甕の口縁部と考えられる。

16はやや長胴となる甕と考えられる。口縁部の屈曲は弱い。

17～20はやや屈曲の強い口縁部となる。17・20は胴部外面の調整がナデ調整で、特に20は、ヘラケズリ状の強いナデにより、砂粒を引きずった痕跡が顕著であった。

18・19は調整は粗い刷毛目である。

21～33は台付甕の脚部と考えられる。胴部との接合は、すべて胴部の凸部を脚部にはめ込む方

法であると考えられる。

脚部の開きは、直線的もしくは内湾気味に開く。全体的に背が低い脚部となる。

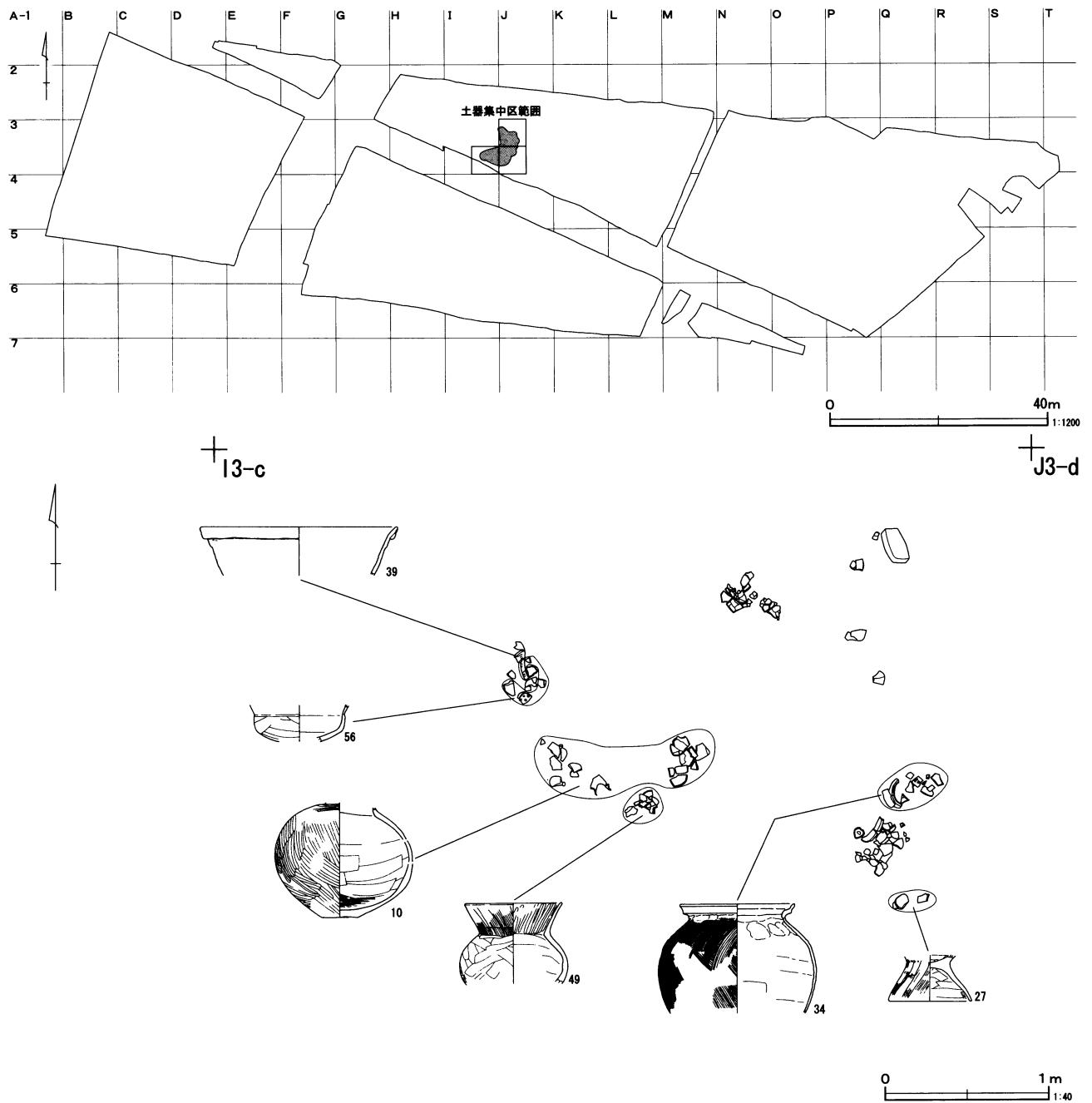
24は脚部裾内面を折り返しており、S字状口縁台付甕の模倣品の可能性もあるが、明らかにできなかった。

28～30は脚部がやや細長い器形となる。胴部の一部が残存していたが、底部が深く、広がらずに上方に立ち上がる。完形に復元できた第28号

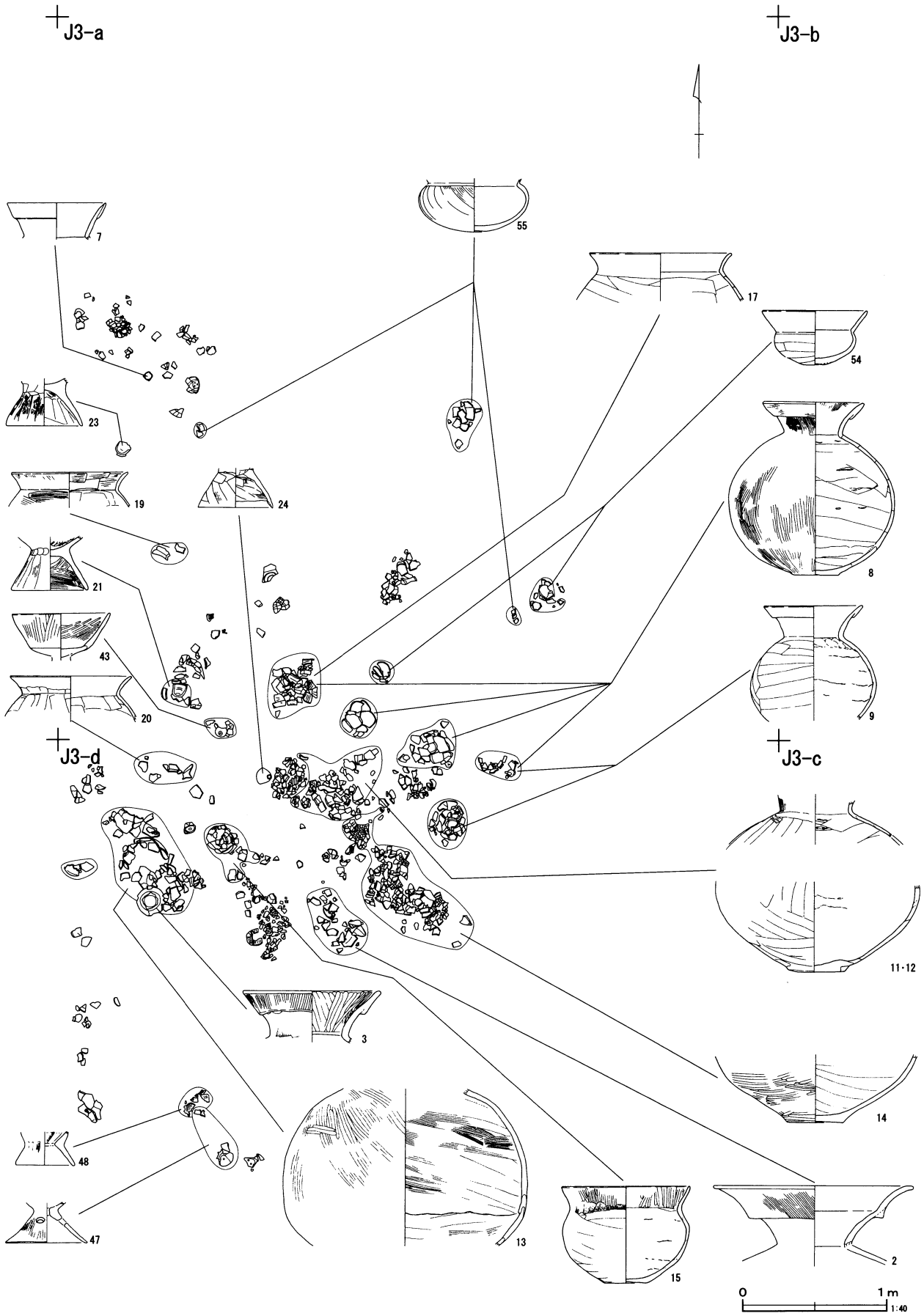
土壇出土台付甕（第43図196）と胎土・器形の特徴が近似しており、長胴となる台付甕と考えられる。

31は脚部の大きさに比べ、小さな球形の胴部となる。台付鉢の可能性もあったが、口縁部を欠損していたため、明らかにできなかった。また、表面の風化が著しく、調整が不明瞭であった。

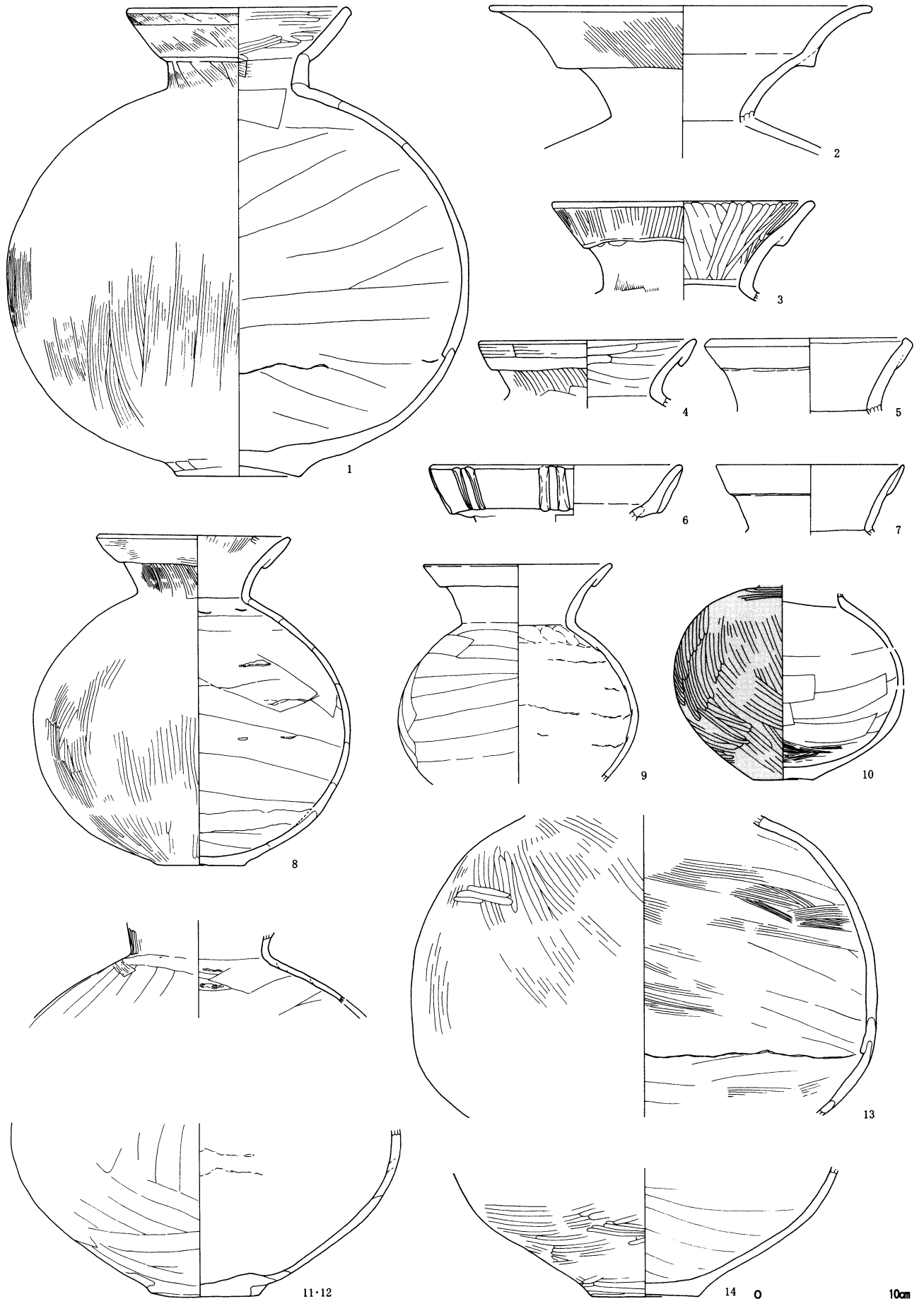
32・33は小型の脚部である。33は脚部裾内面を折り返していた。表面の風化が著しいが、外面



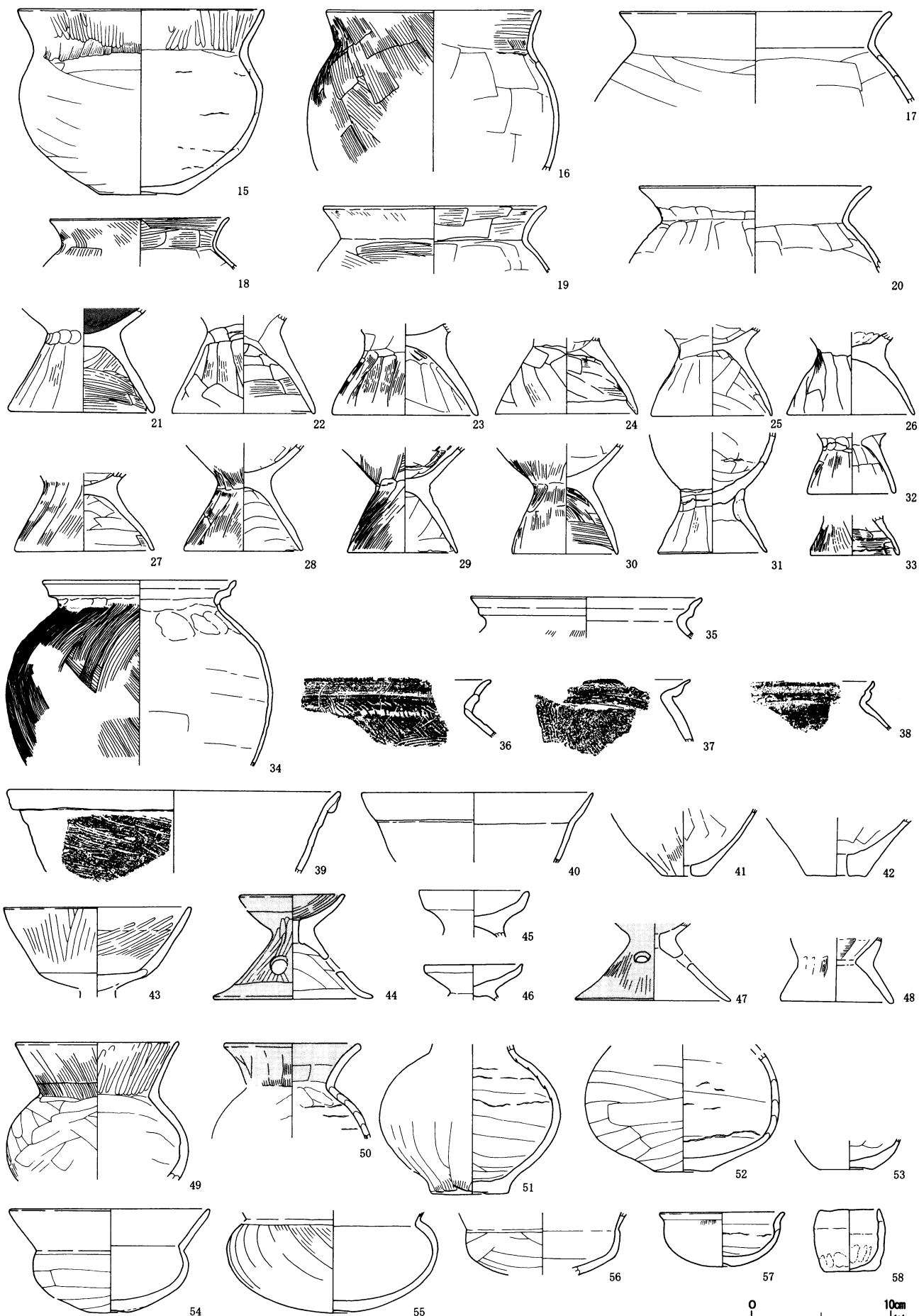
第120図 土器集中区1-3グリッド遺物出土状況



第121図 土器集中区J-3グリッド遺物出土状況



第122图 土器集中区出土遗物(1)



第 123 图 土器集中区出土遗物 (2)

第26表 土器集中区出土遺物観察表1 (第122・123図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1		壺	15.4	33.5	(9.0)	2/3	A	普通	橙		73-6
2		壺	26.5	[11.0]		口縁部2/3	A	普通	橙	内外面風化	74-1
3		壺	18.6	[7.2]		口縁部完形	A	良好	浅黄橙		74-2
4		壺	15.3	[4.8]		口縁部2/3	A	不良	橙		74-3
5		壺	(14.0)	[5.4]		口縁部1/2	B	良好	にぶい橙	外面風化	74-4
6		壺	(17.5)	[4.1]		口縁部1/4	B	普通	橙	内外面風化、棒状浮文有	74-5
7		壺	(13.4)	[5.0]		口縁部1/3	A	普通	橙	内外面風化	
8		壺	13.4	23.8	6.2	1/2	A	普通	にぶい黄橙	胴部外面黒斑有	74-6
9		壺	13.4	[15.8]		底部欠	G'	普通	灰白	内面胴部最上位指頭痕	74-7
10		壺		[14.0]	4.3	胴部	G'	良好	にぶい黄橙	赤彩	74-8
11		壺		[7.0]		頸～胴部	A	不良	にぶい黄橙	16-2同一個体	
12		壺		[12.5]	7.9	胴～底部	A	不良	灰黄	16-1同一個体	
13		壺		[21.5]		胴部1/3	A	普通	橙	外面風化	
14		壺		[9.3]	8.0	胴～底部	A	良好	にぶい黄橙		
15		平底甕	(17.4)	13.3	5.8	1/2	A	不良	にぶい褐	内外面風化	
16		甕	(15.3)	[11.6]		口縁～胴部	B	普通	灰褐		
17		甕	(19.2)	[6.6]		口縁部1/2	A	不良	橙		
18		甕	(12.8)	[3.5]		口縁部1/3	D	普通	にぶい橙	外面風化	75-1
19		甕	(15.8)	[4.9]		口縁部	G	普通	橙		75-2
20		甕	(16.6)	[6.2]		口縁破片	D	普通	橙	内面風化	
21		台付甕		[7.5]	(10.4)	脚部	A	普通	にぶい橙	外面風化、煤	
22		台付甕		[7.1]	(10.2)	脚部2/3	D	普通	黄橙	外面風化	
23		台付甕		[6.8]	(10.4)	脚部2/3	A	良好	にぶい黄褐		
24		台付甕		[5.5]	10.2	脚部	A	良好	にぶい橙	外面風化、S字甕模倣?	75-3
25		台付甕		[6.3]	(8.7)	脚部1/3	A	良好	橙	外面風化	
26		台付甕		[5.9]	(9.0)	脚部4/5	A	普通	橙	内外面風化、胴部底部指押さえ	75-4
27		台付甕		[5.5]	(10.0)	脚部1/2	A	普通	明赤褐	外面風化	
28		台付甕		[7.7]		脚部	B	良好	褐		75-5
29		台付甕		[7.6]	7.9	脚部2/3	B	良好	にぶい赤褐		75-6
30		台付甕		[7.9]	(7.5)	脚部	B	良好	にぶい橙	外面風化	75-7
31		台付甕		[8.6]	(7.9)	胴～脚部	A	良好	橙	鉢か? 外面風化	
32		台付甕		[4.4]	(6.2)	脚部	A	普通	橙	外面風化	
33		台付甕		[3.9]	6.3	脚部4/5	D	良好	橙		
34		S字甕	(13.6)	[13.3]		1/3	D	普通	黒褐	内面指頭痕	75-8
35		S字甕	(16.4)	[2.9]		口縁部破片	その他	普通	灰白	内外面風化	
36		S字甕	(15.2)	[4.1]		口縁部破片	D	良好	にぶい黄橙		
37		S字甕	(10.4)	[4.4]		口縁部破片	B	良好	にぶい黄橙	外面風化	
38		S字甕	(13.6)	[3.5]		口縁部破片	その他	良好	灰白		
39		甌	(23.6)	[5.9]		口縁部破片	A	良好	赤褐		
40		甌	(17.0)	[5.0]		口縁部1/6	A	普通	明赤褐	全面風化、丸底	
41		甌		[4.7]	3.7	底部完形	B	良好	橙	外面風化	
42		甌		[4.2]	4.3	底部完形	D	良好	にぶい黄橙	孔径1.8cm	
43		高坏	(13.2)	[6.0]		坏部1/3	D	普通	にぶい黄橙		76-1
44		器台	(7.3)	7.5	11.4	1/2	A	普通	にぶい黄褐	赤彩	76-2
45		器台	(7.8)	[3.7]		受部	A	普通	にぶい黄橙	外面風化	
46		器台	(7.0)	[2.5]		受部1/2	D	良好	灰黄褐	内面風化	
47		器台		[5.6]	11.2	1/3	A	良好	明赤褐	赤彩、内外面風化、透孔3	
48		器台		[4.6]	7.8	脚部ほぼ完形	B	普通	明赤褐	内外面風化	
49		小型壺	11.6	[9.9]		口縁部3/4	A	不良	にぶい黄橙		76-3
50		小型壺	9.6	[6.8]		口縁部	B	普通	にぶい橙	赤彩	76-4
51		小型壺		[10.8]	5.6	胴部1/3	B	不良	明赤褐	外面風化	

第27表 土器集中区出土遺物観察表2 (第122・123図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
52		小型壺		[9.0]	4.2	胴～底部	D	良好	にぶい黄橙		76-5
53		小型壺		[2.2]	3.9	底部完形	D	良好	にぶい黄橙	外面風化	
54		鉢	(14.2)	7.4	3.2	1/3	A	普通	橙	内面風化	76-6
55		鉢		[7.3]	2.7	胴部	A	不良	赤	内外面風化	76-7
56		鉢		[4.5]		口縁部1/2	B	普通	橙		
57		小型鉢	8.8	3.8	1.4	3/4	A	不良	橙	外面風化	
58		ミニチュア	(4.2)	4.4	3.8	ほぼ完形	D	良好	にぶい黄橙		76-8

の調整は刷毛目が認められた。

34～38はS字状口縁台付甕である。全体の器形が復元できる個体は出土しなかった。すべて口縁部の破片である。

34は口縁部～胴部中位が残存していた。口縁部の段はシャープで、下段は背の丸い工具による強いヨコナデが施されていた。上部は外反する。胴部の刷毛目は、羽状となるが、細かい刷毛目で、刷毛の単位がはっきりしている。緻密な胎土で硬質である。胎土に白色針状物質を含んでおり、比企丘陵の粘土が使用された、在地の模倣品と考えられる。なお、34は第57号土壇出土胴部片と接合した。

35は口縁部の破片である。厚手で、口縁部は外反する。在地模倣と考えられるが、軟質だが灰白色の胎土で、輝石または角閃石と白色粒子を含み、他のS字状口縁台付甕とは異なる胎土であった。

36は口縁部の破片である。口縁部の段が弱く、大きく外反する。厚手で、刷毛目は粗雑であった。胎土に白色針状物質を含んでいた。在地の模倣品と考えられる。

37は口縁部の破片である。厚手で、口縁部は短く立ち上がる。表面の風化が著しいが、刷毛目の痕跡が認められた。

38は口縁部の破片である。厚手だが、口縁上部は薄く、小さく外反する。口縁部の段は、細い丸棒状の工具の強いナデにより、沈線状となっていた。在地模倣と考えられるが、軟質だが灰白色の胎土で、輝石または角閃石と白色粒子を含み、他のS字状口縁台付甕とは異なる胎土であった。

39～42は甑である。鉢形の甑と考えられる。

39は口縁部を折り返し、胴部には粗い刷毛目が施されていた。第57号土壇出土の甑（第55図121・122）と同じ胎土で、特徴が似ているため、同一個体の可能性があったが、接合しなかった。

40は丸底の鉢の可能性があったが、立ち上がり角度が急で、甑とした。

41・42は底部の破片である。小さな底部で、単孔である。

43は高坏である。脚部を欠損していた。坏部は、口縁部が直線的に外傾きする。坏底部は板状に成形し、坏部の凸部を脚部にはめ込む方法で、接合していたと考えられる。接合部径は2.5cmと小さく、柱状脚であった可能性が高い。

44～48は器台である。

44は椀状の受部で、外面に弱い稜を有する。

45・46は受部口縁部が垂直に立ち上がる。2点とも貫通孔は穿たれていなかった。

47は受部口縁部を欠損していた。貫通孔が認められ、立ち上がり角度が急角度であるため、受部は椀状であったと考えられる。

48は粗製器台と考えられる。

49～53は小型壺である。49・50は底部を、51～53は口縁部を欠損していた。49・50は単純口縁、51は輪台状の底部で、球形の胴部である。頸部は細頸となると思われる。52は、輪台状の底部で下膨れの胴部となる。

54～57は鉢である。半球形の胴部に、大きく外反する口縁部である。

58はミニチュアである。唯一、ほぼ完形であった。

9. ピット

ピットは、調査区全域にわたって127基を検出した。(第124図～136図) 建物遺構の柱穴状の遺構である。

ピットのいくつかは、柱痕跡の認められるピットも検出し、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柵列等の建物遺構の柱穴の一部であった可能性のある遺構もあった。

しかし、組み合わせがなく、単体で検出する例が多かった。また、数基が並び、建物遺構となる可能性のあるものも検出したが、調査区外へ延び、全体が明らかにできなかった遺構が多く、こうした遺構は全てピットとして扱った。

呼称は、検出したグリッド名を冠し、各グリッド単位でP1・P2と番号を付し、呼称した。

第28表 ピット一覧表

番号	形態	長軸	短軸	深さ	番号	形態	長軸	短軸	深さ	番号	形態	長軸	短軸	深さ			
H2	P1	円形	0.74	0.72	0.50	F2	P10	円形	0.22	0.22	0.21	M6	P1	円形	0.24	0.24	0.17
H2	P2	円形	0.66	0.60	0.12	C4	P10	楕円形	0.36	0.16	0.12	M6	P2	楕円形	0.24	0.20	0.12
H2	P3	円形	0.20	0.20	0.12	C4	P2	円形	0.40	0.40	0.22	N6	P1	円形	0.36	0.36	0.15
H2	P4	円形	0.118	0.16	0.09	C4	P3	楕円形	0.32	0.24	0.08	N6	P2	円形	0.28	0.28	0.22
I2	P1	円形	0.26	0.24	0.10	C4	P4	楕円形	0.36	0.22	0.12	N6	P3	円形	0.28	0.28	0.07
I2	P2	円形	0.22	0.22	0.11	C4	P5	楕円形	0.46	0.26	0.09	N6	P4	円形	0.36	0.36	0.12
I2	P3	円形	0.16	0.14	0.11	C4	P6	楕円形	0.34	0.26	0.18	N6	P5	円形	0.28	0.28	0.15
I3	P1	円形	0.16	0.14	0.12	C5	P10	円形	0.42	0.42	0.13	N7	P1	円形	0.22	0.21	0.19
L4	P1	円形	0.18	0.16	0.20	C5	P2	長方形	0.70	0.46	0.34	M4	P1	楕円形	0.60	0.56	0.17
L4	P2	円形	0.22	0.18	0.08	D3	P10	楕円形	0.66	0.40	0.26	M4	P2	-	0.48	(0.24)	0.10
F4	P1	円形	0.52	0.50	0.43	D3	P2	円形	0.36	0.30	0.28	M4	P3	円形	0.42	0.40	0.29
G4	P1	円形	0.32	0.30	0.30	D3	P3	楕円形	0.98	0.66	0.45	M4	P4	円形	0.34	0.34	0.33
G4	P2	長方形	0.70	0.44	0.10	D3	P4	円形	0.34	0.32	0.28	M5	P1	楕円形	0.44	0.32	0.14
G4	P3	円形	0.42	0.40	0.38	D4	P1	円形	0.22	0.20	0.13	M5	P2	楕円形	0.46	0.38	0.48
E1	P1	円形	0.22	0.20	0.14	D4	P2	円形	0.16	0.16	0.12	M5	P3	楕円形	0.50	0.44	0.37
E1	P2	円形	0.20	0.16	0.08	D4	P3	楕円形	0.44	0.36	0.33	M5	P4	円形	0.22	0.22	0.19
E1	P3	円形	0.16	0.14	0.07	D4	P4	円形	0.26	0.26	0.22	M5	P5	楕円形	0.24	0.16	0.09
E1	P4	楕円形	0.40	0.22	0.40	D4	P5	円形	0.20	0.18	0.12	M5	P6	楕円形	0.26	0.20	0.19
E1	P5	円形	0.26	0.26	0.10	D4	P6	円形	0.22	0.22	0.14	M5	P7	円形	0.16	0.14	0.20
E1	P6	円形	0.118	0.16	0.10	D4	P7	楕円形	0.66	0.34	0.34	M5	P8	円形	0.18	0.14	0.18
E1	P7	円形	0.24	0.22	0.09	D4	P8	円形	0.24	0.22	0.14	N4	P1	長方形	0.64	0.36	0.28
E1	P8	円形	0.34	(0.30)	0.28	D4	P9	円形	0.40	0.38	0.32	N4	P2	円形	0.22	0.22	0.17
E1	P9	円形	0.40	0.40	0.29	D4	P10	円形	0.40	0.38	0.24	N4	P3	方形	0.56	0.46	0.10
E1	P10	円形	0.26	0.22	0.17	D4	P11	円形	0.34	0.30	0.11	N4	P4	楕円形	0.38	0.32	0.32
E1	P11	円形	0.28	0.28	0.29	D5	P1	円形	0.24	0.22	0.08	N5	P1	円形	0.38	0.34	0.20
E1	P12	円形	0.76	(0.26)	0.07	D5	P2	方形	0.26	0.22	0.16	N5	P2	楕円形	0.50	0.34	0.19
E1	P13	楕円形	0.36	0.28	0.10	D5	P3	楕円形	0.40	0.34	0.22	N5	P3	楕円形	0.40	0.32	0.19
E1	P14	円形	0.18	0.18	0.07	D5	P4	円形	0.18	0.18	0.20	N5	P4	楕円形	0.24	0.20	0.20
E2	P1	円形	0.26	0.24	0.24	D5	P5	円形	0.10	0.10	0.07	N5	P5	円形	0.22	0.20	0.10
E2	P2	円形	0.26	0.22	0.17	D5	P6	円形	0.42	0.38	0.17	N5	P6	楕円形	0.20	0.14	0.12
E2	P3	円形	0.26	0.24	0.14	D5	P7	円形	0.20	0.20	0.05	O4	P1	円形	0.24	0.22	0.13
E2	P4	楕円形	0.38	0.24	0.07	D5	P8	円形	0.30	0.28	0.12	P5	P1	楕円形	0.60	0.50	0.08
E2	P5	円形	0.18	0.18	0.06	D5	P9	円形	0.26	0.26	0.20	P6	P1	楕円形	0.22	0.14	0.09
F1	P1	楕円形	0.40	0.24	0.67	E4	P1	円形	0.26	0.26	0.20	Q3	P1	楕円形	0.20	0.14	0.25
F2	P1	円形	0.34	0.34	0.36	E4	P2	楕円形	0.22	0.14	0.12	Q4	P1	楕円形	0.74	0.44	0.17
F2	P2	円形	0.30	0.30	0.31	E4	P3	楕円形	0.54	0.26	0.12	Q4	P2	円形	0.22	0.20	0.28
F2	P3	円形	0.30	0.28	0.15	E4	P4	円形	0.22	0.20	0.21	Q5	P1	円形	0.50	0.50	0.10
F2	P4	円形	0.36	0.34	0.32	E4	P5	円形	0.64	0.62	0.21	R3	P1	円形	0.16	0.16	0.22
F2	P5	円形	0.34	0.32	0.15	E5	P1	円形	0.20	0.18	0.10	R3	P2	円形	0.20	0.20	0.22
F2	P6	円形	0.18	0.18	0.11	E5	P2	円形	0.24	0.22	0.11	R4	P1	円形	0.32	0.30	0.10
F2	P7	楕円形	1.54	0.78	0.31	E5	P3	円形	0.16	0.14	0.16	S3	P1	円形	0.38	0.36	0.20
F2	P8	円形	0.24	0.24	0.19	E5	P4	円形	0.14	0.12	0.12						
F2	P9	円形	0.36	0.30	0.29	E5	P5	円形	0.28	0.26	0.21						

計測値の単位はm

以下、検出したピットについて、調査区西側から概要を記す。なお、各ピットの計測値については、第28表を参照されたい。

D区 (第124・126図)

D区では、42基のピットを検出した。

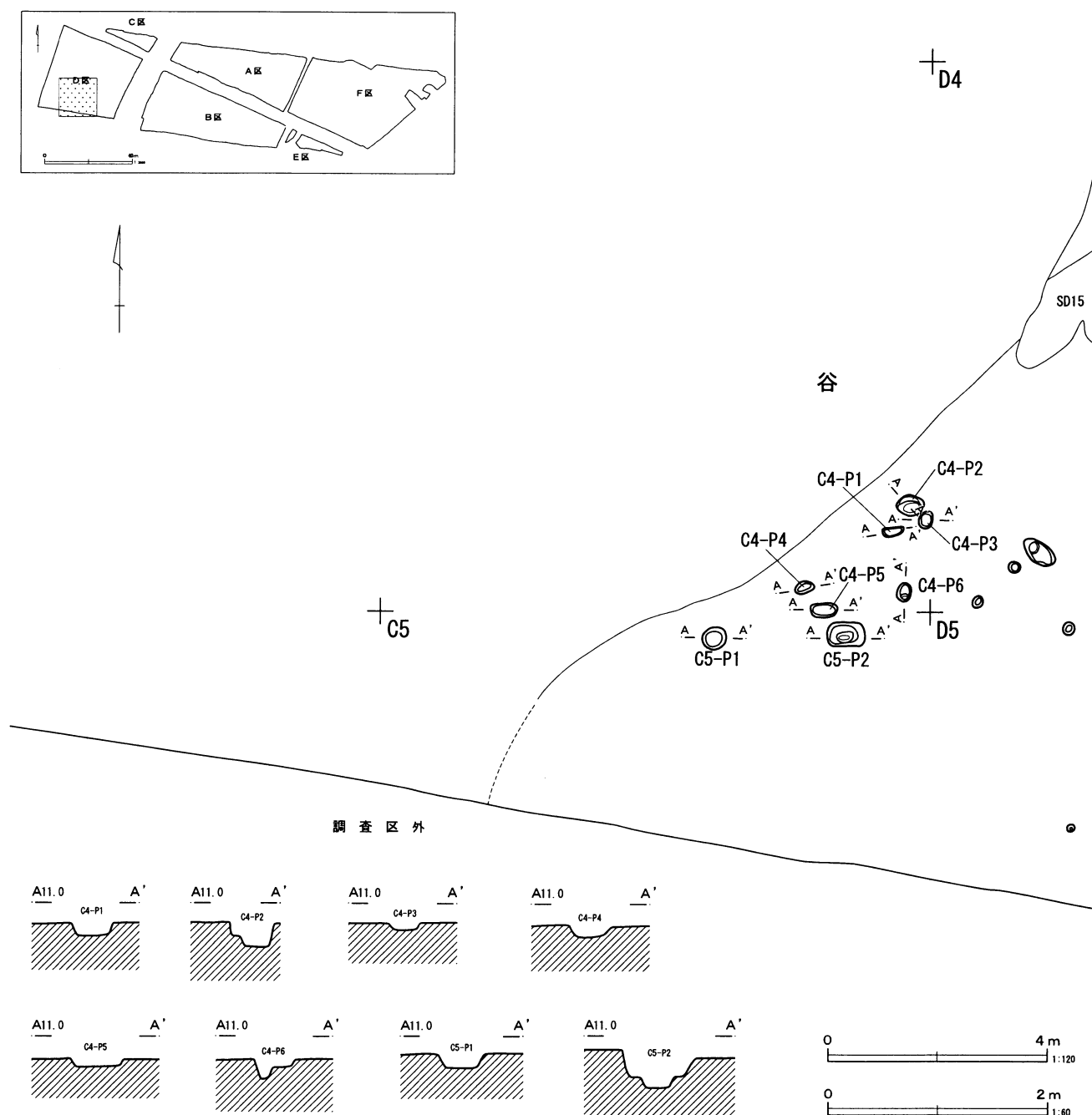
配置に規則性は認められず、また、柱痕跡の認められる、建物遺構と考えられるピットは検出できなかった。

また、D区西側は、谷によって壊されており、

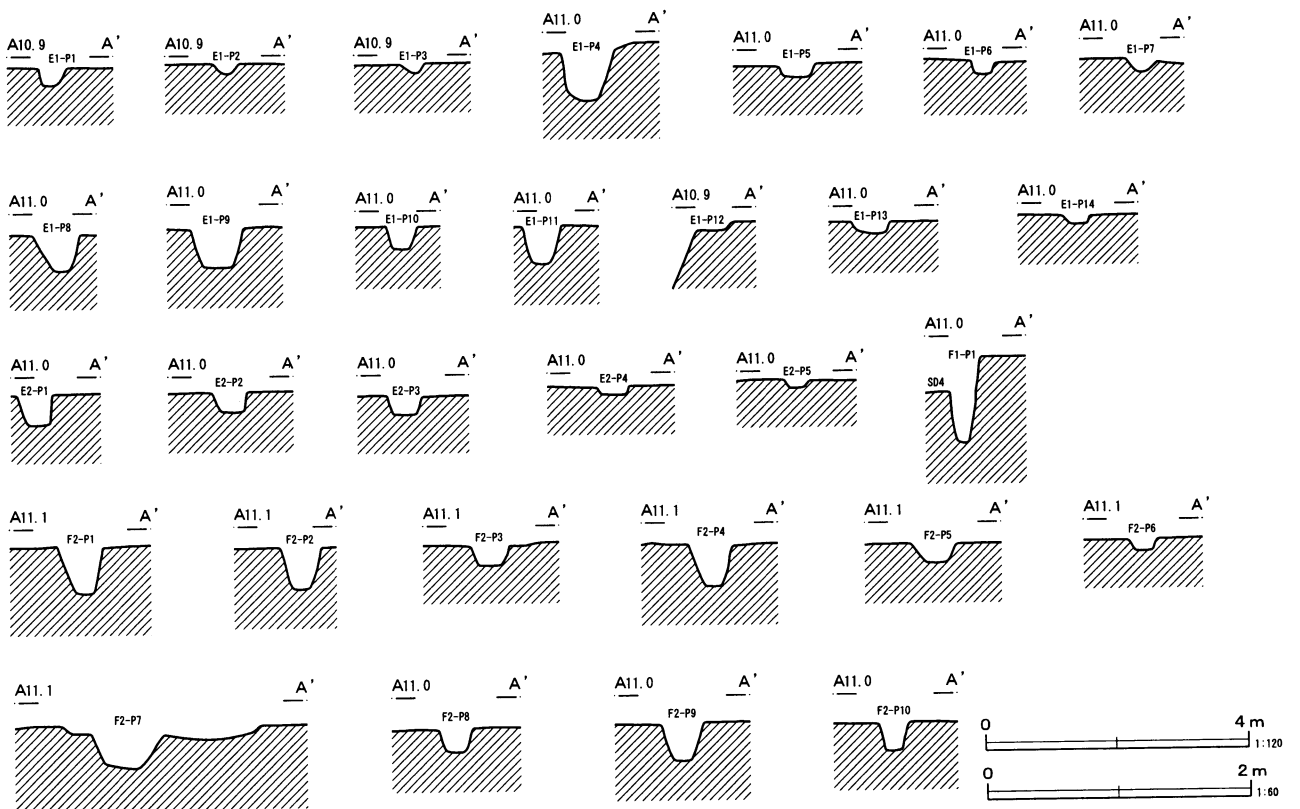
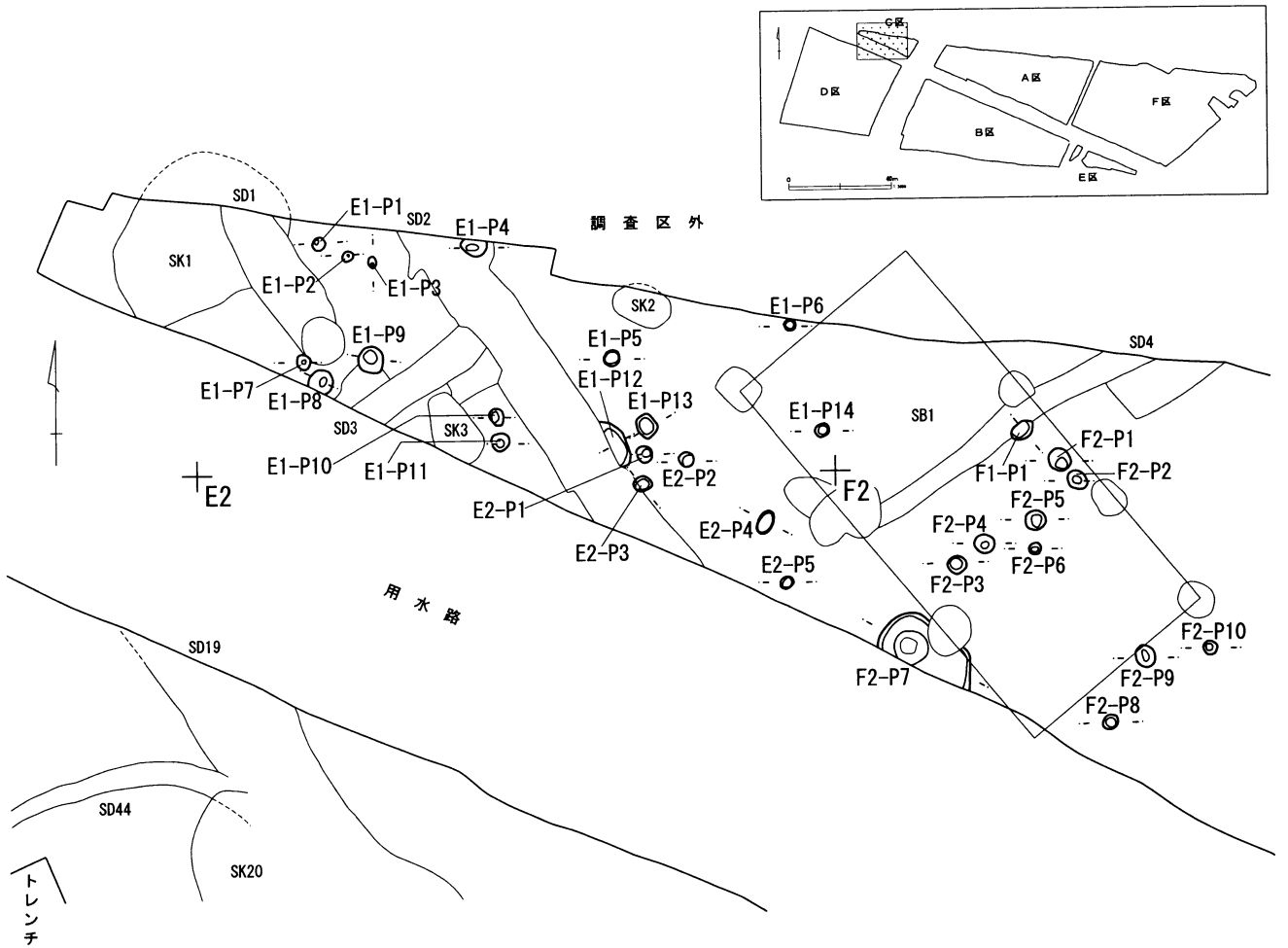
ピットの分布域はさらに西へ広がっていたと考えられるが、明らかにできなかった。

ピットの覆土は全て単層で、地山の灰白色粘質土・黄褐色シルトブロックを含む黒褐色～暗褐色土が共通して堆積していた。

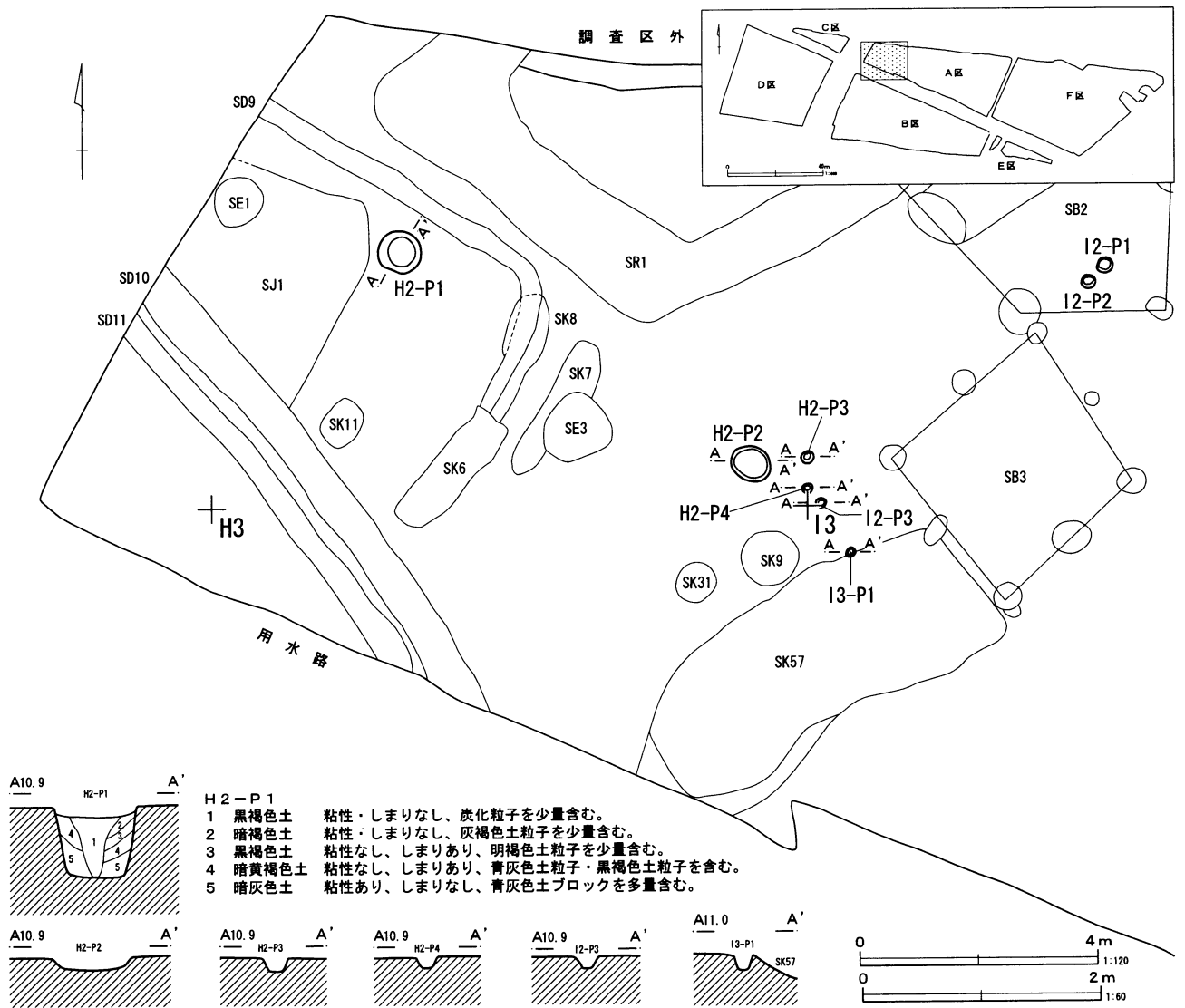
殆どのピットでは、遺物は出土しなかったため、遺構の帰属時期が明確なピットは検出できなかった。しかし、古墳時代前期の、D区第4号掘立柱建物跡柱穴と共通する覆土であることから、これらピットは、概ね古墳時代前期に属していたと考えられる。



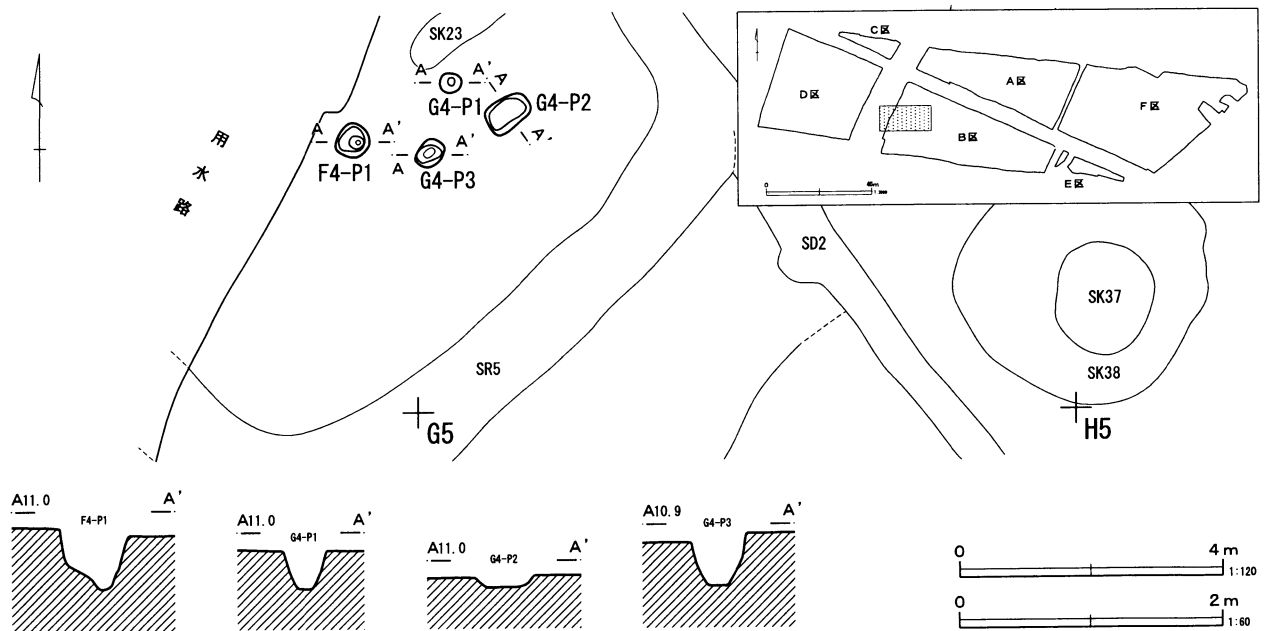
第124図 ピット (1)



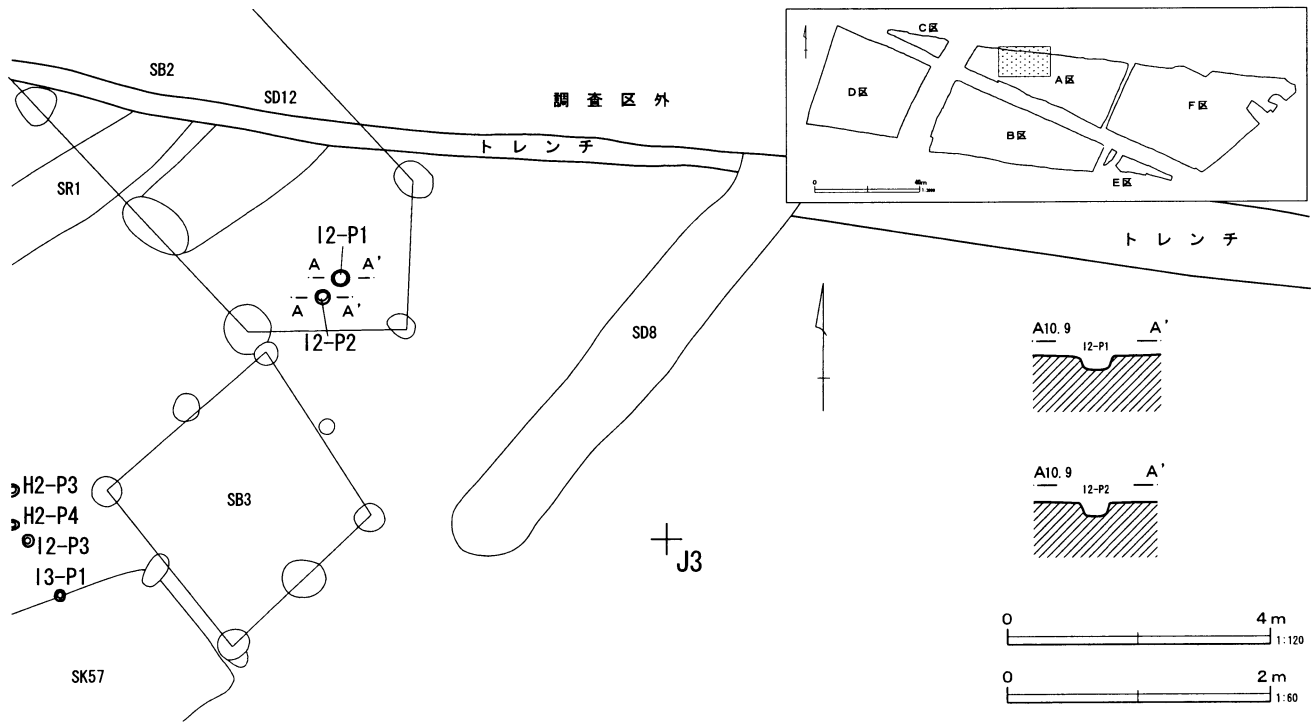
第125図 ピット (2)



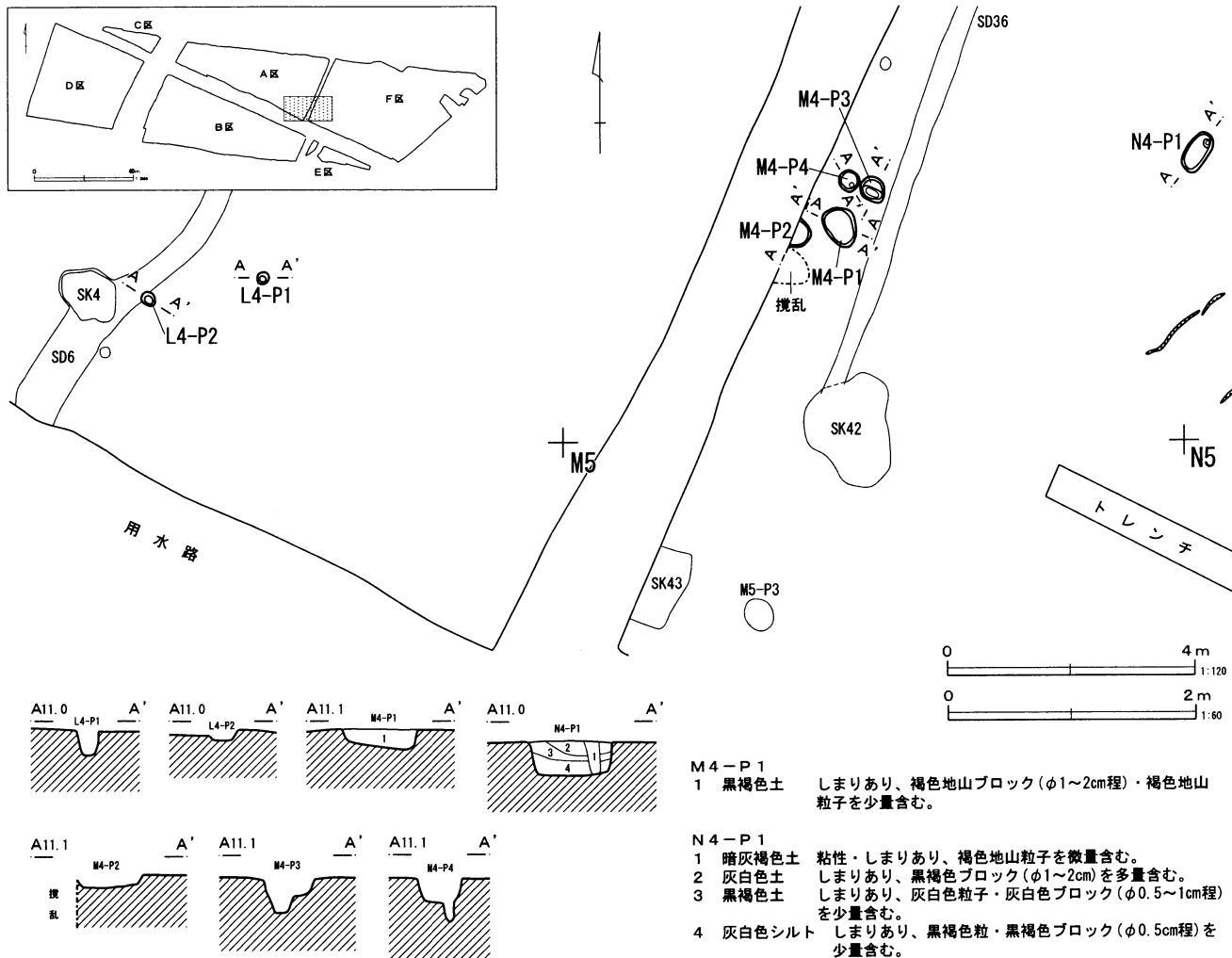
第127図 ピット(4)



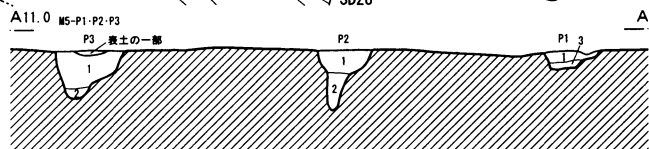
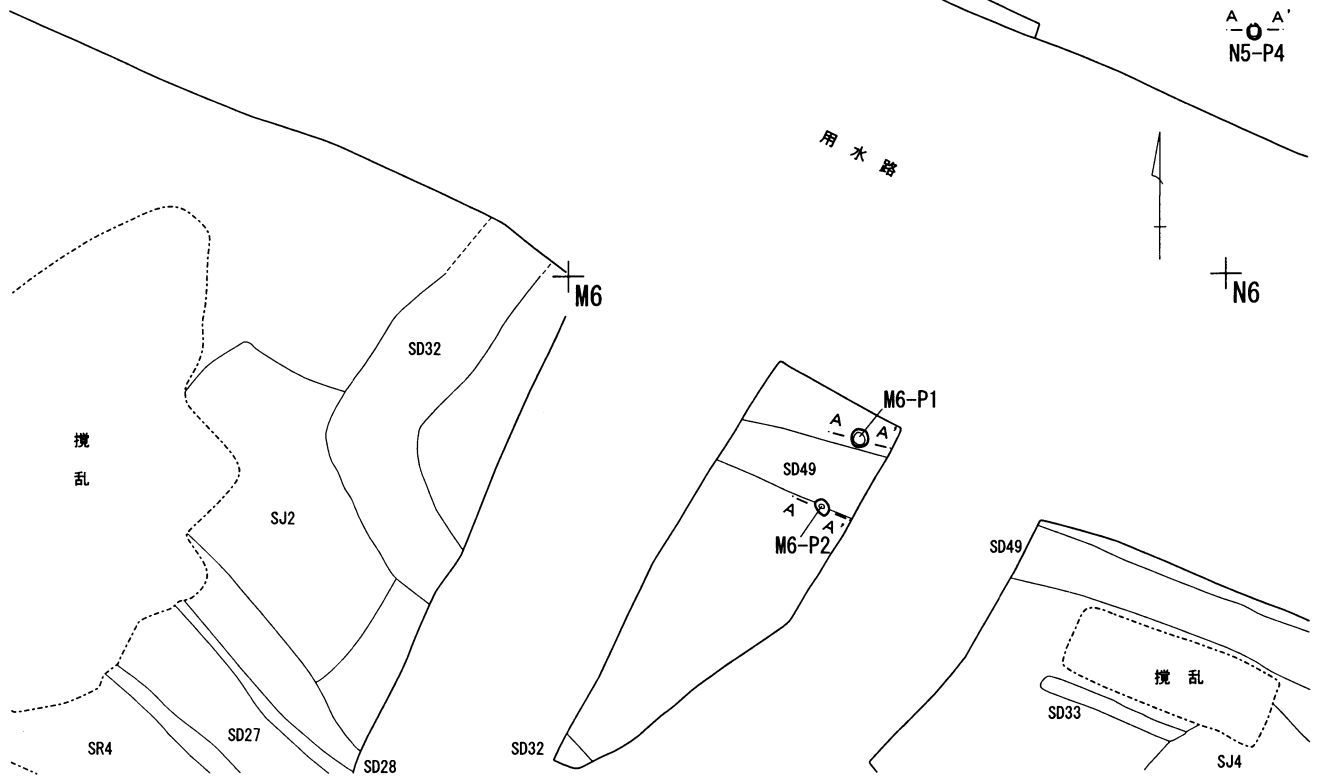
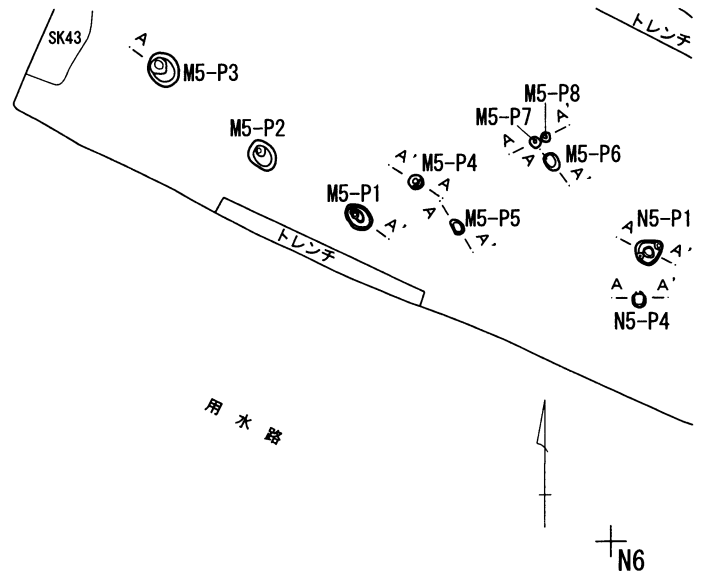
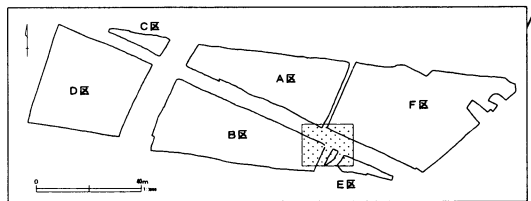
第128図 ピット(5)



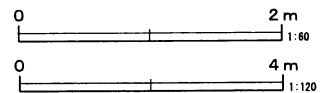
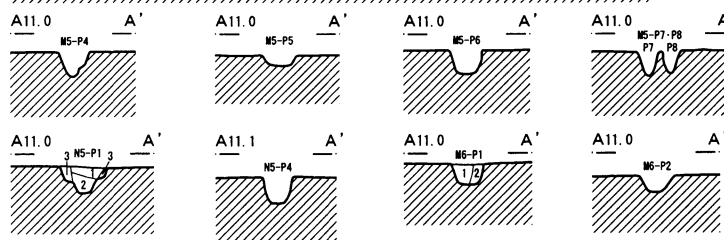
第129図 ピット(6)



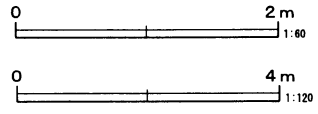
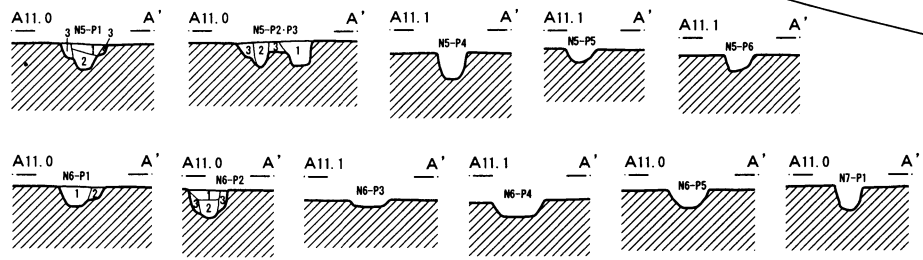
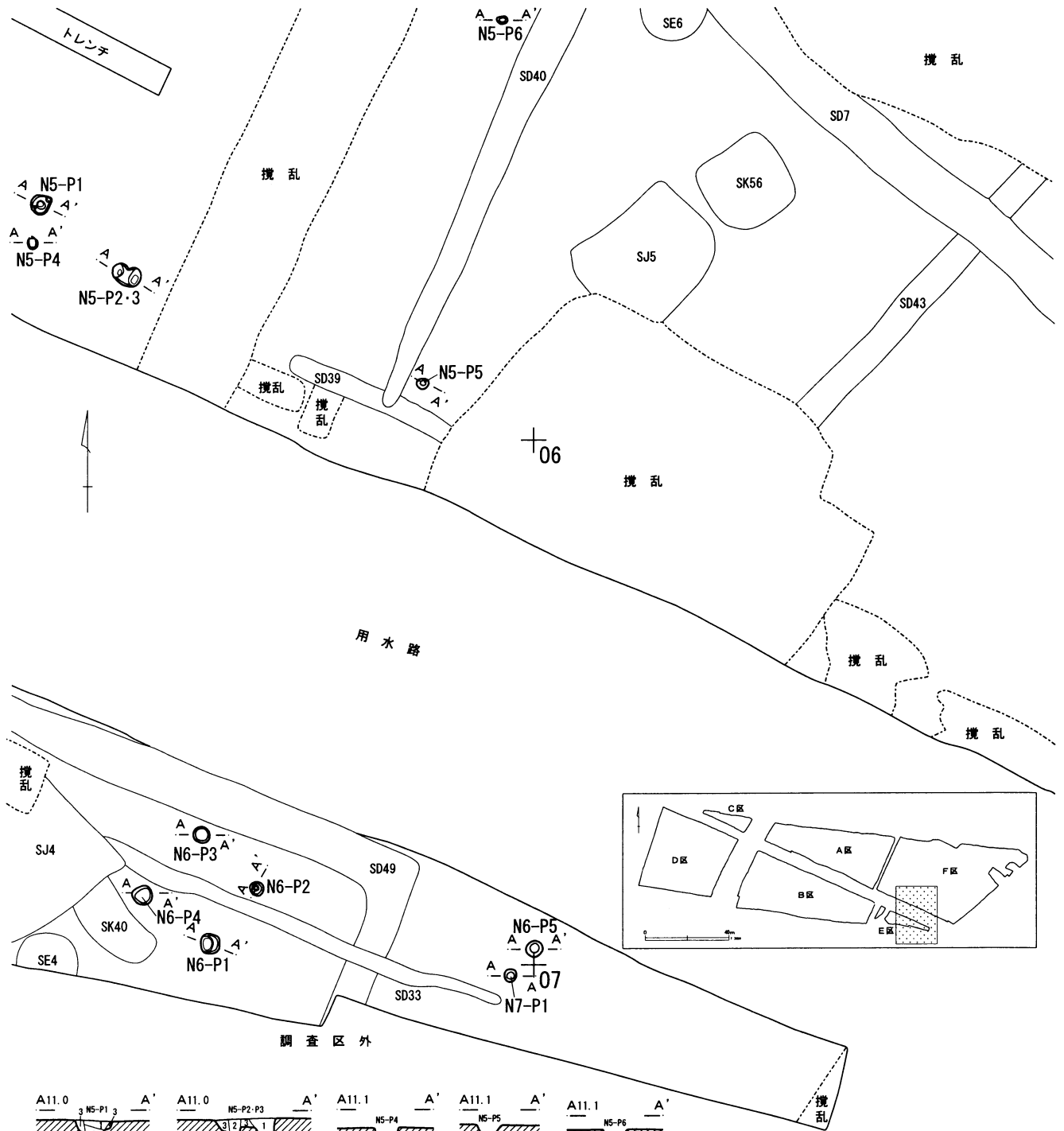
第130図 ピット(7)



- M5-P1・2・3
- 1 黒褐色土 黄褐色粘土(地山)の混土層。
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土(地山)を少量含む。
 - 3 褐色土 しまりあり、黒褐色ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む。

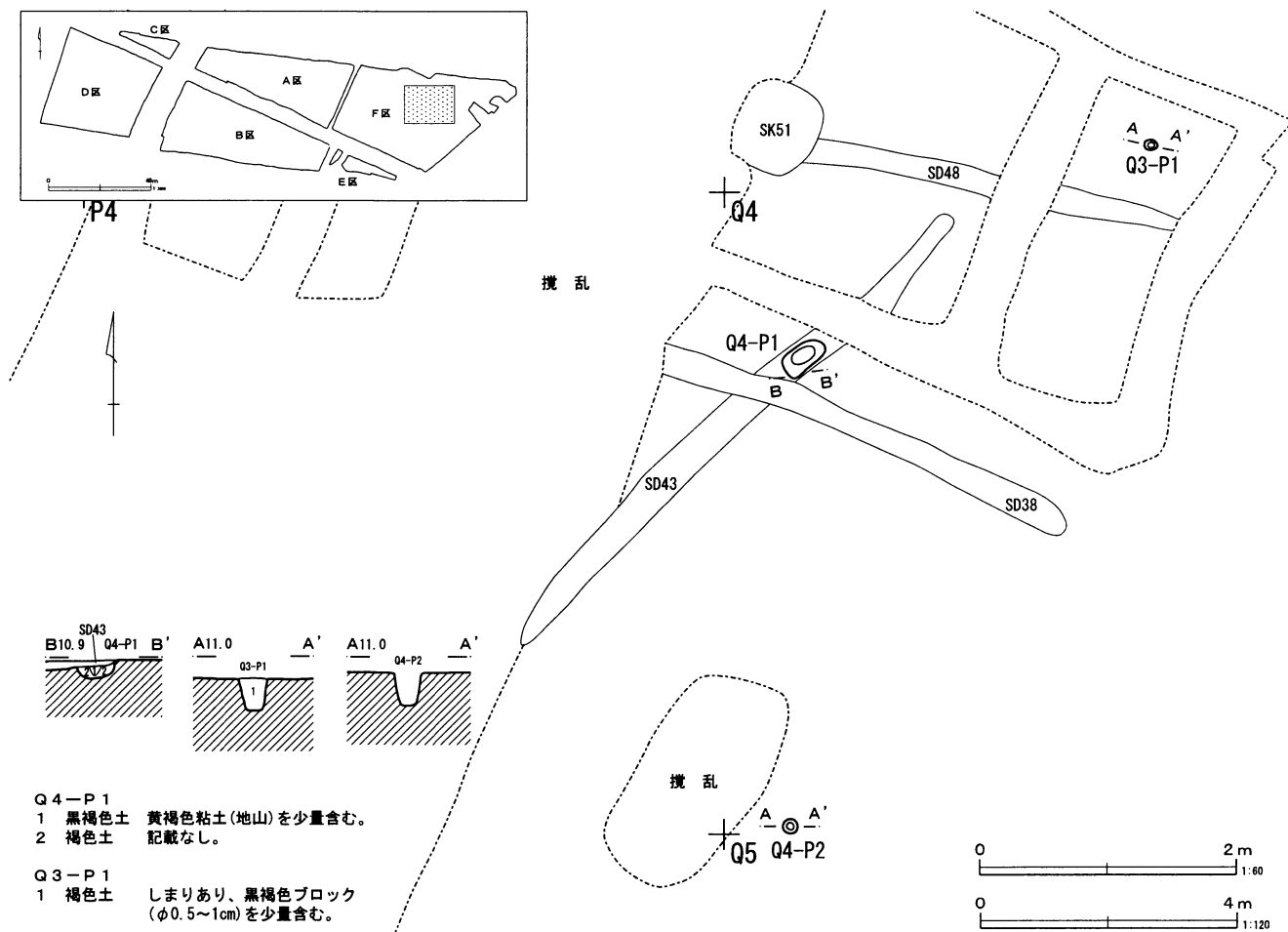


第131図 ピット(8)

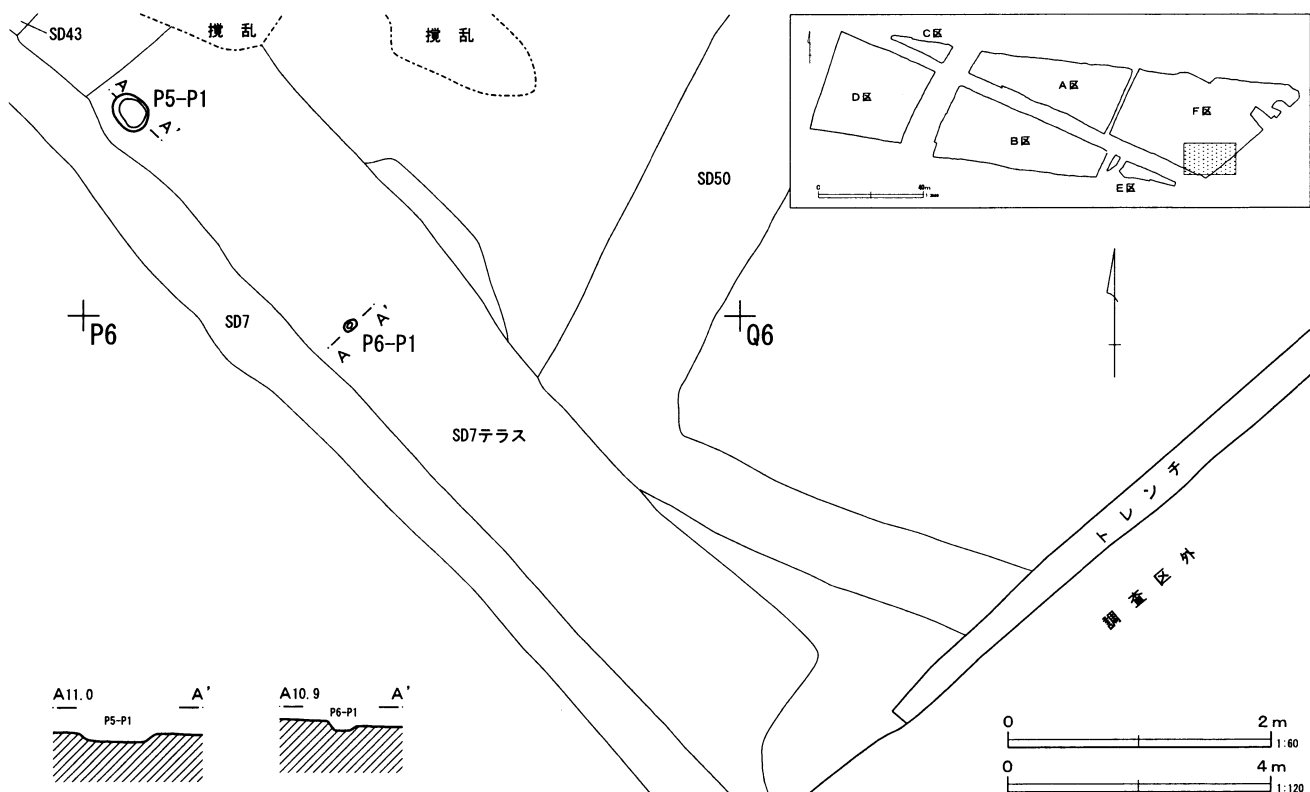


- | | |
|--|---|
| <p>N6-P2</p> <p>1 黒褐色土 黄褐色粘土(地山)の混土層。(柱の痕)</p> <p>2 灰白色土 しまりあり、黒褐色土ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む。(柱の掘り方)</p> <p>N6-P2</p> <p>1 黒褐色土 黄褐色粘土(地山)の混土層、酸化による暗赤褐色の斑点が見られる。</p> <p>2 黒褐色土 黄褐色粘土(地山)を少量含む。</p> <p>3 黒褐色土 しまりあり、黄褐色地山ブロック(φ1~2cm)を少量含む。</p> | <p>N5-P1</p> <p>1 黒褐色土 しまりあり、褐色ブロック(φ2~3cm程)・褐色粒子を多量含む。</p> <p>2 黒褐色土 しまりあり、褐色粒子を少量含む。</p> <p>3 褐色土 しまりあり、黒褐色ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む。</p> <p>N5-P2・3</p> <p>1 黒褐色土 しまりあり、褐色ブロック(φ2~3cm程)・褐色粒子を多量含む。</p> <p>2 黒褐色土 しまりあり、褐色粒子を少量含む。</p> <p>3 褐色土 しまりあり、黒褐色ブロック(φ0.5~1cm)を少量含む。</p> |
|--|---|

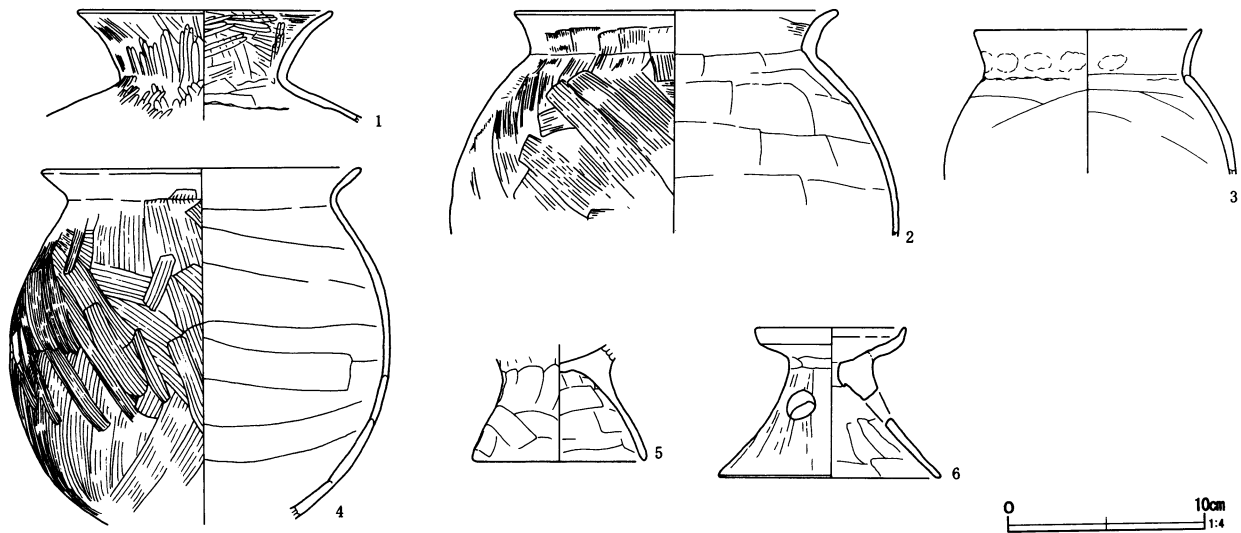
第133図 ピット(10)



第134図 ピット(11)



第135図 ピット(12)



第137図 グリッドピット出土遺物

B区 (第128図)

B区では、4基のピットを検出した。4基とも、第5号周溝遺構の内側で検出した。

ピット覆土は全て単層で、地山の灰白色粘質土・黄褐色シルトブロックを含む黒褐色～暗褐色土で、他の古墳時代前期の遺構覆土と共通していたため、概ね古墳時代前期に属していたものと考えられる。第5号周溝遺構に伴っていたかどうかは明らかにできなかった。

遺物は出土しなかった。

ピット出土遺物 (第137図1～6)

各グリッドで検出したピットから出土した遺物は、小破片が多く、器種・器形の判別が可能な遺物は極めて少ない。

出土遺物のうち、図示可能な遺物は6点であった。C区・D区・そして、A区との境界付近のF区から出土した。

1は、壺である。C区E2-P2から出土した。口縁部の破片である。

単純口縁壺で、口縁部は大きく外反する。口縁部内外面に、粗いヘラミガキが施されていた。

肩部に張りがあり、全体の器形は復元できなかったが、球形の胴部であったと思われる。

胎土に、白色針状物質を含んでいたため、比企丘陵産の粘土を使用していたと考えられる。

2は、甕である。D区E4-P5から出土した。口縁部から胴部にかけての破片である。

口縁部は、くの字に屈曲するが、短く外反する。

胴部には張りがなく、全体の器形は復元できなかったが、胴部中位に最大径があると考えられる。長胴となる可能性もある。

胴部の調整は、外面は刷毛目、内面はヨコナデが施されていたが、風化が著しいため、観察が困難であった。

胎土に、白色針状物質を含んでいたため、比企

第29表 グリッドピット出土遺物観察表 (第137図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	E2	壺	(12.8)	[5.6]		口縁部1/2	D	良好	明黄褐色	P2	77-1
2	E4	台付甕	(16.4)	[11.3]		口縁～胴部	D	普通	黒褐	P5外面風化	77-2
3	E4	甕	11.5	[7.4]		口縁部90%	A	普通	浅黄橙	P5内外面風化 外面頸部指頭痕	
4	E2	台付甕	(16.0)	[18.2]		口縁～胴部	A	良好	灰褐	P2	77-3
5	E4	台付甕		[5.9]	8.8	脚部	A	普通	橙	P5内外面風化	77-4
6	M4	器台	(7.6)	[7.7]	(11.2)	1/4	A	普通	橙	P1	

丘陵産の粘土を使用していたと考えられる。

3は、小型の台付甕である。口縁部は約90%残存していた。D区E4-P5から出土した。

口縁部の屈曲は弱く、やや直立気味に立ち上がっていた。

胴部は、なで肩で、全体の器形は復元できなかったが、胴部中位に最大径があったと考えられる。

口縁部内外面に指頭痕が認められ、特に外面は指頭痕が連続していた。

同じピットから出土した3と胎土が共通し、同一個体の可能性もあるが、接合せず、明らかにできなかった。

4は、台付甕である。C区E2-P2から出土した。口縁部から胴部下位が残存していた。

口縁部はくの字に屈曲し、大きく外傾する。胴部には張りがなく、全体の器形は復元できなかったが、胴部中位に最大径がある。

胴部の調整は、外面は粗い刷毛目、内面はヘラナデが施されていた。

5は、台付甕の脚部である。D区E4-P5から出土した。

小型の台付甕の脚部と考えられ、同じピットから出土した3と胎土が共通し、同一個体の可能性もあるが、接合せず、明らかにできなかった。

内外面とも風化が著しく、調整が不明瞭であったが、外面は刷毛目の単位のみ観察できた。

6は、器台である。A区との境界付近の、F区M4-P1から出土した。1/4残存していたが、全体の器形が復元できた。

受部は椀状だが直線的に外傾し、口縁部で垂直に折れ、立ち上がる。脚部は八の字状に開く。

表面の調整は、口縁部は強いヨコナデ、胴部は、外面がヘラミガキ、内面はヨコナデが施されていた。

脚部には透孔が認められたが、孔径が1.5cmと大きい。接合部には貫通孔が認められ、孔径は1.0cmであった。

全体的に風化が著しい。

E・F区 (第131～136図)

E・F区では、39基のピットを検出した。

E・F区のピットは、配置に規則性の認められるピットが数箇所で見出され、柱痕跡の確認できるピットも複数存在していた。

しかしピットの多くは、単独で見出され、掘立柱建物跡・柵列等、建物遺構に伴うような規則性が認められない遺構であった。

ピット覆土は、殆どが単層であり、地山の灰白色粘質土・黄褐色シルト(粘土)ブロックを含む黒褐色～暗褐色土で、他の古墳時代前期の遺構覆土と共通していたため、概ね古墳時代前期に属していたものと考えられる。

以下、E・F区において、特に配列に規則性の認められたピットについて、概要を記す。

E区

E区では、N6-P1～P4の4基のピットが方形に分布していた。第4号竪穴住居跡の東側で見出したが、第4号竪穴住居跡との重複関係はなく、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

4基のうち、N6-P1・P2の2基で、柱痕跡を見出した。

1間×1間の掘立柱建物跡、あるいは床面の失われた竪穴住居跡の柱穴であった可能性もあったが、N6-P3・P4は掘り込みが極めて浅く、建物跡の柱穴とは明確に判断できなかった。

遺物は出土しなかった。

F区

F区では、A区との境界付近の、M・N-5グリッドにおいて、配列に規則性のある遺構を見出した(第131・133図)。

M5-P1～P3(第131図)は、3基のピットは、等間隔に直線的に並んでいた。柱痕跡は認められなかったが、桁行もしくは梁行2間の掘立柱建物跡の可能性があったが、遺構の南側は調査区

外となり、用水路によって分断されていたため、掘立柱建物跡と判断できなかった。

また、遺構の周囲に、規模の小さいピットを検出したが、関係を明らかにすることができなかった。遺物は出土しなかった。

M5-P6・N5-P1・P2（第131・133図）は、3基のピットが、等間隔に直線的に並んでいた。このうち、N5-P1・P2において、柱痕跡が

認められた。

桁行もしくは梁行2間の掘立柱建物跡の可能性があったが、遺構南側は調査区外となり、用水路によって分断されていたため、掘立柱建物跡と判断できなかった。

遺構の周囲に、規模の小さいピットを検出したが、関係を明らかにすることができなかった。

遺物は出土しなかった。

10. 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わないグリッド、表採等の遺物を一括して報告する。

出土遺物は、特にB区の埋没谷付近からの出土が多かった。B区西側の、F・G・H-5・6グリッドを中心に出土した。図示可能な遺物は、43点であった（第138・139図）。

掲載資料は、器種別に掲載したため、必ずしも出土地点別になっていない。出土地点については、本文中の各遺物の記載および観察表（第30表）を参照されたい

1～10は、壺である。

1は、H-5グリッドから出土した。口縁部の破片である。頸部は高めに直線的に立ち上がり、口縁部は、二重口縁風に短く内湾しながら立ち上がる。口縁端部は、強いナデにより面取風に平坦となっていた。口縁部外面は、下端部に粘土帯を貼付し、棒状浮文を貼付していた。

2は、H-5グリッドから出土した。口縁部の破片である。大きく外反する単純口縁に口縁部外面に幅広の粘土帯を貼付し、二本一組の棒状浮文と、沈線文が交互に施されていた。

3は、H-5グリッドから出土した。単純口縁壺である。風化が著しいが、口縁部外面に縦方向のヘラミガキが認められた。

4は、G-5グリッドから出土した。口縁部を

欠損していた。平底で、円盤状の底部である。やや長胴であり、内外面とも風化していたが、外面は細かいヘラミガキ、内面はヘラナデされていた。

5は、H-5グリッドから出土した。底部は薄い。輪台状で、中央部は凹んでいた。成形がやや粗雑で、胴部の輪積痕が明瞭に残されていた。

6は、H-5グリッドから出土した。直線的に開く口縁部で、端部に異なる粘土を貼り付け、外面に段を作出している。口縁部は、内外面とも、丁寧なヘラミガキが施されていた。

7は、F-6グリッドから出土した。小型の壺である。口縁部を欠損していた。丸底風だが、小さな底部がある。なで肩で、胴部下位に最大径がある。外面全面に赤彩が認められた。

8は、H-5グリッドから出土した。平底で、円盤状の底部である。やや長胴であり、内外面とも風化していたが、外面は細かいヘラミガキ、内面はヘラナデ後、胴部下位にはヘラミガキされていた。

9は、H-5グリッドから出土した。胴部上半部分の破片である。櫛描による沈線文を上下に施文し、間に二段の波状文が施されていた。胎土に白色針状物質が含まれていた。

10は、H-6グリッドから出土した。大廓式の大壺である。口縁部の破片である。大きく外反する口縁部で、内面端部に粘土帯を、外面口縁下

端部に断面三角形の粘土帯を貼付している。口縁部外面は、棒状浮文ではなく、沈線文が施されていた。胎土に白色の軽石状物質を多量に含んでおり、駿河地方からの搬入品と考えられる。

11～23は、甕である。

11は、G-6グリッドから出土した。台付甕と考えられる。脚部を欠損していた。胴部中位に最大径があり、長胴である。風化していたが、外面胴部下位に粗い刷毛目、中位～上位はやや細かい刷毛目が施されていた。内面は、ヘラナデされていた。

12は、I-4グリッドから出土した。短く屈曲する口縁部である。外面口縁端部は、強いナデが施されていた。また、内面口縁部上部は、背の丸い工具による強いヨコナデにより、ゆるく凹んでいた。口径に比べ胴部の径が大きく、残存している部分での最大径は、32.6cmである。

13は、H-5グリッドから出土した。口縁部の破片である。くの字に屈曲する口縁部で、肩部はあまり張らない。風化が著しいが、外面口縁部は、刷毛目の後、上半部は強いヨコナデが施されていた。

14～23は、台付甕の脚部である。

14は、H-5グリッドから出土した。接合部から胴部の立ち上がりは、大きく開く。脚部外面は、細かい刷毛目が施されていた。

15は、H-5グリッドから出土した。胴部との接合部が残存していた。接合部は、輪台状の脚部に、丸底の甕底部を接合し、接合部に粘土帯を巻きつけ、補強している。脚部は直線的に大きく開く。風化が著しく、調整観察が困難であったが、内面にヘラナデが認められた。

16は、H-5グリッドから出土した。小型の台付甕と考えられる。脚部は輪台状に成形し、胴部の凸部と接合していたと考えられるが、胴部は凸部ごと失われ、脚部の接合面が露出していた。胴部との接合部には、指頭による成形痕が認められた。脚部外面は、細かい刷毛目が施されていた。

17は、H-5グリッドから出土した。やや直立

気味の脚部である。胴部の接合部は残存していたが、接合方法は明らかにできなかった。脚部外面は、縦方向の刷毛目が施されていた。胎土に、白色針状物質を含んでいた。

18は、G-5グリッドから出土した。接合部が残存していたが、接合方法は明らかにできなかった。脚部外面は、やや粗い刷毛目が施されていた。

19は、H-5グリッドから出土した。直線的に八の字に開く脚部である。接合部が残存していたが、胴部の凸部のみ残存し、胴部は失われていた。風化が著しく、調整は不明瞭であった。

20は、H-5グリッドから出土した。脚部は直線的に開く。接合部が残存していたが、接合方法は明らかにできなかったが、接合部は薄く、台状の脚部に、胴部を接合していたと思われる。

21は、H-5グリッドから出土した。小型の台付甕の脚部と考えられる。接合部が残存していた。脚部を輪台状に成形し、胴部の凸部と接合していた。全体的に風化が著しく、調整は不明瞭であった。

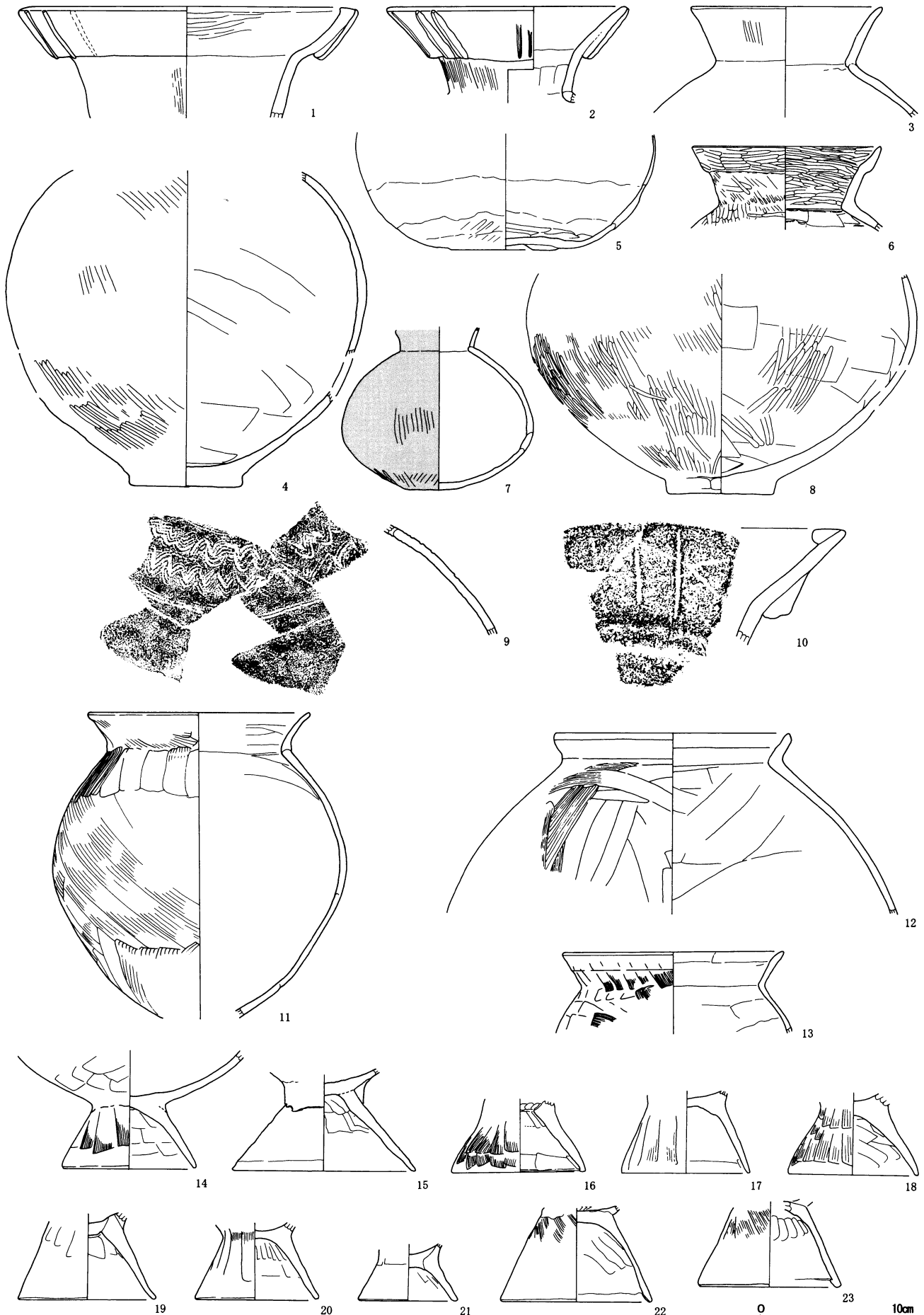
22は、S字状口縁台付甕の脚部である。脚部は台状の成形で、胴部と接合していた。外面の接合部付近は、斜め方向の刷毛目、下部はナデが施されていた。脚部裾内面は、折り返されていた。また、接合部には、砂粒の集積が認められた。

23は、I-5グリッドから出土した。S字状口縁台付甕の脚部である。脚部は台状の成形で、胴部と接合していた。外面の接合部付近は、斜め方向の刷毛目、下部はナデが施されていた。脚部裾内面は、折り返されていた。

24は、H-5グリッドから出土した。甑と考えられる。内面口縁部に、指押さえ痕が認められた。成形は粗く、輪積痕が明瞭に残されていた。胎土も大粒の石英・チャート・片岩を含む粗い胎土であった。

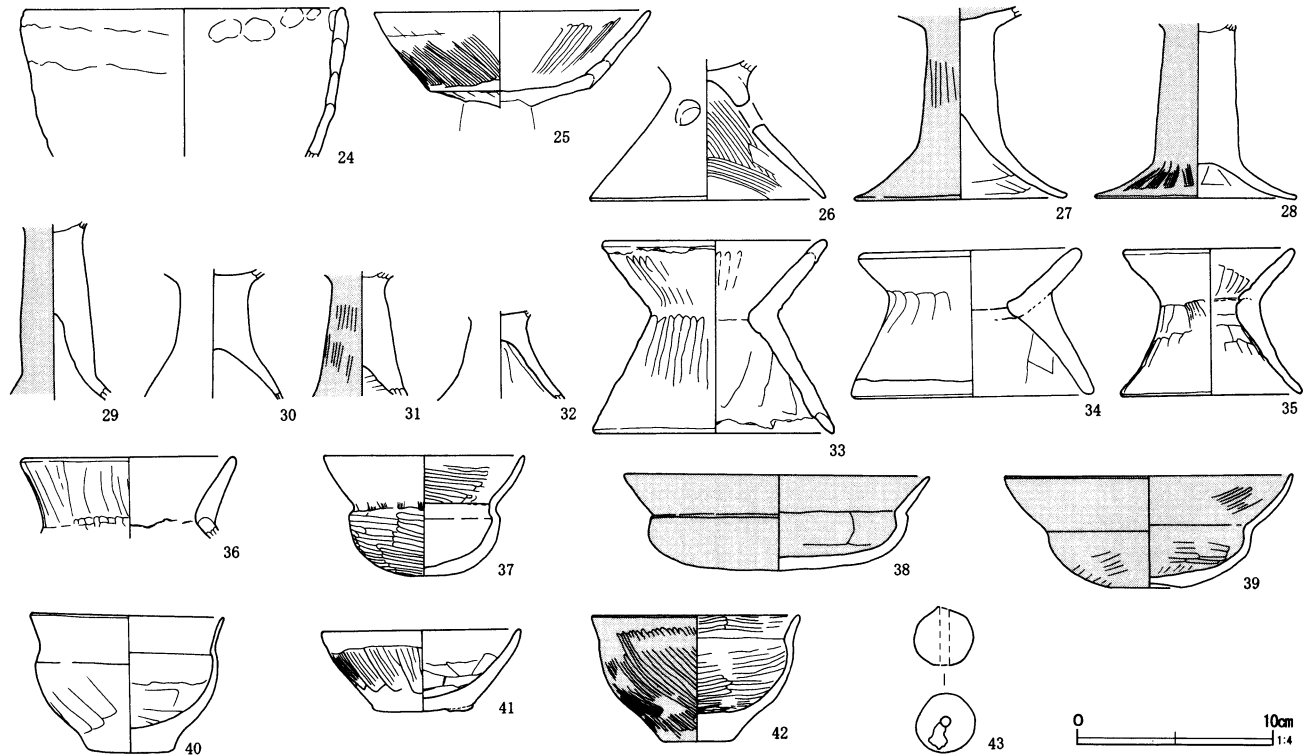
25～32は、高坏である。

25は、G-5グリッドから出土した。坏部のみ残存していた。箱型の坏部で、接合部が露出していた。円形の小さな凸部で、脚部の凹みにはめ込んでいた



第 138 図 グリッド出土遺物 (1)

0 10cm 1:4



第139図 グリッド出土遺物（2）

と考えられる。柱状の脚部となる可能性がある。

26は、脚部が八の字に開く。

27～31は、柱状脚の高坏である。27～29は、背の高い脚部となる。中実で、27は裾が大きく開き、28は、短く広がる。28・29の胎土には、白色針状物質が含まれていた。また、28・29は、坏部との接合面が露出し、丸く凹んでいた。坏部の凸部をはめ込んで接合していたと考えられる。

30・31は、やや背の低い脚部となるが、裾部を欠損していた。30は、裾部がやや内湾気味に開く。31は、坏部との接合面が露出し、丸く凹んでいた。坏部の凸部をはめ込んで接合していたと考えられる。

32は、P-6グリッドから出土した。小型の高坏の脚部と考えられる。接合部が残存していたが、接合方法は明らかにできなかったが、接合部が厚く、坏部底部の円孔に、円柱上の脚部をはめ込む方法であったと考えられる。

33～35は、粗製器台である。台付甕同様に、輪台状の脚部を成形し、口縁部（受部）を接合している。

3点とも風化が著しいが、外面の調整は、33が

粗いヘラミガキ、34・35は、刷毛調整である。

36は、小型壺の口縁部と考えられる。胎土は、水簸したような粘土で、溶けたように風化していた。

37～42は、罎・鉢である。

37は丸底の底部で、胴部には横方向のヘラミガキが施されていた。胎土に白色針状物質を含んでいた。

38は、扁平な鉢で、内外面に赤彩が認められた。胎土は、水簸したような粘土で、溶けたように風化していた。

39は、上げ底風の底部で、口縁部が大きい。内外面とも赤彩されていた。

40・42は、小型壺状の底部で、口縁部が短く屈曲する。42は外面が細かいヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキが施され、外面に赤彩されていた。

41は、脚部を逆転させたような坏型の鉢である。底部は輪台状で、外面は刷毛目、口縁部はヨコナデされていた。胎土に白色針状物質を含んでいた。

43は、土玉である。表面採集品である。今回の調査地点では、唯一の土玉である。胎土に白色針状物質を含んでいた。

第30表 グリッド・表採・一括出土遺物観察表 (第138・139図)

No.	遺構	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	H5	壺	(22.2)	[8.0]		口縁部1/2	A	普通	にぶい橙	内外面風化、棒状浮文有	77-5
2	H5	壺	(16.8)	[6.9]		口縁部3/4	A	普通	橙	内外面風化、棒状浮文と沈線交互	77-6
3	H5	壺	(13.6)	[7.9]		口縁部1/2	A	普通	赤	内外面風化	77-7
4	G5	壺		[22.6]	8.0	1/4	A	普通	浅黄橙		
5	H5	壺		[8.4]	7.6	底部	A	普通	にぶい橙	内外面風化	
6	H5	壺	13.5	(6.1)		口縁部ほぼ完形	A	普通	にぶい橙		77-8
7	F6	壺		[12.0]	(4.0)	9/10	A	普通	褐	赤彩	78-1
8	H5	壺		[15.8]	(7.8)	胴～底部	A	普通	にぶい褐		
9	H5	壺				胴部破片	D	良好	にぶい黄橙		
10	H6	壺				口縁破片	E	良好	浅黄橙	大廓	
11	G6	台付甕	15.8	[22.1]		3/4	B	良好	灰褐	内外面風化	78-2
12	I4	甕	(16.9)	[13.1]		口縁～胴部	D	良好	灰白	口縁部内面背の丸い工具ナデ	
13	H5	甕	(15.8)	[5.9]		口縁部1/4	B	普通	橙	外面風化	
14	H5	台付甕		[8.4]	(9.6)	胴～脚部	B	普通	明赤褐		
15	H5	台付甕		[7.4]	(13.4)	脚部3/4	A	普通	にぶい黄橙	外面風化	78-3
16	H5	台付甕		[5.3]	9.5	脚部完形	A	普通	にぶい黄橙		78-4
17	H5	台付甕		[6.0]	(9.2)	脚部1/2	D	普通	橙	外面風化	
18	G5	台付甕		[5.9]	9.4	脚部	B	普通	褐		78-5
19	H5	台付甕		[6.2]	9.9	脚部完形	A	普通	淡赤橙	外面風化	
20	H5	台付甕		[5.5]	8.7	脚部完形	A	普通	橙	外面風化	
21	H5	台付甕		[4.1]	(6.6)	脚部1/4	A	普通	にぶい黄橙		78-6
22	B区	台付甕		[5.9]	(10.6)	脚部2/5	その他	普通	にぶい黄橙	胴底部砂粒集積	
23	I5	台付甕		[6.2]	(10.0)	脚部2/5	その他	普通	浅黄橙	口縁部折り返し、内面天井部指押さえ	
24	H5	甕	(15.9)	[7.6]		口縁部1/3	A	普通	明赤褐	内外面風化、内面口縁指押さえ	79-1
25	G5	高坏	14.0	[4.8]		4/5	A	普通	黄橙	柱状脚?	79-2
26	H5	高坏		[7.1]	(12.0)	脚部1/6	A	良好	にぶい橙	外面風化	
27	B区	高坏		[9.7]	(10.8)	脚部4/5	B	良好	にぶい褐	赤彩、内外面風化	79-3
28	H5	高坏		[8.9]	(10.4)	脚部3/4	D	普通	淡橙	赤彩、外面風化	
29	H5	高坏		[8.8]		脚部	D	普通	にぶい橙	赤彩、内外面風化	
30	H5	高坏		[6.6]		脚部	A	普通	にぶい橙	内外面風化	
31	H5	高坏		[6.3]		脚部	A	普通	にぶい黄橙	赤彩	
32	P6	高坏		[4.5]		脚部	A	普通	橙	外面風化	
33	B区	器台	(11.2)	9.8	(12.2)	2/3	A	良好	橙		79-4
34	H5	器台	(10.8)	[7.4]	(11.8)	1/3	A	普通	にぶい橙	外面風化	
35	H5	器台	(8.6)	7.4	(9.2)	2/3	A	普通	にぶい橙	外面風化	79-5
36	G5	小型壺	(10.8)	[4.1]		2/5	C	良好	灰白	水簸粘土、軟質、外面風化、外面頸部へラ状工具痕	
37	I6	埴	(10.2)	6.1		2/3	D	普通	にぶい橙		79-6
38	B区	鉢	(15.5)	[4.8]		3/4	C	普通	浅黄橙	赤彩、外面風化	80-1
39	H5	鉢	14.7	5.7	3.0	4/5	B	普通	にぶい橙	赤彩、	80-2
40	I5	鉢	9.8	7.0	4.3	4/5	A	普通	にぶい橙		80-3
41	H5	鉢	(10.0)	[4.1]	(5.0)	1/2	D	普通	橙	底部輪台	80-4
42	表採	鉢	(10.2)	6.4	3.5	1/3	D	普通	明赤褐	赤彩、内面黒色処理	80-5
43	表採	土玉	長さ3.0cm 幅3.0cm 孔径0.5cm			ほぼ完形	C	普通	にぶい橙		

11. 縄文時代の遺構と遺物

白井沼遺跡では、縄文時代の遺構と遺物が少数であるが検出した。

川島町内では、現在確認されている縄文時代の最古の遺物は、川島町史（川島町2006）によれば、早期条痕文系土器であるという。しかし、発掘調査ではなく、採集品である。

川島町内の遺跡においては、これまで、発掘調査によって、縄文時代の遺構が検出された例は、芝沼堤外遺跡（金子2004）のみであった。

芝沼堤外遺跡は、現荒川の堤外の地表下約5mで検出された、縄文時代前期諸磯b・c式期の遺跡である。住居跡3軒、土壇20基が検出されている。

遺跡の現状は、低湿地で、ビオトープとして環境の再生の試みが行われている。

しかし、調査報告書によれば、遺跡の形成された縄文時代当時は、コナラ・クリ等の落葉広葉樹が広がる植生で、川に近い環境ではあったが、既に陸地化し、洪水の影響を受けながらも、遺構を構築し、生活が可能な環境下にあったことが明らかとなっている。現状では、この芝沼堤外遺跡が最古の遺構検出例となる。

堤内の自然堤防上では、今回報告する白井沼遺跡で、縄文時代中期中葉の完形に近い土器が1点と後期初頭の土器片が出土した。

また、近年、川島町域では、首都圏中央連絡自動車道建設事業にともなって、縄文時代の調査事例が増加している。

平成18年度現在、調査中の遺跡であり、詳細は調査報告を待ちたいが、概要をのべる。

川島町役場付近の平沼一丁田遺跡（第3図遺跡分布図90）では、集石土壇に伴って、中期の土器片が出土している。

また、本遺跡の東約500mに位置する富田後遺跡でも、縄文時代の遺物が出土した。

さらに、堤外に所在する東野遺跡では、縄文時代前期末葉十三菩提式の竪穴住居跡、土壇が検出されている。

東野遺跡は、現荒川に面した、荒川河川敷内の遺跡で、現地地表下約5mで遺構が検出された。

検出した遺構は、縄文時代前期の竪穴住居跡7軒、土壇47基、また、包含層中から多量の縄文土器が出土した。調査中の遺跡であるため、詳細は、調査報告によって今後明らかになっていくと考えられるが、縄文時代当時の環境は、芝沼堤外遺跡と同様、陸地化した環境が想定される。

白井沼遺跡で検出した縄文時代の遺構は、古墳時代前期の遺構確認面（地山）となった、黄褐色シルト層中で検出した。

シルト層中で土壇状の掘り込みを検出し、中期中葉の完形に近い深鉢が横倒しの状態で出土した。便宜的に埋甕として調査を行ったが、遺構の性格について明らかにできなかった。

この黄褐色シルト層の下位層は、青灰色の粘土層（所謂青ネバ）となり、遺構・遺物は検出できなかった。白井沼遺跡の立地する自然堤防は、縄文時代中期中葉の遺構が掘り込まれていたことから、黄褐色シルトを形成した基盤層は、中期中葉以前に形成されたものであると考えられる。

縄文時代の遺物は、他に、古墳時代以降の遺構覆土から、中期から後期初頭に属する土器片と、石器が出土した。以下、白井沼遺跡の縄文時代の遺構と遺物について報告する。

なお、本遺跡出土縄文時代の遺物については、既に「川島町史」（川島町2005）において先行して報告されている。遺物の記載・実測図の内容については、川島町史と本報告での変更等はない。ただし、遺構の詳細、石器等を新たに追加したため、本報告を正式な報告とする。

第1号埋甕 (第140・141図)

第1号埋甕は、F区O-4グリッドで検出した。古墳時代前期の遺構確認面(地山)となった、黄褐色シルト層中で検出した。

単独の検出であり、他に伴う遺構は検出できなかった。

遺構は、黄褐色シルト層を精査中に検出した。縄文時代中期中葉の深鉢が露出したため、土器周辺をさらに精査したところ、土壌状の掘り込みを検出した。土器が露出した状態で検出したため、遺構の掘り込みは、実際は、現状よりやや高い位置から掘り込まれていたものと考えられる。

土壌状の掘り込みの規模は、直径0.5mの円形で、深さは0.25mであった。

覆土は、1層で、粘性のある灰白色土であった。一部マンガン等の集積(班鉄)があるものの、混入粒子は殆ど認められず、地山である黄褐色シルトとの区別は、粘性と色調の違いがある程度であり、極めて区別が困難であった。

遺物は、中期中葉の深鉢が横倒しの状態で出土した。底部を欠損していたが、ほぼ完形となる土器であった。

遺構の時期は、出土遺物から、勝坂式終末～加曾利E I式初頭期に属するものと考えられる。出土遺物については後述する。

縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、第1号埋甕、古墳時代前期以降の遺構、グリッドから、縄文時代中期中葉・後期初頭の土器・石器が出土した。

図示した遺物は、深鉢9点・石器1点であった。

1は、第1号埋甕から出土した。底部を欠損するがほぼ完形で、頸部で括れる筒状の器形である。口縁部は、刻み目を有する二本隆帯で区画し、同様の逆U字状隆帯で四単位に区画する。地文には細密な捺糸Lを縦位に施文し、胴部は二本の沈線

で雲形状のモチーフを施文する。勝坂式終末～加曾利E I式初頭期に属するものと考えられる。

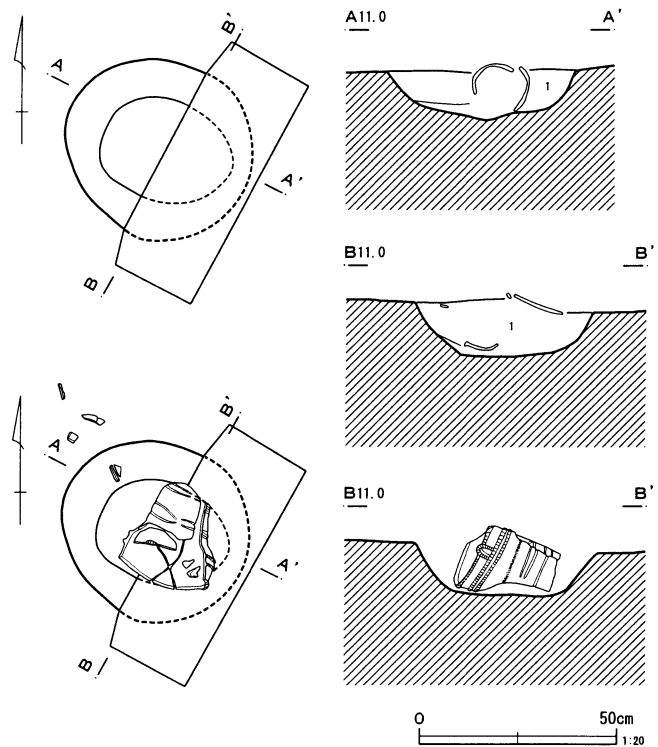
2は、H-5グリッドから出土した。集合沈線を施文する勝坂式終末の土器である。

3は第41号溝跡から出土した。勝坂式と考えられる。

4は、N-5グリッドから出土した。深鉢の底部の破片である。刻みを施す低隆帯脇に爪形文を施す。勝坂式と考えられる。

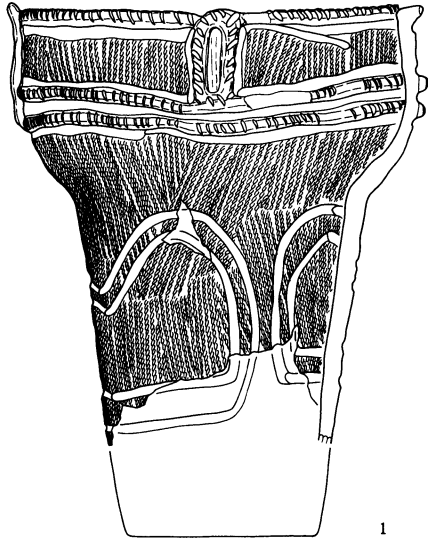
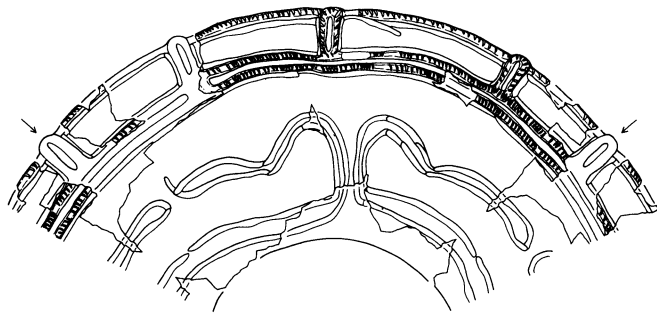
5～9は、第41号溝跡から出土した。幅広の磨消縄文で曲線モチーフを施文する。地文は単節LR縄文を施文する。後期初頭の称名寺式土器である。

10は、古墳時代前期の第28号土壌から出土した。石皿と考えられる。

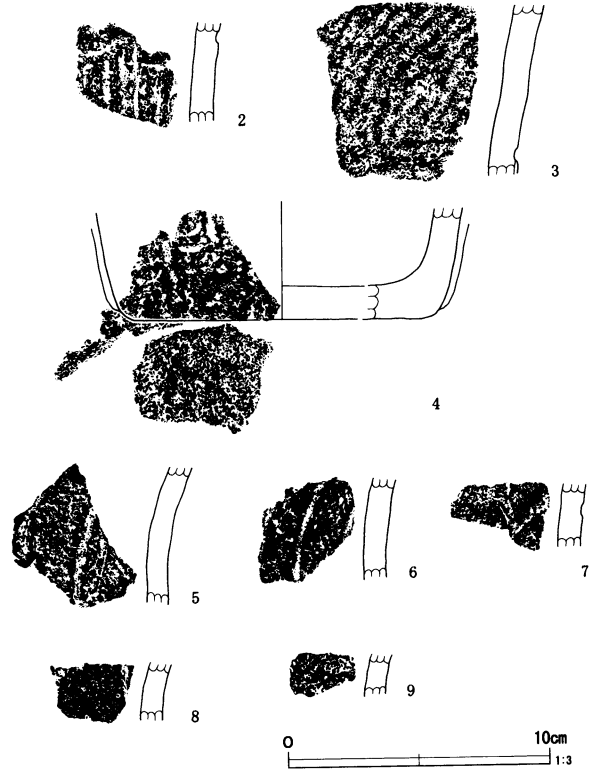


第1号埋甕
1 灰白色土 粘性ややあり、しまりあり、マンガンの沈澱がまばら、混入物が殆ど見られない、褐色の地山との見分けが難しい

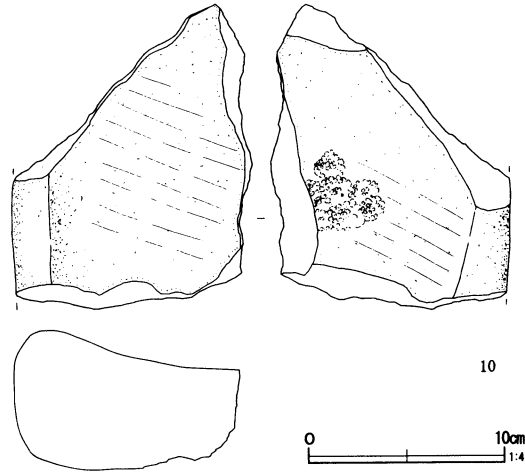
第140図 第1号埋甕



0 10cm
1:4



0 10cm
1:3



0 10cm
1:4

第 141 図 縄文時代の遺物

V 調査のまとめ

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡4棟、周溝遺構4基、土壇49基、溝跡42条、井戸跡4基、近世以降の土壇6基、井戸跡2基、溝跡5条を検出した。

古墳時代に限って言えば、既に刊行された「白井沼1」（中山2005）の検出遺構と合わせると、遺跡全体としては、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、周溝遺構9基、土壇87基、溝跡66条、井戸跡6基となる。

遺物は、周溝遺構、土壇、溝跡を中心に、コンテナ約125箱分の多量の遺物が出土した。

古墳時代前期の遺構は、遺物量に比べて竪穴住居跡の検出が少なく、周溝遺構・掘立柱建物跡が主体となる。台地上の一般的な古墳時代前期の集落遺跡が、竪穴住居跡を中心に構成されることを考慮に入れば、特異な集落形態となる。

しかし、近年、首都圏中央連絡自動車道建設に伴う川島町内の発掘調査によって、低地の自然堤防上の集落遺跡の様相が次第に明らかになりつつある。本遺跡に近接する、富田後、平沼一丁田、元宿遺跡では、周溝遺構、掘立柱建物跡、井戸跡を中心に集落が構成され、本遺跡と同様の形態となることが明らかとなってきた。

これらの遺跡は平成18年度現在調査中であり、詳細については今後の調査報告を待たねばならないが、竪穴住居跡ではなく、周溝遺構・掘立柱建物跡等で構成される集落遺跡の姿が、低地の自然堤防上の集落遺跡の標準的な姿となる可能性を示唆するものである。

出土遺物では、東海西部系の壺・高坏・S字甕などととも、駿河地方からの搬入品と考えられる、大廓式土器の大型壺・複合口縁壺・大型甕等が出土した。大型甕以外は、複数個体出土した。また、大型壺と同じ胎土の高坏・鉢も出土した。埼玉県内の遺跡で出土する大廓式土器は、大型壺の口縁部のみ単体で出土することが多く、複数器種・個

体の出土は、県内では初めての例となった。

また、第21号溝跡からは、大型壺とともに、鶏形土製品の頭部が出土した、中空の埴輪状で、同じグリッドから羽部と思われる破片も出土した。

今回の調査では、時間的な制約から、事実報告にとどめ、各遺構・遺物の詳細な検討を行うことができなかった。

以下、遺構・遺物の概要を簡単にまとめる。詳細な検討は、別稿を予定している。

1 検出遺構について

白井沼遺跡の今回の調査で検出した遺構については、その分布傾向から、概ね次の個所に集中傾向が認められた。

- 1 C・D区
- 2 A区西側・B区西側
- 3 B区東側・E区

各分布域ごとに、遺構が集中して検出された。

竪穴住居跡は、遺構の重複関係の明らかなものは少ないが、他の遺構に壊されて検出したものがあり、最も古い遺構のひとつとして考えられる。竪穴住居跡どうしの重複はなく、単独で存在している。

竪穴住居跡に後続する遺構として、掘立柱建物跡・周溝遺構がある。

掘立柱建物跡は、3間×2間、2間×2間の規模を有するが、桁行の一辺の柱穴が、独立棟持柱風に張り出すものもある。

遺構の重複関係が明らかなものは少ないが、D区において、第4号掘立柱建物跡が第3号周溝遺構を、またA区で第3号掘立柱建物跡が第57号土壇を壊していたことから、最も新しい遺構である可能性がある。

周溝遺構は、出土遺物に甕の比率が高く、底部穿孔の壺形土器が皆無であることや、掘立柱建物跡との重複があることなどから、墓以外の機能を想定した。遺構の名称の定義については、本文中で明らかにしたので参照されたい。

周溝遺構の分布は、周遺構どうしの重複はなく、単独で存在し、3箇所分布域に点在していた。

遺構は、掘立柱建物跡に壊されているものがあり、重複関係から遺構の変遷を想定すれば、竪穴住居跡→周溝遺構→掘立柱建物跡の順に変遷した可能性がある。

周溝遺構は、方形周溝墓と形態が似ているため、これまで盲目的に方形周溝墓として報告されてきたものである。しかし、近年、各地の調査成果をもとにした、飯島義雄（飯島1998）・及川良彦（及川1998他）、により、方形周溝墓とされてきたもののうちの一部は、建物跡の可能性が指摘されている。

さらに、低地部における「周溝を有する建物跡」については、福田聖（福田1999他）による精力的な研究が行われている。

福田の提示した「周溝を有する建物跡」の認定法と、本遺跡の遺構と比較すると、本遺跡の場合、相対的に溝幅が細く浅い点、出土遺物に甕が多い点は合致するものの、溝内部の規模がやや小さい。また、遺構の全体が明らかとなった遺構が少なく、周溝の一辺が切れていたかどうかは明らかにできなかった。

そして、溝内部に柱穴を検出できなかったため、建物遺構であると積極的に判断する根拠には欠けている。

しかし、遺構の分布状況は、周溝遺構それ自体は単独で存在し、群構成とならない点、出土遺物に底部穿孔の壺が含まれず、甕が多い点などから、方形周溝墓であるとも言えない。さらに、遺構の重複関係が、竪穴住居跡→周溝遺構→掘立柱建物跡の順に変遷した可能性が考えられ、出土土器に大きな時期差が認められないことから、一連の遺

構は、断絶することなく連続的に構築されたものと考えられる。このため、居住域の中に、ある時期のみ墓域が構築されるとは考えにくく、やはり周溝遺構は居住に関連した施設であったと考えたい。

溝跡は、直線的に伸びる長大な溝と、周溝遺構・竪穴住居跡を囲むようにL字型に検出されたものがある。

このうち、長大な溝跡として、第2・7・19号溝跡があげられる。これらの溝は、調査区域全体にわたって検出され、定規で引いた線のように直線的であった。他の遺構は、概ね溝跡と主軸方位が同一か直行していた。

遺構の主軸方向については、遺跡の立地する自然堤防が、南西から北東方向に向かって伸びており、この地形に沿っていたと考えることもできる。長大な溝跡は、この自然堤防を横断する方向に構築されていた形となる。

溝跡は他の遺構に壊されていることが多く、特に第2・19号溝跡は、一度埋没した後、第5号周溝遺構に壊されていた。このことから、集落の古い段階に掘り込まれ、第5号周溝遺構構築時には埋没し、溝跡としては機能していなかった可能性がある。出土遺物も、溝跡覆土中層以上からの出土が多く、ある程度埋没後、遺物が廃棄されたと考えられる。

しかし、この長大な溝跡と重複しながらも、第5号周溝遺構では、第2号溝跡の規格を再利用する形で掘り込まれており、また、第20号溝跡は、第19号溝跡手前でL字型に折れて止まっていた。このことから、埋没後もある程度溝跡の規格が意識されていたことがうかがえる。

溝跡の性格について言及する材料に乏しいが、集落の早い段階にこの長大な溝が掘り込まれ、溝を意識するか、制約される形で、他の遺構が構築されていった可能性も考慮に入れる必要があろう。

今後、出土遺物の検討も含め、遺構の具体的な性格等についても明らかにしていく必要があり、今後の課題としたい。

2 出土土器について

白井沼遺跡の調査では、古墳時代前期の土器が多量に出土した。

本稿では、出土土器について、詳細な器種分類、編年的な検討を行わなかった。今回の報告では、代表的な土器の抽出にとどめ、別稿で検討する予定である。

抽出した遺物は、掲載した1240点の土器のうち、器形復元の可能な259点である。

壺 (第142・143図)

壺は、口縁部の形態から、大きく単純口縁壺・二重口縁壺・複合口縁壺の3つの形態に分けられる。

単純口縁壺 (第142図1～6) は、全体の器形が復元できたものは少ない。口縁部が外反するもの(1・2)、直線的に立ち上がるもの(3・4)がある。また、頸部に断面三角形の突帯を巡らすもの(5・6)がある。

胴部は長胴で、底部は上げ底風に中央部が窪んでいる。

二重口縁壺 (第142図7～25) は、口縁部に段を有する壺である。器形の復元できた土器は少ない。

7・8は、口縁部内面に突帯を巡らす、大廓式土器の大型壺である。白色の軽石状粒子を多量に含む特徴的な胎土で、駿河地方からの搬入品と考えられる。口縁部のみの破片であるが、別の遺構から、大型壺の胴部・底部が出土している。

口縁部は基本的には単純口縁に、口縁部外面に粘土帯を貼付し、段を作り出している。口縁部の成形方法からすれば、後述する複合口縁壺に含めるべきかも知れない。

内面の突出も大きく、口縁部外面には、棒状浮文か、沈線が施文され、肩部にはS字状結節文が施されている。また、胴部片には円形浮文が認められるものもある。

渡井英誉等による大型壺の分類(渡井・竹内1999)によれば、大型壺C類で、大廓IV式段階と考えら

れる。大廓式土器については後述する。

9～14は、頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する二重口縁壺である。9は短い頸部に口縁部は直線的に外傾する。10～13は、口縁部が大きく外反する。胴部以下が残存していたものは少ないが、10は長胴となる。14は、口縁部に棒状浮文、頸部に円形浮文が貼付される。

15は、頸部がくの字に屈曲する。所謂「柳ヶ坪型」である。口縁部外面と内面に刷毛の木口による文様が施されるが、均質でなく、形が崩れている。灰白色の胎土だが、在地模倣品と考えられる。

16～20は、外面口縁部下段に粘土帯を貼付し、段を作り出している。

21～23は、口縁部がやや内湾する。22は、棒状浮文貼付されていた。

24・25は、口縁部が大きく外傾する。25は口縁部外面に棒状浮文と、沈線が交互に施文されていた。

複合口縁壺 (第143図26～40) は、口縁部外面を折り返しまたは粘土帯を貼付した口縁部である。

26～28は、大きく外反する口縁部に幅広の粘土帯を貼付している。胴部は球形胴となる。27は口縁部下段に刻み目を有し、口縁部及び肩部に縄文が施文され、赤彩されていた。

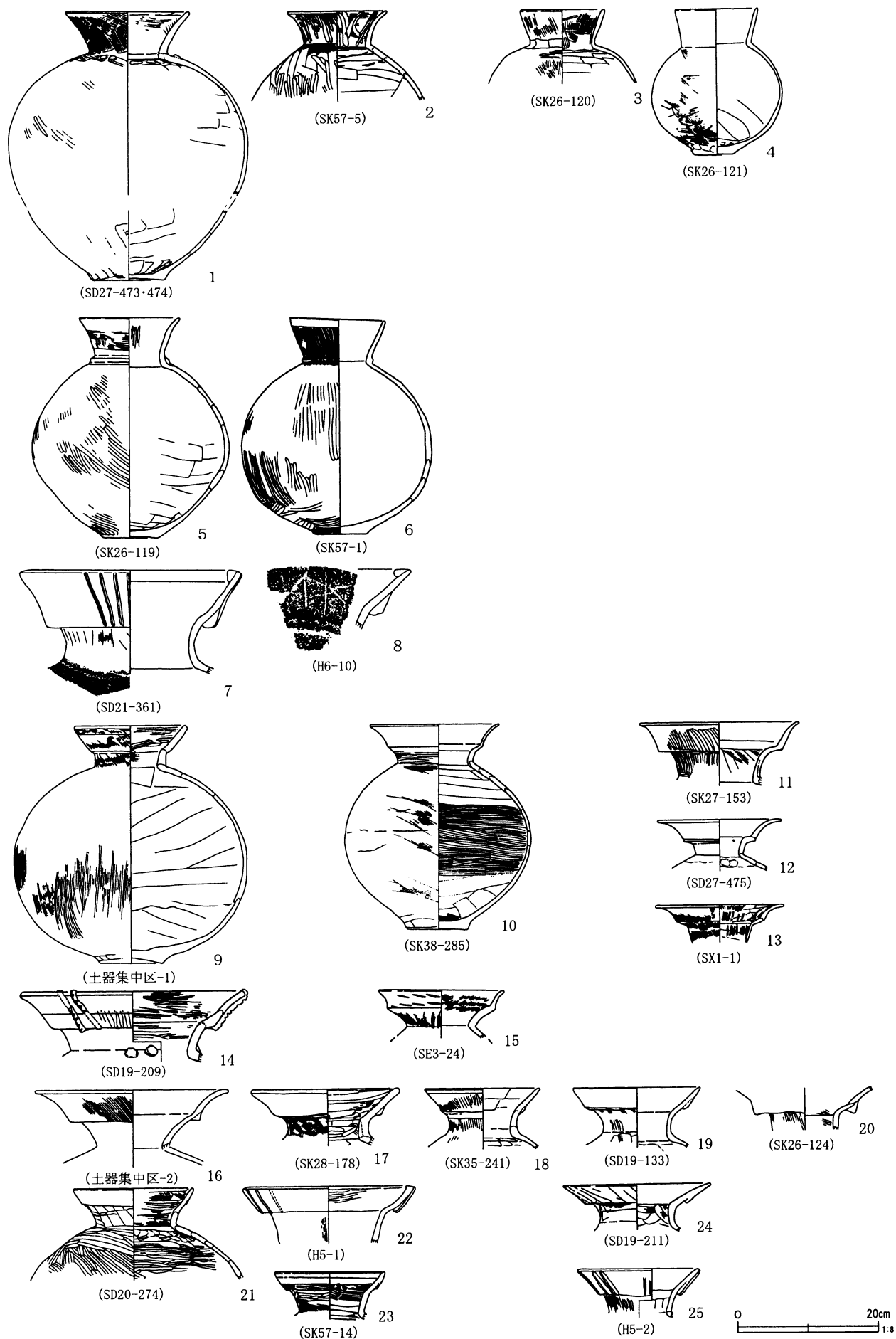
29～33は外反の弱い口縁部に粘土帯が薄く貼付される。33は粘土帯の幅が狭い。

34～37は、外反する口縁部に粘土帯が厚く貼付される。34は厚く貼付し、なで肩である。

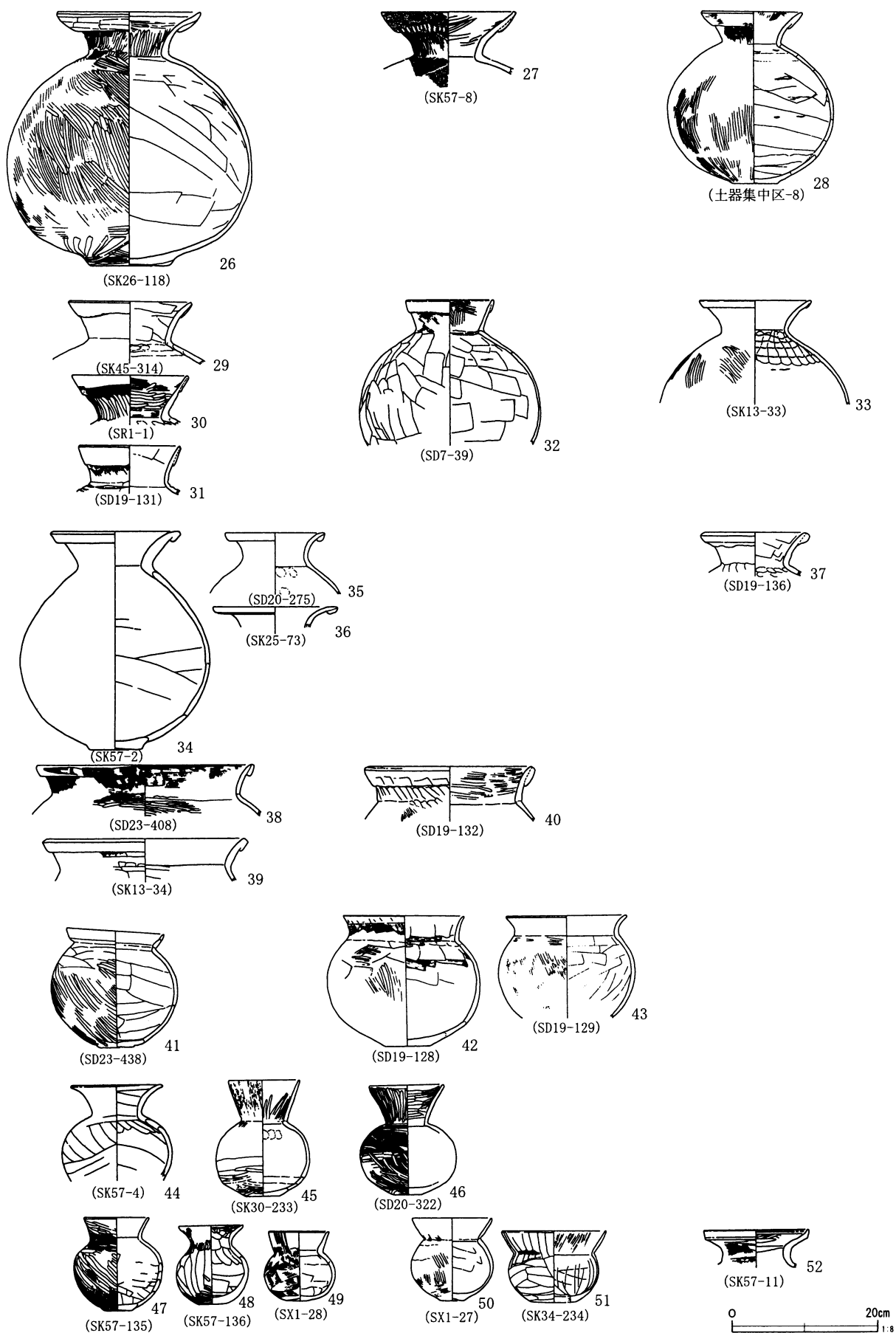
35・36は、大廓式と考えられる。大型壺と同じ胎土で、搬入品と考えられる。中型の壺で、35は無文である。36は、口縁端部が水平近くまで外反する。胴部は欠損していたが、他の遺構から、同じ器形と考えられる壺の肩部と底部が出土した。肩部にはS字状結節文が施され、円形浮文が認められるものもある。

37は、口縁部が肥厚する。

38～39は、広口壺である。口径が大きく、口縁部は短く立ち上がる。



第 142 图 白井沼遺跡出土壺集成 (1)



第143图 白井沼遺跡出土壺集成(2)

41～42は口縁部が短く立ち上がる壺である。甕とすべきであるが、ヘラミガキの存在から、壺に含めた。41は、口縁部が受け口状になる、球形の胴部となる。

44～52は、小型壺である。丸底ではなく、小さな底部が存在する。球形の胴部で、口縁部の長いもの、短く立ち上がるものに分けられる。

52は、口縁部端部が上方へ短くつまみ上げたように立ち上がる。

甕 (第144～146図)

甕は台付甕と平底甕がある。全体の器形が明らかなのは少なく、底部の形状が不明なものも多い。

ここでは、台付甕、平底甕、S字状口縁台付甕にわけて報告する。

台付甕 (第144・145図53～110)は、口縁部の形態が、くの字に直線的に屈曲するもの(53～68)、屈曲が緩やかに外反するもの(69～73)、大きく外反するもの(74～79)、口縁部が広く、短く立ち上がり、扁平なもの(80～84)がある。

器高と口径に、大・中・小が存在する。全体的に長胴である。風化が著しいものが多く、調整が不明瞭なものが多かったが、胴部の調整は、全面刷毛目のもの、刷毛目の後ナデ消しているもの、ナデ(ケズリ)調整のものがある。

重複関係から、古相と考えられる第2・5号竪穴住居跡は、刷毛目が中心となる。第57号土壙では、刷毛目とナデの甕が混在し、第20号溝跡では、ナデの甕が主体的となる。

85～110は、脚部を含む破片である。脚部の形態は、直線的に開くもの(85～95)、外反するもの(96～99)、内湾するもの(100～110)がある。一部ミニチュア土器ともいうべき、小型の脚部もあるが、胴部と脚部の接合方法が、台付甕と共通していたため、台付甕に含めた。

胴部と脚部の接合方法は、脚部を輪台状に成形し、胴部の突部と接合する方法となる。

88では、直線的に大きく開く脚部を有し、接合

部に補強のためか、粘土帯を巻き付けている。また、95の小型の脚部は、脚部裾内面に、断面三角形の粘土帯を貼付し、設置面の幅を広げている。

平底甕 (第145図111～126)は、底部まで残存しているものは少ない。このため、完形に復元できた資料をもとに、器形の特徴から平底甕と判断したものである。したがって、'実際には、平底甕か台付甕か、判断が困難なものも含まれている。

口縁部の形態は、直立気味のもの(111～113)、外反するもの(115～117)、くの字に屈曲するもの(118)、短く立ち上がり、扁平な胴部となるもの(119～124)がある。

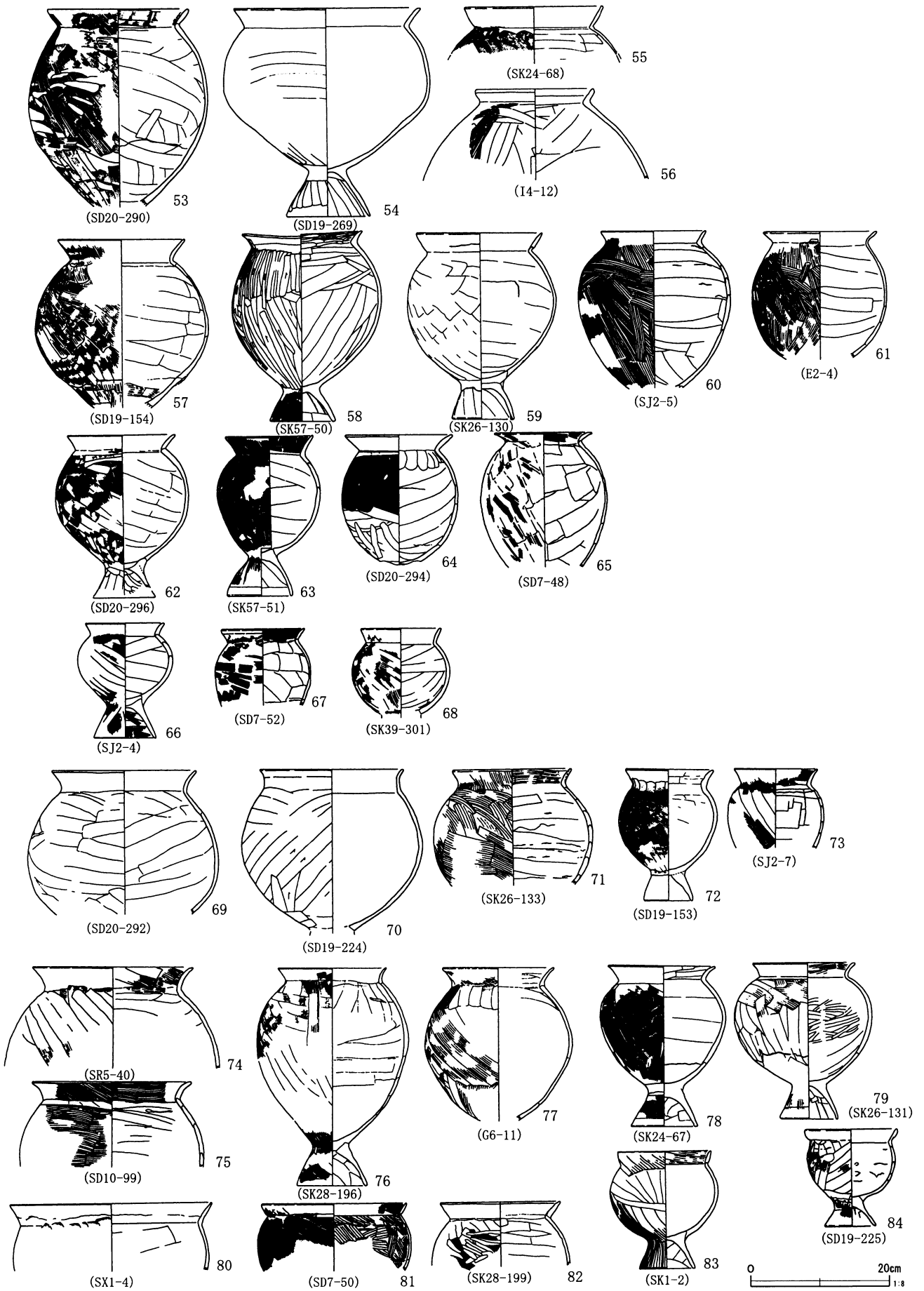
口縁部は、刷毛またはナデで、口縁上部が幅広く強くヨコナデされるものが多い。胴部は、刷毛が施されるもの(115・117)、頸部のみ刷毛目が残り、胴部はナデ調整のもの(111～113・116)がある。

114は、布留式の甕と考えられる。口縁部の破片で、本遺跡では、第2号井戸跡出土例1点のみであった。口縁部及び頸部内面を横方向にヘラケズリされ、内面口縁端部直下が、浅く窪んでいた。

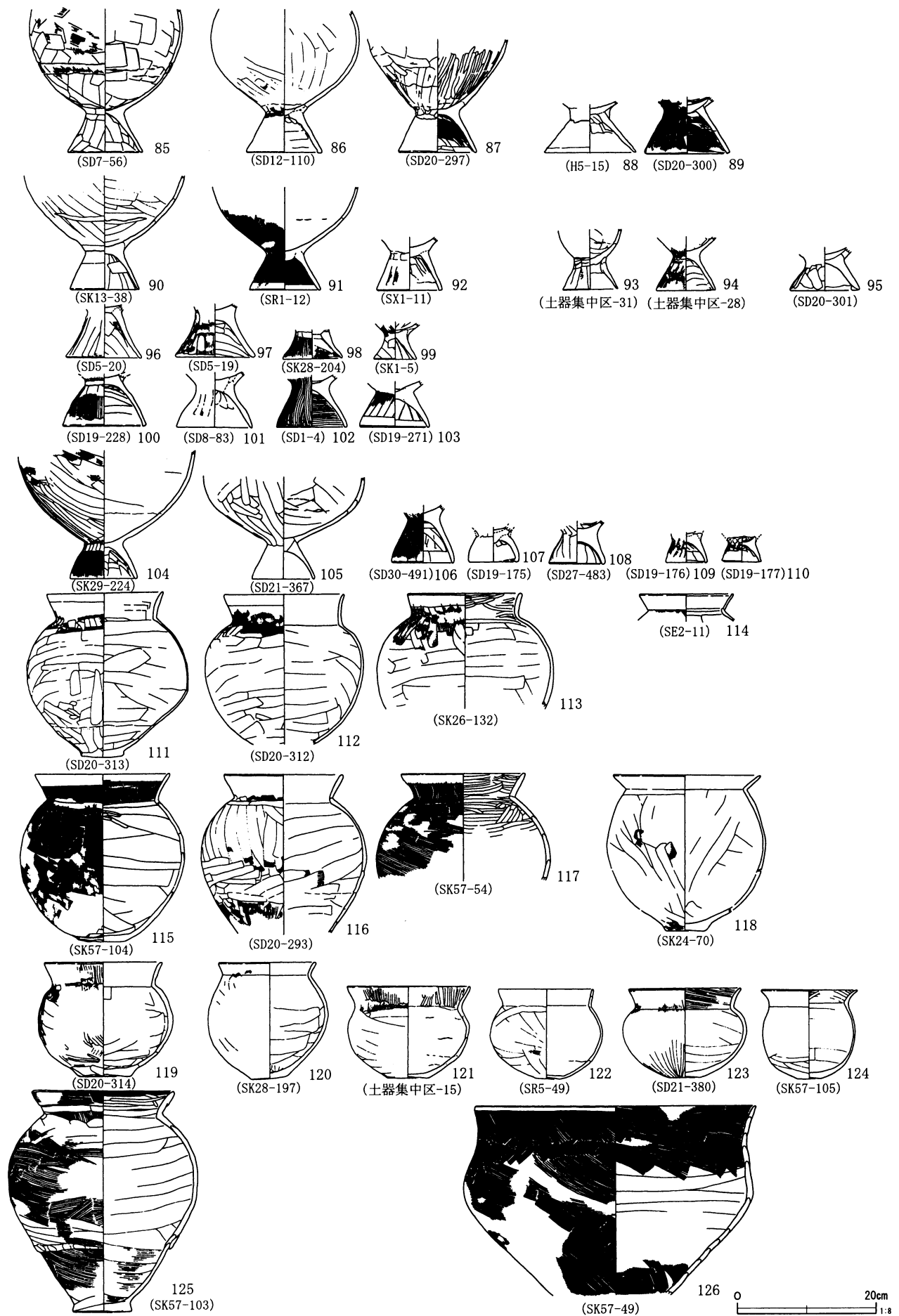
125は、長胴の平底甕である。胴部下半部を鉢形に成形し、胴部中位と接合し、接合部に粘土帯を巻き付け、指頭により押さえつけている。接合痕は明瞭に残り、粗雑な成形である。口縁部は、幅広い粘土帯を貼付している。口縁部は横方向の刷毛目、頸部は縦方向の刷毛目の後ヨコナデ、胴部上半は斜めまたは横方向の刷毛目、接合部以下は、斜め方向の刷毛目が施されていた。

白井沼遺跡では、この資料は他にない特異な形態のもので、1点のみの出土である。

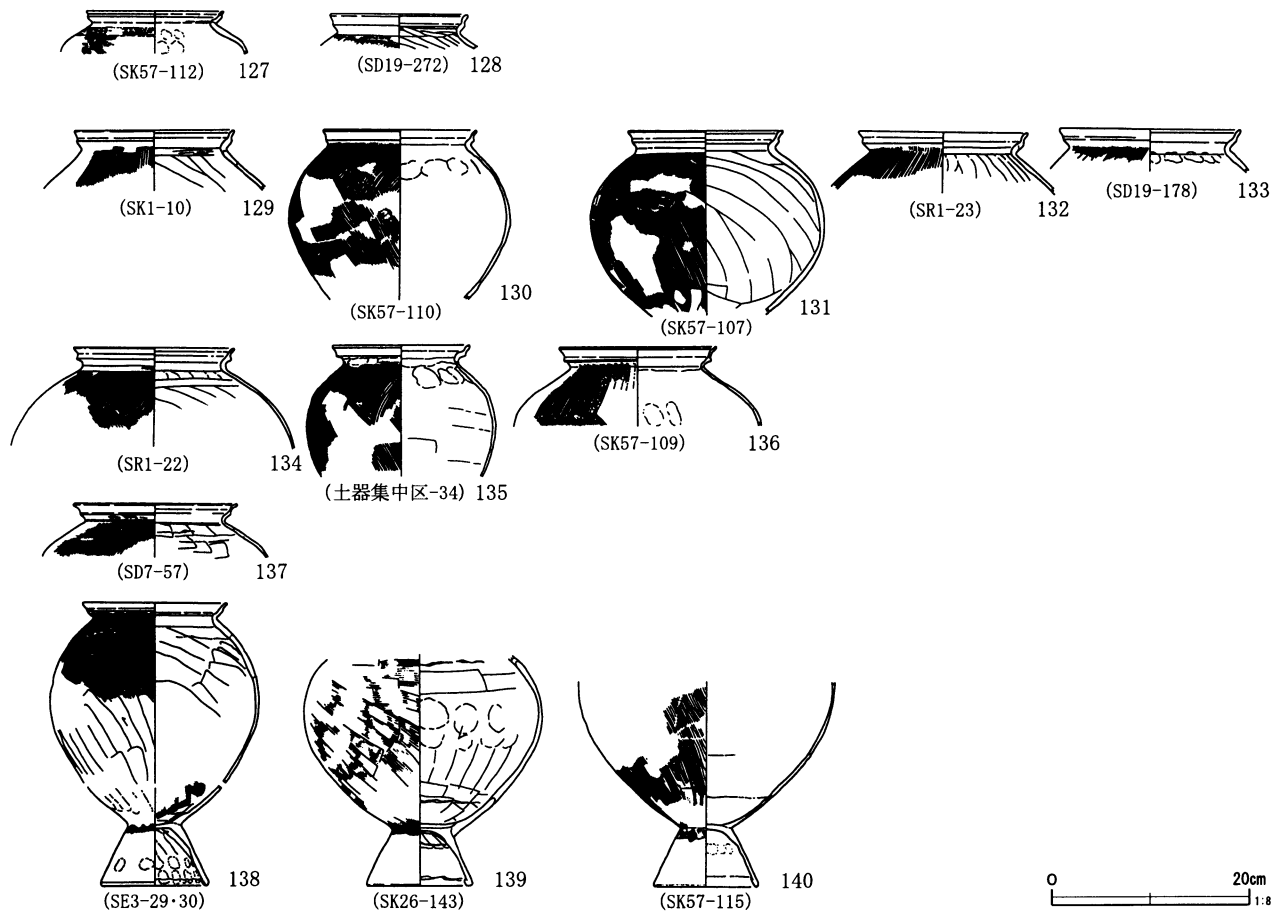
126は 口径40.2cmとなる大型甕である。底部を欠損していたため、台付甕か、平底甕かは明らかにできなかった。底部から直線的に立ち上がり、胴部上位に最大径を有する。頸部の屈曲はなく、緩やかに上方へ立ち上がる。外面の調整は、粗い刷毛目が施され、口縁端部は、ヨコナデされていた。内面は、口縁部と底部は粗い刷毛目、胴部はヘラ



第144图 白井沼遺跡出土甕集成(1)



第145图 白井沼遗迹出土甕集成(2)



第146図 白井沼遺跡出土S字甕

ナデされていた。静岡県～神奈川県沿岸地域で出土する大廓式の大型甕と考えられ、大型壺とともに搬入されたものと考えられる。内陸部での出土はこれまでに類例がないものと考えられる。なお、大型甕は、白井沼遺跡では、破片も含め、本資料1点のみの出土である。

S字状口縁台付甕 (第146図127～140) は、東海地方西部系の台付甕である。全体の器形が復元できる資料は少ない。また、胎土の特徴から、東海地方西部からの搬入品はなかった。

S字甕の胎土中に、白色針状物質を含むものが少なからず認められ、在地での製作が想定される。

127・128は、口縁部がやや直立気味に短く立ち上がる。肩に張りがあり、127は肩部に横刷毛が認められた。やや古相の形態を残している。

129～137は、口縁部が外反し、137では外反が

大きい。口縁部の段が丸味を帯びたもの(129～133)、シャープなもの(134～136)がある。134～136は、口縁部上段と下段に、背の丸い工具によって強いナデが施され、稜がシャープとなっている。

いずれも口縁部は厚く、在地模倣化が進んでいる。

138は、脚部まで残存していた。口縁部の段は弱く、長胴である。外面の調整は、刷毛であるが、きれいな羽状とはならない。胴部下部は、ヘラケズリ状のナデが施され、形態的にはS字甕の器形を保っているが、在地化が著しい。脚部との接合方法は、脚部を台状に成形し、胴部と貼り合わせている。脚部裾内面は折り返されている。

全体的に在地化が進み、本来のS字甕の形態とは異なる。一部に古い特徴を有するが、搬出する高坏等と合わせて考えると、概ね廻間Ⅲ式後半(赤塚1991)か、それ以降に並行してくると考えられる。

高坏（第147図141～158）は、全体の器形が復元できたものは少ない。

141～144は、元屋敷系の高坏である。坏部の稜は弱く、脚部の開きが大きい。

145～148も同様と考えられるが、坏部の稜がはっきりしない。

149・150は、坏部が小型の椀状で、裾部が大きく開く。

151～153は小型の高坏である。坏部が浅く、小さな脚部となる。152・153は、山陰地方東部の低脚坏の影響がある可能性もあるが、明らかにできなかった。

154は、大廓式の大型壺と同じ胎土の高坏である。口縁部、脚部を欠損していたため、器形は不明である。坏部底部に弱い稜を有し、深身で内湾気味に立ち上がる。

155・156は、坏部が箱型となる。脚部を欠損していたが、157と近似した形態であり、脚部は柱状脚であったと考えられる。

157・158は、柱状脚の高坏である。中実で裾部のみ大きく開く。

高坏は、元屋敷系の高坏と柱状脚の高坏に大きく分けられる。元屋敷系の高坏は、廻間Ⅲ式後半段階に並行するもので、柱状脚は、これに後出すると考えられ、本遺跡出土土器群の編年的位置づけの指標となると考えられる。

器台（第147図159～177）は、器形の特徴に多様性がある。本遺跡出土の器台は、小型器台と、粗製の器台である。

159～165は、器受部が椀形となる。脚部との接合方法は、脚部の窪みに器受部の突部をはめ込んでいる。

166～168は、器受部下端に稜をもって立ち上がる。裾部に対して、器受部が小さい。

169・170は、浅い皿状で、短く垂直に立ち上がる口縁部である。接合部が薄く、円柱状の脚部を、器受部に差し込んでいる。

171～174は浅い皿状で、171～173は、脚部との接合方法は、脚部の窪みに器受部の突部をはめ

込んでいる。174は接合部が薄く、円柱状の脚部を、器受部に差し込んでいる。

175～177は、粗製の器台である。台付甕と同じ脚部の成形で、貫通孔が大きい。調整は刷毛目あるいはナデ調整である。

埴・鉢（第148図178～230）

178は大型の埴である。器形の復元できるものは1点のみであるが、他に数点、口縁部の破片が出土している。

183～192は、丸底で、底部より口縁部が高く、内湾気味に立ち上がるものを一括した。

193は、小さな底部を有し、下膨れの扁平な鉢である。口縁部はくの字に屈曲し、内面端部をつまみ上げる。本遺跡では、この特徴を有した鉢は1点のみで、系統がたどれない資料であった。

204～206は、扁平な器形で、口縁部が大きく外傾する。

212～215は、口縁部に段を有する丸底鉢である。畿内の影響下にあると考えられるが、口縁部の段は弱く、刷毛目を残すものが多い。

216～219は、直線的に外傾する鉢である。底部は平底で、輪台状のものがある。

220・221は、台付甕の脚部を逆転させた形の鉢である。底部は平底である。

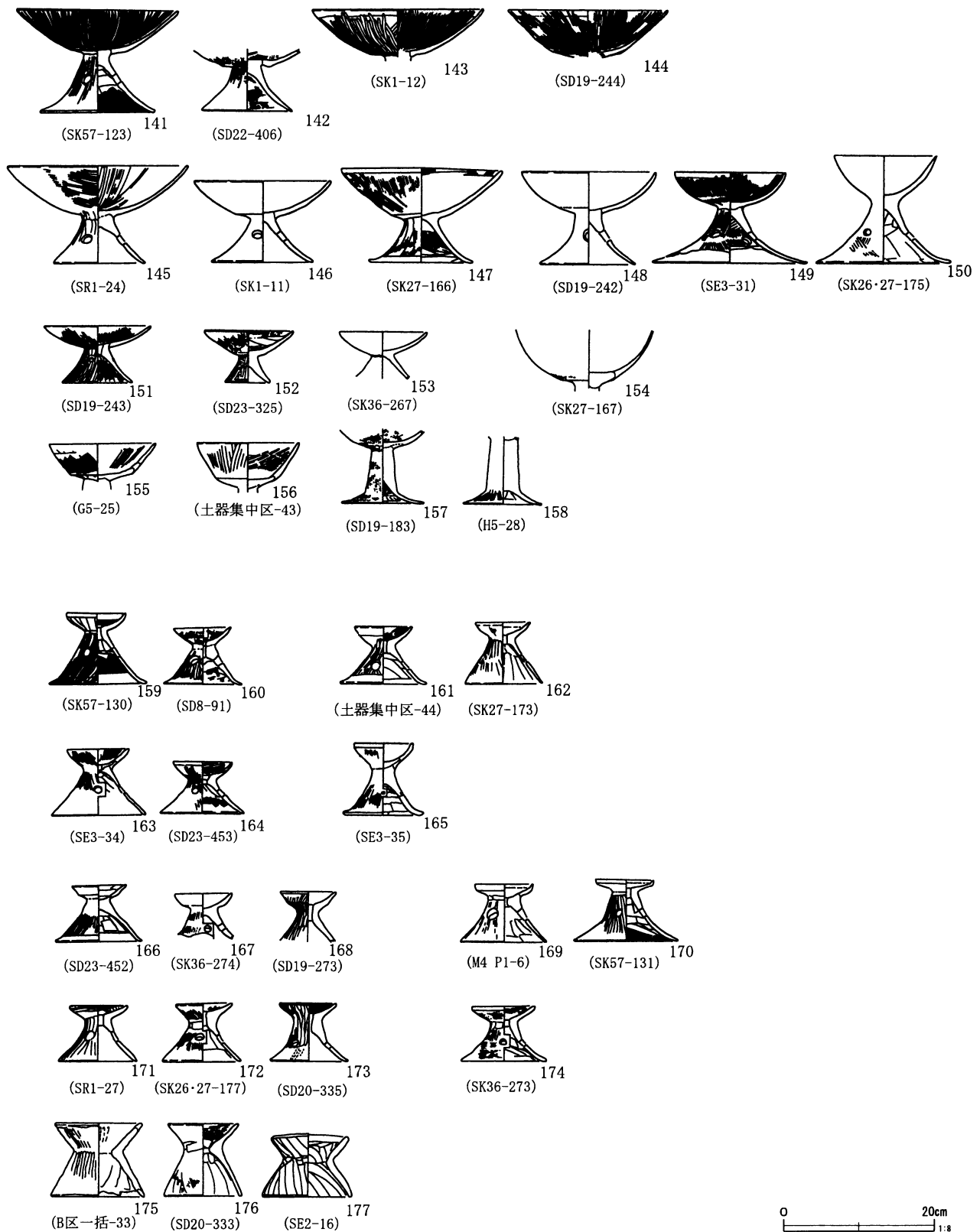
222～224は、椀状の鉢である。224は、器台の受部とも考えられたが、接合痕が認められなかった。

225・226は口縁部が短く立ち上がる。

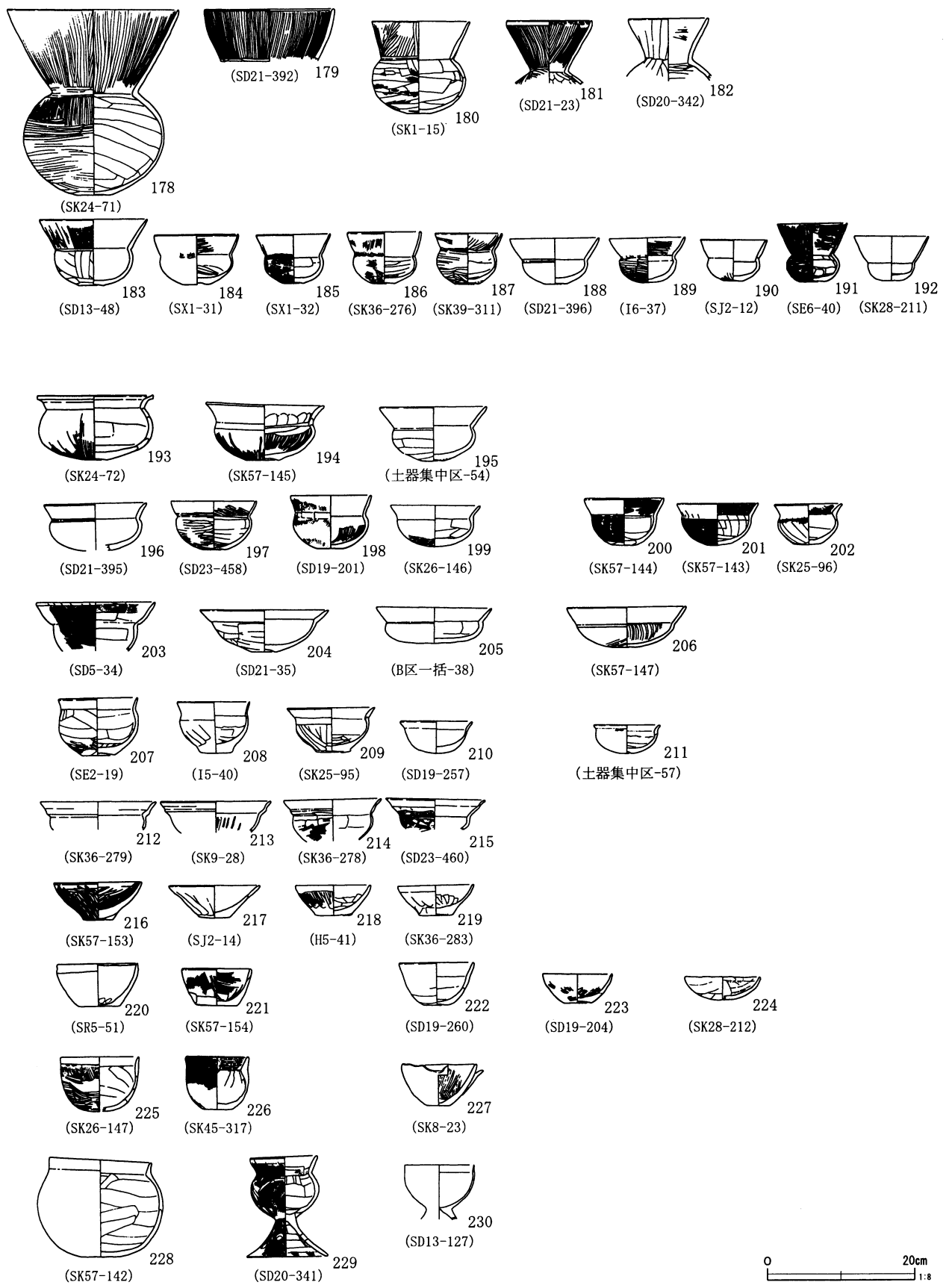
227は、片口鉢である。片口鉢は、本遺跡からは一点のみの出土である。内面に朱等の痕跡は認められなかった。

229・230は、台付鉢とした。229は、脚部先端を円柱状に作り、鉢底部の孔に差し込んで接合していた。調整は刷毛で、ヘラミガキは施されていない。

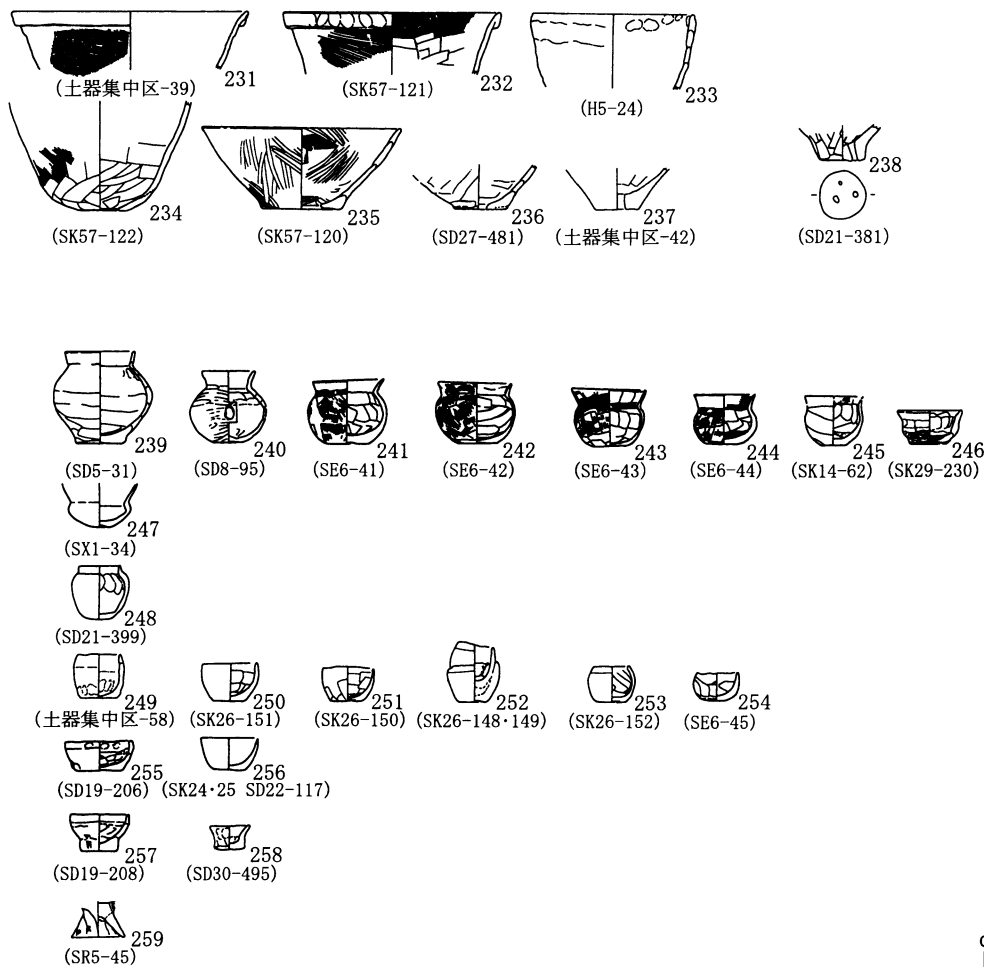
甗（149図231～238）は、全体の器形が復元できたものは少ない。口縁部あるいは底部のみの破片が多かった。口縁部が複合口縁となる鉢形のもの、単純口縁のものがある。底部は単孔のもの



第147图 白井沼遺跡出土高坏·器台



第148図 白井沼遺跡出土埴・鉢



第149図 白井沼遺跡出土甗・ミニチュア

が多いが、238は多孔である。

ミニチュア土器（第149図239～259）は、器種に多様性がある。壺形（239～246）、埴形（247）、鉢形（248～258）である。259は、台付となるが、器種は明らかにできなかった。

本遺跡出土の土器群の特徴は、壺・甗ともに長胴化が進み、甗は、刷毛目からナデ中心のものが一定量含まれる。高坏は元屋敷系の高坏から、柱状脚部の高坏が含まれる遺構が見られる。

一括性の高い遺物の出土した遺構として、第57号土壇、第20号溝跡が上げられる。第57号土壇からは、元屋敷系高坏が出土しており、坏部の稜が弱く、脚部が大きく開くなど、廻間Ⅲ式後半段階の特徴を有している。また、第20号溝跡出土遺物は、

長胴化した台付甗とともに、ナデ甗、平底甗の出土が顕著で、柱状脚の高坏が出土している。

この二つの遺構は、時期的には第57号土壇→第20号溝跡の時期的な差が認められ、土器群の編年作業の指標となると考えられ、その他の遺構も、概ね同時期に属していたと考えられる。

近接する遺跡では、書上元博が行った、上尾市稲荷台遺跡の（書上1994）の、第2段階～第3段階に平行してくるものと考えられる。

この前後の段階については本遺跡では存在しないと考えられ、極めて短期間に集中して集落が存在していたことが想定される。

今回の報告では、各器種の代表的なものの抽出にとどめたため、詳細な検討は、今後の課題として残った。別稿で、詳細な検討を行っていく予定である。

3 白井沼遺跡出土の大廓式土器について

白井沼遺跡の今回の発掘調査では、駿河地方で生産された大廓式土器が、大型壺を中心に、複数器種が出土した。

ここでは、白井沼遺跡出土大廓式土器の概要を述べる。詳細は、別稿で検討する予定である。

なお、巻頭図版7・8で、大廓式土器のカラー写真を掲載した。

大廓式土器は、静岡県東部（東駿河）で設定された古墳時代前期の土器型式である。

関東地方においては、口縁端部内面に突帯を貼付した大型壺を中心に、大型甕・複合口縁壺が出土している。大型壺は、その器形の特異性に加え、独特の胎土であり、在地の土器とは明瞭に区別できる。

埼玉県内においても、近年、荒川・利根川流域で大型壺の出土例が増加しつつある。しかし、県内各地で出土する大廓式土器は、大型壺が単体で出土し、複数個体、複数器種が出土したのは、白井沼遺跡が最初の例となる。

器種の構成（第150図）

白井沼遺跡から出土した大廓式土器は、大型壺、大型甕、複合口縁壺、高坏、鉢がある。大型壺と同じ胎土で製作されたもので、駿河地方からの搬入品と考えられる。

大型壺（1・4・7～11・13・14・17・18・20・21）は、図示可能なものは13点であった。完形土器はない。口縁部6点、底部1点、胴部6点が出土した。

口縁部は、その特徴の差から、全て別個体であると考えられる。

また、各地で出土する大型壺は、口縁部のみ単体で出土することが多いが、本遺跡での底部（7）の出土から、搬入された時点は、完形であったことが伺える。

口縁部の特徴は、外反する単純口縁に、外面下端部に三角形の粘土帯を貼付し、口縁端部内面には、突帯が貼付される。口縁部外面は、棒状浮文または

沈線文が施される。

複合口縁壺（2・12・15・16・19）は、5点出土した。完形品はない。口縁部2点、胴部2点、底部1点である。12・15は同一個体の可能性がある。

口縁部は水平近くまで大きく外反し、外面端部に粘土帯を貼付し、複合口縁としている。

19は無文だが、12・15は、肩部にS字状結節文が施されていた。大型壺と同じ文様構成であったと考えられる。

大型甕（5）は、本遺跡では、1点のみである。口径40.2cmと、本遺跡の出土土器では、口径が最大となる。底部を欠損していたため、台付甕か、平底甕かは明らかにできなかった。

大型甕の出土遺跡は、駿河湾・相模湾・東京湾などの沿岸地域で多く出土し、漁労に関連した使用方法が推測されている（瀬川1980、西川1983）が、内陸部での出土はこれまでに類例がない。

高坏（3）は、1点のみの出土である。口縁部と脚部を欠損しており、全体の器形は復元できなかった。

鉢（6）は、小破片で、器形の復元が困難であるが、小型丸底鉢であると考えられる。

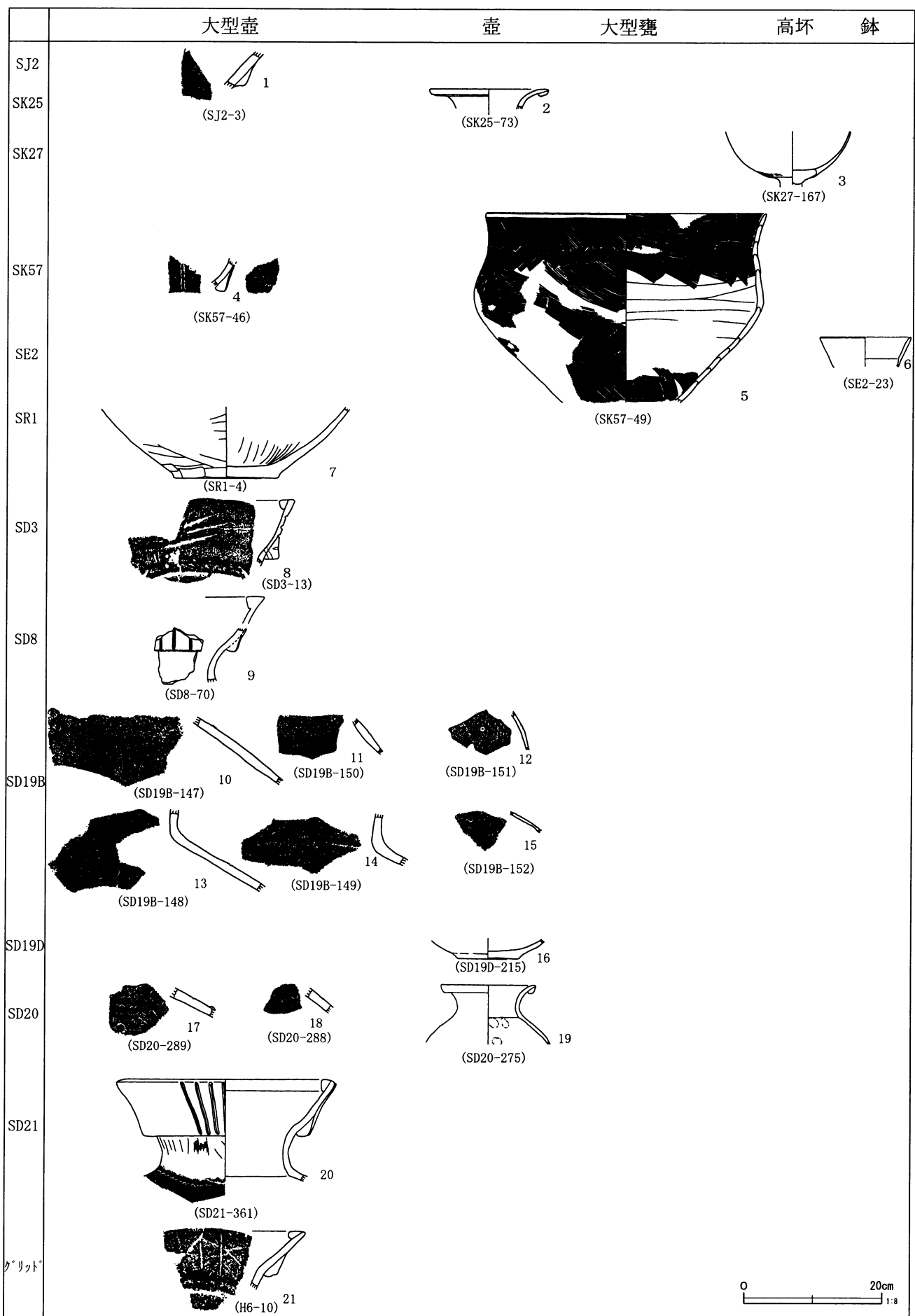
白井沼遺跡出土の大廓式土器は、大型壺の器形の特徴から、大廓IV式（廻間Ⅲ式後半段階並行）と考えられる。

遺跡内での分布（第151図）

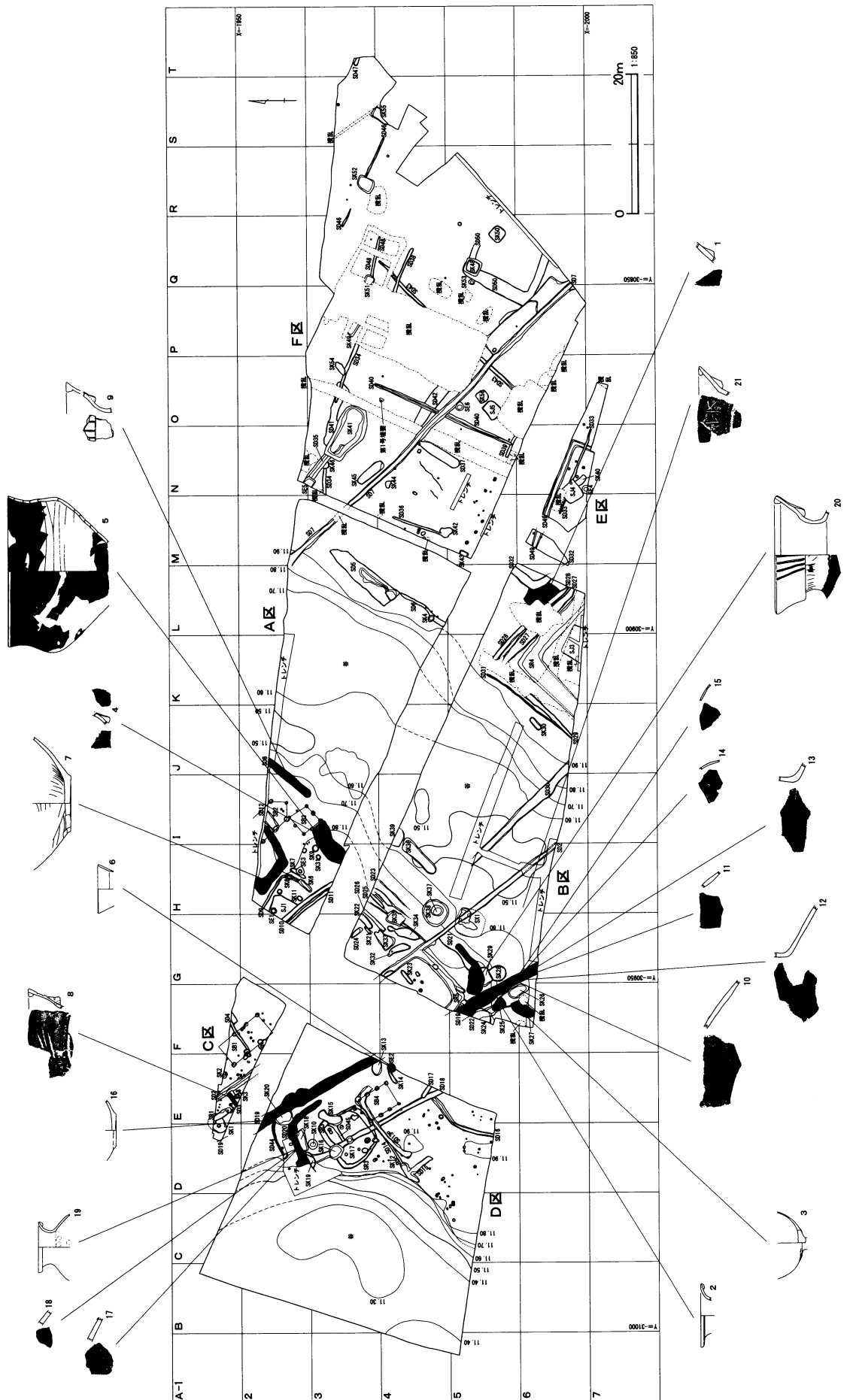
大廓式土器の遺跡内での分布は、第2号竪穴住居跡（1）を除けば、A・B区の谷の西側に集中する傾向がある。A区では、第1号周溝遺構と、谷を区画するように位置する第8号溝跡・第57号土壌から出土している。

B区では、第5号周溝遺構と関連があると思われる第21号溝跡から口縁部が完形に復元できる大型壺（20）が、また周辺の第25・27号土壌から出土した。第19号溝跡のものは、覆土の最上層から出土した。

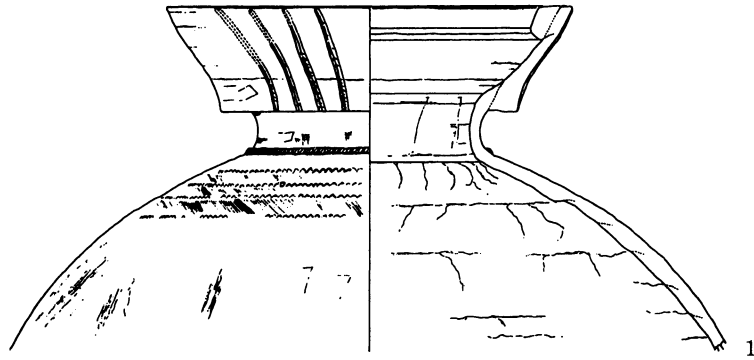
C・D区では、第3号周溝遺構を囲むように検出



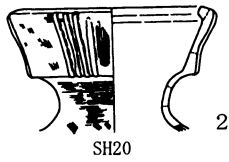
第150図 白井沼遺跡出土大廓式土器



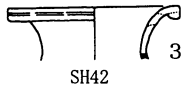
第151図 白井沼遺跡出土大廓式土器分布図



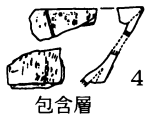
P地区
中里遺跡（北区）



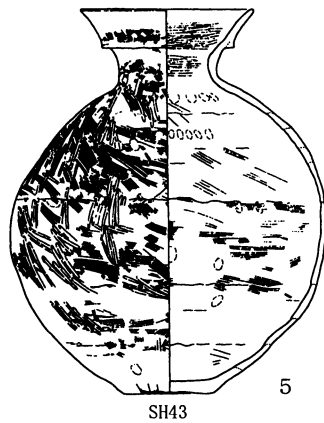
SH20



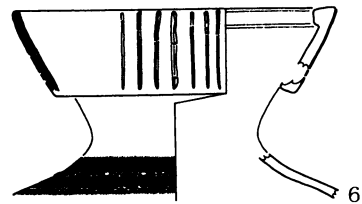
SH42



包含層

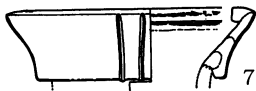


SH43



第2号住居跡
志村遺跡 第5地点（板橋区）

豊島馬場遺跡（北区）



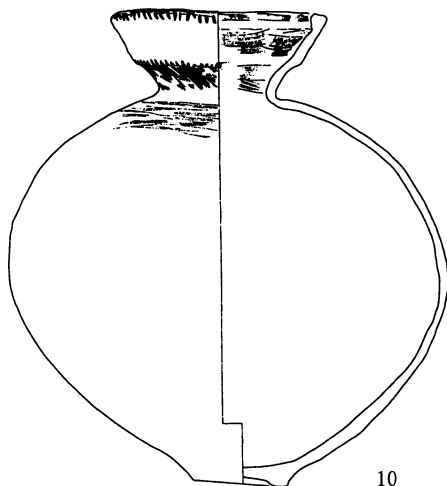
5~7トレンチ間
高畑遺跡（行田市）



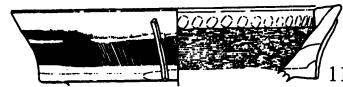
諏訪山29号墳
諏訪山29号墳（東松山市）



第9号住居跡
別所遺跡（さいたま市）



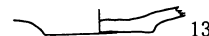
第5発掘区土壇
上敷免遺跡（深谷市）



第1号住居跡
宮前遺跡（桶川市）

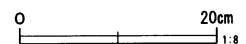


土壇



グリッド

白井沼遺跡（川島町）



第152図 埼玉県内および荒川流域出土の大廓式土器

した第20号溝跡から出土した。

周溝遺構は、先述のとおり、居住施設の可能性を指摘した。周辺で検出された溝跡・土壇・井戸跡等は、この居住施設に伴う遺構であったと考えられる。したがって、これらの遺構から出土する大廓式土器は、墓に供献される土器とは異なる性格を有していたと考えられる。他の共伴遺物とともに生活にまつわる廃棄または遺棄されたものと考えられる。

周辺地域での様相 (第152図)

白井沼遺跡は、荒川を臨む低地の自然堤防上に立地している。荒川流域の東京都でも、大廓式土器が散見される。北区中里遺跡(1)、豊島馬場遺跡(2～5)、板橋区志村遺跡第5地点(6)で大型壺が出土している。豊島馬場遺跡は、低地の自然堤防上に立地し、大型壺のほかに、複合口縁壺が出土している。志村遺跡は、荒川を臨む台地上に立地し、眼下の低地に、同時期の船渡遺跡がある。

埼玉県では、さいたま市別所遺跡で、口縁部内面に突帯を巡らす壺が出土している。大廓式からは器形的にかけ離れたものであるが、内面に突帯を有する点で、大廓式の影響下にあった可能性がある。深谷市上敷免遺跡(10)の大型壺も同様である。

川島町に隣接する東松山市では、高坂台地上の諏訪山29号墳(8)で、口縁部が完形の大型壺が出土している。また、近年高坂台地上の集落遺跡で、

大型壺の完形品が出土した(注1)。

荒川を挟んだ対岸の桶川市宮前遺跡(11)では、大型壺の口縁部の破片が出土している。大廓I式ないしII式に属する、古い段階の資料であると考えられている(渡井・竹内1999)。

元荒川流域の行田市高畑遺跡(7)では、大型壺の口縁部片が出土している。

また、本遺跡に近接した、川島町富田後遺跡では、周溝遺構から大型壺の口縁部片が出土した(注2)。

周辺の遺跡の多くは、北区豊島馬場遺跡を除けば、大型壺が単体で出土している。大型壺については、稲穂や水・酒類の貯蔵や壺棺や葬送儀礼に関わるもの(西川1985)、土器そのものが商品として単体で流通していた(渡井・竹内 前掲)等の意義付けが試みられている。

しかし、白井沼遺跡は、複数機種、個体が出土しているという他の遺跡とは異なる様相を示している。こうした現象についての詳細な検討はできなかったが、単体で移動する大廓式土器の移動とは異なる意味をもっている可能性を示唆するものである。今後の検討課題としておきたい。

(注1) 高坂三番町遺跡で、大型壺の完形土器が出土している。

東松山市教育委員会のご好意で実見させていただいた。

(注2) 平成18年度現在当事業団で調査中である。

大廓式土器出土遺跡地名表

番号	遺跡名	場所	河川	遺構	部位	模倣	文献
1	中里	北区	隅田川		口縁部～胴部上半		中里遺跡調査団 1989
2	豊島馬場	北区	隅田川	方形周溝墓	口縁部		中島他 1995
3	豊島馬場	北区	隅田川	方形周溝墓	口縁部		〃
4	豊島馬場	北区	隅田川	包含層	口縁部破片		〃
5	豊島馬場	北区	隅田川	方形周溝墓	完形		〃
6	志村第5地点	板橋区	出井川	住居	口縁部		秋山他 2005
7	高畑	行田市	元荒川	トレンチ	口縁部		埼玉県教育委員会 1977
8	諏訪山29号墳	東松山市	都幾川	古墳	口縁部		増田逸郎他 1986
9	別所	さいたま市	荒川	住居	口縁部	模倣	青木義修他 1988
10	上敷免	深谷市	利根川	土坑	ほぼ完形	模倣	瀧瀬芳之他 1993
11	宮前	桶川市	江川	住居	口縁部		粒良紀夫 1990
12	白井沼	川島町	荒川	土壇	口縁部		中山浩彦 2005
13	白井沼	川島町	荒川		底部		〃

引用・参考文献

- 青木義修他 1988 『別所遺跡発掘調査報告書（第2次）』 浦和遺跡調査会報告書 第94集
- 赤石光資・金子智江・福島正義 1979 『殿山遺跡』 上尾市文化財調査報告書第6集
- 秋山道生・村田厚仁 2005 『志村遺跡第5地点発掘調査報告書』 志村遺跡調査会
- 池谷初恵・芦川忠利 1996 『西大久保・奈良橋向遺跡』 三島市教育委員会
- 飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 群馬県立歴史博物館
- 飯島義雄 2005 「「周溝をもつ建物」における掘り方の確認の意義—前橋台地上に立地する横手早稲田遺跡における例を中心として—」『群馬考古学手帳』15 群馬土器観会
- 磯野治司 2000 『下宿遺跡』 北本市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 磯野治司他 1995 『堀ノ内館跡（第1・3次調査）・諏訪山南遺跡・諏訪山北遺跡』 北本市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 磯野治司 1997 『阿弥陀堂遺跡第1・2次調査』 北本市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 磯野治司他 1994 『八重塚遺跡』 北本市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 今井正文・関根訪・粒良紀夫・守屋薫 1989 『八幡耕地遺跡第4次発掘調査』 昭和63年度桶川市遺跡群発掘調査報告書
- 今井正文・早坂廣人 1990 『西I遺跡』 下日出谷市遺跡群発掘調査会
- 植松章八・馬飼野行雄・渡井英誉 1997 『滝戸遺跡』 富士宮市文化財調査報告書第23集
- 大谷猛 1992 『赤羽台遺跡』 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会調査団
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』第15号 青山考古学会
- 及川良彦 1999 「関東地方の低地遺跡の再検討（2）—「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究への展望—」『青山考古』第16号 青山考古学会
- 及川良彦 2001 「関東地方の低地遺跡の再検討（3）—「周溝を有する建物跡」の再検討—」『青山考古』第18号 青山考古学会
- 及川良彦 2004 「関東地方の低地遺跡の再検討（5）—墓と住居の誤謬—」シンポジウム「方形周溝墓研究の今」資料集 II 方形周溝墓シンポジウム実行委員会
- 及川良彦 2005 「方形周溝墓群と集落群の混在からみえてくるもの」『季刊考古学』第92号 雄山閣
- 書上元博 1994 『稻荷台遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集
- 柿沼幹夫 1989 『上手遺跡発掘調査報告書』 上手遺跡調査会
- 金子直行 2004 『芝沼堤外遺跡』 川島町遺跡発掘調査報告書第2集
- 金子直行・馬橋泰雄 2002 『尾崎遺跡』 川島町遺跡発掘調査報告書第1集
- 川島町 2006 『川島町史』資料編 地質・考古
- 木戸春男 1999 『小沼耕地遺跡II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第247集
- 君島勝秀 1999 『外東／神田天神後／大久保条里』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第206集
- 車崎正彦 1990 「江川山の鏡—古墳出土鏡をめぐって—」『上尾市史調査概報創刊号』 上尾市教育委員会
- 小宮山克己 1992 『雲雀遺跡』 上尾市文化財調査報告書第38集
- 斉藤成元 1996 『問屋坂遺跡・北袋神社遺跡』 北本市埋蔵文化財調査報告書4集
- 塩野博・増田逸朗 1970 『西台遺跡の発掘調査』 桶川町文化財調査報告IV
- 下村克彦 1990 「荒川流域の遺跡」『北本市史』第3巻上 自然・原始資料編 北本市教育委員会市史編さん室
- 杉崎茂樹 1993 『中耕遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集

- 鈴木孝之 1991 『代正寺・大西』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集
- 瀬川裕市郎 1980 「藤井原の大鉢」『沼津市歴史民俗資料館紀要』4
- 関根訪 1991 『八幡耕地遺跡』 桶川市文化財調査報告書第21集
- 瀧瀬芳之他 1993 『上敷免遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第128集
- 田中正夫 1991 『小沼耕地遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第100集
- 津田福治・小峰啓太郎・金子直行・福田聖他 2002 『尾崎遺跡』 川島町遺跡発掘調査報告書第1集 川島町教育委員会
- 粒良紀夫 1990 『宮前遺跡』 桶川市文化財調査報告書第20集
- 粒良紀夫 1992 『東台Ⅰ遺跡』 桶川市文化財調査報告書第22集
- 中里遺跡調査団 1989 『中里遺跡5—遺物Ⅱ—』 東北新幹線中里遺跡調査会
- 中島広顕・嶋村一志・長瀬出 1999 『豊島馬場遺跡Ⅱ』 北区埋蔵文化財調査報告書第25集 北区教育委員会
- 中山浩彦 2005 『白井沼遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第315集
- 西川修一 1983 「XⅡ 考察2 内原遺跡における古墳時代前期の検討」『長井内原遺跡』
- 西川修一 1985 「装飾壺の終焉—南関東地方の場合—」『古代探叢』
- 西口正純 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
- 橋本富夫・今井正文 1986 『八幡耕地第2次発掘調査』 昭和60年度桶川市遺跡群発掘調査報告書
- 羽二生保・岩崎しのぶ 1997 『北神馬土手遺跡他Ⅱ』(遺物編) 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第89集
- 坂野和信他 1987 『下道添遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
- 福田聖 1999 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(1)—周溝墓とは何かを探るための試み—」『埼玉考古』第34号
埼玉考古学会
- 福田聖 2004 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(7)—さいたま市・川島町・吉見町の低地遺跡について—」『埼玉考古』第39号 埼玉考古学会
- 増田逸朗 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 水澤裕子・村田厚仁・河村いえ子・袖村あつ子・山田直美 2000 『舟渡遺跡第3地点発掘調査報告書』 舟渡二丁目遺跡調査会
- 村田健二 1984 『古凍根岸裏』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集
- 山崎広幸・荒井幹夫・実川順一 1991 『殿山遺跡—第2次調査—』 上尾市文化財調査報告書第36集
- 山田成洋・足立順司 1996 『川合遺跡』 遺物編1 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第83集
- 吉見昭他 1998 『丸山遺跡・宮岡遺跡第2次調査』 北本市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 吉見昭 2000 『榎戸遺跡』 北本市榎戸遺跡調査会発掘調査報告書
- 若松良一・大谷徹・高田大輔 2000 『堂地遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第266集
- 渡井英誉・竹内順一 1999 「大廓式と呼ばれる大型壺—大廓式土器の成立と移動」『静岡県考古学研究』No.31 静岡県考古学会
- 埼玉県 1982 『新編 埼玉県史 資料編2 原始・古代』
- 埼玉県遺跡調査会 1968 『番清水遺跡調査概報』 埼玉県遺跡調査会報告第1集
- 埼玉県教育委員会 1979 『舞台』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集
- 埼玉県教育委員会 1977 『鴻池・武良内・高畑』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集
- 東松山市 1981 『東松山市史』資料編 第Ⅰ巻 市史編さん課
- 吉見町遺跡調査会 2003 『下遺跡』
- 吉見町教育委員会 2002 『西吉見古代道路跡』